

9—nine—　　ここのつは
　　るそらゆきのみち。

紅葉555

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

君の選択が、彼らの運命を変える。

9人目のアーティファクトユーザーが、異世界からの手助けではなく彼らの世界に入り込んでしまったら。そんな枝のお話。

あらすじの時点で察しているかもしれませんが、ガッツリネタバレ含んでいます。全年齢化で新規の方も沢山増えているでしょうから、もしこのお話をご覧になる場合は、

原作ゲームクリア後を強く推奨致します。

そしてこの物語の読み始めは、《序章》からをおすすめ致します。特別章は気になったら……といった感じでOKです。

基本は原作沿いのつもりです。

あと多分キャラがぶれまくると思いますのでご注意ください。

主人公は原作知識があるけれど、ありません。

原作に出現しないアーティファクトも追加します。

オリジナル要素強めです。

主人公の名前が変わらないのは新たに考えるのが面ど………気に入っているからです。気にしないでください。

特別章については、メインストーリーの合間に徐々に追加していく予定です。なのでこの章に関しては不定期更新となります。

※この物語はBAD√に突入してしまった際、読者の皆様を大変不快な気分になせしてしまう恐れがあります。その点を十分ご理解の上読み進めていくことをおすすめ致します。

ます。

私がここは閲覧注意が必要だと判断した箇所を※マーク、最も酷いと警戒すべき箇所を???マークを付けて、分かりやすく警告させていただきました。

以上、ご指摘を頂いた為、注意喚起を残させていただきます。

R18版、1話投稿致しました。都√のあの出来事です。気になる方はご覧下さい。

追記、

最初のアンケートですが、自分の操作ミスで消してしまいました……。申し訳ありません！

結果はちゃんと反映しますので、ここにお詫びとアンケートの内容、結果を残しておきます。

アンケート内容↓主人公が手を組むとしたら？

結果↓単独行動。(第三勢力)

目次

要点だけまとめた設定	2	君の選択は運命を変える	51
その他		4月17日	
祝ッ！ 100話記念！	11	不思議なアクセサリ	62
Happy Birthday！	都	目的	71
前編	22	4月18日	
Happy Birthday！	都	他人に触れる。しかし未だ……	
中編		76	
特別章 蓮太過去編	30	知らぬ者同士の出会い	84
追憶の壺	37	力も鏡。心も鏡。醜く見えるは真なる姿。	
追憶の壺	44	4月19日	93
序章		公園、そして噂	
		最初の事件、それから……	107

姿の见えない敵	119
俺は俺	126
能力者VS能力者	140
オレノキオク 断片	147
都の能力	153
互いの能力	160
心境の変化	167
意外な人物、遭遇	175
4月20日	
出会い、そして再び	181
正義の心、あの頃のように	187
救世主、罪への意識	194
一件落着?	201

登校前のお買い物	209
白と黒、事件の直前	216
校内火事、その対処	221
力の暴走《炎》	228
Realize	238
共鳴、重なった心の先に	246
気持ち、前向きな一歩	254
鏡、その力	262
不明、それと忘却	269
疑心、その可能性	275
警戒、その距離	281
集団、怪しい香り	289
三人集結、蓮と雪と月	296

命を狙う影	304
変わる目的、蓮太の想い	314
4月21日	
逆ハーレム隊、発見	323
知り得る秘密、その為に	332
初めての異世界人	338
喫茶店での戦い、前編	344
喫茶店での戦い、後編	351
4月21日	
BAD	
運命の分岐、その道の先	357
到着、目的の場所	364
目にしたものは	372
※ Squall	

First	380
ソフィ空間	
空間その1	385
4月21日	
BAD (続)	
血の涙	390
異変の可能性	398
戦闘	406
BAD√	
そして誰も救われな	
い。	
END	
4月21日	
(続)	
運命の分岐、その道の先	424
二つ目の力	436
黒と蓮、想いの欠片	441

4月22日	目的と仲間	447
	奇妙な関係、新たな出会い	453
	変わった日常、初めてのひととき	460
	デート………？	468
	二人の時間、認識	474
	疑問と監視	481
	1人目	488
	変わった心、世界の裏で………	495
4月23日	癒しの時間	502

4月24日	天真爛漫、対面	509
	意外とかみ合う二人	516
	とある日の休み時間	522
	正体不明の人物、そして猫	528
	猫様、気まぐれ故に	536
	自由奔放にも困ったもんだ	543
	作戦会議	549
	心の距離	559
	正義の反対、もう一つの正義	564
	4人目	571
4月24日	むちゅまじい	579
	天の偵察	587

天色の涙

595

俺たちは、ヴァルハラ・ソサイエティ

七人のユーザー達

657

603

なんで俺がこんな目に……

670

電気の極地、最強の災害《雷》

心は力

677

610

不穏な気配

683

常識を壊す力(オーバーフロー)の片鱗

初めての………

692

三つの砦

心の葛藤

700

未知の敵、守れたものは

4月27日

626

4月26日

引きずりの朝

707

男の子なんてみんなえっちだ。女の子

何気ない放課後

713

だつてきつとえっちだ。人間なんてみん

魂の行方

722

なえっちだ。

4月28日

640

不運な朝

728

ソラノキオク	737
ソラ	750
ソク	758
葛藤の裏で………	766
見えない者たちの暗躍、その裏	770
手にした希望《ネクター》	776
一段階目の暴走、一段階目の覚醒	788
その日、想いは共鳴する	795
白黒の二つ目の力	801
2人の名前	812

ここのいろ。	822
仲間	831
4月29日	839
直前のお勉強会	849
いぎ、ラウンドツーヘツ!	856
節制家なお嬢さま	862
九條 都の抱えているモノ	876
4月30日 都✓	885
2人の始まり	892
3人の信頼	902
思わぬ救世主………?	910
敵であり味方、味方であり敵	910
反撃の狼煙	910

“わからない”	990
蓮太VS悠	981
魂の叫び	973
必ずまた全員で	967
5月1日 都BAD√	
961	
1人の犠牲か5人の犠牲か……	
九條 都 奪還作戦、始動	953
5月1日 都√	
7人の戦士たち	949
???	934
裏の顔、心の真実	
戦いの始まり	928
笑いあつてさよなら	918

魂の叫び	1066
変わる運命	1054
もう二度と	1047
5月1日 都√	
空間その2	1043
ソフィ空間	
り	
END	1032
???	
都BAD√	
※	
最後の言葉	1022
5月8日 都BAD√	
※	
半分	1012
No.2	1005
失ったものは	997
フタ	

1158	都 √	『ふたり』	E N D	1149	1144	?	幸せ?を取り戻した『日常』	1136	1128	1119	1111	1100	1092	1082	1075	
							気持ちのいい目覚め。からの………		狂った歯車	どんだん深まる2人	事件の後	重なった心	脱出	怒りの鉄拳	攻略法	天月蓮の戦い

	4人でダブルデート	4人でダブルデート	裏	再会する異世界人	二輪の花	女の子同士の秘密	1189	参考書? 2人にとっては参考書!	天翔る2人との秘密	たー。	この世界は、君を「」した物語だったー。	もう一つの恋心	都 A f t e r
	中編	前編											
	1232	1224	1217	1211	1205	1198			1181	1174		1164	

4人でダブルデート 後編

心の闇

ニセモノ？ホンモノ？

仲間の印（笑）

4月28日

不運な朝？

日常が始まる日……

違和感と直感

神出鬼没なお人形

「――忘れられないこと、忘れてはいけ

ないこと。」

暴力を封印していた理由

記憶とキオク、巻き起こる波乱

1307

未知の部屋からの脱出劇

4月29日 天√

悪夢の始まり

迫り来る恐怖

探索する二人

命からがらの抵抗

定められた運命

消えたモノ

そらいろ そらうた そらのおと

1380

はすいろの恋、そらいろの恋、ゆきいろ

の恋

1394

1314

1260125412481240

1287127812721266

13011294

136813571345133613291322

枝

脱落者

生きることだけを考えて

オーバー

心。

14361431142414171401

要点だけまとめた設定

《舞台》

白巳津川市、nineシリーズの物語の舞台となる場所。結構な都会であり、わりと何でも揃ってる。ラウンドツツまである。主の都合で多分色々お店が出てくる。

《専門用語》

アーティファクト……通称AF。物語の最もキーとなるアイテム。異世界、または平行世界に存在する魔術をアクセサリーのように改良した物。一つ一つに能力が備わっており、扱いは手に取った瞬間に判明する。人がアーティファクトを選ぶのではなく、アーティファクトが人を選ぶ。壊しても壊しても何度も治る。オマケに捨てても勝手に戻ってくる。てか説明することが長すぎてこれ以上は本編見てください。あと、俺なら質屋に売りまくる。そんで捕まる。

ユーザー……アーティファクトを所有している能力者のことを指す。通称AFユーザ。とくにこれ以上の説明は思いつかない。作中ではアニメから都が呼び名を取った。

《登場人物》

竹内 蓮太……身長174cm。↑ここリアリテイある！ 趣味：料理。好きなもの：甘い食べ物。嫌いなこと：多すぎて絞れない。

この物語の主人公。異世界（現実世界）から9—nine—の世界へと移動してきた人物。しかもnine世界での翔と同一存在。何故新たなキャラクターとして世界間を移動できたのかはまだ不明。

元々は《オーバーロード》の所有者にも関わらず、世界移動後はその能力を扱えずにいる。その代わりに新たな力として手に入れたのが《魔鏡のアーティファクト》。

過去にとある事が理由で兄を亡くしており、そのショックで人と接することを極めて嫌っていた。その為友人が一人もおらず、ひねくれた性格となっている。

ゴースト……身長：不明。趣味：不明。好きなもの：不明。きらいなこと：不明。突如として蓮太に襲いかかってきた女性。何故か二つの能力を所持している。

割と攻撃的な性格。男勝り。しかもとある人物曰く貧乳。多分処女。つか基本的には大体の事が謎。誰かと繋がりがあるように見えるが……？

そして服装が白い時と黒い時の二パターンあり、黒い時は割と温厚な性格になつてる。↑オ리지ナル設定

他にも色々と言りたいところがあるが、とにかく可愛い。なんでこの子がメインヒロ

インの中にいないのが謎。ASMR出したんなら新章とは別にゴーストルート出して欲しい。(切実)

翔との電話の時(すーこ否定時)の「死ね」がめっちゃ好き。毎日言われたい。

ゴーストちゃんちゆきちゆき。

新海 翔……ステータスはめんどいのでwiki参照。

原作での主人公。すっごい苦痛な出来事が沢山あったが、多分この物語ではあのレベルの悲劇を翔は……味わうことは無い。原作では最終的にヒロインみんなから好かれる羨ましボーイ。

フェス開催時に怪我をしたところから、とあるアーティファクトの欠片を体内に取り込んでおり、異例のユーザーとして活躍する。

ぶっちゃけ幻体のアーティファクトを取り込んだ時はすっげえ羨ましかった。俺ならゴーストとイチャコラしてる。

九條 都……ステータスはめんどいので以下略。

凄く人気の高いヒロインのうちの一人。都に限ったことでは無いが、基本的には原作と同じな為割愛。

蓮太にとって大きな変化をもたらした人物。この子がいなかったらきつと物語は進まなかった。間接的とはいえ、事実上の特異点と言ってもいいのかもしれない。あと意

外とおっぱいがデカイ。CG見た時はびっくりした。印象に残ったセリフは、初ハイタツチ！

新海 天……ステータスはめんど以下略。

そらいろヒロインであり、翔の妹。基本的には原作と同じな為割愛。

校内火事事件の際に蓮太と初めて出会い、その後はアーティファクトによる能力を持つているユーザーだと発覚したことで、都と翔と手を組み《魔眼》のユーザーを探すことに。ひよんな事から、とある人物を調べて欲しいと相談を受け、我こそはと自ら望み遺憾無く力を発揮するが……この日を境に彼女の運命は変わる。

あと意外とおっぱいがデカイ。設定見た時びっくりした。印象に残ったセリフは、可愛い妹にひれ伏せ！

香坂 春風……ステータスは以下略。

エピソード3のヒロイン。基本的には原作と同じな為割愛。

とある日に偶然蓮太が声をかけたことで交流を持った人。自分の能力について頭を悩ませており、ゴースト（黒）の助言もあって、極度の人見知りにも関わらず蓮太に相談をもちかけた。何故か時折、人格が変わったように急変し、蓮太を悩ませる。あと普通におっぱいがデカイ。服の上からでもわかるデカさ。たまに胸元カバーっと開ける。あとカレーを殺す。印象に残ったセリフは、デユフ……

結城 希亜……ステータ以下略。

四人目のヒロイン。基本的には原作と同じな為割愛。

駅前で蓮太とぼったり会ったのが初登場。そしてその後、敵対してきたゴーストに蓮太と共に共闘して立ち向かったが……その厨二加減に呆れられてしまい、結果的にゴーストと蓮太が仲良くなったきっかけを作ってくれた人となった。

即座に蓮太を《ヴァルハラ・ソサイエティ》のメンバーに勝手に入れているが、本人は否定を続けている。でも多分話を聞いていない。

主的には一番初見のイメージが悪かった人。でも最終的にはその評価はひっくり返った。現在ではなんであんなに悪く思っていたのがわからない。

あとおっぱいがデ——ごめんなさい。印象に残ったセリフは○×☆○#€×%○%
く!! (ホラー映画見てる時のあの叫び)

竹内 涼太……身長182cm。趣味：人助け。好きなもの：蓮太の手料理。嫌いなもの：悪質に人を傷つける人。

蓮太の実兄。成績優秀で運動神経もよく、顔もイケメンという最強のポテンシャルをもつ人。それでいてかなり人に優しく、自分が損することになろうとも、周りを優先するようなタイプ。蓮太とは真逆と言ってもいいくらいには凄まじい聖人であるが、手先が不器用寄り。特に料理は絶望的である。

誰よりも弟である蓮太を大切に思っており、滅多に怒りを露わにはしないが、過去に一度だけ蓮太を馬鹿にされたことでブチ切れたことがある。

誰からも尊敬されるような人物であり、幼少期からの蓮太の目標である。

しかし、ある事件で惜しくも命を落とす結果に……

里中 千紗……身長160cm。趣味：家事全般（得意ではない）。好きなもの：涼太
関係全て。嫌いなもの：にんじん。

蓮太と涼太の幼なじみ。涼太とは同年代。とにかく世話焼きで、子供たちの面倒みは
かなり良いが……頑張れば頑張った分だけ空回りするタイプ。割と元気いっぱい
キャラで、学問の成績はかなり優秀。常にトップの座に座り続ける涼太とはいつも僅差
で負けている程。

気になるものは基本的には何でも試しており、涼太があらゆることに関して大体詳し
いのは、このキャラのせい。

昔から涼太に対して恋心を抱いており、蓮太にはそれらは全て見透かされていた。

その抜群の容姿からか、男子にはかなりの人気を誇り、かなりモテモテである。だが、
とある事件に巻き込まれてしまい……

あとのメンバーは重要になったら追加で。

《アーティファクト》（オリジナルのみ）

魔鏡のアーティファクト……蓮太の持つ、ピアスの形をしたアーティファクト。イヤリングではない。その性質は《鏡》。能力は受けたものを反射する力。自身を中心とした半径2 m以内が能力範囲であり、その中でのみ効果を発揮する。

単純に相手の攻撃を反射したり、景色を反射させてカメレオンのように風景と同化するなどで、姿を認識させづらくさせたりと様々な応用力のある力。

ある条件を全て整えることで、自身を任意の相手の鏡合わせの存在として扱うことのできる力を持つ。扱い方を間違えると、世界を破滅へと導く最凶のアーティファクト。

〇〇するアーティファクトのうちの一つ。

赤傷のアーティファクト……20日の夕方、蓮太と希亜に襲いかかってきた男の内の一人が持っていたアーティファクト。その性質は《傷の共有》。能力は自身が体験した『痛み』を条件を満たした相手に強制的に共有させる能力。

あくまで痛みのみを共有するもので、痛みを感じなければ共有することは無い。（単に触れただけ等は共有しない）

そして共有する条件とは、相手の身体の一部を自身に取り込むこと。と言っても腕や足などではなく、些細で小さなものでも良い。髪の毛や爪なども可。

ただ、血や唾液などは対象とならない。

陰影のアーティファクト……20日の夕方、蓮太と希亜に襲いかかってきた男の内の一人在り持っていたアーティファクト。その性質は《影踏み》。能力は影操作。相手の影の中に自身が入り込むと、自在にその影を操ることの出来る能力。

蓮太との初戦闘の際は、まだ上手く扱いきれていなかった為、動きを止めることしか出来なかったが、本来の力は影の形を変えることが出来る能力。

また、影同士をくつつけることで全く同じ動きをすると言ったトリッキーなことも可能。

ただ光に弱い。光の弱い場所であればあるほど相手を縛る力は強くなるが、光の強い場所だと簡単に能力を破られるほど弱くなる。

雷迎のアーティファクト……とある人物が所持しているアーティファクト。その性質は《雷》。能力は雷の発生及び、電気を支配下に置く事。自由に電気を操ることが出来、意志のままにその強さまで変えることが可能。なお、空気中の電子を操ることによつて高電離気体を人工的に作ることが可能。

速度、威力、範囲どれも非常に優れており、他のアーティファクトとは一線を画すモノとなっている。

オーバーフロー

ある人物に隠された能力。能力はまだ不明。

○○するアーティファクトのうちの一つ。

.....

個人的に一応オリジナル要素と説明していないモノはこうしていつでも見れるようにした方がいいのでは？ と思いついた結果です。需要があるのなら続く。

その他

祝ッ！ 100話記念！

目の前のおおきな丸いテーブルにはいつもと違った沢山の食べ物たちが並べられている。豪華にステーキや野菜の盛り合わせなど普段じゃ見かけられることもないような特別な料理たちだ。

そして煌びやかに飾られたライトや折紙たち。そんな部屋に、俺たちは招待された。

「えー、誠に精悦ながら司会進行はあたしが担当させていただきますーす！ それじゃあ……………こんちはー！ みんなの妹の天ちゃんだよー!!!」

笑顔いっぱい無邪気に席を立ち、誰かに向けて語りかける空ちゃん。

「お前なあ…………一応本編じゃあ結構暗めのシリアスなシーンなんだからもつとこう……………なんかねえの？」

笑顔ではあるが、呆れた声で天ちゃんの横から指摘をする翔。

「知るかよ！ 今はそんなことどーでもいいの！ 今日はおめでたい日なんでしょ!?!」
「仮にも自分のピンチに知るかよはねえだろ…………」

「でも、天の言う通り今は深くは考えなくてもいいんじゃない? 私たちがこの円卓に導かれたのも、そんな世界から逸脱した状態で祝いたいからでしょ」

ワイングラスを摘むように持ち、謎の赤い飲み物を揺らして物凄く格好をつけて翔を落ち着かせる希亜。

……あの赤い飲み物なんなんだろう?

「そ、そうですね! 何故か急にこんな所へ呼び出されてしまいました………安
全な様子ですし、今はみんなで祝いましょう!」

そしてにこやかな笑顔でおおきな胸を揺らして自分のグラスにジンジャーエールを注ぐ春風。

「そう言えば都は? なにかものを取りにでも行ったのか?」

俺たちは今、丸いテーブルを囲うように座っているが、明らかにひとつスペースが空いている場所がある。そしてこの部屋にいるメンバーの中に都がいない。6つ並んでいる座布団のうち、一つだけが空のまま。グラスと料理は配られてるけど。

「みゃーこ先輩ならさつきケーキを取りに行っていましたよ! 作ってきたよ〜って言うてましたし」

「ちよつと待って!!? 作ってきたっておかしくね?! なんで予め用意してるんだ!?!」

「まーまー、そーんな深く考えないの、細かいこと気にしてたらにいやんみたいになりま

すよ、エロパイ！」

「おいこらっ！ それどういうことだ!!」

なんてもうすっかり見慣れた兄妹喧嘩を眺めていると、扉の奥から都が大きなホールケーキを持ってきた。

「みんなおまたせ、遅くなっちゃってごめんね！」

両手でしっかりとケーキを掴んでトコトコとテーブルに向かって歩く都。そんな彼女の頭にはちよこんとコック帽子が乗せられていた。

……なんで？

「来たわね、九條さん」

「えらい時間がかかってたな九條、なにかしてたの？」

「あ、ごめんなさい結城さん、ありがとう。……うん、ちよつとねケーキの飾り付けを」

持ってきたケーキを置きやすいように希亜がスペースを作り、その場所に特大ケーキがドドんと君臨する。その上には……

100話おめでどう記念！ と銘打って書かれたチョコプレートを中心に、フルーツやホイップたちが賑やかに飾られていた。

「うお——っ!!!」

テンション高めな反応をする新海兄妹。やっぱこいつら似てんな。

「九條さん凄いい……! 私じゃあとてもこんなに素敵なケーキはつくれないです! なんだって私、別世界じゃあカレー殺しちやって……」

「いや、あれは凄かったですねえ。もうあだ名がデスカレー先輩しか思いつかなかったですからねえ」

「そんな事ないですよ、先輩。ちゃんと練習すれば美味しくできますよ、きっと」

2人の兄妹からの励ましの言葉を受け、あることを思い出す。

「そーだそーだ、俺がいた世界なんて確か『春風先輩のデスカレー』なんて名前で商品化してたぞ? あと、ようつべでデスカレー作ってみた! なんて動画がたくさんあったり……」

「そっ!? そうなんですかっ!? 竹内さんのいた所では私のカレーが商品化!」

「メル〇リで転売されてたような……?」

「すっげ、じゃあ春風先輩! もっとたくさんカレー作りましょ! それで………ついでに『ようつーバー』になって『はるるん』って名前で宣伝 a n d 収益化目指しましょ!」

「あのなあ天、そういうのはもつと早めにしとかないと……それに、もう誰かのやっている事を続けてやったって数字は上がらないんだぞ」

「いや、翔……そんな問題じゃないと思う……」

ボソツとした俺のツツコミに続くように、横にいた希亜が思いついたようにあることを言った。

「天、それならもつといい方法がある。料理動画として九條さんに協力してもらったらいい」

まあ……確かに？ その手の動画なら……でも料理動画なんて腐るほどあるしなあ……

「え？ 私の？ ……人様にお見せできるようなものをちゃんと作れるかな……」

「——ハッ!!」

「え？ 何？ どうした？ 天ちゃん」

「思いつきました、思いついたんですよ!! 前にピアノでアニソンとかを弾いている動画を！ その人の真似をしちゃえばいいんじゃないですか!？」

「真似……？ ですか？ でも、先程新海くんが言ってたみたいに誰かの二番煎じになっちゃうのは……」

「違いますよ！ 春風先輩！ 二番煎じになっても成功する方法があるんですよ！ 世の男が絶対に見る方法が！」

……こいつ絶対アホだ! 絶対あれを言うつもりだろ!

「男の人が……?」

「そうつすよ! サムネにみゃーこ先輩のおっぱいを載せ——」

「させねえよつ?!?! いくら都のおっぱいがデカいからってそんな事——」

「蓮太……? 何を言っているの?」

「あ、はい、ごめんなさいごめんなさい! もう二度と言いません!」

「もういいからとにかく始めようぜ、せつかく九條が用意してくれた料理が冷めちまう」
「なんだかんだでバタバタとなつてしまった俺たちを、翔がまとめて落ち着かせる。そして原作主人公として代表になつてなんか喋るのかと思つていたら、天ちゃんが大声で喋りながら立ち上がった。」

「はーい! というわけでー! メンバーが全員集まったので、改めて乾杯をしようかと思いまーす!」

いやお前が仕切るのかよ。

「皆さん飲み物の準備はよろしいでしょうか?!!?」

その掛け声とともに各々がグラスを持って、腕を上げる準備をする。

「いよつしやあ! それじゃいきますよ?」 せ——のっ!」

「「「「かんぱさささい!!!」」」」」

カランコロンとグラスを軽くぶつけ合い、みんなで大声を出して喜びを共有しながら乾杯する。

さつきから希亜の飲み物だけ異常なほど真つ赤だったのが気になるけど、みんなグラスを合わせ終わると、ぐびぐびと自分の飲み物を飲み始めた。

そしてそんな中隣から聞こえてくる可愛い声。

「~~~~~ーッ?!?!」

何かにびつくりしたのか、希亜が急に噎せ始めて口に含んだ飲み物を軽く吐き出してしまう。

「うおっ!?! どうした!?! 希亜!」

「……………うえ……………」

ティッシュを慌てて取り出して、服や口元を吹いてやる中で、ある臭いに気がついた。
……………これさ、希亜が飲んでるのって……………

「あ、やっぱり結城先輩ってトマトジュースもダメなんだ?」

「お前わかかっててやっただろっ
!?!?!?
」
「まじゆい……………」

と、そんなこんなで乾杯を済ませ、みんなで食事をとりながらワイワイとはしゃぐ。
ちなみにメンバーは原作4人ヒロインズと翔と俺。

「いや〜それにしてももう100話ですかあ、はやいつすね〜」

「ふふっ、そうだよね、この物語が始まってからまだ2ヶ月しか経っていないからかな?
とつても早く感じちゃう」

「みゃーこ先輩は登場が早かったですからねえ…………その分思い入れもあるんじゃないっ
すか?」

「え? でも天ちゃんと新海くんも早かったよ?」

「俺たちは出てきたのは早かったけど、最初は全然蓮太と絡んでなかったらさ。天なん
てそこから再登場はかなり後になったし。あつ、でも火事の時にチラツと出てきたの

か」

「でも、ほとんどこの中のメンバーじゃあにいやん……………ん？ いや違うな、結城先輩が1番多いのか!？」

「私は……………そうね、多分だけど……………蓮太とは1番最初に仲良くなったの……………かも？」

「ああそうだな。最初は俺、今よりもかなりひねくれてたから……………」

「その次に出てきたのはゴーストさんじゃないかしら？ 主のお気に入りなだけあつて原作よりも出番がかなり多いみたいだし」

「主がゴーストのこと好きだからなあ……………」

「逆に私は全然です。皆さんと仲良くなれたのは……………まだ10話前とか、その辺ですから」

「でも、春風先輩は分岐の時に出てきてたじゃないですか、物語は今なんかあたしにスポット当たってますけど、BAD√の時には関わってましたし、もうそろそろ主役回あるんじゃないですかね？」

「今のところは……………どうだろ？ 天ちゃん以外なら誰の主役回がきてもおかしくはないかな？」

「いやなんで蓮太が知ってんだよ」

「そりゃあ翔、俺はオリキヤラだぞ？ 主の人格添えるなら俺が1番やりやすいだろ」

「メタメタね……今更だけど、ちゃんと注意喚起してるのかしら?」

「上スクロールしていけば分かるだろ、んなこと」

「それで、とりあえず100話投稿したわけですけども……ぶっちゃけた話あとどれ位続きそうなんです? 先輩的には」

「ええ……? わかんないけど、200話はいくと思うかなあ……? だってまだ全然核心まで迫ってないし、伏線ばら撒きっぱなしだし、だれとも付き合っていないぞ?」

「あ、その話言っちゃいます? この場で暴露しちゃいます!」

「いや、やめとこうか。お楽しみは後に取っとくってやつだな」

「蓮太の恋人かあゝ怪しい人は結構いるっつーか、みんな可能性あるだろ」

「だからやめとくって話したばっかだろうがよ! にいには黙ってるい!」

「ま、まあ……ちよつとだけならいいんじゃないかな? 確定じゃないんだし」

「ええ!? みゃーこ先輩言っちゃってますけど!? 割とデカい情報言っちゃってますけど!」

「とー! とととと! とにかく! まだ先はお楽しみってことで! 良かったらこれから見てください!」

「「「「「よろしくお願いしますっ！」「「「「「

「……………次回があったらもっとマシなの作ろうな？」
主」

Happy Birthday!

都 前編

今日はいいい天気だ。雲ひとつ無い晴天の空に春とは思えないほどに眩しい太陽。それに加えて優しく俺の身体を包み込むように吹く風。

日曜日だということもあって、心地の良い外の空気を肌で感じながらも、洗濯機から取り出した洗い物たちをベランダにでて干していく。

タオルや衣服。ついでに布団やシャツも一緒に洗ってしまい、一仕事終えて背筋を伸ばす。

「ん〜……っ！ よし！ 全部真っ白！」

とそんな時だった。気持ちよく休日を満喫していると不意に背後から強烈な蹴りを入れられる。

「おいっ……!」

「おろおっ!」

いきなりすぎるその攻撃に素早く対応できるはずもなく、俺はどこかの流浪人のように情けない声を上げて転げてしまう。

そしてそんな俺に追い打ちをするように仰向けに倒れた俺の顔を生暖かい足が襲い始めた。

「むぐっ……!!？」

「真っ白！ じゃねえだろ大将……！ 今日のアレどうすんだよ……！」

ストッキング越しに伝わってくるレナの（何故か蒸れているような感覚）温かさを直に感じながら、その言葉について考えていた。

そう、今日は11月2日。都の誕生日なのである。そんなめでたい日に何故俺は彼女でもある都と一緒にいないのかというと……実は今日、都はバイトに入っていて会うことが出来ないのだ。

いや、厳密に言えば会うことそのものはできるんだが……どうせプライベートとして会うことが出来ないのなら、その時間を上手く使って何かサプライズでもしようかと考えていた。

彼女にはバイトの終わる時間である夜になったら迎えに行くと伝えていて、内容は2人で俺の家で夕飯を食べようと約束しているだけ。サプライズにはもってこいだろう。

……なのだが。

「あのなあ大将。都を喜ばせようとするその心意気は大したもんだがよ……結局今の今まで肝心な内容が決まってないってやばくねえか？」

「……………だよなあ」

大きな問題点。そう、都が喜ぶようなサプライズを思いつかないのだ。

身近な女の子であるレナやルナに色々と質問をしてみたり、天ちゃんや成瀬センセにも相談したのだが……如何せん全く解決しないのだ。レナルナの2人は「そういう感性をオレ達に求めるな」との事。……………エッチには普通に乱入してきたのに？

天ちゃんと成瀬センセは物も大事だけど、いちばん大切なのは気持ちだと言われた。いやわかる。わかるよ？ でもやっぱり心のこもった物と気持ち、両方揃ってこそじゃないか？

「……………そういえばルナは？」

そんな考え事をしている途中で気がついた。この場には珍しくルナがいない。基本的に2人とも姿を現している時は近くににいるのに……………だ。

「アイツはなんかでつかいモールに行った。アンタが情けねえからプレゼントを選びにでも行ったんだろ」

……………アイツならやりかねないかも。なんだかんだで世話好きだし。文句も多いけど。「だから大将もさっさと動け、じつと考えてもしようがねえだろ。店に行きやあそれなりのもんがあるんだから何かは見つかるはずだ」

グリグリと更に強く顔を踏むレナ。

……………パンツ見えてる。

「そうだなあ……それじゃあもうちよつとこの足を堪能してから——」

「今動けッ!!」

「ごフツ!?!」

と、俺の考えを読まれたのか、やや顔を赤くしたレナにサッカーボールキックを当てられて渋々家を出るのであった。

くシヨツピングモールく

「んでなんかあった?」

軽く着替えを済ませて家を出て、シヨツピングモールにたどり着くと、割と直ぐにルナとの合流に成功。そこから別にあまり期待はしていない結果の確認をする。

期待をしていないってのはルナを信用していない訳じゃなくて、あくまで何かを持ってきてくれていたら参考にするつもりでいたからだ。やっぱり渡す物は俺が決めなければ。

「んや、別に。時期が時期だからな、来月のクリスマスや年末のイベントに向けて準備してんのかどこの店も特段特別なモンはねえ」

「だろうな……1月ってなんとも絶妙なタイミングだもんな」

なんて話をしながら覚まさな店を巡るようにウインドウシヨツピング。2つペアのマグカップ。これからの時期を考えたマフラー、綺麗なインテリアとして扱えるオシャレな小道具、ゴゴゴ氷。

うくん……どれもなんか違うよなあ……

「無難にペアのアイテムを買った方がいいんじゃない? 日用品とも使えて特別感も出る。かさばることも無いしやっぱこれだろ」

そう言っただけでレナが手に撮るのは空色と桃色の淡い色をしたコップセット。

都の事だ、高すぎるものを買ってもそつちの方を気にしてしまうだろうしこれくらい

がちようどいいのかもしれない。だが……どこか納得のいかない自分がいる。

それはきつと同居をしていないから……かな？ 別に2人同時にコップを使う理由もないのだが、まさかプレゼントを自分の家に置く訳にはいかない。持って帰ってもらうだろう。それだと特別感が……いや、別にあるか。

何気ない時に使ってくれば良いし……な。

「おい、蓮太。そつちもいいけどやっぱり防寒着の方がいいんじゃないか？ 雪が降る季節になるとどうせ必要になるだろうしよ」

ルナが持つてくるのはモコモコとした生地の良いマフラーや手袋。そして少し大きなコートも持つてきていた。

「いや、まあ……うん。その気持ちは分かるんだけど……都のサイズに合わせられなくてね？ この場に本人いないんだしき」

マフラーや手袋はともかくコートはなあ……ガシユアルチックで似合いそうではあるが……まあでも余程のことがない限りは買い直すなんてことはないだろうが。

だかそれは冬時期を考えたらって話だ。期間限定な物を渡すのはどうしたものか……

なんて既にこの時点で半日以上費やしている訳だが……一向にコレ！ と言ったものが見つからない。その求めているものは、いつでも扱えて、値段も都が納得できる

範囲のもので、貰ったら嬉しいと思える物。

「そうなかなか上手くは見つからねえよなあ……」

手作りの料理なんてお互いに沢山食べてきた。俺たちが付き合うことになった5月から既に半年。何度も小さなことから大きなことまで沢山の思い出を作ってきた。

それでもやつぱりプレゼントというのは考え込んでしまうものだ。

そんな時だった。ある一つの物を見つけたのは。

「……………これは」

それを一つ手に取り、マジマジと見つめてみる。

……………これならいけるんじゃないか？ 普段使いもできて、値段も高すぎない。そして喜んでくれそうじゃないか？

「……………なあ大将。気に入ったものが見つかったのはいいんだけどよ、それ都普段から使ってなくねえか？」

「確かにこういう系統は使っていないかもしれないけど……………ケア、つまり手入れくらいはしてるだろ。だからこれだけじゃなくて……………コッチもさ」

「ふーん……………ま、いいんじゃないやね？ 蓮太にしちやあ上出来だろ。知らんけど」

……………おい。

「決まりだな。よし……………」

と、そんなこんなで都へのプレゼントが決まった俺は、買い物を済ませたあと夜まで準備をし、時間になる頃には家を出て都を迎えに出発した。

喫茶店“ナインボール”へ……

Happy Birthday!
都 中編

もう何度目になるだろう……

こうして2人で並んで歩くのは。最初はどこかぎこちなかった俺達も今となっては大ベテランだ。もちろん良い今での慣れ、好きだという気持ちはあの時以上。

あの時に踏みとどまらなくてよかった。今でも不意に思うんだ。

もし都を助けられなかったらと思うと……………

「……………? どうしたの?」

なんてことを考えていると、俺の顔をちらりと覗き見るように首を傾げる都。

「ん？ いや、流石にそろそろ夜は冷えるなって思ってただけ」

「もう11月だもんね。お店の方でもクリスマスマスの記念商品を考えてたよ」

「へえ……普段からあの人気だから、クリスマスマスの2日間なんて相当賑わうんだろうな」
特に何も無い平日でも時間帯によればお客でいっぱいになっているんだ。だからあの2日、もしかしたらその前後もかもしれないけど……こりや地獄を見そうだ。

「うん……だから、ごめんね？ いくら人手不足だからって、臨時でアルバイトしてもらうだなんて……」

申し訳なさそうに俺の方に視線を向けながら謝る彼女。そんな彼女の手を握り繋ぎ、やれやれと言葉を紡ぐ。

「いいって、そもそも俺からアルバイトをさせてくれて出してたんだしさ。都のお祖父さんにも許可は貰ってる……っつーか頼られてるのが嬉しいんだ」

正直、プライベートで都と一緒に居られないのは結構残念に思うけど……それは都本人もそうだろう。けれど彼女にとってはそれと同じくらい、いや、それ以上にお店と、家族も大切なんだ。

「お爺様、とつても頼れる彼………氏さんだつて褒めてたよ」

「なに今更照れてんだよっ、自分で言つてて顔が赤くなってるぞ」

「だ……だ……だ……」

付き合いたての頃ほどではないが、湯上りのようにほんのりと顔を赤らめる都は、恥ずかしそうに俺との距離を1歩縮めてくる。

「ほん……………との事だもん……………」

「……………ははっ、じゃあ都が胸を張って言えるようにもつともつと頑張らなくちゃな」
そんな可愛く照れている彼女に俺も1歩寄り添い、家までの帰路を辿っていった。

く自宅く

「ご馳走さまでしたっ♪」

「はいよ、お粗末さん」

やけにルンルンとご機嫌な都と食事を摂り終わる。

「ビーフシチューとっても美味しかったです」

「そりやよかった、作り甲斐が有るってもんだ」

「ちよつと食べすぎちやつたかも……」

確かに珍しかったかも？　ほんの少しだけとはいえおかわりまでしてくれるなんて思つてはなかつた。

美味しい美味しいと子供のようにな无邪気にビーフシチューを食べる都は可愛かつたなあ………つて……

「……？　どうかした？」

とあることに気がついた俺は、つい数秒間の間、都の口元を見つめてしまっていた。

「………本当に子供みたいだ」

「……う？」

目を点にして、わけがわからなそうにしている都のすぐ側に近づき、その口元に手を伸ばそうとする。

その瞬間、ちよつとしたいたずらところが働き、面白そうなことがピンツと思いついた。

わざとに服を緩めさせ、まるでその気になっているのかのように振る舞いつつ、改めて腕を回して、口元に指を伸ばす。

「………えっ？　あつ、まつ………今は………っ！」

何も言葉を発していないにも関わらず、急に再び顔を赤らめた都は、口では否定しつつも、その身体は嫌がる様子もなく、むしろ都の腕も俺の背中にいこうとしたその時。

「スープ付いてる」

とほんの少し都の口元に付いていたビーフシチューを指で拭き取って、ペロリと舐めてしまう。

「……………」

すると自分が勘違いをしていたことに羞恥心を覚えたのか、みるみるうちに更に熱を宿していき……

「~~~~~……………ツ!!」

プルプルと震えながら顔を下に向けてしまった。

「(耐えろ……………! 笑うな……………耐え……………! ダメだ可愛い……………!)」

「…………ど、どうしたんだ? 都。急に顔を赤くして下向いたりなんかして…………」

わざとに何も気がついていない雰囲気は何気なく問いかけてみる。

「な、ななっ、なんでも……………ないでございます……………!」

「言葉が変になってるぞ? なんだよ……………熱でもあんのか?」

「違っ……………! くて……………! えつと……………その……………!」

あれからそういう行為も沢山してきたが、それでもまだ都はその類の話は恥ずかしい

ようで、心の底から照れている様子でキヨロキヨロと視線を泳がせる。

いざ始めると大胆になるのになあ……

「熱じゃないの？ それなら………」

「エッチすると思った……？」

その言葉を彼女の耳元で囁いた途端に、都はぼふつと恥ずかしさの限界が来たのか、一瞬動きを止める。

そして――

「絶対わざとだつ、意地悪だよおっ!!」

と、その恥ずかしさを振り払うかのように彼女にしては少し大きな声で誤魔化していた。

特別章 蓮太過去編

追憶の壺

「おーい！ 蓮太ー！」

んだよ……俺は眠いんだっつーの……。

「早く起きろって！ お前今日から中学生だろ！ そろそろ自力で起きれるようになれよッー！」

朧気な意識の中、俺は突如として襲ってきた激しい痛みに叩き起される。

「ホイッ！」

「痛ってえ!!?!？」

その衝撃でパチクリと目を開けると、俺の腹の上に新品の通学カバンがずっしりとふんぞり返っていた。

「まともに起こせねえのかよっ!？」

「はははっ！ バーカ！ お前がさっさと起きねえのが悪いんだよ！」

「普通に起こせよな……涼ニイ」

竹内 蓮太

12歳

春

「ふああ〜……………」

乱暴な起こされ方に、やや不満を持ちながらも俺はリビングへと移動する。すつかり朝日は空高くへと登っており、電気なんかつけなくても気持ちのいいくらいに部屋の中は明るくなっていた。

「やっと起きたか、今日は蓮太が当番の日だぞ」

「わ〜ってるよ、とつとと作るから待っててくれ」

重い身体をくねくねとほぐしながらキッチンへと向かい、適当な材料を持ってそのまま調理に取り掛かる。

そう、うちは毎日俺と兄で交代しながら、家事をやりくりしている。

その理由としては、突如として親がハマった海外旅行。元々俺の父親は小説作家という事もあり、見識を広げるために海外へ……と言った流れなのだが、いつの間にかそれが夫婦旅行へと様変わり、母親も共について行くこととなり、俺たち兄弟はこの一軒家

に置いてけぼりを食らっていたのだ。

もう3ヶ月程だったが……流石にもう慣れてきた。多分俺なら仕送りがあればこれからもこうして生きていけるだろう。そう思えるほどに。

「れくん。今日はなんにするんだ〜?」

「うっせえな、適当に卵焼きとかの弁当のあまりだつつの」

こんな感じで俺を急かしてくるこの男は俺の兄、名前は『竹内 涼太』。度が過ぎるほどの優しさを持つ人で、顔も美形、成績もトップ、運動もできる、と言った漫画の境界に生きているような完璧超人。

俺は全てのスペックにおいて負けていて、内心憧れている自慢の兄だ。

「なんだ……手抜きかよ」

「だつたら自分で作れつての」

いや、一つだけ俺が兄に勝っていると断言出来ることがある。それがこの料理だ。

自慢じゃないが、俺は料理が大の得意。昔から親から教わっていたということもあるが、俺が頑張つて料理を作る度に、兄に「これだけは蓮太には勝てねえな」と何度も言われたからだ。

それが俺の唯一の自慢になった。

「そう言えば蓮太は何か部活とかするの?」

「しねえよ、俺は少しでも成績をあげなきゃいけないんだ。涼ニイと一緒に高校に行きたいから」

「頑張るのはいいことだが……お前が入学する頃には俺はいないんだぞ？」

「んなことあわーつてるよ！ 涼ニイと同じ高校に行つて俺の方が上だつてことを成績として残すためだ！」

「なーんだ、そんなことか！ 安心しろよ、蓮太じや俺を越えられないから」

「涼ニイの朝飯は米だけな」

「ごめん、マジでごめんなさい。せめてふりかけだけでも下さい」

これが俺の日常。俺の生活。俺の人生。

どうでもいい話をしながら、いつまでもこんな感じの生活が続くのかと思つてた。まあ、せめて涼ニイが家を出ていくまでは、こんな毎日が続くと思つてたんだ。

幸せだった。

当時はそんなことを思いもしなかったけど、思い返す度に何度も思う。あの時は幸せだったつて。あの時の普通は特別だったんだつて。

今の俺には、それがないから。

それから涼ニイを見送ってから、自分の準備を進める。

正直言つて走ればまだギリギリ学校には間に合うと思うが……面倒なので歩いていくことにした。

ちゃんと鍵を閉めて、新品のカバンを雑に持ち、通学路を歩いていく。

道行く学生たちに、嫌悪の目を向けられながらも俺はそれを気にしない。

どうやら何かと噂になっているようだった。

数日前、目つきが悪い。なんて理由で高校生から喧嘩を売られたんだが……結果としてそいつをぶっ倒してしまった。そのことを初めとして、色んな子にその話が飛び回っているみたいで……中々に面倒なことになっている。

「あれ、竹内君じゃない？ ほらあの話の……」

「うわ、出たよ……どうせあんな不良は学校にすぐ来なくなるんだから、最初から来なけりゃいいのに」

「ああいう喧嘩しか脳のない奴が、社会に出てからボロクソに虐められるってお父さんが言ってた」

「近寄つちやダメだよ、私、友達とか思われたくないもん」

そうだな……今日の晩飯も俺の当番だから……どうすつか？ スーパーに行くにしてもこの辺のスーパーじゃあ面倒だし、隣町まで行くしか……でもあつこなら商店街の方が安いしなあ。

昨日は……ああ、確か涼ニイが魚を焦がしたんだっけ。しゃあない、とりあえず俺が見本として作ってやるか。

そんなことを思いながらも時間を確認すると、さつきは遅刻ギリギリだと思っていたのに、今は10分程余裕がある。あれ……？ 家の時計がズレてたのか？

まあいいか、間に合うのならそれでいいや。

そしてテクテクと道を歩いていき、校内に入ろうとすると……何やらガタイのいい男の教師らしき人から止められた。

「お前が噂の竹内 蓮太か。今までは自由に遊んできたらしいが、これからはそうはさせんからなッ！」

「るっせえよ……」

俺は元々遊んでなんかねえっつーの。てめえらみたいな人の話だけで決めつける馬鹿が勝手に噂を立てて遊んでるんだろーが。

もう抵抗する気もない。まともに相手をするだけ無駄だしな。

「なんだその口の利き方はッ！」

既に最初から俺に悪印象を抱いているのか、朝つばらからだと言うのにいきなり俺の胸ぐらを掴んでくる男の教師。

「上っ面だけのクソ教師に対しては上等だろ？」

「……………ッ！ お前みたいな奴が何で成績が高いんだよ！ ろくに努力も知らない様な子供が！」

「はあ……、いいから離してくれよ、お前のせいで遅刻扱いになる」

パシッと適当に教師の腕を弾き、俺は学校の中へと歩いていく。

「絶対後悔させてやるからな……」

後ろの方からそんな言葉が聞こえてきた。

本当……人と関わるのはめんどくせえ。

追憶の式

それからの俺の中学生生活は中々に悲惨とも言えるべきモノだった。

流石にいじめ等は起こることは無かったが、誰一人同じ学年で声をかけてくる奴なんかはいなかった。しょうがないさ、ビビってるんだから。

特に記憶にない事まで捏造されてるし、噂とは酷いもんだと思ったりもするが………その発端は自分で作ってしまってるんだ。しょうがないだろう。

友達等がいなかったからか、思いのほか自分の勉強に時間を割くことができて、成績は徐々にながなっていく。涼ニイの行っている高校は偏差値がかなり高いからもつともつと高みへと向かわないと到底追い越すことはできないだろう。

それに………学校側も協力はしてくれないだろうしな。

入学式の時からずっとそうなのだが、どうやら俺は危険生徒なるブラックリストに載っているらしい。何をするかわからんと常々警戒をされている。

明らかに俺だけを敵視するような扱いを受け続け、むしろこっちの方がいじめと言っても刺し違えないだろう。

けれど俺はそんな事じゃ折れない。

こんな目に遭っていても涼ニイがいる。それに……………

「おっ！ 蓮太じゃん！」

「……………なんだ、千紗姉か」

「なんだとはなんだ！ こいつ〜！」

首に腕を回され、そのままアームロック。拳をグリグリと押さえつけられ、一方的な暴力を使われる。

そんな相手、この女性の名前は「里中 千紗」。涼ニイと俺の幼なじみであり近所に住んでいるこれでも立派なお姉さんだ。

ちよつと乱暴だが、俺の境遇を理解してくれていて心を支えてくれていた大事な一人。恋心などは抱いてはいないが、友達としては本当に大好きな人。世話焼きの癖に手先が不器用なのがたまにキズだが……………まあ相当な美人さんだ、いつかは必ず結婚出来るだろう。

多分……………その相手は涼ニイだろうけどね。

「ちよつ!? 痛つ!? いいのか!? 涼ニイに全部チクるぞー！」

「じゃあチクられないように喉を潰しとかないとね〜」

「こふつ!? ちよつ……………! マジふざけん——」

「痛たたたたたたたたつ?!?!?」

.....

.....

.....

「お邪魔しま〜す!」

あの格闘の後、結局俺ん家まで来て上がっていくとか言い始めた千紗姉。

「つたく……よくあの流れで家に遊びに行くなんて言えたな」

「夜ご飯のおすそ分けのついで! 目的はこっちだから!」

とかなんとか言いながら、リビングにあるゲーム機を起動してサバイバルホラーであるゲームをプレイしている。

「蓮太く！ マーセやろ！ マーセ！」

「いや俺はこれから勉強する時間だから……」

「いーって！ いーって！ アンタなら間違いなく私たちの高校に入れるから！ 涼ちゃんの弟だしね！」

『『大好きな』が抜けてるぞー』

「うっさい！ しね！」

「口悪いな!」

そんなこんなで無理やり千紗姉の隣に座らせられて、結局二人でゲームをすることになった。千紗姉は大統領直属のエージェントを、俺はそのキャラと関わりの深い女スパイを扱って、高得点を目指す。

これが意外と面白くて面白くて、結局涼ニイが帰ってくるまでひたすらゲームをプレイしていた。

そして……………

「うわっ!? やばい負ける!」

「そこそこ! そこに緑の葉っぱ落ちてるから!」

「いやハープだろ……」

「あー！ あー！ あー！………」

画面に映し出されるGAME OVER。どうやら死んでしまったようだ。

つか——

「何結局涼ニイとゲームしてんだよ……」

「なんだくおうおう、嫉妬か？ 若い癖に女つ気を気にするようになったかあ〜!?」

「涼ニイ、ウザイから追い出していいかな」

「まあまあ……」

涼ニイが帰って来たあとも、なんだかんだでゲームに夢中になっており、結局一通り晩飯が用意出来るまでの間は俺に変わって涼ニイと千紗姉が二人でずっとゲームをしていた。

「ほら、さっさとゲーム止める！ どうせ千紗姉も食ってくんだろ？ 三人分用意してるから」

「やった〜」

「おっ、出来たか！」

トントンと料理をテーブルに運んでいき、みんなで座って食卓を囲む。

そして「いただきます」と三人で言った後に、年上の二人がガツガツと料理にがつついた。

「美味っ！ こりやお母さんも顔負けだわ」

「だよな！ おばさんのこれもかなり美味しいけど、やっぱり蓮太のが一番だよ」

「この料理も最初は千紗姉から教わったんだけどな……」

遠い過去、お姉さんに任せなさいっ！ と言いながらも自信満々に俺に料理のいろはを教えて、その全てを失敗したという伝説を残した女だからな、千紗姉。

ちなみに当時からまだ俺の料理の方がマシだった。

「いや〜やっぱ私の指導が完璧だった証拠だね！」

「ああ、完璧だったな。完璧な反面教師だった」

「チツチツチ……あえて失敗を見せることで、成功の為の方法を学ばせる。わざとなん

だよ、わ！ ざー！ とー！」

「どうだか……」

とこんな感じで、俺にも多少は友人に近い人がいた。そのおかげで俺は何とか楽しいと思える生活を送っていたんだ。

ちなみに実はもう一人、涼ニイの大親友である人物がいる。少し小柄の男でもちろん涼ニイと同じ年、ぶっっちゃけ女の子と勘違いしてしまいそうな程に可愛らしさを持った人。

その人の紹介は……また次回だ。

序章

君の選択は運命を変えらる

世の中は腐ってる。

それが俺が今まで生きてきた感想だった。楽しいことなんて何も無い。嬉しいことなんて特にない。本当に、無駄で虚無な人生。

でも、心のどこかで変えたいと思っていた。いや……変わったらいいなと思っていた。けれど、思うだけじゃあ何の意味も持たない。本当に成功する人間ってのは行動することを躊躇わない。だから現実が動き、結果が残るのだ。

テレビによく出る有名な人達。彼らは人知れずに努力を続けてきたんだらう。苦しくて苦しくて、時には弱音を吐きながらも歯を食いしばって努力した。だからこそあの笑顔があるんだと思う。

それに比べて俺は違う、自分から行動することはなく、周りにある幸せを妬み、嫉妬し、周りを酷評することによって自分を保っているだけの雑種だ。

俺がさつき言ったこと、世の中は腐っている。これもその証だらう。

結局本心では変わる気などないのだ。嫌なことから目を背け続け、毎日を自堕落に生きる。そんな生活に飽き飽きしながらも、これが俺の人生なのだと思い込んでいた。

そんな時に出会ったゲーム。9-nine-

アダルトゲームなど興味もなかったが、本当にただ何となく買ってみた。理由は時間が潰せそうだったから。シリーズ化している大作なだけあって、想定プレイ時間は半端じゃなく長かった。50〜時間以上はかかったかな？ まあこれだけ時間をかけたのは多分俺だけかもしれないけど。

ゲームをプレイしていて感じたのは、キャラクターの意志の強さ。

何があっても諦めないという心。

俺にない、人としての固い意思に俺は心を奪われた。

もちろんギャン泣きもした。誰とは言わないが存在が消えてしまうその瞬間や、何度も何度も繰り返す絶望を経験する主人公。

それでも懸命に運命と戦う彼らを見ると……感情が昂つたりもする。

だが、結局それだけ、俺はいつも通りに動かず、何もせず、あの気持ちを忘れたかのように眠るだけ。

こんな人生つまらないと思っても、自害する勇氣もない。

いや、こんなことを勇氣とは言わないだろう。自害する覚悟もないのだ。

そんな中、俺は眠る。

泣くことで体力を消耗したのか、案外俺は夢の世界へと簡単に誘われるのであった

……

……

「ハアイ、こんにちは。それともこんばんはかしら」

……ん？

聞き覚えのある声、そして聞き覚えのある音楽。この声って……さっきまで俺がプレイしていたゲームの……？

そんな俺の疑問に対しての答え合わせをするかのように、その声は続ける。

「カケルの世界の眼が不完全なせいでしょうね……。あなたを見つけたの、本当に大変なのよ。無事に繋がってよかったわ」

やっぱりそうだ。間違いない。これは俺がさっきまでプレイしていたゲーム。「ゆきいろ」のプロローグだ。

「さつき——あなたにとつてはさつきじゃないかもしれないけれど——」

あの説明の様なものが延々と続く。

なんで俺は夢の中でまでゲームをプレイしなくちゃあならんのだ？　そこまで俺が

無意識のうちにこのゲームに惹かれていたのだろうか？

「ちよつと、あなた聞いているの？　さつきから随分と呆氣にとられてるような感情を感じるのだけだ」

……あれ？　こんなセリフあつたっけ？　似たようなセリフならあつたような気がするけど……なんか引つかかる言い方だよな。

「というか、まず私の声が聞こえているのかしら。ここまで長々と話しておいて、全て独り言だった……なんて事は勘弁して欲しいのだけれど。聞こえているのよね？　聞こえていたら返事をしてちょうだい」

いやなかったな。こんなセリフはなかった。だってゲームの設定上ではプレイヤーからの声は聞こえない設定だったはず。だからシルエツトで立ち絵が表示されていたわけだし。

「おかしいわね。臍気に戸惑いの感情を感じているのだけれど……、もう一度聞くわね。聞こえているのなら返事をしてちょうだい。ナイン。いえ………レンタ」

——ッ!?

なんで「俺の名前」を言ったんだ!?! しかも一度「ナイン」と言ったのにも関わらずにわざわざ取り消してまで、呼び直した!?!

「なっ!?!」なんでゲームのキャラクターが俺の名前を知ってるんだ!?!」

「げーむ?」何を言っているのかは知らないけれど、しっかりと聞こえているじゃない。ずっと独りで語りかけているのかと思っただわ」

「だってそうだろ!?! これは俺が買ったゲームの中の話で……」

「よくわからないけれど、私にそちらの世界の専門用語で話されても伝わらないわ。それはあなたもよく知っているでしょう?」

一気に冷や汗が流れる。

で、でもあれだ!?! これは俺の夢の中の話なんだから、全てがゲーム通りじゃないのは当たり前、きつと自分の都合よく話を改変しているんだろう。

よし、そう考えたらなんか少し気が楽になってきた。どうせ夢の中なら楽しむだけ楽しんでみるか!

「ああ……、悪かった。それで話の続きは?」

「だから、あなたにも協力して欲しいの。打倒イーリスの鍵になる9人目のアーティファクトユーザーであるあなたに」

随分と都合のいい展開ですね。あれかな? 9人目のプレイヤーに俺が成り代わっ

た夢のお話かな？

「オーバードロードを使って……って事か？」

「そう。カケルとの同一存在であるあなただからこそ、新しい枝を作り出すことが出来るはず。オーバードロードの使い方は……わかるわよね？」

「ああ。カーソルを動かして左クリックするだけだからな」

「……………。よくわからないけれど力を扱うことは出来るのね。だったらよろしくお願
いするわ。レンタ」

その瞬間に、俺の目の前に現れるすっかり見慣れた選択肢……………？

『9—nine—の世界に移動する』

意識をその選択肢に向けると……

視界が渦巻きのようにグルグルと歪み始めた。

ちよつと気持ち悪い。

「……」で、吉報を待っているわ」

.....

『輪廻転生のメビウスリング』ってアニメを知っているだろうか？ 俺の住む街、『白巳津川』がスポンサーとなり、地域振興を目的として制作されたアニメだ。

『白巳津川』に残る伝承をモチーフにした超絶難解なストーリーは一部のアニメファンに強烈な印象を残し、結局何がしたかったのかよくわからないと、高く評価されたヤツだ。

ま、事実だけを言えば完全に地域振興の失敗例として日本の誇るアニメ史に名を刻むことになったのだが……お偉いさんは何を思ったのか、アニメ放送から2年が経過し、放送に合わせて無理やり行われた春のメビウスフェスは地元住民の圧倒的な不支持を無視して今年も開催されるのであった。

もつとも、結局は今年のお祭り騒ぎどころではなくなってしまったのだが。

その理由はついさつき起こった地震が原因だった。流石に俺も若干の焦りを覚えていたが、パニックになったと自覚した時にはその地震は呆気なく収まったいたのであつ

た。

そんな中間こえてくる透き通る声。

「皆さん落ち着いて、スタツフの誘導に従ってくださいー！」

アニメの中に出てくるキャラクターの衣装を身にまとった、なかなかきわどい見た目のコスプレイヤーが数少ないフェスの参加者に向かって声を張り上げている。

彼女の名は「九條都」白泉学園内の随一の美人さん。そんなでもってコロナグループの社長令嬢で大金持ち。そして超絶お淑やかっぽい性格。ゲーム以外でこんな人がリアルに存在するのかと目を疑うほどの完璧超人だ。

何故彼女の事を知っているのかと言うと、それは俺も同じクラスと同級生と言うやつだからだ。

ここで自己紹介を1つ。俺は白泉学園に通うふつつーの学生。名は「竹内蓮太」海外旅行に出かけたつきり全く帰ってこない両親を持つ、なかなか見ない生活を送っている何の変哲もない人。

定期的に送られてくる無駄に大量の金を何とか節約しながら過ごしている苦労人さ。

適当なアパートに住む中で特におかしいと思うことは、両親以外に血縁者がいないのにも関わらず、4年前には既に両親は海外へと出かけていつていること。普通学生を1人にして置いていきますか？ ある意味虐待にでもなるんじゃないの？

なんて思いもするが、おかげで自由な時間が増えまくっているので深くは考えないことにした。

そんな俺が何故春のメビウスフェスに来ているのかと言うと……父親が大が着くほどのファンだからだ。地元のアニメだからとか言ってみても見始めたらしく、1度見始めたら止まらないと、一時期大量のメッセージが送られてきた時もあった。

話を合わせる為に俺も一通り見てみることにした……正直何が面白いのかが俺にはわからなかった。あれならまだ「何が嫌いかより、何が好きかで自分を語れよ」で有名のあの漫画の方が別の意味で面白いと感じたものだ。

そして一通りの限定グッズを買い漁り、特に用事もないので俺は家に帰ることにした。

ちなみに俺がああのクラスメイトのコスプレイヤーに話しかけなかったのは、極度の人見知りだから。

恥ずかしいし、面倒だし、どうでもいいから。

俺は昔からそう。いつつも一人で生きてきて、特に友達なんて作らないままいつの間にかこの歳まで過ごしてしまった。しかも不思議なことにどれだけの美人を目にしても、何故か一目惚れもした経験がない。それほどまでに他者に興味が無いのだ。

そんな俺だからこそ、きつとあのコスプレイヤーに話しかけたとしても俺の事なんて

名前も知らないだろう。そもそもとして一部を除いてクラスの人間とも話していないし、まあ興味無いんだけど。

なんて思いながらも家までの帰り道をフラフラと歩いていると、偶然近くで男の女が並んで歩いているのが目に入る。

カッパルでアニメフェスに来るなんてなかなか面白い奴らもいるもんだ。なんて思いながらも横を素通りした。

「くくくんなちつさいのに、八百円もした。味もふつくだし。コンビニのスイーツの方が美味しい。楽しみにしてた自分を呪ったね」

「あれ、グッツもついていたろ」

……なるほどな、それは言えてるかも。

すれ違いざまに聞こえてきた会話に共感しながらも、俺は構わずに前へと足を動かす。

「……ん？ あれって」

「どしたのにいやん」

「いや、なんでもない。多分クラスメイトかも？ って思っただけ」

……へえーそーなのかー

多分あんな反応を見せたってことはクラスメイトなんだろうけど……悪いが一切の

興味が無い。

俺は独りで人生を謳歌しますよおっつとお……

4月17日

不思議なアクセサリー

傍から見るとめっちゃ仲のいいカップルを無視して通り過ぎ、俺は真っ直ぐに家に帰る。

そしてそこそこの量のアニメコラボグッズを一応しまつて、奥にあるベッドに勢いよくフルダイブ。

ぼふんつとなかなかのクッション性のある生地にも今日も惚れ惚れしながら、歩き疲れた自分を癒す。今の時間は夕刻ではあるが……まだ特に腹は減っていない。後で適当に外食で済ませよう。

とも一瞬思ったりしたのだが、俺のようなタイプは外に出ることも嫌う。もしかしたら家の中にあるもので何とかならないかと思いついて、冷蔵庫の中を一応確認してみると……うん。ろくなものがねえ。

6 パックもあるオレンジジュースに、唐突に親から送られてきた冷凍みかん。みかんゼリーにみかんのジャム。

なんでこんなにみかん系があるんだよ、アホかよ。俺別にみかんが好物じゃねえよ。とまあこんな感じで自分じゃどうしようもなさそうだ。ここは大人しく外食で済ませよう。

そうしていつもの流れでポケットの中に入れてある小銭袋を取り出そうとすると……別の何かが入っている。

「あれ……？ ポケットに小銭入れ以外の物を入れたっけ？」

ボソツと独り言を呟きながら、その違和感のある物を取り出してみると……見たことの無いピアスが入っていた。

シルバーアクセ……になるのだろうか？ 銀色の輪っかでシンプルなデザインに、側面に小さく俺の好きな色の紺色の宝石のような物があり、俺好みの見た目ではあった。……が。

こんなものを買った覚えはない。もちろん拾った覚えもない。そもそも俺のものであるでもない。

ただ何故か……「能力の使い方」を理解することが出来た。

いや、そもそも能力の使い方でどうという事だよ。てか能力ってなんだよ、あほらし。

なんて投げやりになることは出来ずに、色々と試してみる。

だって不思議な能力だぞ！ 俺みたいな陰な者にはこれ以上の心がゆさぶれる言葉があるものか！

ええ……つとお、さつき覚えたやり方で、力を……こうやって……

イメージした通りに力を扱ってみると、偶然見ていた右手の手のひらに紋章のようなものが青く映し出された。

おおおおおっ!? なんかつけえ!?!?

そしてそして〜！ 能力の方は……っ！

「はあっ!!」

なんて1人で思いっきり叫んでみるけれど……期待も虚しく俺の声が部屋の中に少しだけ響く程度で、特におかしな事は起こらない。

……なんだか1人でカツコつけて「はあっ!!」なんて言ってたから物凄く恥ずかしいんですけど。こんな誰かに見られたりしたら人生終わるんですけど。どうしたらいいんですかこの状況。

「はあ……、アホらし」

やっぱり厨二病をこじらせてただけ……か。なんかこんな事してたら腹も減ってきたし、外に出よーつと。

考えるのも面倒になり、視界に写った玄関の方へと向かおうとしたのだが……1歩足を踏み出すと、ゴンツと目の前の何かに頭をぶつけた。

「痛て」

明らかでない打ちの頭突きに動揺し、改めて前を見てみると目の前に俺が頭に手を当てて立っている。

「あ、すんません。俺の不注意でぶつかってしまつて——つて俺ッ!」

間違いない! 目の前に向かい合うように立っているのは間違いなく俺だ! しかも俺と同じように頭に手を当ててアホみたいな顔してる!

「つて誰がアホだよ!」

軽く身を乗り出して自分自身にツッコミを入れると、目の前にいる俺も同じ動きをしていた。

「……………」

試しに俺は右手を上にあげてみる。すると目の前の俺も俺から見て右手を上にあげる。そして上げた右手を下ろすと……目の前の俺も上げていた手を下ろした。

そのまま俺は両手を上げる。すると目の前の俺ももちろん両手を上げる。腰を若干

曲げてくねくねと左右にケツを揺らすと、目の前の俺も同じ動きをし始めた。

「ハイイハイイハイイハイ、トントントントン……………」

うん。間違いない。これは鏡だ。実際、俺の後ろに玄関があるのに目の前にも玄関が見える。そして俺と同じ動きをする俺。答えはこれだろう。

改めて俺の右手の手のひらを見てみると……まだ青色の紋章は光っている。おそらくこれは俺の能力で作り出された鏡。

なるほど！ 突然目覚めた俺の能力は鏡を自在に出現させることが出来る力ってか！ こりやすげえぞ！ これがあれば世界の二つや三つ救えたり……

「するかボケエエエエエツツツツ!!」

と全力で床に向かってピアスをぶん投げる。それと同時に俺の右手の紋章は輝きを失い、目の前の鏡も虚空へと消え去った。

「アニメみたいに力が目覚めたかと思えばなんだよ！ 鏡を1枚作る能力で！ 弱いとかそんな次元の話じゃねえだろ！ なんだ!? 例えばみんなが大魔王と戦ったりしている中で俺だけ鏡見て身だしなみを整えたりすんのかあ!?! そんなヒーローいてたまるかツ!!」

つかそもそもこんな物での変な能力がある時点でおかしいんだけどさ。そんな事どうでもいいよね！ こんなん拗ねるわ！ まだ体がゴムになったりとか、小宇宙を燃や

したりとか、惑星ヘシートで超ヤサイ人になったりしたりした方が断然いいつーの！

……はあ。もういい。飯食いにニンボール行こ。

若干疲れた心を癒すためにも今日もあのパフェを食わなきや。

適当に眼鏡をかけて……ちよつと長い髪を片側に寄せて片目を隠して……マスクをして……よし、こんなもんだろ。

さっきの出来事を忘れるかのように、俺はあのピアスを放つたらかしたまま家を出て、行きつけの店のニンボールへと向かっていった。

……

……

……

喫茶ニンボール。

一応喫茶店なのだが、何故か飲食物のメニューが豊富で量が多いのにも関わらず値段も安い。俺達のような学生には最強の憩いの場である。

しかも平日ならともかく、休日のこの時間は比較的にも人も少なくて究極の時間だ。

レトロな雰囲気のある扉を開けて中に入ると――

「いらっしゃいませ〜」

と奥から店員の声が聞こえてきて、すぐさま席の案内にやってくる。

好きな席へと案内されたので、個人的に一番のお気に入りのお気に入りの窓際の角に座り、テーブルに置かれているメニューを眺める。

「お水です。お決まりにならねましたらお呼びください」

とグラスを置いて店員が立ち去っていく。

メニューの一覧を見て、今日はどれを食べるかを決めると、店員を呼び決めたものを注文した。それはハンバーグとチョコのパフェ。

ちなみに俺はこのパフェが大好物。いや、ほかの店とは違って頭おかしいくらいの安すぎる値段にあの美味さと量。何故この店が経営出来ているのかを疑うレベルで値段と品物の質が噛み合っていない。だからこそ毎回頼んではいるのだが。

店員はかしこまりましたと答えた後に、店の奥へと向かっていく。

ちなみにパフェを頼んだ時に、ふふつと少し笑われたから多分、またこいつパフェ頼んでるわ、アホやろって思われてるんだろうな。

ま、興味はないんだけど。

そんなことを思いながらも、注文の品がやってくるまでの間に、スマホゲームのイベントをこなして行く。その途中でカランつと扉の音が空いて、扉に着いた鈴が、別の客が来たことを店に伝えるように響いていた。

そしてその客を案内したのだろう。俺の隣のテーブルに座らせると、その店員は何や

ら少し不安そうにしながら、何かを訪ねていた。

「ありがとう。これ、見覚えはないかな？」

不意に聞こえてきたその言葉に釣られて、一瞬だけ視線をその方向に向けると、その手の先には俺がさつき見たような銀色のアクセサリーが。

あれは……髪留め？ 髪飾り？

とにかく思ったことは、俺が家に投げ捨てたあのピアスによく似た、シルバーアクセのようなものだった。

珍しい偶然もあるもんだと、思ったりもするが……別にどうでもいい。適当に商品が来るまで時間を潰したあと、食事をゆっくりと楽しんで、喫茶店での時間を俺の中では優雅にすごした。

そして食事後の会計の時、金を渡そうとポケットから財布を取り出した時に、同時に何かが床に落ちる音が聞こえてきた。

……あれ？ 俺って何かポケットに物を入れてたっけ？

となんだか似たような経験をしたなと思っていたら、その異常な事態に気がつく。

そう、落ちていたのはあの家に投げ捨てたはずの『銀色のピアス』。ここにあるのがおかしいもの。ここにあるはずがないもの。

一応それを拾い上げるが……やはり間違いない。俺が確実に家で投げ捨てたものだ。

「……あつ」

拾い上げた銀色のピアスを見た店員が、驚くようにしてまじまじと拾ったピアスを見る。

「そんなに気になります?」

「え、あ、いえ……私も似たようなものを持ってて」

「そうなんすね」

特に相手の返事も待たずに適当な返事をした後、表示された金額を払って足早に店を出ていった。

あの眼鏡を掛けた店員さんは、何かを伝えたそうにあのピアスを見ていたが……まあどうでもいい。別に俺は困らねえし。

なんであんなものがあった俺のポケットに入っているのかはわかんないけど……多分無意識のうちに拾ったりしたんだろう。

そう思うことにして俺は一日を終わらせるために家に戻って行った。

目的

あの不思議なシルバーアクセの様な何か。あのアクセサリーは不思議な力を持っている。理屈や原理は分からないが、それは揺るぎない真実だった。

もつとも、いつの間にか手元にあったものだが……いや、いつまでも手元にある物なのかも知れない。その証拠に「確かに部屋に投げ捨てたはずなのに戻ってきた」

あれは俺が無意識なんかで拾ったりしたものなんかじゃない。思えば最初からそうだ。俺はいつの間にかあのアクセサリーを持っている。

……もし、あの店員も形が違うだけの同じ性質の物だとしたら。

間違いなく俺の鏡を出現させる能力なんかじゃなくて、もつとカツコイイ力なんだろうなあ……。いいなあ。

なんて樂觀的に考えてはいるが、問題なのはそこじゃない。もしこの力が限られた物ではなくて、誰しもが手に入るような物だった場合が危ない。どんな能力があるかは知らないし、そもそもとして別のアクセサリーがあった所で、みんな鏡を出す能力かもしれないけど、この能力が誰しも持てた場合は間違いなく世の中は混乱する。

1度冷静に考えてみると、「鏡」の能力はおそらく鏡を自在に扱うのではなくて、「鏡の性質」を自在に扱う能力なのではないか?　とも思う。

もしその場合、この能力を悪用しようと思えばいくらでも悪用できる。例えば……

「……………よし。出てきたな……………鏡」

パツと思いついた事を試すために、能力を使って再びあの「鏡」を出現させる。そしてティッシュを数枚取りだして、それをクシヤクシヤに丸めて潰し、即興の投げ物を作る。それを鏡に向かって投げってみると……

投げられたティッシュの丸い塊は目の前の鏡に触れたその瞬間に、鏡に映された鏡像のように俺の元へと勢いよく返ってきた。

「やっぱり……………。鏡の性質の方だったか」

おかしいと思ったんだ。さっき俺が初めて鏡を出現させて鏡にぶつかった時、俺は頭突きされたのかと勘違いをしたんだ。鏡のような壁にぶつかったと思わないで、「攻撃された」と思ってしまったんだ。

この能力は鏡の性質、つまり「モノを反射する力」。光が反射されるように、この鏡で受けたモノは綺麗に反射する。限度があるのかとかは分からないけど。

ちなみに、形は想像するだけで簡単にくねくねと動かすことが出来た。つまり角度も変えることができるし、乱反射も可能。もちろんさつき実演したように正反射も。

この力すげえな。鏡の耐久値がどこまであるかは知らないけど、こと守りつていう一点のみを考えると最強の防御性能になるんじゃないかね？ 自分からは全く攻撃できないけど。

まあ、深く考えても仕方ない。ある程度の実験も済んだし、何故かかなり疲れも溜まつてきたし、さつさと寝てから明日にするか。

そう思つて用済みになった鏡を消して、歯を磨こうと洗面台に向かつて準備をしている時、あることに気がついた。

「……なんでこれは消えてないんだ？」

たまたま見えた俺の手のひら。そこには未だに青い光を放つ紋章が姿を現していた。これは多分、能力を使つた時に現れるヤツ。しかし鏡が消えた今、これが浮き上がっているのはおかしい。

もしかしたら俺の知らない能力がまだあるのか？ それに気づかずに能力を使い続けているのだろうか？

そんな考え事をしてしていると、気がつけば右手の紋章は消え去つていた。俺が考え事に完全に気を取られた一瞬で、その紋章は最初から存在しなかったかのように証拠を残さずに無くなった。

もしかしたら、ただ消えるのに時間差が生じているだけかもしれないな。

「……………」

シヤコシヤコと歯を磨きながらブーツと目の前の洗面台の上に立てかけている鏡を見る。

もしこんな能力が世の中になればらまかれていた場合、間違はなく問題が起こる。その可能性を考えると、どうにも例えようのない不安に飲み込まれそうになってしまう。

このアクセサリーを手にして、既に数時間が経過している。もし大量に出回っているのならネットか何かで騒ぎが起こっていてもおかしくは無いはず。と、すると少なくとも、2，3人に1人が持っているレベルでの所持率ではない。

あのナインボールの店員が、このアクセサリーを持っていると仮定して、こんな身近に1人所持者がいることになる。となると、そんなに世界規模で出現したりはしていないのだろうか？ それとも偶然近くに所持者がいただけだろうか？

もし、他にも色々な種類のアクセサリーがあつたとして……それが近くに転がっているのなら、もつと欲しいかもな。

いや、かもじゃない。欲しい。

集めてみるか、あの銀色のアクセサリー。

ま、その為にはまずは可能性が一番高いあのナインボールの店員に揺さぶりながら聞いてみるか。能力のことを言わないでも、例えば捨ててもいつの間にか手元にあるかど

うか。最初に発見した時は気がついた時に手元にあったか。これだけを聞くことでもできれば、判断材料としては問題ないだろう。

つつても、仮に俺がそれを盗んだとしても持ち主の所に戻るだけだろうが……どうやって手に入れるかは後で考えるとして、まずはこの「鏡の能力」以外の力があるのかどうかを知りたい。

キーになるのはやっぱりあの店員。かなり苦手ではあるが………明日にでもナイフポールに行つてチャンスがあれば聞いてみよう。それがもし「当たり」なら大歓迎だ。さつきは悪用がどうのこうのなんて考えちゃあいたが、単純に色んな能力が使えた方が絶対楽しいと思うだけだ。

結果的にそれが事件を起こさないようになる事に繋がるし、俺が間違つた方向に能力を使わなければ問題ないだろ。

今のところは。な。

4月18日

他人に触れる。しかし未だ……

さて……つと。

まずは起床。アクセサリーを調べて、かき集めるといふ目的を定めてから、これ以上ないほどに俺は心を躍らせていた。

何が楽しみって、どんな能力と出会えるのだろうかと考えるだけで、もう笑みがこぼれそうだと。……ま、まず近くにあるのだろうか、そもそも存在するのも知らないけど。

その為の調査だ。今日の放課後にニンボールについて、あの眼鏡の店員さんに声をかけてみる。

んだけど……なんて声をかけたらいいんだ？　そもそもとして俺はコミュ障だからなあ……上手く話せるかどうか……。でも、正直ウジウジしても始まらないしな。

今までは本気で人に興味がなかったけど、この際そんなことすらもどうでもいい。もしかしたら炎の力を持つアクセサリーとかもあるかもしれないし……うひよおー！

これからが楽しみだあ！

個人的には水系があればいいなーなんて思ってるけど、まあまあ、夢を見てても外れた時が辛くなるから、まずは落ち着かないとな。

なんて自分に言い聞かせつつも、俺はそのウキウキを上手く隠すことが出来ずにいるのだった。

………

……

……

そしてたどり着いた学園。教室に入り、いつものように自分の席に座る。中の人たちは各々の友達同士で楽しそうに話しており騒がしかった。

ちなみに俺の周りには一緒に話す人などいない。え？ 友達がいなくて？ ……

え？ もしかして喧嘩売ってます？ いやいやいやいや、いいじゃないですか、友達いなくても。てかいなくて当然なんですよ、俺から距離を離してるんだから。そもそも、人間なんて近くにいるだけで鬱陶しいんだよ？ 友達なんてそんなカスみたいなものなくたってどうでも……

「竹内くん」

「はいっ!? なんでございましょう!？」

なんだよ! ビックリするじゃんか! 人が心の声で語りかけてるんだからいきなり話しかけんな……って。

「九條さん?」

まさかの人物が朝から話しかけてきた。普段なら挨拶はするかもだけど、特別な用事がない限りは俺からはもちろん相手からも話しかけられない。はず……

「おはよう。今、ちよつといいかな?」

「え、あ、はい。別に構わないけど……何か用?」

十中八九、要件があつてわざわざ席が離れている俺の所へ来たんだろうが……まあ、この辺はな。

「うん。あの……これ、どこかで見た事とかないかな?」

そう言つて九條さんが差し出してきたのは、銀色に染まった髪飾りのようなアクセサリ。そう、これって……

「……………似たような物なら」

「やっぱり。よかつた、竹内くんも持つてるんだね」

間違いない。これはあの時にニンボールで見つけたあの眼鏡を掛けた店員が持つ

てたやつだ。それをなんで九條さんが？

いや、そんなことは今はどうでもいい。問題は今の状況の処理だ。あの店員から奪い取った物？ それとも運が悪いことに偶然落として、それを九條さんが拾ったとか？

どちらにしても能力の話をするのは絶対まずい。だったら何も知らないフリをして話した方が……？

というかまずなんで俺がアクセサリーを持つてることを知ったんだ？ 確信があつて俺に話しかけてきたつてことだろ？

と、とにかく……

「ああ。持つてる。俺のはピアスだけだよ」

警戒はしているが、それを悟られないようにはしなくちやいけない。内心はかなり焦っているけど、ポーカーフェイスでやり過ぎすしか……！

どんな経緯でこれを手に入れたのかはわからないが……それは俺のだ！ 絶対にあの店員から奪い取った技を引きずり出してやる……！

「ほら、似てるだろ？ ま、俺のつて言つても俺が拾ったわけでもないんだけどな」

「私もなの。今日も家に置いてきたはずなのに気付いたらポケットの中に……」

……つてことは、これはあの店員の物じゃなくて、九條さんの物？

「九條さんもか。俺もそうなんだ、昨日なんか家に置いたはずなのにいつの間にかポ

ケットに入っけてさ」

「やっぱりそうなんだね。あの時、竹内くん驚いてたから」

……え？

「え？ ん？ なんてあたかも知ってる風なんだ？」

「なんでって、私だよ？ 竹内くんの会計をしたの」

「九條さんが!？」

……あつ！ だから同じアクセサリーなのか!？」

「この一瞬の反応で理解出来た。たしかによく見れば似てる気がする！」

「ふふつ、これで二人目だよ」

「何が」

「私に気づかなかったでしょ？」

「……………悪い。謝る」

なるほどなあ…………。つー事は別に他人のアクセサリーを奪えたりする方法を知ってるってわけじゃないのか、なんだ、少し話してみても損した。

だが、これはある意味チャンスかも？ この髪飾りが俺のピアスと似たような物だったとして、何か能力があるのなら、もしかしたら…………もしかするかもしれない。

「それで？ そのアクセサリーを俺に見せて何の用なんだ？」

「もしかしたら、呪い……とかなのかな？　って気になって、先生にお祓いをしてもらおうかと思っててね。竹内くんも一緒にどうかな？　って」

「呪い？　どういう事？」

「ほら、成瀬先生って巫女さんだからよくお祓いとかしてるでしょ？　離れた場所に置いてもいつの間にか戻ってくる。なんて物……ちよつと怖いから」

確かに不気味っちゃあ不気味だが……それで能力が扱えるようになるのなら、俺は全く気にならないんだけどな。むしろ俺から絶対離れないと考えるとそれも利点の一つだと思う。

だが……ここは話を合わせてみるのがいいのかも。彼女の気持ちに同調してウマが合うフリでもすれば……さりげなく能力の事をさぐれるかもしれないし。

「不可解な出来事ではあるよな。怖いって気持ちも……わからなくもない。確かに、相談くらいはしてみるべきかも」

「あの地震の時に神社にある神器も壊れちゃったみたいだし……専門の人に何か聞いてみると解決しないかなって思ってた」

「ありっちゃありじゃないか？　現状個人ではどうしようもないんだ。知識がある人に頼らざるを得ないね」

「だから、放課後に一緒に行かない？　私一人だと……その……」

「最悪呆れられる可能性も……ないとは言いきれないし、わかった。俺も同行する。二人で頼んでみよう」

「うん。ありがとう。それじゃあHRが始まるから……またね」

律儀にお礼を言ったあと、九條さんは軽く手を振りながら自分席へと戻って行った。

あの感じだと……まあ悪くない雰囲気じゃないだろうか。おそらく俺の本心には気がついたりなんかはしてないだろう。別にビビったりもしないし、むしろお祓いなんかじゃなくて、じゃんじゃんあのアクセサリーが欲しいだなんて。

それに、気になることが一つ。多分……能力の件は隠しているのかな？ それとも気がついていない？ 離れた場所に置いても、いつの間にか手の届く範囲に戻っている事は簡単に打ち明けたが、肝心な能力についての事には一切触れなかった。

俺が警戒すると思うてるんだらうか？ 能力なんて非現実的なことを口走ると変な目で見られる。なんて思ったりしてるから隠してる？ それとも純粹に知らない？

ここがどうしてもなあ……もしかしたら、本当にただ似てるだけで能力なんて無いかもしれない。

……はあ。俺が一人で考えても仕方がない。ここはしばらく様子を見るか。どうせ仮に今日、九條さんが持っているあの髪飾りが不思議なアクセサリーだったとしても、今すぐに奪う訳にはない。そもそも奪えるかも知らない。

焦ってミスなんかしたらたまったもんじゃないからな。ここは念入りに準備するべきだろう。

今は息を潜める時だ。……………最後に笑う為に。

知らぬ者同士の出会い

にしても呪いねえ……。そういえば確かにそう感じても可笑しくはなさそう……。かな？

そもそもとしてあのアニメ「輪廻転生のメビウスリング」に出てくるアニメに酷使していることが多い。紋章も、アクセサリーも、異常なほど近しいものを感じる。

元々はこの地域の伝承がモデルだし、なにか繋がりがあるのかも……。？　なんて考えてしまってもとても笑えない。

ええつと……。確か紋章は『ステイグマ』アクセサリーは『アーティファクト』だったか？　つつても、俺が九條さんにアーティファクトは？　なんて聞いたしたらバカにされるだろうなあ。ただの痛いヤツだし。

まあ今は別に気にしなくてもいいか。まずは目先の事を考えよう。

「それじゃあ行ってみようか。九條さん」

放課後になり、生徒が一斉に帰りだす頃、掃除当番以外の人がいなくなったタイミン
グで成瀬先生の所へと九條さんと2人で歩いていった。

いつものようにどこか気だるそうな先生に声をかけ、おそらく職員室へと向かっていただろう足を止める。

「先生」

「ん？ なに〜？」

……思えばなんて言えばいいんだ？ 素直に呪いを解いてくれって言ってもなんのこつちやさっぱりだろうし。

つか、そもそも俺は同じ性質のアクセサリー……基『アーティファクト』を持っていたから簡単に信じる事が出来たが、その経験がない先生は俺達の話を利用出来ないんじゃないか？

なんて考え込んでしまっていると、隣にいた九條さんが意外と淡々と説明をし始めた。

「このアクセサリーなんですけど……もしかしたら呪われているのかも？ なんて思っていますね。もしそうだとしたら、先生にお祓いをして欲しいんです」

「呪い？」

……こう言つちや悪いかもしれないけど、今すつげえ先生アホな顔してる。

「俺もなんですよ。持っているアクセサリーがどんなに自分から離しても手元に戻ってくるんです」

「え？ なに、どしたの。頭でも打った？」

「ひでえなこの人」

「そ、そうですよね。そんな反応になりますよね……」

九條さんもある程度こうなることは予想してたんだろう。顔を少し赤らめながらも少しアタフタしていた。

「でも九條さんがそういうんならそうなんでしょうね。で、それって誰かに見せたりしたの？」

「いや、俺は先生と九條さん以外は誰にも」

「あ、私は新海くん……」

はい誰？

「あー、じゃあ呼んでみよーか」

そう言って先生は、廊下で箒を持って掃除をしている男子生徒を手招きして呼ぶ。それに気がついた男子生徒は作業を止めて、のしのしと俺達の近くに歩いてよってくる。

「な、なんですか？」

「新海くん、なにか変わったことはあった？」

「はい？」

唐突に呼ばれてやってきた新海君は、呼ばれるや否や訳の分からん質問にやや混乱し

ていた。

そりゃあそうだろうよ。内容を特に話さずに、「変わった事は？」なんて聞かれても、俺でも何が？ って答えるわ。

ちなみに九條さんは大慌ての様子で顔を見ないようにしている。きつと恥ずかしいんだろう。

「最近ちよつと不自然なことが起こっててさ。もしかしたら新海君の周りでも怪奇現象でも起こってないかって思って」

「怪奇現象って言われてもな……って言うか竹内さ、フェスの時会場にいた？」

「ん？ いたけど……なんで？」

「気が付かなかったのか？ 俺の隣を素通りして行ったんだ。妹と話しながら、もしかしたらクラスメイトかもって思ってさ」

「そうか、だったら当たりだな。言われてみればカツプルっぽい2人を追い越した記憶はある。あれだろ？ 八百円を損したくみたいな話をしてた」

「そうそう、それが俺たち」

カツプルかと思ってたが、あれ兄妹だったのか。まあそれなら確かにあの距離感は納得かも？ ぶっちゃけどうでもいいっちゃどうでもいいが。

「とにかく怪奇現象だ。俺と九條さんが持つてるこのアクセサリーなんだけど、家に置

いててもいつの間にか手元に戻ってきてき。まるで瞬間移動みたいに」

「瞬間移動？　なんだよそれ」

だよね、そんな反応になるよね。わかる。わかるよ君。

「本当なのか？　九條」

まだ恥ずかしさがあるのか、言葉は発さずに九條はこくりと頷いて答える。

「それでお祓いして欲しいって言われて」

「それをなんで俺に話すんです？」

「だって呪われてるなら新海くんもかなうって」

「2人がそう言ったんですか？」

と新海君が質問した時、九條さんは自分が持っていたあの髪飾りのようなアクセサリーを差し出すように見せる。

……俺は、止めておこう。

「これが、手元に戻ってくるって？」

「うん」

「ごめん、話が見えないんだけど……」

……あれだな。やっぱり、実際にそれを経験しているかしていないかで理解の時間に差ができるんだな。それはそれでしょうがない。

「要するに、机とか引き出しの中に入れてたりしても、気がついた時にはポケットとか手の届く範囲に戻ってくるんだ」

「勝手に移動してくる……って事？」

その質問に対して、俺と九條さんは再び首を縦に振る。

すると新海君はいかにも信じられないと言わんばかりの表情で、「ええ……」つと声を零した。

そらそやろなあ。

「こっわ。心霊現象じゃん」

「だよね〜、怖いよね〜」

「自分でも馬鹿馬鹿しいと思うんですけど……でも、怖くなってしまって」

「それでお祓い」

確かに馬鹿馬鹿しい……な。俺でもそう思うよ。何も疑いを持たなかった自分にも、この現象にも。

「昨日神器が壊れてしまったと聞いて、そのせいなのかな？　って」

ああ……そういえばなんかフェスの会場がそんな話題でザワついてたな。一部のコアなファンが本気で残念そうにしてたような気がする。

「あー、それで……やっと思いがわかった」

「まあ、何となく新海くんを呼んだだけなんだけどね」

「あ、そうなんすね。てつきり俺が壊した……なんて言い出されたのかと思いましたよ」話を聞く限りだと、新海兄妹があこのフェス会場にいたのは、単に楽しみに行っていた訳ではなく、バイトとして……運営側として行っていたらしい。（妹は普通に遊びに来ていた）

そしてタイミング悪く例の地震が発生。たまたま近くにいた新海兄妹がその割れた神器を回収していて……先生は新海くんが壊した〜つてからかってる。

「同じようなものでしょ。それと、お祓いはもうちよつと様子を見てからでもいいんじゃないかなあ？」

「何ですか?」

「だって、あんなのした所で多分何も変わらないよ? インチキだし」

うせやん。まさか本物の巫女様から本職を全否定する言葉を直接聞くことになるとは思わなかったわ。どんだけ適当なんだこの人。

「マジかよ」

「え……」

「……いいんですか、先生。それ言っちゃっていいんですか……?」

みんなもどうやら俺と似たような感じだった。

「だって心霊現象もだいたい思い込みでしょ？ お祓いなんて、もう大丈夫って気分になつてもらうためのものではないんだから」

アンタもう聖職者辞めちまえ。

「あれだよ、あれ。ええ……つと……、スパシーバ効果」

んだよそれ。プラシーボ効果だろ。

「……………プラシーボ効果？」

なんて九條さんのツツコミが鋭く決まった。

……………

……………

……………

結局、相談の結果、マジで何も収穫はありませんでした。改めて担任の先生の適当さが深く理解出来た程度で、有力な情報どころか、進展すらありませんでしたー。

巫女様は万が一、このアクセサリーが本物だとしても、それが悪いものだとは決めつける理由にはならないと言われて、渋々と納得するしかなかった。

でも実際九條さんからしたらそうなのだ。このアクセサリーが手元にある事で、何か

自分にとって悪いことが起きた訳でもない。少し不気味なだけで今の所は何の支障もないのだ。

ないならほつといてもいいんじゃない？ つと適當すぎる有難いお言葉を頂いて、この話は終了した。

……結局無駄な時間だったな。

力も鏡。心も鏡。醜く見えるは真なる姿。

先生達の相談事も、無事に終了し何の成果も得られない結果になったあと、俺はそそくさと家に帰ることにした。

先生は、「男の子なんだから2人で九條さんを送ってやりなよ〜」なんて言ってたが、丁重にお断りさせていただいた。そりゃあそうだろう？　なんで俺がそんな面倒な事をしなくちゃならんのだ。わざわざ送り届ける義理はない。

一瞬少しだけでも仲良くなった方がいいか？　なんて思いもしたが……下手に距離を縮めすぎると、慣れない出来事に思わぬ失敗を重ねそうで止めることにした。そもそもとして、不思議なアクセサリーを持つているもの同士……なんてある意味特別な関係になつていゝんだ。これを話題にすれば何かあつた時にとりあえずは怪しまれることなく話すことが出来るだろう。

あくまで俺の目的は、能力を持つアクセサリーの収集。そんなに急がなくてもまだまだ丈夫だ。

それに、俺や九條さんがこのアクセサリーを手にして一日が経過した。例えば俺たち

2人以外の人間が仮にアクセサリーを手に入れていたとしたら……そろそろ好奇心に耐えられなくなる奴も出てきてもおかしくない。

能力こそわからないが、アクセサリーは複数あるという仮説はそのままでも良さそう
だ。細かな差はあれど、髪飾りのアクセサリーとピアスのアクセサリーは似た物。つま
り………おそらく俺の目的の物だ。

だからこそ息を潜める。出来るだけの最低限の準備は済ませた。だから後はこれか
らの事を考えよう。

まず第一にあのアクセサリーの……そうだな、分かりやすいし「呪い」と呼ぼう。

アクセサリーの呪いによって決して持ち主から離れることの無いあのアクセサリ
ーだが、それをどうにかすることは出来ないのか？

この課題をどうにかしないと、俺はどんな目的の物を見つけることが出来ても、それ
を自分のものにする事が出来なくなる。

何か条件があるのなら………それを見つけることが出来たら一番いいが、そんなものが
簡単に見つかるようなら、九條さんは先生にお祓いの依頼なんてしないだろう。

これは俺だけじゃなく、九條さん以外に存在していると仮定している人達も困ってい
るはずなんだ。俺みたいなバカは別として、普通はまず不審に思うだろう。どれだけ離
れた場所にいっても、いつの間にか手元に戻るのだから。

ある種呪いの類ならば……そりゃ解呪する事が手っ取り早いが……適当とはいえ、本職の巫女様がああ言つてたんだ。その路線は今は一且無視していいだろう。

だとすると何かの条件を達成する。これも正直どうかと思う。

普通に生活していた俺が、何か決定的な瞬間を見逃した……なんてことはない気がするんだ。本当にいつも通りに何気なく生きていたら急に手元にあつたんだから……記憶力が良い方ではないこともあつて、これも難しい。

多分、1番手っ取り早い方法は……

所持者を殺すこと。

あのアクセサリーは、間違ひなく「元の場所」ではなく、「持ち主の場所」へと帰ってきている。その証拠に、俺と九條さんが経験した怪奇現象は全て自分のポケットの中等の手の届く範囲に「必ず」戻ってきていた。

だとすると、その帰るべき持ち主がいなくなつてしまつたら？

きつと、あのアクセサリーは帰るべき場所を失つて、新たな「家」を探すんじゃない

だろうか？ もしくはそのまま帰ることなく放置……なんてことも有り得る。

だからこそ、1番手つ取り早いのは殺人。

だかこれは色々と面倒だ。動かせる手駒が無いし、何よりも証拠がひとつでも残ると終わり。そんなリスキーな事をしなくても楽に手に入る方法がある。

それが、横取り。

今までの仮定が全て正しいとして、誰かがアクセサリーを私利私欲のために使ったとする。もちろん、それを許すことの出来ない奴も出てくることになるだろう。

そうになると、間違いなく欲望にまみれた人間は、自分が手にしたアクセサリーを離したくはなくなるだろう。それのおかげで人生が変わったりしたりしたら尚更。

実際にそれほどの力があってもおかしくないんだ。それは俺の能力だけでも証明されてる。

「反射」の力があればどれだけのことが出来るか。日本だけでなく、海外で未だに行われている戦争や兵器開発。

国内でも、物に対する反射がある事で、武力行使に出ることだってできるだろう。だって自分は傷を負うことがないのだから。

しかも俺の鏡は形も変化することが出来る。本当にクズが手にしたりしたら、道路でも走っている車にちよつと当てるだけで大事故を起こすことも可能なんだ。

「誰」が「どんな」能力を持つのが分からない以上、ありとあらゆる可能性が残っている。だからこそ、未体験の能力を手にする人間が、簡単に手放したりなんかは思えない。となれば戦いが起こるのは必然。

そして戦いが起こる以上はどちらかが負け、どちらかが勝つ。負けた方のアクセサリをタイミング良く奪うことさえ出来れば……俺は何個もアクセサリを手に入れることが出来るだろう。

そんな上手く行くものか？　なんて思うかもしれない。だが、よく考えてみてくれ。俺は「反射」だけ？

いかなる攻撃もいかなる手段も、俺なら相手に返すことが出来る。つまり、しっかりと作戦を練れば相手の自滅か引き分けかしかないんだ。

最初こそ、雑魚能力だと思つたが……他の人間よりは有力な方だろう。

まだ試したりはしていないが、「鏡」ならではの使い方も出来るかもしれない。分身や、姿を真似たり、もしかしたら鏡の裏の世界にも行けたりするかも？

それに、単純に扱い方に慣れれば、反射そのものを強化することが出来るかもしれないしな。

だからこそ、今は氣を待つ。

バカたちがこのアクセサリを求めて、奪い合いになるのを……ただ……ゆっくり

4月19日

公園、そして噂

翌日の朝、教室の中に入ると、クラスメイトの女子達が軽く小話程度に話しているところある噂を耳にした。

その不思議な噂とは、公園のベンチに石像が座っているという一見くだらない噂。

今にも動き出しそうな程の巧みに作られたその石像は、あまりの完成度の高さから気味悪がる人もいるようだ。

何も知らないみんなは、またアニメの延長で変な製造を建てたか……なんて事も言っていたが……俺はそうは思わない。

確かにその線も考えられないことは無い。何かとこの市はあのアニメに関するイベントを頑張ってきたから、一概には否定できないが……。引つかかるのはどうやら昨日はそんな石像はなかったとの事。

つまり学生が塾などの理由で帰りが遅くなる時間帯よりも後から、今日の朝の間に石像を公園に一体作ったということになる。

そんな事有り得るのだろうか？ 知識があるわけじゃないから断言は出来ないが……どうにも怪しい匂いがある。俺の予想通りに、能力者が動き出したら……なんて思うと、これはチャンスかもしれない。

能力の候補としては……別の場所から石像を転移させる。とか、石材を自在に操る。とか、そうだな……想像した物をその場で出現や作成できる……とか？

ま、どんな能力だろうと必ず何か強みがあるはず。もしそれらが手に入る可能性があるのなら、少しでもそれに関する情報が欲しい。

……と思う日の昼休み、席が少し近くにある2人の男子生徒が、早速この噂についての会話をしていた。

あれは……背の高い方が、「新海翔」。背の低い方が、「深沢与一」だったな。

特に別段仲良くはないから、聞き耳を立ててみる……

「どうやらそうじゃないっぽいよ。近くにあるじゃん。あの、偏差値のお高い——」

「あく、玖方か」

「そうそう、玖方女学院。あそこの制服を着てるんだってさ」

「ふくん」

……玖方？ って、事は女の子の石像なのか。

それって、ほぼ確定的じゃないか？ 能力を使ったことが。

能力の予想は「生成系」かつ、その石像は人を模した可能性が高い。例えば、ベンチに座っている女の子を見て、模写をするように石像を作るなんて事をした可能性もある。

特にこのことに理由はないが、実験的な感覚で能力を試したのかもな。そのままにしておくのはバカだと思っただけ。

「確認したくない？」

「何を」

「ちゃんとパンツまで作ってあるのか」

「……くだらね。」

ただ、近くの2人はどうやら放課後に公園に行くようだ。深沢が言ったように、「生きた人間をそのまま石にしちゃったみたい」な程の完成度の高い石像を。

「なんでそんなに必死なんだよ……。俺は別に——」

「あの………それ、私も行っていい？」

そんな男達の会話に割り込んできたのは、九條さんだった。

パンツを見たいのか聞かれてちよつと焦っちゃってるけど、どうやらその石像に興味を持つてみたいだ。

そんな九條さんの会話の節々から感じるのは、何かの違和感。使命感や決意とは違う

ようだが、それらに近い覚悟のような気迫。

と思うのは俺の気にしすぎだろうか。

「昨日まではなかった……としたら、早朝か深夜に運んだことになるでしょう?」

九條さんの疑問に思ったところは、俺と似たような所だった。つまりは短期間で石像が建てられたことに違和感を持ったこと。そして公園のモニュメントを市が作ったとしても、周囲に迷惑がかからないような、昼時に行うはずだと。

……もしかしたら、口には出さないだけで、九條さんも能力の事で気にしているのかも知れない……。

なんて考えている間に、九條さんと深沢と新海で放課後に公園に向かうことが決定したようだ。深沢は他の人(女子のみ)に声をかけていたが、あえなく全拒否を食らっていた。

そんな彼を見ながら、やれやれと呆れている新海の隣を通り過ぎて、そのグループの1人がこちらに向かってくる。

それはもちろん――

「竹内くんも……どうかな?」

唯一の女性、九條都。

「何が?」

「話、聞いていたでしょ？ 気になったりしない？」

「……別に、悪いけどどうでもいいね。俺は別に困らないし」

……何故俺に声をかけた？ 偶然近くにいたから？ 俺が聞き耳を立てているのを見つけたから？

……それとも。

「……………アーティファクト」

「……………!？」

その言葉に一瞬ピクリと反応してしまう。どうやら九條さんはそんな俺の些細な動作を見逃さなかったようだ。

「竹内くんのもそうなんだよね……………」

……下手に言葉を返せない。嘘を貫き通しても問題は無いだろうが……俺は1度呪いのアクセサリとして、九條さんと一緒にお祓いを頼んでしまっている。つまりはお互いに能力のあるアクセサリ、「アーティファクト」を所持していることはバレている。

……ここも隠さない方がいいだろう。

「似てるもんな、「輪廻転生のメビウスリング」と。俺も同じようなことを思ったよ。アーティファクトって」

「確信はない……だけど、もしかしたらって思っちゃったの。良かったら、一緒に来てくれないかな？」

「……はあ」

クソ………ということは、九條都は何かしらの能力を持つてるって事だ。半分は喜ばしいし、半分は面倒になった。

幸い、さつきから少し小声で、周りに聞かれないように話してくれているのが救いだな。

しょうがない。ここは同行しよう。本当は夜に行きたかったんだけど……この場を不自然に突き放す方が面倒そうだ。

「わかった。奥の2人が良ければ俺も行く」

「……ありがとう」

ちやうど俺達の会話が終わったタイミングで、深沢が不自然に俺に近づいた九條の異変に気が付き、俺たちに声をかける。

「んー？ 竹内も来るの？ もしかして、九條さんに誘われた？」

「ま、そんなところだ、2人が別にいいってんなら俺も一緒に行きたいんだけど」

「珍しいね、竹内が誰かと一緒に行動するなんて」

「別に嫌いってわけじゃないしな、気が変わっただけさ」

「へく、僕は別にいいけどね！ 翔は？」

「俺も別に」

「じゃあ決まりっ！」

と、言うことで俺たち4人で放課後の待ち合わせを決めて、軽く話したあと解散した。男2人は警戒する必要はないだろうが、九條さんの方は一応様子を見ていた方がいいだろうな。あの感じだと、間違いなく能力者がいることを疑っている。つまり……………

「びつくりしたなあ。九條さんもそうだけど、竹内も意外と気さくで色々と話すタイプなんだね」

「九條の方は俺たちが身構えちまつてるだけで、竹内の方は別に悪いやつって訳じゃないさそうだったもんな」

「仲良くなれそう」

「お前は誰とでも仲良くなれるからなあ」

「翔にも教えようか？ 女の子と上手く話すコツを。まずは相手の靴をベロベロに舐めて——」

「あー焼きそばパンうめえ」

最初の事件、それから：

「ごめんなさい、お待たせ」

俺たち男子3人が校門前で（主に俺を除く2人が）軽くだべっている、自転車を引いて九條さんがこちらに向かってきた。

放課後の待ち合わせ、もちろん昼間に話した通りに、これから例の公園へと向かう予定だ。

改めて考えると、変なメンバーだな。

なんて考えていると、深沢が元気よく出発の合図を上げた。

「それじゃ、行こっか」

「へいへい」

新海もどこか気だるそうに、適当な返事で返す。

「公園ってあつちの？」

「そうそう、十分もかからないくらいのこと」

ってことは……俺の家の方向か。道は違うけど、少し寄り道すれば簡単に寄れるよう

なところだ。

普段は行かないから気が付かなかつたな。

「あ、鞆。よかつたらカゴに」

「いいの？ ありがとう」

「新海くんも」

「俺はいいよ、もうギユウギユウだし」

「もちろん俺も遠慮しとく」

なんて会話をしながらも、てくてくと公園を目指して歩いていく。

会話をしながらつても、深沢がひたすらに喋り続けて、新海が適当に気の抜けた相づちをうつ。そんなレベルの会話。

基本的に四人が横並びに歩くと他の歩行者が歩けなくなるから、前二人後ろ二人で道を歩いていった。

つまり、前の二人が深沢と新海コンビ、後ろはその余りだ。

そんな組み合わせのせいもあってか、俺と九條さんの間での会話は一切ない。ま、俺がそもそも九條さんと話す気がない時点で会話は発生しないのだが。

チラリと九條さんの方を確認してみたりすると、向こうは向こうで何か考え事をしてる様子だった。

ここまでであからさまだと、流石の俺でも事情を知っている以上は確信が持てる。間違いなくあのアクセサリー、アーティファクトの事だろう。

その事に関してなら俺も色々聞き出したりしてみたいが……こんな所で話すわけにはいかない。

今は潔く諦めて、無言のまま例の公園へと歩いた。

……

……

……

「おっ、あれかな〜?」

本当に歩いて十分経たないくらい歩いた後、目的の公園にたどり着くや否や、深沢がある場所に指をさす。

「うわ……………思った以上に……………」

その指をさした先を見た新海が、気味悪そうな声を漏らした。それもそのはず。その先には…………

「マジだったんだな」

ありえないほどリアルな石像が、ベンチに座っていた。

女学生の石像。そのあまりにも完成度の高さに、俺も思わず言葉が漏れてしまった

ほどだ。

まさかこんなにも噂通りの完成度とは……

若干引きながらも、マジマジとその石像を観察する。確かに制服は見た事のあるデザインのものだし、手に取っているスマホも形は本物なんじゃないか？ と疑うほどの出来だ。

しかし気になる事が……

「……苦しそうな顔」

「だなあ……」

九條さんも勘づいたのだろう。この石像……どこか……いや、明らかに苦しそうな表情をしている。

新海は俺たち以外の見物人がいないことを気にしていたが……それはさして気にならなかった。

何故ならそれは……不自然な程に自然だからだ。

石像はベンチに腰かけ、スマホを弄っているように片手で握っている。本当に、ただ休憩をしているようにも見えるが……表情だけが苦しそうだった。

違和感が走る。

……おかしい。

「考える人ならぬ……苦しむ人って感じだね」

「表情だけ……な」

「なんの目的でこんなところに。ラボ……じゃねえや、アトリエ？　そういうところに飾ればいいのに」

「……飾れない理由があるのかも」

飾れない理由……ねえ。

にしても見れば見るほど不自然だ。座った時のスカートの感じとか、明らかにこの場所に置くことを目的として作られているように見える。

「師匠が俺を認めてくれないから、世間に認めてもらうぜ！　みたいなの？」

……だとしても、わざわざこんなところに置く理由がないだろう。仮に予想通りに何らかの能力で作ったのなら……そんな理由ならその師匠の前で見せればいいだけの話し……ってこんな事をバカ真面目に考えても仕方ないな。

「世間を騒がせるのが目的だとしても……途方もない労力だな」

「だよねえ。どうやって運んだんだろ。自分でここまで来たのかな」

……まさか………な。

「まあ、今にも動き出しそうではあるけれど」

……考えたくはない線だ。

「それじゃあ！　せつかくだからセクハラの限りを……って、あれ？」

「どした？」

「……、変じゃない？」

そう言った深沢の指さした場所は、石像の右手の薬指にあたる場所。その場所をよく見てみると……

色が違う。

「あつ……、爪の部分」

「色が違う……というか、そもそも石ですらない……う？」

その箇所が気になって、九條さんと二人でその爪の部分を覗き込むように見る。

「……生爪？」

俺も同じ意見だった。後ろで新海が、「怖いこと言うなよ」と否定していたが……明らかに石じゃない。まるで、本物の爪でも貼り付けたような……

「確かにそれっぽい」

と口にした深沢がその爪をちよんつと触った瞬間、その張り付いていたモノはぽとりとその場に落下し、中から桃色のような何かが見えるようになった。

「え？」

「あ」

「っ」

そう、『落下』した。その石像に付いていた爪が。

「やべえ」

数秒の沈黙ののち、深沢がぼそつと呟く。

「どうしよどうしよどうしよっ！ やばいかな？ やばいよねっ？ 怒られる？ 捕ま

る？ ボク捕まっちゃう!？」

「知らねえよ。あゝあ、やっちゃまった」

石像を壊してしまったことに慌てふためく深沢と、それに呆れる新海の会話が聞こえてくるが……そんな事よりも、俺は石像から『流れてくるモノ』が気になってしようがなかった。

流石に……これは動揺してしまう。

だつてこれは……………

「……待つて」

俺と同じように石像をガン見していた九條も、この『異常事態』に気がついたようだった。

「石像が出血してるぞ……………!」

じわじわと滲むように出てきたその赤い液体は、留まることを知らずにポタポタと真

下にどんどん落下していく。

それを見た二人はその異常な現象に、少しの間沈黙した後……

「気のせいじゃない！　ほんとに血が出る……!!　えっ、どうしてっ!?　なんでっ!」

その沈黙を最初に破ったのは深沢だった。

「石像が出血するなんて……」

「おいおい、待てよ、落ち着けよ。インクだろう?」

そんな新海の焦った言葉を聞いたあと、俺は真偽を確かめるためにその赤い液体に指を付ける。

そして自分の鼻に近づけて匂いを嗅いでみると……強烈な鉄の匂いが。

試しにペロツと舐めてみると……

「間違いねえ……!　血だ……!」

「な、舐めるなんて度胸あるね……竹内」

「お、落ち着けよ!　そんな訳ねえ……だろ!」

と、俺たちをなだめながら新海は石像の足元に落ちた爪を拾い上げる。その瞬間に絶句するように新海は無言になった。

それが、もう答えになっているだろう。

間違いはない。この石像は『生きていた』。この人は殺されたんだ。

これは――

「…………アーツィファクト」

俺と九條さんの声が重なる。それもそのはずだろう。今、恐らく俺たちだけが知ってしまったっている可能性。

これは人を模して作ったものでもない。もちろん芸術家の作品でもない。

これは…………『人で作ったもの』だ。間違いなく『石化能力』だろう。

「……………フフツ」

思わず笑みがこぼれてしまう。

何もかもが予想通りすぎて…………、もちろん石像が人だとは思いつきもなかったが、まさか本当にアーツィファクトで実験をする奴がいるなんてな。しかも、人を殺してまで。

…………最高に面白え。

「…………なに？」

「う、ううん、ごめんなさい」

新海が九條さんにあの言葉の意味を聞き返していたが、九條さんは首を振り謝るだけで、答えようとはしなかった。

「なんだよ…………これ…………！ イタズラにしちゃあ悪質すぎる。警察に俺が連絡するから、二人は九條をサインボールまで送ってつてくれ」

「え？ ナインボールって、九條さんのバイト先の？」

「確か、今日は九條はバイトって昼に言ってただろ？ だから送ってやれって」
「りようかいっす！」

そんな男の会話を聞きながら、申し訳なきそんな顔をする九條を説得して、そそくさと深沢はナインボールの方へと歩いていく。

……あいつ迷いがなかったな。

明らかかな足取りの軽さを見せる深沢の背を見ながら、そんなことを思う。

「ほら、竹内も」

「ああ。悪い、あと頼むわ」

新海に面倒なことを押し付けて、俺もその場を後にした……

……

……

……

「ゴメン、ボクちよつとトイレ。ずっと我慢してたんだっ」

ナインボールにたどり着いた直後に、深沢は駆け足で急ぐようにして、店内へと走っていった。

……余程我慢してたんだらうか。

「……それじゃ俺は帰るから」

「えっ」

その流れで俺も適当に断りを入れて家に戻ろうとすると……九條さんに「待つて」と声をかけられて止められた。

「なに？」

「あ、あの……ちよ、ちよつと待つてて」

何やら慌てた様子で九條さんは紙とペンを取り出し、何かを走らせるように文字を書いていた。

そして少し時間が経過したあと……

「これ……、私のRINGのID。後で連絡してほしい、話したいことがあるから」

そう言つて手渡されたのは、九條さんのIDが書かれた一枚の紙切れ。

十中八九、あの件だろう。ここは……受け取つておいて損は無いな。必要最低限だけ連絡をとつて、有益になりそうな情報を引き出そう。

「……わかつた。適当な時間に連絡する」

「うん、ありがとう。それじゃあ……またね」

片手を軽く振つて、九條さんは喫茶店の中に入っていく。俺はその後ろ姿を見届けた後に、改めて渡された紙に視線を落とした。

「……面白いことになりやがったな。ほんつと……このアーティファクトが現れてから、退屈しないな」

姿の見えな敵

唐突に起きた人体石化事件。未だにニュースにはなっていないが、帰り道に公園に寄ってみると、警察のヤツらが何かと騒いでいたから、世間に出るのは時間の問題なのかもしれない。

隠蔽する可能性も無くはないが……普通は殺人事件なんて思わないだろう。俺たちのように『アーティファクト』の存在を知らない奴らは。

……サイレンの音が五月蠅い。ここじゃあ落ち着いて考え込むことも出来なさそう
だ。

なんて思いながらチラツと警察が集まっている方を見ると……新海が数人の警察官から事情聴取をされていた。

……帰るか。

こんなところにいつまでも居てもしょうがないし、人だかりも少しづつだけでき始めた。このどきどきに紛れてこの場を離れよう。

と、その場から離れようとする……

——トン……。

と背中から『誰かが寄りかかるような』重みを感じた。

……誰だよ、こんな訳の分からんことを堂々とするとは……。

「気になつちまうか？ あの石像の事が」

その声は女の声だった。崩された言葉に似合わないほどの可愛らしい声で、あの石像の事を問いだしてくる。

……もうあの石像はこの公園には無いのに。

「ああ、気になるね。あんな面白い能力があるなんて羨ましい」

内心……心臓がバクバク動いている。それだけこの状況に焦っているんだ。何故なら、相手は石像の事を知っている。それもただ知ってるだけじゃない、おそらく、血が出てたことも知っている。

となると……石化の件も全て知っていて、俺に語り掛けている可能性が高い。

「なんだ？ アンタ、面白いなんて思ってたのか？ ハハッ、こいつあひでえ。今頃あの子……天国で泣いてるぜ？」

「バーカ、死んだ奴が泣くかよ」

「ハハッ！ そりやあそうだ！」

……だとすると、姿も見えないが、俺の真後ろにいるコイツは石化能力を持っている可能性が高い。

馬鹿なのか？ わざわざこのタイミングで、こんな分かりやすいことをして……

「アンタとは気が合いそうなのになあ……………」

「さあな、誰と仲良くなるにしても、まずはお互いの顔合わせからじゃないか？」

「オレはいいけど……………」

「死んでも知らねえぜ？」

そんな言葉が耳元で聞こえてくる。実際は少し離れているんだろうが……相手が首を横に向けて、わざと俺だけに聞かせるように言ったのは十分に理解出来た。

間違いない。この後ろの女は能力者。アーティファクトの所有者だ。

だとすると……やはり石化!?

「心配は無用だ。俺はどんな力も効かねえ」

「まずいまずいまずいまずい!! まさかの事件の犯人と直面しちまったか!? これ、ガチで推理が当たってたらヤバイぞ!?」どんな条件で石化してしまうのかが分からないから……いつ俺が死んでもおかしくねえ……!!

「テメエの方が羨ましいじゃねえか、無敵なんてチートだろ」

「……でも、落ち着け。今は人がかなり多い。事件の事を噂して街中の人間がスマホを片手に結構な数ウロウロしている。まさかこんな人混みの中で能力を使い出さないだろう。」

「それで……何の用なんだ? わざわざ俺の側に来たってことは、俺に用事があったんだろ?」

「用って用はねえんだけどな。どうしてもアンタの事が気になったらしくて……ちよいと偵察に来たんだよ」

「……何言ってるんだお前」

「最初是对した用事はなかったんだけど、アンタ……力を持つてんだろ? 具体的には知らねえけど、どうやら今聞いた感じだと無敵能力らしいじゃねえか。そんなもん、誰だって欲しいと思うだろ?」

「……なるほど。コイツはまだ他に仲間がいるのか。そいつの指図で俺の元へと来たが、俺との会話で俺のアーティファクトに興味を持った。つまり、こいつも目的はアー

ティファクトの収集。

……戦闘は避けられない……か？

「欲しいな。俺だって沢山欲しいさ……石化の能力もな」

「なるほどなるほどお………。そいつあ嬉しいねえ」

明らかに余裕って感じだな。間違いなく俺を舐め腐ってる態度だ。能力なんか無くてサシなら負ける気はしないんだけどな……これでも昔は、色々と手をつけてた頃もあつたから、喧嘩には自信があるんだが。

「でも、気をつけた方がいいぜ？ 死んじまったら、何もかもが無くなるからな」

「なんだ？ この場で殺り合うつもりか？」

「それもいいが……。今はオレも困るんだよ。まだ能力も二つしかねえしな」

——ッ!?

二つ……!?! 二つだと!! コイツ、あのアーティファクトを人から奪う方法を知って

いるのか!?

「おっ？ 反応したな？ どれが気になったんだ？ 殺り合う事か？ それとも

………力を複数所持してる事か？」

「お前もアーティファクトの収集が目的なんだな……よくもまあ、俺と似た同じやつがいるもんだ」

「ちよいと違うけどな。まあお喋りはここまでだ、楽しかったぜ？」

聞きたい……、どうやって人から力を奪い取ったのか。アーティファクトを複数所持するという事を成し遂げたのか。

「結局何がしたかったんだよ」

「そうだなあ……強いて言うなら」

少しのタメがあつた後、さつきよりもハッキリと聞こえる程の近く。つまり耳元で――

「暗い夜道には気をつけろよ？ お兄さん」

と囁かれた。

その声を聞いた直後は思わず驚いてしまって、数秒固まってしまったが、その恐怖を振り払うように背後を振り返ると……相も変わらず人だかりが出来ているだけで、変な人は見当たらない。

会社帰りのサラリーマン。帰宅中の学生。白いフードを被った人の後ろ姿。犬の散歩をしている老人。ジョギングをしているガタイがいい男。

それくらいだ。

「……なるほど。宣戦布告って事か」

間違いなく威嚇された。何らかの出来事が原因で俺が能力者ということがばれ、姿も

分からない奴に言われた。「お前のアーティファクトを殺してても奪うぞ」

……と。

やられた。心理戦で先手を打たれた。もうこの時点で圧倒的に俺が不利になっちまった。

恐怖心を植え付けられた以上は、俺は常に後手に回ってしまうだろう。

クソ……。馬鹿野郎が。

早速失敗してしまった俺に苛立ちを覚えながらも、俺は自分の家に戻って行った。どんなに自分を責めても現実が変わらない。だからこそこれからを考えなくちゃいけないんだ。

……一旦風呂にでも入って頭を冷やそう。

俺は俺

『忘れそうだから早めに送っておく。都合がいい時間に連絡をくれ』

RINGのアプリを開いて、メモされたIDの相手に文を送って直接連絡を取れるようにする。いちいち時間を気にするのが面倒なのもあるが、本気で忘れてしまいそうだからである。

今はまだ、あれから対して時間が経っていない。そう、あの女の人との突然の会話から……1時間も経っていない。

「暗い夜道には気をつけろよ？ お兄さん」

今でもあの言葉が頭にこびりついている。やれやれ……最高に腹の立つ相手だ。

あの声の重み……喧嘩なんて生ぬるいものじゃすまねえだろうな。本当に殺し合いでもやる勢いだ。

今のうちに、俺も自分の能力をもっと詳しく調べておいた方がいい。もしかしたら……いや、次会うときは確実にアーティファクトの奪い合いになるだろう。

いざって時にまともに動けなかったら話にならねえ。できるだけやりたくはないが

……いよいよとなれば、人を殺す事を覚悟しなくちゃいけないかもしれない。
……あの時に誓ったんだ。俺は、自分の為に生きるって。

信用すれば裏切られる。油断すれば殺される。
殺られる前に殺れ。

胸に強く抱いた決意を想うと同時に、ピアス型のアーティファクトをギュツと握る。
かつての俺の目標とは遠い存在になっちまったけど、あの頃と今の俺は違う。俺は兄
のように死なない。

それが、大好きだった兄から最後に教わったものだから。

……その為にはまずは自分の力量つてのを十分に理解することからだ。そんなこと
も理解出来ていないうちは、戦闘はするべきじゃないだろう。

「……………出てこい、鏡」

右掌に紋章を浮かばせ、能力を使って鏡を出現させる。

「さて、トレーニングの開始だ」

……………

……
……

あれから数時間後、時刻は午後八時。夕食も食べずに夢中で能力の実験を重ねていたが、ある人からのRINGの通知が届いた事で、俺はそれを止めることにした。

『わざわざごめんなさい。連絡ありがとうございます』

その相手はもちろん九條さん。………つーか、なんでこの人敬語なんだ？ 会ったら普通に話すのに。

『それで、要件は？』

手っ取り早く話を終わらせる為に、いきなり核心を突く事を聞き出したが、まずかっただろうか？ ここはやっぱり適当な話から本題に移った方が……なんて思ったりしていたが、少しの時間が経過した後、その返事は返ってきた。

『こんな時間ですが、出来るなら会ってお話したいです。待ち合わせはできませんか？』

……じゃあ俺が帰ろうとしたあの時に話せよ。

とも思ったが、よくよく考えてみると、逃げるようにそそくさとその場を移動した俺だ。もしかしたら本人的にはあの場で話すつもりだったのかもと思うと、あんまり強

くは返せなかった。

『わかった。まだナインボールにいるのか？ いるんだったらそのまま待つてくれ。

ついでに夕食も済ませたい』

『わかりました。じゃあ、店内で待つてます』

と最後に送られてきたメッセーに既読マークを付けて、そそくさと外出の準備を進める。毎度の如く眼鏡（伊達）をかけて、洗面台の鏡を見て、髪がクソ長えな……なんて気になりながら身だしなみを整える。

しかし……話をしたいって何をだろう？ あ、いや、あの事件に関する事なのは簡単に想像できるんだが、俺に質問することなんてあったか？ お互いにあん時は初めて目撃したんだし、俺だけの有益な情報はないと思うんだが……単に能力の相談相手が欲しいだけだろうか？

まあ、一人で考えても仕方ない。さっさとナインボールへ急ごう。

……

……

……

「うう……っ！ 今日微妙に寒いな……」

家を出ると、外は少し肌寒く、やや冷たい風が肌を襲う。空を見上げるともうすっかり星たちが顔を出しており、今は夜なんだと認識させられる。

あの言葉が再び脳内を過ぎるが……幸い、能力は実験のおかげで多少は応用できるようになった。実践で使えるかは別としても、対抗する手段は増えたんだ。相手も能力に扱いは慣れていないのなら、少しは対応出来る。

つつても、ほとんどが守りの技……というか、基本的には自分から攻撃することはできないだけ……

だからというのもあるが、基本的には戦闘はしたくない。最悪の場合は致し方ないが、面倒なのはごめん。

「……そろそろか」

色々と考え事をしている内に、いつもの店前の歩道を歩いていた。ここは街中ということもあって、まだまだ微妙に行人はいるし、街灯もそれなりにある。こんな場所なら、アイツもさすがにいきなり襲ったりはしないだろう。

「……………う？」

一瞬何かを引かれる。なんだろう……誰かに見られてる？

具体的には何もないのだろうが……どうも何故か誰かに見られているような気がし

てならない。……まさか。

嫌な予感を感じた俺は、できるだけ急いで逃げ込むようにナインボールの店内へと入っていった。

カランつと音の鳴る扉を開けて、店内に入ってみる。客は一人食事をしている程度でほとんど中にはいなかった。

辺りを少し見渡すと、一番奥の角の席に九條が座って待っていたようで、俺をみかけると片手を軽く振るようにしてニコツと笑っていた。

……絶妙に作り笑いの気もするが。

軽く手を挙げて俺なりの返事を返すと、九條の目の前に対面するように座る。そして互いに飲み物を注文し、俺はそれにプラスして適当な食べ物を注文。「かりこまりました」と店員が去っていったのを機に、改めて九條の方に顔を向けた。

邪魔すぎる髪を安いヘアピンで固めながら。

「竹内くん、髪が長いよね」

「鬱陶しいくらいにはな。次の日曜に散髪でもしようかと思ってる」

「短くしても似合うと思うよ」

「そりやどーも」

最初は適当な会話。そんなことをしているうちに飲み物が来て、俺の頼んだハンバーグがきて少し時間をかけて全て平らげる。

そしてメのパフェ。今日は、マンゴーパフェにしたのだが、それが届くと流石に待たせすぎたと悪く思い、俺の方から話を切り出した。

「それで？ わざわざ会ってまで話したかった事って？」

パフェを一口食べながら九條さんの様子を伺うと、なにやらそこそこ険しい表情をしていた。

「……あの石像の事。竹内くんはどう思う？」

「どう思うも何も、十中八九『能力者』おれたちの仕業だろ。爪の件といい、あの出血といい……九條さんだつてあの時に言葉を漏らしてたじゃないか」

そう、俺と九條さんはある言葉を同時に呟いた。「アーティファクト」……と。

「竹内くんも、やつぱり不思議な力が——」

「ああ。つっても俺のは石化じゃないからな。変な疑いは止めてくれよ」

「えっ、あ……………う、うん」

ぎこちない返事をしながら、九條さんは何か言葉を選んでるようだ。そんな彼女の言葉を待ちながら、俺はまたパフェを一口、二口……と口に運んでいく。

「アーティファクト。で、伝わるかな？」

「わかる。あのアニメから取ったんだろ？ 一通りは見てるから軽くなら専門用語を出されてもわかるよ」

「よかった。それじゃあ……これ、これが私のアーティファクトなんだけど……」

そう言つて九條さんが唐突にポケットから取り出したのは、例の髪飾り。ちよつと前に呪いがくなんて言つていたアレだ。

「竹内くんは、あのピアス……だよね？」

「うん」

「能力について、どう思う？」

「……………」

その質問にちよつと悩んでしまう。正直に答えると俺個人としては「最高」の一言なんだが……さつきから九條さんの様子がおかしい。下手なことを言えば……面倒な事になりそうだ。

「なんだ。結局俺の事を疑つてるのか」

「そ、そんなつもりは無いよ！」

「じゃあなんでそんなに能力のことを聞こうとするんだよ」

「それ……………は……………」

そこで少し吃る。自分の中の気持ちと葛藤しているようだ。

俺は絶対に能力の詳細は言わないぞ。相手が能力者である以上、最大限の警戒をさせてもらう。

「あの時……………笑ってたから」

……………やっぱりか。理由はどうあれ、怪しまれていることには間違いなかったな。

だとすると、九條さんは中々の度胸の持ち主だぜ？俺がもし、石化の能力を持っていたとしたら……………自分が殺されるかもしれないのにわざわざ会いたって言ったんだ。

「結局疑ってんじやん」

「……………ごめんなさい」

「でも、そんなこと言っているのか？ 周りを見てみるよ」

「……………え？」

俺の言葉通りに九條さんは店内を軽く見渡す。先程まで食事を摂っていた客は会計を済ませて出ており、店員は何故か全員奥の方へと行って、この空間には俺と九條さん以外に人がいなかった。

もちろん大声を出したり、呼んだりすればすぐさま店員がやってくるだろう。だが……………目に映る所に人影は一切なかった。

「俺が石化の能力者なら……………この場で九條さんを石にしているね」

「……………っ！」

「よかつたな。俺が犯人じゃなくて……………、迂闊な行動は止めといた方がいいと思うぜ？ それは勇敢じゃなくて無謀だ」

そして再びパフェを一口。

うん。やっぱりこの店のパフェはハズレがない！ めっちゃ美味い！

「死にたくなかったら、下手な行動をしない事だ。この街の中に殺人犯がいる事は間違いないんだ。こんな事を簡単にしてたら早死するだけだ」

思えば接触してきたあの時、RINGのIDを貰った時も九條さんの方からだ。石像の探索を誘ったのも。

……………厄介な相手だな。

「竹内くんは気になるの？ ……石化のユーザー、殺人犯の事」

さて……………まあ、俺を犯人の容疑者から外したのなら来るであろう質問が来た訳だが……………九條さんは唯一、俺がユーザーだということをハッキリと知っている人だ。敵対するのは……………やめておいた方がいい。

「気にはなる……………な。俺の能力だったらどんな奴でも対応できると思うし、犯人を見つけようとは思ってる」

もちろんそれは、殺人を止めさせる為なんかじゃなくて、俺自身がそのアーティファ

クトを貰う為だが。

「……………」

「……………」

ピクつと微妙な反応を見せる九條さん。変なやつ……………なんて思ってるパフエを食べようとしたら……………もうなかった。

「じゃ、俺はそろそろ——」

「あ、あのねっ！」

会計を済ませて帰ろうかと思つた直後に、勇気を振り絞るかのように決死に声をかけられて思わずその場で止まってしまふ。

「なに」

「私も手伝わせて欲しい……………」 石化のユーザー探しに」

……………はあ？

何言つてんだコイツ。そんなもん承諾するわけねえだろ。第一に九條さん本人が石化のユーザーである可能性もあるわけだし、能力を隠したままで協力なんてできるかよ。

それに俺は、人を信じたりはしない。こういう偽善者である奴ほど、肝心な時に簡単に人を裏切る。

「断る。手を組む相手探しなら他を当たってくれ」

「な……なんで……？」

「お互いの能力すら知らないんだぜ？　しかも殺人犯かもうつて疑われたすぐ後に協力しようって……馬鹿にしてんか？」

「……！　ごめんなさい……」

……つたく。

まあ、本人も大分反省してるみたいだし、別にどうでもいいけどさ。

「焦りすぎなんだよ……」

「ごめんなさい……！　ごめんなさい……！！」

……え？

「軽率に人を疑ったりして、本当にごめんなさい……！　本当はそんな事を伝えたかった訳じゃなくて……」

な、なんか異常なほど謝られてるんですけど。別に俺はそこまで気にしてないんですけど……

「あー、あー！　もういいって。面倒だ。とにかく……相手は殺人犯。これ以上人を殺させない為にも俺が犯人を探し出す。だから邪魔はしないでくれ」

こーうやって言えばもう下手な勘違いはされにくいだろう。能力を明かさない以上

はまだまだ疑われ続けるだろうが、それでも、九條さんの中での俺は『一人で石化のユーザーを探している』って事になるはず。

さっきの言葉的に、多分九條さんは正義感が強いんだろう。大方……アニメのように表すなら、自分がアーティファクトに選ばれたのならその力を悪用する人を自分が止めなければ……なんて思ってるんじゃないだろうか？

ま、彼女がもし殺人犯と接触でもしようものなら……よほど強い能力でないと、返り討ちにあうだろうけど。

……それらは九條さんが石化のユーザーでなかった場合だが。

「じゃあな。俺はもう帰る。……ハンバーグとパフェ美味かった。ご馳走様」

そう言うって俺は、九條さんの分の会計も一緒に済ませて店を出た。

………

……

……

……結局能力の事聞き忘れた。

夜道を歩きながら、早速俺は若干の後悔を胸にとぼとぼと帰っていた。

よくよく考えたらあれって九條さんの能力を聞き出せる絶好のチャンスだったんじゃないかね？ お互いの能力を教えあつたらこつちのもバレるけど、相手の能力も判明したのにな……。しかも自分の容疑は完全に晴れる。

うーむ。もつたいないこととした気がする。でもなあ……。自分のアーティファクトの能力もバラしたくないしなあ……

まあ、次の機会でいつか。

なんて思いながら歩いていると……

「……」
見たことの無い「ある人物」と鉢合わせした。

無意識のうちに俺は最短ルートにショートカットできる道……。つまり公園の中を突っ切っていたのだが、不気味な程に誰一人いない公園のど真ん中に、街灯にゆらりと照らされている、白いフードを被った人が佇んでいた。

特に声をかけるわけでもなく、その人の横を素通りしようとする……

「夜道に気をつけろって言ったろ？ お兄さん」

能力者VS能力者

その声には聞き覚えがあつた。どこか可愛くて、若干低めのクールさも持ち合わせている声。この声は……

公園に行った時に、姿を表さずに俺を脅してきた奴だ。

未だにフードを深く被り、顔は見せてくれないが、その姿は拝ませくれた。

「人の忠告はしっかりと聞かなきゃダメだぜ？」

唯一見える口元をほんの少しだけ緩ませ、不気味さを漂わすその女はゆつくりと、一歩一歩を噛み締めるような速度でこちらへと向かつてくる。

……危険な香りがする。

「るっせーな、人と話す時はまず目を見てから話さない。ママに教わらなかつたか？」
だが怯んでいられない。これは想定していた通りだ。一人での夜の外出の危険性は十分理解していたつもりだった。だからこそその準備もしたし、心構えもしていた。

「生憎、ママがいないんで………ねっ！」

何かの溜め動作をした後に、その女は突如として背後の空間から槍を出現させる。

「——!?」

石化の能力じゃない!? いや、今はそれよりも……!

風を切るような音と同時にその槍は勢いよく俺を貫かんと向かってくる。だが

……

槍はたつた一本。それに目で追えないような速度じゃない……これなら別に——

「んっ…………!」

上半身を大きく動かすことで、その槍を避けることに成功した俺は、そのまま能力の準備をする。

「なんだ、避けたのか。チツ…………まだまだ上手く扱えねえな……」

「そんな物騒なもん当てたきやまずフードを取れよ、そしたら視界が良くなるぜ?」

「テメエに言われたかねえっての、そのクソ長え髪切れよ」

さて……と。

ヤバイぞ!? 俺とアイツの能力の相性は最悪なんだが!? 遠距離からの攻撃なんて

ズリイもん持ちやがってこの……!

こつちやあ範圍が決まってるってのによ!

「ばーか、ロン毛はモテるんだぞ? 南斗だっってほとんどロン毛だったろ?」

「一人短髪だろ」

なんか普通に戦闘してるけど、俺に勝機はあるのかねえ……。自分からは攻撃できない以上は、相手の攻撃に合わせるのカウンターがメインウエポンになるんだが……

なにせ反射だからなあ……。最初の一撃だけが奇襲として使えるから……。そこで決めたいな……

「うるせーよ！ つーかなんだよその槍、カッコよすぎだろ……。羨ましいなコノヤロウ」
「そんなに欲しけりゃ沢山やるよッ！」

次に奴の背後から出てきたのは四本の槍……………

四本ッ!?

次々に連続で飛んでくる槍を二本目までは上手く躲すが……。残りは無理だ！ 仕方

ねえ！

リフレクション
「反射鏡ッ！」

右掌に紋章を浮かばせ、咄嗟に能力を発動する。すると俺の目の前ギリギリで前が見えなくなるほどの鏡が出現し、残りの二本の槍を受け止める。

パチスロのような高音を、キューーンッ!! と鳴らし、鏡に当たった槍は女の方へと向かって跳ね返っていく。

「な……………ッ!?!」

一瞬の出来事で動揺していたのか、驚きの声が俺の耳にまで聞こえる。

鏡を消すと、土埃の舞う中で、フードを取った赤目の女が肩を抑えて俺を見ていた。「……………マジかよ。そういう事か……………」

危なかった……………能力を使ってなけりや、俺があんな風に……………いや、もつと酷い状態になつてたかもしれない。

反射能力……………やっぱ強いな。つっても制限はある。まず第一に俺を中心とした半径2 m以内でしか出現させられないこと。そして、マジックミラーでも何でもなくて、両面鏡だから、目の前に出現させると俺の視界も途切れること。

「まさか操作も出来なくなるたあな……………」

……………操作。操作？

なるほど、反射した槍は消したりすることが出来ないのか。へえ……………。

「いいモン持つてんじやん」

「だろ？ だから物騒なもんを突き合わねえで、俺ともつといいモン突き合おうぜ？
突くのは俺だけだけど」

「へへっ……………ばーか」

その瞬間に、相手の女の左目の辺りに紋章が出現した。顔の三分の一程を覆うほどの大きな紋章だ。

そして、俺はその女と『目が合った』。

「——ッ！」

動かない。

身体が全く言うことを聞かない。ビビっているのか？ いや違う、そんな圧じやない。まるで、身体が麻痺を起こしたかのように痙攣を繰り返し、自由を奪われている。

これは……………二つ目の能力！

「お望み通り顔を拜ませてやるよ。ほら、ここまで近づきやあよく見えるだろ？」

右手で肩を抑えながら、不気味な笑顔を浮かべて近づいてくるその女は、顔の紋章をそのままに街灯が照らしている場所まで歩いてくる。

身体はうごかないが……………

「なんだよ、めっちゃ可愛いじゃん……………」

口は何とか動く。

「……………うっぜ」

女は更に紋章を強く光らせて、何かの能力を俺にかける。

ヤバイぞ……………マジで段々感覚がなくなってきた……………！ 落ち着け……………！ 落ち着

け！ 冷静になれ！

俺とアイツの目が合った瞬間に動けなくなっただ。つまり、この身体が動かなくなる能力の条件は視線を合わせること。その証拠にアイツは俺の目から「視線を外さな

い」。ということはその逆をすれば……!!

身体は痙攣するレベルではあるけど動く。口も普通に動いた。ということは……

「さっさと死ねよ」

「反射鏡リフレクションツツ！」

能力を使って目の前に鏡を出現させて、俺とアイツとの間に壁を作る。目の前に映る俺自身を確認して、咄嗟に身体を後ろへと動かしてみる。

すると、視線を外した直後に、さっきの痙攣が嘘のように治り、何とか走れるレベルで動けるようになった。

「……………よしー！」

アイツ相手に距離を離しちやダメだ！ 遠距離攻撃の槍に、目が合うと相手の身体を麻痺らせる能力の二つを持つてる。俺の能力が反射じゃなけりやあつくにもう死んじまつてる!!

一気に近づいてぶん殴るしかねえ……!!

相手を殴ることを決意すると、鏡を俺と相手の間に常に出現させて軸をずらすようにしながら大回りに全力で走る。

「透視鏡クリアボックス」

できるだけ最短距離で、且つ、槍を飛ばされても反応できるように……！

「……！ アイツ……どこ行きやがったッ!?」

よし、バレてねえ！ 今なら行けるッ!! 移動しながらも常に俺とアイツの間に鏡を追従させてるから、ちゃんと能力が効いてるんだ！

……お勉強をちゃんとやっというて良かったぜ。

完全に俺を見失ってる女の近くに鏡を移動させ、その鏡を追うように俺も真っ直ぐに女に向かって走る。そして――

女の近くで鏡を止めて、勢いよく突撃し、自分が作り出した鏡をぶっ壊して奇襲する。その時、相手は明らかな動揺を見せていた。

「これでも……喰らえっ!!」

オレノキオク 断片

自分の作り出した鏡をぶち割る。粉々になった欠片を散りばめさせ、申し訳程度のびつくりギミックを発動させた後、全力で右拳を構えて力を込める。

相手からしたら、いきなり空間でも破れたかのように感じた事だろう。それが俺の技「透視鏡」クレヤボヤンス。鏡を自分と任意の対象の間に出して微妙に角度を変える事で別の景色を写し、自分の姿を眩ます技。

つまりはただ状況に合わせてそれっぽい景色と同化しただけ。

だが、ただそれだけでも人間を一瞬攪乱させるのは容易い。一度焦りを覚えてしまうと、冷静さを取り戻すのに必ず数秒はかかる。だからこそその隙、だからこそその好機。

そしてこの一度のチャンスが無駄にはしまいと、目の前の女に殴りかかろうとするが

.....

突如として懐かしい過去を思い出す。

それは優しかった兄との思い出。何も考えずに遊んでいた頃の記憶。

昔からトゲトゲしかつた俺は、俗に言う皆からの嫌われ者だった。オマケにありえないほど性格がひねくれているから、本当に親しくしてくれる人はかなり少なかった。

それらは勿論、子供ながらに自分が悪いのだと理解はして……。でも、やっぱりそれが俺の生きる道で、俺自身を証明する事だった。

売られた喧嘩は全て買い、自分の正しいと信じた正義を掲げる。皆からの信頼の厚かつた兄から教わった正義を、俺なりに受け継いだつもりだったんだ。

だが、俺と兄の決定的な違いがある。それが、暴力についての価値観だ。世の中には殴らないと分らない奴もいる。実際、今までに数々の問題を暴力が解決したこともあるだろう。もちろんその逆。暴力が原因で起きた問題もあつたろうが……

それでも、兄は決して人を殴らなかつた。暴力を嫌い、相手に心を説く事で解決を図り、誰も傷つけれたりしなかつた。

『いいか？ 拳つてのは簡単に振るつていいものじゃない。それは俺たち二人にとっては最終手段。いうなら秘密兵器だ。そして、その秘密兵器は自分にとつて一番大切なものを守る時にだけ使つていいんだぞ』

遠い昔の記憶、今ではすっかり忘れてしまつていたあの時。俺は売られ続ける喧嘩を買い続け、その度に相手を殴つてきた。

俺に喧嘩の意味はないのだが、噂が噂を呼び、すっかり俺は一匹狼のような……いわば不良に近い曖昧な何かになっていた。だからか、あの時は本当に色んなやつから喧嘩を売られたもんだ。

「んなもん知らねえよ！ 昨日のアイツだつてそうだ！ 明らかに喧嘩を売つてきたのは向こうからじゃねえか！」

『そうかそうか、そうだったな。でも……意味もなく人を殴つて一番傷つくのは、蓮太自身なんだぞ？』

「俺のどこに傷があるんだよ……。つかさ、それじゃあ兄貴は大切なものつてのがないのか？ 兄貴が人を殴つてるところなんて見たことねえし」

そんな他愛もない会話のシーン。

俺だつて殴りたくて殴つてたわけじゃない。殴らなきゃ自分を守れなかったから殴つたんだ。だから……俺の大切なものつてのは、自分自身。

『俺の大切なもの……か、今の蓮太に言つてもわかんないだろうなあ』

そう言つて俺の頭をクシャクシャに雑に撫でてきたのを覚えてる。ぎこちなくて、不器用で、でも……妙に温かい……

『そうだな。きつといつか蓮太にもできるさ、なんたつてお前は……誰よりも優しいから。だから……これからは意味もなく人を殴つちやダメだぞ』

「——ッ!？」

目の前の女を殴るその瞬間、突如として思い出した兄の言葉のせいで一瞬反応が遅れてしまう。

完全な不意打ち、勝てると思ったその瞬間。思い出が邪魔をした。

そして振りかぶった拳が女の顔に当たると思った寸前で……俺は拳をピタリと止めていた。

何故かはわからない。止めたら俺は殺されるかもしれない。それでも俺は人を殴る事をしなかった。心がそれを止めていた。

「なんだよ、オレの事を殴んねえの？　なんだ……結局人を殴る事を知らねえ甘ちゃんかよ。しょうもねえ……」

「馬鹿野郎が……テメエなんか殴る価値もねえだけだ……！　とつとと失せろ」

「………目は本物だな。人を殺した事のある目だ」

「黙れ………!」

「ハハッ！　お前マジでヤベエな！　わかったわかった、ここは大人しく引いとくよ。………また力の練習相手になってくれよ？　お兄さん」

そう言い残し、女は再びフードを被って、夜の街の中にゆっくりと消えていった。

俺はその後ろ姿を眺めて、改めて思う。結局……俺は変わることの出来ない人間なのか？ と。

思い出したくもないあの時から数年。……もう数年か。

だから人と関わるのは嫌いなんだ。

そんな嫌悪感を深く感じながら、その場に崩れるように倒れてしまう。自分の腕を見てみると、切り傷のようなものが大量に残っていた。きつと鏡を割った時の反動だろう。

敵の攻撃を反射する。だったら俺の攻撃も反射されてもおかしくない。あの時に鏡を割るために使った片腕は、大量の血を流して傷だらけになっていた。

「人を殴らなくても傷だらけになるじゃねえかよ……」

……やっぱ殴つとけばよかった。アイツ、また俺のアーティファクトを狙う気ではないな。

あんな感じで下手くそな使い方でも、これだけの危機だったんだ。扱い方に慣れられたら……次は負けるかもな。

あークソ……ちよつと休憩でもして休もう。

……なんであの時、殴らなかつたんだろ。まあ……殴つたところでそこから先のことを考えると意味なさそうだったけど。

あ、いや、アーティファクトを人から奪う方法をアイツは知ってるってことだから、その方法を聞き出したかつたんだ。

……あれ、そう言えば眼鏡どこいったんだろ。いつの間になくなって。あーあ、また買い直さなくちやなあ。

「甘ちゃん……ねえ……」

アイツが言っていた言葉を思い出しながら、夜空を見上げていると、遠くの方から誰かが歩いてこちらに来ている気配がする。

「……ん？」

その顔までは見えないが、暗い公園の中を一人で歩いてきたその人は……

都の能力

「竹内くん……?」

暗闇の奥から姿を現したのは、まさかまさかの九條さんだった。きつと小走りで行ってきたのだろう、やや息を切らしながら片手で胸を抑えて不思議そうに俺を見て驚いていた。

まあ……驚きますよね。片腕を怪我してる男が夜中に公園で倒れるように寝てるんだから。

「……はい、竹内です」

「ど、どうしたの!?! 血が……!」

俺の腕を見るや否や、九條さんは慌てて俺に駆け寄ってきて俺の上半身を起こし、腕を始めたとして改めて俺の身体を確認する。

「ユーザーが現れたの!?! もしかして、能力が使われて襲われたり……!」

「あ、いや、襲われたのは襲われたんだけど……!」

ユーザー。ユーザー……。ああ……。能力所有者^{ユーザ}って事か?

「と、とにかく手当をしないと！　ここからだと……ナインボールが近いね、あ、歩ける！？」

「えっ、いや……別に大した怪我じゃ——」

「ダメです！　止血だけでもちやんとしておかないと……！」

と俺を見て顔色を変えた九條さんは、俺の腕を自分の肩に回し、ゆつくりと起こそうとする。

「ああ……別にそこまではしなくてもいいから。別に歩けるって」

「無茶はしちやダメだからね！」

「わーったわーった………」

………

……

……

喫茶店ナインボール。今の時間は既に営業時間を終えているが、緊急事態と言うことで九條さんが鍵を使って扉を開けて、裏口のスタッフルームの方へと入る。

そして俺を椅子に座らせると、バタバタと急いで薬箱を取り出して、様々な道具を取

り出す。

「ちよつと滲みるよ……」

清潔な布に消毒液を付けて、切り傷が酷い箇所になんか当たられる。九條さんは優しく押し当ててくれていてるんだが……

「痛つてててててててててててツツツ!!」

「ごっ、ごめんなさいっ……! じゃなくて! 我慢してね」

最初はちよんちよんつと、つつくように消毒してくれてたのに、俺が痛がるときゆううつと押し付けるように消毒液を付けてくれる。

「ちよっ!? 待っ!? 痛い痛いって!」

「がーまーんー」

「痛つつつつ!!」

なんて鬼のような時間を過ごし、怪我が比較的大きいところには包帯を、小さいところには絆創膏をぺたぺたと貼り付ける。

まあ………不慣れなのか結構何度もやり直してるんだけどね。さつきから。

「……………よっっ」

出来た! と言わんばかりにパツと俺の腕から手を離すが、その包帯はややダルダルになっており、ちよつと腕を動かすと、スルスルと包帯が解けてしまう。

「あらら……」

「ま、待ってね！ もう一回してみるから」

そしてもう一度ガーゼを取り出し、くるくると腕に巻き付けるように包帯を巻き……手を離す。

「出来——」

「てないな」

「またもやスルスルと脱力でもしたのかのように解けていく包帯。心做しか九條さんが涙目になつてる気がする。」

「九條さん、ちよつとここを抑えてて」

「こ……う……？」

「そう。そんで、こ……う……や……つ……て……折……り……返……し……な……が……ら……」

と、結局自分でやった方が綺麗だし一発で終わるんだよな。……とは言わないけど、半分包帯の巻き方を教えるつもりで説明をしながら巻いてみる。

そして少しだけやってみせると、後は九條さんをお願いすることにした。すつこい申し訳なさそうな顔してたから。

「……………」

「……………」

ゆつくりと慎重に包帯を巻いているだからだろうか？ 真剣になっている九條さんはともかく、俺も特に話すことがないため二人とも無言になる。

だが、その空気感を破つたのは九條さんだった。

「酷い怪我だね」

「そうでもないだろ。ちよつと切り傷が目立つくらいで」

「ユージャーに襲われたんだよね」

「まあ……………」

事実襲われたしたな。俺も結構ノリノリで抵抗しちまったけど……………本当にヤバかったな。

本当に……………色んな意味で。

「人を襲うなんて……………やつぱりそんな人が実際にいるんだ……………」

「……………そうだな。力つてのは人を狂わす……………いわば金みたいなものさ。持たざる者がそれらを手にした時、人は予測できない行動をするもんだ」

「……………そうなのかな」

「一応言つとく。この街には人殺しがいる。それだけじゃなく力を試したいって理由だけで俺みたいな人を襲うやつもいる。襲われやすい夜道とかは気をつけとけよ」

あの女も、もし戦闘がしたいだけの奴でも、ユーザーである以上は九條さんも狙われるかもしれない。

何かしらの能力を持ったユーザーでないと、戦うことが……………

待てよ…………。なんでアイツは俺がユーザーだって事を知ってたんだ？

能力の事は九條さんにしか話していない…………内容はともかく、ユーザーであることは九條さんしか知らないはずなんだ。

だとしたらあのフードのアイツと九條さんが仲間？ 友達とか？ 俺を売った？

…………としてもあれだけの生粋の戦闘狂なんだ。本気で俺を殺すつもりだっただろうし…………そんな奴が仲間を作るか？

…………それに、こうして応急手当をしてくれる理由が…………怪我を早く治してまた再戦する為？

「私ね…………許せない」

「…………え？」

唐突に九條さんが言葉を漏らす。それは怒りのような…………悲しみのような…………どちらにも取れる声だった。

「何の罪もない人達が、突然現れたアーティファクトのせいで傷ついていく…………。当たり前の日常を壊された人が私の知らないところで何人できてしまったのか…………」

「……そうか」

「これからも沢山出るかもしれない。その度にその人の普通の幸せが崩れていく。そんなの……許せない」

「だったらどうするんだよ。俺でも勝てなかったような能力があるんだ。勿論、歯が立たない圧倒的な力を持った奴もいるだろう。そんな奴に説得でもするのか？ そりゃ、はつきり言つて無謀だぜ」

鏡に触れたものを反射する力。いわば如何なるものも弾き返す防御の力でも死にかけたんだ。しかも……能力は何らかの方法で複数個所有することも出来る。九條さんじゃあ……どうも出来ないだろうな。

「迷つてるの。アーティファクトは所有者を選ぶ……アニメではそうだった。だとしたら、私の本心つてこんなにも醜かったんだってショックで……でも、だからこそ正義の為に使いたいって思った」

「醜い心？」

「うん。私の能力は………《盗人》の能力だから」

互いの能力

《盗人》の能力。

それは、九條さん自身を中心とした10メートル以内の範囲の物を問答無用で我がモノとする能力。いわばその範囲内の物に対する「所有権」を自分のモノにするという力。しかも取られたことに対しての記憶が全く無く、オマケに奪った物は「最初から所有していなかった物」となってしまう。逆に戻すことも出来るが、戻したとしても九條さんが奪っていた期間の記憶は消滅してしまう。

つまりは誰にもバレることの無い絶対的な盗人の力。

「なるほどねえ……それが九條さんの力」

……ひとまずはそういう事で話を通しておこう。ぶつちやけ内心ではあのフードの女と手を組んでたんじゃないか？ とか思ってるけど、まだなんの確証もない。下手な騒動は避けた方がいいだろう。

「アニメじゃあアーティファクトが持ち主を選んでたな。それで……シヨックって事か」

端的に言うなら、九條さんの本質が現れた力って事だ。人の物を盗むという力に相應しいと判断された。そりゃあ……………まあシヨツクなのかもな。

それに対して俺の力は……………物を反射する鏡の力。

うーん……………相應しいかもな。

周りが気にかけてくれる事を全て跳ね除け、教員の目に留まらないように人の真似をして生きてきた。昔こそ色々な人が話しかけてくれたりはしたが……………全て突っぱねたからな。

そういう意味じゃあ俺のこの力はまさに相應しいってこつたあ。

「真面目に生きてきたつもりだったのに、誰かのものを自分のものにしたって、そんな欲求が眠っていたなんて……………ね」

「確かに……………自分の醜い部分をさらけ出されたみたいだな。俺も自分の力について考え直してみると……………良い気はしねえよ」

「うん。それで……………なかなか立ち直れなくて……………でも！　こんな力でも誰かの役に立てるのならって……………」

随分と予想通りの正義感の強い人だ……………。傷つく人を見たくない、誰も死なせたくない。よくわからないけど、そんな感じだろう。

「いいんじゃないか？　力は力でも使い方次第だろうし。能力が善悪を決めるわけじゃ

ねえよ。善悪を決めるのはいつだって人間だ」

「人間……」

「どんなに人の為を思つて作られた善のものでも、扱う人間次第で簡単に悪になる。道具や能力に罪はないんだ。九條さんが立派な志を持っている以上は善だろうよ」

「ついそんなことを言つてしまった。別にこんなことを言うつもりはなかつただけどなあ……」

「なんでだろ？　なんか考える前に直感的にこんな言葉が出てきたんだよなあ……。まあいいや。別に嘘でもなんでもないし。本当にそう思つただけだし。」

「今は不思議とさつき疑問は外れているんじゃないか？　とも思うようになった。この九條さんの表情や言葉の重みが演技だとしたら大女優だ。」

「みんなのように冷たくあしらつても変わらせずに声をかけてくれる。迷わずに傷の手当もしてくれる。最初こそ疑つたりしてたけど……今じゃ能力も明かしてくれた。しかも、あの時公園にやってきたのは、サインボールで俺が九條さんの分の会計を済ませた事でのお礼の為にわざわざ探してまで追っかけてきていたらしい。」

「だからこそ……」

「また力の練習相手になってくれよ? お兄さん」

……人を信じないと心に決めたはずなのに、心が揺れ動いてる。だが、その甘さは捨てなきゃいけない。

人を信じたから、俺が甘えたから、過去に俺が一番大切な人を失った。

でも……俺はあの頃とは違う。力がある。誰かに縋らなくてもいいような能力が……。

これは甘えなんだろうか?

この数年、能力に選ばれるほど人と関わらずに生きてきた反動なのか、何故か強く思う。

九條 都このひとは……いや、九條 都このひとだからこそ……信用してみたい。

いや待て……。簡単に心を開くな。もう二度とあの失敗をしない為に……俺はこの人を試そう。

「ありがとう……優しいんだね、竹内くん」

「別にそんな事ねえよ。兄貴から昔似たような事を言われたことがあっただけだ」

「竹内くんのお兄さんが?」

「……………ああ」

「あ……………」

つい出してしまった暗めの雰囲気で察してしまったのか、九條さんは申し訳なさそうに謝ってくる。

この手の謝罪にはもう結構慣れたりしたが、めんどいので適当にあしらって一回で終わらせる。

「とりあえず、九條さんがその立派な正義の心で事件の事を捜査するのは勝手だが、相手はどんなやつかも分からない殺人者。今は下手に動かないことだ。実際、俺もついさっき襲われたしな」

「そ、そうだよ！　大きい怪我はなかったけど本当に大丈夫だったの？」

「正直危なかった。俺の能力……………あ……………《鏡》の力なんだけど、それでも大ピンチだった」

「鏡？」

「そ、《鏡》の能力。受けたモノを反射する力。自分の近くじゃないと効果がないけどな」

「反射……………それは凄そうだね」

「石化じゃなかっただろ？」

「あー！　もう疑ったりしてませんってば」

なんて冗談を混ぜたりしながら軽く自分の能力について説明する。別に能力を教えにくれたお礼って訳でもないけど……なんだろう。本当にさつきから変だ。心のどこかで九條さんを信用してしまってるのかもしれない。

自覚はないんだけど。

「やっぱり、協力出来ないかな……?」

軽くお互いに笑った後に、九條さんがポツリと呟くように言った。

勿論、仲良くはなりたいたいと思ってしまうたりもしている。今までの人たちとは違う何かを九條さんは感じさせるから。もしかしたら………なんて思ったり……

でも、やっぱり——

「ごめん、それは出来ない」

「どうして?」 竹内くん、優しいし良い人だし……私と同じであの石化の犯人を探しているのなら——」

「無理なんだよ」

どうしてもあの時のことを思い出す。

「自分でもよく分からないんだ。色んな感情がぐちゃぐちゃに混ざって、どれが本心なのか分からない」

「どうしても、死んだ兄貴の事が頭から離れないんだ……。だから……。ごめん。俺は多分、仲良くはなれても……。仲間にはなれない」

そう、あの時の……

心境の変化

いや、今はやめておこう。今思い出してもしょうがないし………九條さんの、女の子の前で弱い所を見せる訳にはいかない。

そんなところは見せたくない。

「とにかく、別に九條さんの事が嫌いとかじゃないから。単に俺がワガママ言ってるだけ」

そう、俺がずっと逃げてるだけなんだ。多分俺はこれからも逃げ続ける。ずっと、ずっと……

「それじゃあ……竹内くんは、なんで石化事件を追っているの?」

「なんで? って……聞くまでもないか、そうだな………」

俺は別にこの事件に興味を持ったわけじゃない。この事件をキツカケに色んなアーティファクトが存在する事を確信しただけだ。俺の目的は……

「特に理由はないさ。強いて言うなら……せつかく手に入れた異能力、もっと色んな力を使ったかっただけ」

「まただ。また俺は言わなくてもいい余計な事を伝えている。

「正義感なんて何も無い、ただ興味本位で動いてるだけさ」

「……嘘」

「え……？」

真つ直ぐと俺の目を見て九條さんは強く語る。

「竹内くん、悪をハッキリと悪だと言った。こんな事件も悪いのはアーティファクトじゃなくてそれを扱う人間だって」

「いや、それは——」

「それにいつだって私に危険性を伝えてくれる。心配してくれてる。それって……やっぱり許せないんでしょ？ 能力を使って罪を犯してしまった人が」

「……………」

そんな事ない。

俺は最初にこの《鏡》の能力を得た時、もっと色んな能力のアーティファクトが欲しいと思った。だからこそ行動してたんだ。してたはずなんだ。

「竹内くんはとつても優しいから、さつきも私の分もジュース代出してくれてたでしょ？ ありがとう」

そういうながら九條さんは自分の財布を取り出してその中身を取り出そうとする。

「あ、いや、やめてくれそういうの。別にたかが飲み物一杯分の金なんて貰つてもしようがねえし」

「たかがっ!? 竹内くん! お金は慎重に使わないとダメなんだよ!」

金を軽視した事を言うと、九條さんは凄く前のめりになって身を乗り出して来る。

「おっ、おうっ!?!」

アンタは金持ちの子供なんだから別にそんな事しなくてもよかでしょ。……………とは言えないから胸の内に秘めておこう。

「わかったわかった……ごめんて……」

……………

……

……

なんて会話をしていると時刻は九時を過ぎており、流石にこれ以上の長居は迷惑がかかるかと判断し、家に帰る流れになった。

まだ店の奥にいた九條さんのお祖父さんにお礼と挨拶をして、店を出る。

つかさ、この店って九條さんのお祖父さんが経営してたのね。金持ちはやることす

げえな……

「じゃあ今日はごめん。ありがとう………とりたいところだけど」

「気をつ——え？」

「一応ある程度の所まで送る。ユーザーが襲ってくる危険性もある、俺なら何とかかなりそうだし」

物を盗む能力。それに九條さんのステータス。………もし九條さんがユーザーに襲われでもしたら、多分抵抗すら出来ずにやられるんじゃないかな。

「大丈夫だよ、その時は自転車に乗ってガッツて行くから」

「いや、一応ついて行く。さつきも軽く話した通り俺と戦った奴は遠距離能力持ちなんだ。しかも視線を合わせると身体が麻痺する」

「………ふふ、じゃあお願いします」

「ああ」

能力を乱用する奴が既に1人現れてる。しかもそいつは複数の能力持ちなんだ。その危険性もそうだし、同じようなやつが現れないなんて確証はない。

今九條さんを守るのは俺だけ………

……

やっぱり変わったな、俺。

兄弟の血は争えないってか……。

「それじゃあ行くかうか」

「うんっ」

それからは本当に雑談。他愛もない話をしながらひたすらに九條さんの家があるであろう方向に向かっている。

色んな話をしているんだが……九條さんはある事に触れようとしなない。それに関しては本当に助かっている。

優しい人でよかった。

なんてことを思いながら街灯に照らされている夜道を歩いていると……どうもさつきから気になることが。

「竹内くん、どうかした？ さつきからチラチラと後ろの方を見てるけど……？」

「気が付かない？」

「えっ？」

「俺たち、誰かに付けられてる」

間違いない。気配がする。

ナインボールを出たばかりの時はこんな気配はしなかった。歩き出した途中からだ、しかもずっと俺たちの後ろをコソコソと付いてきてる。

偶然じゃないだろう。

「誰かにつて——」

「振り向いちやダメだ。気が付かれる方が面倒、今は気がついていないフリをして適当な曲がり角を曲がつて待ち伏せしよう」

「えっ、えっ!?!」

「可能性があるとしたら、ユーザーを狙った犯行か………シンプルに九條さんのストーカーだな。」

「……どっちも面倒だぞ……九條さんのストーカーならだいたいぶんマシなんだけどな、アーティファクトユーザーだった場合が更にだるい。もう一戦闘ありそうだ。」

「それにまだ時間は遅すぎるって時間じゃない。まだその辺には人が全然うろついている時間だし、暗い道つて訳でもない。こんな所で能力なんて使われたらそれこそ大惨事だ。」

と、その時にモツクの店の近くを通りかかっていることに気がついた。

……よし。

「九條さん、隣の駐輪場に自転車置いて、あのストーカー野郎を誘い出してみよう。流石にこんな所で能力を使われると……巻き添え食らう人が多くなる」

「でも、まだアーティファクトユーザーつて決まったわけじゃ……それに危ないよ!」

このまま交番まで歩いて警察の人に連絡した方が——」

「ストーカーがユーズーだった場合の対処が無理になる。それに今どうにかして対処しておかないと、下手すれば九條さんがずっとストーカーキングされる可能性もあるだろ？
家まで特定されてくみたくないな」

「……………つ。怖い……………」

「毎日毎日風呂やトイレを盗撮されてくなんてのもあるかもよ？ それを色んなやつに売られたり、自分の部屋に大量に飾ったり……………おおー怖え」

「ひっ……………！」

ま、そんなことはほぼ無いでしょうけどね。金持ちの家ですよ？ セキュリティくらいえげつない強さのもの準備してるでしょ、どーせ。

一旦モックの駐輪場に九條さんの自転車を置いて鍵をつける。二重に付けられたロックを確認して、チラツと歩いてきた方を覗き見ると……………

やっぱり建物の影から俺たちを覗き見ている奴がいた。これで確定だな。

「でも、やっぱり危ないんじゃないや……………」

「大丈夫、俺が守ってやつから。じゃ……………こつち」

「あつ……………」

適当に見つけた裏路地に入る為に、九條さんの手を持って二人で移動する。

割と汚い道に連れてきてしまったことを心の中で謝りながら、曲がり角で息を潜めてストーカーを待つ。

金持ちの美人さんをストーカーなんて……気持ちにはわからなくもないが、結構大胆なやつなんだろうな。一度後をつけている以上はこの裏路地にもやつてくるだろう。

なんて思いながら、お互いが無言のまましばらく時間が経過する。

「あ……あの……、竹内くん……その……！」

「静かに……」

九條さんが沈黙に耐えきれなかったのか、言葉を話した瞬間に歩いてきた方からゆっくりと足音が聞こえてくる。

「きた……」

そしてその足音がもう目前まで迫ってきた瞬間――

「はいどーも、お疲れさん。ストーカーはここまでだ」

意外な人物、遭遇

物陰から聞こえてきた音にタイミングを合わせて、相手が逃げられないように姿を現す。声をかけて動揺を誘い、空いている片手で相手の腕を掴む。

「人をこっさりつけ歩くなんて良い趣味とは言えないぜ。警察に——」

「ちよ、待つてよ竹内！ 僕だよ僕、深沢だよ!!」

「あえ？」

その声を聞いた後、掴んでいた腕の方から相手の顔に視線を向ける。すると見たことのあるような………ないような………クラスメイトがそこに立っていた。

「……………深沢？」

「そうだよ！ ほら、公園に行った時のメンバーにいたでしょ？ 女の子にモテモテの

深沢だよ！」

いや、深沢がいるのはわかったんだが………なんでこいつが？

「なんで深沢が俺たちの後ろを？」

「なんでって！ そんなの決まってるでしょ!!」 竹内と九條さんの決定的なイチャラブ

シーンを録画する為にわざわざこうして付けてたのさ!」

「イチャ……っ!」

はあ……何を言いだすかと思えばコイツは……

「別にイチャラブシーンなんかこねえっつーの」

「でも手を繋いでるじゃん?」

「……あつ」

指摘されて気がつく。これは……あれだ。無意識というやつだ。……つか、あれ?

俺っていつから九條さんの手を握ったんだ!」

焦った俺は慌てて九條さんの手を離す。

「悪い九條さん。咄嗟にとはいえ……本当にゴメン」

「ううん、だだっ大丈夫だよ! 気にしないで」

顔を少し赤らめた九條さんは、必死に普段通りを取り繕おうと頑張ってる。うん。こ

こは変なことを言わずにその場の流れに任せるべきだろう。

「ほら、早くキスしちやつてよ! カメラの準備は出来てるからさっ」

「誰がするかよ……! つかお前もお前だろ! 勘違いだったとはいえ普通後を追っか

けるか!」

「そりゃあ追っかけるでしょ! 「あの」九條さんと竹内だよ! 異例の組み合わせで

しよ!？」

「いや、まあ……そこは否定しないが」

今までの学園生活の中で俺はほぼ誰とも絡まなかったからな……多分誰が友人と一緒にいるだけでも異例扱いを受けていただろう状況で、その相手が九條さんだ。

………ある意味深沢で良かったかも。へんな女の子に見られたりでもしたら……

あー、想像したくねえ。

「だから早くイチヤイチヤしてよ！ 1枚五百円で売るんだから」

「売らせねえよ!？」

………

………

………

深沢からの誤解を解き、せっかくだからという事で九條さんの家の近くまで送り届けることになった俺たちは、再び自転車を引きながら広めの道を歩く。

「そういえばさ、地味々にさつきから気になってたんだけど、その怪我どうしたの？ 竹

内」

「あん？　これか？」

……そう言って指さされたのは例の右腕、そう、あのフードを被った赤目の女との戦闘時に負傷した右腕だ。（自分の力の反動）

まさかバカ正直に言う訳にはいかねえよなあ……

「野良犬に噛まれただけだ、大した事じゃねえよ」

「うえ!!　野良犬に噛まれるとか本当にあるんだ!!　まあ僕だったら絶対に噛まれない

けどねー!」

「なんで？」

「そりゃあこう……サツと波のように避けるね」

ふふつと笑う九條さんと目と目のコンタクトをとり、あの件は秘密にしようぜ、とサインを送る。

まあ、相手がそんな意味まで持っているとは憶測することは無理だろうけど……何となく意味は伝わったはずだ。

「でもちゃんと気をつけておかないとね、私も噛まれちゃったりしたら大変」

「九條さんは平気だよ!　これからは僕が毎日送り迎えしてあげるからね!」

「晴れて立派なストーカーの仲間入りだな、おめでとう。さあ……警察行こうか」

「うそうそ!　冗談だつてば!」

なんて雑談をしていると、それなりの距離を移動していて、もう家は近いとの事でここで別れる事になった。

俺の家は来た道に戻る方向だし、深沢は俺とは別方向の道、九條さんは近くの家と見事にみんなバラバラの方向に向かう事になる。

「じゃねー、バイバーイ」

何食わぬ顔で性格に似合わない女の子のような笑顔を俺たちに向けながら、手を振る深沢に別れの挨拶を告げて、適当に九條さんにも挨拶をする。

「じゃあ俺もこの辺で」

「今日はごめんね？ わざわざナインボールまで来てくれた上に送り迎えまで……ありがとう」

「別に、ただちよつと心配だったただけだ。俺自身が危険な目にあつたばかりだからな」

「腕の方は……大丈夫？ 痛くない？」

「ああ、今のところは」

軽く怪我をしている方の腕をクイツとあげて問題ないことをアピールする。

「無茶はしないでね」

「しねえよ。じゃあな、また明日」

「うん。またね」

可愛らしくこちらに軽く手を振って来た九條さんに、手を上げる程度の愛想のない返事を返し、歩いてきた道に戻る。

……うん。

「今日一日はだいぶん疲れたなあ………」

思い返せばココ最近で今日という一日が一番長かったような気がする。公園に行ったら石像から血が出てくるわ、九條さんから若干疑われるわ、フードの女に殺されかけるわ、クラスメイトがストーカーになってるわ。

……一日のスケジュールがやべえだろ、コレ……アホかよ。

さっさと帰って寝よう。お気に入りの眼鏡（伊達）も買い直さなくちゃいけねえし、単純に疲れたし。

パ。パ。と明日に切り替えて疲れを癒したい。

「ふあ〜………」

寝みい。

4月20日

出会い、そして再び

ピピピピピピピッツッ！

「ん……………」

母親代わりのアラームに叩き起され、電気のついていない部屋を明るくするために窓際のカーテンを開ける。

今日も目が焼ける程に日差しが強く、暖かな陽光を浴びて大きく背伸びをする。

昨日のあの壮絶な一日を終えた後のこの天気。とてつもなく気持ちがいい。学園に行かなくてよければ尚良かったのに。

「なんて言っても変わんねえよなあ……………」

回復しきっていない疲労と戦いながらも、身体を動かして適当な朝食を作り食べる。そしてそのまま家を早めに出て、俺は前々から気になっていたある場所へと歩いて行った。

その道中の道すがら、特に理由はないがスマホを取り出して適当なアプリのログイン

をしていると、ネットニュースの告知が通知される。

その一文には、白巴津川で起こったあの事件に関することが記載されていた。

『行方不明の少女、石像姿で発見される』

見出しだけで怪事件の匂いを漂わすその記事には、俺の知らない情報まで載っていた。

まず、事件の前日にあの石にされた子は突然家に帰らなかった事。そしてあの石像の出現期間と一致すること。つまり……

間違いなく、石化の力を持つユーザーが彼女を殺したのだ。今まではほぼ予測で考えていたが、この件で確実になったと言ってもいいだろう。

石化……しかも中途半端な状態だった。出血していたということは、中身は生きていたか、死んだ直後という事。

……惨い事件だ。

他の文面には彼女の両親のコメントや、事件に関する記事を取材したものが記載されている。俺たちのことは……載っていないようだ。

殺人……ねえ……。

つい昨日まで、こんな他人の悲劇などを目の当たりにしてもそんなに心を動かされることはなかったが、あのフードの女と戦闘になった時から、昔のことをよく思い出すよ

うになった。

そのせいか、自分のでも気がつくことが出来るくらいに変わってしまった。昔に……戻っている気がする。

……純粹だったあの頃に。

なんて考えていると、俺の目的の場所の駅前のパン屋さんにたどり着いた。ここは結構前から学生たちには人気の場所でも俺も一度行つてみたいと思つてたところ。

しかしいざ来てみると結構人が並んでおり、やっぱり止めようと判断しそうになる。並ぶのが不得意な俺からしたら行列なんて心底嫌なのだ。

諦めて別に日にしようかと思つて一歩引き下がると……………

ドンツと誰かとぶつかつてしまった。

「悪い、俺の不注意でぶつかつちまった。謝る」

咄嗟に謝罪をしながらそのぶつかつた人の方へと振り向くと……

「大丈夫よ。貴方だけじゃなくて、私も同じでよく前を確認してなかった。気にしてない」

目の前に立っている人は女性だった。制服的に……………玖方に通っている子だろう。黒髪で短髪の……………なんで横だけ髪がちよつと長いんだろう。

……じゃねえや。黒髪の赤目の子。

赤い目の子が多いな……

でもねえや。まずはしつかりと謝つとかねえとな。

「本当に済まない。……つと」

そこで気がついた。何かのお守りが俺の足元に落ちていたことに。それを拾ってとりあえず眼前の子に確認してみる。

「交通安全……このお守り、君の？」

その予想は当たっていたようで、彼女は自分の元々付けていたのであろう場所を確認した後に、見せたお守りを受け取った。

「ええ。落ちてしまったみたいだね、ありがとう。礼を言うわ」

「別にいい、俺がぶつかっただのが悪いんだしな」

そう言つてその場を立ち去ろうとすると……彼女の後ろ、俺の視線の先で、不自然にこつちを見てニヤツと笑っている人が見えた。

俺は……その人の事を見たことがある。

服装……というか、衣服のカラーリングは違うが、あの時の姿とほぼ変わってねえ。

黒色のパーカーを身につけ、フードを被っているその人は、顔に紋章を浮かばせながらこちらを見ている。

あれは……昨日俺に襲ってきたあの女！

わざわざ俺が気がつくのを待っていたのか、わざとらしく片手を俺の方へと向けて、一本の槍を飛ばしてきた。

「なっ……!?!」

高速で飛んでくるその槍は、俺を目掛けてとばされているが……その間には黒髪の女の子がいる。

アイツ……、この子ごと俺を攻撃するつもりか!?

咄嗟に目の前の女の子の肩を自分の方へと寄せて、その槍を躲す。すると彼女は目を見開いて完全に動揺していた。

「いきなりすまん! とにかくここから逃げてくれ!」

彼女に一言声をかけて避難を指示した後に、あのフードの女の方を確認すると、人影がなさそうな場所へと俺を煽るようにして歩いていく。

「どこかれ構わず能力使いやがって……クソが……!」

「えっ! あっ、ちよつと!」

これ以上好き勝手暴れられちゃあ面倒だ! 俺を挑発する為の行為だとしたらすぐにもでも止めさせねえと被害が大きくなる! 幸いさっきの槍は人には当たってないよ。うだし、俺が明らかかなこの敵の罠にハマれば俺だけを狙うようになるだろう。

そう判断した俺は女の子の横を素通りしてフードの女の元へと走っていく。

……

……

……

細い道を抜け、奥へ奥へと走っていき、たどり着いた場所は鍵も何も閉められていない錆だらけの門に守られた廃ビルだった。

完全に誘い込まれてはいるが……ここなら俺も遠慮なく能力を扱うことが出来る。逆に考えれば俺も抵抗ができるってことだ。幸運と思おう。

ゆつくりと歩みを進めていき、薄暗い階段をのぼり、辺りを探索する。そしてしばらく進んだ所で、あのフードの女は相も変わらずニヤツと怪しい笑みを浮かべたまま俺の事を待っていた。

「やつと来たな、反射の能力者」

「当たり前めえだ……！ 街中であんなに喧嘩を売られちゃあ黙って逃げるわけにやあいかねえだろ」

正義の心、あの頃のように

とある廃ビルの中、その三階の広場……というのだろうか？ 大量のコンクリの柱が並び立っている以外は本当に何も無い埃っぽい場所。

なるほど……戦闘するにはもってこいかもな。

「俺になにか用があるんだろ？ わざわざあんな人が多いところで挑発してきやがって」

「またオレの練習相手になって欲しくてき、楽しい時間を始めようぜ？」

「ふざけんなよ……つたく……！」

やつぱりそういう事かよ。薄々感じてたけど、コイツ生粋の戦闘狂だな……やつぱりあん時にぶん殴つときゃあよかつたか!?

「アレからオレもちつたあ練習をしたんだぜ？ 褒めてくれよ」

パチンつとフードの女が指を鳴らすと、その背後に六つの槍が出現する。

「おいおい……あれからまだ半日しか経過してねえぞ……!?!」

初撃のジャブで既に昨日よりも数が多いんだが!?! あんな数避けきれねえだろ!?!

「本当は止められてたんだが……やっぱり我慢できなくてさ。それじゃあ……始めようぜ！」

気合いの入った掛け声とともに、あの六本の槍が俺に向かって飛んでくる。数こそは増えているが……速度は特に変化は無し。それならなんとか何本かは避けられる。

慌てて鞆を投げ捨て、ギリギリのところを槍を躲す。コンクリの柱などに時折身を潜めたりしながら、上手く自分の姿を隠しつつその場をやりきる。

さつきは避けられないとやってたけど、意外と全部避けれそうだけど……どの道相手の槍を反射しないと俺に勝ち目はない。

五本目をやり過ぎた後に、タイミングを合わせてギリギリまで自分の身体に槍を引き付けて、《鏡》の能力を使って一本だけ槍を返す。

「反射鏡リフレクションッ！」

しかしこれはもう不意打ちでも何でもない攻撃。当然距離が離れていることもあり簡単に避けられてしまう。

「これだよ、これ！ その辺の適当な奴を相手にしても、こうしてカウンターは飛んでこなかったからなあ！ やっぱりテメエとの殺し合いが一番楽しいぜ！」

……!?

「ちよつと待てよ………」

楽しそうに次々に槍を飛ばしてくるフードの女の言葉が気になり、身体を動きをピタリと止める。

その間に飛んでくる槍は全て一つ一つ丁寧に返してやった。

「お前……能力を手にしてから「今」まで、一体何人殺してきたんだ……！」

「じゃあテメエは「今」まで何匹の蚊を殺してきたんだ？」

その言葉と共に飛んできた槍を女目掛けて弾き返す。耳鳴りがしそうなほどの高音が鳴り響く中、しつかりと相手の言葉は聞こえていた。

「害虫駆除と一緒にだつてのかわよ……！」

「よく言うぜ、テメエらも散々殺してきてるだろ。食用と名付けた生き物。自然の摂理に従う生き物。それに……あの石像も、テメエら人間が殺してきてたじゃねえかよ」

「……！」

「特にあの石像だ。能力を手にした奴が好奇心で使ったんだろ？ みんなそうなんだよ、力を持ちちゃあ使いたくなるもんだ。オレも似たようなもんだしな」

「なるほど……！」

ほんつと、こんなことを思うような性格じゃなかったと思うんだけどなあ……全部九條さんのせいだ。あの人と関わってから俺の全部がおかしくなり始めた。

「だったらお前を俺は許さねえ。殺人者と同じ罪人であるお前を許す訳にはいかねえ」

「だったらオレを倒してみろよ」

絶対に影響を受けたわ……元々俺はそういうタイプだったからな、ガキの頃から仮面ライダーマンをよく真似してたもんだ。

九條さん……ちよつと分けてもらうぞ、アンタの正義感。

「当たり前えだ!」

緩やかなカーブを描きながら、俺はフードの女に向かって近づいていく。もちろん全力ダッシュで駆け寄っており、女の方は槍を次々に飛ばしてくる。

可能な限りは無視して避け続け、当たる可能性があるものだけ《反射》を使ってやり過ごしていく。

そして前回のようにあの技を使おうとすると……

「透視——」
クレヤ

「させるかよっ!」

前面に鏡を出現させた瞬間に左右から同時に槍が姿を現す。

「やばッ——」

咄嗟に左側に鏡を移動させて一本を反射させるが……右側から襲ってきた槍に反応が遅れてしまい、身体を少し掠ってしまふ。

「ぐっ……?!」

しかしそこを見事に付け狙われ、前方に鏡を無くした俺は、その方向から飛んできた三本の槍に連続で身体を突き刺された。

「がっ……!!?」

一本目の二本目の槍はそのまま身体を突き抜け、激痛を感じているところに三本目の槍が俺の身体を持ち上げて、そのまま数メートル離れたコンクリの柱に激突される。

なんだこれ……!!? 痛てえどころの話じゃねえ……! 意識がまともに保ってられねえ……!

「なんだあ? オレを許さねえんじゃないやなかったのか? もつと全力でこいよ」

「クソ……野郎……!」

「もつと力についてお勉強しておくべきだったな。せつかくおもしろえ奴を見つけたと思つたのに……この程度か」

抜けねえ……俺の身体ごとコンクリの柱にくい込んでるのか。

つか……刺された場所から出血してねえ……!! でもしつかりと痛みは感じる……

なるほど、身体に外傷を残しはしねえが、感覚のみ相手に伝えられる槍……か。道理で犯人が特定されねえもんだ。この方法でずっと警察の目から逃げ続けてきたのか

……!

「悪いけど、アンタにやあ死んでもらう。鏡の能力は結構ウザかったしな。それが手に

入ればオレはもう誰にも負けねえだろうし……じゃあな、楽しかったぜ」

「俺は死なねえよ……！　これ以上お前を野放しにさせてたまるか……ッ！」

俺はここから動くことが出来ねえが……タイミングを合わせて能力を使って弾き飛ばしてやる……！

「へえ……得意の反射……か」

フードの女は再び怪しく笑みを浮かべると、さっきの量とは比べ物にならない量の槍を周囲に出現させる。

「じゃあこの二十本の槍のうち、どれを反射させるんだ？」

眼前に広がるのは無数の槍。前方だけでなく、俺を囲うように扇の形に槍が出現し、その全てが俺に先端を向けている。

「なっ……!!？」

「誰も六本が限界だなんて言っていないぜ？　お兄さん」

……っ

絶望だった。

心のどこかでは絶対に負けないと思っていた。反射の能力を俺なら完璧に使いこなせると思い込んでいたんだ。でも実際は違った。

でも……諦めない。借り物の正義感でも俺はそれに誇りを持つてる。

その土壇場で理解出来た。なんで俺がほんの少しだけ変わったのか。なんでこんなことを思うようになったか。

九條さんが兄貴に似てたんだ。心が似てたからだ。
だからこそ……

「それでも俺は諦めねえ！ 悪は必ず俺が裁くッ！」

「そうかいそうかい。じゃ……またな」

フードの女が俺を見て片手を上げて準備をする。そしてその腕が振り下ろされそうになった時——

「パニツシユメントツ！」

救世主、罪への意識

突如聞こえてきた声、その声と共に俺の後ろの方から雷のような轟音を鳴らしつつ、凄まじい光が無数の槍をかき消していく。

一つ一つを確実に打ち当て、瞬く間に槍は消滅していった。あまりに突然の出来事に脳の処理が追いつかない。

「チツ……仲間がいたのか」

「なか……まっ？」

その言葉の意味を理解出来ずにいると、斜め後ろの方からコツコツと誰かがこつちへやって来ている足音が鳴り響いてきた。

「仲間ではない」

その足音は徐々に大きくなっていき……

「ただ、敵でもない」

その直後に、あの光が俺の身体を貫いている槍に当たり、粉々に吹き飛ばす。それほど破壊力がある力を、的確に槍だけに当てて。

「一言で表すのならば……同士……ね」

そう言つて俺のピンチを助けてくれた人物は……

「玖方の……子？」

俺がフード女を追いかけける前に駅前でぶつかつた、黒髪の子だった。

「いつまでそこで寝ているの。さつきと立たないとまたやられるわよ」

「言つてくれるじゃんか……」

おもつくそ身体を貫かれてるのを見てただろーがよ……。くつそ……

ま、助かつたけど……

「ふーん……」

そんな俺たちの会話を邪魔するように、フードの女は玖方の子に向かつて四本の槍を

飛ばす。

「……！」

その槍を見た玖方の子は咄嗟に構えてその槍を避けようとするが……

「避けなくていい。そのままそこで立つててくれ……リフレクション反射鏡ツ」

その子の前に鏡を出現させ、その四本の槍をフードの女の方へと跳ね返す。

「さつきはありがとう、助かつた。後は俺に任せてどこか遠くへ逃げてくれ」

「嫌。そもそも貴方一人じゃまたやられるのがオチ。ここは私の能力だけで十分」

「いいから逃げろって、そろそろ奥の手が使えるタイミングになるから俺だけでも勝てる」

「それに、私は「玖方の子」ではない」

「人の話聞けよ」

ゆっくりと腰を上げて、俺も玖方の子の横に並ぶようにフードの女を方へと身体を構える。

「とにかく、今も見ただろ？ 防御に関してなら俺は問題ない、時間さえ稼げりゃ俺の勝ちなんだ」

「それなら、私の矛は無敵。貴方が時間を稼がなくてもすぐに終わらせられる」

……くっせ、コイツ結構頑固だな。いくらユーザーだとしてもあいつはマジモンの戦闘狂、油断をすれば簡単に死んでしまうだろう。

「ジ・オーダー……アクティブ」

彼女が詠唱のようなものを唱えると、玖方の子の左目に紋章が浮かび上がり、不思議な光の線がその左目に集まっていく。

「おっと……それはまずい……！」

少し慌てた様子でフードの女は数本の槍を出現させて、その全てを玖方の子に向かって飛ばす。

チラツと玖方の子の方へと視線を向けると、彼女は微動だにせずに、じつと相手の方を見ているだけ。

その顔には若干の焦りの色が見えた。

「反射鏡リフレクションッ！」

それを確認した後に、咄嗟に能力を使い、彼女を槍から守る。

「おい！ 何棒立ちのままにいるんだよ!? 危ねえぞ!？」

「……万能ね、その能力」

「だから人の話を聞けって——」

「この場で言い合うのは無駄だと思うのだけれど?」

……!

いや確かにそうだけどき! 口喧嘩してる暇じゃねえのは十分わかってるよ! っ
 たく……!

「そうだな! 時間の無駄だ!」

落ち着いて考えろ。状況を読め。

この玖方の子の能力は確かに攻撃力は高いんだろう。しかも範囲も広い。それはさつき助けられた時に実際に目で見たから確実な情報だ。

そして俺のこの能力、一面分しか守ることは出来ないが……範囲攻撃を駆使すれば最

悪こちらへの攻撃は全て防ぐことは出来る。

仮にあのフードの女が逃がしてくれると考えても……ここは協力した方が勝率が確実に高い。

「玖方の子、悪いけど何言われても俺は逃げるつもりはねえからな。アイツと戦うってのなら意地でも俺はお前を守る、俺の力はその為の能力だ」

「そう、私も悪を前にして背を向ける気は無い」

「だったらここは協力しねえか？　悪いが、どんな力を持っていても1対1ならアイツに勝つのは難しいだろう。アイツ、その気を出せば視線を合わせるだけで動きを止める事ができるんだ」

「……………そのようね」

……………「そのようね」？　どういう事だ？　なんであたかも自分の経験のように……………！

「そうか！　さっき飛んできた槍を避けなかったのって、視線を合わされて動きを封じられてたのか!？」

「そういうことか……………、だったら協力する気になったか?」

「貴方の能力は優秀、さっき奥の手が使えるって言ってたわね」

「ああ！　大量の槍をアンタの能力で蹴散らしてくれりゃあ、なんとか相手をひるませ

ることは出来ると思う」

「じゃあその作戦で行きましょう。同じ志を持つ同士として協力するわ」

「そうこなくつちやあなあ！ 玖方の子！」

真隣にいる玖方の子と意気投合すると、俺は右足を前に出してすぐさま走ることが出来るように腰を軽く落とす。

そしてわざわざ待っていてくれたフードの女を目掛けて走り出そうとした時、玖方の子から声をかけられる。

「希亜」

「……は？」

「玖方の子」じゃない。私は「結城 希亜」名前よ」

……あ、さつきから気にしたもんな。まあたしかにこの呼び方は失礼だったか。

「そっか、俺は「竹内 蓮太」。数分の間よろしくな、結城さん」

「希亜でいい。私も蓮太と呼ぶ」

「はいよ……じゃあ行くか、希亜」

少し気を引き締めて、改めてフードの女を睨む。睨んだ先のあの女は戦闘が楽しみなのか、不気味な笑みを軽く浮かべて、俺たちの攻撃を待っていた。

「作戦会議は終わったか？」

「ああ………！ 負けた時の言い訳でも考えとけよ！」

「貴女の罪は………私たち《ヴァルハラ・ソサイエティ》が裁くツ！」

………ん？

一件落着？

……せっかく格好つけてなんかいい感じのチーム名叫んでもらったところ悪いけど、何それ……？

「ヴア、ヴアル……？」

「……………」

「決まった……！」

この状況には流石のフードの女も心底呆れている。あえてツツコミがない所が結構キツイんだけど！ 俺に言えっただろ！？

つかなんだよこの状況！ 明らかに戦闘パートに入る流れだっただろ！ 一人は困惑して、一人は呆れて、一人はドヤ顔ってどゆこと!？

希亜の方をチラツと見ると、もうこの時点でものすげえ満足そうな顔してるんですけど!？ え？ 何!？ 俺も大概だったけど……この子もしかしてやばい人!？

「はぁ………」

ほらー！ あのフードの人ため息吐いてますけど！

「おい……！ どうすんだよこの空気……！ テメエのツレだろ何とかしろよ！」

「俺に言うなよ、俺だつて困惑してんだから！」

何故か敵の女と味方の扱い方を相談するはめになるとは。つかなんだよお前も！
さつきまでなんか手の付けられない様な悪人だつただろ！

「さあ……受けなさい、私たちの制裁を！」

「まだやつてんぞオイ」

「だーかーら！ 俺に言うなよ！」

つつてもなあ……もうお相手さんも構えを解いてるしなあ……

今やんわりと感じたんだけどなんか……あのフードの人もそんなに悪いやつじゃない気がしてきたんすよ。もしかして、人なんて殺してないんじゃないかね？ つて。よく考えりゃあ「人を殺した」なんて一言も言つてないし。俺の想定で勝手に俺がキレただけなんじゃないかね？ つて。

全部口だけだろ、多分。だつて本気で俺を殺すつもりならいくらでもチャンスはあつたろうに。わざわざ昨日も俺に自分を認識させてから戦つたし……本当に俺を殺したかつたら不意打ちで一撃で仕留めりゃいいんだ。

でも、そうしなかつたつて事は……つまりはそういうことだろ。

「はあ……もういい。そんなムードじゃなくなつたわ」

「正義の裁きを受けた時、貴女は——」

「いやもういいつつてんだろ。明らかに今終わる流れだっただろ」

「いや……なんかもうごめんさい。彼女もきつと結構混乱してるんです、でも悪い子じゃないんでその……そつとしてあげてください」

逆になんか申し訳なくなっちゃったよ！

ほら、絶対そうじゃない！ ガチの悪人ならここでそんな反応にはならんでしょ！

「テメエも大変だな、オレんところにも似たような奴がいるから気持ちはわかるぜ、同情するよ」

「……なんかお前とは気が合う気がする。悪いことさえしてなけりゃ根本は結構似てるしな」

能力好きでトゲのある発言で多分周りの友人は結構少ない派だろ？ 公園で初めて

会話した時もなんか、目的は似てたし。

それに……槍で貫かれた場所も、もう痛みは全然感じない。これ、多分殺傷能力低いな？

「……希亜、今日はやめとこう。確かにアイツを罪人と見なしてたけど、よく考えたら十分な証拠が無い。全部俺の……俺たちの推測だし、決定的な証拠を掴んでからでもいいだろ？」

「……」

「つか、大体本物の悪ならこのタイミシングで奇襲するなりなんなりするって」

「……蓮太がそう言うのなら」

「はあ……何とかなかった。」

「つかコレあれだろ、絶対さっきのチームの一員になってるだろ。希亜の頭の中で。」

「但し嚴重注意の元、最大限の警戒をする。思想は極めて危険な人物。それは蓮太も身をもって経験したはず」

「そりゃわかってる。危ない片鱗が見えたら、その時は……な」

「ええ、約束の地で集みましょう」

「ごっだよ。」

「助けてくれてありがとな」

「礼はいい。私は蓮太の正義の意志に心を重ねただけ」

「え……あ、はい。ほんとにありがとう」

「また会いましょう」

「希亜はクールに後ろを振り向き、ゆっくりと下へ降りる為の階段に向かって歩いていく。」

「いや、さっきは本当に助かったんだけど……俺とはまた違ったジャンルで友達いなさ

そうだなあ……せめて、話は合わせてあげよう。

それでもヴァルハラなんちやらには入らないけど。

でもまあ……悪い人じゃなかったよな。

なんて思っていると、ツカツカツカーッと希亜がこちらに戻ってきた。

「これ、忘れ物」

「……ID?」

希亜に手渡されたのは何かのIDが記載された紙切れ。

「私のRINGのID。ヴァルハラの間として伝えておく」

「え、あ……うん。後で連絡しとく。ヴァルハラじゃないけど」

「今度こそ、また会いましょう」

「うん。またいつか。ヴァルハラじゃないけど」

再び希亜はくるりと後ろを振り向き、コツコツと足音を鳴らしながらどんどん離れていく。

ヴァルハラじゃないって一応伝えたけどアレだな? 聞いてないな?

……まあ、いいか。

「さて……と、やっぱりお前、根っからの悪じゃないな」

「あ?」

「本気で殺すつもりならいくらでもチャンスはあつたる、今」

「……知らねえよ、少なくとも「オレ」はそのつもりはねえ。ただ楽しみたかっただけだ」
コイツもコイツで友達いなさそうだな。変な奴が周りにはいるみたいなこと言つてたけど……多分相当少ないだろ。

「だとしても、暇なら別に能力の練習くらいなら付き合う。こつちの条件を呑んでくれるならな」

「なんだ？」

「関係ない人を巻き込まないこと。能力を悪用しないこと。とりあえずはこの条件を守ってくれるのなら、何時でも相手になるぜ。能力の特訓なら俺もしてみたいしな」

「いいのか？ オレみたいな奴を簡単に信用して、テメエ自身オレに何度か狙われたんだぜ？」

「水に流す。これから変なことをしないと約束するんなら全部忘れてやるよ」

「さあ……どう出る。」

「……この反応次第で………決めるか。」

「……わーつたよ。「オレ」はその条件を呑んでもいい。「オレ」は別に殺したりすることに興味はねえしな」

「さつき俺を殺しかけておいてよく言うぜ」

「そう言わなきやテメエ全力出さねえだろ」

「……そうだったかもな」

なんて話をしながらふと疑問に思い時間を確認すると……登校時間はとつくに過ぎていた。

「……やつべ、完全に遅刻だコレ」

「……あ？ 遅刻？」

「学園だよ。おもつくそ遅刻確定だ。……見た感じ歳は近そうだけど、お前はどこに通ってんだ？」

「オレはどこにも行ってねえよ」

「そうか」

今から慌てていくのもなあ……どうせ遅刻して怒られるんなら昼休みくらいに行つた方がいいよな。

……力を使ったせいかわ腹も減ってきたし、なんか食うか。

「とりあえずなんか食いに行くけど、一緒に行くか？」

「別に腹は減らねえからいい………と思ったけど、暇だしついてくわ。金持ってねえけど」

「財布くらいもつとけよ」

と、そんなこんなで大遅刻覚悟の上で、適当なところで時間を潰すことにした。ちなみに現段階でスマホの方に学園から電話が何件か来ていたが………まあもちろんガン無視です。

場所は……そうだな、適当に歩いたところで探すか。

「そう言えば名前は？」

なんて名前を聞くと、黒いパーカーのフードを取って赤い目を俺の方に向けながらちゃんと答えてくれた。

「ゴースト」

……まあいいか。

「そっか、俺は蓮太。じゃ、いこーぜゴースト」

「ああ」

登校前のお買い物

「つかさ」

あの廃ビルから移動して、今は街中。何を食おうかと考えながらブラブラと歩いていると、隣にいるゴーストから話しかけられた。

「なに？」

「さつきも言ったけど、よくオレみたいな奴を信用できるな」

「あー……」

確かに……昨日までの俺だったらこんなことにはならなかったかも？　そもそもとしてあの廃ビルまで追っかけて行かなかつただろうしな。

「普通はもつと距離をとると思うぜ？　どうかしてるよアンタ」

「お互い様だろ。…………お、モックでいいか？」

「どこでもいい」

「よしきた」

適当に見かけたモックの店内に入り、俺はテリヤキバーガーのセットを注文する。

……そういやゴーストは金持ってねえとか言ってたっけか？

「なんかいるか？ ちよつとくらいなら買ってやっていいけど」

「いらねえ」

「飲み物は？」

「いらねえつつてんだろ、聞こえてねえのか」

「すみません。今のセットにバナラシエイク追加で」

「チツ……」

感じの悪い舌打ちが聞こえてくる。なんだよ、俺の優しさだろ素直に受け取れよ。

少し待ってやってきた食べ物を持って、適当な二人用の席に座ってシエイクを渡す。

ちなみに俺は烏龍茶。

「はい、これお前の」

「だから、いらねえつつただろ」

「買ってやったんだからちやんと飲めよ、それ俺のオススメの飲み物だから」

「知らねえよテメエが勝手に買ったんだろ」

「え？ なに？ ダイエット？」

「ちげえよ死ね」

なんて適当にセットのポテトをつまみながら改めて時間を確認する。うーん……昼

まで三時間ないくらいか。どこ行こうかな。

「だったら飲んでくれよ、流石に手ぶらの女の子放置して自分だけメシ食えねえよ」

「……つたく」

ゴーストはふてぶてしい態度で、買ってやったシェイクのストローを啜えてちゅーつと中身を飲む。すると――

「んだよこれ甘すぎだろ」

「美味いだろ？」

「ガキの飲み物だろこんなん……」

俺も自分の烏龍茶のストローに口をつけ、その中身を飲む。

「バカにすんなよ！ 俺の好物を教えてやったんだぞ！」

「お前は何飲んでんだ？」

「烏龍茶」

「ふざけんな！ そつちよこせ！」

甘い飲み物がお気に召さなかったのか、買ってやったシェイクと俺の烏龍茶をバツと取り替えて、ゴーストはお茶の方を飲む。

「ばっ！ テメツ！ そのお茶俺のだぞ！」

「甘いのが好物なんだろ！ そつちお前が飲めよ！」

「人の厚意をなんだと思ってるんだ！」

ふぎけやがって……つたく……

取り返してやろうと思ったが、ゴーストは無言を言わず横取りした烏龍茶をちびちびと飲んでいる。しかもなかなか机に飲み物を置こうとしない。

コイツ俺が取り返さないようにずっと持ってやがるな……！

「もういいわ」

もう取り返すのを諦めて、頼んだバーガーの包みを外しパクリと一口。するとそれを見たゴーストはそのタイミングで飲み物を机に置く。

うっぜ！ コイツうつつっぜ！！

んだよイライラすんな……！！

なんて思いながらシエイクの入った飲み物を一口……

「美味っ！ やっぱ好きだわこのシエイク！」

イライラが一瞬で飛んで行ったわ！

「……もうお前わかんねえ」

……

……

……

二度目の朝食を済ませ、店を出た後に再び適当にブラブラと歩く。まずは……アレだよな。

「どこ行くんだ？」

「眼鏡買いに行く」

そう眼鏡。伊達だけど俺なりのオシヤレというか変装というか、なんかそんな感じのやつ。基本的には外出する時には必ず俺は掛けてくんだけど……

「眼鏡……？ ああ、そういや最初はそんなもん持ってたな」

「だろ？ お前にせいでなくなったから買い直しに行くんだよ」

「よかつたじゃねえか、これを機に買い直して」

「おう、ありがとう。余計な出費を出してくれて大変感謝してる」

「ドウイタシマシター」

こいつホントなんなの!?! ココ最近の俺の疲労の原因の殆どは君のせいなんですけど!?!

そんな雑談をしながら俺たちが訪れたのは、適当な商店街の中にある洋服屋。ここはオシヤレ用の伊達眼鏡を取り扱っていると、珍しく品揃えもかなり豊富。俺のお

気に入りの店だ。

ズラーっと壁一面に掛けられている大量の眼鏡を見て、どれにしようかを悩むが……
「どれにするかなーっと……」

「なんでもいいだろ別に。視力悪い訳じゃねえんだろ？」

「ばーか、ちよつとでもいい感じになるようにここは慎重に選ぶべきだ！ お前も才
シヤレくらいするだろ？」

「しねえよバカ。……そこ座ってつからさつきと決めてくれよ」

なんてその場から離れようとするゴースト。

……じゃあなんで俺についてきたの？

「せつかくだからお前も考えてくれよ」

「はあ？」

「一緒に考えた方が早く終わると思うぞー」

と俺に呼び止められたゴーストは、明らかに適当に手に取った黒の眼鏡を持って、俺
の耳に掛ける。

「うおつ……びつくりした……」

「……ん」

……？

「んってなんだよ」

「それでいいだろ。黒いし」

「黒いって理由だけかよ」

「るっせえな、黒が好きなんだよ」

一応選んでくれた眼鏡を手を取って、改めて見てみると……

これってアレじゃねえか？ 前回俺が買った奴の色違いじゃ……？ 前回のやつは暗めの青色のこれと同じタイプだった……

「覚えてたのか？」

「……………偶然だったの」

へえ……適当に選んだのかはわからないが、一応真面目に選んでくれたみたいだな。

「早く終わらせたくて適当選んだのかと思ってた」

「チツ……………！ 適当だ」

だつたら舌打ちすんなよな。

「そつかそつか。じゃこれ買うわ、ありがとな」

「やっぱうぜえよテメエ」

白と黒、事件の直前

この間から何とかしなきゃと考えてた用事を済ませ、店を出たあとも適当にゴーストと色んなところをぶらついた。

彼女はこんな都会に住んでいるにも関わらず、基本的には外で遊んだりしないとの事で、考えつく所を片っ端から二人で移動した。

といっても昼休憩の時間までの約一時間程度では行けるところは限られており、大したところには行けていない。近場で適当にウインドウショッピングを試みたり、人気のないゲーセンに行ってみたり、本当に適当。

しかも俺自身もそんなに外出をするタイプでは無いため、街中の知識が豊富な訳でもない。彼女の行きたい場所も無さそうだし、どこに行こうかと悩んでたのも事実。けど考えるのが面倒になってたのも事実。結局の所は面倒になってブラブラと歩いただけ。

「アンタ色んなところ知ってんだな」

「俺がつつーか、お前が知らなすぎるだけなんじゃね？ どっか色んなところ行ったりはしねえの？」

「行かねえ。アイツはちよこちよこ色んなとこ行ってるみてえだけど」

「……………？ 友達でもいんのか？」

「友達……………じゃねえけど、まあ知り合いだよ」

さつき言つてた希亜と似たような奴つて事か？ つてまあ……………別に気にするところじゃねえな。

「てか思つたんだけどさ、お前つていつつもそのパーカー着てんの？ 昨日もそんな感じの服装だつたよな？」

「んだよ悪いかよ、ああ……………この服しか持つてねえんだ」

「……………え？ 一着を使いまわしてんの？」

「めんどくせえ事聞くなよ……………ちゃんと清潔にはしてる、人の服装にちやちや入れんな」
いやまあ……………確かに黒色のパーカーは似合ってるけど……………なんかこう……………なんつーんだろ。もつとこう……………明るい色の服買えばいいのに。

それこそ白色とか……………つて、そう言えば昨日は白いパーカーだったような……………？

「……………！」

と考え事をしてしていると、ゴーストは何かに驚くようにその場でピクリと動きを止める。

「おい、どした？」

「……………！ なんでもねえ」

……………？ 変な奴だな。トイレにでも行きたくなつたか？

「オレの事よりも、時間は大丈夫なのか？ 随分と長いことウロウロしてっけど」

「んあ？ 時間時間……………あ……………そうだな、そろそろ行かなきゃまずいかもな」

指摘されて改めて確認してみると、もう十二時を過ぎていた。つー事は今は午前の最後の授業中だろうから……………今から向かえばいいタイミングで着きそうだな。

「じゃ俺はそろそろ白泉に行くわ、付き合ってもらって悪かったな。結構楽しかったぜ」

「ああ……………！」

「もう悪いことすんなよ〜」

と大分長い事一緒にいた割には軽めの適当な挨拶で別れを告げて、学園の方へと歩いていく。いちいちゴーストの方へと振り向きはしなかったが、後ろの方から「うるせえ」と言われたので、手を軽く振ってその場を後にした。

コツコツと歩きながら真剣に考えないといけない事がある為、頭をそつちの方へと切り替える。

「……………遅刻の言い訳、どうしよ」

友達と遊んでました！

……………これは怒られるな。つか当たり前だべや、そもそも電話も無視してるんだから。

お年寄りが道端で倒れてて……

ベタすぎんだろ、しかもそれだけの理由で昼間まで遅刻しねえだろうし、まず電話に出るよって話だよな。

寝坊しました！

殺されるわ、下手したら反省文だろそれは。

うーん………面倒くせ、適当に成瀬センセに伝えてそれっぽく誤魔化してもらおうと。あの人も一応立場的に怒るだろうけど、一番話が早く終わりそうだ。

この時はまだ知らなかった。

学園で二度目のアーティファクトに関する事件が起こることを。

「行っただか……！」

危なかった……！ 流石にアイツにこの事実をバラしたくなかったからな。

蓮太^{あのバカ}の姿が見えなくなると、胸の奥から湧き出てくる叩くような痛みを解放し、オレの意識が薄くなる。

「…………ツ！」

ドクンツと心臓が跳ねるような衝撃を身体全身が走り、今度はオレが胸の内に入ったような感覚に陥る。

「…………たたく、さつさと変わりやがれ。テメエのせいでみすみす逃がしちまったじゃねえかよ」

せつかくとついていたフードを深く被り直し、アイツが歩いていった方とは反対方向へと勝手に歩みを進める身体。

こうなるとオレの意思はもう必要ない。

「つかちゃんを殺しとけよな。気に入った奴だからこそぶつ殺して力を奪えよ」

後は眠るように意識が無くなるのを待つだけ……

「聞いてねえなコイツ。まあいい、今はオレのターンだ。好き勝手やらせてもらうぜ」

どンドンオレの身体は街の中を歩いて移動していく。薄れいく意識の中、店の窓に不意に映ったその姿は、自分でも呆れるほどに不気味な笑みを浮かべた、「白いパーカーを着たオレ」だった。

校内火事、その対処

ゴーストと別れてから数十分。予定通りに昼休みに入るか入らないかというタイミングで学園前にたどり着くことが出来た。

本来なら堂々と正門から入ってやりたいところのだが……生徒指導の教員が仁王立ちで門の前に立っている。

「あのハゲ律儀に待ってやがんの……」

遅刻しているのが俺だけなのかは知らないが、間違いなくここで正直にあの門へと行ってしまうと、お説教タイムに突入してしまうだろう。

そんなのかーんべんつとお……

バレないように脇道に入り、そのまま大回りで歩いていつて塀と金網フェンスをよじ登り、グラウンドを突っ切って学園内に入る。ちなみにこのタイミングで授業の終わりを告げるであろうチャイムが響き渡った。

しかし何食わぬ顔で校舎の中へと入り込み、一年の教室が並んでいる一階のエリアを抜けようとする。

ここの学園の個人的に不思議なところなんだが、何故か学年が若いと階段を登らなくていい下の方へと下がっていくのだ。普通逆じゃない？　と思うのは俺だけだろうか。

学年が上がるにつれ一番上に行かなきゃいけないなんておかしいよね？　年寄りを楽させてあげるべきだよな？

そんな事を呑気に考えながら上へと続く階段に向かっていると――

バンツ!!!

とガスでも漏れて爆発したのではないかと疑うレベルの大きな音が廊下に振動する。

あまりにももの大ききの音に思わず両目を閉じてしまう程だ。

「うわっつ?!?!?」

なんだ？　なんだ!?　何の音だ!?

わけも分からずに辺りをキョロキョロを見渡してみると……俺が向かおうとしていた階段の奥、一年のD組から先の教室が並んでいる前の廊下から炎が凄まじい勢いで放出されていた。

「んだよ……!?!?」

火事!?!　誰かが火を付けて大事になつたりしたのか!?!

などと考えている間にも、炎はどんどん侵食の範囲を広げていき……階段から先の廊下は見るに堪えない火の海へと変化してしまっていた。

とりあえず階段付近にある非常ベルのボタンを力強く押し、燃え盛っているエリアを
確認してみる。

「すげえ勢いだ……イタズラで放火しちゃいましたってレベルじゃねえぞ……！」

非常ベルを押すために仕方なくこの燃え盛る炎に近づいてしまったが……流石に目の前が前が曇ってしまうほどの熱量に驚いてしまう。

熱風が凄い……これだけの火力なんだ、教室に閉じ込められている生徒たちは混乱してしまってるだろう。

チラリと教室内を確認してみると、一つだけ窓を全開に開けており、そこから涙目で教室から脱出を試みようとする女子生徒が。

「馬鹿野郎っ！ 窓を閉めろ！ 室内まで火が入ってくるぞっ!!」

「でっ、でもっ!! 逃げなきゃ……!!」

「死にたくねえなら窓閉めてからスマホで連絡しろ！」

「は……はいっ！」

銀髪の女子生徒はポロポロと涙を零しながら慌てて窓を勢いよく閉める。

ベルを押したから消防と警察が来るのは時間の問題、後はこの付近にいる生徒たちを

遠くに避難させて……いや、急いで一年の教室のベランダ側に回り込んで鍵を開けてやるか？

そう、この学園の教室にある複数の窓は、廊下側は内側から簡単に開けられるが、ベランダ側は生徒たちのいたずら防止の為、外側からしか鍵をかけられない仕様になっている。そしてそれは常に閉まっているため、さっきの銀髪の女の子のように、外に出るならこの炎が燃え盛っている廊下側からしか逃げられないのだ。

どうするべきかと悩んでいると……激しく燃える火炎の中、その中心と思わしき所に青く身体を光らせている人影が……

「ううううううあああああああ!!!」

とち狂ったかのように奇妙な雄叫びを上げて、苦しむように両手で頭を抱えている生徒は、拳付近から青い光を放出させて、激しく身体を動かしている。

……なんだよアイツ、頭おかしいのか!?

けれどあの青い光……どこかで見たことが……って、あれは能力を使った時に出てくる紋章じゃないか!?

それに近い……! むしろそうだろ! アイツ能力者なんだ!

よく目を凝らして見てみると、この激しい炎はあの発狂している男子生徒からどんどんと放火されているようにも見える。

方を見る。

先程よりもさらに苦しそうに悶えながら、どんどん火炎を放出しているが……

どうやったら止めれんだよ……あれ……!

とりあえず考えても仕方ねえ! ユーザーが原因なら、アイツの元に行けば何かわかるかもしれないねえ!

一旦炎から距離をとり、めいいつぱい息を吸い込んでから猛ダツシユで炎の中を突入する!

本来ならヘルメット様なものを頭に被ったり、水を頭から浴びたりしてからの方が安全だろうが、この違和感バリバリの特殊な炎なら別にそこまでしなくても問題ないだろう。

上体を前に倒し、両腕を顔の前でクロスさせ、弾丸のように真っ直ぐに発狂している男子生徒の方へと走る。

するとそんな俺を拒むかのように一際大きな火球を勢いよく俺に飛ばし、再び訳の分からない声で叫び始めた。

視界が悪いこともあり、素早くその火球に対応できなかつた俺は、まともはその火球をぶち当たってしまい、漫画の世界にでも入り込んでしまったかのように炎の外まで弾き飛ばされてしまった。

「ぐっはっ……………!!」

まともに当たった両腕が痛い……！ 特に切り傷の残っている右腕に激痛が走る。けれどそんな痛みを我慢しながらも、背中から床に強く叩きつけられると同時に、体を素早く回転させて、痛みを最小限に抑えるために受身を取る。

格闘技の心得を得ていて良かった……！

なんて思いながら燃え盛る炎の方を見ていると、背後から声をかけられる。

「天ッ!!」

「大丈夫!? 竹内くん!」

力の暴走《炎》

「九條さん……と新海……君?」

大慌ての様子でやってきた二人は、眼前に広がる火の海を目の当たりにして、その状況の異端さを認識する。

片や消化器を手にしていながらも、一瞬とはいえ意識を奪われつつある。そして九條さんの方も、受身をとったとはいえ、床に身体を倒してしまっている俺を心配するように両手で支え、校内を襲う火炎に危機感を感じているようだった。

「なん……だよ……! これ……、って馬鹿か俺は!」

自分自身に喝を入れ、ほんの一瞬のロスを取り戻すかのように、新海は手に持っていた消化器を使って、炎の消化を試みる。

「痛っ……」

「大丈夫!? 無理はしないで……!」

心配してくれている九條さんに支えてもらいながらも立ち上がり、新海の消火活動を横目に自分の腕を確認する。

……制服が燃えたり破れたりもしてない……？

異能力で発生した炎だからなにか特殊なのか？ いや、今は別にそれでいい。とにかく

くまずは……

「九條さん、奥にいる男子生徒見えるか？」

俺が燃え盛る火の奥を指さすと、九條さんはその先を見てハッキリと返事をしてくれた。

「うん、見えるっ」

「アイツ……多分ユーザーだ。どういうつもりかは知らないけど、間違いなくこの炎を放出させた能力者だ。九條さんが来てくれたのはちようど良かったかも」

「でも、アーティファクトに通用するかは……、ううん、やってみないとわからないよね」

「そーゆー事。でも問題は……」

九條さんがどうやってあのユーザーに対して能力を發揮できる距離、約十メートル以内に入内するか……だな。

バカ正直に突っ込んで俺のように……

「嘘だろ……!? 消えない……!」

どうやら手にしていた消化器が空になってしまったようだ。そりやそうだ。全力で

放出すれば、たった一つだけでは二十秒も持てばいい方だろう。

そんな現実を表すかのように、未だに炎は何事も無かったかのように燃え続けている。

「まだだ……！ 一本でダメなら何度でも——」

「無駄だと思う。別の方法で消さない」と

「別の方法って!!」

……何が理由で腹立ってるのかは知らないが、彼は冷静さを欠いてしまっている。

「イラついてる場合かよ……。新海君、お前《ユーザー》か？」

「はあ!? こんな時に何を——」

「いや、いい。それならこの火から離れてろ。後で九條さんにでも事情を聞いた方がいい」
やっぱり新海は能力者じゃない。つまりは………どうにか出来るとしたらやっぱりあの能力だけ………か。

「ちよ、一体何が……!! ……っ! 天っ! 無事か!」

さて………どうでるか………。

つつても時間が無い状況でやる事と言えば一つか………! 覚悟を決める俺!

「アーティファクトの形は不明、あの身体のどこに隠してるのかも不明。オマケに本人は発狂状態ときたもんだ。九條さん、そんな中この火の海に入る無謀さはあるか？」

「……。あるよ。私の能力でこの火を消せるのなら……私は……」
「決まりだな！」

熱苦しくなってきたのを理由に着ていた制服のブレザーを後ろに投げ捨て、自分の能力を出現させる。

そして出現した鏡を扇のように横に振り、炎が揺らいだりしないかを確認するが……発生する風が少ない事もあり、さほど意味の無い行動だった事がすぐに確認できた。
「やっぱり強行突破しかねえよな……」

「バラけないで一つに固まって一気に入った方がいいよね」

「ああ」

ここは九條さんの言った通りの方法で行くか。

固まりになるのなら……と思ひ、九條さんの前にあえて並び縦に二人並ぶ陣形を作る。

「さつきから話してたけど、この火を消す方法があるんだろ!？」

「うん。あの奥にいる人、あの人が持つてるアーティファクトを私が回収出来れば」

「アーティファクト……!？」

「要するにあのシルバーアクセミみたいなやつだ！ 見せた事あったろツ！」

「あれか……！ よし、それを見つければいいんだな！」

きっと俺たちの会話を聞いていたんだろう。まず「見つける」事が必要な事すら理解できていたようだった。

それに解決条件である、アーティファクトの回収の話を知ると、有無を言わず新海は自分の着ていたブレザーで何度も何度も火を仰ぎ、無理やり道を作りながら火中に突っ走って行った。

「馬鹿……！ お前危ねえぞ?！」

「口論は無しにしようぜ……!！」

無謀に、けれど勇敢にこの火炎に立ち向かうその姿は褒めてやりたいが……相手はとち狂ったユーザー、何してくるかはわからないし、何が起こるかも分からない。

「くそ……! 行くしかねえ! 九條さんはしっかり俺の後ろに付いてこいよ!」

「え、ええ!」

九條さんの盾になりながら、果敢に突っ込んで行った新海に続くように俺たち二人も火の中に入って行く。

自分たちが火だるまにならないように、できるだけ火の少なく、弱い所を掻き分けるように進み、俺の能力範囲内の半径約2メートルの距離を新海と保ちつつ奥にいる人に向かって走る。

その途中で、わざとらしく身体を振り回し訳の分からない挙動をしている男か

ら先程のように火炎の玉が数発乱射されるが……

「危ない！ 新海くんっ！」

「うわっ!?!」

運悪くそのうちの一发が新海目掛けて飛んでいく。しかし……

「反射鏡リフレクションッ！」

怯んで立ち止まった新海と火球の間に鏡を出現させて、あらぬ方向へとそれを飛ばす。

「な、なんなんだよお前ら……」

「説明は後って言ったろ」

「凄……あんなに大きな火の玉を……」

「行くぞ」

俺にとつては二度目の突撃、一度目と同じく無謀に近い形の突撃だったが、何故か今度は簡単にユーザーの近くまで近づくことができた。

しかし依然としてこの男は苦しそうに悶えている。

本来ならこの辺で能力が使えたら丁度いいんだが……この距離は明らかに十メートルなんて距離じゃない。

「だめ……まだ近づかないと……」

「はあ!? これ以上はかなり近いぞ!」

「わかっている。でも、試してみたら十メートルが限界だったから」

「わけわかんねえ……! 後で説明してもらおうからな!」

……だろうな。俺だつて知らなかったら頭のおかしい厨二病がいるのかと勘違いしてしまうだろうし。

「うおおおおおあああああつ! 俺のおつ! 力がああああああつ!」

……少し先で発狂してるこんな感じで。

なんて小馬鹿にしていると、その声に反応するように天井の一部から火柱が立ち上がる。そして次々と周りの炎も更に勢いを強め始めた。

もう揺れ上がる炎で、I-Dと書かれているはずのプレートが見えない程だ。

まさに地獄絵図だな。

「力がああああつ! 勝手にいいいいいいあああつ!」

……!?! 勝手に!?! 本人の意思で制御できていないっつゝ事か!?!

となるとこれは意図的じゃなくて暴走!?! 能力の暴走なんてそんな事有り得るのか!?! だとするとアーティファクトを奪つてもどうしようもないんじゃない!?!

「熱つ!?! なんだよアイツ、厨二か!?!」

「ある意味「本物」の厨二病かもな!」

マイナスのことばかり考えるな！ どうにもならなかった時に考えろ！ 今はとにかく急いで九條さんをあの男の側まで導くんだ！

一歩一歩を全力で周囲に注意しながら歩んでいく。もちろん前方方向は目で、背後や側面は能力の鏡を使ってあちこちを確認しながら。

そしてついに……

「竹内くんありがとう。やっと射程距離に入った！」

「どういたしまして……お嬢様」

俺が横へと身体を半身分ずらすと、その隙間から九條さんの左手がバツと勢いよく飛び出てくる。

割とカッコいい雰囲気を感じていたが、俺は朝から能力を使いすぎたせいか、その場にガクンと片膝を着いてしまう。

妙に気だるいと思つてたけど……そりやそうか。俺、今日何度鏡をだしたんだ……？

まあいい。今は少し休憩だ……鏡を一旦消してしまおう……

能力を解除して、辺りを確認するために使っていた鏡を完全に消してしまふ。すると予定通りに鏡は消えたが……あの時のように俺の右掌には紋章が持続するように光を放っていた。

「低劣な盗人の力……せめて、世のため人のために……」

九條さんが何かをボソボソと呟く。それに大した意味を持たないことは十分に理解しているが……その言葉は彼女の《心の意思》だろう。

その言葉に呼応するように、差し出された左手の甲に俺とよく似た紋章が浮かび上がった。

「さあ見せてくれよ……お前のその能力……！」

「どれ……？ あの人を凶気に走らせたのは……！」

何かを探すように九條はその左手を動かして能力を扱う。だが……！

その時、右の方から俺たちを襲うように炎の波が迫ってきた。

「反射鏡リフレクションっ!!」

溜まった疲労感と戦いながら、氣力を振り絞って能力を発動させ、俺たちがいる範囲だけその波に飲まれないように反射させる。

「まだか九條っ!!」

「アーティファクトは……どこ……?!」

炎の波を落ち着いてやり過ぎすと、もう一度能力を解除し、その場に尻もちを着くように身体のバランスを崩してしまう。

流石にキツイとはいえ座つてしまうのはまずい……！ 急いで立ち上がらないと

……!

そしてその場に立ち上がろうとした時、ユーザーである発狂した男は両手を大きく振り回し、まるで生きているのかのように炎を俺たちに向かつて飛ばす。

その軌道は緩やかな光線のようにでありながらも、確実に狙っている様な動きだった。

「反——」

咄嗟に反応して能力を扱おうと右掌を前に出すが……

ダメだ！ 間に合わ——

「ぐわああっ!!」

俺が鏡を出現させる前に、新海が躊躇わずに俺と九條さんの前に両手を広げて入り込んで、迫り来る炎から身を挺して護ってくれた。

ReAlize

俺が炎に反応できなかったその時、まさかの新海が身を挺してまで俺たちを庇ってくれた。そんなに仲が良かったわけでもないにもかかわらず、俺と九條さんのピンチに迷わずに助けてくれた。

正直信じられなかった。到底俺にはそんな真似は出来ないだろう。

「おい！ 新海ッ！ 大丈夫か!？」

炎の勢いに押し負けた新海はその場でバランスを崩し、俺に倒れかかるようにして迫ってくる。

咄嗟にその身体を支えた後、新海は問題ないと答えてすぐさまその場に立ち上がった。

九條さんも彼の事を心配してはいたが、能力の方に意識を持っていかれているせい
か、全ての反応が遅い。

「とにかく何かアクセサリーを取らなきゃいけないんだろ!? 俺はどうしたらいい!？」

「どうするも何も、まず非能力者のお前じゃあ……」

「ダメっ！ 能力範囲内から逃げちゃうっ」

「クソッ！」

そうか、別に相手を拘束している訳じゃないから、範囲外へと容易に脱出できるのか。だとするとやっぱりここは俺が無理してでもどうにかアイツの動きを止めないと……

「……範囲ってことは、何メートル以内だったらいんだ？」

「十だ」

「……よし、じゃあ俺がアイツの動きを止めてくる！ その間にその超能力で何とかしてくれッ！」

「はっ!? 嘘だろおい！」

ダダダッ！ と俺たちの返事を待たずに炎をかきわけて新海は男の方へと突っ走る。

おいおいマジかよ……！ 馬鹿というかなんというか……

「え、待っ……新海くんっ！」

アイツはもう俺たちの声なんか聞いちゃいねえ！ だが訳の分からない状況で自分が死ぬかもしれないリスクを背負ってまで、それでも俺たちを信じてくれた！ だってらもう俺たちもやるしかねえ！

「意識を能力に集中させろ九條ッ！ あの勇者を死なせたくないのなら、少しでも早く

「アーティファクトを回収するんだ！」

「で、でもっ！」

「危険を自ら引き受けるのは「無謀」ではなく「勇気」！ アイツを勇敢な者にさせるためには九條が是が非でも奪うしかねえんだ！」

「助けるぞっ！ 迫ってくる炎からは俺が全て守ってやる！」

危険を承知の上でも迫り来る炎に怯まずに立ち向かうバカは、俺が九條さんを説得している間にあの狂った男の腕を鷲掴みにして、その場で取っ組み合いになる。

暴れ回る男を必死に抑えている間に、首からあるアクセサリーがぶら下がっているのが見えた。それは銀色の十字架のようなネックレス。つまりは……

「アーティファクトっ!!!」

俺と九條さんがそう叫ぶと、どこからともなく「正解よ」と聞こえてくる。だからそのすぐ直後に――

「やめろおとおおっ!! 俺のそばに近寄るなああアアアッ!!」

男は更に能力を暴走させて炎の火力を上昇させる。それは少し離れている俺にも十分に灼熱のような熱さを感じさせるもので……

これ以上は新海が危ない！

「新海ッ！ ソイツの首からぶら下がってるアクセサリーを奪え！ それがアーティ

フアクトだッ！」

「……ッ！　これかッ！」

新海はそのネットクレスを力任せに引きちぎり、俺たちに見えやすいようにその腕を高く上げる。

彼は無意識だろうが、それは大正解。あくまで「九條さんの能力」で奪わないと「所有権」は得られない。俺たちが所持していても、何も意味は無いのだ。

「九條ッ！」

「竹内くん、新海くん……あなた達のこと、尊敬するっ！」

無駄にカツコイイセリフを言いながら、九條さんは再び左手を前へ差し出すように伸ばす。するともう一度その手の甲に紋章が現れ、瞬く間に青い光がその紋章から解き放たれるかのように輝き出した。

「お願いっ、成功して……！」

祈るように強く拳を握り、九條さんは身体全身に力を込める。

とうとうあのアーティファクトを奪えたかと思っていたのだが……

「ふざけるなあああっつっつ!!!」

「うおわっ?!?!」

最後の力を振り絞るように狂気の男はギリギリのところまで新海からアーティファク

少なくとも数メートル離れている俺がこんなに苦しいんだ。ほぼゼロ距離であるの男を押さえ込んでいる新海の苦しみは……計り知れない。

俺が……俺が……！

「お兄ちゃんッ!!」

教室の窓からさっきの銀髪の子が決死の思いで新海に叫んでいる。ポロポロに泣きながら、崩れた顔で……

——誰も死なせないッ！

心の奥で叫ぶ。決意を胸に意志を固める。

記憶の底の底、俺が最も憧れた世界で一番偉大な男になるために……

これが俺の正義、これが俺の本当の心。

「絶対助けるッ！」

そう叫ぶと俺の右掌がありえないほどの輝きを放つ。その光は思わず目を閉じたくなってしまうほどの青い閃光で、辺り一面を真っ青に写してしまう程に……

そしてその光輝く右手を、九條さんの左手に重ねる。

すると、その掌から輝いていた紋章は消失し、俺の「右手の甲」に形を変えて現れた。その紋章はまさに九條さんの左手の甲に現れているモノとほぼ同じモノ。

そう、「ほぼ」。

俺の右手の甲に出現した紋章は、九條さんのモノとは「左右対称」で出現したのだ。

そしてそのまま能力を使用すると……視覚ではなく、感覚でアーティファクトを驚掴みにする。

「っ!？」

その感覚は、アーティファクトだけではなく、誰かの手も巻き込んで掴んでいるような感覚がした。

そしてそれを掴むと、本当に相手側へと引つ張られるかのようにグンっと力の限りに奥へと引き込まれそうになる。

例えるのなら……綱引きのように。

溜まった疲労感のせいでこの力は長くは持ちそうにない。短期決戦で仕留めるしか……!

「行くぞ九條ッ! 意地でもこのアーティファクトを引つ張り抜いてやるッ!」

「やっぱり……! この手は竹内くんの……!？」

二人でグツと腰を下ろし、能力に全意識を集中させて全力で引っ張る！
「……！」 頑張ろう、みんなでツ！」

共鳴、重なった心の先に

光り輝く右手、それは実際にアーティファクトを掴んではいないが、この手に伝わってくる感覚はしっかりとアーティファクトを握っていた。

俺だけではなく、多分九條さんの少し小さな手と一緒に。しかし、相手はあんなにとち狂っていたのにも関わらずに、このアーティファクトだけはしっかりと離すまいとバカみたいな力で逆に引つ張り返してくる。

けれど、あの男も体力の限界なのか、徐々に力を無くしていき……数分の激闘の後に、気合いでアーティファクトの回収に成功した。心で引つ張り抜いたネックレスは、ちゃんと九條さんの握られた手に収まっている。

「できた……!」

「へへっ……やったn——」

「すぐにその男から離れなさい!」

アーティファクトの回収に成功したと喜んだその直後、謎の声が廊下に響き渡る。その声を聞いた新海は、きつと無意識下……咄嗟の反射神経で処理したのだろう。即座に

素早く背後を振り返り、ただならぬ危険を感じるこの炎の嵐から守るように、九條さんに飛びつき、距離を取りつつ床に倒れるように伏せる。

身体を床にぶつける瞬間のみ俺が下になり、すぐさま身体を回転させて俺が上方方向に、つまり九條さんの押し倒しているような体制で彼女を庇う。

すると猛り狂った炎は、凄まじい轟音を響かせながら狂った男の方へとどんどん集中的に集っていき……

「アアアアアアアアアッ!!!」

「ア……………」

声がか細く消えたのを合図に、あれだけ酷く燃え盛っていた炎も消えた。

完全に消えた。そこには初めから何もなかったかのように、なんの痕跡も残さず、ただの夢だったかのように。

とにかく今は――

「……………い、ただ……………」

「悪い。怪我はない？」

「だ、大丈夫、ありがとう、助けてくれて……」

割とダメージが酷い俺の身体に鞭を打ちながら立ち上がると、九條さんもゆつくりとその場に立ち上がった。

新海の方も確認してみると、アイツも何とか無事のように、さつきまでの火事と変わりきってしまった現状に納得出来ない様子だった。

改めてあの発狂していた男を確認してみると……未だに白目を剥き、泡を吹いて倒れている。しかしその呼吸はやや激しく乱れており、そのリズムは不規則になってしまっている。

紋章は消えていた。

そしてこの建物も、俺たちの身体も、あんな火の海の中にいたのにも関わらず無傷。途中から疑問ではなくなっていたが……まあ良く考えればおかしいよな。

なんて思っていると、やっつとサイレンの音が俺たちの耳に届く。

「遅すぎんだろ……」

「やっつと消防車が来たか……。ここから離れた方が――」

「お兄ちゃん！」

「いてえ!？」

事態が収まるや否や、さっきからボロ泣きいていた銀髪の女の子が教室から飛び出し、新海の腹に突進でもしているかのようにしがみついていく。

他のクラスの子たちも、今がチャンスだと慌てて避難を開始したようだった。

「怖かったあ……!!」

「もう大丈夫だ」

泣きじやくつてる女の子の頭を、新海は優しくぽんぽんと頭を撫でる。

そうか、どこかで見たことがあると思つてたら……フェスの時に会場にいた妹さんか。

兄妹、羨ましい。

そんな時、九條さんと視線が重なり合う。お互いに少し笑うと、俺は緊張の糸が切れたかのように身体中から力を失い、その場に倒れそうになる。というかむしろ倒れた。

「わわっ!」

そんな俺を九條さんが支えてくれたが……そこから先の記憶はない。

多分俺は氣を失ってしまったのだろう。

……

……
……

「おーい！ 蓮太ー！」

懐かしい声が聞こえる。俺は誰かに呼ばれているようだ。

「よくやったな！ さすが俺の弟だっ！」

周りは真っ白な空間、そこには倒れていた俺と、死んだはずの兄貴がいた。

「二期ヒヤヒヤしてたけど、お前がすっかりとしてくれてよかった」

いいや、しっかりなんか出来てないさ。俺はあの時、九條さんの心に突き動かされただけだ。新海の心に同調しただけだ。

「どんな事が理由でも、ちゃんと友達を守れたじゃねえか！ お兄ちゃんは嬉しいぞお」
止めてくれよ、別に友達なんかじゃやない。俺は友達なんか作らないって決めたんだ。

「……。まだあの事を気にしてるのか？」

ああ。ごめんけど、俺は多分この先簡単に人を信用出来ない。

そりゃあ困ってる人がいたら助けたいと思うさ、身体も勝手に動くし、実際に悪は許せないと断言もできる。だけど……怖いんだ。

「でも、あの子ならきつと大丈夫なんじゃないか？　もう一人の子は……ちよつとわかんないけど」

多分。でもそれも確実じゃないじゃないか。いざと言う時、人は簡単に裏切る。我が身大事さに友を捨てる。そんなの……もういいんだ。

「あの男の子はそんなんじゃないやなかつたと思うけどなあ、俺は」

……あれは九條さんを守つたんだろ。男なら女に格好いいところを見せたいもんさ。

「じゃあ蓮太もそうだったんだな！　その……九條？　さんを必死に守つてたじゃないか」

うるさい。

「でも……蓮太」

なに？

「お前は誇つていい。あの時のお前の判断は間違つてなんかなかったし、俺も恨んだりはしてない。むしろ俺は誇っている！　お前は最後まで他人の為に命を懸けてた、最後までみんなを信じてた！」

「だからこそ、「今」友達を裏切つちやいけない。蓮太を心から信じてくれた人が、少なくとも何人かは絶対にあの場にいたはずだぜ？　その子たちを裏切つちやいけない」

「蓮太が、蓮太の嫌う「裏切り者」になるな。そう考えると……この事件、アクセサリ―

の件はいい機会かもな」

何故そう思うんだ？

「この先、蓮太だけじゃ必ず限界が来る。それはこの件に限ったことじゃない。これから先の人生、きつと何度も躓く。何度も心が折れかける。人間ってのは一人じゃ生きてけないんだよ」

「誰かとの繋がりがないと辛い事ばかりでとてもじゃないけど……な。だからこそ、友達を作れ！ 失ってしまった友情を取り戻す時だ！ そうだな……まずは」

「蓮太が今、一番信頼している人は誰だ？ その人から友達になってみよう！」

……それは……

「今の俺の話聞いて、真っ先に浮かんだのは？」

浮かんだ……のは……

九條……さん。

気持ち、前向きな一歩

「……………」

目が覚める。そこは知らない天井だった。いや、一応見覚えはあるが……

恐らくここは保健室。蛍光灯で照らされたこの部屋を見渡すと、薄緑色のカーテンで囲まれた所のベッドの上で寝転がっていた。

そして俺の右側の一番近いところに九條さんが、その反対側に新海兄妹が座っている。

「ん……………」

重い身体を動かし、とりあえず上体を起こす。

「あ、目が覚めた?」

「九條……………さん? それに新海たちも……………」

頭が若干クラクラとする。そうか……………そういえば俺はあの校内火事の流れて気を失って……………

「心配したんだよ? 大丈夫? 痛いところとかはない?」

「ああ、別に問題は無い。悪いな、心配かけて」

「急に倒れたからな、やつぱりあの超能力の代償……とかなのか？」

「わかんねえ、けど……多分そうだろう。能力使ったらアホみたいに疲れるし」

それに……あの時の能力。あれは明らかに俺の能力じゃなかった。あれは……九條さんの能力。なんで俺が使えたんだ？

「それで……妹さんだろ？ そっちは大丈夫なのか？ 怖かっただろ？」

「あつ……、どうも、「新海 天」です。大丈夫です、ご迷惑おかけしてすみませんでした……」

……あんな恐怖を経験した後だからか、天と名乗る女の子はオドオドしく、弱々しい声で自己紹介をしてくれた。

「そうか、それならいいんだ」

寝ていた身体を起こすようにぐーっと背伸びをし、ベッドから下りる。

「もう大丈夫なの？ もう少し寝てた方が……」

「んや、大丈夫。それにいつまでもここに居るわけにはいかないだろ。あ、それと、あの後どうなったんだ？」

「え？ あ、そうだね。ちゃんと説明しておかないと……」

どうやら九條さんの説明によると、俺が倒れたあとはサイレンの音が急激に集まりだ

し、消防や警察が素早い動きで消化と避難の準備をするが、もちろんその場には炎の欠片も出現していない。

不思議に思いながらも、あの発狂していた男を保護して、事情聴取で終わったようだ。その後には体育館で全校集合、軽い校長の話があった後に解散となったのだが……みんな下校の令がでていて帰る人が続出する中、俺の事を心配してくれていたようでわざわざ残ってくれたという。

ちなみに新海と九條さんは、教員たちからのありがたいお説教を食らったらしく、気を失ったのはラッキーと思ってしまうた。

それはそれとして……もう一つの興味深い出来事が。

「それで、人形が空を飛んでたつてのは？」

「うん。ついさっきまでいたんだよ？ アーティファクトの説明を軽くしてくれて、話の流れでそのアーティファクトの収集を手伝うことになってね」

「俺と九條でひとまず協力しあつて、『魔眼』のユーザーを探すことにしたんだけど、どうだ？ 竹内も協力してくれないか？」

「協力してくれつたつてなあ……」

いきなり過ぎてわけがわかんねえよ。ええつとまずは……

「順を追つてちゃんと説明してくれ、俺だつてアーティファクトについては詳しくは知

らないんだから……」

「あ、うん。ええつとね——」

少女説明中……

「……要するに、もう一つの世界。「異世界」に存在する魔術を誰でも扱えるようにしたのが《アーティファクト》そしてそれが、《世界の眼》の崩壊を合図にこちらの世界に流失した……と」

「どうやらそうみたいだ。そこで集めるのを手伝って欲しいんだとき。そして数あるアーティファクトの中で、最も注意すべき能力が石化の能力。名前は《魔眼》のアーティファクトらしい」

「なるほどねえ……」

そして九條さんの能力は、全てのアーティファクト所有者に対しての決定打となる力

を持つている。理由は、アーティファクトを《盗む》ことでその能力ごと奪うことができるから。条件さえ整えばどんな相手の能力も奪える最強の手段となる。

だからこそ九條さんにそのぬいぐるみ……「ソフィーティア」は協力をもちかけた。けれど、どうやら新海はそのソフィーに何やら危険視扱いを受けているようだ。その理由は、実は新海も《アーティファクトユーザー》だったという事。しかし手元にアーティファクトを所有しておらず、どんな能力なのかも一切不明。そんな事前例がない異常事態らしく、最大級の警戒をしているらしい。

「ソフィーによると、竹内の能力も上手く扱えば最強と呼べるほどの強さを持つてるらしいんだ。最初はアイツ、竹内のアーティファクトも回収しようとしてたんだけど……九條が必死になって止めてた」

「そうなのか?」

「ああ。「竹内くんは絶対能力を悪用なんかしません!」ってさ」

「……………っ!」

チラッと九條さんの方を見てみると、何故か顔を真っ赤に染めてわたわたと身体を動かして、目をかなり泳がせていた。

蓮太を心から信じてくれていた人が、少なくとも何人かは絶対にあの場にいたはずだぜ？

そんな兄貴の言葉を思い出す。

本当だった。こんな俺を信じてくれている人が……本当にいたなんて。

……嬉しい。

「そっか、ありがとう。九條さん」

「わっ、私は絶対に竹内くんは大丈夫って信じてるからっ！ ただそれを伝えただけだよっ」

「ははっ。否定になってないぜ」

思わず笑ってしまう。やっぱりそうだ。優しくされたからなのかわからないけど……やっぱり俺は九條さんを信用してる。他の人はともかくとして、九條さんにだけは心を開いてしまっている。

「それで……、どうだ？ よかったら俺たちと協力して欲しいんだけど」

「協力ねえ……」

もちろん協力はしてあげたい。仲間が多い方が絶対に得する事が沢山あるが……あくまで俺が信用したのは九條さんだ。それに……ないとは思うが、最悪の結果九條さんが俺を裏切ったとしても、ダメージが少なくなるように、下手に仲良くなりすぎるのはまずいかな。

まだ俺も慣れてないんだ。少しずつ、少しずつ仲良くなれば……

「俺はそういうの苦手だから悪いけど断るよ。でも、力が必要になった時、連絡してくれたらどこだろうと駆けつける。少なくとも……味方と考えてくれてもいい」

「……まあ、今はそれでもいいか。じゃあ何かあった時は頼む」

「ああ」

このくらいが丁度いいだろう。下手に仲良くなりすぎず、けれども敵対はせず……いざって時の戦力は大きい方がいいだろうしな。互いに利用し合う仲ってことだ。悪い気はしない。

「そろそろ帰ろうぜ、みんな下校してるんだろ？俺も休むなら家で休みたいしな」

「あつ、私送っていくよ」

「いいって、別に普通に歩けるから」

「昨日のお礼に」

九條さんは、振り向き際にパチッと目配せをして、可愛らしい笑顔を見せる。

「別に大したことしてないんだけどなあ……」

「翔の兄貴、これは空気を読んだ方がいいやつでは？」

「お前さつきまでテンションガタ落ちだっただろうがよ。急になんだよ」

鏡、その力

時刻は午後三時、もうすっかりと他の生徒が下校しきつた道を、九條さんと二人で歩いていた。

なぜ二人なのかと言うと……頑張つて元気を出そうとしている妹さんが、なんか大慌てで兄を拉致つたからだ。

一応アーティファクト関連の話を知っている時も、何食わぬ顔でその場にいたから、あの妹さんもその辺の話は理解しているんだろうけど……まあなんか理由があつて兄を連れ回してるとるんだろ。

「別に大丈夫だつて言つたのに」

「それでもダメだよ。あつ……そうだった……はい、これ」

「……ん？」

何かを思い出したかのように、九條さんはカバンから取り出したものは、俺が今日の朝買ったばかりの伊達メガネだった。

律儀にタオルのような物で包んでくれている。

「そうか、またいつの間にか無くなったと思つてたら九條さんが持つててくれたのか。傷がなくてよかつたね、あんなに激しく動いていた中、廊下に落ちてたからちよつと心配だつただけだ」

「ありがとう。確かにそうだ、これは大切にしなくちゃいけなかつたからさ」

「竹内くん、メガネ新しくなつてるね。買い換えたの？」

「ああ、前のやつが壊れたからさ。ほら……こないだの夜の件で」

「ああ……」

「そんでもつてこれは、アイツが選んでくれたやつだからな。またすぐ買い替えたりしたら気分も悪くなるだろ。」

「だから大切にしないと。」

「にしても連日で変なことに巻き込まれるなあ俺。これもユーザーになつた運命なのかね」

「その度にこんな怪我をしてたら大変だもんね」

「そう言つて九條さんは俺の右腕を指さして笑う。」

「つか今気がついたんだけど、なんか腕の手当が事件前よりも綺麗になつてないか？」

「あれ……、そういえばなんか綺麗になつてる……？」

「えっ？ ……………あつ！」

またほんの少し顔を赤らめて、「しまった!」といった表情をする九條さん。もうそれで全てを察することが出来てしまった。

「そういう事ね。ありがとう、前回より上手くなってるな!」

「ちち、違うよ! 私じゃないよ! これは……そう……新海くんが——」

「そっかー、違うのかー、せっかく包帯の巻き方を教えてあげたのに全然活用してくれなかったのかー」

わざとらしく棒読みでイタズラしてみる。すると「そういう訳じゃなくって——」と予想通りにあたふたとし始めた。

なんだこの可愛い生き物。

「わ……私が……頑張りました……」

簡単に認めちゃったよこの子。結局散々言い訳を考えた結果何もいい案が出なかったのかよ。

てかそもそもなんで隠そうとしたんだよ。普通に言えばよかったのに、上手くできてる? みたいなノリで。

「はい、調子に乗りましたごめんなさい。でも本当にありがとう助かったよ」

「い、いいよこのくらい。助けてもらったのは私の方だし……?」

「あれは……まあ咄嗟にだよ。見たところ怪我もなさそうだしよかった」

「おかげさまで、ありがとう」

そして何気なしにこんな会話をしながら帰ってますけど……これってなんかカッブルっぽくない？ だって女の子と二人で下校だぞ？ これ冷静に考えたらヤバくない？

帰り道が一緒な訳でもないのに二人で並んで帰るって……なんだろう凄い！

しかも相手が九條さんだからなあ。この状況に若干の嬉しさはあるけど、一番怖いのはこの姿を見られて噂される事だよな。

前までの俺なら「どうでもいいや」って投げてたんだろうけど、今となっては少し気になる。

まあでも……それはそうなった時に考えればいいか。

「竹内くんのお家ってどの辺りなの？」

「ん？ あくそうだな……ぶっちゃけもう着く頃だから、別にこの辺まででもいいぞ？」
「あ、ちゃんとお家まで行くから大丈夫だよ。そっか、それじゃあ……竹内くんのお家上がったっていいかな？」

「お家……お家ッ!？」

え、なに急に、怖い。

人間怖い。

「なして!？」

「ちよつとお話しておきたい事があってね、何処彼構わずに口にするわけにはいかないから……ダメかな？」

「んや、別に俺は構わないけど……まあいいか。じゃあ上がってけよ」
「うん。ありがとう」

とそんなこんなで俺の家に社長令嬢を上がらせることになったが……大丈夫か？
俺。粗相のないようにしないと社会的に殺されるかもしれないぞ。

しかもこんな美人でみんなの憧れの巨乳つ子……下手したら男子たちからも背後から刺されるかもしれない。それに……九條(父)にでも知られてみる、「私の娘に何をしたア——ツツ!!」ってなったりしたら……

……よし、最低限の会話で済ませてさっさと帰ってもらおうか？ 首ちよんば、身体ちよんばよりはマシだろ。

……

……

……

「ど、どうぞ……」

「お邪魔します」

とりあえず、自分の家の扉を開けて、先に中に入ってもらおう。

色々考えはしたけど俺には丁重なおもてなしは無理だ！　もうなるようになくれ。

「先奥行つて座つててくれ、適当に飲み物持つてくから」

「私も手伝うよ、何もしないっていうのも失礼だし……」

「いーから、お客さんはくつろいでろつて」

玄関を開けて直ぐにある廊下の奥に、ググーつと九條さんを押しやり、大量に余らしているみかんジュースをコップに注いで持つていく。

一応適当なお菓子も持つて。

「つまらない物ですがどうぞ」

「そ、そんなにかしこまらなくても……」

「よ……よろろすおねがいするます」

今からどんな話をされるんだろう。わざわざ男の部屋に上がつてまで話さなきやいけないことがあるつてことだろ？

まあ冷静に考えりゃあアーティファクト関連だろうが……

「それで、話つて？」

「うん。あの時のこと覚えてる？ 十字架のアーティファクトを『二人で』回収した時のこと」

……なるほど。確かにそれは話しておきたいことだな。俺もちよつと気になってた。ここで話し合って見るのはいい判断だと思う。

「ああ覚えてる。どうして俺が九條さんの能力を扱えたか……だろ？」

不明、それと忘却

あの時の不思議な体験。それは俺が何故か九條さんの能力に介入出来たこと。人の能力をサポートできる……というか能力の共有なんて、アーティファクトからの説明じゃ無かった。

それにアニメでもそんな描写もなかったし、そもそも俺がそうするつもりで力を使っただ訳では無い。

「わかんねえよな……普通に考えるなら、元々アーティファクトにそんなことが出来る力があつたか、どちらかの能力の応用か……だよな」

「そうだよな、一番可能性が高そうなのは……竹内くんの能力の応用、かな？」

「まあそうだよな。あの時の紋章も九條さんとは左右対称になつてたし」

そう、俺自身の紋章が一時的に消えて、その代わりに九條さんの左手の甲に浮かび上がった紋章が、鏡合わせのように俺の右手の甲に現れた。

多分……俺の能力だよな。

「一応確認したいんだけど、竹内くんはあんな能力があるって知ってたの？」

「いや、知らね。そもそもアーティファクトから教えてもらってない」

「そっか、それじゃあ……ああなっちゃったのは偶然なのかな」

「うーん……。多分？」

俺自身よく分かってないから……ハッキリとした返事後できないんだよ。

でも、あれがもし故意に扱うことの出来る力になれば、相当強力な能力だよな。誰か他人の能力を真似てできる模写能力。弱いわけが無い。

「とりあえず試してみるか。あの力がいつでも引き出すことが出来るモノなら間違いない使えるし」

「え？　でも、そんな簡単に出来るものなの？」

「さあ？　物は試しつて言うだろ？　とりあえずやってみようぜ」

「う、うん……」

……

……

……

それから俺たちは二人で能力の実験をしまくった。あの時と似たような状況を作り

上げて再現してみたり、「ハンドパワー!」と言いなからアーティファクトに念を送つてみたり、鏡の性質を調べているうちにいつの間にかネットサーフィンしていたりしていた。

そんなこんなで時間は過ぎていき……気がつけばもう五時頃になってしまっている。

「やばい……こんなことしてる暇なんてないのに……」

「結局、ネットを使つてお洋服見てたりしてたね」

そう、ネットサーフィンの流れで安くて着やすそうな物をポチってしまったのだ。そのことに対しての後悔はないが、結局肝心なことが何も分かつていない。

「ご、ごめんね? 私に鏡について調べてみようなんて言つたから……」

「いや、九條さんのせいじゃない。俺の意思の弱さの表れだ」

自分で言うのもアレだが、集中力の無さは誰よりも自信があるからな。

「結局何もわからなかったけど……いつかはわかるだろ。特にココ最近は変な事件にやたらと巻き込まれるんだ。否が応でも能力使つちまつてるからそのうちなんとかなるさ」

「なんて言うか……竹内くんって考え方が楽観的だよな」

あはは……とハッキリとしない笑顔をする九條さん。

うん……そうなんですよ。わりと適当な人間なんスよ、俺。だってそうじゃん? 確

かに詳細が判明すれば間違いなく大きな力になるけど、ノーヒントじゃ無理があるわ。

「真剣に考えすぎるのも面倒だろ？ 一つのことには固執すると周りが見えなくなるもんだよ、だから真面目になりすぎない。これが俺のモットーだ」

「ふふっ、素敵な信念だね」

「おう、是非真似してくれ」

なんてことを話しながら再び談笑をしていると、外はもう六時を過ぎていた。流石にこれ以上は家に返さなきゃまずいと思い、家から出てアパート前まで送り届ける。

「本当に一人で大丈夫なのか？ あれなら別に送ってくぞ？」

「大丈夫、竹内くんは休んでて？ ただでさえ倒れちゃうくらいに疲れてるんだから」

「そうか……？ まあ一応気をつけて帰れよ？ なんかあつても連絡してくれたら直ぐに駆けつけるから」

「まるでヒーローみたいだねっ。でも、本当に大丈夫です。まだまだ夕方でたくさんの人が外にいるから」

確かに、時刻はまだ六時過ぎ。わざわざこんな人の多い時間を狙ってユーザーを襲うようなバカはいないと思うが……心配しすぎなのだろうか？

「わーっつたよ。んじやな、また明日」

「うん、また明日」

去り際に手を振って自転車に跨り、慣れた動きで素早く帰っていく九條さんの背中を見送って、家に戻る。

そして、ベッドにぼふんつとダイブして横になる。

ボケーッと天井を見ながら今日一日を振り返るが……昨日に続いて今日も偉い長く感じた一日だった。

朝からゴーストに襲われて……微妙に仲良くなつて……買い物して……火事に巻き込まれて……気絶して……九條さんと雑談して……あれ……？　なんか忘れてる？

俺……なんかしておかきやいけないことがあつたような……？

まてまて、落ち着いて一日を振り返れ。ええつと……

「私のRINGのID。ヴァルハラ仲間として伝えておく」

「え、あ……うん。後で連絡しとく。ヴァルハラじゃないけど」

「今度こそ、また会いましょう」

.....
あつ
!!!

疑心、その可能性

完全に忘れてた！ 希亜にメッセを何も送ってねえ！ せっかくIDを貰ったのに何もしないってのはさすがに失礼だろ！ 俺！

流石の友人がいない俺でも、こういうことはしてはいけないって事ぐらいは理解できる。

バタバタスマホをタップしてRINGのアプリを開き、書いてあるIDの主にメッセージを送る。

『どーも、竹内です。事情があって連絡遅れた』

とりあえずはこれでいいか。つかよく考えたら別にすぐ連絡するなんて言っただけだったし、遅れたって要らなかつたか？

でも、やっぱりこういう事はちゃんとすぐに返した方がいいのだろうか？

『白泉は火事が起こったのでしよう？ こっちまで噂になっている』

いや返信早っ!? まだメッセ送って一分も経過してないぞ!? どんだけ暇なんだよ!?

アプリ開きっぱなしだったから既読も付いたし音すらならなかったわ！

てかそれよりも……もう噂になってるのか。まあ、能力での事件とはいえ火災の範囲はそこそこ広がったからな。場所も玖方なら全然近いしおかしくはないか。

希亜もユーザーだからな。なんの能力かは正直何も分からないけど、悪い奴では無さそうだし……一応伝えておくか。

『ユーザーが起こした火事なんだ。発狂したように暴れてて、能力を制御できていない様子だった。まさに《力の暴走》って感じだ、その件に関しては異世界人のソフィーティアってのが説明してくれてたんだけど、ぶつちやけ俺は寝てたから聞いてなかったんだよ、だから改めて知り合いから詳しく聞いてみる』

……長文になってしまった。つってもあんな訳分からん出来事をまとめるとなるとどうしてもこうなるよな。ただでさえ上手く理解出来ない所もあるんだ、俺も一度考えをまとめ――

『エルフヘイムの住人』

だから返信早いなっ!? つかなんだよ、エルフヘイムの住人ってどこの誰だよ!?

『……?』

こんな返事しか出来ねえよ! だってそうだろ!? エルフヘイムってなんだよ、最初は何んちやってソルジャーの故郷かと思っただわ!

なんて心の中でツツコミを入れてみると、RINGの機能である無料電話で希亜が電話をかけてきた。

多分文通じや埒が明かないと判断したのだろう。

「へい、竹内です」

『エルフヘイムの住人が本当にいたの?』

通話して一声目がそれかよ! どんだけ気になってんだ!?

「え、あ、はい……そうみたいです。俺見てないけど……。なんか知り合いが向こうから来て話をしたって」

『……ましいい』

「え? なに? 聞こえなかった」

『何でもない。それよりも、噂になっていた火事は本当だったのね』

「ああ、俺たちと同じユーザー……つまり異能力者が起こした火事だ。あの感じじゃあ意図的じゃなかったけどな」

そういえばアイツはどうなったんだろ? 多分精神病院的なのに搬送されてそうだけど……それじゃあ詳しく事情を聞けそうにないな。

『力の暴走、十分有り得るわね』

「未知の世界からやってきた未知のアイテムだからな。俺たちも十分に気をつけて扱わ

ねえとアイツの二の舞になる」

『未知の世界?』

ああそうか、希亜はまだ知らないのか。丁度いい、俺も復習ついでに知ってることを話そうか。

少年説明中……

「とまあこんな感じ。大体は理解出来たか?」

それから俺は知る限りの情報を全て希亜に話した。白陀九十九神社にある神器の破損の結果、アーティファクトが流失したこと。そしてそれらを集めるためにソフィアティアと名乗る人形が現れたこと。他にも知る限りのことを全て伝えた。

『ええ。理解はできた。貴重な情報をありがとう』

「それと……あ、いや。別にいいや」

希亜はこれからどうするのか？ と聞こうとしたが、あえて聞くのはやめた。

これから先、九條さんと新海が流失したアーティファクトの回収を手伝うのなら、俺や希亜のアーティファクトもいずれは回収しに来るだろう。それをわざわざ九條さんが止めたつてことは、一つの強大な敵に対しての戦力が少しでも欲しかったからじゃないか？

事実、《魔眼》のアーティファクトというものが存在しており、それを持つ者は平気で人を殺してしまうような奴だ。それ以外の情報は何も無いが、石化という強大な力に對して対抗出来る能力は希少だろう。

だからこそ、《能力の反射》ができる俺からは回収しなかったんじゃないだろうか？

手伝ってくれと申し出もされたし……ソフィとの話し合いの中で、そんな判断になったんじゃないだろうか。

『蓮太はどうするの？』

『どうするつたつて……』

『そもそもとして、その蓮太の知人の発言は信用に値するものなの？ もしそれを発言した本人がその《魔眼》の所持者だった場合、簡単に殺されるわよ』

「いや、だから九條さんは——」

……。

待て。九條さんは間違いなく《魔眼》の所持者では無い。だってそれは、実際に能力の発動タイミングを目で見たとし、《体験》したからだ。

だからこそ殺人者ではないと断言出来る。その点に関しては希亜もそうだ。性格はアレだけどゴーストも該当しないだろう。

現段階で一番に怪しいのは……………新海 翔。

「……………確かに。怪しいヤツはいる。一人だけアーティファクトの所持者でありながら、能力の扱い方も知らないとか言ってる奴がいた」

『その相手に警戒をする事ね。協力の申し出を断つて正解、後は……………九條さんの身を案じなければね』

そうか……………！ 新海がもし《魔眼》所持者だった場合、一番殺しやすいのは九條さんだ。

やばいぞ……………！ 早くこの《可能性》を九條さんに伝えないと……………！ えつと……………九條さんの家はわかんないからまずは……………

「ヒントありがとう、俺ちよつとナインボールに行つてくる！」

警戒、その距離

急いで身支度を整え、飛び出すように家を出る。さつきまで九條さんと一緒にいたとはいえ、電話をしている間にそれなりの時間は経過した。しかも相手は自転車だから、ナインボールにバイトしに行つたのならばとつくに着いてもおかしくはない。

少しでも早く、あの危険性を伝えるために大急ぎでダッシュしているが……

よく考えたらRINGで伝えればいいんじゃない？ 俺連絡先知ってっし。

アホじゃん俺。馬鹿みたいに飛び出さなくても普通に連絡手段持つてんじゃない。とポケットの中を確認するが……出てきたのは家の鍵と小銭入れ。あー……これは……
「スマホ忘れてる」

思わず声に出してしまった。さつき九條さんにむかつて偉そうに周りが見えなく、なんて言つたばかりだろう、全然モットーを守れてねえじゃん。

仕方ない、ここまで来たら直接ナインボールに行つた方が早い。確認に行くか。

……つか身体がやけに重たい。

昼間の能力を使ってしまった反動だろうか？ ほんの少し全力で走つただけで溜

まっている疲労感が半端じゃない。こういう時は甘いものを食べるに限る。ナインボールに行つたついでにパフエでも食べるか。

今日はそうだな……マンゴーパフエかなあ。

もうとつくに全種類のパフエをコンプリートしてはいるんだが、何度も何度も食べたくなる美味しきなんだ。

そういえば俺、小銭入れしか持つてきてないけど中身は………おお、五百円玉が六つも!? こんなに溜め込んだのかよ。

これなら金銭面はあんまり考えなくても良さそうだ。

………

……

……

ガラン……

店の扉を開けて、取り付けられた鐘の音を聞きながら入店する。すると中はまだ平日の夕方なのにも関わらず、珍しくガラガラだった。

ただ一人、奥の方で本を読んでいる、真っ黒なゴスロリ服の女の子を除いたら俺のみ

だ。

「……ん？ てかあれって………？」

「いらつしやいませ、おひとり様ですか？」

「あ、いや……多分知り合がいるんで一人じゃないです」

知らない店員はニコツと笑って、「かしこまりました」と返事をして、そのまま去っていく。

まあ察するよな。俺以外はあのゴスロリちゃんしかいないし。

そんな一人寂しそうに角の席に座っている女の子の前へと向かっていき……

「お前ここにいたのかよ………希亜」

「だからわざわざ待つてあげてたのよ」

「いるなら言えよ………希亜がいるんなら俺はここに来る意味なかったじゃねえかよ………」

「貴方が暇を与えずに一方的に電話を切ったのでしよう」

栞を挟んでパタンと本を閉じ、希亜は改めて俺の方を見る。

「つかお前学校どうしたんだよ、サボりか？」

「違う、今日は全生徒下校となったの。近くで起きた火事が原因だね」

「へー、そりやラツキーだったなあ」

と、そのタイミングで丁度よく店員さんがこちらに来て、水を置いてくれたので、そのまま食べたかったマンガーパーフェを一つ注文する。

つか夕食を済ませずにパフェ頼む俺って……？

「そうね」

「随分と適当な返事なこって」

一応チラチラと店の奥の方を見たりしているが……どうやら九條さんは今日はバイトではないようだ。

そんなキョロキョロとしていた俺に気がついたのか、希亜が呆れたようにため息を吐いて手元の水を飲み始めた。

「彼女はいいわよ。少なくとも私がいる間はね」

「そうか、一応新海の危険性を伝えておきたかったんだが……帰って連絡するしかないか」

「それなんだけど」

と、希亜が何かを話そうとした時にマンガーパーフェとストロベリーパフェが届く。

……ん？ ストロベリー？ ああ、希亜が頼んだのか。

俺たちの手元に届いたパフェをとりあえずお互いに一口食べて、さっきの続きを語り始める。

「彼女たちが協力しあっているのであれば、その危険性を伝える事は止めておいた方がいいと思うのだけれど」

「はあ？　なんでだよ、もし魔眼のユーザーだった場合は九條さんが一番――」

「むしろ安全じゃないかしら」

「安全？」

「なんでだ？　一番身近にいるんだから真っ先に狙われるんじゃない……」

「蓮太にハッキリと協力していると断言したのでしよう？　そのすぐ後に彼女が石化の状態で見てもされたら、まず自分が疑われると思うはず」

「ああ……まあ……確かに」

「まずは自分とは関係の無い人を巻き込む可能性が高い。かと言って警戒を解く訳では無いけれど」

「そうだな……協力関係になってすぐに殺してしまったりなんかしたら、まず容疑者として扱うだろう。言われてみればそうだ。」

「なるほどな……」

「それに、せっかく仲間として行動を共にすることになった直後に、「貴女の仲間が黒幕の可能性がある」なんて言われたら、きつと気を悪くするんじゃないかしら」

「……九條さんの性格的には……有り得るかも？　あの人も正義感の塊みたいな人だか

ら」

はむはむとパフェを口にしながら淡々と話していく。

……マンゴー美味しい。

「ひとまずは私たちだけで留めておいた方が得策ね。下手な警戒をされても困る。捕らえるのなら、油断した瞬間を狙うべき」

「せっかく俺が近づけるからな、使えるもんは最大限に使った方がいいか」

「理解出来た？」

「ああ、バッチリだ」

「そうだな、俺は警戒されているどころか協力しないか？ という勧誘まで受けているんだ。少なくとも多少の信頼はある状態なんだろう。それを崩すのはもつたいない。

それが九條さんを守ることの出来る為の作戦になるのなら、俺はなんだつてする。

「にしてもアーティファクトを手に入れてから毎日がキツイぜ……たまには羽を伸ばしたい気分だ」

「そんな事を言っている暇なんてないでしょ、私たちにはやるべきことがあるのだから」

「……？ なんのこと？」

「ヴァルハラ・ソサイエティは闇に潜む悪を許さない。石化の聖遺物を手にした者に必ず裁きを与える」

……これやつぱりそうだよな？ 俺もそのヴァルハラ……に入ってるよな？
つか聖遺物って呼んでんのかよ。

「悪を許さないって気持ちわかるけどよ……俺は別にそのチームには——」

「さあ向かうわよ。円卓へ。人が集まってきた」

だからどこだよ。

「どつか用意してるのか？ 簡単に取れる個室なんてカラオケぐらいしか……」

「貴方のアジトがあるでしょう？」

俺ん家かよ。

「へいへい……分かりましたよ、リーダー」

「……………」

冗談半分で『リーダー』と呼ぶと、目をキラキラと輝かせて少し興奮気味に、こくんつと首を縦に振る希亜。

え、なに。もしかしてリーダー呼びが嬉しかったの？ 朝は自分で希亜でいいって
言ってたのに？ てか俺はマジでそのチームに入る気は無いんだけど？

……………ちよつと試してみるか。

「じゃ、俺たちのアジトへと向かうか。力無き民の為、我ら選ばれし者が世界の混沌を止めなければ」

……これ言うのめっちゃ恥ずかしいんですけど!? こんな感じであってる!?
ねえこれ大丈夫っ!?

「わかってるわ、私たちは神の掌で踊るつもりは無い。私たち自身の正義で運命を切り開くツ!」

……やべえわ、もう目が輝いてるわ。輝きすぎて怖さすらも感じるわ。

……とりあえず格好つけてるとこ悪いけど、会計済ませないと。

集団、怪しい香り

「ありがとうございました〜！」

笑顔で一礼してきた店員に愛想笑いをして、希亜と二人で店を出る。

ものすごい恥ずかしかった。ずっとレジ打ちしてくれていた店員さんは笑うのを我慢してたし、店の奥からはヒソヒソと笑い声が聞こえてきた気がする。

もう二度としない。あんな口調は絶対マネしない。

でもこの店にはこれからも行くと思う。だって安いし美味しいもん。

そして適当な会話をしながら俺の家の方面へと向かう途中、赤信号に捕まって切り替わりを待っている時、違和感を覚え始める。

いや、正確にはもう少し前からなんだが……このタイミングでハッキリと理解できるレベルになった。またこのパターンかよ……

そう、誰かに後をつけられている。あれなの？ 俺が女の子と二人でいると決まって誰かに追いかけられてるけど何かの呪いかな？ そんな呪い要らないんですけど。

でも、あの時と違って今から向かうところは俺の家。別にわざわざ待ち伏せて追い返

す必要も無い。

また深沢が付いてきてたとしても、別にダメージはないしな。

「……………」

「希亜？ どうした…………？ 行かなきゃまた信号が変わっちゃうぞ？」

「ええ…………。そうね」

青信号が変わっても中々一歩を踏み出さずにいる希亜は、チラツと背後を見た後に俺に続いて歩き始める。

なんだ、気がついてたか。だったらこの違和感は気のせいじゃないってことだ。やっぱり本当に誰かにつけられてるんだろう。

「できるだけ人が多い道から行くか。だる絡みをされたら面倒だ」

「気づいていながら放置をするの？」

「別に何するにしても人それぞれだろ。ハッキリと犯罪行為に手を出していたら話は別だが…………今はまだその時じゃない俺が危惧しているのは——」

「石化の能力者のように無造作に私たちを殺そうとしている場合」

「ああ、だからいつでもすぐに能力を使って対応できるように気を張ってる」

そう、能力者であった場合の対処は考えなくちゃいけない。こっちの方のやつなら最大限の警戒をしなくちゃいけないんだ。わざわざ俺たちの後ろをつけてくるような

やつだ、間違いなくチャンスを待っているはず。

自分の能力が最大限に生かせるタイミングを……

とそこで気がついた。今日という日の不自然な出来事に。

「あのさ、なんで今日に限って通行人が極端に少ないんだ？」

「偶然か……それとも」

俺たちは今、普段俺が使っている道を歩いている。いつもならこんなにも人が一人もいないなんて有り得なかった。しかもまだ五時を過ぎたあたり、時間を確認はしていないけど、間違いなく五時から六時の時間帯だろう。

おかしい……よな？

特に背後を気にしながら歩いていると、隣にいた希亜がその歩みをピタリと止めた。

「嵌められたわね」

「は？ 何言って——」

返事をしながら前を向くと、一本道の奥から人影が一つ出てきた。緑色のジャージを着ていることはわかるが……ここからじゃあどんな顔すらかもわからないほど遠くに。

そして後ろを振り返ると、今度は15メートル程後ろに男の二人組が姿を現した。

「挟み撃ちかよ」

一人じゃなかったのか……!? まさか三人とも手を組んだり……

「ご苦労さん、おかげで二人も捕まえられた」

してるよなあ……。

とりあえずは会話で様子見……か。

「何の用だ？ こちとらデートの途中なんだ。邪魔しないで欲しいんだが」

「そうね」

……いやメンタル強いな?! いきなりデートをしてるって言われて動揺もしねえのかよ?! しかも軽く話を合わせてくれてるし！ 頼りになるなあ。

「いやいや、俺たちは君たち二人の邪魔するつもりは無いよ。『あるもの』を素直に渡し
てくれたらね」

「こんなアクセサリーを持ってないかな？」

そう言つて二人組のうちの一人がチラツツと見せてきたのは少し大きめの、リングのよ
うなあのシルバークアクセサリー。つまり……アーティファクト。

「さあな、知らねえ」

「嘘は良くないなあ……『反射』のユーザー」

……!?!

なんでこいつ俺の能力まで知ってるんだ!?! どういう事だ!?!

「さあ、始めようか、能力を使った奪い合いを」

「誰がッ——」

目の前の男の一人は、首元に紋章を浮かび上がらせて、余裕の笑みでこちらを見てくる。

あの顔……既に何度か人を襲ってやがるな。

「蓮——ッ!？」

隣から聞こえてくる希亜の声。

なにかに驚くような……焦っているような声。そんな声が途中で途切れた。

そんな希亜の方を振り返ると、あのジャージの男が希亜の髪を鷲掴みにして楽しそうに立っていた。

……あの距離をこの短時間で移動してきたのか!? いや、それよりも……!

「希亜に何してんだアッ!」

躊躇わなかった。あの時とは違って、俺は心の底からただ一つのことを思っていたからだ。もう俺は無意味に人を傷つけたりはしない。あの時の兄のように……!

守るための拳を……!

大きく振りかぶったが、俺の拳が当たる寸前で希亜の髪を引き抜くように乱暴に引つ張り、一瞬にして姿を消した。

「痛っ……!」

身体をよろけさせた彼女をすぐさま支えて、怒りの矛先を男たちの方へと向ける。すると目の前にいた男たちは二人から三人へと増えていた。その中にあのジャージを着ている男がいる。

「大丈夫か？ 希亜……」

「ええ……！ 少し油断しただけっ」

男たちの三人中二人が紋章をハッキリと浮かばせてニヤニヤと笑っている。

「ありがと、これで俺も能力が満足に使える……」

一人の男はジャージの奴からある物を手渡して受け取る。それは今希亜から引き抜いた数本の頭髪だった。

そしてそのまま――

「ああ……ん」

それを口の中に入れて食べてしまう。……こいつどんな性癖してんだよ……！

「ご馳走様」

「ふざけん――ッ！」

「やめといた方がいいよ」

いてもたってもいられずにその男に殴りかかろうとしたその瞬間、相変わらず怪しい笑みを浮かべたまま、俺に向かって「止まれ」と言わんばかりに手を向ける。

「今俺に手を出せば、傷つくのは君の大切な人だ」

「ああ？　意味わかんねえよ……！」

「だろうね………オイツ」

その男はクイツと顎を動かすと、ジャージを着ていない方の男が、いきなり偉そうにしている男に向かって全力で殴りかかった。

何やってん——ツ!?

そしてその拳が男の腹に当たった瞬間、当たり前だが殴られた男は苦しそうにダメー
ジを負う。

それは当然だ、当たり前だ。殴られたんだから。でも——

「うっ——ツ!？」

苦しそうな声を上げたのは希亜だった。

三人集結、蓮と雪と月

「おい希亜ッ！ 希亜ッ!」

腹を抑えてその場に踞る彼女に駆け寄り、とりあえず背中を擦りながらひたすら声をかけ続ける。

わけがわからねえ！ どういうことだ！ なんて急に希亜が……

「げほっ……!! げほっ……!!」

突然襲ってきた衝撃に驚いているのか、目を見開いて何度も何度も嗚咽する。慣れなからか、それともあまりに衝撃が強かったのか、口を何度もパクパクとしてまともに言葉も発せないようだった。

とても苦しいのだろう、俺の服を掴んでいる手の力が尋常ではない。力を込めすぎてプルプルと震えてしまっている。

これは間違いない。アイツ……何らかの能力で自分が負ったダメージを希亜に共有させることが出来るんだ……!

多分キーはあの髪の毛を食べた事。となると……とくに制限がない場合はひたすら

希亜が傷つけられる……！

かといって希亜だけを放置なんて出来ない。本人を殴られたりしちやあ普通に傷つけられるからだ。つまり、俺が希亜を守りつつ、あの共有している男を拘束しつつ、二人を倒さなきゃいけない。

できるか……そんな事……

「やる気になったか、この状態で反撃してくる気満々なのは君が初めてだ、《反射》のユーザー」

コイツ……なんでこんなにケロッとしてるんだ？ 希亜がこれほどまでにダメージを受けているにも関わらず、コイツは対して辛そうではない。殴られた瞬間こそ苦しもうではあったが、今ではもう何も無かったかのように普通だ。

何か謎があるはず……

とりあえずは逃げ道ができた。このことを活かして逃げてみるしかない。この実質一対三の状況はまずい！

急いで希亜を抱え上げ、あの男たちの反対方向へと身体を向けるが……

ジャージの男がいつの間にか真後ろにいた。

「嘘だろ……！」

そしてそのまま意表を突かれて、戸惑っているところに蹴りが飛んでくる。もちろん人を抱きかかえた状態でそんなものを避けれるはずもなく……

「——ぶっ!？」

まともにも顔面に蹴りをお見舞いされた。

よろけた身体を気合いで立て直し、視線を戻すと……あの男の姿は見えない。

「逃げちゃうなら、罰を与えないとねえ」

そして聞こえてくるあの髪の毛を食べた男の声。マズイ——

「あっ!？」

と思つた時には既に遅く、勢いよく希亜の顔が横に揺れた。

一瞬チラリと男たちの方を見ると、案の定味方同士で同士討ちするように顔を思いつきり殴られている。

きっとあの「痛み」を希亜は理不尽に受けたはずだから……

「アイツら………!!」

逃げる事なんて考えるな。楽な方へ向かうな。友でないとはいえ女の子が傷ついているんだ。仲間じゃないとはいえ人が理不尽に傷ついているんだ。

まずはこの苦しみから解放してやらなきやだろ。

落ち着け、冷静になれ。俺が焦つちや希亜が傷つく。

まずあの3人のうち、最もリーダーシップをとっている男の能力は痛みの共有。これは間違いない。そしてジャージの男の能力は高速移動か………空中でのみ発動できる瞬間移動だ。

蹴られた直後、ギリギリ見えたんだ。わざわざ軽くジャンプしてから姿を消していた。高速移動ならば必ず何かを蹴らないと移動ができない。だが瞬間移動ならば……移動のための力が必要ないからな。

だとするとジャージの男は問題ない。しっかりと見切ればあの程度の蹴りどうでも出来る。

残りの一人は能力不明だが……一番可能性があるのが、任意の相手のダメージを無効化？ いや、それならそもそもダメージの共有というものが起きない。つまり……希亜だけがダメージを受け続けているのは単純に耐久力の差か……。

「……………」

見たところ戦闘意欲があるのは瞬間移動野郎と共有野郎だけだ。

さて……このダメージ共有の謎を解かないと勝ち目はないな……

「あれ？ もう逃げないのか？」

「逃げない。本当は逃げようと思ってたんだけどな、お前をぶん殴らなきゃ俺たちの気がすまねえんだ」

「俺たち?」

不思議そうに首かしげる男をほつといて、ひとまず抱えていた子をそつと下ろし立たせてあげる。

さつき、無言で俺の事を見てたからな。コイツはコイツで俺を試していたのかも?

「貴方……反撃を許したのは初めて、と言ったわよね」

明らかに痛みを経験しているようだが、あくまで経験するだけで実際に外傷を与える能力では無さそう。その証拠に希亜の顔はどこも腫れてなどいない。

痛みを共有する力。それは身体に対する物理的な攻撃のみ共有するのか。精神面での共有は全く行われていない。

だからこそ、希亜の心は折れていない。

「うん。大体はこうなると全く反撃してこなくなつて、薬を使うだけだからね」

……なるほど。やっぱり俺たちが初めての相手じゃないわけだ。

「よしわかった、アンタらは立派な罪人だ」

チラツと希亜と目が合う。その目を見るだけで彼女の覚悟を理解出来た。

本当にごめん。俺もそれしか思いつかなかつた。でもここは俺に任せてくれ、一撃で沈めてやるから。

そう思った。せめて一度だけで済むようにと覚悟を決めた。だからこそその一步を踏

み出そうとしたのだが……………

「……………ッ!？」

身体が動かない。まるで自分の身体だけが時を止めたかのようにピタリとその場で留まってしまっている。

「……………ッ、どうしたの」

「わからねえ……………！ 身体が……………！」

どうか視線は動かせる。どうやらこの能力は身体の細かいところまでは止めることは出来ないようだ。つてそれもそうか、そうなら心臓が止まっちゃまってる。

そして一番可能性がある敵。まだ能力が判明していない人物の方向に視線を向けると……………無表情のままただじーつと俺の事を見つめている。

紋章は見えるところには出現していないが……………間違いなくなにかの能力を使っているはずだ。相手をよく見ろ……………！

あの男はポケットに手を入れて、本当にただ俺を見ているだけだ。唯一怪しいと思えるところは……………、俺の影を踏んでいる。

「影か……………！」

そう言うと、その俺の影を踏んでいる男は初めて口を開いた。

「お前、その気出せば頭がキレルんだな。目が変わった瞬間から別人みたいになった」

そんな事はどうでもいい。俺にとって一番のピンチは、誰の能力も反射出来ないこと。つまり、俺の力じゃまともにコイツらと戦うことすら出来ないということだ。

多分それを知ってて、こいつらは戦いを挑んできたんだらうけど。

でも、恐らく知っているのは俺の情報だけ。その証拠に希亜には能力云々の話をしていない。全て俺にのみ語りかけている。つまりは希亜の能力が俺たちの勝ち筋。

だが……バレていないのであれば軽率に能力のことを話す訳にはいかない。

どうする……？ どうする……？

正直大ピンチだ。希亜は相手の好きなタイミングで攻撃することができ、何時でも足止めできる。そして俺は影を踏まれて身体を動かせない。しかも三人とも俺の能力じゃあ反射できない。

いくら強がってもぶつちやけ勝てないと薄々感じていた。

だが、その状況をぶち壊してくれたのは――

ビュンツと俺の真横を何かが凄まじい速度で駆け抜ける。それはどこかで見慣れた「槍」だった。

この槍は、一度俺を苦しめたあの槍。それが俺の背後から飛んできて、影を踏んでいる男の胸に突き刺さった。

「ぐわっ!？」

こんな槍を出せる奴は一人しかいない。

そう確信していると槍が飛んできた俺の背後から女の声が聞こえてきた。

「止めてくれよ、蓮太^{ソイツ}はオレのお気に入りに入るんだ」

本当、なんでお前がこんな所にいるんだよ……………ゴースト。

命を狙う影

「よお、元気にしてたか？」

黒い服を着た彼女は相変わらずフードを深く被り、何かを噛みながらテクテクとこちらへ歩いてくる。

「何故貴女が……？」

「ん？ おう、そっちの奴も半日ぶりだな。偶然だよ偶然、たまたま通りかかった所にテメエらがいたんだ」

「嘘つけ」

今の今まで全くと言っていいほど人が通らなかつたんだ。アイツらが間違ひなく何かの細工をしていたはず、となると意図的にこちらへ来ないとこの場には来れなかつたと思うんだ。だが、そんなことは別にいい。

「悪いな、助かった」

「テメエが死んだらオレの遊び相手がいなくなるからな、その女はついでだ。それに……こんな楽しそうな事をテメエらだけでやってるなんてずりいじゃねえかよ！」

そう言ってゴーストは次々に槍を無造作に繰り出す。一直線上に飛んでいくだけとはいえ今やコイツは十数本の槍を連続して出すことの出来る力を持つてる。そんなものを簡単に避けられるはずもなく――

消える能力者だけがその場を軽くジャンプして、予想通りに瞬間移動で避けたが……あとの二人には無数の槍が襲いかかる。頑張つて躲けていたが……影の能力者が、リーダーのような男を庇つて何とか守っていた。

やっぱりだけど、ゴーストは強い。これだけ巧みに一つの能力を自在に扱えるなんて異端だったんだ。そりゃ一人じゃ勝てねえわけだわな。

「彼女は味方なの？ それとも……」

啞然とゴーストの戦闘を見てしまっていた俺だったが、その希亜の声で我に戻る。

「さあな。少なくとも……今は味方の解釈で良さそうだ。安心しろよ、アイツは思ったほど悪い奴じゃねえから」

「そう」

未だに警戒は解いていないようだが……今この状況でそんなことは言ってもらえない。アイツらには聞きたいこともあるしな。

「ゴースト。一応アイツらの能力を言つとく。俺の推測も混じってるからあくまで参考程度に聞いてくれ」

「一人は瞬間移動だろ？ あれは見りゃわかる」

「ああ、それで最初にお前が攻撃した男。アイツは『影を踏むとその対象者を縛る』能力だと思っ。それで最後の一人は『任意の相手と肉体ダメージを共有』できる。こっちは確定だ。今は希亜が——」

と説明の途中で、ゴーストは隙を見つけたのか希亜とのダメージを共有しておる男に向かつて槍を飛ばして突き刺した。

「おまつ！ 馬鹿ッ！」

「んだよ、魂が共有してねえんなら別に問題ねえだろ」

そんな彼女を一旦置いといて、急いで希亜の方を振り向くと、別にどこかを痛そうにもしていないし、何かを我慢しているようにも見えない。

「痛みは無いのか？」

「ええ、問題ない」

……この槍は外傷を残さずに感覚だけを伝えることの出来る力じゃなかったのか？

あ、いや待てよ……ということはこの槍で傷つくのは痛みを感じる心、魂なのか？

そして相手の能力はあくまで肉体ダメージの共有。なぜなら感じている二人の感情が全く違うからだ。とすると……

この槍は相手の能力なんて関係なしに攻撃できるモノ！

「まあここはオレに任せてしまえよ、能力には相性つてのが必ずあるもんだ。相性のいいオレに遊ばせろよ」

……なんか助けてくれたのが変だと思つてたけど、コイツあれだな。ただ戦闘で遊びたいだけだな。

「それに、悪用じゃねえだろ？」

はあ……つたく。

「わかった。わかったから好きにやれよ。だが俺も参戦するあの偉そうな男だけはぶん殴らなきゃ気がすまねえ」

「どうするつもりなんだ？」

「アーティファクトをぶっ壊すッ！」

九條さんから聞いた事、その中にアーティファクトの破壊についての説明があつた。あのアーティファクトは一応破壊の概念があるらしい。粉々に破壊したとしても数日で元に戻つてしまうが、一時的に能力を封じる手段の一つだ。

となる……

「希亜、アーティファクトを狙つて攻撃できるか？」

「それは……難しいわね。でも、せめて時間を稼いでくれればあの能力者を拘束するこ
とぐらいはできる」

「だったらそれでいい！」

必要最低限の情報だけで会話を済ませ、一番ムカついているやつに向かって全力で走る。そうすると、一瞬にして俺の前方にあの瞬間移動男が現れたが……

「邪魔すんツなツ！」

繰り出されたパンチをスルリと躲し、すれ違い様に後頭部に蹴りを入れて問題なく対処する。

「ゴーストツ！ 俺に槍を投げ飛ばせツ！」

「あ？ まあいいか」

どうせアイツは反射するから、なんて思っているのか、特に深くは考えずに間隔をあけて連続で槍を数本飛ばしてくる。

まあもちろん俺だからこそこんなことをさせたのだが……

「リフレクション反射鏡ツ！」

能力を発動して鏡を出現させ、偉そうな男に向かって反射するように角度を整える。それに当たった槍はもちろん思惑通りに男に向かって反射されていき……

次々と容赦なく槍をぶつ刺していく。痛みを共有しないのならば……

もちろん直接は手を出さない。あくまで怯みをメインとした時間稼ぎだ。そしてこんな少量でも使えると思ひ、秘めていた力を解放する。

男の目の前で、俺の能力である鏡を出現させ——

「蓄積反射鏡アクムレイトリフレクターッ！」

吸収していた微妙の力を使って眩いばかりの閃光を発光させた。

そして——

「ジ・オーダー……アクティブッ！」

と希亜の声が聞こえてくる。そしてそのまま素早くその男から距離をとると………希亜は力を解放し——

「パニツシユメントッ！」

黄金色に輝く無数の鎖がありとあらゆる場から出現し、まるであの男に罰を与えるかのようにその鎖たちは次々に男に絡まっていく。

手足や身体を鎖に封じ込められ、身動きひとつ取れなくなり、完全に捕らえることに成功した。

チラリとゴーストの方を見ていると、つまらなさそうにガムを噛みながらこちらを見ている。どうやらあつちの方は既に終わっていたようだ。

それを確認すると、俺はゆっくりとその男に近づいていき……あの時の出来事を思い出しながらアーティファクトの位置を探る。

そして男の内ポケットからリングのようなアーティファクトを取り出すと……力の

限りに地面に投げつけて、思いつきり踏み潰す。すると粉々にはならなかったが、見事にあのアーティファクトは割れてしまい、破損した。

試しに軽く男に向かってデコピンを試してみるが……希亜にはもうダメージはいってないようだ。

「そ、そんな……こんなことが……あの女もユーザーだったなんて聞いて——」
「てめえの事なんざどうでもいい。てめえ、何故俺のことを知っていた？ 誰から聞いたんだ」

この発言……間違いなく誰かから聞いたんだ。俺の情報のみを聞いており、勝てること踏んで計画を立てて襲ってきた。つまり意図的に俺に敵を仕向けた奴がいるってことだ。

「おっ、俺は……！」

怯えながらもその男は口を開く。

フワフワと浮かぶ人形のような怪しい存在から俺に関する事を聞いた事。そしてアーティファクトとの契約を破棄する方法、そしてアーティファクトの意志とは関係なく強制的に自分の支配下に能力を置くこと。

それら全ての情報を与えた者の名は……《イーリス》

自らをイーリスと名乗る異世界人に全ての情報を与えられ、俺を狙っていたらしい。

そう、コイツらが狙っていた訳ではなく、あくまでイーリスが俺を狙っていた。そういえば九條さんも言っていた。異世界に存在するソフィはこちらの世界へやってくる。ことが出来ずに、《幻体》のアーティファクトを使用して仮の体を扱っていると。

つまりはそのイーリスとやらもソフィと同じ手段でこちらの世界に干渉しているのだらう。

何故俺を狙っているのかまでは分からない様子だった。

そして判明したもう一つの事。それはアーティファクトとの契約の破棄方法。それは俺の予想通りに、所有者を殺害するか、《アンブロシア》という霊薬を使用することで魂を仮死状態にし、アーティファクトを誤認させて破棄するというもの。

既にこの男はこの霊薬を他人に使用しているらしく、いくつかの不思議な容器に入れて持ち歩いてた。

容器に入っていると言うのは、契約者を無くしたアーティファクトは固形から液体に変わるようで、それを試験官のような物に詰め込んでいたのだ。

ちなみに逆に新たに力を得るには、この液体のとなったアーティファクトを体内に摂取すれば良いらしい。

……となると、一つの疑問が生まれてくるが、今はその話は置いておこう。まずはこの男の対処だ。

と考えていると、能力を使用できなくなつて警戒を解いたのか、希亜の能力で作られた無数の鎖は次々に消えていき、男を拘束から解放した。

そしてこの男のことを聞いていると、俺と同じ白泉に通っている学生だったことが判明し、明日中に九條 都の所へと向かい、アーティファクトを明け渡す事を約束に逃がしてやることにした。

ぶっちゃけぶん殴つてやりたがったが……ある一つの疑問が俺の心を揺さぶり続ける。

とにかく……

「大丈夫か？ どこかまだ痛んだりはしないか？ 希亜」

「痛みは大丈夫。かなり疲労したけれど、少し休めば問題はない」

「そっか。ならとりあえず少し座つて休んでろよ。ちよつと飲み物買ってくるから、すぐ戻る」

確かここら辺は近くに自販機があつたはず。残りの男たちを処理して……つていなくなつてらァ。

思い出したかのように確認すると、あの男が二人とも連れていったのか、まるまる姿が消えていた。

「……。いくぞゴースト」

「オレもかよ」

「当たり前だ。聞いておきたいこともあるしな」

「……」

それから俺とゴーストは二人で近くにある自販機まで歩いていく。

どうしても俺の中で警戒心が強まってしまっているんだ。さっきの話を聞いた時からずっと。それは……

何故ゴーストが二つの能力を扱えるのか。

変わる目的、蓮太の想い

ガコンツと飲み物が落ちる音がする。自販機の口からその落ちてきた物を取り出し、また一つと購入しているからだ。

そんな様子の俺を、ゴーストはただ黙って見ていた。

「なんだよ聞きたい事って。オレがこんな所に助けに来たことか?」

三つ目の飲み物を手にしてから、一つだけゴーストに手渡す。

「そうじゃない。そんな些細なことは別にいいんだ。俺が聞きたいのは……」

聞いただすのが怖い自分もある。けれど、聞いたださなければと思う俺もいた。これだけは聞いておかないといけけない。これだけはハッキリとしておかなければいけない。

だって……………

「ゴーストは能力を二つ扱えるよな。何故なんだ」

さっきの話を聞いてからずっと思っていた。正直、自分の命が狙われているなんて二の次だった。

心の底から思ったことを祈るような気持ちで聞いたです。俺がこの世の中で最も戦

いたくない三人の内の一人に。

「人を……………殺したのか」

「……………」

否定して欲しかった。確かにコイツは好戦的で手の付けられないような奴だ。だが根は優しさを持つている奴だと思つてた。

それはあくまで俺が一方的に勝手に思つていだけだけど……どこか気の合う奴だつたから。

でも返事は返つてこなかつた。

彼女は沈黙を続けたまま、その場から動こうとしない。

そんな彼女から俺は目を離さない。真つ直ぐに、ただ真つ直ぐに見つめて祈つていた。

冷たい風が吹く。春頃の風は嫌いだ。

「どうなんだ、ゴースト」

二度目の質問の後、彼女は答えを聞くまで動く気のない俺を見透かしたのか、どこが残念そうな顔をして深くため息を吐く。

「……………なんでそんな目になるんだよ。さつきまでの覚悟の目はどうした」

「変か？俺がこう思うのは」

「ああ、テメエ随分な変わりもんだからな。でもそういうのにも慣れてきた」

質問の返事は……返ってこない。

「俺は……慣れない。元々俺は一人だったから」

「いいよな一人って、オレも味わって見たかった。オレは常に誰かがいないと生きてけねえからさ」

……。

「今こうしている事も、アイツにはバレてるだろうぜ」

「お前……幻体だったのか」

「大正解ってヤツだな」

ソフィやイーリスがこちらの世界に介入する際に使用しているアーティファクト。しかしそれらは本来正しい扱い方ではないと聞いていた。元々は仮初の身体を出す能力。

「テメエは幻体に向かってこうも優しく接してたんだぜ。笑えるよな」

「笑えねえよ……」

……

「蓮太、ハッキリと言っとく。きつとテメエとはいつか練習でもなんでもなく、ガチで戦

わなくちやいけねえ」

返答はそれだった。心に穴でも空いたような気分だ。

彼女が言ったのは俺の敵になるということ。それはつまり……………

「例えテメエがオレを信じたとしても、そこにもうオレの意思は存在しない。もうすぐ会えなくなるからな」

「どういうことだよ。なんでお前は——ッ！」

「オリジナルがテメエの能力を欲しがってる」

オリジナル……………。ゴーストを生み出した言わば本体のようなものだ。つまり幻体のアーティファクトの所持者のこと。

「誰とは言えねえけど、蓮太はソイツと戦わなくちやいけねえんだ。遅かれ早かれいつかはテメエに襲いかかるだろしな」

「そんなことはどうでもいいんだ！俺は……………なんでお前が——！」
「殺してねえよ」

思わず呆然とする。

「オレは誰一人殺しちやいねえ。オレは……………な」

意味深な言い方、寂しそうに視線を外すゴースト。一度汚れたこの目だからわかる

……俺はゴーストを信じなくちゃいけない。

コイツには、本当の意味での味方が必要だ。

「さつき、もう会えないって言ってたな。聞かせてくれるか？」

「テメエ……たつたあの一言を信じるのかよ……随分とおめでたい奴だな」

「信じるさ。たつた一言、それを言ってくれたのなら俺は信じる」

そう言葉を放つと、後ろの方から足音が聞こえてきた。

どうやらゴーストは既に俺の後ろから迫った来ていた人に気がついていたらしい。

「生粋の大馬鹿ね。ただの一言でそこまで信用できるなんて」

「そうかもな。でも……苦しそうな目をしてた」

背後から歩いてきていた女の子は俺の隣に辿り着いたところでその歩みを止める。

「結局のところそれが貴方の正義。迷い人を見捨てない心。流石ヴァルハラの人メンバ

ね」

「だから違うつてば」

未だに勝手にメンバーに入れている希亜に飲み物を手渡し、再びゴーストの方へと視線を向ける。

俺たちのこんな会話に馬鹿馬鹿しさを感じたのか、呆れるように笑っていた。

「オレもアンタがオリジナルだったのなら、楽しかっただろうな」

「遅くないさ。まだ間に合う、手を汚していないのならまだ——」

「いや遅い。自分で制御出来ないんだ、近いうちにオレは白に奪われる」

「白……？」

「幻体の中でもオレは特殊でな、契約者に囚われずに自我を保つことが出来た。だからこそ誰と契約してもオレはオレなんだ。誰の色にも染めることは無い。いや、無かった」
「確か……幻体つてのは分身ではあるが意思があつて自律的な行動するはず、だからその性格は契約者に似るようになる……だったか？」

「オレは平気であん時に茶を飲んだら？ アレを含めてオレは特殊だっつーんだよ。でもな、オレの創造主サマは適性が低いにも関わらずオレとは全く別の人格を作った。要するにオレはソイツに飲まれちまうつて事だ」

「それで、会えないって……」

「いつになるかはわかんねえけど、飲まれる前に一発《恩返し》でもしてやろうと思つてな、その前にテメエに会いに来たら……偉いボロカスにやられてるじゃねえか」
「うるせえよ」

それでさつき俺らの元へとやってきたのか。まあ結果的には大助かりだった。下手をしたら……俺は今頃死んでたかもしれねえしな。

だからこそ……助けたい。

いや、助ける。

「俺になにかできることは無いのか？ お前を助けたい」

「ねえよ、せいぜい殺されねえように強くなり続けろ。しか言えねえ」

そう言ってゴーストはこちらにテクテクを歩いてくる。そうしてポケットから手を出したかと思えば、俺の顎をクイツと持つて唇が当たるんじゃないかって思うほどに顔を近づけた。

「いいか？ オレの顔をよく覚えとけ。それが石化の能力者を見つける鍵になる」

前はこんなこと思わなかったのにな。誰に対してもこんな感情を抱いた事は全く無かったのに、今じゃ不思議と自然に思ってしまったてる。

「可愛いじゃん」

「うるせえ死ね」

暴言を吐いたあと、ゴーストは乱暴に俺の顎を手放して少し距離をとる。

なんだよ、死ぬなつったり死ねつったり訳わかんねえな。

「でもまあ……あんがとよ。テメエだけだぜ？ んな馬鹿なことやってきたのは」

そこで気がついた。彼女の身体が半透明に消えかけていたことに。

「必ず見つけて、また言ってやるよ」

「二度とごめん」

そんなぶつきらぼうな返事を残して、彼女は幽霊のようにスーツと消えてしまった。その瞬間に目の前にボトンと飲み物が落ちてしまう。

幻体だからだろう。あの言い方的にはまだ時間はほんの少しだけありそうだ。

そう、まだ時間はある。

「どうするの、彼女、早くしないと本当に消えてしまうわよ」

「消させはしないさ。絶対にオリジナルを見つけて……ゴーストを助け出す」

「殺人以外の方法でね。本物の悪に堕してしまふのなら……私たちが戦わなければならぬ」

「俺が戦う相手が本物の悪だ」

そう、ゴーストは言った。石化の能力者を見つけるヒントは自分自身にあると。それに、オレは殺していないと。

つまり、ゴーストのオリジナルが石化事件の犯人。そして複数の能力所持者。少なくとも、ゴーストが扱っていた槍の力と麻痺の力、そして幻体の力と石化の力を持っているはず。

かなりの強敵だが……俺は勝たなくちゃいけない。アーティファクトの収集なんてしている場合じゃない。

ここからが俺の本当の戦いだ。

「まずはオリジナル探し、そんで《アンブロシア》についてソフィに聞かなくちゃな」

「それなら私の方で彼女についての情報を探ってみる。霊薬の方は蓮太に任せるわ」

「んあ？　なんで希亜が——」

「ヴァルハラ・ソサイエティはどんな小さな問題だろうと決して仲間を見捨てない。助けてくれたお礼よ、協力する。私も……石化の能力者を裁くつもりだったから」

……なるほどね。

希亜が味方になってくれるのは正直ありがたい。とんでもなく心強くなる。

でも……………

「ヴァルハラ・ソサイエティのメンバーになった覚えはないけどね」

4月21日

逆ハーレム隊、発見

眠い。

これからどうするか作戦を練っていたら、まさかまさかの一睡もしないで夜が終わっていた。

しかもその割にはまともな作戦が思いつかなかったという。

とりあえずゴーストの方は希亜がどうか探ってくれてるみたいだし、俺はソフィとやりにアンブロシアについて探ってみよう。もちろん俺の方でもゴーストを探し出すつもりではあるが……

そして、もし全てが間に合って黒幕の情報を手にした場合。協力してくれている希亜には悪いけど俺一人で向かおう。

彼女をこれ以上傷つけないし、これ以上危険な目に遭わせる訳にもいかない。昨日だつてそうだ、俺が狙われているからこそ近くにいた希亜が巻き込まれた。

……一旦距離を取った方がいいかもな。

それはそうとまずは白泉に行かねえとな。新海はまだ危険な人物である可能性が高いから……九條さんの方からソフィの情報……というかアンブロシアの情報を聞き出そう。

きつと助けたい人がいると正直に打ち明ければ、九條さんなら手を貸してくれるだろう。

急かす心を何とか抑え、極力いつも通りを演じながら俺は白泉学園へと登校した。

その道中……

「おっはよー！ 大遅刻くーん」

と何故か深沢が俺の登校ルートに待ち伏せするように突っ立っていて、大声でこちらに声をかけてきた。

「それは昨日の話だったの」

「ラッキーだったね、あの不思議な火事のおかげでバレずに済んだんじゃない」

「いや、バレてるはバレてると思うけどな」

あの……違和感がバリバリなんだけど。普段対して仲良くはないし、一緒になつたと

言えばあの石像を見に行った時くらいだ。そんな奴がなんでわざわざ俺を待ってたんだ？

「ていうかわざわざ待ち伏せなんてしてどうした？ 何か用事があるのか？」

「別に？ ただこの間公園に行った時に結構仲良くなれそうだな〜って思ったから二人つきりでお話してみよー！ って思ってたね」

「だからってわざわざ一緒に登校しなくてもいいだろ」

あのキャラなら「グレートにへビーだぜ」とか言うんだろうな。

「まずはこういう所から一緒になっていけないとね！ 翔も妹ちゃんと毎日一緒に登校してるらしいよ？」

「え、なに。あいつシスコンなの？」

「何度か見たけど相当可愛いよ！ 是非一緒に遊んで欲しいね」

「シスコンは否定しなかったな」

マジかよ……まあ人それぞれだろうし？ 特に何も言うまいよ。うん。ちよつと……うん。

「あつ、アレかな？ 噂の逆ハーレム」

「またお前は何言ってる——」

と前方をよく確認してみると、本当に逆ハーレム状態で登校をしている集団があつ

た。

たった一人の女の子に集団で男が寄っていつているが……なんか違和感がある。

「マジでいたわ」

「知らないの？ 結構有名だよ？ どうやら電車移動でこっちまで来てるみたいだけど、その辺の時点でそこそこ男が集まってるみたいだね」

なんでも知ってるんじゃないの。めっちゃめっちゃ情報通じゃねえか。

「にしても……いるもんなんだな、あんなにモテる奴って」

ハッキリ言って異常だぞ？ しかも扱いが……なんて言うんだろ？ お姫様？ みたいな対応をずっとされている。

カバンを持つとしたり、ずっと道を譲っていたり、媚びを売ってるみたいない感じ。

「あれかな？ 宝くじでも当たったのかな？ それともおっぱいかな？」

「宝くじであって欲しいわ」

「いやあ、あれはおっぱいでしょ」

前から思ってたけどさ、深沢って性に食欲というかオープンというか、なんか凄いやつだよな。この間も九條さんに平気でパンツ見たいの？ とか聞いてたし。

「あ……………、え……………、あ……………、う……………」

その集団を通り過ぎようとした時、そんな声がボソッと聞こえてくる。

もしかして……この女の人は困ってるのか？ 話を聞く限りだと、噂になるくらいには長い間こうして学園に行ってるもんだと思ってたけど……もしかして本人は嫌がっているのか？

だとしたら……

「え？ あつ、ちよ、竹内!？」

呼び止めようとする深沢をほつといて、その集団の中心にいる女の人に声をかけてみる。

「すみません」

……

が、無視。まあ……無視というか単純に気がついていないのだろう。相変わらずに周りの男たちに何かを伝えたそうにオドオドとしていた。

やっぱり困ってるのかも。

そう思ってもう一度声をかける。

「あの一、大丈夫ツスか？」

そう声をかけると女の人はようやくやくこつちを見てくれたが……

「……?？」

キョトンとした感じでこちらを振り向いてくれる。でも、話しかけられたと思ってい

ないのか、力ない顔で声に反応しただけ……というような様子。

え、なに？ 人見知りなの？ なのにハーレム築いてるの？ って思ったけど被害者の可能性があるのか。

ならもう一度……三度目の正直だ。

「なんか困ってる感じだけど大丈夫ツスか？」

「……へ？ え、………へ？」

やつと俺を認識したように反応を示してくれたが……

「え、………と、………え？」

キヨドリ方が半端ねえなこの人！ せめて何か言ってくれよ！ 会話転がらねえよ

!?

「あ、いや……なんつーか、困ってる様子だったから、アレだったらコイツらどうにかした方がいいかなって思って声掛けたんだけど……」

「え……、あ………、あ………」

「………」

か……、固まったッ!?! まるで石にでもなってしまったかのようにピクリとも動かなくなっただけですけど!?!

心做しかピシって聞こえた気がした!?!

「あの、竹内？　むしろ話しかけられて困ってるように僕見えるんだけど」
「嘘やん……」

確かにそう見えなくもない。明らかに俺が声をかけてから挙動がおかしくなったわけだし……これは、余計なことをしちやつたか？

いや、多分しちやつたな。これはもうしょうがない。大人しく引き下がっておこう、なんか恥ずかしくなってきたし。

「なんか、急に話しかけてごめん。困ってないんだったらそれはそれでいいンス、じゃあ……」

と軽く流すように会話を区切り、深沢の方へと戻るように進む。

が――

「あ………あの………」

「ねえ竹内、なんか話しかけられてるみたいだけど？」

「え？」

俺は全く聞こえなかったんだが、どうやら微かに声を出していたらしく、思わず無視してしまいそうになったところを深沢に止められる。

「やっぱり困ってる？」

そうだな、流石にこれだけの男に囲まれてちやあ混乱はするよな。よし………とりあ

えず追っ払って——

「……………」

と思っていたのだが、女の子は一生懸命に首を横に振り困っていない事を俺に伝える。

「ええ…………じゃ一体…………？」

今度は俺が困惑していると、女の子は予め準備していたっぽい紙切れを勢いよく俺に手渡してきて、俺が受け取るや否や取り巻きの男たちを置いて一目散にダッシュして行った。

それに続くように男共も走り出す。

「な、なんだったんだ…………？」

「とりあえずその紙切れを開けてみようよ」

「ああ…………」

手渡されたのは綺麗に折りたたまれたノートの切れ端。それを開いて中身を見ると、何かのIDが書かれていた。

文字数や打てる文字的に、多分これは……………RINGのIDだろう。

「なんだったの？」

「多分RINGのID、なんでこんなのを？」

気になるのはこの文字を今書いたのではなく、予め用意していたこと。事前にある程度の予測をしないとこんな芸当はできない……最初から俺に渡すつもりであったのならば……な。

「かと言ってあんな極度の人見知りが俺を狙うユーザーとは思えないが……警戒は必要……か？　でも、単純に他の理由があつた場合が可哀想だよな。例えばあの場は男たちが沢山いたから話せなかつたとか。

まあいい、後で連絡してみよう。

「女の子の!?! ID!?! 僕も欲しい! 見せて見せて!」

「絶対ダメだ!」

知り得る秘密、その為に

登校が完了し、自分の席にたどり着くと、カバンを置いてスマホを取り出す。目的はもちろんさつき貰ったIDにRINGで文を送るためだ。

わざわざ止めてまで教えてきたということは、なにか俺に用件があるのだろう。

そう思っつてとりあえず登録した相手に適当に挨拶をする。

『さつきIDを受け取った者です。竹内 蓮太と言います』

特に変哲もない文をポンつと送る。それでスマホを閉じて休み時間にもなったら返信が来てるかな？ なんて思っつていたら、十秒くらいで返信が返つてきた。

「早……」

『突然申し訳ございませんでした。私、誰かとお話するのはとても緊張してしまうんです。こんな形で返事をしてしまったてごめんなさい。私は香坂 春風と申します』

いや長えな、あの短時間でここまでの文をタップ出来んのかよ。ヤバすぎだろ。

『気にしてないんで大丈夫。なにか要件があるんすか？』

あ、ちゃんと説明を加えて置かないとわかりづら——

『ゴーストさんってご存知ですよね?』

……ッ!

思わず身体が一瞬止まってしまった。

あんなに悩んでいたのはなんだったのかと思ってしまうほどに、すんなりとゴーストの情報が聞き出せそうなことに正直驚きを隠せない。

………ここは絶対に友好的な態度でいかなければ……!

『知ってる。彼女について何かを?』

つかそもそもなんでこの人がゴーストの事を知ってるんだ? アイツは友達とかは作らない性格のはず………って、そう言えば希亜と初めて共闘した時になんか言ってたな……。似たような奴がいるとか何とか。

『竹内さんのことはゴーストさんから聞いていたんです。何かあつたら頼れと言われていまして……』

アイツ……俺の知らねえところで何勝手なこと言ってるんだよ。

つと……本当はすぐにゴーストのことについて聞いておきたいが……流石にここはその話をするべきタイミングじゃあないだろう。アイツが勝手に言ったこととはいえ、そう言われて尚、俺に連絡をしたということは頼りたいことがあるって事だ。

『まあ……アイツがそう言ったのなら。俺なんかじゃ大した力になれないと思うけど、

困ってることがあるなら相談くらい乗るツスよ』

『ゴーストさんもそうですけど、お二人とも、とても信頼し合っているんですね』

『そんな事ない。むしろ今のところは振り回されっぱなしツスよ』

『素敵です』

信頼し合ってるねえ………そんな事ねえだろ。アイツは結局最後まで俺を突き放しっぱなしだったし。

それにそもそもとして、俺とゴーストは出会ってまだ二日目だったの。

『それで、頼りたいことって?』

『竹内さんもユーザーなんですよね? 私も不思議な能力を手にしてしまったんですけ

ど………上手く能力が扱えなくて………』

きつと俺のことを知ってるのはゴーストが軽く喋ったんだろう。どう言った経緯で二人が知り合ったのかも少し気になるところだが、まあ今はそれはいい。

能力が上手く扱えない………ねえ。そんな事言われてもな、ハッキリ言って練習して練習をあげるしか………

『俺だって特別上手い方ではないと思うからなあ………がむしやらに練習してただけだし』

『他の方にも似たようなことを言われました。やっぱり沢山練習をしなくちゃいけない

んですね』

……？ 他の方？ もしかして香坂さん、色々なユーザーと知り合いになっているのか？

『他の方？ 誰かにこのことを相談したんですか？』

『私、元々《アガスティアの葉》っていう掲示板で書き込みをしていたんです。そこで偶然知り合っていた方が能力について知っていたみたいで……でも、その方にも練度が不足していると言われちゃいました』

アガスティアの葉っていやあ……確かあのアニメのファンサイトじゃなかったっけ？ ああ……ファルシのルシがページでククーンみたいなやつ。

なりきりの人ばかりだと思ってたけど、案外本物も紛れ込んでいたりしていたんだな。こりや意外だ。

『それじゃあ、まずはもう一度会ってみないっすか？ 俺としても、聞きたいことが少しあるから……そろそろHRも始まるし詳しい話はその時って事でどうです？』

なんにせよこの文面上だけではどうにもこうにもいかない。ひとまずは会ってからちゃんと話をしてからだ。

まあ……あんなにテンパってた人が普通に話せるかは置いておいて。

『わかりました。頑張ってみます』

さつきまでは爆速で返事が返ってきていたが、この一文だけはそこそこの時間を有した返答だった。

それだけ迷っていたんだろう。しかし、極度の人見知りだと言うことは自分自身が一番知っているはず。それでも会ってくれると言うんだ。その勇氣にはしっかりと答えなければいけないだろう。

『ありがとう。また放課後に連絡を入れるよ』

と返事をしてから、やつとこさスマホを直す。

思いのほか早くに来た絶好のチャンス。この好機を逃す訳には行かない。それに香坂さんもユーズーなんだ。なんの能力かはわからないが、もしかしたら俺にとって力になるものかもしれないし、知り合っておいて損は無いだろう。

正直蜘蛛の糸を掴むような思いだ。これしか今はゴーストに関しての情報が得られそうにないから。

兎にも角にも、まずは放課後だ。お互いに利用するような関係になってしまったが、別にそこには悪意はない。本心で香坂さんをどうにか助けたいとも思っているし、情報が知りたいとも思っている。

だからこそ……なんとか良い関係にならないとな。

それにしても……俺の会話のぎこちなさがやばい。我ながら言葉遣いがおかし

い、陰キヤ丸出しだ。

なんとか直していかないとなあ……

初めての異世界人

朝のあの出来事から数時間経過して、今はもう昼休み。最近は忙しくてまともに弁当を作ってきていない為、今日も今日とて購買に行つて適当な食べ物を買ってくる。

香坂さんの件も重大なことではあるが、それと同じくらいに大事な事を九條さんからでも聞かなければいけない。

ついでに昨日のアイツがちゃんと九條さんのところに行つてアーティファクトを渡しているかどうかも確認しておかなきゃな。

……つかバカ正直に約束を守らなかつた場合のことを全然考えてなかつた。でも、九條さんのことを知つてたし間違いなくこの地域に住んでいる奴だろう。希亜の事は知らない様子だつたから、学年違いの学生という可能性が一番高いか。

となると……アイツは白泉の一年か三年かな？ 玖方のケースもあるけど、その辺は実際に来てなかつた場合に考えておこう。

まずは九條さんに声をかけてみないと何も変わらない。

そう思つて九條さんを探すが……なかなか見つからない。いつものように教室にい

るもんだと思つてたんだが、今日に限つてそんなことは無く、ウロウロと探しているうちにいつの間にか中庭まで足を運んでいた。

ここまで探して見つからないんだ、しょうがない。RINGでメッセージを送つて確認してみるか。

「九條さん、メッセ見るかな……」

タツタツタツとリズム良く画面をタップしていると、いきなりどこからともなく声が聞こえてきた。

「その必要はないわよ、レンタ」

「……んあ?」

聞いたことがあるようなないような声、その声が聞こえてきた方向に視線を向けると、可愛いとは言えないよく分からないお人形さんがフワフワと宙に浮いていた。

初見なら間違いなく驚くところだろうが……いや、驚いてはいるんだが、俺が危惧しているのはそんなことでもなんでもなく……。

「お前はイーリスか? それともソフィーティアか?」

二人とも同じ人形のような姿という事を聞いている。実際にどちらも見たことの無い俺は名を聞くことでしかどちらなのかを判断することができない。

まあ、俺の命を狙っている奴が正直に自分はイーリスです。なんて言うとは思わない

が。

「イーリス……………なるほど。あなたは既に彼女の存在に気がついているのね」

意味深な言葉を漏らす人形は、ちっこい両腕をピコピコと動かしながらひたすらに飛んでいる。

「……………ソフィーティアの方か」

「ええそうよ。長つたるいでしよう、ソフィでいいわ」

「こりゃ丁度いい、わざわざ向こうから出迎えてくれたんだ。何か用件があるんだな。

「それで、なんの用だ？ わざわざそちから声をかけてきたんだ、何かあるんだろ？」
「別に用はないわよ。ただあなたの行動にほんの少し協力してあげようと思っただけ」

……………俺は新海にも九條さんにもまだ何も伝えていない。となると、ソフィーティアを知る人間たちには何も知らせなくても、俺の行動がバレていたということになる。

監視でもされてるのかね。

繋がりのある二人か……………本人から。

「だったらもう分かかってんだろ？ 《アンブロシア》の霊薬、アレをくれないか？」

「意味が無いわよ。幻体が二つの人格を保つなんて話、聞いたことも無い。間違いなくアンブロシアの霊薬じゃどうしようもないわ」

そりゃ知らないはずだろう。そもそもとして、あのゴーストという存在が特別なんだ

と自分で言っていた。つまりは前例がない存在ということだ。

「霊薬を使つて契約を破棄できたとしても、人格が別れるとは思えない。その進行は止まることは無いでしょうね」

「そうか……」

何かしらの可能性があるかと思つていたが……ダメか。

「私からも一つ質問。あなた、今何度目かしら」

「はあ？ なんの事だ？」

「……もういいわ、忘れてちょうだい」

訳の分からん事を急に言われて、忘れろ……か。コイツ人間舐め腐つてるなあ。

俺も人の事は言えないか。

「まあいいけど」

「……………」

適当に返事を返すと、ソフィはただ無言でじーつと俺の方を見続ける。まるで品定めでもするかのように。

人形だからわかんないけど。

「この枝は何もかもが違う……あなたなら、『オーバーロード』を複製されずに救えるかもしれない」

「オーバーロード？ 何？ 俺これからタケンガとか名乗った方がいいのか？」

「訳の分からないことを言わないでちょうだい」

訳の分からないことって……なんだよ、コイツアレか？ 漫画やアニメを見ないタイプか？

「前のあなたは残念ながら失敗していたけれど……今はちゃんと仲間を作ろうとしているみたいね。その代償に色んな事を失ってしまっているけれど……まあ誤差でしょう」

「……？」

別に俺は仲間なんて……ってんな事はどうでもいいんだ。それならゴーストを救出するにはどうするかをちゃんと考えとかねえと……

「それなら何か特殊な方法はないのか？ 何とかしてゴーストを助けたいんだ」

「……別に何も必要ないわよ」

「必要ないって……どういうことだよ」

「そのままの意味よ、アンブロシアなんて無くてもあなたは奇跡を起こせるはず。おそろくね」

「んな曖昧な……」

「要は心の持ちようよ、自分を信じなさい」

そんな言葉を残して、ソフィは時空の彼方へと消えていった。

いやいやいやいや、要するに無計画のまま何とかしろってことだろ？
なんだよ……
どんだけ適当

喫茶店での戦い、前編

「はあ……………」

結局、アテにしていたアンブロシアの霊薬でもどうにもならない。だが、ソフィーティア曰く俺なら奇跡とやらを起こすことができるという。

んな事言われてもよお…………

でも…………悩んでいてもしょうがない。やれることは全てやるんだ。必ず探し出す。

奇跡とやらに賭けるのも悪くないが、準備できる分は全て事前に準備しておく。下手したら…………いや、下手をしなくてもオリジナルとは戦いになるだろう。

俺の能力を欲しがっているようでもあつたし…………

備えるんだ、全てに。ゴーストをもし無事に守ることが出来たとしても、俺が死んでちや意味が無い。

俺たちで生きるんだ。

……………

……
……

あれから、そこその時間が経って放課後。今からはとうとうあの香坂さんのご対面だ。

さささつとRINGを使って香坂さんに連絡を入れ、何かと便利のいいナンバーで合流しようという事になった。

本当は同じ白泉生徒だし、構内のどこかでも良かったのだが……喫茶店の方が落ち着きやすいだろうと思い、そっちにした。

だって道端でほんの少し会話をしただけで（会話になっていない）石のように固まってしまうんだ。少しでも心が落ち着けるような場所でないとなんか……見てられなくなりそう。

ちゃんと本人からの承諾も得たし……後はナンバーボールに向かうだけなんだが……その前にRINGの送信先を九條さんに変えて、『わかった、ありがとう』と返信をする。その理由は昨日のあの男たちだ。結局のところ、アイツらは九條さんの元へは向かっていないらしく、未だにアーティファクトを自分の元に留めているんだろう。

調べてみたら、同じ学園の一つ下の学年の生徒ってことが分かったが……どうやら今

日は登校をしていないらしい。

友人らしき人も昨日の夕方から連絡が取れなくて心配だ。と言っていたから……おそらく俺から逃げるためとか、そんな理由で避けているんだろう。

まあでもそれも限界が来る。いつかまた登校してきた時に今度こそアーティファクトを回収しておかないとな。

「さて……いくか。まずは前半戦」

香坂 春風……なかなか手強そうだが、どうにかしないと何も始まらない。まずは相手の問題の解決、それからその報酬としてゴーストの情報を聞き出す。

……協力的な人なら嬉しいんだけどな。

なんて思いながらもテクテクと歩いていく。その行き先はもちろんナインボールだ。確か相談事つてのは……能力が上手く扱えない、だったよな？

何か解決策を考えるにしても、まずは会わないと何もわかんないし。善は急げつてな。

なんてことを考えながら歩くこと約二十分。やっとここさナインボールに到着。とりあえず中へと入ると……

「……………あ、いた」

数ある席の中でも一番地味めなところ。窓際ではあるが入口からは見えにくい場所に、見覚えのある女の人がちよこんと座っていた。

スマホをいじるわけでもなく、本を読むわけでもなく、何かを注文している様子でもなく、ただじつと机の真ん中を不安そうに見ている女の人。

間違いない、あの胸の大きさは香坂さんだ。

……………判断基準がひでえな。

なんて自分にツツコミをしながらも、すでに香坂さんが座っている席へと歩いていく。

途中で店員に接客をされたが……………待ち合わせの人がいると説明すると、分かっていたかのようにすんなりと案内された。

そして未だに俯くようにしている香坂さんに、とうとう声をかける。

「おまたせ。香坂さん……………だよね？」

間違いないと思っではいるが、一応確認。もし激似の人物だった……………みたいな展開だったらかなり恥ずかしい思いをするから。

確認と言ってもとりあえず席には座ってみる。するどそこでようやく俺に気がついたみたいで、一気に今にも泣き出してしまいうんじやないかと思うほどにオドオドとし始

めた。

「あつ、あの、その……、は、はい……」

……マジかよ。「はい」の一言を言うだけでこれかあ……。余程人と話すのが苦手と見える。どうにかして心を開いて貰うには……やっぱり雑談から入るしかないか？

「朝も会ったけど、俺は竹内 蓮太。改めてよろしく」

できるだけ柔らかく、フレンドリーな感じをイメージして接してみる。もちろんこの人もユーザーである以上は注意すべき人物なのだと分かつてはいるんだが……こんな性格の人が人を殺すなんて思えない。

ましてや自分の能力が上手く扱えない事を正直に人に相談するような人だ、殺人などは間違いなくしていないだろう。

「上手く話せそうにないなら無理はしなくていいから、とりあえず何か頼もう？ 香坂さんはここには来たことがある？」

メニューを開き、香坂さんが見やすいように反転させ、テーブルの上に置く。

相変わらずオドオドとしているが……ま、まあ、まだまだこれからだ。

「わ、わた、私……、私、は……あま、り……」

「そっか、じゃあこれからはココをオススメするよ。この店の食べ物は安いし美味いか

らさ。今日はアレだけど……また機会があれば是非来てみて？」
「……………っ」

コクコクつと首を縦に振り、なんとか俺との会話を成立させようとしてくれている香坂さん。

うーん。会話を頑張っていたって気持ちは十分に伝わってくるんだが……やっぱりまだ難しいんだろうか。

つかなんでそれなら俺に連絡をしてくれたんだ？ って、アレか、俺がいきなり会おうなんて言ったのがまずかったのか。本人的にはそんなつもりはなかっただろうし。

「とりあえず俺は……そうだな……。アイスコーヒーでいいか、香坂さんは？」
「……………っ」

プルプルと震えた指を頑張って動かそうとしているが……如何せんなかなかその指先が定まらない。

うん。かなり緊張しているようだ。
「アイスティーで……いいかな？」

一瞬その方向へと指さした気がしたから、ほぼ勘で頼みたいものの確認を取る。すると、ブンブンと音が聞こえそうなほどに頭を縦に振るもんだから、若干反応に困る……

なんか……脅してるみたいでやだな……

「あはは……そっか。すみませーん！」

その場しのぎの注文の段階でこれなんだ。これから疲れるぞ……でも、頑張らな

いとな。うん。

喫茶店での戦い、後編

飲み物が届いた後も、なんとか会話を転がそうと香坂さんに話しかけ続けるが……相変わらず相手は気まずそう……というか、テンパリが半端ない。

会話のスタイルは最初と全く変わらず、上手く弾まない言葉のキャッチボールに戸惑いすらも覚えていた。

つかキャッチボールじゃなくて完全にドツチボールだな。

でも、ありがたいのは、こんなにも人見知りな人なのにも関わらず、逃げたりせずにちゃんとここに来てくれたこと。それに未だに頑張つて会話をしようとする意思が感じられること。

その証拠にまだ会話が噛み合っていないが、最初よりは随分か聞き取りやすくはなつてきていた。

そんな中、唐突に香坂さんから変な質問をされた。

「な、な、何故……、そ、その……、ゴー、ストさん……を……」

「何故って……」

それはもちろん……もちろん………もち………？

いや、そんなのは決まってる。今更悩むことは無い。

「似てたんだ、昔の俺に……そつくりなんだ。周りは誰も信じちやくれない。自分の存在意義もわからない。でも、誰かを守らなきゃいけない。そんなところがそつくりだったんだよ」

俺はそれが出来ずに、兄貴を死なせてしまったけれど……あんな悲しみは、あんな苦しみはもう誰にも知ってほしくない。

今まではもう二度とあんなことは起こさせないと、自分の為に生きていたのが、どっかの社長令嬢のせいで心を動かされた。でも、どこか兄貴も応援してくれているような気がして……今の俺は正しいんだって思うようになった。

「俺は……兄貴がいてくれたから自分を保てた。兄貴が俺を必要としてくれてるのならって思うと、どんなことでも頑張れたんだ。アイツにはそんな奴が必要なんだよ、自分を信じてくれて、自分を肯定してくれる。そんな存在が」

そうだろ……。

「幻体だろうが、んなもん関係ねえ。そこに心がある限りは生きているんだ……」

そんな奴が消えようとしている。また……俺の近くで誰かが死のうとしている。もう嫌なんだよ、たくさんだ。

大切な人がいなくなるのは苦しいんだ。だからこそ俺は大切な人を作らなかつた。友人も恋人も、誰一人。

そんなやつをこれ以上現れなくするために、アイツがそんな目に遭わなくてもいいように、戦うんだ。俺は。

「だから居場所を知りたいんだ。奇しくもそれが石化の能力者に繋がるらしいしな」

「……………っ」

その瞬間に違和感。

息を飲むような声が聞こえてきて、俺たちの空気感が一気に変わる。

そしていつの間にか目を閉じていた香坂さんが、ゆつくりと瞼を上げると……………

「素敵ですわ、互いを思いやる心……………感服致しました」

「……………へ？」

ごめん、訂正。空気感が一気に変わるんじゃないやなくて、香坂さんの雰囲気ガラリと変化した！

さつきまでの自信の無いオロオロとした雰囲気は一切感じられなくなり、どこか品のある、そう、女王様のような感じになった!?

「素敵な《愛》ですわね。私も応援致します」

「え……………あ、いえ……………違います」

「あらあら、照れていらして？」

ええ……、なんなんだよこの人……。つかいきなりこんな性格が変わるなんて有り得るのか？ 元々こんな性格だった……。？ いやいや、それは無いだろ。

二重人格の線が固そうだな。でもここまで反転するなんて……。実例あるのか？

……目の前にあるんだけど、まあいいか。

「愛には様々な形があるもの、蓮様の思いやりの心も立派な愛ですわ」

「れ、蓮……様……？」

なにになになになに?!?!? この人怖い!?

様って何!?! サマって何!?!

「私に声を掛けて頂いた際も、蓮様の優しさの愛によるもの。貴方は私に言い寄ってくるだけの方々とは違う……本物の愛を持って、私を心配なさってくれた。………これはもう運命、ですわね」

「は、はあ………」

「今夜21時、神社にてとある方とお会いする予定なのですが……私と共に、向かいませんか？ もしかしたらゴーストさんについて、何か知ることがあるやも知れませんが」

「21時？」

わざわざそんな夜中に……。しかもそこへと向かうとゴーストについて何か知る

ことがあるかもしれない……と。

そいつもゴーストを知る人物だということか。

「はい。そうですわね………私の力を偶然発見し、『仲間になりたい』と思うことにした………というのはどうでしょう?」

「仲間? どういう事だ?」

「AFユーザーの為のAFユーザーによる集団。というものを司令官さんはお作りになられる様で、詳しい事は来てのお楽しみ。ですわね」

「司令……」

よく分からねえが、とりあえずそこに行けばゴーストに近づけるんだな? それなら

……

「行くよ。連れてつてくれ」

と、成り行きで何か情報が掴めそうな人物と出会うことになったんだが……。今俺は悩んでいる。

チームには入っていないとはいえ、希亜は俺に協力的だ。ゴーストについても探つて

いてくれている事だろう。とすると、やっぱりここは希亜にこの件を伝えるべきだろうか？

あの疑い深いアイツの事だ、警戒をして守る為とか言って付いてきそうな気もするが………

どうしよう？

4月21日

BAD

運命の分岐、その道の先

そうだな、やっぱりああして協力してくれてはいるんだ、伝えなければ失礼というものだろう。

なんかずっとヴァルハラ……なんちゃらくに入れてるし、向こうは友好的だし。ずっと否定は続けてるんだけど、アイツそこだけ俺の話を聞かねえからな。

まあいい、とにかく連絡を試してみるか。

「すみません香坂さん。ちよつと知り合いがゴーストを探してくれてるんだ。ヒントが掴めるかもって連絡してくる」

「ええ、承知致しましたわ」

「悪い」

一応店員に、外で電話をするつもりだと言うアピールをして、ナインボールの外の入口横でスマホを取りだし、希亜に連絡をする。

RINGだと面倒なので通話機能を使って。

「……………」

変なりズムの音を聞きながら、希亜が応答してくれるのを待っている……

『なに』

と素っ気ない言葉が聞こえてきた。

「もしもし？ 俺、蓮太だけど……、ゴーストの件あったよな？」

『ええ、こつちで情報を収集してはいるけれど、今のところは有益なモノは無いわね』

「そうか、ならちようどいい……のか？ アンブロシアの件とは別に、偶然ゴーストにつ

いて分かりそうな事があつたんだ」

『詳しく聞かせてくれる？』

「ああ、まずは——」

少年説明中……

「——とこんな感じ。それで香坂さんって人と神社に向かってみることにさせてさ」
『また貴方は簡単に……』

これ完全に呆れられてるな。いや俺だってそう思うよ？ でもその辺はもう兄貴譲りなんだって思うしかないじゃんか！

「でも価値はあるだろ？ もしかしたら石化のユーザーについても、何かわかるかもしれないねえし」

『そもそも、その香坂さんが発言した《彼女》は私たちの知る《彼女》なの？』

「知らん」

『……………愚直ね』

「でも時間が無いのも事実だ。例え危険だとしても、俺は神社に向かってみる。もしそこで情報が得られたらと考えると……やっぱり行きたくなくなるんだ」

本当は21時なんて言わずに今すぐにでも駆けつけたい。さっさと神社へと向かって、その対面する予定の男と香坂さんに連絡してもらって、少しでも早くに出会いたい。
『はあ……………私も向かうわ』

『……………は？』

『蓮太だけだと心配。考えも無しに向かうだなんてありえない』

「そう思うんならダメだ！ 昨日だって希亜を危険な目に遭わせてしまったんだ！ こ

「こは俺だけで——」

『昨日、彼女がいなかったら今頃私たちは殺されていた』

「——」

思わず息を吞んでしまう。あの時の状況を思い出しただけで、ゴーストが来てくれなければ死んでいたという事実には押し潰されそうになる。

『もうわかつているのでしょ？ 蓮太は《物体が無いと能力を有効的に扱えない》そして私は《能力の発動までの時間が必要》。私たち二人は明確な《弱点》がある』

『誰も死なせたくないと強く願っているのは私も同じ。私も……貴方には死んで欲しくない』

「希亜……」

『もちろん傲慢もするつもりは無い。けれど、間違いなく私たちは手を組むと判断した方が賢明だと思うのだけれど？』

そりやそうさ。確かにそもそもとしてこれから出会う奴が友好的な人なのかどうかすら分からない。

そもそも香坂さんを信用していいものかも分からない。

事実として《イーリス》と名乗る異世界人が俺の命を狙っているし、ほかの人物にまた俺の殺害を依頼しているかもしれない。

俺が死んだらゴーストをどうにかするなんて話じゃなくなる。

「……わかった。好きにしろ」

『そのつもり。そうね……約束の時間の一時間前に会いましょう。場所は——』

「面倒だからこのままナインボールで待つてる」

『そうね、その間に今できる最大限の準備をしておきなさい』

「そうだな」

無愛想な返事を返したあと、どうしてこうなったと嘆きたい気持ちを抑えながら、香坂さんの元へと戻っていく。

すると香坂さんは………服装を崩しており、なんかこう………胸元をガバツと開けていた。

ヤベエなこの人。

「おかえりなさいまし、蓮様」

「え……あ……うん……」

あえてもう一回言うわ、ヤベエなこの人。

「それで、ご友人の方は……？」

「ああ、それなんだけど、ソイツも一緒に同行したいって言ってるんだ。だから人数が増えそうなんだけど……大丈夫か？」

「そうですね……………。私としては問題ありませんが…………」

「何か別の問題が？」

「いえ、先程から司令官さんにご連絡させて頂いているのですが、返答がありませんの」「それって……………まずいか？」

もしかして俺が行くことすらも伝えられていないのだろうか？ そうすると事前情報無しでいきなり会うことになるが…………

「仕方ありません、ぶつつけ本番。になりますわね」

「それちよつと意味が違うような…………」

と、結局司令官とやらに連絡の取れないまま、三人で神社に向かうことになった。

ちなみに仲間になりたいと申し出したという設定は俺にのみ適用され、希亜は結構否定的だった。そのため、設定的には希亜は何も知らなくて俺に連れてこられたということにした。

今の時間は……………19時50分。適当な夕食もついでにこのナインボールで済ませ、未だに妙な色気が漂う香坂さんと共に希亜を待つ。なんだかんだで色々と考え

ちやあいたが……結局のところ何の対処もできない。

考えれば考えるほど最高の結果も最悪の結果も思いつく。このままじゃ埒が明かないと思ひ、俺の中では結局ノープランで行くことになる。

ソフィにもなんかそんなこん時のことを言われたし……何よりも俺たちが持つてい
る情報が少なすぎる。

とにかく希亜が到着し次第出発する準備だけを整え、約束の時間を待つ。

そんな時、ナインボールの扉が開く音がした。

到着、目的の場所

カラんつと店内に鳴り響く鐘の音。その音が聞こえてきた方向へと視線を向けると……いつぞやに見た黒を基調としたゴスロリ服の知り合いがいた。

間違いない、あんなに恥ずかしげもなさそうにそんな服を着こなせるのは、俺の知る中でただ一人だけ。

「きたか」

予定の時間よりも少し早く到着した希亜を確認して、香坂さんに声をかけ、会計を済ませて俺たちは外に出る。

とりあえず二人の顔合わせの挨拶を済ませ、歩を進めながらこれからの事を話していた。

『……………じゃあ希亜は俺たちとは別にわざとに遅れて入ってくるって事か？』

『そう。適当な理由で私が遅れる理由を捏造して、二人だけでまずは白陀九十九神社へ入る。私は少し距離を離れたところで対象を観察するわ』

……………やっぱまだ疑ってるか。さっきは顔合わせの挨拶、とは言ったが名乗ることはし

なかった。おそらくその観察をする対象には香坂さんも含まれているんだろう。

だからこそ口ではなく、RINGを使って俺にだけこう送ってきたんだ。

それでも俺を向かわせるということは、信用してくれているか、都合がいいか。まあどちらも含めていそうだ。

でも確かに危険視はしておかないと……か。

怪しさMAXの香坂さんにその知り合い。しかも『司令官』だなんて呼ばれてる。余程の厨二病でないかぎりは意味もなくそんな呼び名を使わないだろう。となると、この二人は何かのチームの可能性が高い。

しかもその二人はどちらもゴーストを知っているようだったが……あの時希亜が言っていたように《白》なのか《黒》なのか分からない。つまり、人殺しを簡単にする人格か俺たちの知る優しさを持つ人格かがわからないんだ。

あの時のゴーストの発言。オレは殺していないと言っていた。

その《オレは》の意味はまだ理解できないけど……白の人格かオリジナルに対してか、どちらにせよその両方に気をつけなければいけない。

となると希亜のこの行動も分からなくはない。第一、心の底からまずいと思えば、人つて生き物は簡単に裏切るから。それなら俺の目に見えないところで逃げて欲しい。

微妙な気持ちだ。希亜を信じているような気持ちもあれば、どうせ裏切ると思う俺も

いる。悪い癖だ。

精神的に追い詰められるせいか、簡単に俺が人を裏切ってしまったている。

だが……………

『互いに守り合う為にそばにいた方がいい。伝えてなかったか？俺の能力操作範囲は2mなんだ、距離を離されちゃ希亜をカバーできない』

そう送ると、ややジトーっとするような目で希亜に見つめられる。

あーはいはい、俺が悪かったよ。つかお前も能力については詳しく教えてくれないだろーがよ。

「はあ……………」

ボソツと小さくため息を吐いた希亜は、スつとスマホをポケットに入れて再び前を向く。

返事はなかったが、どうやらさっきの作戦のようなものは中止するようだ。

「はあ……………」

それが移るように俺もため息を吐いてしまう。

「どうかなされましたか？蓮様」

「いや…………、これからを考えるとちよつと憂鬱なだけ」

「それでは——」

と言う声が聞こえると、いきなり俺の右腕に何か絡みつく。

「へ？」

その方向を向くと、何故か香坂さんが優しく俺の腕にしがみつつき、ピッタリと密着してきた。

「このようなモノは、好かれませんか？」

「え……？ いや……あの……」

「ふふっ」

いや「ふふっ」じゃなくて……

「ふふっ」じゃなくてっ!! なんなんすか!? 急にこの人何してはるんですか!?!?

腕絡みまくってますけど!? どゆこと!? どゆこと!? おまつ、童貞にこんなことすんなよ!? キャラぶっ壊れるわ!!

だめだ……! この一瞬で頭がパニックってしまったる! 希亜に助けを――

「……………」

「あの、の、希亜……?」

「……………っ」

「え……? なんか怒ってる……?」

「怒っていない」

「ええ……」

じゃあなんでそんなに俺の事を睨むんですかね。さっきまでは呆れてはいたけど今は明らかに怒ってますよね？ さすがの俺でもそれくらいはわかるよ？

そりやそうさ、今は一分一秒を急ぐような事態なんだ。そんな状態の中こんな事してたら何してんだと思うだろう。

しかもどちらかと言えば俺のワガママみたいなものだ、それに協力してくれているのにこんなものを見せられちゃ腹立つ気持ちも分からんくはないが……

俺はどちらかと言えば被害者なんだよなあ。

「と、とりあえず香坂さん？ 腕から離れて欲しいな〜って……」

「離れる必要なんてありません、私は蓮様の疲れた心を癒したい。その一心でこうして腕を組ませて頂いているだけですわ」

離れてと言っているのに、香坂さんはその逆、俺の腕を更にギュッと掴む。この辺でもう俺は一周まわって冷静になりつつあった。

「いや、あの……胸が当たってるけど」

「ええ、そうですわね」

「わざとかい……」

こんなことは人生で初めてだ。シチュエーションもそうだが、テンパリが高まりすぎ

ると一周回るもんなんだな。

俺が普段から意識しすぎないだけ……か？ いや、んな事はないだろ。多分。

「胸……」

みんなそんなもんだって、そうそう、そういうことにしよう。うん。

「元気はでたから大丈夫、ありがとう」

「もうよろしくて？」

「ああ、それに……そろそろ辿り着くだろう？ 例の神社に」

そう言つて半場無理やり絡まれていた腕を解く。

意外と簡単に解けたな……

「今からは気持ち切り替えておかないと……さ」

そう、いつまでも気を抜いていられない。今の時間は……20 : 30過ぎ……大体3

8分か。

「よし、いこう」

予定よりはそこそこ早い、まあ元々俺は待ち合わせには早めに向かうタイプだ。待たせるよりは待った方が楽だからな。

さつきまでのどこか気の抜けた雰囲気から一転、神社の奥に進むにつれて少しずつ心臓の鼓動が早くなる。

柄にもなく緊張してるんだ。まだ待ち合わせ相手は到着してないだろうが、これらを想像するとやっぱり多少は焦ってくる。

おそらく一人だったら、先を急いで走り抜けていただろう。まあ、香坂さんがいる以上は一人なんて状況はありえないが。

ともかく、ああして緊張を和らげてくれてよかった。そういう意味では感謝してる。でも、もう油断はしない。夜の暗闇の中、いつ狙われてもいいように全方向に注意を向けてひたすらに歩き続ける。そして神社にたどり着くと、予定の時間よりも随分早くにたどり着いたにも関わらず、境内の真ん中に誰かがいるように見えた。

暗くてまだよく見えないが、多分人だろう。もしかしたら相手も早めに待ち合わせの場所には向かうタイプの人だったのかもしれない。

とりあえずその人影の方へと向かっていくと……………

「
ツ
」

目にしたものは

月明かりに照らされて、音もなく静かにそこで待っている人。

息を潜めるように必死で声を殺しているんだろうか。そんな事を不意に思う。

意味の無い思考を何度も繰り返し、そのどこか見覚えのある人の近くへとゆっくり移動する。

その後ろ姿はいつか見た少し小さな背中。すっかりと灰色に変わってしまった。そのパーカーはいくら風に靡かれようが揺れ動かない。

白でも黒でもない。灰色。

そう……灰色。

「……………」

言葉が出ない。

なんて声をかければいいかが分からなかった。いや、声をかけたくはなかった。

返事が返ってこなかったらと思うと、怖くて怖くて仕方がないからだ。

そしてついに、その灰色に変わってしまった人の真後ろまでたどり着く。ここから

じゃあ顔が見えない。

見たくない。

嫌という程、頭の中のアイツと似すぎているからだ。

背後からでも分かるほどに深く被ったフード。

そんなフードからみ出る長すぎる髪。

服のデザイン。あの時の、あの日の服装。それら全てが一致する。

試しにその灰色に触れてみると……やたら冷たく感じた。

どれだけの間こうして外にいたんだろう。どれだけの間ここで待っていたんだろう。

どれだけの間……！！

「遅かったのね」

その背後から声が聞こえてくる。

「ああ……」

やっぱりそうなんだ。これは希亜も見えているんだ。この、

灰色になったゴーストを。

「香坂さんは……………?」

「消えたわ。私もその瞬間は確認できていないけれど、初めから誰もいなかったかのよう……ね」

「そっか……」

ゆつくりと灰色に染まったゴーストの前に移動し、その場にしゃがみこむ。

その顔はどこか寂しそうだつた。

「幻体でも……………石になるんだな……………」

「……………そうね」

「夜風に当たり続けたんだろ、もう随分と冷たい」

「……………そう」

その瞬間、目の前の石像がパキツと音を立てて、ほんの少しずつヒビが広がっていった。

胸の辺りから徐々に身体全体に大きく亀裂が走っていき……………四肢を分断するように割れてしまった。

そんな崩れた身体をそつと拾って、俺の真横に集める。

「何をしているの」

そして崩れたパーツを繋ぎ合わせるかのように次々に並べていく。

「蓮太……もう一度質問する。……………貴方は何をしているの」

「何か変わるかもしれない」

「もしかしたら元に戻る方法もあるかもしれない」

「まだ生きてるかもしれない」

「何とかなるかもしれない」

「夢なのかもしれない」

「奇跡が起こるかもしれない」

「助けられるかもしれない」

「まだ——」

その言葉を発した時、何かがあが俺を包んでくれた。

妙に生暖かい誰かが……俺の身体を動かさし、視界を塞ぐように包んでくれている。

「まだ……」

「逃げてはダメ。貴方は心に受け止めなければいけない。彼女の……彼女にとって一番の理解者である貴方が、誰よりも負けてはいけない」

「負け……る」

「逃げてても結果は変わらない。いまこの瞬間に貴方が事実から目を背ければ、彼女自身を貴方が否定する事になる。だから……」

「まだ。また、俺は助けることが出来なかった。」

「兄貴の時と同じだ。結局全て口だけで、何も知らないまま俺は……」

「止めてくれ……」

「止めない」

「離れてくれ……」

「離れない」

「殺してくれ……」

「死なせない」

「もう嫌だ。たくさんだ。これ以上苦しみたくない。悲しみたくない」

「耐えなさい。貴方が死んだら誰が彼女を供養するの。彼女を思い偲ぶ事が出来るのは……貴方だけ」

「思った所で何も変わらないじゃないか。願った所で何も動かないじゃないか。俺は……何度大切な人を殺せば気が済むんだ……!」

だから言ったじゃないか。友達なんていらなくて。

そんなカスみたいなものどうでもいいって。

だって、結局は消えるんだから。

「蓮太……貴方は何度、そう言って自分を責めてきたの。貴方は何度、自分に罪を被せてきたの。貴方は何度……そう言って命を絶とうとしたの」

「……………」

「私にはわからない。過去に何があつたのかも、今貴方がどんな思いを抱いているのかもわからない。けれど——」

スつと俺は顔を上げられ、希亜の姿が目に入る。

「それを行うのであれば、私は貴方を裁く。これからも自分に罪をかぶせ続けるのであれば、私は貴方を裁き続ける」

「だから……生きなさい」

「生き………る」

「ええ。貴方が、彼女の生きた証」

俺は……俺は………

* (視点切り替え)

ゆっくりと彼から身体を離して、俯いたままの彼を思う。

私の知らないところで、彼はどんな辛い経験をしたのだろう。彼はどれだけの痛みを知っているのだろう。

思えば彼は常に不安定だった。おそらくは心の奥では誰も信用出来ない、誰にも心を開いていなかったのかも知れない。

ただ一人を除いて………

きつとこの痛みは、私じゃ消してあげられない。彼が一度も疑わなかった彼女なら

……可能性はあるけれど。

けれど……それも難しいでしょうね。

「——ッ！」

その時、何か嫌な予感がした。

冷たい槍にでも貫かれているかのような感覚。思わず私は神社の屋根の上に視線を向ける。

すると——

不敵に笑う石化したはずの白い彼女がいた。

その目元はあの聖遺物の力を扱う証である紋章が現れている。

そして……

その人物と目が合うと、私の身体は動かなくなつた。



Squall

First

どうしたらいい……、どうするのが正解なんだよ……。

また俺は見殺しにしてみました。

でも、そんな俺に希亜は「生きろ」と言う。

生きて何になるんだよ……！　いくら思ったところで、いくら働んだところで、死者は生き返ったりしない！

俺はいつだって……そう言っただけで逃げ続けたんだ。罪から、人生から、運命から、命から。

「希亜……俺には無理だ……。やっぱり、俺は生きてちやいけな……」

「……………」

返事は返ってこない。

「やっぱり……希亜も思うか？　弱い人間だなんて……」

あれだけ俺の為に声をかけてくれたのに、俺はそれに応えようとしな。ダメな奴で。

こんな俺に優しくしてくれてるのに、俺は信じることもすらできていないのかもしれない。

本当にダメで、クズで、ゴミだ。

結局自分の事だけを考えて、周りをそれに振り回す。

本当に……どうしようも無い。

「ごめんな、希亜……。ごめん……」

「……………」

返事は返ってこない。

「希亜……？」

さすがにそこで違和感を覚える。さっきまであれだけ俺に話しかけてくれていたのに、と疑問を抱く。

呼んでいるのに、声をかけているのに、返事が返ってこない。

その事を不思議に思い、俺は顔を希亜の方へと上げるが………すぐに後悔する事になる。

「希……………亜……………ツ！」

彼女は石になっていた。どこか空を見上げるように月の浮かぶ方向へと顔を上げて
いるが……………そんなことはどうでもいい。

「希亜……………！ 希亜ツ！！」

そんな……………なんで……………！！ なんでツ！

さつきまで声をかけてくれてたじゃないか……………！ さつきまで抱きしめてくれてた
じゃないか……………！！ さつきまで生きてくれていたじゃないかツ！！！！

「返事しろよ！ 返事をしてくれよツ！！ 頼む……………！！ 頼むから……………ツ！」

灰色に変わってしまった彼女の両肩を持ち、揺さぶりながら声を上げる。

それが返つてこないモノだと理解しながら、否定して欲しくて、嘘だと言って欲しくて、ひたすらに声をかける。

「頼むよ……！ 頼むよ……！ 希亜までいなくならないでくれよ……！ ツ！」

涙が出る。

親しくなった人たちが、次々に呪いのように石になつていく。

「もう一度……声を聞かせてくれよ……！」

「希亜……！」

別れも言えずに彼女は死んだ。

俺がほんの少し目を離れた内に……結城 希亜は死んだ……！

「……………」

なんで……ゴーストが死ななくちやいけない……！

なんで……希亜が死ななくちやいけない……！

「殺すなら俺を殺せよッ！ クソ野郎ッ!!!」

そう叫んだ時、俺の真横に何か少し大きな影が落ちた。

例えるならそれはポウリングの玉のような大きな丸。ただ……丸だけではなく、えらいリアルな頭髪のような型がハメられている。

ソフイ空間

空間その1

.....

「あー、あー、聞こえているかしら？」

「イマイチ反応が悪いわね、もしかして私の事が見えていないのかしら？」

「でも、確かに反応は感じるのだけれど……まあ伝わっているのならそれでいいわ」

「改めて……こんにちは、新しい《オーバード》の使い手さん」

「あなたは……いえ、《あなた達》と言うべきね。あなた達は、レンタの進化の力によって奇跡を起こしたアーティファクトをそれぞれ手にしている、いわばレンタに選ばれたユーザーよ」

「意味がわからない？ 今は分からなくてもいいわ。とにかく、あなた達は見ていたのよね？ レンタが混ざった枝を」

「それくらいはわかるわよ、私は《世界の眼》を使って見ていたのだから。今は……あなた達それぞれのユーザーに意識を繋げているのよ。まったく……探すのに苦労したわ」

「あなた達は、レンタとは違った世界のカケルとの同一存在。あなた達それぞれがカケ

ルと、そしてレンタと繋がっている。私はそれを辿っただけよ」

「ま、それはいいとして。見ていたのよね？ あの枝を。一応聞いておくけれど……あなた達はノアとハルカとレー——いえ、この枝ではゴーストだったわね、この三人が石化してしまつた枝は1度目？ 2度目？」

「うーん……反応が悪いわね。臍氣に感じるのは………1度目なのね。なるほど、だからあんなに中途半端な干渉の仕方だったのね」

「仕方ないわ、多分だけど、初めて使つたのでしよう？ 《オーバーロード》を」

「けれど……どうやら複数人で手にしたせいで、上手に扱えていないようね。どうかしてあげたいけれど……私じゃどうしようもないわ、文句ならレンタに言つてちょうだい」

「それで、本題なのだけど、今、大きな問題が起きているの。もしかしたらあなた達の中には気がついている子もいるんじゃないかしら？」

「レンタの存在についてよ。あの子は元々は異世界の住人だったにも関わらず、あの世界に入り込んでしまった。原因は間違いなくレンタが手にしている力、《オーバーロード》のせいだけれど……これが大きな問題を生んだの」

「レンタはその代償に《オーバーロード》を手放した。つまりはこの争いの最も大事な核を世界の外にいるあなた達に託してしまつた……つまり、レンタじゃ運命を変えられな

くなってしまうたの」

「《オーバーフロー》は進化の力。限界の上限を壊し、新たな力へと昇華させる王の素質を持った力。言い換えれば、常識を破壊する力を持っているわ」

「だからこそ無茶苦茶なことになってしまったのだけれど……とにかく、私の伝えたいことは、何度失敗してもいい。あなた達には最高の枝を創り出して欲しいの」

「そう、最高の枝。具体的にはそれがどういふことなのかは説明が難しいのだけれど、きつとその枝にはみんなの笑顔があるはずだから」

「それはあなた達にはしかできない。でも、その為にはどうしても犠牲は付き物。だからこそ、最小限の犠牲に抑えて欲しい」

「難しいのは承知の上よ、でも成り行きとはいえ、あなた達は力を手にした。その責任はとってもらわよ」

「まずは……そうね、あなた達が最初に選んだあの選択、あれからやり直してみましよう？」

「確か……数は………」

協力する相手は？

1、ヴァルハラ・ソサイエティ

2、リグ・ヴェーダ

3、単独行動、第三勢力

4、私、ソフィーティア

5、……………あの女、イーリス

「だったわね？ それであなた達は《単独行動》を選んだ。なるほど、それでレンタは頑なに人を信じなかったのね。あの不可解な行動にも納得だわ」

「そうね……………これは消しておきましょう。もう死者が出てしまった枝に向かいたくはないでしょう？」

「とはいえ、あの結果を生み出した最大の原因は……………わかっているみたいね、そういうことよ」

「本当は最後の選択も消して欲しいところだけど……………一応可能性は無いこともないわ、選んで欲しくないけれど残しておきましょう」

「……………ええ、1、2、4、5の中から選んでちょうだい。え？ 何故私が枝の分岐を理解しているのかって？ 《オーバーフロー》のおかげよ、便利でしょう？」

「とは言っても私はあくまで《世界の眼》枝を選択は出来ないわ。だから、あなた達が切り開いてちょうだい。いい？ 1、2、4、5の中から選ぶのよ？」

「その枝の先を……………楽しみにしているわ」

「また、機会があれば会いましょう？」

「そうね……………名前は……………とりあえず《ナインズ》と呼ぶことにするわ」
「じゃあね、ナインズ」

4月21日 B A D (続)

血の涙

あれから……どれほどの時間が経過しただろう。

あれから……どれほどの涙を流したのだろう。

あれから……

何度死にたいと願っただろう。

実際、何度も何度も身体を傷つけた。数え切れないほどに、ボロボロに。でも、もう痛みすらも感じない。

虚無感に包まれた俺は、何をすべきかもわからなかった。

ただただ、生きてほしいと、やり直したいと願うのみだった。

けれどそれら全てが無駄。俺だけ願おうが、後悔しようが、無駄なことに過ぎない。

叫んでも、絶望しても、結果は結果。負けは負け。死人は死人。

そんな時、バキバキと音を立てて、希亜の石像が崩れ始める。ゴーストと同様に雑に身体が分割されていき、その場に崩れ落ちてしまった。

その瓦礫の中には銀色に光るシルバリングが……

「……………」

俺はそれをスつと拾い、ポケットにしまいこむ。

そして、俺のせいで石になってしまった三人の頭を持ちあげた。

「帰ろうか。みんな」

「帰ろう……………」

家の扉を開けて、重い頭を三つ持ったまま部屋の奥へと歩いていく。そしてただ一つだけある机にその頭を三つ並べて、その目の前に座る。

「……」が俺の家だ、みんな初めて来ただろ？」

電気もつけずに、着替えもせずに。

「汚くてごめんな、まあゆっくりしてくれよ」

ただ話しかけ続ける。

「そういえば香坂さんはサインボールにはあんまり行ったことないんだよな？」

「だったよな、あそこのオススメはパフェなんだ。他のメニューも美味しいけどパフェが最高なんだよ、なあ？ 希亜」

「こないだも希亜はパフェ食ってたもんな。ゴーストは……………また甘いとか言っってバカにしてきそうだけどな」

「コイツ、モックのシェイクを奢ってやったのに文句言ってきたんだぜ？ 中々の奴だ

よな」

「はは……………はは……………」

カチカチと時計の音が鳴り響く。

暗闇が包む部屋の中ではあるが、こうして四人で話すことが出来てる。それだけで俺は幸せだよ。

今までごめん。でも、もう失敗はしないから、俺が三人を守るよ。

「ごめん、俺疲れたせいお腹減った。今からなんか作るけど……………みんなは何かいるか？」

その場を立ち上がり、冷蔵庫の中身を確認する。

中にはみかん味の様々な飲食物が殆どで、ほんの数量だけ卵等のなんとか夜食に使えそうなものがある。

「つて女の子を夜食に誘うなんて逆にダメだったか。そもそもとして材料がそんなになかった、まあ食べたくなったらちよつとやるよ」

ちやつちやつと食材を焼きながら味付けをする。

そうして作った簡単な物を三人の首元まで持つていき、コトンつと皿を置く。

「俺つて意外と料理するのは好きなんだ。男がこういうことするのつて変かな？」

「そう？　そう言つてくれるのはありがたいよ。今度、ちゃんとした時にみんなに俺の料理を振る舞うからな」

「そんな文句言うなつて、ゴーストだつて経験がないからそう思うだけだ。試しにまずはみんなで何かしてみようぜ？」

パクツと一口。ゆつくりとそれを食べながらみんなと話す。

「みんなの好きな物つて何なんだ？　好きな食べ物とか、好きな場所とか、好きな動物とか」

「何なんだ……？」

何も知らない。

何が好きで何が嫌いかなんて、聞いてなかった。

普段どんなことをしてるとか、将来の夢とか。

何も知らない。

「……………何やってんだろ」

中途半端に料理を残し、三人の首をもう一度抱きしめる。

そんな時だった。玄関の扉が激しくドンドンと叩かれたのは。その奥から声が聞こえてくる。

「おい竹内！ 無事かッ!? そこにいるんだろ!? 竹内ッ！」

鳴り止まない扉。この声は……………

「竹内くん！ お願ひ！ この扉を開けて！」

続けて女の子の声を聞こえてくる。

「ち、ちよっ!? にいに止めなよ！ 扉壊れるって！」

「竹内ッ！ 竹内ッツ!!」

もう返事をする元氣すら出てこない。扉を叩いているのが誰なのかも興味が無い。そこにいるのが誰なのかも興味が無い。

もう勝手にしてくれ。

「クソっ……………」

そうして扉から音が鳴り止んだ。それから声は聞こえなくなったが、さつきと同じ声が、今度は俺の真横にある窓から聞こえてくる。

「いるっ！ やっぱり中にはいたんだ！ おい竹内！ 返事しろ！」

「ねえ……………竹内先輩が持つてるのって——」

「……………ッ！」

「九條、天、離れてろ！」

「新海くん!? どうするつもりなの!？」

「決まってるんだろ！ この窓をぶち割る！」

その声が聞こえてきた後、数秒経過した後に激しい騒音が部屋中に鳴り響いた。

何かの破片がかなり乱雑に散漫し、それを合図に次々に窓から俺の部屋に人が上がり込む。

その人達は俺の姿を見ながらも、その場に立ち尽くしていた。

「竹内……………お前……………」

俺はゆっくりと頭を上げてボロボロと涙を流しながら、先陣切って入ってきた新海を見る。

「やあ、いらっしやい。新海 翔。そして……………新海 天、九條 都」

「ソフィから大体の事は聞いた、それは……………魔眼使いからやられたんだな」

優しい声で話しかけてくれていている新海。ああ、客だ、飲み物くらい出さないと。

三つの頭を横に置いて、俺はゆっくりと立ち上がって冷蔵庫へと向かう。

「飲み物……………柑橘系しかないんだ、我慢してくれよな」

「竹内先輩……………」

そして三人にも飲み物の希望を聞いてなかったことを思い出して、歩いた場所を戻り、三つの頭の前に座る。

「ああ、そういえば先に来てた三人も飲み物はそれでいいか？」

「当たり前だが……………返事は返ってこない。」

いや、ただ一つの別の返事が返ってきた。

「竹内くん……………ダメだよ、そんな事しても返事はこないよ……………」

その声を聞いて、俺はその場に崩れてしまう。

分かってるよ。分かってるんだよ。でも、こうしてたらいつか喋ってくれるかもしれないじゃん。

いつかは動いてくれるかもしれないじゃん。

何事も無かったかのように。

「うう……………！　　なんで……………みんな死んだんだよ……………ツ！　　ふざけ

んなよ……ッ！」

「みんな……みんな殺されちゃった……。為す術なく殺された……。俺が……！」
のせいだ。俺がすっかりしなかつたから。俺が信用しなかつたから。俺が……」
涙が止まらない。後悔も、怒りも、悲しみも、絶望も、終わらない。

「ダメだよッ！ 竹内くん！ それをやめて！」

必死になつて、九條さんが俺の動きを止めるように力一杯に抱きしめてきた。

これじゃあ両腕が使えない。

下を見ると、俺の指先からボトボトと大量に血が落ちている。

そして俺が涙だと思っていたのは……

自分の顔を力の限り掻きむしった痕から出てきた真っ赤な血液だった。

異変の可能性

指先からぽたぽたと液体が落ちる。さつきまでほぼ無音だった部屋の中で、誰かが啜り泣く声が聞こえてくる。

そんな彼女たちを無視しながら、不意にある一つのモノに目が移る。

希亜と香坂さんの間に置いていた一つの首。《何故か》一番に守ろうとした首。ゴースト。

……おかしくないか？ 何故ゴーストの首があるんだ？

「九條さん……大丈夫だから、俺から離れて」

「で、でも……ッ！」

「何か……分かるかもしれない」

アイツはあくまで幻体だ。死んだとしても関係なしにいくらでも出現させることができるんじゃないか？

そもそも、幻体を固定化なんて出来るんだろうか？ いや出来ているからこそこうして目の前に石になったゴーストがいるんだろうか……

じゃあ、そしたらこのゴーストは《白》のゴースト？ 意識を乗っ取った後にわざわざ殺したのか？

いや、それなら石にする必要は無いはずだ。オリジナル色に完全に染めることが出来たのであれば切り捨てることはしないだろう。だからあくまでこれは《黒》のゴーストだ。

いや……なんで俺は《白》と《黒》が分かれていると思ってるんだ？ あくまでアイツらは一つの身体を奪い合うような事になって——

「霊葉を使って契約を破棄できたとしても、人格が別れるとは思えない。その進行は止まることは無いでしょうね」

何故……ソフィはあの時に人格が別れるなんて言ったんだ？
俺はそんなことは思ってもいなかったし、口に出してもいない。それに――

「私からも一つ質問。あなた、今何回目かしら」

何回目……？ 何回目？

もしかして………アイツ、知っていたのか？ これから有り得るであろう未来
の可能性を。

もしかしたら………俺は踊らされてる？

十分にある、この可能性………

だってよ……よく考えれば、誰が希亜と香坂さんを石にしたんだ？

あの場で、誰が。

「誰かいたんだ……あの場に、犯人が……」

そうだ、ゴーストに気を取られていてそれどころではなかったが、あの石像を発見した時にはまだ希亜は生きていた。

今は……、殺されてしまったけど、俺が目を離れたあの隙にやられた。つまり、あの場には間違いなく幻体か本体のどちらかがいた……

そしてさっきの疑問、閃き。

だったら――

「一応……貰っておくよ、希亜」

ポケットからあのシルバーリングを取り出し、それを思い切って自分の口の中に放り込む。

少し硬かった変な塊は、俺の喉を通ると共に解けるように形を変えて、おそらく胃の中に送り込まれる。

「竹内……？　今、お前何をしたんだ？」

「知ってるだろ？　新海。死者のアーティファクトを取り込んだんだ。これは……」

「希亜の力」

ちよつと鉄の味がしたけどな。

「もう一度俺は白陀九十九神社へと向かう。もしかしたら………石化のユーザー………魔眼の所持者を見つけられるかもしれないから」

「だったら俺たちも行く、いや……俺たちが行く！ 魔眼のユーザーは俺たちが必ず捕まえるから——」

「生ぬりいよ」

「この期に及んで《捕まえる》ね。そんなんじやダメだ。それじゃあ報われない。

「え……？」

「捕まえなんかしなくていい。俺が………殺すから」

「何言ってるんだ……？ お前……」

「俺が犯人を殺す」

その発言で、一瞬で俺たちの空気感が変わる。

ただひたすらに沈黙。新海たちは絶句と表す方が正しいだろう。俺の発言を信じられなさそうに目を見開いて驚いていた。

「俺が魔眼のユーザーを殺せば、アーティファクトは手に入る。お前たちはそれが目的だろ？ 安心しろよ、上手く行けばちゃんとお前たちに渡す」

そうだろ？ それが俺の覚悟だ。初めてここまで人を殺さなければと思った。黒幕

だけは殺さなければいけないと強く思った。

俺は今、俺の大切な人たちが最も嫌う罪を犯そうとしている。でも構うもんか、悲しみの連鎖はここで断ち切ってみせる。

「じゃあな、みんな。ごめん」

するりと九條 都と新海 天の間を抜けて、そのまま家を後にする。もう二度と帰ってこないであろう事を思いながら。

走る、走る、走る。

ひたすらに走る。

多分だけど……ゴーストは生きている。いや……正確には《白》ゴーストは生きている。

ソフィの発言、あのタイミングであの言葉が出てくるのはおかしい。間違いなく知ってたんだ。未来を。

もしくは……別世界を。

イーリスも、ゴーストも、アンブロシアも、全てあいつは知っていた。そして俺を試していた。今の俺がそれらの事を知っているのかどうかを。

だからこそ俺も今気がついた。あいつの言っていることは全て正しいんだ。全て実際に起こった事なんだ。

ただし、それは別世界、いわば平行世界で。

だからこそ、俺は既に奇跡を起こしていた。ゴーストを救っていたんだ。

俺の考えが正しいのなら……

そうして俺は神社へと戻ってきた。

相変わらず崩れた石の塊が落ちている。しかし、その上には見覚えのあるどこか懐かしい後ろ姿が。

「やっぱりいたのか……ゴースト」

その女は振り返る。

赤い目を光らせながら、月に照らされ微笑みながら。

白いパーカーを揺らし、俺を見る。

「おかえり、蓮太君？ 随分と派手なメイクじゃねえか」
「ああ………ただいま。偽物、お前を殺す為に帰ってきたぞ」

戦闘

「オレを殺すねえ……。嬉しいぜえおい。やっとマジになって殺りあえるのかよ」

言わずもがな、やっぱり《白》は殺る気マンマンだ。ただコイツは純粹に殺し合いを楽しみたいのだろう。

考えてみれば、このゴーストもオリジナルに利用される為に生まれてきたのだと思うと……いたたまれない気持ちにはなる。けれど……

「ただ一つ……聞かせてくれ。お前が、希亜と香坂さんと……ゴーストを……殺したんだよな」

「オレ以外の二人はわかんねえよ。連れのお友達の事なら……そうだな、オレが殺した」
「なんで……殺した」

「なんでつつつたつてなあ……創造主サマはテメエの事を殺したがってたし、あと……アレだな、テメエの力を欲しがってた奴もいたか」

きつとイーリス本人か……その手駒の事だな。それにオリジナルは本当にアイツの言う通りに俺の事を殺したがつているようだ。

「だったら、俺を殺せばいいだろ。俺だけを殺せばいいだろ……！　なんで三人を殺したッ!？」

「ばーか、普通に殺しちや面白くねえだろ。マジのお前と殺り合える為なら、オレはいくらでも殺すぜ？　なんならもつと殺してやろうか？　あの……ほら、まだお友達が三人いただろ？　アイツらとか」

「それは………お前の意思なのか？」

「ああ。オレはお前が大好きだからな。お兄さん？」

そうか。

誰かの差し金じゃなくて、あくまでコイツ自身の意味で殺したのか。

わざわざこの瞬間の為に。

この………一瞬の為に……ッ！

「死ぬ覚悟は出来てんだろうな………」

「安心しろよ、もうテメエには負けねえ。死ぬのはテメエだ」

パチンつと《白》が指を派手に鳴らすと、その背後から無数の赤い槍が出現する。この間とは比べ物にならない数だ。二十なんて数じゃない。おびただしい数の槍が全て俺の方へと向かってきている。

「まずはこれだな。そらよっ」

《白》の合図で、俺に向けられた槍が一斉に飛んでくる。かつてのように次々にではなく、その全てがほぼ同時に。

「ぬりい……」

力を使って鏡を出現させる。一枚の板のような鏡の形を曲げ、自分の前面へと出す。そうするだけでおぞましい数の槍は全てが乱反射した。

「俺は楽しみに来たんじゃないやねえ。お前の先を殺しに来たんだ」

覚悟を決めて、自分の中で三つのステップを踏んでいく。

第一ステップ……俺は審判者。

「ジ・オーダー……」

挑むは早期決着。

「テメエ……あの能力を奪ったのかよ……！ 本当にイカれてやがるなッ」

これは、今までの俺を否定する行為だ。俺だけじゃない。俺の為に力を貸してくれたみんなを否定する行為だ。

でも……後悔はしない。今から俺は……人を殺す。

第二ステップ……狙うアイツは罪人。

「アクティブ……」

その瞬間に、左眼に不思議な力が宿っていく。熱にも感じるその力は、俺自身の眼を

焼き付くさんとする勢いで、ありつただけの力が圧縮されていく。

この力は……………下手に扱おうと俺自身が死んでしまうな。それはダメだ。

オリジナルを確実に殺すまでは俺は死ぬ訳にはいかない。

「クソ……………殺られる前に殺つてやる……………」

そう言つて《白》は目元に紋章を浮かばせながら、再びあの槍を出現させる。

コイツ……………とうとう能力の同時使用が出来るまで練度を上げたのか。

まずい……………な。俺はそんな器用なこととは出来ない……………

でも、この攻撃は止めない。

攻撃される事を覚悟の上で、ありつただけの想いを込めて、引き続き左眼に力を溜める。

そして次々に俺の身体を赤い槍が貫く。

実際に外傷は現れてはいないが、ちゃんとした痛みはハッキリと伝わってくる。

騒ぐ余裕が出てこないほどの激痛が俺を襲う。けれど……………絶対に止めない。

「よし……………オレを見たな…………… テメエ、多分今は《反射》の方は使えねえんだろ？ だ

からわざわざ攻撃を全て受けたんだ」

「ああ……………俺はそんなに器用じゃないからな。でも、確実に標的を殺す為に……………ありつ

ただけの力を込めてる」

正直、この借り物の能力の力が強力すぎて、俺の左目は光を失っていて何も見えない。

今となつては熱すらも感じることの出来ないほどになつてゐる。それだけ強力な力を込めているんだ。ほぼ暴走に近い形になつてゐるのだろう。

「オレもだ、力をフルに使つてお前を石化させてる。ほら、もう足元の色が変わつてきたぜ？」

「んな事言われなくても……」

とつくにわかつてた。

さつきから歩こうとしてもくるぶし辺りがもう動かない。そもそもとして身体全身が痙攣してまともに動かせない。

段々と足の感覚も無くなつてきている。

「チツ………！ これだけ威力を上げてはまだ完全に石化しねえのかよ………！ どうなつてんだ!? テメエ………ツ！」

「まだだ………！ ありつたけの力を込めろ………！ 確実に、堅実に、最大威力で殺せるように………ツ!!」

パキパキと俺の身体が音を立てながら、痙攣が止まつていく。それは決して耐性がついたりとか、効かなくなつたとかそんな物ではなく、単純に俺の身体が徐々に石になつてきているからだ。

足はももの辺りまで固まつてしまい、腕はもう完全に灰色に染つてゐる。

偽物が力の限りに能力を発動させたからだろうか？ 先程までとは違いすぎる速度で俺を身体を蝕んでいく。

流石にギリギリまで粘って扱えませんでした。じゃ話にならねえ……ここで決める！

第三ステップ……判決は……死刑ッ！

「身勝手に民を殺し、欲がままに心に溺れし者よ……裁きの雷に焼き消えろッ！」

狙うは……偽物と繋がっている命。誰かは知らないが、目の前のアイツと魂が繋がっている相手。見えない影でほくそ笑んでいる黒幕。

「クソっ間に合えよッ！」

「パニツシユメントッ！」

そして力の限りに能力を解放する。

俺の左眼から放たれた赤黒い雷は、遊ぶことなくあちこちへと飛び回り、偽物を目掛けて降り注ぐ。

荒れ狂う轟音。

空を斬る音。

聞こえる偽物の悲鳴。

弾け飛ぶ身体。

最後の力を振り絞った俺は、アイツの悲鳴の音が聞こえてきたのとほぼ同時に、意識が遠のき始め……………

眠りに誘われるように意識を失った。

俺はきっと正しくはないだろう。俺のやってきたことは間違ってるだろう。結局は自分の為に能力を扱ったんだ。だから、みんなの元へと行けなくてもいい。

俺の罪は……………

罪は——

*（視点切り替え）

舞い上がる土埃。

突如として吹き荒れる突風。

そして……………弾け飛んだオレの腕。

「ああー……………痛つてえ……………」

右肩からその先全てが無くなっちまった。ついでに脇腹辺りも。

「あの野郎……………オレを狙つてなかつたな……………！」

オレと殺し合う中で、アイツが最後まで殺すつもりでいたのは創造主サマの方だ。オリジナルだけを狙っていた。

本当はオレに危害を与えるつもりはなかつたのかもしれないが……………またまだ扱いきれなかつたんだな。

まあなんにせよ……………

「オレの勝ちだな」

オレは消えていない。つまりはオリジナルは生きているって事だ。オレが幻体である以上は本体が死ぬと同時に俺も消える。

「ただ、オレは消えていない。つまりは……そういう事だ。そして……」

「……………」

オレの目の前には苦しそうにオレを見ている石像が。

「結局は他人の力に頼っちゃまったのがアンタの敗因だ。あの嬢ちゃんの力を使わなければあオレとアンタは決着がつくことは無かった」

「意地でも嬢ちゃんの力で殺したかったのだろうが……不慣れな力に頼っちゃこんな結果にもなる。」

まあ、マジで死ぬかと思っただけだな。

特に理由はないけど、なんとなく石になったコイツの頬に残った手を当ててみる。

「もうお前みてえに純粹に楽しめる奴はいねえだろうな」

「ここ数日間、楽しかったぜ。」

考えることは全てお前の事だった。どうやって殺そうか、どう動こうか、どんな隙を

突こうか、お前ならどうするか、お前は何をしてるか、どんな能力の使い方をするか。「好きってのはあながち間違つてなかったのかもな。オレにはわかんねえけどよ」

オレのこの感情は間違っているだろうしな。

「きつと、《黒》の方もオレに近い感情だったろうぜ。もう確認のしようはねえけどさ」
チラツと今の時間を確認してみると、22時28分。

《黒》が死んでからは三時間くらい経ってるのか。確か……こいつらがここに来たのは……その一時間後くらいだったか？

「あーあ、惜しかったな」

ゆつくりと触っていた手を離し、後ろを振り返つて月が登る方向へと歩いていく。

「アンタは壊さねえで、せめてもの慈悲だ。じゃあな」

本当はあのアクセを奪うべきなんだろうが……生憎オレは興味がねえ。だからこそ放置する。

そして神社の屋根上へと飛んで登り、お気に入りの場所に座つてアイツらを待つ。

ある一つの飲み物を飲みながら。

「……んっ……んっ。《黒》にも感謝だな、オレもまさか物を飲み食い出来るようになるたア思わなかった。人間つてすげえよな、こんな変なもん作つて飲んだりするんだから」

あのバカから貰った金で、なんとなく買ったもんだけど……全然美味くねえなこれ。なんでオレこんな物買ったんだ？

それに……さつきからこう……なんだこれ……。ムカムカじゃなくて、ザワザワでもなくて……こう、モヤモヤする。

クソ……んだよこれ。

初めての感情だ。ぜんっぜんわかんねえけど……すっげえ辛い。

「……」

何故かオレは涙を流している。

ぼたぼたと何かが落ちてると思ってたら……オレ、泣いてたのか。

「アイツがオレのオリジナルなら……まだ楽しかったのかな」

創造主サマから感じる感情は無の感情ばかりだ。アイツは何がしてえのかがわかんねえし。

「ま、そんなこと考えても仕方ねえか」

なんて思いながらも飲み物を飲む。すると奥の方から男が一人と女が二人歩いてくるのが見えた。

女の一人は知っている、あれは《九條 都》だ。アイツと前に歩いてたからな。

さて……石像を増やしますかね。

石になったアイツを見つけて驚いている三人を殺す為に、オレは飲み物を置いて立ち上がった。

「まだちよいと金はある、これが終わったらまた買いに行くか……………モツクのバナラシエイク」

BAD√

そして誰も救われない。

END

暗い世界を月明かりが照らす。

オレが見つめる先には石になった人間が四体置かれていた。

そしてそれを見ながら、オレは買ってきたバナシエイクを飲み続ける。

「……甘え」

やっぱりコレは苦手だ。ただ甘いだけの飲み物じゃねえか。

「こっちはまだマシだけどな」

すつかりと元に戻った右手に持っているコレ。名前は……確かテリヤキバーガー。

さつき一口だけ食べてみたんだけど、こっちはまだ食いもんとしては美味かった。

「つか全然この二つ合わねえじゃん。アイツ馬鹿なんじゃねえの？」

まず間違いなくこの飲み物が歯車をぶち壊してるんだよ、アイツの味覚はわかんねえ

なあ……

オレもなんでこんなにファーストフードをもりもり食ってんだか。

ま、食っても太んねえけど。

「あむ……………」

飯を食うってこんな感じだったんだなあ。でも、なんか足りないんだよ。

別に食ってるものに文句がある訳じゃない。飲むものにはあるけど。

オレが知ってる《食事》ってのは……もつとこう……なんだろう、賑やかだったと思うんだ。もちろんそれは騒がしいって意味じゃなくて……

心……？　って言うのか？　身体の芯から明るくなるような……そんな感じだ。

「楽しくねえ」

アイツはなんか楽しそうに食ってたよな。すつげえ幸せそうにコレを飲んでたっけ？

ダメだダメだ、やっぱオレには合わねえや。やっぱりオレの退屈を掻き消せるのは殺し合いだけだな。

そうと決まれば対策だ！　アイツの鏡の能力を……………て……………。

「もういねえのか」

アイツはもう死んだんだ。今更考えることでもねえし、もう楽しむことも出来ない。

「チツ……………」

イライラする。オレは何にイラついてるんだよ……………。くっそ……………。

つか何回アイツの事を思い出すんだオレは……………馬鹿かよ。死んだ人間なんてもうど

うでもいいだろ。今までもそうやって切り捨ててきただろ。

「俺になにかできることは無いのか？ お前を助けたい」

「……………ッ!？」

なんでアイツの言葉が急に……、クソ……《黒》と記憶が混合したか？
助けたいつて……

だアアクソっ！ 忘れろッ！

「可愛いじゃん」

「……ッ!？」

クソっ！ やめろっ！ オレの記憶から出ていけッ！

お前はもう死んだんだ！ 死んでまでオレを攻撃してくんじやねえよ！

クソっ！ クソっ！ クソっ！ ふざけんな！ ざけんなっ!!

近くの壁に向かって何度も何度も頭を叩きつける。痛みを感じることでその苦しみから逃げるように、ひたすらに思いつきり叩く。

少しでも早く抜け出したくて、少しでも早く忘れたくて。

けど何度叩いても消えない。何度叩いても忘れない。むしろ叩けば叩くほどあいつの事を思い出す。

「それは……お前の意思なのか？」

電流でも流れてきたかのように、脳が震える。

あの時の言葉が唐突に脳裏をよぎる。

「違う……！　違う違うッ！」

心が苦しい。心臓を手で包まれているかのように。

オレはオレだアイツはアイツだ！　《黒》は《黒》なんだ！　《白》は《白》なんだッ

！

ある時唐突に作られたオレという二つ目の人格。創造主サマの都合のいいように、便利良く使われる為に作り出されたオレ。

それでも、しっかりとオレという存在はそこにあつた。

それが二分割にされたとしても、どちらのオレにも《自分》があつた。だからこそオレは《オレの意思》であの石像を壊さなかつたんだ。

ただ、《黒》は自分を強く持っていた。だからこそ創造主サマのコントロール領域から逃げ出せたんだ。

それに引き換えオレは……………

度々身体の芯から湧いてくる殺意に飲まれ、自分を失った。だからこそ、殺したくない人まで殺した。

無理やり作られた存在だとしても、《白》も《黒》もなかったんだ。どっちもオレなんだ。

だからこんなにも苦しいんだ。辛いんだ。

これからも……………こんな気持ちのままかよ……………！
殺意に飲まれて、人を殺し続けるのかよ……………ッ！

「助けてくれよ……………蓮太……………ッ！」

4月21日 (続)

運命の分岐、その道の先

「……………ツ!?!」

突如として襲ってきた頭痛。その痛みに怯むように、俺は頭を抑えて下を向く。

「なんだよ……………クソ……………」

偏頭痛か? いや、そんな感じじゃなかったし……

まあいい。痛みを感じたのは一瞬で、別に大した問題じゃないしな。

多分アレだろ、難しいことを考えすぎ——とかそんな事だろう。

「あれ……………? 俺って何をしようとしてたんだっけ……………?」

今の俺のいる場所はニンボールの外。入口の横にある窓際。そして俺の手に握られているスマホには、RINGの通話機能の準備をしている途中だった。

その相手は希亜。

ああそうか。俺は確か……………香坂さんと神社に行く予定で、それを伝えようと……………

「……………止めとくか」

必要ないだろう。もし本当にゴーストについて知ることが出来たら、そこで初めて伝えればいい。少しでも効率を良くするために申し訳ないけどまだ希亜には探つてもらった方がいいだろう。

それに……………なんか、伝えちやまずい気がする。

起動していたアプリを落とし、特に何もせずに店内へと戻る。

「……………？ どうなされました？ 何かお忘れ物でも？」

「いや……………なんか、なんだろ？ やっぱり止めとこうかなって思つて」

「よろしいのですか？ ご友人の方に何もお伝えにならなくて」

「ああ。後で連絡する事にした。それに……………なんかダメな気がするんだ。アイツを巻き込んだりいやいけないような……………」

例えようのない悶々とした感情。なんなのかは分からないけど……………これが直感つてやつなんだろうな。

「安心して下さい、私は口出し致しません。蓮様の意志を尊重致しますわ」

「助かる」

よし、そうと決まれば……………とりあえず少しだけでもこの人から情報を聞いておこう。今のところは俺に協力的だし……………質問すればある程度のことは教えてくれるかもしれない。

でも気持ち的には21時とは言わずに直ぐに行きたい。だから必要最低限のことを聞いたら直ぐに出発しよう……つて。

……いや、待てよ。

「話は変わるけどさ、香坂さん。その……これから会う『司令官』つてどんな人なんだ？」
「そうですね……、少々説明が難しいのですが……」

うーん。と説明のために頭を悩ませる香坂さん。

え？ 何？ そんな簡単に説明が出来そうにもないような人なの？ どれだけ個性的なの？

「実際にお会いした方がわかりやすいかと」

ま……丸投げしやがった……

「そ、そつすか……」

……

……

……

結局、予定では21時に集合ということとは変わらずに、その少し前、20時半頃に近くの公園で香坂さんと集合することにした。

それまでにまだ時間はそこそこあるので一旦ここでお別れだ。

今は自宅にいて、家に帰っている途中も色々と考えていたが、やっぱりなるようになれ精神でやるしか無さそうさ。

事前に色々調べるにしても、今更何かを知ったところでできる対策なんてたかが知れている。

ソフィもなんかノリで行けよ的なこと言ってたし……とりあえずは約束の時間に向かうしか………

と、そんな時に不意にあの黒い伊達メガネが視界に映る。

アイツに選んでもらった物。

アイツの好きな色。

アイツの………

時刻を確認してみると、今は19時2分。今から全力で向かえば20分足らずで神社には辿り着くだろう。

予定よりも一時間以上早くに待つことになる。

行こう。

香坂さんとの待ち合わせの時間になっても姿を現なけりや、一旦公園へと向かえばいい。それまでに会うことが出来れば……ゴーストの事を聞けるかもしれない。

考えられる対策はほぼないんだ。持ちカードがない以上は全力で動こう。がむしやらに足掻こう。走ろう。

もしかしたらそれが、何かを変える一步になるかもしれないねえ。

俺の直感がそう言ってる。

「よし………ひとつ走りするか」

そうこれからの行動を決めると、黒いメガネを掛けて俺は家を飛び出した。

ひたすらに走ってはいるが俺はなんでこんなに急いでいるんだろう。

なんでこんなに焦っているんだろう。

あの頭痛からだ。何故か不思議と直感を感じることが多い。

でもいくら考えてもそんなものの答えは出てこないだろう。概念的な物をいくら考えたって、頭が悪い俺にとっては無駄な時間だ。

「はあ……はあっ………！」

走ること約20分。とうとう神社にたどり着いた。19時過ぎという微妙な時間だからだろうか？ 全然この辺りに人の気配がしない。

だから一目見てそこにいる人たちが直ぐに確認できた。

「あれは………ゴーストツ?」

俺の走る先にいる黒いゴーストは、両膝を地面に着けて立ち上がらずに目の前のもう一人の白いゴーストの方を見ている。

しかも……白の方の背後から赤い槍が出現していた。

「わけわかんねえけど、とりあえず………ツ！」

ぴよんとジャンプした後、両手を伸ばして扉を登り、そこから勢いをつけて少し離れた大きな木の枝に飛び移る。そしてそのままの勢いで自分の身体を飛ばして、空中で能力を発動して《鏡》を足場にしてその鏡を蹴る。

俺の蹴りが跳ね返り、より遠くへと俺の身体を跳躍させて、勢いをつけて二人の側へと駆け寄る。

今にも白いゴーストが赤い槍を投げ飛ばしそうだ。

間に合え——ツ！

「反射鏡ッ！」
リフレクション

黒板でも爪で引つ搔いたような高音が鳴り響き、飛んできたであろう赤い槍を弾き飛ばす

何故そんな挙動になったのかは………想像通り。俺が《反射》したからだ。
「……ッ!？」

土埃が風に飛ばされると、俺を見て目を見開いて驚いている《白》ゴースト。そして俺の後ろには同じように声を失っている《黒》ゴーストがいた。

なんで……ゴーストが二人になってるんだ？　つかそもそもなんでゴーストがいるんだ？

「マジかよ……良かったじゃねえかオレ。本当に来てくれたぜ？」

「あ？ なんの事だよ」

二人の間に割り込むように入り込み、《白》の方を睨みつける。

「まさか本当に来るたあなあ……ビックリしたぜ」

「そりゃ俺のセリフだったの。まずなんでお前がここにいるんだよ、つかなんで二人に増えてるんだよ、なんでコイツを攻撃してんだよ」

「質問は一つずつにしろよ……」

「順番に答えろ」

《白》の目を真つ直ぐに見る。大体は予測はついてるっちゃあついてるが……直接本人の口から聞き出さないことにはな。

「……………はあ。わーったわーった、説明してやるから落ち着けよ」

しばらく俺と視線をぶつけていると、《白》は諦めたように浮かばせていた紋章を消し、ポケットに手を入れる。

「どうやら戦闘の意思は無いようだ。」

「あつさり引くんだな」

「ぶつちやけ、テメエとオレは相性が最悪だからな。一方的に有利を取られる都合上、下手に手を出すとこつちが負けちまう」

まあ……確かに能力相性は俺の方が勝っていると言えるだろう。俺が知る中でアイ

ツは相手を麻痺らせる能力と赤い槍を放つ能力があるんだ。それら二つはどちらも俺の能力で反射できる。

となると純粹な能力勝負じゃケリはつかない。

「まあ気を抜けよ、無駄な争いはしねえ派なんだ。……………ガム食うか？」

「……………貰う」

雑に投げられた小さな包物を受け取り、それを口に入れる。齒でそれを噛むと口の中にラムネの味が広がっていった。

「まず……………オレたちがここにいる理由だったな。そんなもん理由は特にねえけど……………強いて言うならオレがここに来たんだよ」

「はあ？ んだよそれ」

「だから、オレがここに来たんだ」

そう言つて《白》は《黒》の方に指を指す。

「それが気になつてた。なんでこうして二つの人格が分裂しているんだ？」

「知らねえよ、オレが聞きたいくらいだぜ。オレ……………つてこの呼び方は面倒だな。《黒》の方がいきなりオレの魂から飛び出したんだ」

魂から飛び出したって……………どういう事だ？ 一つの魂が二つになんてありえるのか

？

チラッと《黒》の方に視線を向ける。

「オレもわからねえんだ……。昨日からずっと、身体の芯がモヤモヤとしてた感覚はあったんだがよ……。まさか消失じゃなくて分離するなんて……」

「分離……」

「だからオレが二人もいたらややこしいだろ？ 最後の質問の答えはそういう事だよ」

この会話から察するに……。この二人は心が繋がっている訳じゃなさそう。感じている感情そのものが違いすぎる。

「ん……。まてよ……。それじゃあ、この《黒》の方は誰がオリジナルなんだ!？」

幻体である以上は誰かの能力でこうして現れてるってことだ。つまり契約者がいるってこと。

普通に考えれば同じ奴だと思いが……

「多分いねえよ、その《黒》の方は。力の感じ方が曖昧だから」

「そうなのか？ ゴースト」

《黒》の方に声をかけるが……

「多分……。な。創造主がいるような感覚はしねえ……。多分オレは今……。誰の力でもない気がする。それに——」

《黒》のゴーストは目を瞑る。すると、その胸の内からほんの少しの輝きが放たれ

.....
試験官のような物が《黒》のゴーストの手に握られた。

「契約物がアイツとは別にあるんだ……」

「……………」

その中身は液体が入っている。固形ではないアーティファクトは契約者がいない証だ。

つまり……………自分自身で能力を扱っているってことか？　なんで最初からあの容器に入っているのかは謎だけだ。

それってこの《黒》のゴーストはどうなるんだ？　主人がいない幻体なんて、絶対にありえないだろう？　でも現にこうしてその特殊な幻体がいるんだが……………

「じゃ、話終わりっ。オレは帰らせてもらうぜ」

パンつと手を叩いた《白》ゴーストは、これが区切りと言わんばかりに無理やり話を終わらせる。

「あつ、ちよつ、待て！　まだ聞きたいことは沢山——」

「ソイツに聞きゃあいいだろ、いちいちオレに聞くな」

いやどつちも同じゴーストだろうけどさ。

「じゃあな、またどつかで会った時はよろしくな。そんな時は全力で殺り合おうぜ」

「だから――」

俺が《白》を止めようと声をかけている途中で、《白》は軽くジャンプをした瞬間にその場から消えた。

……アイツ、更に他の能力も扱えるのかよ。

マジでオリジナルが人を殺してるのか……？

いや、今はそれよりも……

「待たせたな、ゴースト。大丈夫か？」

未だに膝を地につけている《黒》に手を差し伸べる。

「……………あんがと」

慣れないのか《黒》のゴーストは、目を逸らしながら無愛想に俺の手を掴んだ。

二つ目の力

「さて……と」

時刻は19時46分。予定の時間よりもまだまだ早すぎる。

気になる事は結構あるが……まずは――

「とりあえずは間に合ってよかったな、ゴースト」

アイツが能力で出していた赤い槍は肉体を傷つけるものじゃない。つまり魂とかの概念的な物を攻撃できる手段だ。俺には効果は大分薄いが……コイツの場合はそれが命取りになるのかもしれない。その実験も兼ねてわざわざ攻撃してたのかもしれないが。

「あ、ああ……」

なんだかゴーストの様子がおかしい。もしかして、この異常事態でもある事が起きてしまったことで何か問題が出たんだらうか？

「どうした？　なんか元気なさそうだけど」

「ああ……いや、なんでもねえよ」

「……？ まあなんかあつたらすぐ言えよ？ 出来ることはそんなにねえけど……もしかしたら力になれるかもしれないからねえし」

ソフィ曰くなんかあるみたいだからな、俺は。

実際、本当にここに来ただけでとりあえず何とかなつてたし……なんなんだろうなコレ。

……そう言えばソフィのやつ、あの時既に人格が別れる……的なことを言つてたよな？

「じゃあ………んっ」

「うん？」

それなら——と言わんばかりに、ゴーストは手に握られた容器を俺に向ける。

「いや「うん？」じゃねえよ」

「あん？」

「そういう問題でもねえっつーの」

グイツとゴーストは一步俺に歩み寄つてきて、突き出すようにして手を伸ばす。

「受け取れよ、コレ」

「受け取れつたつて……俺と契約するつてのか？」

「アンタなら他の奴よりマシだからな。ほら」

一応それを手に取り、渡されたものをマジマジと見る。
不思議な色だ。

「俺でいいのか？ せっかく自由になれたのに」

理由は不明ではあるが、『誰かの力』じゃなくなつたんだ。しかもしつかりと意思もある。それをコイツは手放そうつてか？

「わかんねえことが多いんだ、もしかしたらこのまま《それ》と一緒に消えちまうかもしれねえし……そんならアンタに契約しておいて欲しいんだよ」

……その可能性もないとは断言できないが……まあ確かにそうか。ただでさえ前例のない事が連続で起こっているんだ、このままでと消滅するかもしれないって気持ちで過ごすよりは、誰かに契約してもらつた方が気持ち的にも楽だろう。

「じゃあない。」

「後悔すんなよ？」

「ああ」

その返事を聞いた後に、手渡された容器の蓋を開け、口の中に飲み込む。特に味はしない。それに不思議な力が湧いてくるようなお約束もない。

「なんだろう……？」
ただの水を飲んだ感じだ。でも不思議と能力の扱い方は頭に入り込んでくる。

ふとゴーストがいた方向を見ると、アイツは姿を消していた。どこに行ったのかは………探さなくてもわかる。

ええーつと……？ 身体の内側から魂を出させるイメージで………

「おう」

「おうわっ?!?」

いつの間にか出てきていたゴーストが、視界外からひよこつと顔を覗かせてきた。

「び、ビックリした……んだよ、出てきたんなら出てきたつて言えよ!」

「テメエが自分で出したんだろうがよ……」

「にしても………すげえな、こんな感じなのか」

結構簡単に出せるんだな、へえくこりやちよつとしたお使いにはちようどいいかも?

「オレをパシリに使おうたあ……いい趣味してんじゃねえかよ大将」

………思考が読まれてる。

「これつてさ、あくまで俺の想像でゴーストの見た目が決まるんだよな?」

「無視かよ。………まあそうなるな、今はアンタがこのオレをイメージした結果だ。想像力と能力を扱う才能次第じゃ、もつと変化があると思うぜ?」

なるほどね………確かに俺は今、《黒》のゴーストをイメージした。本人の意思的な物は

変えられないだろうし変えようとも思わないけど……髪色程度なら変えられるのか？

……………ツ！ それならさ！ 俺が想像から服をとつばらえば、ゴーストは裸に――

「したらぶつ殺す」

「はい、ごめんなさい」

黒と蓮、想いの欠片

にしても幻体……かあ。

まさか俺を選ぶなんてなあ……コイツわっかんねえな。いや、ゴーストが置かれてい
る状況を考えると怖いのはわかるけどよ……

まあ、本人はこれで納得してるみたいだし、別にいいの……か？

「……………」

チラツと俺の隣で手すりに寄りかかっているゴーストを見る。どうやら俺の考え全
てが伝わっているわけでは無さそうだ。しかも、その逆……つまりゴーストの思考や気
持ちはこつちには分からない。

これもうどつちが本体かわかんねえな。

「ん？　どした？」

そんな俺に気がついたのか、気さくに声をかけてくるゴースト。

「いや、別に。これからどうすっかなあ〜って考えてた」

「ああ、そっぴやアンタ香坂さんと会うんだったな」

………人格がオリジナルに似るってのは本当みたいだな、俺の知ってるゴーストならぜってえ「さん」なんて言わねえと思うから。

「………なんか違和感あるわ。敬称つけるなんて」

「んだよ、別にいいだろ………つかアンタがそう呼んでんじゃねえか」

「別に強制はしてないだろ？ 好きに呼べよ」

でも、本当にどうしよ。俺はもう目的は半分達成したみたいなものだし、それに《司令官》とやらもまだここにはいない。だから俺は………

「なあゴースト。お前さ、《司令官》や《魔眼》のユーザーについて知ってることがあるんじゃねえか？」

元々《司令官》の方は、ゴーストと接点があるって言われたから接触する流れになったんだ。しかも、あの時にゴーストは石化の犯人は自分にヒントがあるって言ってた。だったら間違いなく答えを知ってるだろ。

「知らね」

「嘘つけえっ！」

「いや本当に知らねえんだって、なんつーか………こう、記憶が欠けてるんだ」

「欠けてる？」

あー、なんかそれっぽい理由がでてきた。この感じだとなんかマジっぽいな。

「前の創造主を思い出そうとすると……フィルターが掛かったみたいに思い出せなくなるんだ」

思い出せ……………

「だからさつき怖がつてたのか」

「怖がつてねえよ、ふざけんな」

中途半端な存在になっちまって、オマケに記憶も中途半端にない。そんなもつて常に消滅する可能性……………か。

やっぱり、ちよつと似てる。

俺が……………コイツを守らねえと。

「まっ、安心しろよ、これからは俺の肩揉み放題、マッサージし放題、掃除し放題、買い物行き放題、料理作りたい放題だ」

「こき使う気満々じゃねえか」

「ああ、そんなもつてずつと一緒だ」

正直、このアーティファクトたちをどうしたらいいかは正解がわかんないけど、九條さんが言うには結構な数が散らばつててらしいから……………せめてそれらが全て集まるまでは、かな。

いつかは別れなきやいけないけど……………《今》はいいか、そんなこと。

「……………死ね」

「照れんなよう！」

「消えろバーカ」

「ひでえ」

そんなゴーストはクスツと笑っていた。

……………不覚にもほんの少し、ほんの少しだけその笑顔に目を奪われる。

「どうした？ 急に黙り込んで、なんかあったか？」

「いや、可愛いなって思ってたさ」

事実俺は……………いや、そんなことは無いだろう。きつと同情に近いモノだ。そ

れとも幻体という特殊な存在故にだろうか。

妙に心が落ち着くのは。

「アンタって簡単にそんな事言うよな」

「そうか？ 別にそんな事ねえと思うけど」

そもそも言う相手がいないからな、俺。そりや美人さんって思うような人はいたけど

…………可愛いとはあんまり思ったりはしなかったような……………？

「しかも自分の分身に」

「じゃあ可愛いし、かっこいいし、天才だわ」

「ははっ、バーカ」

と談笑していると、俺のスマホに通知が入る。

それは香坂さんからのRINGのメッセージだった。

『どうやら司令官さんは急用ができてしまつて来られないらしいです。こちらから誘つておいてすみませんが、今夜の待ち合わせは中止ということ……』

司令官は来られなくなったのか。もしかしたら、あの《白》のゴーストが何か言ったのかもな。何かしらの繋がりがあるみたいだったし。

可能性が高いのは、やっぱり石化能力者は《白》ゴーストの契約者。そしてそれっぽいのは新海だと思つてたが……司令官が怪しいな。

このタイミングで急用つてのが怪しい。

『わかつた、ありがとう。こつちこそ無理言つてごめん』

そう送つてスマホをしまう。

「とりあえず帰るか。もうここに用事はなくなったから」

「ふーん………ま、オレはアンタに付いてくだけだし、どこへでも勝手に行くつてくれ」

一旦色々と考えておきたい。これからのこともそうだし、あの《白》の事も。《魔眼》の事もどうにかしなきゃとは思ふし、それにはきつと仲間もいる。

けれど信頼ができる相手じゃないと厳しい。

そんなやつはいねえけど……………最悪、俺とゴーストの二人でどうにかしなきゃいけないかも…………な。

だってアイツ……………あの《瞬間移動》を使ってたよな。元々使ってなかった、あの能力を。

目的と仲間

あの時に使っていた瞬間移動能力。あれは間違いなく希亜と一緒にいた時に交戦した奴の能力だ。

地面を軽く蹴ってわざわざ身体を浮かばせていたし、何より消え方が似すぎている。と、言うことは……能力を奪ったって事だよな。つまり………、いやいや考えすぎだ。まだアンブロシアの線もある、簡単に決めるべきじゃないだろ。

ええ……つと、とりあえず俺が持っている情報をまとめるか。まず、俺の幻体となつた《黒》のゴースト。コイツは書き換えられた人格とは、現状で記憶などの共有はしていなかった。つまり、完全に別れてしまっている。それ故にか、肝心な記憶は全て抜け落ちているように欠けているようだ。

本人には出来れば思い出してくれとは頼んではいるが……正直それが出来ればラツキー程度に考えた方がいいだろう。

そして《白》のゴースト。コイツは未だに正体不明のオリジナルの幻体として活動している。そして記憶が抜け落ちる前の《黒》に、石化の犯人に近づけるのは自分がヒン

トだと言われた。つまり、アーティファクトの契約者は《魔眼》所持者という可能性が高い。

となると、オリジナルは《魔眼》《赤槍》《瞬間移動》《麻痺》の四種類の力を持っているってこと………か？ 多分。

オマケに石化の条件は一切不明。槍は攻撃の主体として使っている。瞬間移動はただわかんねえけど使われたら間違いないく面倒。そして視線を合わせると身体を麻痺させられる。

……どうやって勝つんだよ、これ。

いや、とりあえずは犯人の特定だな。それをしなきゃ取り押さえることすら出来ねえ。

なんにせよ、ひとまずは《白》ゴーストの契約者を探すことからだ。可能性があるのは………《司令官》とやら。多分香坂さんは違うだろう。あの性格の豹変はアーティファクトのモノと考える方が自然だ。

新海も充分怪しいが………今のところゴーストとの接点がない。特定する証拠が不確定すぎる。

やつぱりまずは《司令官》からだよな。確か……香坂さんは《アガスティアの葉》で知り合ったとか言ってたよな？ 俺もそれっぽい言葉でどうにかして誘い出せるだろ

うか？

本当は香坂さんから直接連絡してもらってから正体を暴きたいが……そもそも香坂さんが《魔眼》を持っていないと考えているだけで、《魔眼》所持者の味方の可能性は十分ににある。

ユーザーの為の理想郷を作るなんて言っているやつだ、何かしらの同意がないと香坂さんも仲良くはならないだろう。

それに能力も不明だ。警戒は必要だな。

となるとやっぱりあのサイトで直接連絡してみるしかない……か？

それとどうしても無視できない事が一つ。それはイーリスと名乗る異世界人のこと。

決して姿を表さず、回りくどい方法で俺の命を狙ってきている訳の分からないやつだ。しかもそいつは俺の能力を欲しがっている。

それは何故なのか、どうして俺にこだわるのか、何も分からないが常に気を張ってなといいけない。いつ殺されるかがわからないから。

さて……と、それじゃあとりあえずパソコンを――

「珍しく考え込んでるじゃねえか」

起動しようとする、俺の隣にテクテクと歩いてきたゴーストが座る。

そう、俺は今自宅に帰ってきている。なんだかんだで一番落ち着けるのは自分家だ。

「別に珍しくねえよ、割と俺は色々と考えてるんだぜ？」

「もつと頭空っぽだと思ってた」

「ひでえイメージだな」

「いきなり人の服を消そうとする馬鹿だと思ってた」

「いやその節は本当にごめんさい、男の子の出来心だったんです」

誰だつてそう思うよね？ 姿を自在に変えられる存在を手にしたら一度はそう思うよね!？」

「どうだか……。んで、どうすんだよ。この問題だらけの現状を、オレたちだけじゃ正直どうしようもないぜ？ これ」

「そうは言ってもなあ」

誰かに相談すると誰かを巻き込むことになる。俺は命を狙われているような立場だし……。実際あの時に希亜を巻き込んでしまった。

そんなことは出来ればしたくないのが本音ではあるが……

「……………」

それに、いつ裏切られるかわかったもんじやない。

「アンタの幻体になつてさ」

唐突にゴーストが語りかける。

「アンタの経験してきた事や、アンタの辛かった事とかが不意に記憶として流れてくるんだよ」

「……………そっか」

「いつも感じるのは《悲しさ》だった。今この瞬間までに何度かアンタの事を知る事ができたけど……………全部苦しかった」

「ああ」

「一言だけ言わせて貰うけど、ずっと一緒だって言い出したのはアンタだけ？ もっと人を信用してみろよ」

信用……………ね。

「アンタが繋がりを捨てねえ限りは、一人にならないはずだぜ」

「要するに今までの事を忘れて仲間を作れって言いたいわけだ」

「寂しいのは充分わかったから、楽しいを作れって言ってるんだよオレは」

まあ……………なんだかんだ言いつつもずっとゴーストを出しっぱなしだもんな、俺。

……………自分が気持ちわりい。

「そんな気分にもなれねえつつーの。こつちやあ5秒後にも殺されるかもしれないんだぞ？ 何時誰から襲われるかわかんねえのに楽しいなんて思ってるかよ」

そう言っつて寝。

ベッドにゴロンと寝転がり、そのまま目を閉じる。

「おい大将、食器洗いは？」

「明日する……もう寝させてくれ、疲れた」

「風呂……は入ってたな、歯磨きは？」

「全部済ませてる………」

「……つたく」

ウトウトと意識が遠のいている中、おかんのようなゴーストに適当に返事をしながら襲ってくる睡魔に抗わずに力を抜く。

すると案外凄まじい速度であっさりと眠れかけ………

カチャカチャと食器の音がする部屋の中でそのまま意識を失った。

4月22日

奇妙な関係、新たな出会い

ちゅんちゅんと小鳥の鳴き声が聞こえてくる。

カーテンの隙間から差し込まれてくる陽の光を鬱陶しいと思いながら、身体を起こし
たくなってそのまま寝転がり続ける。

アラームもまだなっていないんだ、おそらくいつもの時間よりは早めに目が覚めてしまっているんだろう。

だったらこのまま寝てもいいはずだ。

妙に気だるい身体を動かして、今向いている方向とは逆側に寝返りをうつ。もちろん
目を閉じたままだから視界は真っ暗闇。

そんな振り向いた先にある何かにしがみついて、再び睡魔に意識を渡す。

「すう……………すう……………」

なんか聞こえてくる。

寝る時くらいは隣人も静かにして欲しいものだ。しかも今は朝だぞ？ 周りの人の

ことを少しは考えて——

……え？　なんかおかしくない？　そもそも俺はベッドにこんな抱きやすい形の枕なんて置いていない。顔のところは妙に柔らかいし、温かきもある。

てかそもそも壁を挟んで聞こえてくるような音じゃない。まるで、こう……真隣に人がいるような感じ……

でも俺は一人暮らし。もちろんこの家に誰かがいるわけでもないし、誰も泊まりになんか誘ったりはしていない。

可能性があるとすれば………

恐る恐るゆっくりと目を開けてみる。きっと違う、多分違う、気のせい気のせい。なんて思いながら確認してみると——

「……………なんて？」

思わずそう声漏れてしまう。だってそうだろ、何故か彼女が俺の隣で寝ているのだから。確かに色んなことがあって、ほんの少し仲良くはなったりしたが……コイツとは一緒に寝るような仲じゃない。

てかそんな記憶もない。ぶっちゃけそんな気もない。

だがそんな俺を気にしないようにそいつは眠り続けている。

つか、アレなんスね。幻体って寝るんですね。三大欲求は全くないのだと思つてたわ。

俺も立派な男の子。もちろん色々とその状況には困る。困る……が。

どう対処したらいいのかわからない。今までにこんな経験にしたことがないのはもちろん、こんなに人に興味を持ったことがなかったから。どうしたらいいのが本当にわからない。

起こした方がいいのだろうか？ 騒いだ方がいいのだろうか？ 謝った方がいいのだろうか？

てかさ、てかさ、冷静に考えたらこれって俺が無意識に能力を使つたって事だよな？

寝ている間に俺が？ 《俺が》？

どんだけ寂しがり屋なんだよ気持ち悪い。

舞い上がってんのかね、誰かと一緒にいるってこのシチュエーションにさ。

あー馬鹿らし、さっさと起きよう。

……

……

……

と、朝からそんなことがありながらもするりと受け流し、家を出る。

ちなみに寝ていたゴーストは、あんなことになっていた事実がバレる前に能力を解除した。というか解除しておかないとそろそろマジで殴られる。

元々アイツも戦闘狂なところがあるから、油断すればボコボコにされる。

まあ……多分いつか記憶を読まれて怒られそうだけど。

とか何とか考えながら俺が向かっているのは学園ではなく駅前パン屋。そう、前回せつかく向かったのに何も買うことの出来なかったあのパン屋だ。

今日はいつもと家を出る時間が遅れてしまった事もあり、こんな遅刻ギリギリであればあの行列はないだろうと考えた結果だ。

そして目的の場所へたどり着くと、案の定あの行列は見当たらない。どんな物が売っているのかと気になりながらも店の前まで行くと………

『たまごパン』が最後のひとつとして寂しそうに、ぽつんと置かれていた。

いやどんだけ人気なんだよ、他の商品はほぼねえのかよ。つか逆になんでこれだけが一つだけ残ったんだよ。と思ったら横にも『たまごサンド』やら『たまごバーガー』や

ら色々と並んでいる。

……………たまご推しがすげえな。

まあしょうがない、あれだけの行列が出来るほどのパン屋なんだ、こんな結果になつてしまうのも無理ないだろう。

そうして俺がそのパンに手を伸ばすと……………横からもう一人の誰かの手が伸びてきてぶつかりそうになつた。

「ん?」

「むっ」

その誰かと声が重なり、隣を確認する、すると俺と同じ白泉の制服を着た赤髪の男が横に立っていた。

「あんたもこれが欲しいのか?」

「ああそうだ。この店の『たまご』パン……………絶品だから」

……………んん?　なんか喋り方が気になるんだが……………ま、まあ、人それぞれさ、そんなもんは。うん。

「絶品ねえ……………だつたら買えよ、俺はまた今度食つてみるから」

事実売れているのは目に見えてわかる。結構本格的に興味が湧いてきた。明日ぐらいいにはちよつと早起きして行列前に行つてみるか。

「む？ 君はこのパンを食べたことが無いのか？」

「ああ、だから明日にでも買ってみようかって思ってたさ」

赤髪の男は「ふふ……」とニヒルな笑みを浮かべると、残っていたパンを手に取り、俺の手に優しく乗せてきた。

「だったら、君が食べるといい。この味を知らないとは勿体ないからな」

「え？ あ、ああ……」

なんだろう、この独特な圧は……。ちよつと近寄り難いぞ……？

「？ どうした、私の顔に何か？」

「いや、なんつーか………いいのか？ 俺が買つても」

「構わない。君にもこの味の素晴らしさを体感して貰いたいからな。では、サラバツ！」
シユバツと無駄に格好をつけてくると身体を反転させ、テクテクと歩いている赤髪の男、ここで俺は理解することが出来た。

ああ、コイツ厨二病だ。

と。

「なんか……なりきれないハル―シユだな……」

頑張つて背伸びしてる感があるハル―シユだ。ちよつとダサイ。

なんて思っていると、テクテクと歩いてきた赤髪の男は、俺の言葉に反応するように

ピクつと一瞬身体を止め、急旋回してこちらにツカツカツカツカーつと！ 迫ってきた。

やべ、聞かれてたか……？

文句言われることを覚悟しながら、適当な言い訳を考えていると……
何故かがつちりと両手を掴まれた。その目はどこかキラキラと輝いている。

「ハル―シユを知っているのかッ!!」

「はい？」

変わった日常、初めてのひととき

「あ、ああ……。軽くだけど」

「そうかそうか！ 君はハルーシユの素晴らしさがわかるのだなっ！」

心の底から嬉しそうに目を輝かせ、少し興奮気味にバンバンと俺の両手を叩く。そんな圧倒的な圧に流されることしか出来ない。

「あ、いや……。数話見たことがあるくらいで……………」

「なんとっ!? いや、いいんだ、それぞれ事情があるだろうからな、仕方がない。だがっ！ 数話見たということは続きが気になるほど面白かったということだろう!? どうだろうっ!? いい機会だ、これから二人で続きを見ようではないかっ！」

「長えよ！ 興奮しすぎだよ！ 勝手に納得すんなよ！」

「いやアンタが言ってることは別に間違っちゃいねえよ、確かに続きは気になったけど……………まあ……………うん。」

「まあ落ち着けよ、ここじゃアレだ。せめてガッコーには行こうぜ」

赤髪の男の両手を掴んで優しく戻す。多分根は良い奴なんだと思う、わざわざパンを

譲ってくれたし、ただ……この性格というか、独特すぎる雰囲気のおかげで大分損しているよな。

「おつと済まない。私としたことがやや興奮してしまっていたようだ。非礼を詫びよう」

「気にすんな、ちよつと金払ってくつからとりあえず待つてくれ」

……うん。やっぱり普通に根はいい奴だよな。

少なくとも俺なんかよりは……なんとも言えない気持ちになる……けど。

そんなこんなで会計を済ませ、ひよんなことから出会ってしまったこの男と並んで学園へと向かう。

ただ……多分だけど年下か年上だよな。こんな独特な同級生は多分いなかっただろうから。同学年だけでも三百人程度の人数がいるからハッキリとは覚えてないけど……多分いなかったと思う。

「そういうやまだ名乗ってなかったな、蓮太、『竹内 蓮太』だ。よろしくな」

俺がこうして見ず知らずの人と普通に話すようになるとはなあ……本当、何度も思うけどしみじみとするわ。

「ほう、奇遇だな。私も『蓮』の名があるんだ。私の名はそう！ 蓮夜。『高峰 蓮夜』。よろしく頼む」

「あ、ああ………そうか。よろしく」

慣れねえ……この感じに。なんかあれだな、希亜と相性良さそうな奴だよな、コイツ。学園同じだったら友達になってたりしたのかな？ わかんねえけど。

「ちなみに……、竹内蓮太、君は他に好きなアニメなどはあるのか？」

「あー、そうだな………。それなりに色々と見てきたけど、パツと思いつくのは『カン節マン』とか『北斗の拳士』とか？ どっちかつつーと俺はゲームの方を結構やってたからな。それこそ『ドラフアン』とか」

「王道の道を往く……か。うむ、悪くない」

「だろ？ 特にカン節バスターとカン節ドライバーの合体技、ジョイントドッキングはかつこよさの極みだな」

「わかる、わかるぞ！ 主人公であるカン節マンの二大必殺技のドッキング！ 男ならば燃えないはずはない！」

「わかるか!?」二代目カン節マングレートとのあの合体技! 5次元殺法コンビに食らわせたあの瞬間! たまらなかつたあゝ! それでな——」

なんて二人してアニメやゲームの話ですつげえ盛り上がりながら学園に登校した。

つい夢中になって色々と話していたが、俺って意外とコミュニケーション力があるんだな〜と不意に思ったんだ。だって、初対面でこんな感じで仲良く話せるって結構凄くね!?

まあたまたま趣味が似てて、相手が普通に良い奴つてのはあったけど……なんかおかしいくらいに話が噛み合ってたんだよなあ。

いやほんつとに思う。あの俺がこんなに人と喋るなんて思いもしなかった。まさかここまで変化があるとはな……、ビックリだ。

そう、ただこんな自分にびっくりしてただけだったんだ。この時は………

— 限終了 —

「んん〜……!」

やっとこさ面倒な授業が終わった、この数分間の休みの一時がなかったら俺多分死んじやう——

「竹内蓮太っ！ 探したぞっ!!」

「うわっほいつ?!?!」

授業終了後、直ぐに俺のクラスに高峰がやってきた。嘘だろ？ 十分くらいしかないんだぞ？ 休憩。

「さあ！ 私と共に思う存分語り合おうではないかっ!!」

「十分で何を語るんだよ!? せめて時間がもつとある時に来いよ!」
なんて会話を済ませて、なんとか説得して高峰を帰らせる。

二限終了

「かあ……」

終わった終わった、面倒な授業が二つ終わったり。ちよつと喉が乾いたし、適当に自販機にでも行って——

「竹内蓮太っ！ 今回は少し授業が早く終わったから来たぞ！ さあ、私と共に思う存

分——」

「十分しかねえのは変わんねえだろうがっ！ ちったあ学べよっ!!」

とツツコミをした後に、なんとか説得して高峰を帰らせる。

三限終了！

「さーて、次の準備をするか」

流石の俺もそろそろ警戒する。きつと俺には気の抜ける瞬間は来ないであろう。うん。そしてアイツは来るだろう。

なんて考えていると、案の定教室の扉が開き――

「竹内――」

「帰れっ！」

バンッと開いた瞬間に扉を閉める。つかコイツメンタル強すぎだろ！俺以外に友達いねえのかよ！

ガタガタと外から開きそうな扉を必死に抑えて力を込める。

「なんだ、恥ずかしいのか？　なあに気にする事はない！　私たちは既に、親友ではないかっ！」

「待て待て待て待て……！　何時から俺たちは親友になったんだよ……！　つか力強え

よ！　離せよ！　帰れよ！」

プルプルと俺の腕と扉が震えている。どうやら扉の向こうからアイツも何とかして

開けようとしているようだ。

そんな時だった、俺の後ろから誰かが声をかけてきたのは。

「あの……竹内くん？　今、お取り込み中……？」

「その声……！！　九條さんか……！！　悪い、今戦闘中ううう……！！」

「あ、あの……扉が、壊れちゃうんじゃない？」

「壊れてんのはアイツの頭だろ……っ！」

あはは……と、どう答えたらいいかわからないのか、苦笑いで場を誤魔化す九條さん。

「ああ……そうだ！　昼！　昼なら話し相手になってやつから！　だからせめてまともな時間に来てくれ！　な!?　高峰！」

「昼！　昼か！　任せておけっ！　今からが楽しみだっ！　フーハツハツハツハツ!!!」

こんなに執着が半端ない割にはすぐ引くな!?

もうお前わからん!

高笑いが廊下に響きわたりながら遠ざかっていく。あーあ。きつと周りの学生たちからは奇異の目を向けられているんだらうな……。

「はあ………。疲れた……」

なんでこの十分間の休憩でこんなに疲れにやあいかんだ。これもしかしてこれから毎日こんなことにはならないよな？　それだけはマジで勘弁なだけだ。

「と、とりあえず……お疲れ様？」

隣にいる九條さんも、きつと俺に用事があつてわざわざ声をかけてきたんだらう。アイツのせいで無駄に体力を使つたけれど、一応聞いておかなければ。

「ああ……待たせて悪い。それで何か用？」

「あ、えつとね！ 今日の放課——」

キーンコーン——

九條さんが何かを言いかけている途中で、タイミング悪く次の授業の予鈴が鳴る。

あのバカとのやり取りで時間を使いすぎたな……、ごめん九條さん。

「チャ、チャイムが鳴っちゃった……」

「タイミング悪かったな、悪い！ 次の休憩の時でいいか？」

「うん、私の方こそごめんね？」

「いや、謝るべきは俺の方だ……はあ……ほんとに疲れた……」

結局ろくに休むことも出来ずに、次の授業に突入してしまう。

流石に立て続けにこんなことをしていたせいで眠気が半端なかった俺は、ダメだと思いつつもこの授業ではウトウトとしていて全然内容を聞くことが出来なかった。

色んな意味でこんなことをしている場合じゃないのに……

とりあえずは次の休み時間は九條さんの所へいかないと……な。

デート……………?・

「はい、授業終わりー、お疲れさまー」

なるせんせーのやる気のない気の抜けた声で、午前中の最後の授業が終わりを告げる。

どうやらなんとかやり切ったようだ。ま、ほとんど頭の中に入っていないけど。

一日ぐらいいいだろう、どうせ明日の授業の時に復習から入るし。とりあえずはまず九條さんだ。さつきは迷惑かけちまったし（俺のせいじゃないけど）今度は俺から声をかけるか。

机の上を片付けて、パンを手にして既に視界内に入っている九條さんに向かって歩いていく。

「ちゃろーつす」

「ちゃ、ちゃろー?」

少し困惑した表情で戸惑いを見せる九條さん。あ、あれ? 「ちゃろー」って最近の流行なんじゃないの? 「チャオ」と「ハロー」を合わせた今どきの挨拶だと思ってた……

「あ、いや……忘れてくれ。そ……それで！ さつき言いかけてた用事って何なんだ？」
「さつき………あつ！ さつきはね、えーと……竹内くんって今日の放課後空いてる………かな？」

「ん？ 別に空いてるけど」

珍しいな、九條さんの方から俺に………って俺たちが話す時って基本的に向こうから声をかけてくれてたよな。

それは………しやあない………か？

「本当？ よかったっ」

ばあつと明るい笑顔で両手の指先を合わせて喜びを見せられる。こんなに無邪気に喜ぶような人だったんだな、この人。

まだまだ知らねえことばっかりだ。

「それじゃあ一緒に帰らない？ ちよつとだけお話ししたいこともあるから」

「ああ、別にいいよ」

しかも用事はまさかまさかの下校の約束だった。さつきからこの話を聞かれているクラスの男どもからの痛い視線を感じる。

まあ別に気になりはしないが。

「あ、でも、俺ちよつと晩飯の材料を買わな——」

「竹内蓮太っ！ 遂にやってきたぞ！ 我らが結託するこの日がっ！！」

「きやいけないから、それも一緒にいいか……………う？」

ああそうだった。この昼食の時間はアイツが来るんだった。秒速で忘れてたわ。

「あはは……………、だ、大丈夫だよ。私もお手伝いするから」

「サンキュ……………じゃ、行ってくるわ」

「い、いつてらっしやい？ で……………いいのかな？」

苦笑いを浮かべる九條さんに軽く手を振り、ハツラツとしたテンションの高い高峰と合流して、一応約束通りに一緒に昼食を摂った。

色々話をしていたが、結局のところ分かったのは重度の厨二病と言うことと、友達が誰一人いないとのこと。「友人と共に昼食を摂る事」が彼の夢の一つだったらしい。

……………俺も人のことは言えないけどさ、こいつどんだだけ可哀想なんだよ。

同情の気持ちもあり、これからも仲良くはなり続けた方がいいかな？ と思う蓮太であつた——
ちゃんちゃん。

と、時は変わり放課後、予定通りに九條さんと校門前で待ち合わせをして、自転車を取ってきた彼女と並んで帰路に着く。

「それで、何を買うの？」

「そうだな……何も考えてはなかったんだよなあ」

食いたいものとか直ぐに思いつくだろう、なーんて考えていたから何も計画を立てていない。しかも案の定何も思いついてもいない。

「ま、駅前のスーパ―に行けば何かあるだろう、そこで考えようかな」

「あく、あのお店は安くて新鮮だもんね」

「九條さんって料理とかするの？」

「うん、お料理は大好きだよ」

こりやまた意外だな。コロナのお嬢様なんだからそういう系は全部任せてるのかと思ってた。

「へえ、俺も結構好きなんだ。毎日毎日してるって訳じゃないけど……できるだけ自分で作りたいくらいにはさ」

「竹内くんの方が意外だよ、それじゃあいつもコンビニとかじゃないんだ？」

「どうしても都合で偏ることはあるけどね、コンビニで済ませるくらいならナインボー

ルに行ってる」

「あ、そういうえば……毎日じゃないけど、沢山来てくれてたね」

「お気に入りの店だからさ」

事実嘘じゃない。あんなに安くて美味しいパフェが食べれるなんてそうそうないぞ？ 家からは歩いて行くとなればちよつと遠いけど、それを差し引いても通いつめたくなる美味さだ。

「ふふつ、ありがとうございますっ」

そんな会話をしながら歩いていると、目的のスーパーへとたどり着く。そのまま入店して二人で様々な所へ歩き回るが………なかなかいいのが決まらない。

「うくん、魚……の気分じゃないな」

「それに、ちよつとだけ値段も………ね？」

確かに、この辺の魚たちは少々値段がお高い。

それに魚つて割と面倒だから……

うーんと頭を悩ませていると、いつの間にか少し離れた場所へ移動していた九條さんが、何かのバックを持ってトコトコとこちらにやってきた。

なんか……小動物みたいだな。

「竹内くーんっ。このひき肉安かったよ」

そんな九條さんが持っていたのは牛ひき肉のパックだった。値段を確認してみると、確かに通常の価格の三分の二程度の金額になっている。

「へえ……なんでこんなに安いんだろ」

「今日は『お肉の日』なんだって！ 理由はわからないけど……」

……まあどんな理由であれ、セールで安くなってるのなら使わない手はない……か。

「そっか、ありがとう。じゃこれにするわ」

「ふふっ、ちなみに私のオススメはハンバーグです」

「わーったわーった。それじゃ、ハンバーグの材料集めてくか」

と、なんだかんだで晩飯はハンバーグに決定しましたとき。

いやそれはいいんだけど……なんかあれだな、これデートを通り越してカップルか夫婦みたいだな。

俺はやっぱり男だしこういうのは嬉しいけど……こんなのがクラスメイトにバレたら後ろから刺されそうだ。

て言うか……結局九條さんの話ってなんなんだろう？

二人の時間、認識

ジュー……ジュー……

カンカンカンカン……

「……………えいつ」

油の踊るフライパンの上で、手のひらサイズに丸められた合い挽き肉の塊。それをルンルンと鼻歌交じりの声の合間に、九條さんがひっくり返す。

トントントントン……………

レタスに……パプリカに……キュウリに……生ハムにミニトマト。よし、とりあえずこんなもんだろ。

リズム良く野菜たちを切りながら、見栄えが良くなるように皿に盛り付ける。もちろんその皿の目立つ部分はスペースを空けて。

それで味噌汁の方も……うん。抜群だな。

ご飯は……もう炊けてるな、上等！

「にしても悪いな、わざわざ料理手伝ってもらって……しかもメインの方をさ」

そう、俺は今九條さんと二人で晩飯の調理をしている。お互いに料理が好きだということもあって、話の流れで手伝ってもらうことになった。もちろん、タダでそんなことをさせるわけはなく……

「私の方こそ……ごめんね？ 私の方も用意してもらうなんて……」

「いいっていいって、気にしないでくれよ。手伝ってくれたお礼つてさつき言つたら？
せつかくだし一緒に食おうぜ」

会話をしながらも、流れを崩さずに食器たちを用意する。皿やコップはともかく……箸は流石に気にするかな？　ここは割り箸にしとくか。

「変なこととはしねえからさ」

「ふふつ、竹内くんはそんな人じゃありません♪」

……えらい上機嫌だな、ハンバーグ焼きながら鼻歌を歌ってたし、何かいい事でもあったのかな。

なににせよ、それだけの信頼が感じられるのはめっちゃ嬉しい。それだけにこの人は大切にしないと……と強く思う。

「できた〜」

若干間抜けにも聞こえる声で、九條さんは火を止める。どうやら作っていたハンバーグが焼き終わったようだ。

慣れた手つきでひよいひよいつと皿に盛り付けるその姿は、どこか母親の面影をも思わせられる。そんな記憶ないけど。

それから二人で盛り付けられた料理を運んで、「いただきます」の号令の元、夕食の時間が始まった。

「……………うまつ」

早速手作りのハンバーグを一口食べてみるが……………女の子に作つてらもつたという補正がかかっているのか、それとも単純に腕が凄まじいのか、とにかく美味かった。

柔らかく弾力のある噛みごたえ、噛む度に中から染みでる肉汁、そして……………これ、中身にチーズを入れてるのかっ！

それに……………肉に紛れて細かく刻んであるピーマンを入れている。うんうん、これが絶妙なアクセントになって更に肉の旨味をひきたてている。

「米が進むな……………すげえよ九條さん」

「私は凄くなんかないよ！ でも……………嬉しいです、ありがとうございます」

俺もそこそこ料理の腕に自信はあつたつもりだが……………これはいい勝負……………いや、下手をすれば負けてるかも？

うーん……………それはそれで結構悔しいな。

もつと味わって食べてみよう。俺との違いを見つけて、こういう味もあるんだなと頭

と身体に叩き込まなければ。

「いやあ、食えば食うほど思うよ。九條さん立派な嫁さんになれるな」

「おっ、お嫁……………さん……………っ」

九條さんは、ボフツつと音が聞こえてきそうなくらいに顔を赤らめる。

……………そんなに恥ずかしいこと言っただろうか？

「ああ、なんか話してたら家事も出来るみたいだし、料理美味しいし、気も遣えるし」

俺が褒め言葉を口に出す度に九條さんは、ボフツ、ボフツ！ ボフツ!! と段階的に更に顔が赤くなる。

……………面白……………。

「そ、そそそそつ、そんなこと——」

「しかも美人さんだろ？（おっばいデカいし）優しいし、（おっばいデカいし）頼りになるし、（おっばいデカいし）勇気もあるしき。尊敬してる」

おっばいデカいし。

「……………——ツツ！」

「……………？ おーい、九條さん？ 九條さ——ん」

フリーズ……………た……………？ あ、いや違った。

九條さんの霊圧が……………消えた……………!?

なんて言ってる場合かよ。

「……………はっ！」

「いや「はっ」じゃねえよ……、なんだ？ 褒め慣れたりはしてないのか？」

ぶつちやけほとんどわざとですけどね。でも嘘なんかじゃない。そう思っているのは事実。

おっぱい含めて。

「もっ、もう！ わざとに褒めてくれてたでしょ！」

「え？ なんで？」

「顔がニヤニヤしてますっ」

「……………ふふっ！」

どうやら俺は無意識のうちに、この状況を楽しんでいたようだ。失礼だと分かっているけれど、どうしても九條さんをいじって遊んでしまっている。

「だって九條さん、いちいち反応が面白いんだもんっ！ ちよっと、からかいたくなつたんだ……………！ はははっ！」

「も、もう……………！」

やや頬を膨らませて、ムーっとこつちを見る九條さん。けれどすぐにその顔は解れていって――

「ふふつ、でも、ちゃんと嬉しかったです」

「褒めたのはわざとだけど、本心ではあるからな？ 素直に憧れるよ」

と、そんなこんなで楽しいと思える時間を、九條さんと共に過ごした。

本当……誰かと一緒にいるのって苦痛でしか無かったのに、こんな所を九條さんに変えられた。きっかけは些細な事だったけど、この人の心に触れていくことで、なんだか安らいでいくかのような気持ちにもなる。

間違いない、断言出来る。俺はこの人には完全に心を開いている。その扉は微かに開いただけだが、九條さんならその奥へと簡単に出入りできるだろう。

そんなレベルで。

「あつ、竹内くん、おかわりありゆからねっ」

「……………今、噛んだね」

「……………」

「噛んだよねっ」

「お……………おかわりあるからね！」

「おかわりありゆ？」
「ゆ、ゆるして……」

疑問と監視

「(ぎ)馳走様でした」

パンつと手を合わせて合掌した後、食器をまとめて台所へと運ぶ。

「洗い物は私がするから、竹内くんは食休みしてて」

その途中で、九條さんからそんな提案……？ があつた。

「え？ いや、客はそつちなんだから九條さんがくつろいでてくれよ」

「いいから、私に任せて下さいっ」

そう言つて俺の背中をグイグイつと押して、九條さんは扉の奥まで押し出す。

……返答する暇すら与えて貰えなかつた。

既に洗い物を始めているのだろう、扉の奥から水が落ちる音と綺麗な鼻歌が聞こえてくる。

「まあ……ああ言うなら、甘えとくか……？」

ボスンツとベッドに腰を下ろして、特にやることか思いつかないためボケーツと九條さんを待つ。

そういうば……誰かに家事をしてもらうのつて、何時ぶりだろう。

母親のその姿は、もう覚えてはいない。

父親の姿も、あまり覚えてはいない。

結構長い間一人だったしな。

タンスの上に立てかけている小さな写真立て。ふとそれを思い出し手に取って写真を眺める。

そこにはもう数年出会っていない父親と母親の姿、そしてあまりに幼い俺の姿だけ写っていた。

そこには……兄はいない。

何故、わざわざこの写真を飾っているのかなんてのはもう忘れた。きっと、当時の俺がわざとに兄貴のいない写真を選んだのだろう。

……兄貴に憧れていたからだろうか、若干この子供が兄貴に見える。

一時期は完全に真似してたりしてたからな、髪型や口癖まで。結局やめたけど。

「……………」

なんだろう……、この感じ。

なんか違和感がある。何か……違う。

この写真……何か……

.....

「お待ちせー、終わったよ、竹内くん」

音を立てて扉を開けた九條さんが、洗い物を終えた後にこちらの部屋へと戻ってきた。

「あ、ああ。ありがとう、九條さん」

「いいよ、私が言い出したことだし」

まあいいか、違和感を感じるなんて日常だし。

手にしていた写真をタンスの上に戻して、元いたベッドに再び腰を下ろす。

そして畳んでいたノートパソコンを取り出して、ブラウザを開く。理由は特にないけど、やることない時は大体ネットサーフィンしてたら時間が潰れるからな。

カチカチとマウスを動かしながらクリックを繰り返していると、あることを思い出す。

「そうだ……」

「……？」

横でいつの間にか画面を覗き見ていた九條さんが首を傾げている。てか……えっ!?

なんで急に横にいるの!?　なんで!?　なんで当たり前かのように並んで座るのツ!?

ま、まあ……いいか……。落ち着け……。落ち着け……。

そのままベッドにゴロンとうつつ伏せになる形で寝転がり、カタカタと検索欄に文字を打つ。

「適当にくつろいでていいからな」

検索しているのは……《アガステイアの葉》。そう、メビウスのファンサイトだ。

香坂さんから聞いたあの情報、嘘なんかじゃなければこのサイトに何かヒントがあるかもしれない。

《司令官》と名乗る人物について。

「じ、じゃあ……。失礼します……」

と、その時、俺の隣で掛け布団たちが少し波打つように跳ねる。

そしてほのかに香るいい香り。そして何よりも、それほど大きくはないノートパソコンの画面を見るんだ、となると……。

「あ、はい……。失礼してください」

距離がかなり近い。

前もテーブルに置かれたノートパソコンを二人で見ることがあったが、あの時以上の……こう、悶々とする何かがある。

文字通りくつろいでいるのだ。二人して。

「あつ、これ……《アガスティアの葉》……、竹内くんもアカウントを作ってるの？」

知ってるのか？ このサイトを……。なんて一瞬思ったけど、元々九條さんはアニメの制作側の人間なんだ、ファンサイトの一つや二つ知っててもまあ……おかしくは無い……かな？

フェスの日も自分から立候補するような人だし、責任感とかそういう系はしっかりと持ってる人だしな。

それよりも……

「も」？ 九條さん、このサイトでアカウント作ってたのか？」

「ううん、私じゃないよ。私はそこまでの勇気がなかったから」

まあ、これ……なりきり掲示板みたいなもんだからな。耐性がない人が関わるべきじゃないだろうし……黒歴史にもなりかねん。

「ふ〜ん……」

チャット欄を適当に漁ってみる。ふむふむ……ほむほむ……へむへむ……

「これか……………」

そんな中で見つけた会話。

《司令官》という名前そのものは何度も何度も出てきてはいたが、俺が探しているのはそれだけじゃない。

誰かが能力について相談をしている部分だ。それがあれば香坂さんの言っていたことは事実になるから。

「《エデンの女王》……………あの人やべえな」

「……………」

なるほどねえ……………確かに女王だな。多分だけど……………能力を扱った時は。

「ちなみに俺はアカウントなんて持ってない。でもなんでそんなこと聞いたんだ？」

「私たちも昨日からこのサイトを見ることにしたの、もしかしたら本物の《魔眼》を持っている人がいるかもしれないからって」

……………出来ることはやってみるって感じだな。つまりは《それ》をやらないといけないくらいには八方塞がりってわけか。

……………まだ新海が危険だということは十分に理解しちゃあいるが……………憶測だけじゃ何も生まない、変わらない。

実際に接触して、安心できるかどうかを自分の目で確認しなくちゃいけないな。遅か

れ早かれ新海の件はどうかしなきゃいけないんだ。

アーティファクトを持たない《ユーザー》。お前は一体何なんだ。新海 翔。

「俺……………もしかしたら《魔眼》の人物を特定出来るかもしれないんだ。多分だけど」

「えっ……………！」

1人目

「《魔眼》のユーザーを……特定……ッ!?」

目を見開いて驚きを見せる九條さん。けれど、少し言葉を詰まらせながらも、急がず俺の言葉を待つてくれた。

「今すぐに……なんて事は言えないけど、俺が一番犯人に近い気がするんだ。手元にあ
る証拠さえ確信に変わればだけどさ」

一番可能性があったとしたら、《司令官》が《白ゴースト》との契約者。もし、あの時に
《黒ゴースト》が言っていたように、ゴーストが石化のユーザーの手がかりになるのなら
ば……自分の契約者が《魔眼》所持者ということじゃないだろうか。

もちろんこの考えに固執してしまうのは良くないが……どうしてもこの可能性
が高い。

そしてその《司令官》と接触出来るのが、香坂さんと《白》ゴースト。頼るべきは香
坂さんだが……能力の詳細もよく判明していない人と接触を続けてもいいものだ
ろうか? こっちもこっちで確証がない限りは油断しない方がいい。

「なっ、何か私たちにできることはないかな!？」

「……………」

協力……………」

してもらっていいのだろうか。もしも俺が伝えたことで九條さんたちに何か危険が迫ってしまったら……………」

「できることはなんでも手伝うからっ」

いや……………」下手にここで《白》ゴーストや司令官の事を知られて勝手な行動をする方が危険……………」

少なくとも俺が知っている事実を隠すことで、何かの情報を手に入れた時に九條さん一行は俺に相談してくる可能性が高いだろう。

そうなる危険な人物と会わせることを止めることが出来るかも。

それに九條さんは女の子だ。話を聞く限りだと新海の妹もコミュ力はあるそうだし……………」上手くいけば俺以上にあの人の情報を引き出せるかも……………」

「……………」ある人と仲良くなつて欲しいんだ」

「ある……………」人？」

「ああ、香坂 春風つて人なんだ。その人が鍵になる」

どんな形でもいい、あのひとときえ仲良くなれば《司令官》については何とかなる。け

れど敵だった時が危険だ。《白》ゴーストと司令官と関わりを持つ唯一の人、アイツらの仲間という可能性も捨てちゃあいけない。

「香坂……春風さん……。うん、わかった。頑張ってみるね」

その目は力強く、けれどどこか優しく、真っ直ぐに俺を見ている。

俺は……俺は、この人を失いたくない。

「けど………」

話していくうちに、いつの間にか俺たちは上半身を起こしていた。さつきまでの楽しい空気が一変してしまったからだ。

どうしてもこうなってしまう。俺の判断は正しくないのかもしれない。また巻き込んでしまっているのかもしれない。けど………

友達を守るかもしれない。

彼女の肩をがっしりと掴んで、こんな事でも危険な事だと察知してもらおう為に、真剣な眼差しで俺は語る。

「無茶はしないでくれ。絶対に一人で行動しないでくれ。必ず………」

「必ず………」

なんて言えばいい。何を伝えればいい。

彼女に怯えさせずに、この気持ちをどうやって伝えればいい……！

……

……ッ！

「必ず、またハンバーグを食べさせてくれ……なっ？」

精一杯の笑顔。

苦手だった、人との関わり。

今この瞬間の俺は、今までの自分自身を否定するかのような事をしている。

また失うかもしれない、また辛くなるかもしれない、また苦しくなるかもしれない。

けど……そうはさせない。絶対……絶対させない。

「絶対……俺が守るから……！」

既にあの子は死んでしまった。あの頃の俺は思えば馬鹿だ。人が死んでしまったのに笑っているんだから。

関係ない人ならいいのか？ 違う。死んでもいい人間なんていない。みんな誰かの

大切な人なんだ。

俺以外は。

そんな時、俺の手に暖かい手が重ねられる。

小さくて、綺麗で、優しい手。

「……………約束」

「……………え？」

その手はすぐに俺の手から離れて、小指をピンツと立てて俺の方を向いている。

「全部が終わったら、またここに」飯を作りにくるね」

「……………！……………ああ、約束」

これは俺自身との約束でもあった。

この胸に抱いた思いは嘘でもなんでもない。

「ゆーびきーりげーんまん♪ うーそつーいたら——」

みんなを守る。その為の指切り。

あれから数時間後、九條さんに補足できる事を全て話して、家まで見送って俺は自宅に戻っていた。

冷静になって考えてみる。

香坂さんの事はひとまず九條さんチームに任せる形で行くことになった。それは三人チームでありながら、女子が二人というアドバンテージを存分に扱うためだ。

ユーズーであるのは九條さんだけが……危険がありそうな時は連絡を貰う約束になっている。それは必ず守ってくれるだろう。

………《必ず》………か。

俺は俺のできることを探す。とりあえずは………

スマホを開いてあるメッセージアプリを起動。そしてある人物と連絡を取るためにメッセージを送る。

『色々伝えることができた。出来れば情報を共有したいんだが………今大丈夫か？

希亜』

俺にも仲間はある。頼りになる仲間が。

俺自身の幻体となった《黒》ゴーストの事、司令官の存在。その危険性。香坂 春風さんの存在。そして間接的に協力してくれている彼女らの事。俺たちのこれからの行動。

色々と話したい事はある。

ピロンつと音が鳴る。その理由は一目瞭然、俺が送ったメッセージの返事だ。

『手短にならないのであれば通話をしましょう』

よし。

『わかった、じゃこっちからかけるよ』

変わった心、世界の裏で……………

プルルルルルル……………

プルルルルルル……………

コール音が鳴り続ける。希亜が電話に出てくれるまでの間、俺は何から伝えようかと悩んでいた。

これでもない、あれでもないど頭の中で考えていると、思いのほか素早くそのコール音は終わった。

『それで、何?』

もしもしの一言もねえのかよ……………、いやまあ……………別にいいんだけどさ。さつさと用件を言えと言わんばかりの圧だなあおい。

「あ、ああ。そうだな……………どっから話せばいいか……………」

『どれからでもいい』

とりあえずは、希亜にはゴーストの搜索を依頼していたはずだ。その件に関することから伝えるか。

「まず……………そうだな、ゴーストの件なんだが……………何とかなった」

『……………は?』

ですよねえ、そんな反応になりますよねえ。

「ええつと、とりあえずある程度の事までは説明するから、何とか理解してくれよ? はず——」

蓮太説明中……………

「——つて事なんだが」

『……………そう』

……………? なんか……………機嫌悪くない? なんか俺しちやつた?

「あ、あの……………怒ってる?」

『ええ、かなり』

「なんで？」

『何故、私に連絡をしなかったの。貴方一人で敵陣に攻め込むなんて無謀』

あ、ああ……なるほど。

「いやそれは、まだゴーストについては何の確認もなかったし、そもそもとして希亜を巻き込む訳には——」

『言い訳は聞きたくない。本物の愚者ね、石化の能力者がいた場合どうするつもりだったの。敵に仲間がいた場合何ができたの』

「い、いや……」

『元々、幻体である彼女に貴方は勝てなかった。この事実がある以上単独で攻め込んで、人数的不利になる事、そしてその実力の差が開いている事くらいは容易に想像ができたはず。死んでしまったら元も子もないのよ』

「……………は？」

めつつつつちやめちや怒ってますやん!? そ、そんなに怒ることある!?

いや確かに危険な選択だったし、勝手な行動をしたことは悪いと思うけど……

『でも……、貴方の気持ち分からない訳でもない。貴方が彼女を思うように、私——』

「』

「ん？ 何？」

『……………何でもないわ』

……………？ 途中で話すのを止められたらかなり気になるんですけど。

『とにかく、現段階での頼みの綱は九條さん達と言うことね』

「ああ、そうだ。正直、俺たちふたりは既に黒幕から警戒されていてもおかしくはない。既にゴーストを介して接触してるからな。だからここは向こうのチームに任せようと思おう」

『下手に動けば蓮太が狙われる。それでなくても蓮太は姿の見えない敵に命を狙われている。確定的な証拠が出てくるまでは大人しく待機するしかないわね』

「そうなんだ。でも、その後は別、もしも司令官の情報が手に入ったら、九條さん達に行動してもらおうわけにはいかない」

あくまで直接対決は俺たちがやるべきだろう。戦闘に特化した能力だからこそ、生存確率は俺たちの方が上だから。

「だからさ……………希亜。能力について互いに教え合わないか？ いざと言う時の為に」

『……………』

……………しようがないな。

「俺は希亜も死なせたくない。俺たち《ヴァルハラ・ソサイエティ》がこの世界の為に戦うことを宿命づけられているのなら、手を抜く事は許されないと思うんだ。だから

……」

「リーダー……、俺が言える立場じゃないかもしれないけど……仲間を信じてくれよ」

……

……恥ずい。

『……明日』

「明日？」

『明日の放課後、公園で待ち合わせしましょう。詳しい話はその後で』

「……！ ああ！ ありがとう！ 希亜っ！」

（視点切り替え）

これで……ざっと二十人は集まったかしら。

影に埋もれたアーティファクトに選ばれし者、この枝では頑張ってもらおうわ。

《魔眼》の天敵は一つじゃない、全てのアーティファクトの天敵たる《魔境》は必ず潰さなきゃ。

せつかくだから……同じ人間同士で遊んでもらう事にしたわ、そっちの方が絶対に楽しいもの。

あの子の《魔眼》は……今は放置でいいわね。何よりも最優先は……やっぱり《魔境》の子。

あの子は確実に殺しておきたいところだけれど……私が動くにはもう少し時間が必要、ま、このかき集めた人間たちが上手く殺してくればそれでいいわ。

いえ、殺す事は期待できないわね、何か便利なモノは……

そうだわ、アレがあった。存在そのものを消滅させることの出来るあのアーティファクトが。

あの力を持っている子は……そう、あの子の妹なのね。

それにしても、異常事態が発生しているわ、私の能力で別の枝が観測出来なくなってきた。

こつちの問題もどうかしなくちやね、こんなことが出来る能力は……幻に近いあの
アーティファクトくらいしか出来ないと思うのだけれど……今考えても仕方が無いわ。
とにかく、保険が欲しい。もしもはどんな時にもあるから。

だとすると狙うは……『新海 天』ね。

フフフフ……

癒しの時間

夕食を済ませ、風呂も入り掃除も終わらせる。軽く部屋も掃除もついでにやってしまつて、後はもう寝てしまふだけ。

今日という一日の中で一番気を抜けるこの瞬間になると、疲れが溜まっていることもあり、眠くもなるし、休みたくなる。

といますか……思う存分休んでいるんですけど。

「つたく………なんでオレがこんな事を……」

耳の中をゴソゴソと掻き回すように竹の耳かきが優しく暴れ回る。最高に気持ちがいい……

耳かきつてこんなに気持ちよかつたのか……

「別に強制はしてないだろ……嫌なら止めてもいいってえ……」

「んだよ、その気の抜けた声は」

「そりゃ気も抜けるわあ……」

はい、そうです。

俺は今ゴーストに耳掃除をしてもらっています。いつもは綿棒をぶち込んでクルクルしてただけなんですけど、ネットでASMRと言うものを見つけてまして。

俺ならこれを買わなくても何時でもしてもらえるじゃんと思っただ次第です。

流石に……耳舐めは頼めませんでした。自分からお願ひするのはなんか、こう……気持ち悪く感じて。

「それで、希亜には全部伝えてよかったのか？」

「うん……太もも柔らかくて頭安定……」

「話聞けよ」

スパアンっ！ と頭を叩かれる。

………そこそこ痛かった。

「痛って……」

「ある程度の事情を知っているとはいえ、希亜もオレを警戒していたんだ、実際にオレたちが契約する場面を見てない以上はまずいんじゃないやねえの？」

「仮に俺を疑っていたとしても、わざわざゴーストの力を貰った事実を言った時点で俺とお前への疑心は無くなるだろ。バカ正直に全部伝えてるんだから」

騙すことが目的ならそもそも片鱗すらも見せない方が絶対に得だ。情報の共有って言うのが一番の信頼の証になつてるだろうし、俺がそのつもりだ。

(例のリズム)

「最後の仕上げだ、ほら、動くな」

「いやお前動くなつたつて——」

「ふう——……………」

「はあん……………」

だ、ダメだ！ 俺は耳が弱いらしい！ こんな耐えれな……

「気持ちよかったか？ 大将」

「お前天才……………マジ好きやわ……………」

こんなの逆に癖になる……………。さすが俺の分身だ、俺の知らない弱点まで知っていると
は。

「おーい、大将。逆向け逆。反対側もすつから」

「ん……………」

クルつとその場で身体ごと回転させて、ゴーストの方へと顔を向ける。

太もも気持ちいい……………

「ダメつ……………!? はあ……………もういいや」

ダメだな、こんなに真面目(?)な従者がいると完全にだらけてしまう。

「誰が従者だバカ」

しかもこいつ、別に不器用って訳じゃないし、察しもいいし、意外と気も利くし………最高ツスわ。

「無視かよ」

なんだかんだ文句を言いながら、ゴーストもゴリゴリと耳の中に耳かきをぶち込む。

毎日して欲しいなあ………

「つかよ、大将。九條には何も説明しないのか？ 《魔眼》の能力者のヒントについて」

「んー。向こうのチームは何よりも最優先で《魔眼》を探してる。下手にヒントを掴むと無茶しかねないだろ？ 《魔眼》所持者はかなり危険なんだ、あくまで俺たちが相手をしなくちゃいけない」

「………負けるつもりはねえけどよ、正直な話、向こうの奴らとも協力した方がいいんじゃないの？」

そうは言ってもねえ。新海は能力不明………というかユーズーでありながら無能力者だし、九條さんは戦闘向きじゃない。

「でも結局、その………なんだっけ？ 《アンブロシア》？ がなけりやオレたちもどうしようもねえじゃん」

「あの人形もアイツらに協力してるみてえだし、結局はどこかのタイミングで頼んなきゃいけないんじゃないの？」

「まあ……………そうだけど」

言われてみりやそうだな。《魔眼》のユーザーを見つけたとしても、《アンブロシア》がなけりや手の打ちようがない。

ゴーストの時は特別だっただけで……

「大将がああ、《イリス》って奴に狙われてるからこそその危険性はオレにも分かるよ。でも、そうも言つてられねえんじゃない？」

「うーん……………希亜の意見も聞いてみないと、あんまり俺が勝手な行動ばっかしてたらまた怒らせちゃう」

ついさつき怒らせたばかりだからな……

「……………大将もすっかり希亜の仲間なんだな。最初はあんなに否定してたのに、さつきは俺たちって言つてたぜ？」

「悪くないって思つたんだよ。確かに、裏切られるのは怖いけど……………ビビつてたらいつまで経つても変わらない。俺も九條さんを見習わなきゃって思つたんだ」

俺も真つ直ぐに生きるために。過去は変わらない。塗り替えられない。けれど未来は変えられる。

次、あんなことを経験してしまつたら、俺は立ち直れないかもだけど……………

なんて思つていたらデコをペチンつと叩かれた。痛いけど……………暖かい。

「余計な事を考えるなよ、オレたちはずっと一緒なんだろう？」

「ああ」

4月23日

天真爛漫、対面

……結局、どう行動するのが正解なんだろう。

さつきから何度も何度も同じ事を悩み続けている。大切だと認識したからこそ、みんなを危険な目に遭わせたくはない。けど、みんながいないと犯人を特定できない。

それに……俺の目的は、ゴーストの解放。ついでに《魔眼》の殺人阻止。

ゴーストの解放というのは、《白》の事だ。あの耳かき天国の後、《黒》が深刻そうに言っていた。

《白》は本当は助けて欲しいんじゃないか？ と。《黒》が俺の元へとやって来てからは、

いつもは半分程度の活動時間だったのが、そんな制限が無くなった。

だからこそ強く感じているのではないかと。ってことらしい。

その根拠は、元々は一人だったこと。どういう理屈かはわからないが、《黒》が前の契約者の所にいた時は、悲しさや苦しさ、負の感情から出来た《反発》の心が宿っていたらしい。

つまりは自分の契約者でありながら、その元を離れたいと願っていたのだ。

しかしあくまで《白》と《黒》は別でありながら同一存在。人格が別れてはしまっているが、同じゴースト。

だからこそ、あの時に感じていた心を《白》も持っているんじゃないか？ と。

でも、アイツはオリジナルに都合のいいように作られた存在。そもそもそんな考えになっっているのだろうか？

だからこそ反発心を抱いているのか？ 一人で考えても仕方がないのは十分にわかっちゃいるが……どうも落ち着けない。

……………気がつけばもう夜は明けていた。

「ガッコー、行かなきゃな」

……………

……………

…

今日はいつもよりかなり早めに家を出た。理由はもちろん夜に眠れなくて時間を
持て余していた事。

考え事を長くしていたせいか、どうも疲れていて上手く頭が回らない。いや……多分
こっちの理由は睡眠不足が原因だろう。

ポーツとしていて朝食を食べることすらも忘れてしまった。というわけで俺は今、駅
から近いコンビニの店内にいる。

本当はあのパン屋にもう一度向かおうと思っていたのだが、なんか途中で面倒になっ
てコンビニで妥協したのだ。

適当なおにぎりとシュークリームとたいやきを手に取ってレジで並んでいると、誰が
客が入り込んだのだろう。店の扉が自動で開く。

特に最初は気にしてなんかはいなかったが、入ってきた人が何かにぶつかったのか、
結構な大きい声で「あ痛っ!」と叫んでいた。

そんなちよつとマヌケな声が聞こえてきたらチラツと見たくなる。

するとそこには――

「なんだよう！　なんでこんな所にカゴの山があるのっ!？」

なんて言いながらコンビニに置かれているカゴに向かって怒りをぶつけている女の子の姿があった。

銀色に靡く髪、なかなか派手な髪型のあの子は、1度見たら忘れない。あれは……新海の妹、新海　天だ。

……………何やってんだ、あの子。

しかし不思議に思ったのは、あれだけ派手にガシャガシャと音を立てたにも関わらず、誰一人反応していない事。店員が彼女を心配する様子もなく、客も誰一人彼女を気にもしない。

「次のお客様どうぞー」

とりあえずは元氣そうだし……先に買い物済ませてから声をかけてみるか。知り合いなんだから挨拶くらいは……な。

なんて思いながら持っている商品を置いてレジ打ちが終わるのを待つ。その間はPai Paiのアプリを起動して、スマホの画面を見せつけるようにして会計を済ませようとする。

そして横目でちらりと妹さんの方を見てみると……………なんかそろりそろりと怪しい泥棒のようにレジに……………いや、俺の方へと歩んでいる気がする。

ハッキリと見えたわけじゃないが、多分……間違っではないと思う。

そしてとうとう妹さんは俺の真横にまで迫って来ており、チラツと顔色を伺ってきたり、こつちに向かつてピースしたり、目配せをしたりと、何やら訳の分からないことをしていた。

いや、無視してる俺も俺だけど周りの人はこの行動を見て何も思わないの？ 後ろに並んでいる人も何か言ったりしないの？ 目の前の店員もなんで何食わぬ顔でレジ打ちしてんの？

ピツとスマホをスキャンされ、独特のアプリ音が鳴り響いたあと、その不可解な奇行に耐えきれず、妹さんに声をかけた。

「あの……………何やってんの？」

袋に物を詰めてもらっている間に、とりあえずこの恥ずかしいことを止めさせなければと思ってしまった。

「え……………？ 何やってるとは……………？」

「いや、だから、さつきから横で何してんの？」

妹さんは一度自分の真反対を振り向いて後ろを確認したあと、再び俺の方を向いて何かに驚いていた。

「え？ あ……………え？ その……………、あたしの事、見えますか？」

「うん、バツチリ」

え、何言つてんのこの子。そんなに学園で虐められてたの？

「えっ、あ、え!!? なんで!!? 先輩もっ!!?」

「……………? どゆこと?」

「ちゃんと能力使ってるのに……………!!? なんで!!? にいにも直ぐにバレたし……………なんで!!?」

……………はっ!!? 今能力つったか!!? ちよちよちよちよい! マジか!!?

「ちよつ、ちよつと待って! 今能力つて——」

と、まず第一に疑問に思った事を素直に聞き出そうとしたら、タイミング悪くレジ打ちの店員から止められる。

「お買上げありがとうございます」

「あ、どうも」

その袋を受け取って、とりあえず妹さんと一緒に列から離れてみる。

おいおいマジかよ……………まさかのユーザーがもう一人いたったのか!!? しかもまたなんか厄介そうな能力っぽいし……………はあ……………。

とりあえず……………わざわざあんなことをしながらでも俺の元へと来たんだ、何か用事があるのかも。

「それで……何か用が？ 確か………新海————つて言ったら紛らわしいか。
ええつと………天ちゃん」

意外とかみ合う二人

会計を終わらせた後、コンビニの外の手すりのある場所で腰を下ろし、改めて挨拶をする。

「天ちゃん……でいいよね？　なんでまたこんな所に……」

「全然大丈夫です、うす」

……？　なんで急に体育会系になったんだ？

つか別にどこにいても本人の自由だからどうでもいいんだけどさ、問題はそこじゃない。

今なら……人はいないな。

「能力って言うってたよね？　さっきのアレがそういうこと？」

「そ……うですね、あつ、先輩がいるく挨拶しなきゃって思ってたんですけど、せつかくだからビックリさせようってことでして」

……なんでそんな考えになるんだよ。いや、確かにそんなことで怒ったりはしないけどさ。

それにしても、《驚かす》《誰も気が付かない》か……

「ビックリさせるって言ったって、俺は天ちゃんが店に入ってきた時から気づいてたぞ？ 入ってきた人が天ちゃんって理解するのは遅れたけど」

「それなんすよ！ あたし能力使って誰にもバレないようにしてたのに、なんか普通に声をかけられて、逆にあたしがビックリして」

いやいやいや……

「そんなに簡単に能力について暴露っていいの？ もうちよい警戒した方が……」

「ん？ なんで先輩を警戒しなくちゃいけないんですか？」

「え？ いや………え？ だってほら、もしかしたら犯人かもしれないし……。まだ

俺たちは会うの2回目だし」

「大丈夫つす！ にいにも先輩の事は疑ってないし」

……あ、そう。

なんか……あれだな、大丈夫かな向こうのチーム。もうちよつと警戒心を抱いた方がいいと思うが……

まあ俺が横から口出しすることじゃないか。

袋から朝飯を取りだしもぐもぐと口の中に入れながら、ポケットと色々考えたりする。

「朝からシユークリーム………すげえなこの人」

「まももみももつめはははひみんはほ甘いも のって 身体に 良いいんだぞ」

「いや何言ってるかわつかんねえよ………」

なんて、辛辣なツツコミを聞きながら、シユークリームを食べ続ける。

「(もぐもぐ……)」

「ええ……リスみたいに食べてる………どれだけデカいの買ったんだよ……」

「ぐくんと口の中のものを飲みこんだあと、改めて話を戻しながら、適当に道を歩く。

「それで……能力の件だけど」

「どんな能力かは気にはなるが………ぶっちゃけある程度の予測はつく。《魔眼》とも絡んでなさそうだし問題ないだろう。」

「あんまりちよこちよここと使わない方がいい、変なやつに目をつけられたりしたら面倒
だろ?」

「変なやつ……とは?」

「無差別にアーティファクトを欲しがったりする奴がいたりしたら危険な目に遭うかも
しれない。実際に人を殺した人がいるんだ、どんな奴がいても不思議じゃないだろ?」

事実俺は狙われているしな。姿も分からないような奴から。

恐らくは……妹さんの能力は自身を隠すような能力なんだろう。例えば………認識されなくなるみたいなの？　なんで俺と新海には効果が薄かったかはわからないが、個人差があると仮定すれば大分不安定な能力だ。

名付けるなら………《ミステイレクシオン》かなあ。それとも《インビジブル》？

「……………はい」

「だから、新海にも伝えておいてくれ、どんな奴がいてもおかしくないから警戒はしとけて」

そうやって袋の中からたいやきを取り出して、パクツと口に放り込む。

「そういえば……みゃーこ先輩が『香坂 春風』って人を調べてみようって言ってましたけど、なんでそんなことをするんです？」

「……………え？　天ちゃんも犯人探しに加わってるの？」

「そうですよ？　昨日あたしにみゃーこ先輩に、にいにの3人で話し合ってた」

おいおい……マジか。アイツら正気かよ……

あ、いや……でも、本当に妹さんが認識されにくくなる……要するに存在感操作が出るのなら、貴重な人材ではある、か。

「どしたんすか、あからさまにテンション下がりましたけど」

「いや……仲間をどんどん増やしてるなって思ってたさ」

「ん？ みゃーこ先輩言ってきましたよ？ 竹内先輩も協力してくれてる大切な仲間だーって」

おほ……随分と俺の株が上がってますね。ははっ。

「仲間ねえ……」

「だから、あたしたち正義の味方集団は4人パーティなんすよ！ 勇者あたしでしよ？

みゃーこ先輩賢者竹内先輩でしよ？ 竹内先輩パラティンにでしよ？ にそんで遊び人に」

「凄いなあ……上級職の塊の中に一番使えねえ奴いるじゃん」

なんてユニークな発想の持ち主だ。

「あんな奴は遊び人で上等っすよ」

「あつひやつひやつひやつ!!」

なんてわいわいとはしやぎながら、二人で適当に歩いてた。

妹さんは新海を待つために彼の通学路でわざわざ来るのを待っているらしく、今日も今日とて迎えに行くんだと。

せっかくの兄妹水いらず、余計なことはするまいと妹さんと別れを告げて、俺はいつ

も通りに一人で学園へと向かった。

とある日の休み時間

その日の休み時間、昨日から毎度の如く隙あらば俺のいる場所へとやってくる高峰をあしらっていると、新海から話があると言われ、屋上まで連れてこられていた。

昨日の今日だ、恐らくはあの件だろう。

俺だって逆の立場なら色々と質問するだろうしな。それでも、話せることと話せないことがあるのは事実だ。

それに、そろそろハッキリさせないと……とは思っていたしな。

「それで、わざわざこんな所まで連れてきて何の用だ？」

今朝買ってあったおにぎりをパクツと食べながら、俺たち以外に人のいない屋上の見通しのいいところに座る。

「というかそもそもとしてこの学園は屋上への侵入は禁止だ。それもわかった上で連れてきたんだろうが。」

「竹内ならわかってるだろ？ お前の依頼、『香坂 春風』さんについてだ」

「だろうな」

「ここはまず予想通り、だって向こうのチームには何も詳細は話してはなかったからな。」

「なぜその人を調べる必要があるんだ？ それは《魔眼》のユーザーを突き止める為に重要なのか？」

「……………」

「そうだな……俺の2つ目の能力のことについてはあまり言いたくない。複数の能力を所持していることで、人殺しを疑われるかもしれないからだ。」

「現在知る限りでは、『アンブロシア』はソフィ経由かイーリス経由でしか入手は不可、新海たちがイーリスの存在を知っているか否かは関わらずに、危険な霊薬を使用したというレッテルが貼られてしまう。そうなりや話は面倒だ。」

「となると、素直に『司令官』絡みの話をせざるを得ないが……こつちもこつちで面倒になりそう。結局は俺が手に入れた情報の全ては『ゴースト』の存在が大きい。彼女についての説明無しでは、まともな納得させることの出来る説得は不可能だろう。」

「つまりは嘘をつかなければいけないが……それがバレた時は俺への信頼はガタンと落ちる。下手に敵を作りたくないし、なにより俺なんかを信じてくれている九條さんを裏切りたくはない。」

「となると嘘である『真実』を伝えなきゃな。」

うーん……………

「《アガスティアの葉》って知ってるか？ 例のメビウスのなりきり掲示板、つまりはフアンサイトなんだが……………」

「ああ、それなら知ってる。俺たちもそのサイトを使って一応調べてはいるんだ」

だよな、確かあの時に九條さんがそんなことを言ってたから。

「だったら話は早い。その書き込みの中で怪しそうなやつがいなかったか？ ほら、能力の使い方について相談しているかのような書き込みをしている人が」

「いた、間違いなくいた。確か名前は……………『エデンの女王』だったよな？」

「そ。そして最近噂になってる事を知らないか？ 一人の女の子が軍隊のように男を引き連れて歩いてる噂」

「あ……………、今朝も天と歩いている時に見かけた。って、もしかして二人が繋がってるって言いたいのか？」

「そういう可能性が高いってだけ。口調も似てるし、たまに性格が変わったようになるし……………充分怪しいだろ？」

実際俺は目にしてるからな、明らかに豹変っぷりを。

「いや、そりゃ確かに怪しいと言われれば怪しいけど……………。それだけで特定って言張ったのか？」

「今度時間がある時に掲示板の書き込みをよく見てみるよ、ほとんどがガチのなりきり野郎ばかりだろうけど、時々マジっぽい言葉が残されてる。そんでもってソイツらは理想郷がどうのこうのって騒いでいるんだ」

「……………なるほど、もしかしたら既にグループを作っていて、本物のユーザーが紛れ込んでいる。もしくは本物のみで構成された集団の可能性もあるわけだ」

「ああ。下手に手出しは出来ないが、事前情報があることないのでは天地の差だ。これからの動きが大きく変わる」

もしも仲間を作られていた時が面倒なんだよな。

うーん……………やっぱりゴーストの意見が真っ当かな。

「いずれにしろ警戒は必要な相手だ、十分気をつけてくれ」

……………にしても眠い。やっぱり朝のアレは結構響くな……………。睡眠って大事だ。

本当は今すぐにでも寝てしまいたいのが、今寝たら恐らくはこれ以上授業を受けられなくなるだろう。寝すぎて。

しかも放課後は希亜と会わなきゃいけないし……………今日はハードだな。

なんて考えていると、新海が隣に座ってくる。

「そっういえば妹が世話になったみたいだな」

「世話になったっつーか、朝コンビニで会っただけだ。てか天ちゃんもユーザーだった

んだな」

「ああ、この間それが発覚してさ、なんか流れて協力してくれる事にはなったんだ」

「存在感操作、中々便利良さそうだ」

余計に搜索というか……調査が得意そうな能力だ。隠密行動には不可欠な能力だろうし、奇襲、強襲にも扱えそう。それに逃走時や下手をすれば戦闘中にも使える能力だ。まあ今のところ俺が知ってるアーティファクトの能力は全て弱点が存在している。おそらく何かしらの弱点があるだろうが……それ次第か。

と、その時——

キーン——コーン——

とチャイムが学園中に鳴り響く。休憩時間がもうすぐ終わるようだ。

「とまあ、とにかく香坂さんの事は任せる。俺の方でも色々調べては見るけど……ぶつちやけ新海たちが持ってきてくれる結果に縋ってるような状態だ、女の子同士の方が相手も油断するだろうし………なんとかサポートしてやってくれ」

「サポートって言うてもなあ」

俺たちはその場から立ち上がり、教室に向かって歩き出す。

「やれることはやるよ。上手く色々と聞いてみる」
「頼んだ。あ、あと、天ちゃんにもよろしくな」

正体不明の人物、そして猫

(視点切り替え)

『こんにちは、ユーザーさん。突然で悪いのだけれどあなたにはある人を誘拐して欲しいの』

突然そんなメールが送られてきた。宛先不明の犯罪メール。

最初はもちろん無視をした。何かの犯罪に巻き込まれるかもしれないと危惧したし、そんなことは絶対に協力したくはなかったから。

けれどそれは何度も続いた。

『どうするか選ぶのは自由、あなたの行動と態度次第じゃあ……………一人、また一人と次々に誰かが眠ることになるわ』

「——ッ！」

この一文だけで十分だった。たったこれだけで自分はもう動けなくなってしまう事を見透かされていたのだろう。だからこそ、こんな形で連絡がやってきた。

『眠る』これが単に本当に眠るだけじゃない事は理解出来た。これは……人を殺してしまおうという脅迫。

それを考えるだけで震えが止まらない。怖くて怖くて、怖くて怖くて怖くて、何も出来ない。

そして鳴り続けるスマホ。

『もちろん、周りだけでもなくあなた自身も一緒に眠りたくないのなら……黙って指示を聞きなさい』

きつと嘘だ、冗談やイタズラだ。逃げるように何度もそう思う。いや……そう『願う』。

そんな事ないのに。だって友達と言える人は誰一人いないから。そもそもとしてこんなイタズラをしてくれる相手がない。

そして人体石化事件、既に目にして、実感もできているこの異能力。確かに……この能力を使えば簡単にこの指示通りのシナリオに出来ると思う。

けれどそれは………犯罪の肩を担う事になる。

でも、やらなきゃ誰かが殺される。自分も殺される。

石にされちゃうのかな……。

お父さんもお母さんも、私も……

それだけじゃなくて、直接関係の無い人も……

そんなの……………

そんなの……………

私は……………どうしたら……………ッ！

(視点切り替え)

「くわあ……………」

全ての授業が終わり、大きな欠伸を漏らしながら廊下を歩く。

さつさと帰って眠りたいところではあるが……………今日はそんなことするわけにはいかない。さつさとあの公園に行って打ち合わせをしておこう。

適当にトイレなどの校内でできる用事を済ませ、てくてくと歩いていると、窓の外、そ

の先の中庭で複数の人影が見えた。

あれは……？

「おお……、仕事の早いこつてえ」

女の子三人が何かを話している。もちろんこんな長距離で言葉が聞こえるほど耳は良くないから何言ってるかは聞こえてはこないが、雰囲気でなんとなく察するものもある。

こういう行動力の高さはマジで信頼出来るな。

「俺は俺の出来ることをするか」

と思つて何気なしに再び廊下を歩き出そうとした瞬間、ある違和感を感じた。

中庭から視線を戻そうとする時、普通ならありえないようなシルエツトが見えたよう
な……？

その違和感を確認するために再び窓の外に顔を向けると――

誰かがもう一つの校舎の屋上で何かを見下ろしている。

危なっかしいフェンスの上に堂々と仁王立ちで突っ立っており、ずっと誰かを見て

る。

そしてその視線は徐々に上へと上がっていき……………
俺と目が合った。

「——なっ！」

うつすらと見える紋章、どんな形かまでは理解できないが、青く光っている身体だけは認識できた。

そして俺とソイツが視線を交わした直後……………

かなり遠い距離の俺の耳にも届くぐらいの大音量でバチツバチツと電気でも漏電しているかのような音が鳴り響いた。

周りの生徒達もその『音』に関して疑問を抱いているようだが……………あの存在には気がついていないようだ。

間違いない、アレは……………

「ユーズー……………」

なんだか嫌な予感がする。

……………とにかく希亜との合流を急ごう。

ほんの少しの早歩きで廊下を歩く。なんとも言えないこの胸の焦りを少しでも和らげたくて、例えようのないこの危機感を消したくて、外へと繋がる扉の取手を掴むと

………
「——ッ!？」

弱い静電気が俺の右手を軽く弾いた。

………

………

………

そして公園のベンチに腰をかけ、希亜がやって来るのを待つ。
なんだろう………さつきから胸のざわめきが止まらない。あの音、あの感覚、そしてあの速度。

もし俺の予想通りで、アイツが敵だとしたら………ヤバい。下手をすれば全員為す術なく殺される可能性がある。

ただ、今は大丈夫なはず。まだ石化事件から日数がそんなに経っていない事から、連続して殺人を行うことはしないだろう。殺せば殺すほど自分の首を絞めていくんだ、余程の馬鹿でない限りは簡単にはそんなことしないはず。

けれど、そう言つてられるのも時間の問題だ。やっぱりここはどれだけ早くアイツらが情報を引き出せるかによつて変わる。

焦り。

苛立ち。

恐怖。

様々な感情が俺の心を渦巻く中、あることに気がついた。

考え事に夢中で今の今まで気が付かなかつたが、何故か俺の周りには猫たちが沢山いた。

少し大きめの猫からくりくりした瞳の子猫まで。

野良だろうか？ にしても警戒心が無さすぎないか？ 普通はこんなに擦り寄つてきたりはしないと思うんだが………

「こやー」

足元やベンチの横などにおよそ7匹ほど群がってくるその子猫達は、「僕で癒されてね」と言わんばかりにスリスリと頬や身体を擦り合わせてくる。

そして偶然目が合った子猫を抱き上げて、顔を真正面から見ていると……………

「こゃー」

と鳴きながら思いつきり俺の顔に子猫がダイブしてきた。

特になんの抵抗もせず、群がる猫たちに自由を与える。身体が動かすのが面倒ということもあるが、実際戸惑って何も動けなかったのだ。

そしてそんな子猫を顔から引つ張りとりと……………そのタイミングで近くから何か落ちる音が聞こえてきた。

「——ッ!？」

誰かが驚いている？

まあこんなところを目撃したら誰でも驚きはするだろうけど。

なんてことを思いながら音が聞こえてきた方を見てみると——

「ね、ね……………！　ね……………ちゃん……………ッ！」

鞆を落としてしまうほどに絶句？　してた希亜がそこにいた。

猫様、気まぐれ故に

なんか野良猫たちとじゃれあっていると、その光景に驚いたのか、希亜がブーツとこちらを見続けてくる。

鞆まで落として。

「にゃー?」

とりあえず手元にいる子猫の前足を優しく掴んで、手を振る動作をするようにクイクイツと動かす。ついでに猫の泣き真似をしながら。

ぷにぷにの肉球が柔らかい。

しかし、10秒ほど経過しても一向にその場から動かない希亜。まるで緊張でもしているかのように全身を硬直させている。

「いや……、ずつとそこで固まられても困るんだけど……」

「ね、ね、ね………猫………様ツ!」

いや猫様ってなんだよ、さっきはちゃん付けだっただろ。

「だから、とりあえずこっちまで来てくれよ。まともに会話すら出来ねえ」

「……………」

バグってるバグってる。動きがおかしくなってる。

……しようがない。このままじゃ埒が明かないし、可愛かったけどこの猫たちには離れてもらうしかないか。

「ほら、お姉ちゃんが座れなくて困ってるから、君たちはどっかに行きなさい。適当にその辺歩いてりや色んな人が——」

「そのままでもいいッ！」

あ、やっと反応した。

「そのままでもいいつつあって、座れないからそんなところに立ちつばなしなんだろう？」

「だったらもうしようがねえじゃん」

「あつ、あつ……ああ……」

抱き上げていた猫たちを地面に下ろし、どこか別の場所へと向かわせるように優しく手を仰ぐ、すると各々が「にゃあ」と返事でもするかのようにちりじりになってバラけてしまった。

それと同時に聞こえてくる、明らかに残念そうな声を出す希亜。

「……………」

どうしたのかを聞くまでもなく、その落胆っぷりは半端ない。もしかしたら猫と触れ

合いたかったのかも？

なんて考えていると、いつの間にか鞆を拾っていた希亜が、とぼとぼとスローペースで俺がいるベンチに向かって歩き出し、さっきまで猫がうようよいたベンチの場所に腰を下ろした。

「私も触らせて欲しかった……」

そして追撃の一言。さすがの俺もこれを聞いたら確信が変わる。

希亜、猫好きなんだ……と。

「……悪いことしたな、まさかそんなに猫が好きだとは思わなかった」

「べ、別に私は——」

否定をするのかと思えば、その途中で言葉が止まる。どうやら表面上とはいえ大好きな猫を否定するのも嫌なようだ。

自分の中でそんな葛藤が生まれるくらいに好きだったのか。

「別に隠さなくてもいいだろ、好きなものを好きだと言って悪い事ねえよ」

「私は……」

とそこが気がついた。あのお友達に置いていかれたのか、ベンチの影に1匹だけ子猫が残っていたことに。

ソイツは毛繕いをしていたのだろう、身体を丸めてのんびりとしていたのだが、俺に

気がつくとぴよんぴよんと軽々しくベンチを登ってきて、俺の膝上に陣取った。

「おい希亜、こいつどうしたらいい」

「また猫様を……!?!? 貴方……一体……!?!?」

なんかよく分からない驚き方をしている彼女を横目に、堂々と俺の膝に君臨している子猫を撫でる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

俺はなんて声をかければいいんだろう。ただなんとなく撫でただけなんだが、希亜にその光景を羨ましそうに目を輝かせて見られる。

居心地が悪いぞお?

「あの……よかつたら撫でてみます……？」

「——ッ!？」

俺の一言に大袈裟とも思える反応を見せる希亜。やっぱりそうなんじゃん。もう触りたくて触りたくてうずうずしてたんだろコイツ。

「で、でもっ、私如きが……？」

え？ え？ どゆこと？ 如き？ なんでそんなに自分を下げなの!？」

「ふ、普通に撫でてでもいいんじゃないかね？」

「でも……」

なんてずっと言葉では遠慮して入るが、その身体はゆっくりと俺の方へと近づいていつてる。

なんだよお前、面白すぎかよ。

そしてついに密着、猫からしたら急に足場が増えて驚いたことだろう。

しかし、せつかく並んだ四本の足の内、俺の二本から動こうとしない。

希亜の身体が若干ぶるぶると震えている。

おい、子猫さん？ 空気を読んでくれませんか？ 俺なんかよりも半端なく可愛がり

りたさそうな女の子が真横にいますよ？ そっちの相手をしてやってくれませんか？

ここまでやって君が寄り添わなかったら、彼女メンタル壊れますよ？ だって自分を卑下するくらいに君の事が好きなんだよ？ 相手してあげてよ。

なんて俺の願いとは裏腹に、猫すけはその場から動こうとしない。

心做しか希亜の震えが激しくなってる気がする。

このままでは埒が明かれないと思い、子猫を抱えて無理やり希亜の膝の上に移動させる。

もちろん脅かさないように優しくゆつくりと。

「……………、……………、……………ッ！」

隣の女の子はもう興奮しすぎておかしくなりかけてる。さつきから言葉を発しない。そして俺に動かされ、とうとう希亜の膝の上に子猫が降臨した。

が、すぐさまびよんつと俺の膝の上に飛び乗ってしまった。

……………流石にこれはフォローしなきゃまずい……………よな。

俺個人としては物凄く面白いんだけど、本人からしたらたまたまのものじゃないだろう。

恐る恐る希亜の様子を確認してみると……………

ちよつとだけ目に潤いが宿っていた。

自由奔放にも困ったもんだ

「猫……様……」

自由気ままなこの子猫は、どうやら隣の女の子のことなんかどうでもいいらしい。なんと酷いやつだ。

ほら見ろよ、この今にも泣き出しそうな希亜の顔を。いくらなんでも可哀想だぜ。

「俺みたいな男の膝よりも希亜の膝の方がきつと気持ちいいぞ……」

なんて誤魔化しながら、もう一度子猫を抱き上げて再度、隣の女の子の膝の上にちよこんと乗せるが……

有無を言わずにすぐさま俺の膝上に戻ってくる。

「うう……」

寂しそうな声が聞こえてきた。やめてくれ、そんな声を漏らさないでくれ。なんか泣きそうになる。

もう俺は顔を覗き見ることすら出来ない。

「……………」

今度は無言でスッと子猫を移動させる。するとまた俺の膝上に戻ってくる。

そしたら負けじと俺もムキになり、何度も何度も移動させ、子猫は何度も何度も反復横跳び。

絶対にあの子の膝上にはいかんぞ！ という子猫の強い意志を感じた。

「蓮太……それ以上の追撃は止めてほしい……」

「あ、そんなつもりじゃなかったんだが……」

どうやら精神の限界が来てしまったようだ。

まあ……ここまであからさまに避けられたら誰でも心にくるものがあるだろう。

「つかなんで俺ばっかり……」

なんてボヤいていると、何かを見つけたのか、子猫は俺の膝上からもびよんつと飛び降りて、全速力で茂みの方へと走っていった。

アイツへんな爆弾だけ残して去りやがった。

「ね……」

「き、今日はたまたま虫の居所が悪かっただけさ……また日をあらためりや触れるって」
なんでこんなフオローしなきやいけないんだよ。いや、ちよつと可哀想って思ったのは事実だけどさ。てかあの猫のせいだろ、もう二度と来んなよ。

煽るだけならマジで来ないでほしいッス。

「蓮太と私の違いは………一体何……？」

「え……？ あー………」

それはつまりなんであんなに俺に偏る形で猫が寄ってきたのか、って事だよな？

別に変なことはしてないし、変わったこともない。今はお互いに似たような制服を着ているし、持っているものも別に………

「匂いじゃね？」

それくらいしか思いつかなかった。つか本心じゃあ匂いでもないような気がする。

「貴方、デリカシーに欠けているわね。友人がいない理由も納得がいく」

「……いや、悪かったよ。確かに女の子に向かって言う台詞じゃなかったな、謝る」

……一つだけツツコミを入れたい気持ちを物凄く抑えて、頑張って言葉を飲み込む。ていうか心の中ではもう言ってしまった。希亜は友達いるのかよつと。

「でも………全くの無関係では、ないかも……？」

「いや関係無いと思うぞ？ あんなの猫の気分だろ」

「……………」

と俺との会話をそつちのけで何か考え事をする希亜。

ちよ、待つて。全然本題に入れないんだけど。アーティファクトの能力について色々話をしたいのに全く触れられないんですけど。

それに不気味なユーザーを見かけたりもしたからその報告もしたいんだけど。やっぱあの猫のせいだ！ アイツが残ってたから俺たちの目的が一向に済ませられないんだ！

クソッ！ 絶対撫でてやんねえ！ 次顔出したら舌出して馬鹿にしてやる！

「明日は……………」

なんか横でブツブツ言ってるけど、もう知らんからな！ 絶対あの猫たちは撫でてやんねえ！

大方、また俺に誘き寄せてもらおうって魂胆だろうけどな！ そんなもん知るか！ 「なあ、希亜。それで例の件なんだが——」

一応聞かれたらまずいようなワードは避けておかないとな。前のようにどこでもこども《能力》とか《ユーザー》とか言ったらダメな気がするから。

「ええ、わかってる。今私が何をすべきかも、その手段も」

「え？」

え？ ん？ ……あ、いや確かに事前の連絡でこういう話をしようって伝えてはいるが……………どういうこと？ 手段？

ま、まあ、なんか話を上手く持っていけそうだし、それはそれでいいか。

「ならよかった、それで——」

「蓮太の家に行きましよう」

「そうそう、蓮太の家に——はあっ!？」

「んでだよ!？」 全然意味わかんねえ!？」 なんで俺の家にわざわざ移動しなくちゃ
………

あ、いや、そうか。外だと能力の話をしづらいからか。わざわざ言葉を伏せて話すのも余計な誤解を生む可能性があるし、何よりも面倒だ。

それに希亜とは初めて会った時は駅前だった。もしかしたら電車通学でここからだ
と時間がかかるのかもしれないし………男を部屋に上げるのには抵抗があるだろう。
となると……最適解は俺の家になるのか。

よかった、ちゃんと今回俺たちが待ち合わせした目的をしつかりと覚えててくれた。
「じゃあとりあえず移動するか、こっからならそこそこ近いし」

とそんなこんなで重い腰を上げて、歩いて移動することにした。

二人で道を歩きながら、ふと今のこの状況を思う。なんかアーティファクトがばらま
かれてからは俺の生活って大きく変わったなあ……と。

連日で俺の家には客人が来るようになったし、友達も仲間もできた。

そしてなにより。

俺が人を信じるようになった。

もちろんそれは自覚できるような事じゃないのは分かっている。でも、全く他人を気にもしてなかったのに、ここまで変わるとは思わなかった。

地震が起きてから今日で6日。たった6日で人生は大きく変わる。

世界は見方一つでどこまでも明るくなる。

もつともつと明るくする為に、戦わなくちゃいけない。《魔眼》と、《イーリス》と。

もう二度と、失わない為に。

作戦会議

そういうえば、前にも希亜を俺の家に誘ったことがあったな。俺から言い出した訳でもないけどさ。

あの時は……変なやつらに襲われて結局解散することにしたのか。アイツら………今どこで何してるんだろ。すっかり忘れてた。

って……何か引つかかる。俺、何か大事なことを見落としてないか？

なんだろう、この感覚。

俺は何か大きなミスをしているような………？

なんて疑問を抱きながら、歩き慣れた道を行き、自分の家に辿り着く。

「……」が俺の家、とりあえず適当にくつろいでいいから」

ガチャリと鍵を開けて中へ入る。いつもの流れでカバンを定位置に置き、とりあえず客人を迎えるための準備を始める。

俺に遅れて希亜の声が聞こえてきたが………多分「お邪魔します」とでも言ったのだろう。

「奥の部屋で待ってて」

「……………わかったわ」

適当なコップを出して、飲み物の準備を済ませ、それを運ぶ。

茶菓子などは生憎持ち合わせていないが……………まあ大した問題じゃないだろう。特別なにかをする訳でもないし、特殊な関係性でもない。

そして希亜を待たせている一番大きな部屋に入ろうとすると……………《何か》が影となり、大きな山のように陣取っている。

そう、もっこりとした三角形のシルエツトが見えるのだ。

何やってんだアイツ。などと思いつつながらガチャリと扉を開けると――

「……………」

「……………」

言葉がなかなか出なかった。

なんて言ったらいいのだろう……………上手くこの気持ちを例えることが出来そうにない。

俺自身がこんな事を経験するのが初めてだということもあり、平然を保ってはいるが、文字通り言葉を失っていた。

「何やってんの……」

「蓮太を待っていた」

「いや……そうじゃなくて」

とりあえずテーブルに飲み物を置いて、その場に座る。

「なんで俺の布団を被さってるの」

さっきから俺が微妙な気持ちになった最大の原因、それにやっとなツツコミを入れることが出来た。

そう、希亜は俺の布団を頭から覆いかぶさっていたのだ。まるで弁慶にでもなっているかのようだ。

あれって髪の毛のセットとか崩れたりしちやわわないのだろうか？

「気にしないで」

「気になるだろ……もしかして《匂い》の事、マジで捉えてる？」

何真顔で答えてんだよ。明らかな異様の光景をさも当然かのようにサラツと流すなよ。

「これで猫様とお近づきになれるなら……」

「だからなれねえって」

とりあえずグビっと一口だけ飲み物を飲んで、話を切り替える。

まあそうしたいのなら別に止める理由はないから。これはこれ、それはそれって割り切らないとこれ以上話が進まない気がしたからだ。

「まあいい、とりあえずおさらいからだ。一昨日の夜の出来事、それは伝えたよな？」

「ええ、蓮太が『一人』で危険な人物と接触するため為に神社へと向かった」

……コイツまだ根に持つてるな。

「だから悪かったって……。その一連の流れで、俺はもう一つの能力を手にかけることが出来た、それが――」

あの時のように能力を使ってみる。

自分の魂から引つ張り出すようなあの感覚で………

「――おう」

「幻体の能力だ」

実際に目の前で能力を使わないと言葉だけじゃあな。信じるのは難しいかもしれない。
い。

「つか大将、オレを呼ぶのはいいんだけどよ」

「あー、待て、言いたいことは分かる。だがあえてスルーしてやってくれ」

「ま、アンタがいいなら別にどうでもいいけど」

きつとこの弁慶のことだろう。そりゃそうだ、初見じゃないにしてもアレはどうしても一言言いたくはなる。

「どうやら本当に複数の能力を扱えるようになったようね」

「まあな」

と話しているうちに、ゴーストもちよこんとテーブルを囲うように座る。

流石に出させておいて一人だけ飲み物がないのはおかしいと思い、自分のコップをゴーストに渡して、続きを話す。

「それで、肝心の情報源の『香坂春風』さんには九條さん率いるあの三人組に調査を依頼してもらってる。そしてここからが希亜に伝えていない事だ」

未だに布団を取らない希亜と、何を言わんとしているかがわかっているゴーストは、二人して一応話の切り出しを待ってってくれる。

渡したジュースを飲みながら。

「今日、ウチの学園で新たなユーザーを見つけた。紋章が浮かんでいたから間違いないと思う」

「どういう能力だったの」

「それが……俺の憶測でしかないんだが、多分《雷》じゃないかと考えてる」

あの時の音。あれは間違いなく電気に関する音だった。そしてその電気を1箇所
に固めるように放出すると、電気は変化し雷となる。

「もちろん《雷》とは言っても、どれほどの威力が出るのか、範囲はどれくらいなのか、
制限はあるのかなんて事はわからないんだけどさ」

《雷》……………厄介ね」

「厄介どころの話じゃねえよ、下手すればオレたちじゃあ太刀打ちできないかもしれ
ねえ」

「ゴースト……………」

太刀打ち出来ない……………か。確かにそうだ。

「あの時に大将が感じ取った《静電気》、あれは間違いなく《幻影系》の能力だ」

《幻影系》？　ってどういう事だ？」

「前に《炎》の能力者と対峙しただろ？　アイツの炎も幻影系だ。違和感ぐらいは大将も
感じたはずだ」

あの時ついていやあ……………確か不可思議な炎だったな。燃え盛っていたにもかかわ
らず、焼け跡も何も無かった。

火力も全然無かったしな。

だからこそあの業火の中に突っ込むことができたんだが。

「ああ……確かにおかしな炎だった」

「そこに実体が無いから、『燃えた』って事実が残らなかったんだよ。前に大将に槍をぶつ刺しただろ？ あれと同じようなもんだ」

「確かに……あの時に蓮太は出血すらしていなかった。私たちを助けてくれた時も『痛み』は共有しなかったわね」

あの精神を攻撃する槍か！ 確かにそうだった！

なるほどな……………

「あの『雷』は同じ性質だった。つまりは精神を攻撃する類のものだ」

「なら俺の能力で『反射』できそうだな」

あの炎は簡単に反射することが出来たんだ、あの速度にさえ気をつければ何とかなるんじゃないだろうか。

「そんな簡単に対処ができるのなら、苦労はないと思うけれど」

「ですよねえ……………」

普通に考えて無理だよな。人間の反応速度を明らかに上回ってるし。

でも何かしらの対処は必須……………か。

……………

……………

「とりあえずちよつと席を外す、すぐ戻ってくるから」

考えてると少し催してきた。ここは一旦トイレに向かおう。

「おう」

スつとその場を立ち上がり、部屋を出ようとしたその時、身体がガンつとダンスにぶつかつた拍子で物が数個落ちてしまう。

「何やってんだよ……つたく」

「悪い」

ゴーストから言われる文句を流しながら、それらを拾おうとすると、あっち行けと言わんばかりに手をブンブンと奥へと振られる。

「いいからさっさと行ってこいよ、拾つといてやるから」

「そうか？ 本当ゴメンな」

(視点切り替え)

「……つたく、どんくせエ奴だぜ」

ひよいひよいと物を拾っていく中で、ついポロツと愚痴が零れてしまう。ほんつと、アイツは一人にはできねえ。

なんて心の中でブツブツと文句を言いながら手を動かしていると、不意に視界外からやけに綺麗な手が伸びてきた。

「いつもこうなの？」

わざわざ拾うのを手伝ってくれたのか、あの弁慶姿を解いてまで。

「いつもってわけじゃねえけど……まあ目は中々離せねえな。………あんがとよ拾ってくれて」

無駄に飾るように置いていた香水とかを元に戻していく。

アイツこんなもの使わねえだろ、なんで持ってたよ。

トントンと柵に物を並べていると、その作業の中で希亜が物珍しそうにあるものに手をさし伸ばした。

それは――

「……………この写真に写ってる子、蓮太に似てる」

昨日も蓮太が見ていたあの写真。オレの知らない父親と母親と兄貴の写真。

そこに蓮太の姿は無い。

「アイツには兄貴がいたんだ。そこに写ってるのは大将の兄ちゃんだな」

「いた。というのはい？」

「……………大将には秘密にしてくれよ？」

本当はこんな事を勝手に言うのはダメなんだと思う。本人も忘れたいと願っているかもしれないこの出来事を思い出させるかもしれない。

それに誰にも言いたくない事かもしれないし、わざわざ人に言うべきことでは無いかもしれない。

でも……………オレは……………オレは……………

「数年前に……………死んじまったんだ」

「……………え？」

心の距離

深い、深い傷。

あんなことがあったのに、今はあの蓮太が《仲間》を作ろうとしている。

蔑まれ続け、誰よりも人を嫌い、誰よりも人を疑い、そして……誰よりも人を愛したあの蓮太が。

「それが……蓮太の過去……」

「だからなのかもな、こんな写真をいつまでも大事にしてるのは」

蓮太にとつちや、何よりも捨てたいはずだ。大嫌いな人と大好きな人が写るこの写真を。

俺の知らない、実親が写っているこの写真を。

「アイツは愛情を知らない。いや……もしかしたら薄々と感じている事はあるかもしれないけど、少なくともその相手はもういない」

運命のしがらみに囚われ、歩んできた道は過酷。

産まれたことにすら強く恨んだりしたオレの創造主サマは、今前を向いている。

誰かと、誰かのおかげで。

「……………そう」

「だから……………なんつーかよ、できればアイツとは……………あー……………その、仲良くしてほしいんだ」

「……………」

「オレじゃあ、それはいつか出来なくなるから。いつか消えるその時がきたら……………」
オレは蓮太を支えれない」

能力で創られたオレは、必ず別れなきやいけねえから。

「これは、オレの気持ちでもあつて、アイツの気持ちでもあるんだが……………もう二度と、失いたくないんだ」

オレにとつても、蓮太は色々な初めてを覚えてくれた人。

だから、命にかえても守りたい。

「失った者は戻らない。過ぎ去った過去には戻れない。だからこそ乗り越えなくちゃいけないんだと思う。失った悲しみと今まで貰えた幸せを糧にして、前に進まなきやいけないんだ」

「オレには《経験》がないけど、《心》はわかつてるつもりだ。だから……………よかつたら、アイツの支えになってほしい」

それからはほんの少しの無言。

たった数秒の間だが、やけに重く長く感じた。

一人だけ、ただの一人だけでいい。蓮太がオレにしてくれたように、本当の意味での味方がいてくれりゃあそれで……

「貴女に言われなくても、私は仲間を見捨てない」

……。

よかった。

「そっか、そりゃ悪かったな」

そう返事を返した時、蓮太が出ていった方のドアががちやりと開く。

「悪い悪い………つてなんで二人共立ってるんだ？」

「希亜が手伝ってくれてた」

「ちゃんとお礼言ったのか？ お前はじやじや馬娘だからなあ」

「いつからオレはテメエの娘になったんだよ、ぶっ飛ばすぞ」

………

………

……

てな流れでアイツが戻ってきた後はまた開かれる作戦会議。

まあそれは名ばかりで結局は向こうのチームの情報次第でしか動けないという結論にしかならなかった。つまりただのだからに近い。

それでも十分に価値はある。

蓮太はあの二人と話す時は本当に楽しそうだから。見てることちまで……いや、なんもねえな。

まあ困るのはアイツ、オレと話す時もあんな感じなんだよな……自分自身の幻体って事を忘れてねえか？

つか普通自分の分身に「可愛い」とか言うかよ。バカなんじゃねーの。

そういうことは普通、希亜や九條、天や香坂に言うだろ。なんでオレだけなんだよ。

しかもタチが悪いのはあれが冗談でもなんでもないってことだ。余計に腹が立つぜ……

しかもエロいし。散々人には興味ありませーんとか言つといて女相手にはこれだよ。興味ありありじゃねえか。九條と話してた時も頭の中は胸のことばかりだったし。

正義の反対、もう一つの正義

《視点切り替え》

「蓮太、私は貴方に謝らないといけないことがある」

俺と二人で色々と話していく中で、深刻そうな声で希亜がそう言った。

真剣にこれからの動きについても相談したし、くだらないような話もした。けどその時にも何かを気にするような表情をした。

さつきからずっと希亜が気にしてること……一体なんだろう。

ちなみにゴーストは「もう俺に用事はないだろ？」と言ってきたので、能力を解除した。

「謝らなくちゃいけない……こと？」

「ええ。そうよ」

一体何の事なんだ——

「蓮太のお兄さんについて」

「——ッ!？」

今……なんて……!?

なんで希亜がそれを知ってるんだ?

いや待て、その事実を知る人は身近には全く居ない。九條さんと希亜が親しく話しているとは思えないし、勝手にその話をする人だとは考えられない。

となると……

話したのは《俺自身》か。

「……………アイツ」

「ごめんなさい。きつと、話したくないことだったと思うけど……………一言だけ、謝っておきたかった」

……。

「いいさ、別に」

きつとアイツなりの何か考えがあつて喋つたんだろ。アイツも身勝手にこの事を話すような奴じゃないってことはわかつてる。

どんな考えなのかはわからないけど、逆に考えりやそれだけ希亜を信用してたつてことだ。

「全部……知ってるのか?」

とりあえず会話を途切れさせない為に繋げた言葉。希亜はそんな言葉にも真剣に答

えてくれた。

ゆつくりと首を縦に振って。

「おそらく」

「そっか」

もう、ダメかな。

一緒には居られないかな。

「幻滅したか？」

「そんな事しない。それに……助けられなかったのは私も同じだから」
助けられなかった。助けられなかった……か。

違う。助ける力が俺にはなかったんだ。助けられるほどの術を知らなかった。もつと、もつと……最善の選択はあったはずだ。

見捨てたのと変わらないさ。見殺しにしたのと変わらないさ。

殺したのと変わらないさ。

「俺は……ルールが嫌いだ」

「……」

「法律が嫌いだ。決まりが嫌いだ。大義名分を振りかざすことも嫌いだ」

「ええ」

「ルールを守る人間に……涼ニイは殺された。もちろん決まり事を守ることそのものは正しいんだ、間違つてはいない。でも……あの時にルールを破つてでも治療薬を使つてくれれば、涼ニイは生きてたかもしれない……ッ！」

あの場所へと駆けつけることが出来たら助けられたのかもしれない。

なんで……なんで一般市民おれたちが深く関わつちやいけないんだ。

責任と判断を迫られた時に、誰しもが我が身を守つた。

あの場の全員が保身に走つた。

だからこそ嫌いだった。憎かった。怒つた。

そんな奴らを頼らなきやいけなかつた自分を。それほどまでに無力だつた自身を。でも誰も近寄りすらしなかつた。今でも深く思い出せる。大嫌いだ感染症なんて。

……

ダメだ、止めなきや。

女の子の前で弱いところは見せられない。

わざわざ人がいる時にこんな気持ちになるべきじゃない。

同情をかうな、心を強くもて。頼るべきは人じゃない。自分の強さだ。

あの時と同じさ、自分が辛くなつた時、どうしようもなくなつた時、人に頼つたから

こそ大切なものを失った。

もう二度と同じ過ちを繰り返すものか。

そう、そう………わかつてはいるんだが。

辛いものは辛い。

「嫌つても仕方の無いことなんてのはわかつてる。今更悔やんだところで何も変わらな

いことも、恨むべき対象が間違っていることも」

でも、何かのせいにしないと自分を保てない。

「そう言つて、今まで自分を責めてきたのね」

「しようがないじゃないか。誰も悪くないんだから」

顔を上に向ける。

やや明るい光がこの部屋中を照らしていて少し眩しい。

「蓮太……貴方は何度、そう言つて自分を責めてきたの。貴方は何度、自分に罪を被せてきたの。貴方は何度………そう言つて命を絶とうとしたの」

「……………」

「正直、私にはわからない。似たような苦しみを知つてはいるけれど、貴方の思いは……どんな心を想っているのかはわからない」

「蓮太の腕、首元、そして足。目に入る度に気になっていたことがあった。触れない方が

貴方の為だと思っていたのだけれど……どうやら違っていたみたいね」

そして希亜は脱力しきった俺の手首を持ち、袖を上げる。

何もされていないのに、痛い。

「傷これが蓮太の心の証」

「昔の話さ」

「それでも、今、この瞬間まで傷が残ってる。それは蓮太の心が癒えていない証拠。まだ自分に罪を被せている証拠」

ある種の呪いさ。

この呪いは消えない。俺自身が強く恨んでいる以上は………二度と消えることの無い傷。

古い本で見たことがある。強い怨念を宿らせた一撃は、消してその者を許すことの無い傷となり、蝕み続ける……と。

それが例え自分自身だとしても。

「貴方は優しすぎる」

「じゃあどうしたらいいんだよ。俺は………何を……」

「私も、大切な人を失った」

………！

「本当に大切だった妹が、目の前で車にはねられた」
何を……言ってるんだ……。

「妹に非はない。青信号で渡っただけだから。……相手は飲酒運転の信号無視、おまけにスピード違反」

……そっか。

皮肉なものだ。それってつまり……

「ルールを守らない人間に……妹は殺された」

4人目

「なるほどね……」

名前も知らない妹さん、何一つルールを守っていない身勝手な大人に殺されてしまった妹さん。

……………同情する。

「災難だったな、お互いに」

カチコチと時計の針が鳴り響く。その音はやけに重く感じた。

時計の音だけじゃない、この瞬間に感じる全てが鉛のようにのしかかっている気がした。それだけ精神的に参っているんだろう。

「なんで、その事を俺に教えてくれたんだ……？」

本人からしたら、俺が抱えているモノと同じレベルで苦しいことだろう。何故それをわざわざ伝えてくれたのか。

正義感や責任感の強いやつだ、ほんの少しの予想はできてるけど……………

「……………一つは『蓮太』を知ったから。貴方とは対等な立場でいたいから」

「二つ目は？」

「私から貴方に対する最大限の信頼の証と捉えてもらっていい。理由があつて《能力》については話せないから」

話せない理由……か。

……これまでの希亜の言動や自信、実績を考えて、まず間違いなく攻撃的な能力であること、そしてそれが強大な一撃をたたき込めることはわかっちゃいる。

発動条件や制限があるかどうかとかを聞ければとも思つたが……まあこう言つてるんだ、深くは聞かない。

「わざわざそんな事のために……」

「お互い様でしょ」

……！

ばーか……つたく。

「それでも、いつかは話したいと思つてる」

「別に急がなくてもいいよ。ゆっくりでいい」

何事も自分のペースで、つてやつだ。こういう問題は急かせばいいってもんじゃない。

「……ありがとう。話してくれて、聞いてくれて」

そばに居てくれて。

根本的な解決なんて何もしていないけど、何故か少しだけ心が軽くなった気がする。それはきつと……同じだから。

何も出来なかった自分の無力さ。俺と同じように希亜も自分を責めてたんだ。自分がああの時こうしていれば、ああしていればって。

それが今現在まで続いているのかはわからない。でも、少なからず希亜なりの答えを出して今を生きている。

それが、《裁く》という決意。

あんな思いを二度としたくないと願う誓い。

似てるんだ。俺たち《仲間》は。

「腹減ったな、なんか食うか？」

そう言えば戻ってきてから何も食べていない。時間も時間だし……一応聞いた方がいいだろ。

「……………食べる」

その場から立ち上がり、ぐうーつと背伸びをするように背筋を伸ばす。ちよつと長く座りすぎた。

「どっかに行くか、生憎この家じゃろくな準備をしてない」

「蓮太は料理が得意なの？」

「え？　なんで？」

「キツチンを見れば何となく」

ああ……：そうか。ある程度の料理を作れるように大概の物を揃えているからな。調味料も全て。

なんなら料理専用のワインまで買つてある。

明らかに一般家庭に置いている道具や材料の数を超えているしな。

「まあ好きなんだ。また今度でよけりや作るぞ？」

「そうね、その時を楽しみにしてる」

軽口を叩きながら鞆を持つ希亜に続くように、部屋の電気を消しつつ鍵と財布をポケットに入れる。

戸締りおつけー、照明おつけー、水道おつけー。ガスは………まあ大丈夫だろ。前回使った時に止めてるはず。

「じゃどい行ハローか」

家を出てからも施錠の確認をして、適当に歩きながら行き先を相談する。

「そうね、ここから歩いて行くなら……………」

「？ 別に歩きじゃなくてもいいぞ？」

「歩きじゃなくてもって……………自転車？」

「バイク。後ろに乗れば別にある程度のところなら行けるぞ？」

そう言つて駐車場に止めてある黒色のバイクに向かつて指を指す。

「これ……………蓮太の？」

「ああ、昔から仮面ライダーマンが好きでさ、バイクに憧れてて……………前に買ったんだ」

「Wみたい」

「……………大分値が貼つたらしいからな、その辺はマジで父親様々だわ」

でも、電話をした時は落ち込む素振りを全く見せないで、むしろ何かに喜ぶようにしてたな。

……………まあ基本的に俺から連絡することがないからその反動だろうけど。

そりやあもう10年位の付き合いだもんな。ちよつと素っ気なさすぎたのかもしれない。

「それで、どうする？ 俺は別にどこでもいいけど」

「……………お好み焼き食べたい」

あ……………はい。

でもこの辺でお好み焼きか……………そんなもんあったっけ？ 基本的にはニンボールばかりだからなあ。

移動手段持つてるくせに全然使わないからな……………俺。

「じゃちよつと調べてみる。ついでにメットとか取ってくるわ」

「場所は知ってる。私の家が近いから」

「そかそか、とりあえず準備するわ」

……………

……………

……………

「よし」

全ての準備を済ませ、左足を地面につける。久しぶりに動かしたからか、ほんの少しだけウキウキしてる。これも男の性かね？

ていうかウキウキしてるのは俺だけじゃない気もするけど……まああえてそこは触れないでおこう。

「それで……ここ、これってどこを掴めばいいの!?!」

……ちよつとだけ希亜の雰囲気崩れてる。怖いのかな。

「グリップみたいな掴む所があるだろ? とりあえずそれをしっかりと掴んでりや問題ないさ!」

「ど、どこ?! 掴む所って何?!」

キャラぶつ壊れかけてない? なんか声が高くなってるし。

「後ろの方に取っ手があるだろ? それを掴めばいいんだって!」

「ど、どれがガンダムツ!?!」

「そんなモンついてねえよっ!?! つかそれを言うならタンDEMだろ!」

つかガンダムってなんだよ。めつちやごついロボットを想像しちまったわ。しかもタンDEMは二人乗りの名称だし。

「わ、わかった! もうこれ掴むツ!」

その瞬間に感じる感覚。

後ろから手を回されてそこその力で俺の身体を締め付けてくる。でも柔らかい感覚はない。

え、ちよつと待って。

痛くない？ いや結構痛いよ？ この子のどこにこんな力があるの？

まあ……いいか、バイク使ったらそこそこ近いし、強く搦んでくれてたらその分落っこちることは無いだろうし。

「じゃ動くぞー」

と格好つけてブルンツ！ つと威嚇でもするかのようにエンジンを蒸かすと

……

「○+€%>々☆:.\$÷#||*!?!」

と普段の姿からは考えられないほどにキャラがぶつ壊れた女の子の声が響き渡った。

「……止めとく？」

「やめないいいいっ!!」

4月24日

むちゅまじい

それは突然だった。

いきなり、知らない人からRINGでメッセージが送られてきたのだ。

いや、厳密には知ってはいるんだが、連絡先は初めて知った。

「つかどうやってIDを手に入れたんだ？」

そんなことを思いながらも、改めて送られてきた文章を読む。

『どもども〜！ 竹内先輩の連絡先で合ってますよね？ 都合が良ければ、本日お会い

したいんですけど〜？ どっすか？』

……意外とこういうタイプなのね、天ちゃん。

そう、このメッセージを送ってきた相手とは、新海の妹さん。

『別に今日は予定もないし、俺は構わないけど、どしたの』

『じゃあ駅で待ち合わせでお願いしまーす！』

と俺の質問はガン無視された形で、結構一方的に待ち合わせの約束をされた。

別にいいけどさ……………新海も大変そうだな……………

蓮太移動中……………

「それで何の用なんだ？」

今日は休日、だからか駅付近のこの辺りにはかなりの人だかりがあった。

ちよつと目を離せば直ぐに見失ってしまえそうさ。

「んー、ここでは人が多くてちよつと話しづらい事なんですけど……………あつ、そうだ！」

ナインボール行きましよ！ ナインボール」

「いやあそこも人が多いと思うぞ？ 今昼前だし」

「じゃ、みゃーこ先輩を観察しに行きましよ！」

「どういうことだよ……………」

と突然謎に距離が縮まった元気な天ちゃんに振り回され、結局ナインボールへと行くことになった。

趣味……というか好きなジャンルの物が似ていたからだろうか？ 色々と話していくにつれて歯車ががっちしと合い、知り合つて間もないとは思えないほどの変化だ。

そして店にたどり着き、元気いっぱい天ちゃんがドアを開ける。

「こんちわーッ！」

「友達ん家か」

まるで我がもの顔で堂々と店に入り込むその姿は、天真爛漫としか例えようがない。しかしそれよりも驚いたのは……………

「あ、おかえりなさい」

と普通に答えている九條さんがいた。ちなみにその前には新海もいる。

つまりは『店員』としてではなく、『客』として来ているのだ。その証拠に普通に私服を身にまとつており、より大きい胸が強調されている。

いやそうじゃなくて！

「はあ……………」

思わずため息が出る。何か用があるのなら素直に言えばいいのに……

天ちゃんの演技の下手くそさにガツクリとくる。

だつてここに連れてこようとした時の言葉を考えると辻褃が合わない。明らかに俺に何かを隠しているのは明白だ。

「あたしにいいの横」

そんな俺の心情とは反対に、元気いっぱいな女の子はそそくさと予め座っていたのであろう席に戻って行った。

となると俺が座るべきは……………

「おはよーさん」

挨拶をしながら残りの席に座る。4人用のテーブル席だから、俺の隣はもちろん九條さん。

お互いにとりあえず挨拶を済ませて、飲み物とかを注文。それから本題に入ろうとする——

「ほら！ どっすか！」

と新海と九條さんに向かって、天ちゃんが何かを確認させるように言葉を発した。

「あのな……天、お前が竹内と鉢合わせた時を確認しないとなんとも言えないだろ」

と意味深なセリフ。ああ……なるほどね。

「存在感は普通にあつたぞ」

「……バレてる？」

「そりゃバレるだろ」

明らかに《能力》での効果を確認してる。俺の予想通りの自身の存在感操作という能

力を使った効果の幅をな。

「ごめんなさい竹内くん。こんな試すような事をしちゃって……」

「や、いいんだ。それなりの理由があつたんだろ？ だから別に気にしてねえよ」

思えば返せば、あの時の言葉もちよつと引つかかるしな。

「遊び人と俺には効果が薄い……とか言つてなかつたつけ？」

「あー！ あー！ その話は無しにしましょうよ!!」

俺が何食わぬ顔で、あの時の名称で新海のことを呼ぶと、天ちゃんは聞かれたらまずいことのように大慌てで両手をバタバタと前に差し出した。

その慌てようから何かを察したのだろう。新海が面倒くさそうに天ちゃんのことを見ている。

「おい天、お前どういうことだよ。なんだよ遊び人って」

「気のせいだよ、気・の・せ・い♪ あたしがににのことバカにするわけないじゃん！」

「誰もバカにされたなんて言つてねえぞ」

「んが………。ああー！ もういいじゃん！ 能力が扱えないになんて下級職で

上等でしょー！」

「んだとコラ！ 微妙に影が薄くなるなんて地味な能力の方が下級職だろうが！」

いやツツコむとこそこじゃねえだろ。てか声でけえよ。

「あ〜ん？ やんのかこらあ〜！」

「上等だこらあ〜！」

となんと今にも乱闘が起きるかのごとく、兄妹間でバチバチに火花が散る。

どうやら仲がかなりいいみたいだ。

「あの喧嘩放置してていいのか？」

「ふふつ、大丈夫だよ。二人ともすつごく仲良しなの」

「でもまあ……………凄いな、こんだけ騒いでいるのに店員が誰も注意しにこない」

「本当はダメなんだけど……………能力を使っているから気がついていないだけじゃないかな？」

「結構効果高いんだな」

まだ色々と模索中なんだろうけど……………現段階でも十分強力だな、こりゃ。

まあ……………問題があるとすれば天ちゃん自身か。

なんか色々々と心配になる。

わちやわちやと喧嘩する二人を見てみると、何だか昔を思い出すな。ほんの少しだけ懐かしいし、羨ましい。

隣にいる九條さんもニコニコとその二人を見ながら微笑んでいた。

「なんか楽しそうだな」

「そうだよね。私は一人っ子だから、ああいうのいいな〜って思うの」
ちよつとわかる。

「ふふっ、仲むちゅまじいね〜」

聞き逃さなかったぞ……………今の言葉！

それを聞いた瞬間に、考えるよりも身体が反応してしまっていた。それは俺だけじゃなかったようで……………

「ええ？ 今噛みました？」

と天ちゃんと俺の声が見事にダダかぶりして九條さんに降りかかる。

……………

「噛みましたよね？」

「噛んだよね？」

「仲……………睦まじい……………」

「むちゅまじい？」

「ごめんなさい許して……………」

俺たちに責められた九條さんは、顔を真っ赤にして俯いたのだった。

……
ちゃん
ちゃん
ちゃん。

天の偵察

あれからしつこいぐらいの九條さんイジリが続き、なんだかんだで時間が経過する。その間にやってきた飲み物と追加で頼んだパフェを口に含みながら、和気あいあいとした雰囲気を楽しんだ。

その途中……………

「なるほどねえ……………俺と新海には効果が薄い謎は解けなかったけど、現状で扱える能力の範囲は決まりっぱいな」

天ちゃんの能力、それは相手を問わずに指定したモノの存在感を操作する能力だった。それはつまり自身のみならず、意識した相手の存在感を薄く出来るといふもの。しかもそれは人だけに留まらず、物にも影響を受ける。

そしてその範囲は指定型の能力だった。俺のような『自身を中心とした半径2m』なんて制限はなく、ある程度離れた相手にも使える。しかも個人ではなく範囲化も可能。その代わりにデメリットとして対象者を増やせば増やすほど、一人あたりの効果は薄くなるようだ。

「なんでもいにと先輩には効果薄いんだろうね」

「その辺は考えても仕方ないんじゃないか？ ろくな情報がないから、個人差があるのかも……？」 としか言えないし」

「単にコイツがウザすぎるだけじゃねえの？」

「やめて！ そういうの結構傷つくからっ！ あたし割とガラスのハートの持ち主だからー！」

なんとも言えないよなあ……その辺は。

大した問題じゃない！ ……と言いたいところだが、肝心な時に似たような事例が起こったら大問題だ。いつかは謎を解かなきゃいけねえだろうな。

「……………あむ」

「そーいやパフェに紅茶の組み合わせってパフェクイーンみたいだな、竹内」

「…………？ 誰だ？ それ」

なんだよその面白そうなお客さん。そんなあだ名が付けられるなんてどんだけパフェ食ってんだよ。

「頻繁にお店に来てくれるお客さんがいてね？ その人がよくパフェを頼んでくれるの」

「へえ〜」

「この間も来てたぞ？ 制服的には……多分玖方の生徒だろうな」

「このパフェは美味いもんな、気持ちはよくわかるよ」

「竹内くんもよく頼んでくれるよね？ ありがとうございますっ」

それにしても、そんな人を俺は見えないけどなあ。結構な高頻度で俺もここには来てるんだけど、パフェばかり食べてる客なんて俺ぐらいだと思ってた。

玖方の人ってことは、女の子か。是非一度見てみたいな。

「美味しいのは事実だからさ。……にしてもそんなあだ名付けられる程バカ食いしてるのか」

「先輩もあんまり人のこと言えないけどね。昨日なんてリスみたいにシュークリーム食べてたしっ！」

「甘いもんには勝てねえ」

なんて会話をしながら俺がちょうどパフェを食べきった時、新海が軽くパンつと手を叩いて注目を集めた。

「さて、ここからが本題なんだが……」

明らかに空気感が変わったことを察して、俺もゆっくり紅茶を一口。

「竹内、お前の言う通りにとりあえずは『香坂 春風』について調べてみた。学年は一つ上の女性、特に秀でた所は掴めなかったが……天があることに気がついたんだ」

………先輩だったのか、全然そんなこと気にもしてなかった。

「《アガスティアの葉》。竹内は知ってるよな？　そこで『エデンの女王』と名乗る人物との共通点が多いことに気がついた。だからこれは仮定で話を進めるが……、もしあのサイトを通じて何かしらのグループに所属していた場合の危険性を考えて、九條に一つ頼み事をしたんだ」

「たった一日二日でそこまでプロセスを組んで俺と同じレベルまで結論を出したのか………!?!」

「こいつら………すげえな。」

「頼み事って?」

「九條は『他人の記憶も盗める』んだ、人の所持品だけでなく物体がないものでも奪える、それこそ視力や記憶も」

「それで香坂さんの記憶を見た………?」

「ああ。そしたらある二人の人物と何やら深い関わりがあるようなんだ」

「二人………俺も含んでいるのか?　あ、いや、深い関わりとなると俺はまだそこまで絡んではいない。希亜も直接会った訳では無いだろうし、冷静に考えると………アイツらだろう。」

「ただ、大雑把な特徴しか判明してなくてな。それがフードの女と赤髪の男なんだ」

やっぱりか、フードの女っていうのはほぼほぼ間違いない白のゴーストだろう。もとも何かしらの絡みがあると踏んで、俺はあの日にここで絡んだんだ。

となると……《司令官》つてのは赤髪の男っぽいな。どつかの四皇みたいだ。

「この短期間にそこまで………すげえな」

「しかもですよ！　ここからが超重要な話で！」

と会話に割り込むように勢いよく天ちゃんが話を続ける。

「どうやら、今日の夜に三人が合流するらしいんですよ」

「……はい？　なんでそんなことわかったんだ？」

「能力使ってスマホ覗いた」

やっぱすっげえ便利いいよな、その能力。隠れて何かをする時に効果を最大限に発揮してる。

それに引き替え俺はなあ……十分強力な部類だとは思うが……まあいい。

「お前いつの間にそんなこと……」

「そんなときにメッセで『この事を伝えたい人がいるんですけど』つて聞いたりしてたから、本当はもう一人いるんだと思う。でも今回はその人を除外して三人で集まるんだつて」

「へえ……」

もしかしたらそれは俺かもしれないねえな。香坂さん、あの時も協力的だったしまた俺にチャンスを与えてくれたよとしてたのかも。

結局《白》のゴーストとは合ってるんだろうし、変な誤解をさせてしまったかもな。

「そ・れ・で！ あたしちよつと様子を見てきますね〜」

「おう、気をつけて……………つて、はあつ!？」

突然のその発言に目を丸くして驚くお兄ちゃん。まあ……………うん、そりやそうだ。

この行動力の高さは半端ねえな。

「お前状況理解してんのか!? 九條が言ってた事から推測するに、『香坂 春風』は《魔眼》のユーザーとの接点があるかもしれないんだぞ!? そうなんだろう? 竹内!」

「うーん……………なんというか、現状ではその香坂さんと関わりを持っている《司令官》って奴が怪しいんだ」

「あつ! そう言えばメッセの相手の名前『司令官』だった!」

「ビンゴじゃねえか」

でも、これで確定的だな。俺が探し求めている相手がソイツってことは間違いなさそうだ。

そして恐らくそのメンバーの仲間という線が固いだろう。

さて……………どうしたものか。

「竹内くん……？ どうしたの？」

「いや、ちよつとな……」

「ここは新海を信用する方向でいくか……？ 個人的にはどちらも怪しいつちや怪しいが、言葉や動きには怪しきはないし、本当に普通に良い奴だし。」

「まずは危険度の高い向こうのチームの対処を考えるべき……か。」

「やっぱり危ないよ天ちゃん、そんなことまではしなくてもいいから」

「いーからいーから、せつかくのあたしの活躍所、ここはやるつきやねーでしょ！」

「勢いよくその場を立ち上がり、目を輝かせてやる気満々の天ちゃん。」

「なんか……楽しんでない？ この状況を。」

「そ、天ちゃん！ 竹内くんの言った通り危ないよ！ そんな危険なことしてもらおう訳には——」

「だーいじょーぶですって、どうせあたししかこの役目はできないでしょ？ いつもよりも能力を全力で使うから安心してくだせえ」

「確かにそうではあるが……」

「もしもの時を考えたら、やっぱり危ないよな。」

「時間を確認すると、もう夕方。その待ち合わせの時間が何時かというのはまだ俺は知らないが、もうそう遠くないだろう。」

かと言って一人で行動力させるのもな……

「じゃ、行ってくるね〜！」

「あつ、おい！ 天っ！」

そう言って天ちゃんは、いつものように元気よく店を飛び出すように出て行ってしまった。

まだ夕方だけど。

天色の涙

あれから何時間経過しただろうか、ただそれだけが気になっている。

落ち着きをどうにか取り払う為に何かしらの会話をしてはいるが……各々が心のどこかで天ちゃんを心配していて、会話に入りきれていない。

ちなみに何度も何度も新海が天ちゃんに電話をかけてはいるが、一度も反応がない。多分引き止められることを予想して、敢えて出ていないのだろう。

チラツと窓の外を見ると、外はもう暗い。

「……やっぱり俺行ってくる！ どうしても天が心配で……」

「何処に行くんだよ。天ちゃんは場所を言わなかったぞ」

「あ……、そうか……」

俺と九條さんもそうだが、それ以上に新海がソワソワとしていてどこか落ち着きがない。
い。

「連絡を取ってくれないから……信じて待つしかない……よね？」

ちびちびと何度も何度もドリンクを飲む九條さん。彼女も今すぐにでも駆け出した

さそうだ。

「まあ……な。何もなけりやいいんだけど」

昨日のユーザーの件もある。まだ俺の知らないユーザー達が蔓延るこの街で、女の子を一人にするのはまずかつたな。

存在感が薄いとはいえ………見つからない確証なんてのはどこにも——

とその時、俺たち以外にももう誰もいなくなった店の中に誰かのスマホの着信音が響き渡る。

『ピリリリリリリッ』

「——ッ！」

素早くスマホを取り出したのは新海。その顔はどこか焦り、どこか怒り、どこか安心しているかのような表情だった。

「天からだ！」

「天ちゃん!? 上手くいったのかな？」

向こうからの連絡ということもあって、一気に緊張の糸が切れたかのように安堵する。

少し肩の力が抜けたみたいだ。

「もしもし！ 天、どうし——」

何も無くて良かったと九條さんと顔を見合わせて笑っていると、その不自然な言葉のキレの悪さが気にかかり、思わず新海の方へと顔を向ける。

その表情はさつきとは打って変わって何かに危機感を感じているかのようなものに変わっていた。

「新海……くん……？」

九條さんが心配そうに声をかけるが……もちろんそれに対しての返事は返ってこない。それはおそらく、新海がそれどころじゃあないからだ。

「お前は誰だッ!?!」

尋常ではない怒りの声。そしてこのセリフ。事態は悪い方向へと動いているようだ。

「新海、スピーカーにしろ。状況を知りたい」

俺の言葉に新海はゆっくりと首を縦に振ると、耳から話したスマホの画面をタンタンとタップし、テーブルに置く。

『私の名は……そうだな、『司令官』とでも言っておこうか』

「——ッ!?!」

そのスマホの奥から聞こえてきた声、変な機会を使っているのかノイズがかかったかのように雑音が混じっていて聞き取りづらいが、おそらく男の声だ。

それに声質を変えているのだろう、ハッキリとした人の声とは思えない。

『君だな？ 彼女に私たちの事をコソコソ嗅ぎ回らせていたのは』

明らかに天ちゃんじゃない。最悪だ……やらかしちまった！

「天に何かしたのかッ!? 無事なんだろうなッ!!」

『まあ待て、そう慌てるな。心配はいらないさ、今のところはまだ大したことはしていない』

コイツ……なにか目的があるな。こちらに挑発するかのような言葉選びだ、要するにお前の反応次第では人質になってる天ちゃんに手を出すぞつてことだろう。

そして先程の新海の質問に答えるように、ある声が聞こえてきた。

『お兄ちゃん………ごめん………っ』

今にも泣き出してしまいそうな細かい声。

恐怖に支配されているような弱々しい声。

助けを求めている天ちゃんの声。

それが聞こえた瞬間——

「天ッ！ どうした!? 大丈夫かッ!？」

すぐさま新海が声をかける。だがしかしその返事は貰えず、直ぐにあの男の声と入れ替わった。

『君はAFユーザーだな?』

「……………」

下手な返事はできない。変に嘘をついたりすると、天ちゃんの身が危険だ。ここは言葉を慎重にえらんで……………」

『沈黙は肯定と受け取ろう。おそらくそこにいるお友達もそうなのだろう?』

……………チツ。聞こえてたか。

「だったら何だ」

『神社へ来い、白陀九十九神社だ。そこで話そう』

「おい! お前——」

『拒否権はないと思え、彼女が大切なのならば……………な』

「ぐっ——」

そこで通話は切れてしまった。

『ツー、ツー』つと音が鳴るスマホを力強く握り絞め、新海は苛立ちと共に深いため息を吐き出す。

「まずい状況になった」

「そ、天ちゃんがまさか……………そんな……………」

電話の相手は間違いなくユーザーだ。本当に司令官と名乗る人物なのならば、より危険性が高い。

俺の予想が正しけりや《魔眼》を持って居る可能性が1番高いからだ。

それに……………ゴーストという幻体がいる以上は数的有利もとることが出来ない。

相手はゴーストを差し引いても三人、こつちも三人ではあるが……………一人は実質無能力者であり、もう一人はもし戦闘になった場合、ほぼ動けないだろう。

しかも俺は防衛型の戦い方しかできない。

「とりあえず新海、お前は神社へ行くべきだ。ほぼほぼお前が指名されたと言つてもいいしな」

「もちろん行くさ、このままだと天が危険だ！　すぐにも行かないとー！」

「私も行く！　相手がユーズーなら、きつと役に立てると思う」

……………そうだな、二人で行つてもらえればスピーカーにした言い訳をどうにかこうにか作ることが出来る。

問題は……………その後だ。

「二人とも、俺も必ず行くから先に向かつてくれ」

「竹内くんは他に何かが!？」

「人を一人連れてくる。ソイツも味方と思つてもらつて構わない、もし戦闘になつてしまった時にソイツが入れば間違いなく形成は逆転する！　運がよけりやこつちの勝ちまで持つてこれるかもしれない！」

どちらにしろ俺たちの戦力が低すぎる。相手が何かしらの攻撃的な能力を持っている場合、何も出来ずに殺されてしまう危険性もある。

それに《白》のゴーストが相手にいるんだ、その事実だけで俺が自由に動けなくなるから……絶対に希亜は必要だ！ 希亜がいないとこの喧嘩には勝てない！

「そいつは信用できるのか？ 竹内」

「ああ、俺にとつての唯一心から信用している二人の内の一人だ」

そう答えて、九條さんに一瞬視線を送る。新海に残りの一人はこの人だと伝えるために。

「……………わかった。とにかく俺たちは急いで現場に向かう。もしもの時は……………」

「その為の俺だ。いいから急いで行け！」

「う、うん！ じゃあ後で！」

バタバタと会計を済ませ、俺と新海達のチームで二手に分かれて大急ぎで走り去る。

俺の向かう先は自宅。走りなんかよりもっと早い移動手段を扱う為だ。

そして時間の節約の為に、走りながらもスマホを取り出して希亜に電話をする。

するとワンコールで直ぐに出てくれた。

『もしもし…………？ 蓮太？ なにか急いでいるの？』

「希亜！ すまん！ 非常事態だ！ 詳しく説明してる暇もない、直ぐに俺と会える

かッ!？」

『非常事態? 一体何があったの?』

「知り合いがユーズーに攫われた! 今絶賛喧嘩を売られている最中だ! だから頼む

! 希亜の力を貸してくれ!」

俺があまりにも急いで端的に説明をしているからか、それとも著しいほどに息を切らしているからか、この緊迫した状況は直ぐに希亜には伝わったようで、希亜なりに受け止めてくれた。

「……………後で事情を説明しなさいよ」

「はあ…………… はあ…………… 助かるッ!」

と、ヴァルハラの間からの承諾を受け、急いでバイクの準備を済ませて希亜の家までぶっ飛ばす。

1分でも1秒でも早く天ちゃんを助け出す為に。

俺たちは、ヴァルハラ・ソサイエティ

「そう、そんなことがあったのね」

希亜を後ろに乗せて約束の場所である白陀九十九神社へとむかっている途中、今まであった全てを話す。

つつてもそのほとんどを希亜は知っているから大した説明量ではないんだけど。

「ああ、だから今は一分一秒を争うんだ！」

法定速度のギリギリまでスピードを出して出来るだけ早く向かう。急ぐ気持ちもかなりあるが、それが原因で事故でもして最悪死んでしまったりした方が危険だ。

それに運がいいことに今日は車の通りも少ない、予定よりも早くたどり着くことが出来るそうだ。

「最悪の場合、能力を使った戦いになってしまいそうね」

「本当はそんなもん俺も希亜もお断りなんだがな……！ 相手の出方次第だ、無事ならいいが、相手が無抵抗の女の子を傷つけるようなやつだった場合は俺は覚悟してるッ！」

「……………とにかく急ぎましょう」

……………

……

……

「なんだ…………ツ!? どういう事だ!?!」

やっとの思いで神社にたどり着いた俺たちだが…………一定の距離を近づくと何かに弾かれるようにぶつかり、中へとはいることが出来ない。

まるで何かを守るバリアのように。

「これは…………電気?」

希亜もその辺の石ころを拾い上げ、軽く投げてそれを確認する。するとそのバリアは小さくて細かな火花のような物をバチバチと破裂させ、飛んできた小石をはじき飛ばした。

「高電離^{プラズマ}気体……」

「高電離^{プラズマ}気体だと……ツ!？」

「おそらく空気中の原子から電子を無理やり剥ぎ取って作っている、そんなことが出来るのは……蓮太の言っていたあの電撃使いの可能性が高い」

それでこんな大きなドーム見てえなバリアが出来てるのか!？」

「それにもう一つ付け加えると、これはあの子が言っていた《幻影系》能力。だから実際の高電離^{プラズマ}気体よりかは威力は劣っている」

確か実態を傷つけない、精神を傷つけるモノ……だったな。

となればこれもアーティファクトを使ったいわゆる偽物、それなら……

「希亜、俺が《鏡》で入口を作る、その隙に何とか入り込んでくれ」

「能力で？」

「ああ、相手も能力なら反射できるだろうし、最悪、反射出来なくても鏡の材料はガラスだ、つまり……」

手のひらに紋章を浮かばせて、電磁バリアの中に輪を作るように能力で鏡を出現させる。

穴が空くようなイメージで。

「電気を通さない絶縁体だッ！」

すると俺のイメージした通りにバリアを貫通する鏡の空洞ができ、その周辺だけがバチバチと電気が暴れ回る音を撒き散らかす。

その輪の中には一切電気は入ってきていない。

「銀や銅に到達する前に遮断………流石ね」

サラツとその一言を発すると、俺が作った鏡の輪の中をタンつと軽くジャンプして通り抜ける。

今日はゴスロリチックな服を着ているからスカートの中身がちよつと見えそうになった。

ちくしよう。

なんて雑念と戦いつつも、俺も続いて中へと飛び入る。

「さて………とりあえずは侵入成功だな」

「急ぎましょう、手遅れになる前に」

「ああ………！」

休む暇なく神社の中へと駆け抜ける。すると対して時間も掛からずに、本殿前の広い場所では何かをしている複数人の人影が見えた。

しかしそれは俺も全く想像できていなかった光景。

上半身に何も身につけていない半裸の男たった一人に、香坂さんを除いたメンバーが悔しそうにその場に倒れている。

そこには新海、九條さん、そして《白》ゴーストに……………何故か高峰。

天ちゃんはある変な男の後ろで泣きながら自由を奪われている。手足でも縛られているのだろう。

「なんだよ……………あれ……………」

色々と気になるところはある。何故高峰がいるのか、あのクソ強いゴーストが何故やられているのか、何故天ちゃんが更に攫われているのか、何故香坂さんだけが無事なのか。

何故……………あの男の頭上に《雷》の槍のようなものがあるのか。

今にもその《雷》を放ち出しそうさ。

「希亜ッ！」

「もうやっっているー！」

危険を感じた俺が声をかけるまでもなく、希亜は能力を使ってあれを止めてくれようとしていた。

しかもそこそこ前から能力発動に必要なタメをしていたらしく、もう左目の輝きは十

分に強かった。

あの時もそうだったな、あの日の夕方も。

「パニツシユメントツ！」

その声と同時に俺の背後から青い輝きを放つ光が、その槍を襲う。

異能力同士が衝突すると、激しい閃光を放ち、たちまち視界を白く焼いた。

が、走る足を止めない。

咄嗟に腕で影を作り、なんとかみんなが倒れている前に移動し、あの男に向かうように立ち塞がる。

激しい閃光が収まる頃には、あの雷の槍は消え失せていた。

「竹内……………お前……………」

「待たせたな。新海」

決して振り返らず、あの男から視線を外さないようにじつと睨みつける。

油断するな、今、この瞬間だけは1秒も気を抜くな。

てめえの大切な人を守りたいなら、目を離すな。

どんな攻撃がきても対処出来るようにあの男を睨んでいると、遅れて到着した希亜が

俺の横に立ち止まる。

「来たか……………」《リグ・ヴェーダ》？ の残りの仲間が」

その男は言う。何かよく分からないグループ名を。

「《リグ・ヴェーダ》？ 貴方は少し勘違いをしている」

「コイツら二人の仲間だつてことは否定しないけどな」

「ん？ 貴様らは後ろで倒れている奴ら全員の仲間ではないのか？」

コイツ……余裕かましやがつて。圧倒的な力を持つてる奴のよくある特徴だなあオ

イ。

「俺^私たちは《ヴァルハラ・ソサイエテイ》だ^よ」

電気の極地、最強の災害《雷》

「ヴアルハラ・ソサイエティ……？ 聞かない名だな」

「言った覚えはねえからな！ クソ電気野郎ッ！」

にしてもなんなんだ？ この違和感だらけの現状は。

「蓮太……」

隣にいる希亜が俺に声をかける。

「フードの子、蓮太が言っていた人でしょう？ 外傷が酷いわ」

「は？ 外傷？」

意地でも視線を外さない。本当はすぐにでも後ろのみんなの安否を確認したいが……それは一旦希亜に任せよう。

「唯一驚いている様子がない、きつと気を失っている。それにあの怪我の量………惨いわね」

「どういう事だよ、なんで《外傷》が残るんだ？ アイツの能力は精神を攻撃するものじゃないのか……？」

それに、ここに走って来た時は新海や九條さんと高峰には傷はなかったような……
「気を………つけて………！ 竹内くん………！ あの人の………電気………を………ッ
！」

聞こえてくる九條さんの声、苦しそうな弱々しい声を力の限りに発しながら、自分の身ではなく俺の事を案じている。

「馬鹿やろう、自分の事をまず第一に考えやがれ」

「ヤーハツハツハツ！ 実に面白い、確かにまず自分自身の命を大切にすべきだな」

……前に読んだ漫画にこんな笑い方の奴がいたな。

「噂には聞いているぞ、《反射》の能力者」

本当に心の底から楽しそうに笑っている名前も知らない電気男。その明らかな余裕の影で天ちゃんと香坂さんが怯えている。

クソ……どつちが先だ。天ちゃんを助けるか、後ろのみんなを助けるか、あの電気野郎をぶっ倒すか。

「ジ・オーダー、アクティブ………パニッシュメントツ！」

とその時に俺の隣から技名を叫ぶ声が聞こえてくる。

そしてその声に続くように至る場所から無数の鎖があつた男を縛らんと襲いかかるが

………

「ぬるいぞ……………小娘」

あの男を中心に《電気》の柱がグルグルと回る。そしてそれに当たった鎖は次々に粉砕されていった。

「なっ!？」

タメが短かったか？ それとも能力を扱うだけで凄まじい疲労が出るんだ、その反動で威力が弱まったか!？

とにかく希亜の力が弾かれた！

「私を殺したいのなら、もっと全力を出すべきだ。例えば……………」

そう言つて、その男は人差し指を希亜に向け、ニヤけた顔でその指先を光らせる。

何か知らんが絶対まずいっ！

「反射鏡ツ!!」

咄嗟に希亜の前に鏡の壁を作り上げる。するとその瞬間——

「百ボルトシヨック 感電」

という声に合わせて、糸のように細い電気の光が一瞬で希亜に襲いかかった。

だか、襲いかかっただけ。肝心のその電気は俺の能力で反射され、どこか遠くへと飛んで消えた。

「危ねえ……………ッ!」

「やはり厄介だなあ、その能力」

先読みが当たって良かった。それがズレてたらあの電気は希亜の身体を間違ひなく貫いてたツ！

それにアイツ、百ボルトって言つてたよな。百ボルトなんて生身で食らつたら死ぬぞ……!!?

「ヤーハツハツハツ！ 後ろのゴミ達はその技ですぐ片付いたんだがな！ 貴様は楽しめそうだ！ ヤーハツハツハツ！」

……？ なるほど。意外とアイツの言葉は信用出来ないのかもな。

一応みんな生きている。九條さんも俺に声をかけるほどの体力は残っているようだったし、最悪あれを食らつても簡単に死ぬことは無い……のかもな。

「だが………貴様一人でどれだけ守れるかな？」

もう一度、男は指先を構える。そしてその方向は俺や希亜ではなく………

「感電ショック」

《白》のゴーストにあの細い電気が直撃。その瞬間に無理やり意識を戻らされたかのよう_うに目を見開きながら、《白》ゴーストはちぎれそうな声を発する。

「がああああああツツツツツ!!」

まるで獣のようなおぞましい声、その感電が終わると、プスプスプスと焦げたような

音と臭い、そしてバチバチと電気が弾ける音が聞こえてきた。

「ゴーストツ！」

いても立つてもいられなかった。

敵ではあるが、アイツの守りたい人物がこんなことをされていることに怒りが抑えられない。

そして感情に身を任せ、《白》ゴーストの元へと走っていくと……………

「ヤハハ、いいのか？」

背後の方からバチバチと放電する音が聞こえてくる。

「仲間から離れても」

徐々にその音はデカく激しくなっていく。…………が。

「想定済みだっつの！」

俺のもう一つの能力を解放する。希亜以外には見せたことの無いあの能力を。

「行けツ！ ゴーストツ！」

俺の魂から抜き出てきたその黒い影は、風を切るような速度で希亜の元へと向かい、射程距離である2 m以内に収めてから能力を使う。

「つだらあ!!!」

突如として希亜の前に現れた鏡によって、さつきよりも激しく轟く雷を反射して弾き

飛ばす。

よかった、間に合ったみたいだ。

「つたく……人使いが荒いご主人サマだぜ」

「貴女は……!」

「とりあえずは無事みたいだな、希亜」

そんな会話をする二人を横目に、《白》のゴーストを抱きかかえる。

「おい、おいっ! しつかりしろ! 大丈夫か!? 意識はあるかっ!？」

やや黒く焦げ染まった彼女に必死になって声をかける。

多分だけどコイツも幻体、つまり実体がない存在だ。本来なら肉体を傷つけない攻撃

も、コイツにとつての肉体は精神、つまりこの手の能力者は苦手とする部類なのだろう。

だからこそこんなにも傷ついているんだ。

「お………おま………え………!!!」

「意識があるならいいんだ……よかった」

彼女だつて痛みはある、苦しみはある、死という概念が存在するかは知らないが、そんな苦しみは味あわない方がいいに決まってる。

「竹内………蓮太………か………?」

「高峰、お前も無理すんな、全部終わったら色々と話したいけどな」

ここに倒れている人はみんなあの攻撃をくらったんだろう。喋ることが精一杯のよ
うに感じた。

「私は……君たちに謝らなければ……！！！」

「いいから喋るな。あいつをぶつ飛ばしてから全部聞く」

そう返して再びあの男を睨む。

この胸から溢れ出る怒りの気持ちをぶつけてやりたい。

「私をぶつ飛ばす？ やれるものならやってみろ、近づいたその瞬間に雷の恐ろしさを
体験させてやる。ヤーハッハッハッ！」

「この……神モドキがッ！」

常識を壊す力（オーバーフロー）の片鱗

だが実際どうする。あの神モドキをどうにかするにはどう動いたらいい。

アイツの性格を考えると、再起不能の状態の人にも遠慮なく攻撃する。それを防ぐには俺の能力が必須だ。

しかも中途半端な溜めの希亜の攻撃じゃあ簡単に弾き返されてしまう。つまりは極力希亜には力を貯めてもらわなくちゃいけない。それはつまり援護は期待できないってことだ。

となると、実質動けるのは俺と《黒》ゴースト。けど、この《白》ゴーストの状態を見るに同じ幻体であるアイツには守りに徹してもらった方がいいだろう。

でもそれじゃあ俺が下手に動くと、ここにいる高峰と《白》ゴーストを守れなくなる。アイツの射程範囲外だからな。

しかもあの神モドキに奇襲を仕掛けるにしても、速度が足りない。どう考えても俺が近づく間に勘づかれて誰かが攻撃されるだろう。

クツソ……………俺に遠距離攻撃があれば……

って無い物ねだりをしてもしようがねえだろ！ 今俺たちが出来る最善の策を探すんだ。あの電気バカが油断しているうちに！

「どうした？ 私をぶっ飛ばすのではなかったのか？」

「バカ正直に向かうわけねえだろ、クソ厨二病が」

さつきからコイツ痛々しいんだよ、見てるこっちがキツイわ。

「そうか……ではわかった。私はここで3分待とう、その間にゆつくり作戦会議でもするがいい」

「……………は？」

俺たちを完全に舐めきった態度で、電気バカはその場に座る。もちろん俺たちが乱入してから一步も動いていない為、その近くには天ちゃんもいる。

「なんならその女が相手になるぞ？ ヤハハ」

「——ッ！」

呑気に笑いながらそう指図する相手は香坂さん。

今は……あのモードじゃないのか、困惑した表情でオドオドとしている。

「……………」

おかしい、あの言い方はまるで、香坂さんがアイツの味方のような発言だ。

「早く前へ出る、女」

でもそれにしちやあ、あの電気能力者は香坂さんには随分と高圧的な態度だ。仲間つて感じはしない。

「は……………はい……………」

ガチガチと身体を震わせて、脅されるように言いなりになる香坂さん。ゆつくりとその足で数歩だけ歩いてきて、俺たち一人一人を見ていく。

やっぱり何かがおかしい。これは香坂さんの意思じゃない。

「うう……………！……………！」

声を必死に殺している。今にも泣き出してしまいそうだ。

そんな彼女の後ろで、退屈そうにあの男は座り続ける。どうやら本当に俺たちで遊ぶ気満々らしい。

その隙に両手で《白》ゴーストを抱え上げ、ひとまず新海と九條さんが倒れている場所へと移動する。高峰も連れてこようとしたが、アイツはアイツで少しづつ詰め寄っていたようで、何とか《黒》ゴーストの能力範囲内にギリギリ入り込んでいた。

これでとりあえずはゴーストがみんなを守ってくれる。

じゃあ次の問題は……………

「香坂さん、道を開けて貰えないか？」

「いえ……………あ、あの……………その……………」

彼女の様子がおかしい事は十分にわかってる。きっとこの戦いすらも苦手なんじゃないかとも思う。

そして明らかにあの男の言いなりに動いていることも。

「大丈夫、別に香坂さんを疑ったりなんかはしてないから。ただそこは危ない、だから……ゴーストの後ろにいて欲しいんだ」

「……………」

「俺を信じて」

俺は構えない。例え最悪の場合、自分の中の恐怖心が勝ってしまったって俺に攻撃してこようとも。

彼女は守るべき対象だからだ。

《魔眼》のユーザーならば、あんな雷オタクの言いなりになんかならないだろう。

一瞬でも疑ってごめんなさい。

「どうした？ 早く私を楽しませてくれ。1分が経過しているぞ？」

「……………」

奥の方からあの男の声が聞こえてくる。そして香坂さんはあの男の声を聞く度に何度も何度も恐怖で声を竦める。

そして……香坂さんと目が合った。

その目からは色んな感情を感じる。申し訳なき。どうしたらいいか。恐怖。

全部俺の確認もないただの直感だが……………その目からは助けを求められているよ
うな気がした。

そしてついに……………

「に……………逃げて下さいっ、こ……………この……………人は危険で——」

自分の口でそれを言った。そう。アイツの命令に背いた。

俺たちの身を案じて。

「そうか、従順な生よりも無惨な死を選ぶか、女」

俺の方から見える《雷》。さっきまでの攻撃とは違ってやたらと溜めが長い。それだ
けで次に襲いかかってくる攻撃の威力に恐ろしさを感じた。

「死なせるかよ……………ッ！」

その溜め時間の間に香坂さんに詰め寄り、どこから攻撃がきいても対処できるように
しっかりと片手を彼女の胸に回して掴む。

いや、このままじゃだめだ！ せめてもっと遠くへいってコンマー秒でも余裕を持た
せないと！

「では、さくらばだ。 ア無惨な落雷 ス」

バツ！ つと空にむかって上げられた腕が俺を……………いや、香坂さん目掛けて振り下ろ

される。その瞬間に空高くから太い雷の柱が俺たちの真上へと降り注いできて
……………

「クソ——」

その瞬間に俺は横腹を強く蹴られる。

身体の半分くらいまでにめり込んだその足は、痛みを感じる前に俺と香坂さんの身体を軽く吹き飛ばす。その蹴りが襲ってきた方向に視線を向けると……………

「つたく……………。マジで世話のやける奴だな」

「ゴース——」

「勝てよ？ 大将」

その言葉がかき消されるように雷音が激しく轟く。

蒼白い光の集合体に身体を激しく叩きつけられ、悲鳴の一つも聞こえない。

あまりにも突然の事で幻体の能力を解除することが出来なかった。

「ゴーストオツ!!」

叫ぶ声も虚しく、返事は返ってこない。

その雷光が収まると、その場所には黒い影が突っ立っている。

その影へと希亜が駆け寄って必死に声をかけているが……俺のところまでは声が聞こえてこない。

「ヤーハツハツハツ！ 泣けるじゃないか！ 自分の身を投げ出して他人を助けるなど簡単には出来んぞ？ ヤーハツハツハツ！」

「……………」

許さねえ。

許せねえ。

「ふざけんなよ……………」

どこからともなく音が聞こえる。ピシピシとまるで何か割れやすいものにヒビが入っていくように。

気がつくと、俺の手のひらの紋章は今までに見た事ない程に強力な光を放出していた。

力の使い方がわかる。更に頭の中に入り込んでくる。

「……………ざけんなあああッツツ!!」

怒りを解放するように、俺は目の前の《空間》をぶん殴る。すると殴られたその空間はますますヒビが広がっていき、そこを中心に砕けきってしまった。

そしてその破片が辺りへと散らばっていき、無数の鏡となって飛び回る。

「おや？　なんだ、その面白い能力は。そんなもの報告にはなかったぞ？」

まずは安否の確認だ！　俺の幻体とはいえ全てがわかるわけじゃない！

俺は香坂さんを抱え上げ、無数に散らばる鏡の一つに飛び込む。するとするりと鏡の中へと入り込み、そのまま《黒》ゴーストの近くの鏡の欠片から飛び出した。

「あ……………あれ……………さ、さつきまで私……………」

香坂さんは俺の能力にまだ対応しきれていないようだ。

「とにかくここにいてくれ、それと……………ゴーストたちを頼む……………」

ゴーストは身体を燻らせ、意識を失っていた。

心臓こそ動いちゃいるが、完全にやられてしまっている。

「精神が追い込まれて能力が進化したのか？　それでも貴様如きが私に攻撃など——

——」

不意に頭に流れ込んだ言葉。聞いたこともない異能力の名前。きつとこれが俺へ急激な変化をさせたのだろう。

《《オーバーフロー》》

「なに？」

「俺も知らねえよ、興味もねえしどうでもいい」

そう、そんなことはどうでもいいんだ。俺は。俺は——ッ！

散らばった鏡の欠片を経由して、あの雷能力者の目の前に移動する。そして……

「速——ツ!？」

「うおおおおおおおおおおおおあああああつつつつつつつ
!!!!!!」

力の限りの全力でぶん殴った。

三つの砦

「蓮太……………そう、殴ったのね」

希亜の声が聞こえてくる。

「はあ…………… はあ……………！」

躊躇いはあった。後悔もあった。だけどそれじゃあダメだと知った。それじゃあ何も解決しないんだ。誰も守れないんだ。

「貴様……………」

「まあ、立つよな」

殴られたあの電気男は頭を強くぶつけたのか、顔に血が垂れている。

「あまり調子に乗るなよ、貴様如き私の能力を使えば簡単にぶち殺せるんだからな」
「やってみろよ」

「なに？」

「俺を殺したいんだろ……………？」

クソ……………思った以上に負担がデカイな……………このペースだとあと2分も持てばい

い方が。

「雑魚のお前じゃ無理だろうけどな、空にでも昇ってリングゴでも食ってる」

「ヤハハ……………不届き」

立ち上がった男の腕から、能力を発動された雷が俺に襲いかかる。

が、その辺に散らばっている鏡の欠片を少し集めて、その雷を空の彼方へ反射させる。そして電気男との一進一退の攻防。殴り、蹴り、殴られ蹴られの繰り返し。お互いにその攻撃はまともに当たってはおらずに、必要最低限の動きで衝撃を外へと逃がし続ける。

「ヤハ！ アイツが貴様を恐れる理由がわかる。その驚異的な運動能力、アーティファクトをものともしない選ばれた力！ なるほど、そりゃあ消したいわけだ！」

「……………イースカ」

「確かに貴様は強い！ 怒りを糧にして更に力量を高める奴は初めてだ！ だが……………それだけでは私には勝てんぞ！ 私は《雷》ッ！ その恐ろしさをとくと味わうといい!!」

「……………うぐっ!？」

お互いの肉弾戦の中、俺の攻撃を軽く弾かれた隙間に勢いの乗った蹴りをいれられる。

まずい……………綺麗にミゾに入ったッ！

「少々《雷》を甘く見たな……反射の能力者ッ！」

軽く後ろへ吹き飛ばされる俺の頭を驚掴みにし、強く地面に叩きつけられる。

なんだコイツの異常なスピードは!?! なんだコイツの異常なパワーは!?!

頭が……潰れる……ッ!

「雷を使った攻撃が効かんとすれば、それなりの戦い方がある」

「あがつ……」

「このまま……死——ぶっあッ?!?!」

何が起こったのか分からなかった。

あまりにも突然なことで理解するのに遅れたのだ。

「何をしている! 竹内蓮太ッ!」

「高……峰……」

あの男を殴り飛ばして助けてくれたのは、高峰だった。けれどアイツもあの雷攻撃を
まともに食らっているからだろう、足元がフラフラで今にも倒れてしまいそうだ。

それにしても……よくあんな重い一撃をくりだせたものだ。

「まだ動けたのか……ゴミめ……うっ!?!」

そして立ち上がろうとしていた電気男に、さらなる蹴りの追加攻撃を入れたのは新海
だった。

「ハア……………ハア……………！　なんとか……………動いたッ！」

「新海……………!?　お前まで——」

「九條に能力を使ってもらった……………、人の記憶や視界を奪えるのなら、俺の痛覚も奪えるんじゃないかってな」

チラツと後ろを見ると、少し苦しそうに方目を瞑った九條さんが下手な作り笑いを浮かべていた。

「竹内蓮太っ！　君はあとどれ程戦える？」

「ああ……………！」

正直限界が近い。

この異常なまでの強大な力を操るには、まだまだ俺の実力じゃデカすぎる。

だけど……………ッ！　もってくれよ、俺の身体ッ！

「1分でケリをつけるッ！」

その瞬間に雷に打たれたかのように、あの男の身体がビクンッと剃り浮かび、軽々とその場に立ち上がる。

「『身帯電変換』……………」

その身体には電気がバチバチと走り回っていた。

「脳からの信号ではなく、雷の能力で直接身体を動かすドーピングだ。気をつけろよ

……今からの私はもう甘くはないぞ」

雷……？ いや……、そういう事か。

「要するに電気マッサージってことかよ」

中々めんどくせえ技持ってんじやねえか……この野郎。

意外と技が多彩だな。まさか身体強化までできるなんてよ。

……認める。マジで強い。俺一人じゃ勝てなかつたと思う。

「……………はっ！」

さっきの蹴りが今になって効いてきたのか、急に喉から鉄の味がする何かの液体がこみあがつてきて、吐き出してしまう。

「竹内……やっぱりお前、体が……」

「うるせえ……！ 今倒れる訳にはいかねえだろ！ 新海もそれが理由で立ち上がった

んじやねえのかよ！」

「……………わかった。今は聞かないでおく」

「しかし竹内蓮太よ。あの者をどうやって止めるのだ、君もそうだが……私も長くは持たないぞ」

「俺たちは一瞬でもいいから隙を作ればいい！ アイツが反応できないタイミングで希亜の一撃を決める」

「希亜……………ふむ、あの黒服の彼女か」

あ、そうか……………名前を言ってもコイツらには伝わらないんだったな。

「ああ、アイツは初撃を弾かれてからははずつと力を溜めてもらってる。もう十分な威力を期待できる頃だ。それを当てれりゃあ勝機はある」

「なるほど、それは話が早い」

「だったら……………やることは一つだな」

各々が攻撃の為の構えを取り、あの電気男に矛先を向ける。

俺たち男三人衆は正直どんな連携ができるかはわからない。それにみんなが体力の限界が近い。

けどそれは相手も同じはず。いくら強大な力を持った人間でも、数で攻めりゃあチャンスはくるはず！

「希亜ッ！ べは頼んだッ!!」

「任せてッ！」

「ヤーハッハッハッ！ 痺れる覚悟はできたかな？」

「行くぞお前らッ！」

「うむッ！」
「おうッ！」

未知の敵、守れたものは

「真神流——」

まず先陣切って飛び出した高峰が、何やら独特な構えを取り始める。

正拳突きのように腰を下ろし、逆手に下ろした右腕を回転させ、突き上げるようにその掌底を振り上げる。

「螺旋掌らせんしょうッ！」

「ヤハハッ！ 遅いッ！」

その掌底が当たるとも思わなかったかッ!? 私には急ブレーキをするように後ろへバックステップ。
………が。

それは読んでいる。

「そんな技に当たるとでも思ったかッ!? 私は身体だけでなく、ありとあらゆる速度も強化しているのだぞッ！」

「……ッ！ 見誤ったか!?!」

そして電気男の雷が纏われた片手が高峰を襲おうとした時——

「それでもないぜ?」

俺は鏡の破片を経由して、後ろへ飛んでいる電気男の更に後ろへと回り込む。

「——ッ!」

「身体強化はお前だけと思うなよ……………ッ!」

俺たち3人とも本来なら動けないほどの疲労とダメージを受けているんだ。なのに今は考えられないほどの爆発的な力を使っている。

新海が蹴り飛ばせたのも、高峰が技を使えたのも、俺が今も動けているのも、全てはあの人のおかげだッ!

俺の視線の奥、電気男の更に先にいる女の人。

あの目は……………多分《エデン》の方だな。

胸の辺りから紋章が光っている。

能力の詳細は分からないが……………まず間違いないだろう。

「貴様……………ッ!」

「ほらよッ!」

背中を向けて迫ってくる電気男に、全力で蹴りを入れる。すると飛ばされたその身体は再び高峰の方へと飛んでいき、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた高峰がもう一度あの不思議なポーズを構える。

「流石だ……………我が親友よッ！」

「ぐ……………ッ!? 貴様如き……………ッ! ぐおっ!?」

俺に飛ばされながらも能力を使おうとした電気男に向かって、新海が高峰の背後から飛び出してきて、その顔面にぎこちない蹴りを入れる。

「いけっ! 高峰ッ!」

「私の最大技……………ッ!」

仰け反った電気男に向かって、並々ならない速度であの掌底を叩き込むッ!

「真神流—— // 攻めの型 // 螺旋掌らせんしょうッ!」

「う……………!?」

今度は電気男の背中にクリティカルヒット。しかし高峰は構えを解かない。

「真神流の真髄を見せてやる……………! はあああああッッ!!」

「龍震脚ッ!」

今度は身体をぐるりと一回転させ、遠心力を使った舞い上がる龍のような蹴り。

名前はちよつと痛々しいけど威力は確かだ。その証拠に人の身体が地面に着くことなく蹴り上げられている。

「裏流転うらゐるてんッ!」

流れるように続く連撃の嵐。一切の油断も慢心もしない隙のない打撃。

俺も少し格闘技をかじってたから分かる……………コイツ、腕はマジだ。

「これで終わりだッ！ 果てろッ！ 鬼獄掌きごくしょうッ!!」

怒涛のラッシュの最後の、両腕を強く前方へと差し出し、かめはめ波でもするんじゃないかと疑うレベルで気合いの入った掌底を電気男にぶつける。

「……………ッ!?!」

もう相手は悲鳴すらあげていない。声も出せないのだろう。

口や至るところの傷口から血を漏らし、流れのままに体を動かされている。

そして当然、高峰に吹き飛ばされた電気男は、後ろにいる俺の方へと向かってくるので……………

「出過ぎたマネはしませんように……………」

片足で男の頭を引っ掛け、その勢いを殺さずに地面に強く叩きつける。

「き……………き……………ま……………ら……………ッ!」

そしてそのまま……………

「パニッシュメントッ!」

黄金色に輝く無数の鎖が、倒れた電気男に向かって襲いかかる。

これは……………確か拘束用?

希亜にも何か考えがあつてのことだろう。今攻撃をしてしまうと黙らせるだけでは

なく、下手をすると殺してしまうかもしれないという本能から、能力をセーブしたのかもしれない。

「よし……」

「私たちの勝ちだな」

「後は天を——」

と三人とも完全に気を抜いていた瞬間、襲いかかった無数の鎖が弾かれるように砕け散ってしまう。

バキンッ!!

パキッ!

ジャラジャラと力なく地面に落ちていく鎖の奥には見たことの無いもう一人の男が現れていた。

「……ッ!?!」

「なーにやられてんの雷あづま、お前ってそんなに弱かったっけ?」

「貴様……何しに来た」

「何しにつて……そろそろ終わったかなって思つて来てみりやお前、ボコボコにやられてんじゃん。そりや近寄るでしよ、一応仲間だし」

仲間……? どういう事だ? まさかこいつにも他にまだ敵がいるってことか!?

「薬は？ あの子には投与してんの？」

「抜かりはない、後はあのゴミたちを殺すだけだッ！」

「だーから勝てないって。あのお人形さんにも言われてたろ？ 下手に喧嘩を売るなッて」

薬？

「どういう事だ?! 何が起きてるんだ!？」

「おい………てめえ誰だよ」

「あ？ まーそんな威嚇しなさんな。雷を倒すなんてお前ら大したもんさ」

「君は、随分と余裕だな」

高峰が一步俺たちの前に出てあの乱入してきた男に牙を向ける。

「余裕なんてねえよ、こっちはまさかこんな結果になるなんて思いもなかったっての。でもまあ………目的は達成してるんだ、これ以上無駄に争う気はねえんで安心しな」

「待てよ、薬って………まさか最初の——」

「じゃあな兄ちゃんたち、またいつか会おうぜ」

新海が何かを聞いただそうとしていたが、あの不思議な男は何も答える暇を作らずに、雷と呼ぶあの電気男を担いで一瞬にして消えてしまった。

そして消えた後には石ころが一つだけポロツと落ちる。

天ちゃんは、ちゃんとこの場にいた。

あいつらの目的はなんだったんだ？ 薬って一体どういうことなんだ？ 仲間って

まだいるのか？

— そんな色んなことを考えてはいたが……………本当に体力の限界がきてしまったように、俺たち三人はバタバタとその場に倒れてしまった。

4月26日

男の子なんてみんなえっちだ。女の子だってきつとえっちだ。人間なんてみんなえっちだ。

痛い。

身体が悲鳴をあげている。真っ暗闇の中、ただそれだけが唯一理解出来たことだった。

そしてなんか暖かい。

そんな暖かさから引つ張られるように、俺は意識が移動していった。

「ん……………」

この部屋には希亜がいる。しかもそれだけではなく、香坂さんも天ちゃんも、高峰もいた。

「異常っつーか、まずはこの人をどうにかしないとな」

「……そうね。九條さん、蓮太が目を覚ましたわよ」

トントンと肩を叩かれ、身体を揺さぶられる九條さん。すうすう言つてた割には意外と早く目が覚めたようだ。

「……………ほえ？」

アホみたいな声をだしたけど。

「たっ！ たたたたっ！ 竹内くん大丈夫ツ!? どこか痛いところはなない!? ま、ま

ままだ安静にしててね!? あ、そうだ！ すぐに身体が温まる飲み物を——」

さつきまで寝ていた九條さんは、俺を顔を見るや否や、非常に焦った雰囲気が必要以上に俺を看護しようとする。

「九條さん落ち着いて」

「いいっすなあ先輩。みゃーこ先輩にめっちゃ好かれてますやん」

「こら天、ちやちやをいれない」

「どしたんにいやん、心配すんなよおにいやんにはあたしがいるじゃん」

「……………」

ダメだ！ 口を押えられて何も喋れねえ！ つかなんなだよこの俺の顔面を抑えて
いるやつはよ！

「あつ……………んんっ……………！」

しかもさつきから俺の頭を挟んでるのは一体何!? ちよつと柔らかいんですけど!?

「新海くん、ちよつとその雑誌貸してもらえるかしら?」

「あ、結城……………そりや別に構わないけど……………どうするの?」

つかさつきからゴーストの声なんかエロくね? 妙に色っぽいというか妖艶な感じ
というか。

「テメツ……………いい加減に……………ッ!」

といてゴーストが俺の顔面から離れた瞬間に見えたもの、それは足。と——

「……………ふんっ!」

「へぶっ?!?!」

勢いよく何か硬い物が俺の顔に強く叩きつけられた。

「セクハラのパン」

「ちよ! ちよつと待て希亜! 俺は別にセクハラなんてしてないっつーの!」

言いがかりにも程があるだろ! 俺は真剣にゴーストの心配をだな……………!

「オレの股に顔を埋めて何言ってるんだッ！ バカッ！ アホッ！ 死ねッ！」
 「はあ!? 俺はそんなことしてな——」

と反論する間もなく、ゴーストに何度も何度も顔面に蹴りを当てられる。

「ほぶっ!!? ……ちよ……まつ……ぶほっ!!?」

「うっわー………フードの人、ケガ人相手に容赦ねえ……」

天ちゃんっ!!? 引いてる場合じゃなくて助けて欲しいんですけどっ!!?

「あつ、あの………竹内くんはそんなことする人じゃ………な、な、………ない………と思うから………ね?」

九條さんっ!!? 今の微妙な間は何!? もしかして心の中ではもう俺は変態認定されてますっ!!?

「蹴るのは構わないけど物は壊すなよー? あと壁に当てて大きな音もたてないでくれ」

新海っ!!? 近所への配慮よりもっと気にして欲しいことがありますんっ!!?

「しかし………あのゴーストがここまで心を開いているとはな。ややキャラがズレてしまっただけ………それも運命、神の選んだこと………か」

高峰っ!!? 何感慨に浸ってるんだよ! 言葉に内容がないことを言っていないでゴーストのこと知ってるならまず止めるよ! 頼む! お願ひ!

「あらあら、素晴らしいじやありませんか。見ていて微笑ましいですわ。私もああ致しわたくしたらよろしいのでしょうか？ 蓮様は受けの方が大変嬉しそうですし」

香坂さん違うっ！ 俺はドMじゃないし、そんなこと求めてません！ つか《エデン》モードじゃねえか！ 微笑んでねえで救出を求めます！

「ああなつたのは蓮太が悪い。罪はちゃんと償うべき……………ふん」

ちよつと待つて希亜ッ！ そんな簡単に俺を見捨てないで!? てかなんで若干怒つてるの!? あれかい!? 意図してないとはいえセクハラをしてみましたことについて怒ってるのかい!?

「ちつたあ反省したかよ大将」

「……………あ、パンツ白いね——」

「死ねっ!」

「ひでぶっ!」

と何故かこととん蹴られている俺の隣で、最後に聞こえたのは九條さんの乾いたような戸惑いの笑みだった。

なんか……………俺ツイてねえな……………

「あ、あの……………ゴーストさん？ 一応……………竹内くん怪我してるから……………」

でも唯一俺を助けようとはしてくれた。だから心の中で一言。

えつちでごめんなさい。

七人のユーザー達

「……………痛っ」

「我慢してね、変なところに当たっちゃったりしたら大変だから」

「はい」

ゴーストからの激しい暴力によって新たに傷口ができたり、手当てしていた場所が悪化したりで余計な傷を負った俺だが、なんだかんだで優しくしてれる九條さんに消毒液を塗って貰っていた。

「みゃーこ先輩優しいっすね〜」

「それは俺も思ってた、まさかあんな戦いの後にあの時よりも激しく蹴られるとは思わなかったっす」

ぶつちやけ今の俺の怪我の半分はゴーストから食らった気がする。

「テメエが悪いんだろがッ！ ……二度目はないからな」

「はい、すみません」

俺だってああしたくてやった訳じゃないのに……

「そんでエロガツパ先輩はもう大丈夫なの？」

「エロガツパ先輩はやめて？ 天ちゃん。それはすつごく傷つく。あと表現が古い」

「エロ内先輩の体の調子は——」

「だーかーら！ エロを付けるのをやめろお！ なんだよ！ 悪かったって言ってるじゃん！」

「猛反省してるから！ つか俺だけが責められるって納得いかないんだけど!? 明らかにみんな俺の事を放置してたじゃん！」

「つかよ……俺のことはどうでもいいんだ、俺が気になってるのは……ゴーストお前はどこか身体に不備はないか？」

どうしてもあの時の傷が気になる。

何故《雷》の能力で焦げたのか、それにこの場にはいないけど《白》ゴーストの怪我也そう。なぜ幻体である彼女が傷ついたのか。

「別に問題は………ねえよ」

「……………」

見た目の傷は全くない。でもこれはきつと俺がそうイメージしたからだ。

いつもの感覚で傷一つない身体を創ったからだろう。反応から察するに……………

「休むか？」

「……………ああ」

表情は辛そうだ。きつとさつき大暴れしたのも彼女なりの気遣いだったのだろう。敢えて普通を演じるることによって俺を安心させたかったのかもしれない。

「わかった、ごめんな」

最後にそう言つて能力を解除する。すると彼女は霧のようにスーッとその場から消えて、俺の魂へと戻つていった。

「なあ竹内。色々と話しておきたいことがあるんだが……………そろそろいいか？」

そう俺に語り掛けてきたのは向こうチームのリーダーである新海。さつきから気になつてはいたんだが窓の外が暗い。あの日も外は暗かったから……………おそらく俺は一日は寝てしまつてるんだろう。

悪いことしたな。

「ああ」

「て言つてもどこから話せばいいか……………ちよつと説明することが多くてさ」

ポリポリと頭を掻きながら言葉に悩む新海に、とりあえず俺が気になつていることを質問する。

「みんなは怪我とかはないのか？」

パツと見は全員意外とケロッとしているけど、あの攻撃は精神を傷つけるのが目的の

能力、なにか身体に異常が起こっていてもおかしくは無い。

「私たちは……大丈夫。でも、竹内くんと新海くん、それに高峰さんは身体への反動が少し大きい……かな？」

答えてくれたのは九條さんだった。その表情はやや暗い。

「特に酷いのは竹内くんだった。あの夜からもう二日も経過してるんだよ？　ずっと目を覚ましてくれなくて……心配だった」

「二日……!?!」

今にも泣きだしてしまいそうな声で震える九條さんを宥めるために、感謝の意を込めてポンポンと肩を叩く。そしてその後偶然目が合った希亜にもう一度聞き返した。

「二日って……」

「私たちが何とか生きながらえたあの日が4月の24日、そして今は4月の26日……つまり今日で二日目の夜って所ね」

「そんなに経過してたのか」

「昨日までは中々この場の全員が起き上がることはなかったけど……蓮太は特に長かった。貴方だけだったのよ、昨日目を覚まさなかったのは」

「……心配かけたな、悪い」

「別に」

なんだか希亜の態度が素っ気ない。なんだろ……初対面の時のような冷たい対応だ。こりや本格的に怒らせちゃまったかもな。下手をすると嫌われてるのかも……

なんて思っていたら一言だけ、聞こえてきた。

「生きてくれているのなら……それでいい」

「……………ああ」

考えるべきことは山ほどある、対処すべき問題も沢山ある。けれど、俺はこんな仲間をもてて良かった。

絶対に失わせない。

「なんていうか……やっぱり先輩、フードの人とそっくりすよね。名前なんだっけ？

コールド？」

「ゴーストだろ、なんで冷えてんだよ」

何気ない新海兄妹の会話。最初は特に違和感を覚えなかったが、ここに来て不自然なことに気がついた。

「あれ？　なんで二人はゴーストのことを知ってるんだ？」

「それは……申し訳ありません。私が勝手に説明してしまいました」

「香坂さん……」

その瞬間に頭によぎったのはあの光景。ゴーストが助けしてくれる直前のあの瞬間。

「いや、それならいいんだ」

もっと上手く助けられただろう。もっと誰も傷つけずにやり過ごせただろう。ホントみんなには申し訳ない。

「ねえ、蓮太」

そこで不意に声をかけられる。

このメンバーで俺の事を名前で呼ぶやつは一人しかいない。

「どうした？ 希亜」

「私たちの敵は、石化の能力者だった」

「うん」

「けれど期待した情報は得られず、それどころか同じ危険度を持つ影の刺客が現れた」

「だな」

「強大な敵に対して、私たちは小さすぎる。ただ一人の狂気すら止めることが出来なかった。私たちは……………弱い」

そう……………だな。

あの瞬間は、俺たちだけじゃどうしようもなかった。全員の力を合わせてやっと一人を追い込んだと考えると……………これから先のことを考えたくもない。

「だから……………力を合わせようと考えている。私の能力は、正直無敵だと思っていた。私

と貴方が合わさればどんな闇も振り払えると確信していた……」

「希亜。そう俯くな、言いたいことはわかったらあとは俺に任せろ」

珍しい。希亜が人前で弱みを見せるなんて今までじゃ絶対なかった。

誰よりも強くあろうと振る舞う姿が印象強いからか、違和感しかない。もちろんそんな時にも必要、心の逃げどころは絶対にあつた方がいい。が。

「ええ、ごめんなさい」

「いいって」

そうしてベッドに座っている俺の隣に歩いてきて、ゆつくりと並ぶように座った。

「じゃあ……俺が知ってる大体のことはみんな理解してるって解釈でいいのか？」

そう質問すると、そこでやっと高峰が口を開いた。

「ああ、あらかたの情報彼女は彼女から聞いた。そのつもりで構わない」

「そっか」

希亜が言わんとしようとしていること、いつもなら率先して彼女がリーダーとして話をまとめてくれるんだろうが……とてもそんな精神状態では無いだろう。

「俺たち《ヴァルハラ・ソサイエティ》の敵は石化のユーザーだった。街を脅かす悪を許せないからだ。そしておそらく、あの雷野郎の仲間にも目的のユーザーがいると思う」

この言葉を聞いた新海も、俺に合わせるように口を開く。

「俺と九條、そして天の目的もそうだ。《魔眼》を回収して、アーティファクト事件に終符を打つこと。これが目的。そしてあの二人組を見るに……多分まだ他に危険なアーティファクトを持つ仲間がいるはず」

そして最後に二人で見つめる先は高峰。

「我ら《リグ・ヴェーダ》の野望は、ユーザーの理想郷を創ること……だった」

リグ・ヴェーダ。そういう俺と希亜が乱入してきた時もそんなことアイツが言ってたな。

「AFを所有する我らが異分子と認定され、世の中から排除される未来を見据えての答えだ。だが……今や状況が大きく変化した」

「形は違うが、事実として我々は未知の組織から襲撃を受けている。目的は定かではないが……問題は山積み、正直私とゴーストとエンプレスでは手一杯なんだ」

俺たち男三人は、互いに視線を合わせてその場を立ち上がる。

そして一歩、また一歩と歩いていき、三人が向かい合うように立つ。

「我らの敵は同じ」

「各々はまだ未熟だが」

「強大な敵に立ち向かうには、対策は一つ」

俺は新海に手を伸ばし、新海の腕を掴む。そして新海は高峰に手を伸ばし、高峰の腕

を掴む。高峰は俺に手を伸ばし、俺の腕を掴む。

片手で作られたトライアングルをがっちり固め、あるひとつの目的の為に、強く決意を抱いた。

だから俺は口を開く。

「俺たちはそれぞれ、前には色々腹の探り合いをしてたけど……この先にいる敵は同じだ。せつかく同じ方向を向いている者同士がバラバラに動いちや意味がねえ」

三人の腕を掴む強さがギユツと強くなるのがわかる。

もう既に俺たちの心は重なった。

「いいか、俺たちは同士だ。抱えている問題は死ぬほどあるが、俺たちなら全てを越えられる」

「こんな絶望に押しつぶされるなッ！ 全員目的を果たすんだッ！」

「ああッ！」

「ええっ！」

「うんっ！」

「はいっ！」

3人目

「それで……………散々格好つけたわけではありますが、具体的には何すんの？」

天ちゃんの何気ない一言で、その場のみんなが黙りこくる。そりやそうだ、だって何したらいいかわかんないんだもん。

「何ってお前、そりやあ……………何すんだ？」

「え、あんなにやってやんぜ！ 的な雰囲気だしといてそれなの？ にいやん」

「うっせーな！ 今のは気持ちいを合わせるべきところだろーが！」

なんか……………もうこの兄妹ケンカにも慣れてきたな。

「ま、まあ……………とりあえずは今の俺たちに足りないものを補いつつ、アイツらの搜索つて所じゃないか？」

「足りないもの……………ふむ……………足りないもの……………か」

高峰を初めとした各々が、色々と頭を悩ませる。

落ち着いて考えと……………あの時に俺に足りなかったのはなんだろう？ 平常心？

強さ？ 対応力？

考えれば考えるほど迷走していつている感はあるが……………

「そうか！ わかったぞっ！ 今の我々に必要なものが！」

「んだようるせえな高峰」

「いや済まない、真実を理解してしまつてつい…………な」

なんだよそれ、普通に閃いたって言えよ。

「ズバリ！ 我々に足りないものは決定打だっ！」

「決定打？」

「そうだ！ 私の真神流のような《技》を身につけるべきだ！」

真神流…………ああ、あの厨二チックな攻撃か。

要するに攻撃手段を身につけろつてことかあ…………まあ、うん。わからなくもないが

…………

「そんなこと言つてもなあ……………」

「なあに心配は無用だ！ 竹内蓮太。君の蹴りは見惚れるものがあつたぞ？」

…………認めるしかない。俺はあの時に人を殴り、人を蹴つた。

封印したはずの暴力だつたが…………あの時はやらなきやいけなかつた。それに、こ

れからも。

もちろん昔とは違う、殴らなきや、蹴らなきや、大切な人を守れないから。

「かもな」

やや愛想の無い返事を返してから、その場をスッと立ち上がり、新海に許可をとつてからベランダに出る。

理由は一度頭を冷やしたいからだ。

俺の悪い癖でもあるんだが、一度ネガティブなことを考えてしまうと、ずっとそれを引きずってしまう。

そんな考えを改めるには、こうやって夜風に当たるのが一番だ。

考える事は山ほどある。

もちろん俺はまだ何も知らない。さっきは同士だなんて言っただけ、あれは希亜が協力するつもりだったからみんなを信用しただけ。

アイツがそういう決断をするってことは、少なくとも敵じゃないと判断したんだ。危険はない……と。

そんな時、ガララッと後ろの窓が開く音がした。

誰かを確認するまでもなく、その人は俺の腕にゆつくりと寄り添い、ピタリと肌と肌がぶつかり合う。

「このように所で何を悩んでいらっしやるのですか？ 蓮様」

「香坂さん……」

なんで急に俺の腕にしがみついてきたんだ？　いくらなんでもちよつと大胆過ぎませんか？

でも離れてくださいとは言えない俺がいる。だって………うん。おっぱい当たってるし。

気にしてないフリをしよう。

「そりゃ悩むよ。掴んだと思つた情報はハズレで、《魔眼》を追い詰めるどころか、新たな危険人物がでてきた。しかもそいつらは俺たちのように仲間を作つてると来たもんだ」

「……………はい」

「幻体であるゴーストになぜ傷を残せたのか、アイツらが天ちゃんを狙つた理由は何なのか、そもそもとしてこんな事をする目的はなにか。悩みのタネを考え出したらキリがない」

それに現状で出来る対策だつて思いつかない。急な襲撃に対応できるかも分からない。い。

頭が痛くなる。全然冷静になれてないな……俺。

「蓮様……」

さつきまで余裕綽々といった雰囲気だった香坂さん（エデン）が、言葉を重くして俺

を呼ぶ。

どうしたんだろう。こんなに不安そうな顔をして。

何故だろう。さつきから小刻みに震えているのは。

「どうした？」

「申し訳ありません……私わたくし、皆様に……そして蓮様に謝らなければならぬ事があり

ます」

俺の腕を握る手に、ほんの少しだけ力が籠る。

そうだ。あの時に気になってたことがあった。今は無事だからいいんだけど……

「……聞かせてくれ」

きっと本人からしても、伝えることが怖いことなのかもしれない。躊躇うつてことは、それに罪を感じている何よりもの証拠だ。

告白しようとしているのも、このままでは何かがマズいと思ったからだろう。

それに皆様についてことは、まだ誰にも伝えていないってことだ。

だつたら黙つて話を聞いてあげた方が彼女も楽になるだろう。一人で抱えたままだつてのはかなり辛いから。

「二昨日の夜です。私わたくし達が白陀九十九神社で司令官さん達とお話してありました」

うん、その話し相手のことを知ろうとして、天ちゃんが偵察に行ったんだよな。

「あつ、司令官さんの名前は高峰さんってことはもうご存知ですか？」

「……いや、知らなかったけど、大体察しはついてたから大丈夫」

「では、高峰さんで。あの時に現場にいらしたメンバーは、わたくし私と高峰さん、そしてゴーストさんでした」

「招集の令を受け、三人が集まっていた時に天さんがやって来てたみたいなんです」

……みたい。ねえ。

「ですがすぐにゴーストさんに目をつけられ、天さんは捕まってしまいました」

と、言うことは………やっぱあの電話の主は高峰か。ま、さつき香坂さんが言うてたけど。

「………それ………で」

そのタイミングで、話しづらそうに言葉を詰まらせる香坂さん。

そこから先は俺の知らない出来事だ。俺と希亜が神社へたどり着いた時にはほとんど壊滅状態、二人を除いて既にやられていたんだから。

けれど俺が言葉をかける間もなく、自らの意思で彼女は言葉を紡ぐ。

わたくし「私が……呼んだんです。あの………《雷》のユーザーを………」

「え………」

まさかの発言。

いや、落ち着いて考えてみれば、その可能性も十分にあった。だってあの時はあの男の言いなりになっていったから。

でも……………!

「理由があつたんだろ？」

「え……………？」

「だから、香坂さんがそうしなきゃいけなかった理由があつたんでしょ？」

今、全てを俺に伝えようとしてくれる時点で、俺の中では十分に信頼出来る人だ。だから俺たちを嵌めるためにそんな行動をしたなんて思いたくもない。

「あ……………あの……………」

ドクンツと心臓が大きく鼓動するような感覚とともに、一瞬で香坂さんの雰囲気が変わる。

絡んでいた腕はするりと離れていった。

……………よく分からないけど、エデンモードを止めたようだ。

「どう……………して……………、私……………なんか……………を」

「どうしてって言われてもな……………、なんつーか、そのお、疑いたくないんだよ」

「……………？」

「今、こうして俺の知らないことを教えてくれてるし、それに……………あの時、俺た

ちの身を案じてくれた」

「そんな優しい人が敵だなんて思わないよ」

俺の正直な心を言葉に変える。

この時の香坂さんは小動物みたいでなんか臆病だから、できるだけ優しい言葉で。

すると返答に困ったのか、ポケットからスマホを取り出して、ある画面を開き、俺にそれを見せるように手渡してきた。

その画面に写されていたものは……………

「なんだよ……………これ……………」

思わず声が漏れた。

そこに書かれていたのは脅迫文。内容は天ちゃんを誘拐すること。拒否すると香坂さんを含めた周りの人達を殺すこと。

最後の方には黙って指示に従えともある。

「わた、私……………の、能力……………は……………想像を……………具現化でき……………るんです」

想像の具現化……………

「きつ……………と、この方……………は……………そ……………れを……………知って……………て」

こんな文をいきなり送られたりした香坂さんはどんな気持ちだっただろう。

自分が犯罪行為を行わないと、自分が死ぬかもしれない。周りの人が殺されるかもしれない。そんな恐怖と一人で戦ってたのか……!?

送られている文の中には他言無用はもちろんのこと、様々な詳細の流れも書かれている。

だからあの時にあんな反応だったのか。

「馬鹿野郎………ッ！　じゃあなんで………！　あの時に俺たちに逃げろって言ったんだよ!」

「……ッ!」

つい感情的になり、強く言葉を発してしまふ。

「仕方なかったんだろ!?　こうしなきゃどうしようもなかったんだろ!?　なんであんな危険なことをしたんだよ!」

香坂さんは目を丸くして驚いている。最初こそはビクツと身体を震わせ、俺に恐怖していたが、俺の言葉を聞いて違和感を感じたようだった。

「え………?　え………?」

「お前が狙われるんだぞッ!?　あん時はウチのゴーストが助けてくれたけど………あんなの死に行くようなものだ!」

実際、俺だけじゃどうしようもなかったと思う。最悪少しでも離れるように投げ飛ば

したかもしれないけど……結果的に俺たちはゴーストに助けられた。

「もつと自分の命を大切にしろよ……!! 馬鹿か!」

さつきまでは知らなかったから優しい人だと思つて終わった。だけど、こんな事情があるんなら話は別だ!

文の内容から読み取るに、作戦を裏切つたら殺すつて言われてるようなもんだらう。それがわからなかったわけが無い。

……でもついで口が悪くなつちまつた。馬鹿は流石に言い過ぎたな……

現に、香坂さんはもう泣いてしまつてる。

「でも……生きててよかつた。香坂さんが無事でよかつた」

「ごめんなさい……!! べんなさい……!!」

「あ……あの……その……、強く言はずぎたな、悪い……」

ボロボロと涙が凄い、ついでに鼻水も凄い。

「……ティッシュ取つてくる」

なんかもう見ていられなくなつて、部屋の中からティッシュ箱を持つてくる。

そこから何枚か取り出して香坂さんに手渡すと……

「あびがほうごぎいます……」

「言えてない言えてない……」

いや泣かしてしまったのは俺だけどき……やっべえなマジでやっちゃったな。なんて反省していると、なんかこう……人前で出しては行けないような音を出して、豪快に香坂さんは鼻をかみはじめた。

「——ッ！」

あ……うん。なんか……ええ……う？

「すみませんでした……」

「うん、別にいいんだけどさ」

なんかこう……今の一瞬でイメージがかなり変わってしまった。あれ？ っと思っ
ちやった。

「とりあえずちよつと言いすぎたよ、ごめん」

「い、いえ、少し驚いただけ……です。あんなに私に優しくしてくれた人……初めて……」

いやいやいや……。それは嘘でしょ。

誰だつて女の子が泣きだしたら心配するつて。あ……そこじゃないのか。

「やっぱり竹内さんは、白馬の——」

「まあでも——」

と香坂さんが何かを言いかけてた気がするが、よく聞き取れなかったのでとりあえず

俺の言葉を続ける。

「あんな脅迫文が送られてきて怖かったと思うけど、もう一人じゃないんだ。だからこれからはみんなを頼るといいさ。もちろん俺に相談してくれてもいいけどなっ」

「相談……」

「ああ、また何か狙われるようなことがあったら誰でもいい、直ぐに助けを求めたらい。きつとみんな力になってくれる」

何よりも腹が立つのは相手の手口だ。人の優しさに漬け込んでこんな酷いことをさせるこのやり方が気に入らない。

……考え出したら段々腹が立ってきた。

「じ、じゃあ……」

「ん？」

「竹っ……内さんに、そ、相談……しても……」

まあ……元々俺たちは少しとはいえ面識があるからな。もしかしたら香坂さん的には俺が話しやすい相手なのかも？

うーん……できるだけ安心させてあげたい。君にはちゃんと仲間がいるんだよってことを伝えたいんだが……どうすれば……

……よし。

「ええっ?! ええっっ?!?!」

気持ち伝えるには相手の目を見ることが一番。そして真っ直ぐに向き合えばより伝わると思う。

その答えに行き着くと、俺は両手を香坂さんの肩に乗せるようにしてから、相手の目を真っ直ぐに見る。

ちなみにこの時点で香坂さんは身体をカチンコチンに固まらせており、目をぐるぐると回していた。

「いくらでも俺を頼ってくれ! 上手くいくかはわからないけど……………全力で香坂さんを守るから」

そう伝えると、更に目がグルグルと回り、視線があちらこちらへと泳ぎまぐる。

そしてとうとう限界が来たのか……………

「は……………はひいひい!」

と鼻血を垂れ流してなんか幸せそうな表情で昇天していた。

「……………え? ちよちよちよっ?!?!? 香坂さん?!? 香坂さーん!?!」

なんで俺がこんな目に……

「新海ッ！ ベッド貸して!!」

本物のエデンに行つてしまいそうな香坂さんを抱え上げ、すぐさま彼女をベッドに寝かせる。

「え？ いいけど………え!? 香坂さんどうしたの!？」

「知らん！ なんか話してたらいきなり鼻血出して倒れた!」

サツと軽く彼女の顔を拭いてやり、一応適当なビニール袋に氷を入れて持つてくる。

その途中で何事かと思つたみんながワラワラと香坂さんの元に集まつていた。

ええ……つと、氷を入れて、水を入れて……!

「エロパーイ！ なんか香坂先輩、えげつない声出して幸せそうにしています!」

「エロパイ言うなっ!?! てかなんか知らんけどそつとしといてやれ!」

バタバタと氷水を用意して、香坂さんの額に乗せる。

……これなんか意味あるのかな。

「そ、そんな………まだ私たちグフツ、でも貴方がそのつもりならグフツ」

なにになになになに?!?!? なにこの寝言? わかんないわかんない。めっちゃ怖い。

しかもなんかオタクっぽい笑いが出ちゃってますけど!! 大丈夫ですか!! それって人前で躰にしちやまずいのでは!?

「蓮太……今度は彼女に何かしたの……?」

と後ろからすつかり聞き慣れてしまった希亜の怒りの声が聞こえてくる。

「ちよーいちよいちよい! 違う! 勘違いだ! 別に俺はやましい事なんてしてない!」

バツと危険を感じて振り向くと、希亜のその手には既に丸められた何かの雑誌が握られていた。

待って! コイツさつきから平気で俺の事を物でぶん殴ってますけどそんなキャラだっけ!?

「別に私はやましい事なんて言っていない」

ピクつと希亜の眉が動く。あーもう……なんで俺ばかりこんな目に……

「あつちやー、こりややつちやいましたな。にいやんも女遊びには気をつけなよ」

「女遊び……?」

天ちゃんの何気ない冗談のセリフに、更にピクつと眉をしかめた希亜と九條さんが俺を見る。

「あ、やつべ……………地雷踏んだ」

マジ勘弁しろよ！　なんで俺が女遊びを沢山やってるみたいな流れになってんだ！

助けを求めようと天ちゃんの方を見るが……………彼女は悪気がなさそうに両手を合わせて、舌をペろつと出して謝るようなポーズをとる。

「天、お前マジで最悪だな」

「はい、今になってすつげえ反省してます。てかみゃーこ先輩がキレ気味なところ初めて見たつす」

お！　ま！　え！　が！　余計なこと言ったからだろ!?　変な誤解を生むなよつ!?

「それで竹内蓮太よ！　君に相応しい戦闘スタイルを思いついたのだが——」

「あー、高峰先輩はとりあえず黙って下さい。今はあつちの人たち浮気調査中なんです。空気の読まない高峰を落ち着かせるために、天ちゃんが気を使ってくれている。

うん、それはありがたいんだけど……………違う！　フォローして欲しいところを間違ってる！　この意味がわからない修羅場みたいなのをどうにかして欲しい！

と、そのタイミングで後ろのベッドで寝ていた香坂さんがムクリと起き上がる。

「あれ……………？　私……………なんでベッドに……………う？」

「あ!? 起きてくれましたか!?」

いち早く助けて欲しくて、すぐにこの誤解を解いて欲しくて、目覚めたばかりの香坂さんの手をガバツと勢いよく掴む。

「よかつた! 今すぐさつき俺たちの話をあの二人にして——」

「たつ!? たたたたたたたた竹内さん!」

その瞬間に沸騰でもしたかのように顔を真っ赤に染めて、テンパる香坂さん。

ちよつと待って、なんかすつげえ嫌な予感がする。

「わわわわわわ私たちはまだおおお仲間になったばばばかりですし、そそそういうことをしてしまうのはまだ、あの、その、早いと言いますか! あのその!?!」

「ちよつと待って?! 何いきなり訳の分からないことを言ってるんだ!? 頼むから冷静

になつてくれよつ!」

「た、確かに白馬の王子様のような貴方になら、無理やり押し倒されてあんな事をされてみたいだとか、飢えた狼のように優しくも強引にされてもいいと思つたりもしちやつてますが——」（超早口）

「お前マジで何言つてんのつ?!?! ホントに面倒なことになるからそんな意味わからないこと言わないで?! いやマジで一旦落ち着いてくれよ!!!」

待つて待つて待つて待つて! どんどん状況が悪くなつていく一方なんだけど!?!?!

俺もうこれどうしようもなくない!? なんてこんな修羅場になってんの!?

別に誰も襲う気なんてないし! 誰とも付き合ったりもしてないし! 恋もしてないのになんて?!?

「にいやん、これさ、あたしが悪いのかな?」

「いやあ………俺にはちよつとわかんないかなあ……なんて……」

「悪気があるのなら助け——」

勢いよくもう一度振り向いて、新海と天ちゃんの方を振り向こうとすると、どうしても視野にあの二人の顔が入ってしまう。

明らかに機嫌を損ねている希亜と、無言でじつと俺を見つめている九條さんが。

「竹内くん……そんなことしちゃう人なんだ」

「しないしないしないしないしない!!! そんなつもりは毛頭ないし、別に俺は変な気も起こしてなんかない!!!」

残像が残るレベルで片手を振り続け、誠心誠意、そんなことは無いと否定をする。

「蓮太、貴方はもう十分な罪人………ね」

そう言つて片目に紋章を浮かばせる希亜。

「違う違う違う違う違う違う違う!!! 別に襲ったりなんかしねえよつ?!?」

お願い! 俺の話聞いてツ!!! それはシャレにならないから!!!

頼む!

今度は首を高速で横に振り、希亜の意見を否定し続ける。

そしてその時に突如として背中から重みを感じる。

ゆっくりと首から両腕を回すように抱きしめられ、耳元でそつと囁かれる。

「あら？　蓮様……………わたくし 私の事を襲つて下さらないのですか？」

そよ風のような吐息を耳元で感じ、驚きもあつて両目をめい**い**つぱい開いて全身をふるわせる。

な、ん、で……………エデンモードになつてんだよおおおおおつつ
!?!?

「あはは、あははははははは……………」

「あ、先輩壊れた」

もう考えるのやーめたー

「竹内くん。ちよつとお話したいことがあります」

にじりよつてくる九條さん。

「さあ、裁きの時間の始まりね」

その後に続く希亜。

「愛してますわ、蓮様？」

トドメを刺す香坂（エデン）さん。

あーあ。今日が俺の命日かぁ……………
「竹内蓮太っ！ 君の見事な蹴りを称えて、今日からは《黒足》と呼ばせて——」
もうお前くたばれ。

心は力

「——つてこと！ 香坂さんが心配そうだったから、そんなことはないって伝えただけだ」

一度何故か制裁を受けたあと、そこそこみんなが落ち着き始めたタイミングで、この事情を全て話す。

天ちゃんにとつてはあの出来事はトラウマだろうから、できるだけ連想させるようなワードを取り消して。

「あ、あの……………」

一連の流れを聞いた九條さんは、あのマジで怖かった無言を威圧を取り消して、いつもの雰囲気に戻っている。

「早とちりしてしまつてごめんなさい……………」

「いや、いいんです。もう全ては過ぎ去つたことなので」

普段は優しくもいい子なんだけど、極限まで怒らせたらマジで怖いタイプだな。でもちゃんと説明をして理解してもらえると、すんなりと引いてくれる。

うーん……………怖い。

なんて考えていると、その流れで残りの二人からも一応謝られた。希亜からはゴーストの流れからのコレだから…………と若干言い訳のしにくい所を持ち出されて。

ちなみに香坂（エデン）さんは、冗談が過ぎました。と笑いながらだった。

マジで勘弁して下さい、その軽い冗談で俺は死にかけたんです。そりや友達が軽々しく女遊びなんてしてたら怒りたくもなるだろうけど……………俺そんなことしてないに。

なんて言っても仕方ない、もう済んだことなんだ。

と話が一段落したところで、改めて新海が口を開く。

「それで……………やっぱり考えるべきは俺たちのこれからの行動だと思う。何から優先してするべきか……………それを決めたい」

「……………」

確かにな、これからは俺たちどうするべきか。どうしたらあのユーザー達を捕えられるか。

とりあえずはこれ一本に絞るしかない。

「思ったんだけどさ、新海はソフィとは連絡が取れないのか？ 監視されてるんだろ？」

「ソフィ……………？ なんて？」

「いや、一個人を監視することが出来るんなら、こっちが指定した人間を監視することも出来るんじゃないかって思ってる」

簡単に新海の行動を本当に見ているのなら、それは新海だけに限らずに他の人達にも出来るはずだ。つまりソフィを経由すればどこでも誰でも情報を集められるんじゃない？

「確かに……、でも悪い、竹内。実は昨日から別件でソフィを呼んでるんだけど、アイツ全然反応しないんだ」

「今までは反応があったのか？」

「あった。呼んだら来てたし、普通に会話もしてた」

それが突如として現れなくなった……か。

なにか理由があるのか？　ってそんなこと考えても何も解決しないわな。どうせ俺たちが何か出来る訳でもなし。

「まあ………しようがない、な」

「でもさ、竹内。さつき高峰が言ってたことも大事だとは思うんだ」

「そうか！　新海翔！　ならば伝授しよう……我が真神流をッ!!」

「いや、いいです」

……冷った。ヒエヒエのドライな対応だな。

「決定打だ、決定打。アーティファクトの回収は九條の能力があるとして、問題はそれが上手くいくように立ち回らなければいけないこと。その力が俺たちは圧倒的に低すぎる」

「ふむ……………一理あるな。九條女子の奥義を抜きにしても、難しい局面ではある」

このメンバーだと……………戦闘員は俺と新海、そして高峰。能力を加味したら希亜やゴーストもそう……………か？　ギリギリ香坂さんもなんとかイケそうだけど……………女の子たちには無理して欲しくない。

となると……………まともな戦闘員は高峰くらい……………か。

「やっぱり、俺たちが急激な成長を期待できるとしたらアーティファクトを使った能力の練度だと思う。そこに賭けるしかない」

今更身体的な強化をしたところで、焼け石に水だ。もちろん何もしないよりは断然マシだと思うが……………

「確か……………アーティファクトの力は心によって左右されるんだったよな？」

「あつ、うん。ソフィさんはそう言ってたよ。心を強く持てばアーティファクトはそれに応えてくれるって」

いつの間にか隣にちよこんと座っていた九條さんがそう口にする。

「兄上よう、あの人無意識に隣にお座りになりましたぜ？」

「気付かないふりをして差し上げる、きつと本人すら気がついてない」

そっか……………だとしたら……

「だったら俺たちがやることは、能力の強化。つまり……日常生活の改変だ！」

そう言葉にすると、この場にいるほとんどの人が首を傾げる。

あ、うん。ちよつと待ってね、今説明するから。

「心の持ちようで力の影響が変わるんなら、より良くするために普段の生活を思い切つて変えてみるんだよ！ 例えば、普段は絶対に行かないようなところに行つて見識を広げたり、普段は絶対やらないことをやってみたり！」

知らないことを知ること、違った考えも養われるかもしれない。

「ふむ、つまりは新たな自分へと進化を遂げる……と？ そういう事だな？」

「ああ、その解釈で構わない」

「条件が心というモノである以上は、私たちの人生全てが直接能力に起用される……………ええ、悪くないと思うわ」

「私の知らないことを知る。……………確かに、それは大事かも。能力の使い方だつて、視界や記憶を読み取るうだなんて、思いつきもしなかつたから」

「私の能力……………も、も、もつともつと自由な……………発想……………で扱えれば……………」

みんな自分自身に思うところがあるようだ。

もちろん俺もその中の一人なんだが……

「じゃあ決まりだな？　まずは自分を変えてみることに、これから始めてみよう」

もつと柔軟な発想を得る。能力の応用の為の自主強化訓練つてとこだな。

「それで俺からの提案なんだが……これを実践する時は二人一組のチームにならないか？」

そう提案したのは新海だった。

うん、一人で固執した考えになるよりも、二人の方がお互いに気がつくことが多いだろうし……急な襲撃に対面しても、なんとかなる可能性は高い。

いちいち断る理由はないだろう。

「そうだな、そつちの方が効率が良いさそうだ。じゃあこの作戦を実行する時は誰か一人を必ず誘うこと。これでいいか？」

みんなが首を縦に振ってくれる。

ようやく動きだしたんだ……俺たちの戦いが。

だったらまず俺が取るべき行動は……？

不穏な気配

ブルンツブルンツと何事も無いことを確認するようにバイクのエンジンを鳴かせる。

なんだかんだですっかりと忘れていた俺の單車だったが、俺たちが気絶してしまった後になんとか押して持ってきてくれていたようだった。しかもそれを新海が住んでいるマンションに停めてもらっていたのだ。

なかなか優しい管理人である。

「にしても、竹内がバイクかあ……………教室のイメージとはまた違つてちよつとびつくりした」

「割と楽しいぞ？ 新海もなんかの機会があれば免許取つてみたらいいさ」

「問題は金なんだよな……………」

あれから俺たちは話が纏まったこともあり、夜も遅くなる前に一旦解散をすることになった。

ちなみに連絡先は全員が交換しあっている。

「それで……………なんで結城は震えてんの？」

た。

もちろんそれはこの三人のメンバーになった時だ。だからこそ俺たちがまだ残っている訳だが……

俺と新海と高峰が、あの雷あづまと呼ばれる電気男を追い詰めた時に現れた妙に大人びた男。アイツが言っていた《薬》の謎を新海から聞いた。

何やら注射のような物を天ちゃんやんは首筋から打ち込まれていたらしく、間違いなく何かの薬を投与されている。との事。

その事を話す新海は悔しそうに拳を握りしめ、歯を食いしばって怒りを鎮めていた。

でも、あんな目に遭ってしまったからこそ、今までと同じように無愛想に、けれども優しく接してあげているんだと思う。

少しでも不安を取り除けるように。

「何かあったら直ぐに連絡をくれよ？ どこにいても駆けつける」

「ああ、ありがとう」

軽くニコツと笑って返し、雑に手を上げただけの返事をして希亜を乗せたバイクを走らせる。

その道中——

「天に投与された薬の件……………貴方はどう思う?」

軽くまだ身体を震わせている希亜にそう質問をされた。

「さあな。ただ、明らかに目的を持ってそういう行動をしたってことぐらいしか思いつかない」

「エルフヘイムの住人に聞いたという彼の言葉、もしその中にある三つの内の一つを使われていたら……………事態は最悪と言っているでしょうね」

そう、以前ソフィとまだ交流できていた時に、新海が《霊薬》の種類について色々と聞いていたらしい。

九條さんがいない時の、対ユーザーを意識しての質問だったらいいが……………ここに来てそれが役に立つとはな。

判明したことは複数ある。まず一つ、霊薬は一つだけじゃなかったこと。俺が知っている《アンブロシア》だけじゃなく、名前はまだ不明だが更に二種類の霊薬があるらしい。

しかしその二種類の内一つは効果が判明している。《アンブロシア》は魂を仮死状態へと陥り、アーティファクトそのものを騙す効果の薬。

そしてもう一つの判明している効果は、名前は不明、効果は《意思》のあるアーティ

ファクトとの波長を狂わせる薬。どうやらソフィはこれだけ言って、続きをひた隠して去っていったらしい。

この波長を狂わせる薬。もしこれがあの炎の男のように《暴走》を意味しているのなら、かなりマズイ。

何がマズイって、もちろん天ちゃん自身の事が大ピンチだが………俺たちが戦っている敵軍団は《意図して能力を暴走させる力》を持つていることになる。

「でも、正直手の打ちようがない。ここはいち早くソフィを見つけたか、アイツらに直接聞くしかない……よな」

炎の能力の暴走は、辺り一面を火の海に変えてしまうほどの火炎を放出してしまうものだった。

しかも俺たちが問題を解決できたのはかなり早い段階だったことを考えると………下手をすれば学園だけとは言わず、町中に火の手が襲いかかっていたかもしれない。

それほどアーティファクトの能力は強力なんだ。元々の力以上のモノを宿してしまう。それが《暴走》。

存在感を薄くする能力、これが暴走なんてしたらどうなってしまうんだろう。

これ以上の能力となると………

存在が無くなってしまいかもしれない。

……させないさ。そんなことは絶対させない。

考えたくない。天ちゃんが消えてしまうなんて、でも………出来ることは全てやら

なきやいけない。

「あまり……いい気分ではないわね」

「ああ……」

ギョツと俺に腕を回す力が強くなる。たつたそれだけで理解できた。きつと希亜も同じ考えにいきついたのだと。

力を合わせることの出来る仲間を失うのが怖いんだ。

それは俺もわかる。俺たちはその怖さを、辛さを、無力さを、絶望を既に知っているから。

「私たちに出来ることは………何……！」

「………忘れないことだ」

「忘れ……ない？」

もし、俺の仮定が全て正しいとすれば、これがせめてもの俺たちに出来ることだろう。監視されているという新海に縋ることしか出来ないのだから。

「天ちゃんの能力は存在感操作。つまりはアーティファクトの暴走の結果行き着く先も、その力の先のはずなんだ。もちろん本人はその能力を抑えようとするだろう、だから少しずつ能力が暴走していく可能性が高い」

「………ええ」

「だったら段階的になるはずなんだ。少しずつ、少しずつ……存在が消えていく。みんなの記憶から消えていくと思う」

胸が苦しくなる。

天ちゃん本人がこの推測にたどり着いていないわけが無い。みんなとの記憶から自分一人が消えてしまうかもしれない恐怖。俺なんかの想像を絶するだろう。

もしかしたら新海も気がついているのかもしれない。

「だから忘れない。絶対に忘れない」

きつとタイムリミットは存在してる。それは間違いない。でも、みんなが知っている心の気迫で能力はいくらでも変化するという点。

つまり、天ちゃんがそんなことも忘れてしまう程に心の底から楽しいと思えば薬の効果が切れてしまうかもしれない。

……これは無理があるな。とてもじゃないけど不可能だ。

やっぱり時間との勝負だ。少しでも早く扱える能力を上昇させて、少しでも早くアイツらを見つけて、解決法を聞き出す。

最悪の場合……九條さんに能力を使ってもらうしかないのかも。

でもそうしてしまうと、そのアーティファクトは能力ごと九條さんの物になる。つまりは存在が消滅する対象が九條さんになってしまう可能性がある。

となると……………

アレを俺がいつでも扱えるようになった方がいいな。

あの時の俺の能力を……

初めての……………

「——で、なんでオレを呼ぶんだよ」

希亜を送り届けたあと、自分の家に戻って適当に家事を済ませる。

あらかたの作業を終わらせたあと、色々と考えているうちにあることを思い出し、ゴーストを出現させたのだ。

「怪我人だろ？ 一応面倒見てやった方がいいかな？ って思つて」

「テメエがオレの股に顔面押し付けてきたこと、まだ忘れてねえからな……………！」

……………股？

「だ、だから悪かつたつて言つたじゃんか！ それにわざとなんかじゃねえよ！」

「どーだかな、オレの創造主サマはド変態だからあてにならねえ」

自分自身からの信頼が無さすぎるな。いくらなんでもゴースト自身の意思がそこにあるとはいえ……………までは……………

「いいから、こつち来い」

ボフボフツとベッドに敷いてある布団を叩いて、一応準備しておいた治療箱を取り出

す。

「んだよ……………つたく……………」

どこか不機嫌なゴーストは、渋々と言った感じで俺の隣に座る。

つか幻体にコレって効果あるのかな……………？

「それで……………どんな感じだ？ 無理してんだろ？ お前」

「別に無理なんてしてねえよ、そもそもオレは実体の無い幻体だ。怪我なんて概念は――

――」

と、なかなか頑固な性格をしているもんで、素直に心配してやっつてもちゃんとした返事は返ってこないと判断した俺は、とりあえず適当に腕を握ってみる。

「痛っ――」

全然強くなって握っていないのに、ゴーストの腕に触れると、彼女は顔を顰めた。

「ほらみる、新海の家にいる時から怪しかったんだよ、お前。あん時は素直だったじゃねえか」

「うるせえ！ 勝手に触んなつーの！」

「なんだよこいつ……………なんか今日はやけにトゲトゲしいな、反応が。」

「なあ、なんでお前そんなに怒ってるの？」

「はあ？ 勝手に身体を触られたら誰だって怒るだろうが」

「いやそうじゃなくてさ、なんか………新海の家にいた時から随分変わったような気が……？」

あの家でコイツを出した時は別に普通だったよな？ 引つ込めてから今までの間でなんか癪に障ることがあったのか？

「そりゃあんなにモテてりゃイラつくっつーの」

「ん？ なんか言ったか？」

「なんも言つてねえよバカ」

うーむ……。これはまた俺が気が付かないうちに怒らせたか？ それともガチであの事故の事をブチギレてるのか？

女心はわかんね……

「とにかく、怪我の具合は？ って聞くだけ無駄か………じゃあとりあえず俺のイメージを崩して本来のゴーストの姿を見りゃいいか」

「ちよつ………マジで止めろ！ オレは本当に大した怪我じゃねえから！」

大慌てで自分の傷を隠そうとするゴーストを無視して、俺の頭の中のイメージをかき消す。

ゴーストは確かに幻体だ。普通なら《本来の姿》なんてものは無い。だが、コイツは特別。ちゃんとしたコイツ自身の意思、つまり魂がある。

となると姿形はそのままに、魂が背負ったダメージを表面に露出させれば……………あの戦いでの負ってしまった傷を確認できる。と思う。

そして能力を使つて、いざそのイメージを実践してみると……………

「……………ッ!!」

ビクビクツツと痙攣するかのように身体を震わせたゴーストが、歯を食いしばつてそのままベッドに倒れるように横になる。

そしてその姿は——

「な……………、なんだよ……………それ……………!!」

身につけている衣服とはあまりにもかけ離れすぎている身体の汚れ具合だ。まるで焼肉で網の上に乗せられているのを忘れられて焦げてしまった肉のように、肌はほぼ真っ黒に変化してしまっている。

爪も剥げており、髪もボロボロ、足に至つては……………ピクリとも動いていない。

「どこが無事なんだよッ!!」

いや……………そもそも俺がダメだったんだ! あのレベルの雷をともに食らつて軽傷で済むはずがないんだ!

クソッ!

「結構頑張つてたんだけどな、バレちゃった……………」

「バレちまったじゃねえだろ!!!」　なんで我慢なんてしてたんだよッ!!」

やっぱりあの時の元気な姿は痩せ我慢だったんだ。消えるその刹那に見せた辛そうな表情は必死に我慢してたモノだったんだ。

俺は馬鹿か……!」

「オレが耐えりや、勝手に傷は治る。時間こそかかるのが玉に瑕だけど……:アンタに迷惑かけたくなかった」

「んな事言ってる場合かよッ!! 『もしも』があつたらどうすんだ!?!」

「どんだけ馬鹿なんだよ、俺も!　ゴーストも!　人の心配なんてしてる場合かよ!　テメエが死にかけてる時に迷惑なんて考えてる暇ねえだろうが!」

それに「迷惑かけたくない」ってことは、俺に迷惑をかければ傷の治りは早くなるってことじゃないか?」

「察しがいいな、大将」

「気づいたんなら早く言え!　俺はどうしたらいい!?　どうしたらこの傷を癒せるんだ!?!」

そりや俺が無傷の身体を用意してやれば誤魔化すことは出来るだろう。だけどそれは根本的な解決にはならない。根源をどうにかしないとコイツはずっと痛みと戦い続けることになる。

「……………なあ、大将」

「なんだよ!？」

「アンタ今、好きな人とかいんの?」

この状況でコイツ何言ってるんだよ!? そんなくだらねえこと話してる場合じゃねえだろ!!

「んなことどうでもいいだろ! それより早く傷を癒す方法を——」

「いいから。それだけ聞いておきてえんだよ。流石にアンタの特別を奪いたくはないし」

言葉の意味はわからなかった。これから何をするのもかも全く想像できなかった。それでもこの時、何故かわかったんだ。

ゴーストの為に、これは真剣に答えなきやいけないってことを。

「……………いない。恋なんてしたことない」

そう答えると、ほんの少しだけゴーストはニヤけて——

「そっか」

静かにそれだけ答えた。

ゆつくりと俺の方に顔を動かして、真つ黒な瞳を俺に向ける。

「詳しいことは後で話すからよ、そんなにどうにかしたいんなら……………一つだけして

欲しいことがある」

「なんだ!?! 早く言えよ!」

「キス……………してくれよ」

驚いた。そりゃあ……………目が点になってしまう程に。

でも、それが冗談でも嘘でもなんでもない事は彼女をみたらすぐに分かった。

「大将がそれさえしてくれりゃ……………」

「んっ……………」

だからこそ深くは考えない。

それが彼女の痛みをかき消すことの出来る手段ならば、逃げたりはしない。

俺とコイツは奇妙な関係だ。人間と幻体、もし……………仮に恋をしたとしても結ばれるこ

とは無いだろう。

だからこそかもしれない。

いや………それすらも言い訳かもな。

とにかく、俺はあの言葉を聞いた瞬間に、後先なんて考えずに身体を動かした。すると――

なんだろう………身体の芯から《何か》が奪われていくような感覚。

そして徐々に感じる《痛み》。

しかしそれも我慢して、唇を合わせ続ける。

何秒……いや、何十秒だろう？ 息が出来なくて苦しくなるまでひたすらに《何か》を

吸われ続けた俺は、とうとう限界が来て、できるだけゆっくりとその口を離した。

そして改めてゴーストの身体を見ると………

やや部分的に火傷のような後が残っているが、ほとんどの傷が治っていた。

心の葛藤

「ゴー……………スト……………？」

やや臆気な意識の中、改めて彼女を確認する。

今は特別、何かの能力を扱ったりはしていない。つまり今は彼女の魂は露出している状態だ。

その彼女の身体は疎らに火傷の後が残っているような状態にまで回復していた。

「アンタ、躊躇なくしゃがったな」

フツとどこか嬉しそうに笑うゴーストを見て安心する。よかった、理由は全然意味わかんないけど、とにかくコイツは助かったんだ。

怪我が軽くなつてよかった……………

そんな安堵の気持ちと共に緊張の糸が切れてしまい、ベッドに覆い被さるように俺は身体を倒してしまう。

「なんだ……………これ……………」

あんまり深く考えることが出来ない。なんだろう……………視界がボヤけてよく見えなく

なってきた。

あと全身が焼かれるように痛い。

こんなに部屋の中って暑かったっけ……？

「大将、キツいと思うけどこっち来い。せめてベッドで寝ろよ」

あんまり声が聞こえなかったけど………多分コイツは手招きしてる。

ああそうか、倒れるならソコで倒れろって事か。

残る力を振り絞るように立ち上がり、転がり込むように俺もベッドの上に身体を預ける。ゴーストはそんな俺にスペースを空けてくれるように少し奥へと移動してくれていた。

「……………あつちい」

声漏れる。

とにかく暑い。真夏の太陽に直接焼かれ続けているみたいだ。絶対にそんな事ないのに、有り得るはずがないのに。

「オレは少し涼しいぜ……さつきよりはな」

そして痛い。あの不思議な儀式が終わってから、全身に走る針に刺され続けているような痛みが消えない。

このせいでせつかく何度か意識を失いかけているのにまた現実に戻される。

「本当は、こんなことしたくなかったんだぜ？　だけどさ、こうしたら……」

耳鳴りがすごい。そのせいでせつかくゴーストが何かを話しているのに何も聞こえてこない。

頭もガンガンする。

足が………思うように動かない。

「側にいられるだろ………？」

けどそれらを悟られないように必死に声を殺して我慢する。きつとゴーストがこれをしたがらなかったのはこの痛みが原因だろう。

俺を守るために怪我をしたのに、その痛みを俺に与えちゃあ意味がねえ………的なの？

………割と色々考えられてるな。いや、これはアレか。色々と考えないと痛みで精神がどうにかなりそうなんだ。

「アンタはいつもそうだ。誰にでも心の底では優しくして、見捨てない。とうとうオレすらも変えやがった」

スつと誰かに抱かれるように腕が回ってくる。

きつと彼女も痛いのだろう。この痛みを和らげる為に、心の弱さを出してるんだろう。だからこそ俺がしつかりしないとダメなんだ。

コイツが安心して眠れるように。

大丈夫だからな、すぐにこんな痛みかき消して……もう一度でも何度でも傷を癒してやるから。

お前一人に辛い思いはさせないから。

「ふざけんなよ………本当に………クソ創造主が！」

チラツと横目で彼女を確認してみる。もしなにか辛そうなことがあれば、もう一度アレをしてやれるかもしれない。

すると………彼女は泣いていた。俺に縋るように頭を擦り付けて震えていた。

そんなに痛かったのか？

そんなにキツかったのか？

そんなに辛かったのか？

彼女の涙を何とかしようと、身体を捻らせて寝返りを打つように向きを変える。そして向かい合う形になった彼女の頭をポンポンと撫で、気晴らしにでもなるように声をかける。

もう既に耳鳴りは止んでいた。

「もうちよつとだけ、さっきのやつしてやろうか？」

「バカかよ大将………死んじまうぜ………」

「誰が死ぬかよ」

……段々感覚がなくなってきた。あまりにも大きいダメージを蓄積しすぎて身体ぶつ壊れたかな。元々俺は軽く疲労と怪我をしてたし………あんまり無茶はするもんじゃないか。

お互い無事なら………それでいいや。

《視点切り替え》

「寝たか……？ 大将」

おそらく感じていた刺激が落ち着き始めたのだろう。オレの隣で横になっている男は気絶するように眠っていた。

なんだよ………人の気も知らねえで。

希亜の言つてた通り罪人だな、コイツは。周りの人を振り回す天才だ。

あ、オレ人じゃねえや。

………人じゃない………か。

「オレも人間だったらな……。アンタの隣で堂々と歩けたのかな」

「頑張れよ、大将。アンタが選んだ相手なら……。オレは応援するぜ」

4月27日

引きずりの朝

朝日が眩しい。眩しすぎて身体が焼けちまつてるみたいだ。

つかこんな朝日って暑かったっけ？ いやいやこんな感覚じゃなかったと思うんだけどさ。寝ぼけてんのかな、なんかすっげえ身体が熱くてすっげえ重てえ。

なんでこんなに身体が重たいんだ……？ 無駄にすっげえ疲労が溜まつてる感じだ。ガツコー行きたくねえ………

『ちやちやちやちやー、ちやーちやーちやー、ちやつちやちやー』（FF風）

……アラームが鳴ってる。さっさと身体を起こさないとな……

不自然に重い身体を動かして、ムクリとその場から起き上がる。

するとテーブルの上には下手くそに調理された料理が置かれていた。

パツクのレンジで温めただけの白米に、切り口がバラバラの所々が焦げてしまつてい
るソーセージ。明らかに焼きすぎてしまつている半分くらい色が変わつた目玉焼き。

そして………レトルトのお湯入れただけの味噌汁。

キッチンの方をチラ見してみると、特に目立った汚れはない。きつと片付けまでしてしまっただろう。

冷蔵庫からお茶を取り出して、俺はアイツが用意してくれた朝食を食べるために座ると、皿の下に紙が挟まっていたことに気がついた。

不思議に思っ取り出してみると……………

『食って寝ろ』

とだけ書かれていた。

わざわざ置き手紙まで用意している所を考えると、やっぱりゴースト本人もまだ痛みや疲労は残ってるんだろう。それでも俺の為に用意してくれたと考えると……………なんか嬉しい。

だったらちゃんと休ませてやるか。アイツもきつい中頑張ってくれたんだ。お言葉に甘えて今日も休もう。

「いただきます」

とりあえずパクツと歪な形のソーセージを一口食べる。うん……………味は別に悪くない。つてそりやそうか、味付けや調理法は俺の知識から引つ張り出せるんだから。でも

……あれなんだな、俺の経験や技とかは受け継がれたりしてないんだね。あくまでゴーストの手作りってことか。

もぐもぐと次々に食べ物を口に含みながら、淡々と朝食を済ませる。

こんな朝飯は久しぶりだ。メニューの半分はレトルトだし、ほとんど焦げてるし、形は変だし。

でも――

「美味しい」

俺が知る中で最高の料理だった。

と、そんな朝の時間を過ごし、やることを済ませて寝ていたらもうすっかりと昼になってしまった。

ほんの少し横になるつもりだったのが、いつの間にかガチ寝をしまい、呑気に時

間を過ごしていたのだ。

「こんなダラダラしてていいもんかねえ……」

こんなに身体中が痛くて重いのも、きつと昨日のアレのせいだろう。別に後悔なんて全くしてないが……。正直説明が欲しい。そりや今すぐにアイツを呼び出せば話くらいは出来るだろうが……。ゆつくりと休ませてやるのが大人だろう。

つかさ……。俺キスしたんだよな。あいつと。

……

……

これってなかなかヤバいことしちゃったのでは？ 状況が状況だったとはいえ、軽はずみにしちゃいけないことをしたんじゃないか？

だって求めてきたのはアイツからだけど、ゴーストだって好きな人とかそんなことをしたいんじゃない……。って、そもそも好きな人ってのが無いか。

今まで……。アーティファクト能力として生き続けて、どんな道を歩んできたのかは知らないけど、恋心つてのを抱いているようにには見えない。

でも女の子なのは間違いないし……

……。うん。また怒られる前に謝つとこ。

なんて考えていると、俺のスマホがバイブレーションをしながら音楽を流し出す。

『心のくかくケくく集めてく胸を——』

「はい」

相手の名前を見ずに電話にでてしまったので、誰が相手でも構わないように一言だけ呟く。

『もしもし？ 竹内くん？ 今、大丈夫かな？』

「その声……………九條さんか」

時間を確認してみると、一時を過ぎた頃。なるほど……………今は昼休みか。

「どしたの？」

『どうしたじゃないよ。学校お休みしてるけど……………もしかして体調が悪い？』

ああ……………そうか、あの出来事があった後なんだ。何も伝えたりせずに続けて休んでたりしたら心配にもなるか。

申し訳ないことしたな。

「あ……………まあ、実はそうなんだよ。結構身体中が痛くてさ、無理せずに休むことにしたんだ」

『そ、そうなの!? ごっつ、ごめんね？ せっかく休んでる所に電話なんてしちゃって』

「別にいいよ、電話するくらいはさ。九條さんのその気持ち嬉しいから」

実際ベッドに横になってるし、この状態なら大してキツくもない。

『そ、それじゃあ、放課後に……………お見舞いに行ってもいいかな……………?』

「俺はいいけど……………わざわざそこまでしてもらわなくても大丈夫だぞ?」

『ううん、私に何か手伝わせて。竹内くん、放っておくと無茶ばかりしちゃうから』

ははは……………その辺の信頼が全然ねえなあ……………俺。

「まあわかった、じゃあ気長に待ってる」

『うんつ、また後で。しっかりと休んでてね』

ツ……………ツ……………

そつかあ……………九條さんが来るのか。

それじゃあ軽く掃除とかした方がいいよな……………。

でも身体がキツイからほんの少しだけ寝てからしよ。

一時間だけ。

一時間だけ……………

「すう……………すう……………」

何気ない放課後

なんだろう……なんかほのかにいい匂いがする。

いや……でも、気のせいかな。多分俺は寝てしまってたんだろう。だったらこれは多分夢だ。まだ布団は暖かいし、寝ておきたい。

つて……そう言えば九條さんが家に来ると言ってたな。でもまあ、まだ設定しておいたアラームは鳴ってないし、多分三十分程しか経過してないんだろう。

あと三十分。三十分だけ……

と、再び睡眠を取ろうとする。だつてそうだろう？ 寝起きつてのはみんなもう一度寝たくなるもんさ。それに、まだ三十分しか経ってないんなら放課後まで三時間以上ある。十分色々準備出来るさ。

「え、あ、お、おい！ 焼き加減つてこんくらいでいいのかわ！」

なんかゴーストが慌てているような声が聞こえる。アイツなんかしてんのか？

まあ別に怪我さえしなけりやなんでもいいが……

よく体を動かせるな。

「大丈夫だよ、でも……もうちょっとだけ待った方がいいかな？」

……それと女の子の声が聞こえてくる。やけに大人しげな声の友達を連れてきてるんだなアイツ。

扉一枚挟んでいるせいとか、声が聞き取りづらい。ま、変なことさえしなけりゃ別になんでもいいけど。

「知識はあるんだけどな……オレじゃ全然生かしかねえ……」

「まだまだこれからだよ、竹内くん喜んでもらうんでしょ？」

「ち、違えよ！ 馬鹿！ アイツの負担をちよつとでも減らそうと思ったただけだ！」

ん……、少し寝たからかな、大分身体もマシになつてきたかも？ これならもうちよい寝れば……

「つーかアンタの方が大将のこと考えてそうだけだな」

「えっ、わ、私？」

「普通心配だからって理由だけでわざわざ家まで来るもんかね」

「え……？ 変だった……かな？」

つかさ、さつきから思ってたんだけどさ。

ぶつちやけ違和感バリバリだったけどさ。

「ま、アンタ自身が気がついてないだけだろうけどさ」

これ九條さん既に来ちゃってね？

会話の内容まででは聞こえちゃいないけど、それっぽい声が聞こえるし………何よりゴーストに友達いる訳ねえじゃん。知り合いは俺たちしか知らないわけだし。

「気がついてない………だけなのかな………？」

スマホを手にして時間を確認してみると、既に六時を超えている。

これは………うん！ 寝すぎた！

「大将が女遊びしてた時にムカついてただろ？」

「あつ………！ あれは………、怒ってはいないけど、勘違いを正したあとに………竹内くん色んな人に優しくしてるんだなあ、つて」

「………うーん」

とりあえず客人が来てるのにグースカグースカ寝てたのはもう仕方ないんだ、一度顔を合わせて謝っとくか。

声はキツチンの方から聞こえる。きつと何かを作ってるんだろう、なんかいい匂いもするし………

「あんなちゃらんぼらんのどこがいいんだかな、オレにやあわかんねえけどさ」

「そんな、竹内くんはしつかりしてるよ。確かに………教室でお話してる所はあんまり見ないけど、とっても明るくて素敵な人だよ。沢山のことを知ってるし、お料理は美味し

いし。とっても優しい」

テクテクとキツチンに向かって歩いてみると、ドアを開ける直前のタイミングで、九條さんの声が聞こえてきた。

「でも、竹内くんちよつとだけサボり癖があるかもね。火事の日だって——」

ガララつとわざとに扉を開けて、俺も会話に参戦する。

「どうもー、サボりの竹内ですけど」

と、俺の声を聞いた瞬間に、ビクツと背筋を縦に伸ばしてあからさまに動揺を見せる九條さん。

ちなみにゴーストは俺が近くにいることに気がついていたようで、あえて伝えていなかったようだ。コイツも結構意地悪な性格してるな。

……………俺に似たのか。

「たっ、たたたたたたた竹内くん!? おおお起きてたんだね! おはっおはようっ」

「うん、おはよ。つか悪いな、俺完全に寝ちまって」

「ただっ、大丈夫だよ! 全然っ、うんっ、全然大丈夫だから」

そして二人とも会話に夢中でフライパンの上で火に焼かれている豚肉に全然意識がいていない。

まだ大丈夫なラインだろうか……これ以上火を通したらまずいだろう。

「ゴースト、お前の後ろの豚肉そろそろ死ぬぞ?」

「ん? ……………やっべっ!」

その事態に気がつくと、不慣れな手つきでバタバタと火を止めて、何かのレシピを見ながら次の手順の準備を始めるゴースト。

なんだ? コイツ、とうとう料理の趣味まで似てきたのか?

「そんでサボリの俺は何をしたらしい?」

「ちっ、違うよ!」 竹内くんの悪口を言ってたわけじゃないからね!! そんなつもりは全然ないからね!」

「わかってるって、んで、サボりな俺はどうしたらいい?」

「も、もうっ! いじわるだよっ!」

「ちよっ! 九條! 大将の事はどうでもいいから、次どうするんだよ!」

「どうでもいいってひでえなお前」

……………

……………

……

「いただきます」

キッチンでなんやかんやの会話をした後、二人が作ってくれた料理を食べる。

ゴーストは俺自身よりも先に食欲があることに気がついていたらしく、変な病食じゃなくて普通に満腹になるようなメニューを選んでくれていた。

ちなみにせっかくだからと、九條さんも一緒に食べている。

「……もぐ……もぐ」

「どうだ？ 大将、イケるか？」

「ああ、なんぼか体調も良くなったみたいだし、普通に食えるわ。それに……美味しいぞ？」

このポパイ丼」

二人が作ってくれたのは火を通した豚肉に、ほうれん草と卵を乗せた丼だった。割と簡単に作れる物をあえて選んだみたいだが……どうやら実質料理初心者のゴーストにはそれでも手間がかかったものらしく、予定よりも準備に時間をかけてしまったようだ。

「そ、そっか……ならいいんだ」

「ふふっ、ゴーストさん頑張ってたんだよ」

「変なこと言うな！　んなもん適当だ適当……！」

照れてこつちを全く見ないゴーストに笑顔で返し、とにかく料理を食べ続ける。

にしても………なんか異様な光景だよな。この三人が揃って飯食うなんて滅多にないだろうし。

なんか……慣れねえ。

「ま、とにかくもう大丈夫だ。明日からまた日々の楽しい楽しい授業に励むことにするわ。ありがとな二人共」

「……？」

「そうかよ、大将。だったらしゃんとしろよ」

「もしかして………」

俺とゴーストの会話に何か違和感を感じているような反応をする九條さん。目を点にして首を傾げており、箸が止まっている。

「ん？　どうした？　九條さん」

「竹内くん、明後日って……何の日？」

「え？」

唐突な九條さんからの質問。

え？ 明後日ってなにか特別な日だったっけ？

「……………ごめん、全然わかんない」

「明後日って、実力テストの日だよ？」

「……………は？」

実……………え、何？

ジツリヨクテスト？ ナニソレコワイ。

「ほら、私たちの学園って毎学期の初めの方にテストがあるでしょ？ 明後日がそうだ

よ？」

「なん……………だと……………!？」

「そうだった……………!! ウチは定期テスト以外に学力測るためのテストが別途であるんだった……………!」

ぶつちやけ自信はないな……………勉強に抜かりはないけどさ。

「でも大将の学力なら問題ねえんじやねえの？ そりやいつもの順位に落ち着けはしないだろうけどさ」

「まあ……………うん。多分？」

「それじゃあ……………みんなでお勉強会する？ 全学年の生徒がテストをするから、前日に

みんなでお勉強したら丁度いいんじゃないかな？」

アーティファクト関連で事実としてまともな勉強は出来ていなかったのは事実だし、点数を落としたくはない。確か順位が半分以下の生徒は補習に参加しなきゃいけなかったよな？

色んな意味で貴重な休みを潰したくはないし………みんなが集まって何かをすることで心の余裕が生まれるかもしれない。

それに天ちゃんのことにも気になるし………できるだけ顔を合わせておいた方がいいだろう。

「みんなの都合が合うのなら、やってみようか」

「うん！ 楽しそうだね」

作ってもらった料理を完食して、スマホを取り出す。

「じゃあ………俺は高峰と香坂さんの上級生コンビに連絡してみる」

「それなら、私は新海さんと結城さんに伝えてみるね」

うーん………二人ともRINGで反応してくれるかな？

魂の行方

上級生二人とのRINGでのやり取りを終え、一息つくようにスマホを閉じる。

「んで、どうだったんだ？ 大将」

「香坂さんはがんばって来てくれるってさ。高峰は私用で参加はできないって」

「まあいきなりの話だからな、無理もねえだろ」

むしろあの人見知りか激しい香坂さんが来てくれる方が意外だった。極力みんなが集まる系は避けると思っただが……わかんないもんだな。

「新海くんと結城さんも大丈夫って言ってたよ」

「そっか、ならよかった」

「……………」

ゴーストのやつ、どうしたんだろう。なんか深刻そうな顔してるけど……。

トイレでも我慢してんのか？

「なあ九條。アンタ、ちゃんと2人に連絡したのか？」

と、ここで意味のわからない質問をするゴースト。そりやそうだろう、だって2人に

連絡するって言ってたじゃないか。

「うん、そうだよ？ 新海くんと結城さんの2人に。新海くんも「俺も勉強しなきゃやばい〜！」って言ってたっ」

RINGでのやり取りを面白可笑しそうに語る九條さん。そのにこやかな笑顔が眩しい。

太陽みたいだ。

「そうかい」

まったく……コイツは何考えてるのかわつかんねえな。それに比べて俺の考えはその気を出したら筒抜けみたいなもんなのはズルくない？

これさ、俺が例えば息子の処理してた時ってどんな感覚なんだろう？ 本人の記憶としては俺目線であつてことに――

「余計な事は考えるな、ド変態野郎が」

と頭の中を予想通りに読まれてその辺にある適当なものでぶつ叩かれる。
「痛つて……」

そんな俺たちを見て、九條さんはどこか楽しそうに笑っている。

「ふふつ、2人とも仲がいいね」

そしてそれなりの時間が経過したあと、そろそろ帰宅しなければマズいと言うことで、九條さんは帰って行った。

せめて近くまで送ろうかと提案したが、自転車あいてに歩かせるのは申し訳ないやんわりと断られた。まあ、あの人に限って変な悪意はないだろうけど。

ぼふつとベッドにダイブして、ボケーツと天井を見上げる。

もちろんそれはやること無くて暇を潰しているんじゃないやなくて、これからを考えているところだ。

そしてある程度の考えがまとまると……………

「なあゴースト」

「ん？ どした？」

「お前さ、明日時間あるか？」

「ねえわけねえだろ」

……いやそう言えばそうなんだけどね。特に用事は何もありませんよね貴女は。

「それに言わなくても分かるぜ、とりあえず………《白》を探せばいいんだろ？」

「ああ。アイツも間違いないくあの戦いの犠牲者だ。容態も気になるし………色々
謝つとかなきゃいけないこともある」

「オレとしても色々思うところはあるけどよ、その………なんだ、アイツも悪い奴じゃねえ
んだよ。オレと同じで………振り回されてるだけなんだ」

「わかってる。だから敵視なんてしていいない。それはお前が1番わかってんだろ？」

あの時に《魔眼》を使わなかったのが1番のポイントだ。自分が死にかけてる絶体絶
命のピンチにあの強力な能力を使わないなんて選択肢はほぼないだろう。

後先のことを考えて今死んじまったら全てが無意味だ。

だからあの時に《魔眼》を使わなかったアイツは俺の中ではまだ信頼出来る。

アイツが俺たちを信頼できるかは別の話だけど。

「ああ。オレもちよつと話したいことがあったしな、ま、あいつのことはオレに任せとけ
よ」

「頼んだ」

もし、無事に《白》ゴーストが見つかったら、聞きたいことが幾つかある。それと

……アイツにとつても、俺にとつても重要なことが一つ。

もしこれが成立したのなら……いや、そういうことは考えまい。

「そういやよ……気づいたか？ 大将」

唐突な質問。

その言葉にあまりにも内容が足りていなかったことで、俺は全く質問の意味を理解できなかつた。

「……何が？」

「今日一日の中で、何も違和感を感じなかつたか？」

今日……？ もしかしてあの意味の分からない儀式についてのことか？ 反動があ

るとか？ 実際あつたけど。

「そうじゃねえよ」

きっと頭の中を読んだんだろう、言葉にする前に返事が返ってきた。オイオイ……見聞色極めすぎだろ。

「大将……アンタマジで気がついてないのか？」

「だから何がだよ、別に変なことなんてなかつただろ。強いて言うならお前が料理してたぐらいいだ」

「……」

何がだ？　なんか変なこともあるのか？

今日したことと言えば……寝るだろ？　学園サボるだろ？　飯食うだろ？　あと

……俺が明日の勉強会に香坂さんと高峰を誘って、九條さんが新海兄妹と希亜を誘ったくらいだろ？

「なんだよ、もったいぶらずに言えよ」

「……いや、とりあえずアンタは大丈夫そうだからギリギリまで待つてみるわ。まだ確定したわけじゃねえしな」

「はあ？」

マジで何が言いたいのか全くわかんねえ。コイツたまにこういうことあるんだよな

……

「大将、オレはアンタを信じてるぜ？　だから………失敗しないでくれよ？」

4月28日

不運な朝

そして次の日の朝。

妙な感覚を覚えながらもベッドから立ち上がる。痛みのような……疲労のようなよく分からないモノだ。

もしかしたら一昨日の疲れがまだ残っているのかもしれない。幾分かはマシになったけど……流石にこれ以上サボるのはまずいだろう。

「んん……………ッ！」

ググツと身体を伸ばして、学園へ行く為の支度を開始した。

昨日よりほんの少しだけ上手くなってる朝食セットを食べて、ピシツと服装を決めていざ出発。

お気に入りのあの黒い伊達眼鏡をかけ直し、長くなりすぎた髪をクルクルと回しながら通学路を歩く。

「そーいや髪切る暇なかったな……」

流石にもうそろそろ切らなきやまずい。片目が隠れるほどに長くなった前髪は唇で啜えることが出来てしまうくらいに伸びきっていた。

元々はキタロー。とあだ名が付けられそうな髪型をしていたのだが……ここまで来るとさすがに鬱陶しい。

むしろ俺も頭に拳銃を打ち込んでゴーストを出してみようか？

ペ○ソナア！ とか言いながら。

なんて下らないことを考えながら歩いていると、今日は珍しく俺の遙か先を新海が一人で歩いていた。

特に駆け寄ってまで話すことは無いんだけど、俺たちが通学路で鉢合わせるってなかなか無いよな。

まあ……俺結構フラフラしてるし逆に高頻度でばったり会ってたらそれはそれで気持ち悪いんだけど。

「……………」

今……一瞬何か違和感を感じただけど……何だ？

思わずピタリと足を止める。いや、止まる。

その間にもどンドン学園の方へと歩いていく新海を見ると、どうしても何かの疑問が止まらない。

何か……何か変だ。

考えれば考えるほどに、その違和感を強く感じるが……肝心の答えが出てこない。

「……………」

とずっとその場で突っ立ったまま考え事をしてしていると、背後から誰かに肩を強く叩かれた。

「痛ってっ!？」

「おぎーっす！ エロパイッす！」

その声が聞こえてくると、反射的にすぐに身体を振り向かせる。誰だよ朝っぱらから身体をぶっ叩いてくるやつは……

そして振り返った先にいたのは……………

「……………？ どしたんすか？ あつ、エロって言ったこと怒ってます?！」

銀色の長い髪を結んだ、いかにも天真爛漫そうな——天ちゃんだった。

「……………いや、別に」

ほんの一瞬だけ名前が出なかった。こんなド忘れ初めてだな……

「てか聞いてくださいよ！ にいやん酷くないっすか!?! 毎日毎日ここで迎えに来てあげているのに、今日あたしのことガン無視して学校行っちゃったんですよ!?!」

「へえ……………兄妹で待ち合わせしてるんだ?！」

「いやそういうのめんどいので全然してねっす」

「そりやただ単に気がついてないだけだろ……」

事前連絡無しでいきなり待ち合わせをしてもしょうがないじゃん。気づくわけねえわ。

「ほんじゃまあ……たまには気分転換に俺と行くか？」

「え……、だつて一緒に登校して友達に噂されると恥ずかしいし……」

「やべえわ、俺今すぐに全パラメータ底上げしなくちゃ断られるやつだこれ」

「オマケに幼なじみつてだけで嫌つて言われそつすね！」

「好感度最悪じゃねえか」

なんてひよんな出会いから、俺と天ちゃんは2人で登校する。

別にこういうタイミングでばったり出会ったのは初めてじゃないけど……妙な感じだよな。俺も妹がいたらこんなに変なんだろうか。

あいつよく頑張ってるよなあ……お兄ちゃん。

「あつ、ちよつとコンビニ寄っていいです?」

「ああ、別にいいけど……どした? 昼飯?」

「おかん——お母さん朝寝坊しちゃつたらしくて、リビングにいなかったんですよ。だから今日はお弁当買わなきゃいけないのです」

「じゃあ普段はお母さんの手作り弁当なんだ?」

ふむ……それじゃあせつかくだし俺もここで昼飯を買うか。購買で買おうかと思っただけど……どうせ寄るならここでいいや。

「そつすね、可愛いキャラ弁食べてます」

キャラ弁かあ、俺そういうの全然試したことないな。なんかこう……ああいうのって作るのは楽しいんだけど食べる時グロくなりそうで嫌なんだよ。

例えばドラファンのイモテンダーのキャラ弁を食べたら顔半分無くなるんだろ?

……キツイなあ。

「ま、残念ながら今日はコンビニ飯だな」

と、2人で近くにあるコンビニに向かつて歩いてみると、いつも通りに元気いっぱいな天ちゃんは、我先にへと早足でコンビニへ向かう。

そして店内に入ろうとしたその瞬間——

「あ痛っ!!」

天ちゃんはゴンツと自動ドアに頭をぶつけた。

「痛ったーい……………! もうなんなの!?!」

デコを軽く抑えながら若干涙目になっている彼女。まあ……………普通は勝手に開くと思
うよな。

「壊れてるんじゃないか?」

「ちえ……………今日はツイてないなあ……………」

と、俺が天ちゃんに追いついた瞬間、目の前のドアはシャーつとあたかも当然のよう
に動いた。

「偶然誤作動があったただけだろ、そんな日もあるさ」

「にいやんもいつもより早いし……………お母さんも寝坊してるし……………自動ドアはぶつか

!! なんなのーもう!!」

「はいはい、文句言わない。ジュース奢ってやるから」

完全に今日の不運に拗ねている天ちゃんを励ますために、ここはちよつぴり優しさを
見せておくか。

まあ確かに結構可哀想だと思うし。

「はあ〜い!」

「調子いい奴だな……」

無邪気という言葉が良く似合う彼女を横目に、俺は俺で自分の分のおにぎりを数個カゴに入れる。

そしてにこやかな笑顔で俺のカゴにコーラを入れてきた天ちゃんと一緒に、並んでレジを打つ。

そう、このコンビニは以前天ちゃんと出会ったコンビニとはまた別の場所。ここはいわゆるセルフレジを実装している店だ。

つまり、自分で商品を打ち込んで、会計を済まさないといけない。

それでホイホイと二人別々の会計を済ませていると……さつきから天ちゃんが困惑顔でモニターをポチポチと押している。

その間に俺はすっかり買い物は終わってしまった。

「ええ……？　なんでえ？」

「……？　どうしたんだ？　なんかわかんないとこあったか？」

「わかんないっていうか……なんか全然このモニター反応しないんですけど——!!」

天ちゃんの隣にいて、力任せにグイグイと押しているモニターを見ると……確かになんの反応もしない。

「ん……？　マジだな。これも壊れてんのか？」

「これじゃお釣りが返ってこないんですけどおお——!!」

横でワーワーと叫んでいる彼女を一旦無視して、試しに俺が会計ボタンを押してみる。

すると……………

ジャラジャラと音を立てて小銭が少し出てきたのと同時に、機会の方から録音されている声が聞こえてきた。

『お会計ありがとうございました』

そんな状況を2人でぼかんと見ながら、冷静にワンツツコミ。

「できましたけど……………」

「あ、はい。なんか……………できましたね」

騒いでいたあの時とは一転。有り得ないほどに静けさを漂わせたあと、朝から色々と元気な彼女に若干疲れたせいか、ちよつと低めのテンションになる。

「……………出よつか」

「はい」

しかし彼女はまだ元気が有り余っているようで、俺よりも先に小走りで店から出ようとして……………

「なんかムカついてきた……………にいやんの馬鹿やろ——あ痛あつ?!?!」

お兄ちゃんの悪口を言おうとした天ちゃん、また自動ドアにぶつかって。

ソラノキオク

「ほい、コーラ」

2人で並んで登校している途中で、奢ってあげた飲み物を天ちゃんに渡す。

「ありがとうございます」

軽くお礼を言った天ちゃんはスリスリと額を擦りながら、まださっきの出来事を引きずっているようだった。

「痛いかな？」

「んや、そんなことはないけど……朝からこれはキツいなあもう」

「運が悪かったって諦めるしかないな、でも……あれだ、嫌なことがあった時は、その分いいことも起きるもんさ」

「だいたいんですけどねえ」

テクテクと歩いていると、やっとこさ学園の校門が見えてくる。その横には生徒指導の教員が今日も学園に集まる生徒たち一人一人に挨拶をしていた。

「おはようっ」

「おはようございます」

たくさんの生徒たちが歩いている中、あのハゲの教員は1人も漏らさずに『全員』にちゃんと挨拶していた。

つつても俺は普段は全然反応しないんだが……………

みんなは偉いな、ちゃんと挨拶を返している。ほら、現に目の前を歩いている女子生徒2人も——

「おはようございます！」

「はい、おはよう。おはよう」

と2人分しつかりと返事していた。

そしてその流れでスタスタと歩いていこうとすると……………

「おはよう」

と俺たちに一声だけかけられる。

ま、周りの人たちはちゃんと返事しているようだけど……………俺は面倒だからいい。いつも返してないし。

しかしそんな俺よりもちゃんと人間ができている天ちゃんはしつかりとあの教員に挨拶を返していた。

「おぎんす」

すれ違い様というのもあるが、そこから会話は発生しなく、天ちゃんの挨拶の言葉を最後に、俺たちは校門を通り過ぎた。

そして廊下で2人別れたあと、自分の教室へ向かっている途中で、成瀬センセと偶然鉢合わせした。

「おっ、きたなくさぼりやんきー」

「なんつすかそのあだ名……俺はいたってマジメな生徒つすよ」

いつものようにやる気のないオーラを漂わせて、だるそうにしている。

「うっそだ、九條さんがヘツタクソな嘘ついてたもん。適当に言いくるめてサボったんでしょー」

「サボってないですって、ちよつと体調が悪かったんすよ」

「つーかそんなにハッキリとバレる嘘を言ったのかよ……逆にどんなこと言ったんだよあの人。」

「てか普通に体調不良って言っとけばいいだけなんじゃね？　もしかしてその理由を聞かれたりしたのか？」

……まあいいや。

「それでさく、さつき隣にいた子誰なの？　もしかして………彼女つすかあ？」

明らかに俺をいじるような口調でにじりよつてくるセンス。んだよこの人めんどくせえな！

「さつきのつて……ええーつと………天ちゃんのこと？　見てたんすか？」

「へえー天ちゃんつて言うんだ、誰だか知らないけど年下の子でしょ？　なんだあ？」

後輩をたぶらかしたのあー？」

軽く肘をトントンと俺に当ててくるセンス。かんつぜんにさつきのことをネタにして遊んでやがるな。

「たぶらかしてねえよ!?　たまたま通学路で会ったから一緒にきただけ」

「学校でやらしーことするなよ？」

「しねーよつ!!」

あんまりにも子供っぽい弄りに、思わず言葉を崩してしまう。いや……悪い事だと分かっているんだが、どうにも友達と話してみたいで気が抜ける。

さすがに気をつけないとな……担任だし。

つーか自分の学園の生徒の名前くらい覚えとけよな、そりゃ1学年で役300人くら

いいるけどさ……いや、逆の立場なら覚えられないな、いちいち。

なんて日の授業中、退屈な教員の言葉聞き流しながらポケットと窓の外を見る。

温かい日差しが教室に差し込み、春を感じさせるいい天気なのはいいんだが、差し込みすぎて灼熱のように身体が熱い。

カーテンが無いし、俺は窓際の席というのもあって炎天下の中にいるみたいだ。これじゃまるで天然のサウナ。

かなりの苦痛だが……もう少しで一限が終わる。もうすぐ休み時間だ。10分しかないけど。

なんて思いながら窓の外を見てみると……銀髪の、ウチの制服を着た女の子がこんな時間に堂々と校門に向かって走っていつている。

鞆も持たずに、振り返らずに。顔を下に向けて全力疾走だった。

どこのアホなんだよ……まだ今日の授業は始まったばかりだぞ？ 最近の子供はやーねえ……自由すぎる。

てかき、あんなに堂々と学園から逃げ出してるのに教員は誰も止めねえのかよ。あれが許されるなら俺だって逃げ出したいわ。

なんてついでに愚痴を零しながらも、その女の子を視線で追い続ける。

「俺………どつかであの子を………う？」

人に聞こえていないレベルの音量で、呟きながら考える。なぜなら俺はその子を知っている気がしたから。

目を離そうと思っても中々離すことができない。何故かずっと追い続けてる。

とうとうその子は校門にたどり着いたが………そこに立っている遅刻者を捕まえる為の生徒指導の教員は、明らかに真横を走り去っていったのに気にもとめない様子で未だに外を見続けている。

………？

そこで疑問に思った。誰でもそんな場面を目にしたら驚くだろうが………その違和感を考える。

そう言えば………朝一緒に登校してきた人も銀髪だった………よな？

あ、あれ………？ 俺って誰と登校したんだっけ？

モヤモヤとした記憶の中、完全にシルエットになってしまった人物を必死になって探し出す。

「おぎーつす！ エロパイツ！」

………？ ………!? 誰だ？ 知っているような知らない声が頭の中を駆け巡る。

そしてそれに続くように次々と声だけが脳内に響く。

「だから、あたしたち正義の味方集団は4人パーティなんすよ！ 勇者^{あたし}でしよ？
賢者^{みや！先輩}でしよ？ パラティン^{竹内先輩}でしよ？ そんな遊び人^{にい}に

これは誰なんだ!? 誰のいつ聞いた声なんだ!?

『お兄ちゃん……………ごめん……………っ』

なんなんだよッ! この声……………ッ!

かき氷を一気に口に入れた時のように、頭にキーンツと痛みが走る。その音は実際に聞こえているかのようにひたすら俺の頭をグルグルと駆け巡り……………何かを必死に訴えていた。

お前は誰なんだよ……………!

真剣に未知の『何か』と戦っていると、みんなが集った日に作っておいたRINGグルーブのトークルームが通知を反応する。

授業中は音がならないように設定しているから、それが教員にバレることは無いが……………問題はそこじゃない。

その通知はグループ内の誰かがメッセージを送ったことを知らせるもので、その送り主は希亜。

内容は『今日の参加メンバーは5人でいいか?』という質問だった。

俺の記憶では、俺たちの仲間は全員で6人のはず。そして昨日は高峰が集まれないと言っていたから、そのメンバーで合っているんだ。

けれどこれもまた強烈な違和感が。

……………RINGのグループ参加人数が、7人なんだ。

なんの怪奇現象なんだよ……これ。俺の勘違いか？　だが、希亜も6人で記憶しているさ。そうだし、他のメンバーも特に指摘する様子もない。

これって……俺だけが感じている違和感なのか？

改めてグループの詳細を見て、俺の記憶の仲間たちと数を照らし合わせてみる。

まず1人目は俺、『蓮太』。そしてそれに続けて『新海』、『高峰』。その3人が仲間メンバーの中での男たち。

そして女性は、『九條さん』と『香坂さん』、最後に『希亜』。こつちも3人だ。合計で6人。うんやっぱり間違っていない。

けれどRINGのグループには、もう1人入っている。

そのアカウントの名前は……………『新海 天』。

新海……………天……………？

にい……………み……………そら——ツ！

「天ちゃんツツツツ!!」

衝撃的すぎる事実には、思わず声を荒らげてしまった。

静かに教員の言葉だけが響く教室内に、俺の雑音が響き渡り、一気に注目的になる。だが……………そんなことはどうでもいい。

なんか色々々と教員がなんか言ってるが、そんなものは全然頭に入ってこなかった。

それ程までに怖かった。震えていたんだ。

俺は……………忘れていた。仲間の1人を、守るべき1人を。

忘れちゃいけない1人を。

なんで忘れていたんだろう。なんで記憶から抜けていたんだろう。

わからない。わからないけど………気がついたら既に知らなかった。忘れていたことを忘れていた。

馬鹿か俺は………!

そして一番最初に思いついたのは、RINGのやり取り。希亜も忘れていたこと。明らか今日集まるべきメンバーの中に、1人足りない。

思い返せば今日1日おかしかった。

いつもは待ち合わせ出来ていた新海と天ちゃんが、今日に限って出会えなかったこと。

毎日弁当を作ってくれていた天ちゃんのお母さんが、偶然朝寝坊してしまったこと。

コンビニで誤作動が多くて天ちゃんが不満げだったこと。

それらは全て、あの出来事に結びつく。

もしかしたら、新海と一緒に登校出来なかったのは、新海は知らなかったんじゃないか? 新海はいつもは待っていてくれる妹を知らなかったんじゃないか!?

天ちゃんのお母さんは、寝坊なんかじゃなくて、娘の為に頑張つて弁当を作っていたのを、娘を知らないせいでその必要がなくなつて寝ていたんじゃないか!?

コンビニの誤作動の全ては、別に機械が壊れていた訳じゃなくて………天ちゃんが反応されなかったんじゃないか!?

振り返らずに学園から逃げ出していた天ちゃんは……………

みんなから忘れられていたんじゃないか……？

「……………クソツッ！」

八つ当たりをするかのように自分の机を蹴り飛ばし、そのまま新海の席まで走る。そしてそのまま俺の行動に目を驚かしている新海に、ある質問をする。

「おい新海ツ!! お前の妹は誰だっ!!」

必死に、必死に声をかける。

「竹内……………!? いきなりお前何言って——」

「いいから言えツ!! お前の妹の名前は何なんだツツツツ!!」

熱くなる気持ちを抑えきれずに、半ば殴り掛かるような勢いで新海の言葉を待つ。
だが………聞こえてきたのは、納得のいかない答えだった。

「妹なんていねえよ………」

ソラ

キ

ク

「お前……………何言っつてんだよ……………!?!」

頭では分かっていた。そうなんじゃないか？ と予想もしていた。けれどやっぱり信じられなくて、こんな予想は外れて欲しくて。

そんな願いは叶わなかった。兄である新海すらも天ちゃんのことを忘れていた。

「たった一人の妹だろうがああつっ!!」

もちろん自分のことを棚に上げているのは分かっている。事実俺だつて忘れてしまっていたのだから。もしかしたらこの怒りは、俺に向けてのモノなのかもしれない。

でも俺はそんなに人間が出来ていなくて、そんな正論よりも怒りと焦りが……恐怖と不安が勝つてしまっていて、気がつけば新海の胸ぐらを掴んでいた。

「お前が忘れるなよッ！ あの子が産まれて今の現在いままでずっと強い繋がりがあつたんじゃないのかよ!!」

「ウツ……………つ!!」

俺の叫びを受け止めた瞬間、新海は頭を抑えて何かに苦しみ出す。理由や意味はわか

らなかったが、俺の直感があることを感じさせた。

「いつだつて近くにいたんだろ!! 守つてやる為に家に泊ませたんだろツ!!」

「うぐっ……………っ!!」

頼むから……………答えてくれ……………新海……………!

「大切だから、あの時に火の海に飛び込んだんだろツツツ!!!」

「……………ツ!!」

思い出せ……………翔ツ!

「翔ツ!!」

5秒ほど待つただろうか、今までずっと苦しみ続けていた翔は何かにかっ飛ばされたように、力なく腕を離れた。

その身体は震えている。

「ごめん……………知らない……………」

「……………ツ!」

理不尽なのは分かっている。俺がこんなことを言える立場じゃないことも分かっている。けどあんまりじゃないか。酷すぎじゃないか。

あの子は……………ずっとお前の背中を追つてきてたんじゃないのか? ずっとお前を

頼つてきてたんじゃないのか?

何をする時もお前から兄妹は一緒に、いつも仲良くして、喧嘩ばかりしてたけど………揺るぎない絆があった。天ちゃんを見てるだけでそれは分かる。

一日の会話の話題には必ずお前の話が出てくるし、自分がピンチの時にも真っ先に頼ったのはお前だった。

その気持ちがお前のかは俺にはわかんないけど………少なくとも、彼女にとってはお前が一番頼りになったはずだ、大好きだったはずだ。忘れて欲しくなかったはずだ！

「そうかよ………」

もう仕方ない。覚えているのが俺だけなのなら、俺が何とかしないとイケない。

心の中で翔を諦めた俺は、そつと制服を掴んでいた手を離す。

「だったら………俺が天ちゃんを助ける」

「そ………ら………う？」

「じゃあな」

最後に気になる言葉を口にした翔を置き去りにして、俺は教室を飛び出すように出た。

《視点切り替え》

「そ……………」

唐突に竹内から叫ばれた時、俺は何が何だかわからなかった。

ただいつも通りに過ごしていただけたんだ。でも、それには何か欠けていた。するりと抜け落ちていた。

本当に最初はその答えがわからなかったが、ほんの少しだけ脳裏によぎる。

いつもウザイくらいに元気が良くて、めんどくさいほど生意気で。でもほんの少しだけ臆病で、実は気が弱くて。

……………何なんだよ、これ。

誰なんだよ、お前。

そしてなんで……………俺は泣いてるんだよ。

《視点切り替え》

「はあ……………！ はあ……………！」

がむしやらに走り続ける。

とにかく走って走って走りまくって、街中をくまなく探す。

どこにいても直ぐに見つけられるように、目を血眼にして探し回る。

「どこにいるんだよ……………天ちゃん……………！」

いない……………

「どこなんだよ……………ッ！」

いない……………

「どこに行ったんだよ……………！！！！」

いない……………ッ！

あれからどれほど走り回っただろう。

少しも休憩する間もなく、探し回っていたが……どこにもいない。

そして絶えずRINGで連絡をしているが……一向に既読はつかない。

スマホくらいは持っているだろうと思っていたが……良く考えれば既読がつかないことは当然なんだ。

それは朝のコンビニの件で想像できる。

もう……すっかり夕方だ。日が暮れ始めている。

マジでどこに行つたんだよ……天ちゃん……

思いつくような所は全て行つた。女の子が好きそうな服が売つてある店。近くに公園。行きなれたであろう駅。もしかしたらと思つていて一度学園に戻ってきたし、1人になりたいか思つて隠れてしまつていないように路地裏もくまなく探した。

でもないんだ。どこを探しても天ちゃんがいない。

「クソっ！ クソっ!!」

その時、あんまりにも俺は焦っていたのか、何も無い場所で足元を躓いて転んでしまった。

でも……全然痛くない。天ちゃんの気持ちを考えたらこんなもの屁でもない。でも

……見つけれない……！！

そんな自分が悔しくて、腹ただしくて、虚しくて、街中で転んだまま何度も何度も地面を殴りつける。

「ちくしょう………ッ！　ちくしょう………ッ！！」

力いっぱい握りしめた拳から、滴る赤色を見ながら、自分の力の無さを呪う。

「俺は………仲間一人も………救えない………ッ！！」

何も知らなすぎる………！　天ちゃんが好きなどころも、普段行くところも、どんな考えなのか、俺はわからない………！

そんな時だった。転んでいる俺を見下ろすように、2つの影が現れたのは。

「こんなところで何してんだよ、大将」

ソ
ク

絶望の中、先の見えない暗闇にさまよっている俺に手を差し伸べてくれる影。

2つとも似たようなシルエツトだ。

「うわっ……大将、アンタ右手血まみれじゃねえか………馬鹿なことしやがって……」
その声の1つはゴーストだった。俺の事を『大将』と呼ぶ奴は他にいない。

「ははっ！ 馬鹿の契約者は更に大馬鹿だなあ！」

もう1つの声も………ゴースト………？

ゆつくりと顔を上げると、その影の先には《黒》と《白》の2人のゴーストがいた。姿形がほぼ同じの双子のような2人が。

「んだよ？ オレの大将を馬鹿にしてんのか？ ああ？」

「そりゃあするだろ、1分1秒を急ぐこの状況でこんな無駄なことしてんだ。馬鹿以外の何者でもねえ」

「テメエ………言わせておけばコノ——ッ!!」

「止めろ、ゴースト………」

目の前で口喧嘩をいきなり始める2人に声かけて、とりあえず落ち着かせる。理由は一つ。

「でもな大将、コイツ——」

「何も間違っちゃいないから……」

この行動は無駄だ。俺がどれだけ嘆こうとも天ちゃんの消滅は止まらない。俺がどれだけ悲しもうとも天ちゃんの能力の暴走は止まらない。

「なんだ、やけに物分りがいいな？」

「それだけ重荷に感じてるってことだろ！ もうテメエは余計な事言うな！」

「うるせえよ、いいからテメエは黙ってる」

と、またも目の前で口喧嘩を始める2人を無視して、よろよろとその場に立ち上がる。こんなことをしている場合じゃないから。

少しでも多く動かないと。少しでも早く移動しないと。

少しでも素早く見つけてやらないと。

「大将……」

次はどこに行こうか、どこに天ちゃんがいるだろうか。

どこに……

「んで、お前はどこに行く気だよ。《反射》のユーザー」

「……………」

あの子ならどこに行くだろうか……………寂しいと感じた時どこに行くだろうか……………?

「はあ……………もういい、見てらんねえ」

「ん？ おいつ！ テメツ……………何して……………!？」

とぼとぼと、おぼつかない足取りで歩き出す俺の行く手に塞がるように、《白》のゴーストが現れ、右拳をグツと握る。

そして――

「オラッ!!」

その直後に伝わってくる痛み。硬い何か俺の頬にぶち当たり、頭に衝撃が駆け抜けた。

「ヴッ……………!」

その突然の出来事に俺は全く対応出来ず、バランスを失った身体は流れるままに地面に強く叩きつけられた。

「……………はあ……………クッソツッ!」

《黒》のゴーストは、何かに苛立つようにフードの中の頭をくしゃくしゃと掻き回して、強引に何かを納得する。

「結局こうなのかよ……………」

……………早く探しに行かないや。天ちゃんを……………見つけないや。

「フラツフラツフラツフラしやがって。どんだけテメエ雑魚なんだよ」

《白》のゴーストから見下されている。明らかに挑発されている。

……………そんなことどうでもいいけど。

「目の前のことで頭いっぱいになって、ちつとも周りを見てねえ。誰にも頼らず縋らず、全部自分でどうにかしようってハラだ」

「だから何をしたらいいか分からなくなつて、がむしやらに暴れて、何も出来なくてこんなクソみてえな場所で落ち込む。『俺が天ちゃんを助ける』だあ？ 生意気言つてんじゃねえよツ!!」

「テメエの《信念》も守れねえ様な奴が仲間の1人も守れるわけねえだろうが!!」

……………ちつとも周りを見てねえだと……………？ 逆だろ……………！ 周りがちつとも見てねえんだろ。

生意気言つてるだと……………？ 違えだろ……………！ 誰も生意気すら言えねえんだろ。

仲間を守れねえだと……………？ まだだろ……………！ 俺が今から守るんだろ

……………！

「じゃあお前に何が出来るんだよッ!!! 戦うことしか脳のないお前に一体何が——
——ッ!!」

こんなこと言い合ってる場合じゃない。それくらいわかってる。頭ではわかってるんだ。でも……………

この事実を知ってから俺は、初めて弱音を口にした。

だからだろうか? 《白》ゴーストの言葉がどんどん胸に刺さるんだ。チクチク刺さって痛いんだ。

「戦友^{ダチ}を救える」

真つ直ぐな目だ。失敗を知らない、純粹で力強くて……………未来を見ている目だ。

コイツは目の前の現実を見ていない。もつとその先。天ちゃんを救う未来を見据えている目だ。

「多少は頭が冷えたんなら答えろ、《反射》のユーザー……………いや、蓮太」

なんでもかは知らないけど……………白^コゴーストはまだ何も諦めちゃいない。

白^コゴーストの眼は輝きを失っていない。

「新海 天の暴走を止める手だては一つ。《アンブロシア》によるアーティファクトとの強制契約解除だ。だが、とあるお人形さん曰く、これはお前たち人間が使用すると高確率でその急激な変化に負ける。つまり……………死ぬ可能性がある」

「もう少し時間がありやあ、リスクを極力無くしたVer.も作れるらしいが………残念ながらそっちは無理だ、時間が無さすぎる」

「じゃあどうするかって顔してるな？ コレ、なんだか分かるか？」

そして《白》ゴーストがポケットから取り出した物は試験管のようなもの。そのアイテムをひよひよいつと動かして針を出したり直したりしている。

「《アンブロシア》。お友達を唯一助けられるヤツだ。コイツを使えば、高リスクを背負って低確率で新海 天を助けられる」

「ちなみにここで豆知識を一つ。この《アンブロシア》にちよいちよいつとこの容器の中身を入れると………《ネクタル》つつー能力を暴走させる霊薬が作れるんだ」

そう言うって取り出したのは、透明の幻想的な試験管に入れられた紫色の液体。

「蓮太、前に異世界人から奇跡を起こせる力があるって言われたんだろ？ その《黒》から聞いたぜ？ そこで思いついたのがコレだ。つまりだ、オレが言いたいのは………《アンブロシア》をお友達に飲ませるか、《ネクタル》をお前が飲むかどっちがいい？」

狂気にも感じる不気味な笑顔で俺ににじりよってくる《白》ゴースト。

なんでコイツがここまでの情報を知っているのか。なんでコイツが霊薬を所持しているのか。色々と疑問に感じることはあるが………本当に時間が無い。それは感覚

でわかる。

だって…………… 天ちゃんの名前を、既にもう忘れかけてしまっている。

「どっちを取るにしても賭けだ。《アンブロシア》を使ってリスクが高い危険を選ぶか、《ネクタル》を使って期待度の低い奇跡の暴走を起こすか。もちろん《ネクタル》を選んで物事が良い方へと傾くとは限らない。むしろ奇跡の力が暴走するって確証もない。暴走するのはもしかしたら《幻体》の力かもしれないし、《反射》の力かもしれない」

「それに…………… お前の能力の暴走の力は未知数だ。本来奇跡つてのは人間が簡単に起こしていいものじゃねえ。人の命を救うんだ、それ相応の覚悟は必要だぜ？ 全てが上手くいっても死ねる覚悟があるのなら遠慮なく選べ」

「あ、ちなみに新海 天の居場所は既に割れてる。今日一日中その《黒》に付き合わせて死ぬほど追いかけてたからな」

「《アンブロシア》を使うなら、お前よりも距離が近いお兄ちゃんに使わせる。《ネクタル》を使うならお前が必須だからお前に来てもらう。オレは瞬間移動ができるからな、今すぐにも連れてけるぜ」

不自然なほど親切だな。

ついこの間まで敵対していた俺たちに向ける言葉じゃねえ。

まるで、お前かお友達、どっちか死ねよって言われている気分だ。

でも……きつとこれは悪意じゃない。《白》は理由は知らないけど、本当の意味で助けようとしてくれている。だって………

「大将、突然のことで頭の整理が追いつかねえかもしれねえ。けど、天を助けられる手段はもう………このどっちかしかない」

「アイツの事は大丈夫だ、嘘なんか言つてない。オレにはわかるんだ。だから………決めてくれ。アンタの選んだ道をオレも一緒に歩くからよ」

《黒》が《白》を信じてるから。

「上手くいったら………そんなときにオレが知つてることを全部話すよ。あの《白》から聞いたことを………全部」

重要なことは全て後回し、そりゃあそうか。本当に時間がねえ。

もう……… 天ちゃんの事はほほ思い出せない。本当に薄らと、微かに覚えているだけ。

………腹を括ろう。突然の事で頭がパンパンだけど………今決めるしかない。

俺は………俺は………！

葛藤の裏で……………

「さて……………と、そろそろ僕も動こうかな」

もう何日前か忘れちゃったけど、妙に癪に障る奴らから協力しないか？ と誘いが来てからだいぶ時間が経った。

もちろんそんなお誘いなんて断ったけど、そうしたら度々僕に攻撃してくるようになった。正直かなりめんどくさい。

なにが面倒かって、やっぱりかなり強力なアーティファクト能力を所持していること。《雷》を扱ったり、《方向》を操ったり、《水》を操ったりするやつもいたかな？

しかも決まって数人で攻撃してくるから本当にだるかつたんだよね。《瞬間移動》を持っててよかった。

でもこのまま逃げ続けるのもそれはそれで面倒なんだよねえ……

「そろそろ合流した頃かな？」

僕が持っていた《アンブロシア》とその配合剤、上手く使うかは竹内次第だね。

あいつらに敵意を明らかに向けてる竹内たちは、今はいてくれていた方が楽になる

し、今回は素直に助けてあげる。ま、助かる保証はないけどさ。

「にしてもなー、せっかく《石化》の能力を手に入れたのにあんまり上手く扱えないや」
試しに能力を解放して、適当な空を見上げてみる。その行為に特に意味の無いことはわかっていなければならない……空に飛んでいる雲ひとつ石にならない。

「せめて1人くらいは殺してみたかったなあー」

人間って死ぬとどうなるんだろ？ 死ぬその寸前ってどんな顔するんだろ？

ちよつと面白そうだけど、他人に使用おうとすると何故か決まって操作が不自由になる。

「でも、アイツは上手く扱ってたよね、もう1つの《石化》の能力を持つてる人」

度々僕に攻撃してくるユーザーの1人に、偶然同じ能力を持つている奴がいた。その時は同じ力で石化を阻止できたけど……正直相手にするのはめんどくさい。

今まで殺したと思ってた人たちはみんな結局生きてたし、何も面白くないなくなってるって……まさかアイツが勝手に殺してるんだもん。

あんな精密なトリック使われたら、そりゃあゴーストも自分が殺したって勘違いしててもしょうがないね。

何故か、僕の幻体である彼女は正確に僕の記憶を読み取れない。なんでか知らないけど僕と彼女は完全にシンクロできない。だから見た目も僕にすごく似たものしか作れない。

欠陥品なんだよねえ。別にあんなのならもう要らないかな。

身代わりにすることぐらいいしか使えないだろうしき。性格はどれだけやっても変えられないし、もういいや、いつか捨てるよつと。

だからこそ、僕にはまだまだ力がある。今は竹内と翔がいい感じに動いてくれてるからマシだけど……………2人とも死んじやったら絶対今よりもだるくなるもん。

でも《石化》は上手く使えない。だからイリスに霊薬を貰ったのに……………アイツ急にどつかについて消えるんだもん。もうあと2つしかないよ。

みんなに話を合わせるのも面倒になつてきたし、そろそろ自由に動こーつと。ブラブラとビルの屋上で足を大きく振りながら、街の動きをゆつくりと眺める。

……………にしてもあの時言つてた事、どこまでが本気なんだろ。

あいつらが僕を仲間に誘つてきた時言つてたこと。竹内たちが所持しているアークタイプアクトの全回収と、殺害。でもその為にはまず竹内の持つている《反射》の能力を消さないとともに攻撃できないって言つてた。

でも本当にそれだけだろうか？ 守ることは出来ても攻めることはできないんだから、僕に襲いかかってくるように数人でリンチすれば簡単に殺せそうだけど……………？

でもまあ、普通に考えれば他の理由があるんだろうね。ウザイけど、あいつらは強いから普通に殺し合えば勝てるだろうけどそれをしない、じゃあ何かあるはずだよ。

だって僕には普通に殺しに来てるから。

そっか……その線もあるのかあ……うーん……。

面倒だけど、竹内ともっと仲良くなってみようかな。最近翔ともなかなか話せてないね。

ま、どっちにしても……

「能力の暴走なんかに負けて勝手に消えるような奴らには……僕は興味がないかな。だから頑張ってね！ 生きてたら多分会いに行くよ」

見えない者たちの暗躍、その裏

「おーす、二気にしてるかあ？」
雷あづま

ここはどこかの建物の中、乱雑に物が散らかったボロボロの部屋。

周りはコンクリートがむき出しになっていて、明らかに生活感のない場所。

そしてこの建物には《2人》だけ人がいる。

「なんだ貴様、また私の邪魔をしに来たのか？」

「おいおい……そりゃ酷いだろ。《ヴァルハラ・ソサイエティ》とやらから助けてやったのにその扱い？」

「貴様如きの力を借りなくとも私は奴らを倒せた。どこまでいっても邪魔しかせん男だ」

そんな2人の会話を覗き見る。

貴方たちは、先程より更に干渉を強めた。

「あのお人形さんが消える前に言ってただろ？ 中途半端な攻撃は逆に相手を強くする。明らかにお前、あの時遊んでただろ」

「ヤハハ、遊ばなければつまらない、元より私はこのような小細工をせずともこの圧倒的な力で打ち勝てるのだ」

「んまあ……なんだ、もう面倒だからそれでいいや」

「それで？ 貴様はわざわざこんな所へ何を伝えに来た」

「んあ？ あー、なんだっけ……ま、そのうち思い出すでしょ」

「食えん男よ」

そんな会話の中、半裸の男は突然身体を激しく動かしだし、見えぬ影と戦うように拳を突き出す。

まるで身体を確かめるように。

その行為が一通り終了したあと、ニヤツと口を動かした。

「うむ……なるほど……」

「お？ もう万全なのか？」

「問題ない。では早速、奴らを殺しに——」

「だから無理だつて、あの……なんだっけ、《魔境》の能力を潰さないと反射されたら俺たち何も出来ねえんだからさ。雷あびまだつて得意の能力反射されてたじゃんか」

「不服だ、どれだけ強力な電撃を浴びせようと、あの《鏡》に触れると全て弾かれる。しかしそれを真つ向から激しく打ち砕いてこそ《絶望》の2文字はより強く響くのだ。元

より私はそのような手段には頼るつもりは無い」

「だからアイツらの仲間に薬を摂取させたんだろ。もう誰にどうしたのかは覚えてなそうだけど、事実としてあいつらは《何か》を探してる。それは成功した何よりも証じゃないか、あともう少しだ」

「それこそ私は覚えていない。確かに伝言通りの薬の摂取はした記憶があるが………その相手を全く知らない。男か女か、人がそれ以外か、影形すらも断片がない」

「んや俺も「誰か？」と聞かれちゃ答えられないが………ぼんやりとは何となく理解できてる気がするくらいだ。少なくともそうなりや成功だろ、お人形さんもそう言うってたじゃんか」

「あやつも気に入らん。私たちを利用するだけ利用して殺し合いをさせようとするハラだ。手のひらで転がされているのは非常に腹ただしいが………ここでは殺しを正当化される。それが無ければあいつから殺しているところだ」

「………まだ誰も殺してねえだろあんた」

「黙れ、替^て」

「はいよ」

あの半裸の男の高圧的な態度にも決して怯まず、どこか気だるそうに頭をポリポリと搔く彼は、何かを思い出したかのように言葉を続けた。

「そうだ、そうだ、そうだった……ほら、あいついたじゃん、あの………《イヤリング》のアーティファクト持ってたやつ」

「ん？ ああ……私たちの勧誘を断った——」

「そつちじゃない方、仲間の方だ」

「アイツ……か、あれもあれで名を名乗らんからな……不届き者が多すぎる」

「まあそれぐらいの方がむしろいいでしょ、ベタバタに信用されてるよりもマシだと思うね、俺は」

「それでそいつがどうしたのだ」

「とりあえず………これ、穂織って所に行ってきたお土産だつてさ」

「なんだ？ それは」

「ほら、色んなところを旅するのが好きって言ってたじゃん？ それでその……穂織って場所に行ってみたんだつてさ、それでプリンのお土産。お近付きのしるしつてやつじゃない？」

「………よくわからんな、貴様ら」

気だるそうな男は差し出してきた紙袋から一つのプリンを取り出し、もぐもぐと食べながら会話を続ける。

「ま、これはついでであつてだな。本題は………美味っ！ 本題は、次は誰を狙うかを

話し合おうって言ってた。アーティファクトは気持ち次第で強くも弱くもなるらしいから、周りの仲間をもう1人くらい苦しめてからの方が確実じゃないか？ って………プリン美味っ！」

「だから私はそんな無粋な真似はこれ以上しないと云っている」

「そんでな、俺の意見を言わせてもらおうと………次の標的はあの子がいいと思うんだよ」

「貴様らで勝手にやっっている。私はそろそろ向かうぞ」

「だから止めろって、いちいち助けに行かなきゃいけない俺のことも考えろよ」

「替て、いくら貴様でも限度があるぞ？ あまり私を怒らせすぎるなよ」

「雷あつま………だったらもう少し協力しろよ、俺たち全員の目的は同じだろ？ 時間がかかって腹立つのはわかるが……焦ってもしょうがない、地道に少しずつ削ろう」

「ふん……」

「話を続けるぞ？ それで、次の狙いはあの子にしようと思ってる。ほら黒いフードを被ったあの子に」

ブ
ツ
ン

.....

手にした希望 《ネクタル》

《アンブロシア》か、《ネクタル》か………より可能性が高いのは？ より危険度が低いのは？

そんなもの……きつと変わらない。どっちも危険で、どっちも希望が薄くて、どっちも信用出来ない。

だから……だからこそ………！！

「《ネクタル》………！！」

俺がそう答えると《白》ゴーストは静かにほくそ笑む。そしてそのまま2つの容器を素早く混ぜ合い、琥珀色だった液体の色を変えた。

静かに絡み合うその液体たちは、容器の中を激しく暴れ回り………

「さあ、出来たぜ」

紅藤色にその色を変えた。

そいつをポイツと雑に投げられ、遂に手元にやってくる。生きるか死ぬか、救うか消えるか、笑うか泣くかの大博打………そのキーアイテムになる《霊葉》が。

待つてろよ天ちゃん、俺が絶対消えさせない。絶対に……絶対に忘れさせないから。
「……………ふんっ！」

容器を逆さに持ち、後ろにある突起を押すと割と太い針が出てくる。こいつを刺すか、中身を飲むかどっちかすればいいんだ。

でも俺は敢えて刺す。こんなことになったのは俺のせいでもあるから、その積として。

そして……一度でも忘れてしまった自分への罰として。

……指した場所は心臓にあたる場所。そこから一気に中身を注入する。

「……………後は頼むぜ《白》。それで………大将」

その声が聞こえてきたのとほぼ同時に、《黒》ゴーストは俺の魂に溶け込むように消えていった。

「……………ツ?!?!」

そして突如として襲ってくる衝撃。全身の血が暴れるようにばげしく走り回る感覚。

心臓の鼓動の一つ一つが鮮明に感じ取れる。それは明らかな《異常》、芯から湧き上がってくる熱が身体の内部を焼き尽くすように広がっていく。

「もう後戻りは出来ねえぜ。それじゃあ行くか、お友達を助けによ」

「……………!!」

ほんの少し意識がぼんやりとしてくる。街並みはゆらりと揺れ続け、身体のバランスが保てない。

だが、そんな俺の身体を《白》ゴーストは支えるように肩を貸してくれた。

「なんで……そこまでして……？」

「オレの創造主の命令でもあるし、アンタにやあ借りがある。それとまあ……いや、なんでもねえ」

なんでだろう。たった一瞬だけが悲しい顔をした。

言葉の出だし、コイツの創造主のことを話した時だけ、切なそうな顔をした。

「……全部助けるから。天ちゃんも……街も……」

「お前も……」

そしてそのタイミングで、俺たち2人は街中から姿を消した。

飛びそうな意識の中、風を切るような音に紛れて聞こえてきたのはなんだったんだろう？ 移動の瞬間に、何かが聞こえてきた気がした。

そこは最初はわからなかった。

移動してきた場所は真つ暗闇に包まれており、明るいところから急に移ったからかまだ目がこの明るさに慣れていない。

「さあ、着いたぜ」

そしてパチツと何かにスイッチが入り、色がついた場所で前方を見ていると……………部屋の中で静かに涙を流している天ちゃんを見つけた。

「……………さが、探したぞ……………天ちゃん」

「先輩……………なんで……………ここに……………？」

「決まってるだろ……………忘れ物を取り戻しに来た……………！」

「……………やっぱり、先輩だったんですね。ずっと探してくれてたのは……………」

「大事な仲間なんだ……………諦めるもんか……………！」

フラフラな足取りで天ちゃんに詰め寄り、その手をギュツと掴む。

「……………！」

彼女は泣き続ける。静かだったその部屋にしゃっくりのような呼吸と鼻をすする音

を響かせながら。

そこに存在している為の音を出す。

「朝……一緒に学校行ったとき、もう既にこうなつてたみたいで……！」

「教室に入ったら……だれも返事してくれなくて……！」

「スマホにも反応されなくなつて……！」

「家に帰ったら……あたしがいなくて……!!」

素直に、彼女の言葉を聞き続ける。

時たま相槌を打ちながら、俺は見えているぞと、君はそこにちゃんというよつて伝える為にしっかりと返事をしながら。

「でも……先輩だけがあたしを見つけてくれて……！　ずっと……ずっとRINGで追つてくれて……」

……そうか、あの時は焦つてとにかく連絡を送り続けてただけだったけど……通知が届くとスマホはタップできなくても起動する。それで確認はできたんだ。

俺が天ちゃんを覚えていたってことを。

「でも、お兄ちゃんからも消えちやつてたから……先輩からも消えちやつたら……あたし……あたし……！」

「……大丈夫。翔はもうしっかりと思い出し始めてる」

「え……………?」

「最後の、翔と別れたとき……言ってたんだ。天つて」

それに……………最後の瞬間までここにいたってことは、きつと願っていたんじゃないか? 心の奥底では、やっぱり期待してたんじゃないか?

俺も気がついた時は驚いた。たった一度しか来たことないけど、最近のことだから覚えてる。

ここは翔の部屋だ。

テーブルやベッドやノートパソコン、必要最低限で済まされた娯楽の少ないこの空間は、間違いなく翔の部屋。

多分待つてたんだろ、アイツが来るのを。

だから考えを変えた。天ちゃん心の願いがそうなんなら、俺はそれを叶えたい。きつとそれが……………俺の起こすことが出来る《奇跡》なんだ。

「翔は必ず思い出す! 絶対に絶対に思い出している! だから……………諦めないでくれ、生きることが、進むことを、夢を見ることを……………翔に会うことを」

「うん……………!」

だから……………今こそ目覚めてくれ。

ほんの少しでもいい。1分でも2分でも……………! たったそれだけでいい。

暴走しろ……………！ 俺の力……………！

新海 天を救えツ！！

「《オーバーフロー》ツツツツ！！！！」

その瞬間に身体中から溢れ出る無数の光。

蒼色に染まったその輝きは、あちらこちらへと暴れるように輝きを放つ。

「へえ……………これが《奇跡の力》、やるじゃん」

なっ……………!? なんだこれ……………!!!

力が……………、抑えきれな——ッ……………!!!

「た、竹内先輩!? 紋章ステイブルが全身に……………!!!」

「……………能力は上手く引き出せたみたいだな。あの嬢ちゃんの事も何とかなったみたいだ」

「え？ ……………え？」

「オレの創造主がアンタを思い出した。新海 翔には妹がいるってことをな」

……………だめだ！

「あが……………！ あがががごごががぎあ……………！！」

声にならない声を発してしまう。それだけ胸の内から溢れ出る魔力に為す術もなかった。

「まあ、アンタの問題はどうにかなったと思うぜ？ その答えはきつとすぐ分かるだろ。ほんじゃま、オレはオレの仕事をしますかね」

「……………があつ……………!!? ぐつ……………ぐるしい……………!!!」

「じゃあな、中々貴重な時間だったぜ？」

「ちよつ、ちよつとゴーストさ——」

《視点切り替え》

翔の妹に適当な別れを済ませたあと、オレは蓮太に触れて能力を使う。

もちろん使用した能力は《瞬間移動》だ、そしてやってきた場所は人気のないビルの屋上。

人気のないってか昔オレがコイツと戦った時に使っていた場所、廃ビルの屋上だ。

「さて……………」

テクテクと歩きながら蓮太から離れて、奇妙な声を絞り出しているアイツと対面する。

「やっぱりそうなっちまうよなあ……………いくらアンタでも厳しかったか」

「ぐがあああああああっつっつっつ!!!」

「まるで化け物だな、せっかく男前だったのに……………勿体ねえ」

トントントンと靴のズレを直していると、アイツは精神に限界が来たのか白目を剥き出しにして能力を完全に暴走させる。

次第に紋章は蒼色から真っ赤に変わっていき、それだけ精神状態が不安定だということを感じる事が出来た。

「乗りかかった船だ、《黒》とも約束してるし……………ちゃんと守ってやるから安心しろ

よ?」

ひたすらに叫び続けている蓮太は空間を破り捨て、その欠片を《鏡》に変えて辺り一面に飛び散らかす。

まるでオレを逃がさないと言うように。

「明らかに既存の能力の限界を超えてるな、2 mなんてもんじゃねえ、こりやあ……………」
このビル全体くらいは範囲に入ってそうだな」

「ハアー……………! ハアー……………!」

今にも叫んだりして奇行を行いそうなほど理性を失った蓮太は、獲物を見つけた獣のように這いつくばり、オレを睨む。

「しかも能力を暴走させるだけじゃなく、体まで動くのかよ……………! たたく、オレは《黒》と違ってちつとも傷が癒えてないんだぜ? オレの創造主サマはそんなこと気にもしてなかったからな」

「つつても約束は約束だ。少々手荒だが、ちよつとの間眠ってもらうぜ? 悪いけどそれ以外にアンタを止める手段がねえんだ」

見た感じ能力が暴走しているのは《反射》の能力、つまり……………《鏡》の力と《奇跡》の力。アイツが出てきてないことを考えると……………幸い《幻体》の方は無事っぽいな。

でもまあ……主人がこうなっちまってるんだ。アイツが出てきたとしても厄介になるだけか。

「グルルルル……」

とにかくまずは気絶させるところからだな。流石に完全に意識を失えば能力も解除されるだろ。

あんまり期待できないけど……まあ最悪ここなら被害は出ないし、思う存分やらせてもらおうとしますかね。

「まあ、今のオレがちゃんとアンタを止められたらだかな」

さつきコイツを殴っただけで、正直拳が震えるほど痛かった。走り回るとズキズキ響くし、見た目を変えられて姿は綺麗だけど、本当はまだボロボロだ。

動いているのが異常なくらいに。

正直、勝つのは無理だと思う。でも、勝てないからって挑まない理由にはならないよな？ 元とはいえオレが認めた創造主パートナーなんだ。

……そろそろやるか。

「じゃあ……約束通り、コイツを止められたら交渉してくれよ？ オレもそっちに行けるようにさ、《黒》」

そしてオレは、指を軽く鳴らして数本の赤い槍を出現させる。

《魔眼》は絶対に使わない。オレの中の殺意を押し殺す為に。

「さて……あん時のリベンジ戦といきますか」

一段階目の暴走、一段階目の覚醒

「はあ……………！ クソっ……………！」

この戦いが始まってからどれくらい時間が経っただろうか？ 体感的には何時間にも及ぶ死闘に感じる。

殺し合いは大好きだが、こうも不利な状況が続くのは流石に納得がいかねえ。

しかも相手は全力でオレを潰しに来ているにも関わらず、オレは命を取っちゃいけない。ハンデ戦もいとこだ。

それに面倒なのが……………

「グガアツ!!」

「しゃらくせえー！」

お互いの飛ばした赤い槍をぶつけ合い、目の前に現れた能力の全てを相殺する。

暴走したアイツはオレの能力を真似するように扱っていた。

しかも辺りに飛び散る無数の鏡の欠片はそれぞれが《反射》の能力を持ち、その欠片そのもので攻撃することも出来ている。

例えば今みたいに――

「あつぶね――!?!」

一部の欠片が集まって槍のような鋭利な武器に変化し、至る所から飛んでくる。そしてそれらがオレにヒットしなかった瞬間に砕け散り、元の場所へと戻る。

まるで意思があるみたいだ。

無造作に攻撃してる時もあるが、明らかにオレを狙ったりもしている気がする。

普通はありえないだろ。校内火事の時だつて創造主サマ曰く自我こそ保っていたが奇声を上げながら自分の能力を操れていないような感じだつたらしいし、範囲も学校全体を包むレベルの強大な範囲だった。

アイツらに止められたけど……あのままだつたらもつと被害は広がっていただろうつて言つてたし……

「あ……………あ……………」

「……………」

最初こそ落ち着きがなくて似たような感じだったが、今は違う。あからさまにオレの隙を狙つてる。

「わ……………たし……………じゆう……………」

「はあ? お前何言つて――」

その不思議な言葉と共に、蓮太を中心に突風が巻き起こる。辺りの瓦礫や砂を取り込むように浮かせて、グルグルと駆け上がっていた。

まるで小さいサイクロンだ。

もしこれらの力が《鏡》の能力だけの暴走だったのなら………考えたくもねえな。と、その時。脳内に直接とある意思が流れ込んでくる。

そしてその直後に足元にコロコロと転がってくる試験管のような容器。その中には琥珀色の液体が入っている。

「……………そうかい。オレはどうなつてもいいけどそれだけは打ち込んでけつてか」どこかから見てるな。微妙にそんな気配がする。

やつぱり……………心の底からどうでもいいんだな。オレの事なんか。

この数日間で創造主サマの性格や心は分かった。思想や目標も。アイツの大切な物にオレは入っていない。いや……………そもそも大切な物なんてないんだけど。

人を物のように扱い、自分以外は全て気にしない。唯一気にしているのは翔だけ。

オレは常に《便利のいい物》だった。

だからこそ、今でも鮮明に思い出せる。あの時に蓮太が駆けつけてくれたことを。《電撃》を身体に浴びせられ、全く動けないオレを本気で心配してくれたアイツを。

ちよつとだけ《黒》が羨ましかつた。その時くらいからだ、オレの中の殺意がどんど

ん溶けるように消えていったのは。

殺したい欲求が抑えられ、まともになれたのは。

こんなことを思うオレは幻体失格だろう。仕える立場でありながら主人を離れたいと願っている。

オレを《人》として見てくれていているアイツの元へ……………行きたい。

「だからよ……………そんな顔しないでくれよ」

力を暴走させた蓮太は、相変わらぬ狩りをする獣のようにオレを狙う。

白目を剥いて、苦しそうに、呼吸を乱して……

泣いている。

「まだ……………負けねえ……………」

赤い槍を飛ばし続け、時には瞬間移動で返し技を躲し、一定の距離を保ちつつ戦闘を続ける。……………が。

「……………うっ！」

精神の限界がきてしまったのか、正確な動きをすることが出来ずに《反射》された赤い槍に左肩を貫かれる。

そしてそのまま背後へ飛ばされ、大きな瓦礫の岩に突き刺さった。

アイツら人間ならこんな槍を貫かれたところで大した意味は無いが……………オレは違う。

実物の槍を突き刺されたのと同じなんだ。

だから……………抜けない。

「……………ぐあつ!？」

必死に左肩に突き刺さった槍をどうにか抜こうとしていると、反対側の右腕に今度は一本槍を飛ばされ、突き刺さる。

「いつ……………!!」

次に左もも。

「ぐっ……………!!」

そしてダメ押しに腹を貫かれる。

ダメだ……………! やっぱり無茶だった……………! まさか暴走の力がここまでなんて

……………

身体を自由を奪われると、暴走した蓮太はその隙を逃さず無数の《鏡》の欠片で鋭利な武器を作り、オレにトドメを刺そうと襲いかかる。

そして、その瞬間に感じる心。

創造主の記憶。

『あくあ、よく頑張ったけど残念だったね！ バイバイッ』

そして何かの繋がりが切れる感覚がした。

それを境に、オレはアイツのことを思い出せなくなる。ノイズがかかったように雑音と砂嵐の記憶が混ざり、オレは誰と契約していたのかさえ分からなくなった。

ただ一つ理解出来たのは……………見限られた。

『使えない』と判断された瞬間に捨てられた。

いや、最初っから捨てる気だったんだ。

薄れゆく意識の中、オレは意識のない蓮太に声をかける。

「なあ？ 酷いだろ…………？」

せつかく…………オレは…………

「……………大将」

全てを諦めたその瞬間。このまま消えゆくのみだと望みを捨てた瞬間、とある女の子の
声が横から通り抜ける。

「危険な槍………消えちやえつ
!!!!」

その日、想いは共鳴する

身体中に力が入らずに、立つことすらままならなくなったオレはその場に抵抗するとなく倒れる。

そう……倒れた。気がつけばオレは何故かアイツの思うがままに何かしらの方法で動きを止められ絶体絶命のピンチだったはずだ。

左肩ともも、そして右腕と腹はそれぞれに穴が空いており、その箇所は赤黒く塗りつぶされるようになっていて、見るだけでもかなり痛々しい。

まあ、痛すぎてもう感覚がないんだけど。

「おいっ！ ゴーストっ！」

そんなオレに駆け寄ってこようとしているのは……新海 翔だった。呼びなれない口調で血相を変えて向かってきている。

そしてそれに続くように妹も。

「んー……………えいっ！」

その声とともに一瞬で思い出す。オレがさつきまで置かれていた状況を。

赤い槍で貫かれていた事実を。

チラツと背後を振り返ると、あの瓦礫の大きな岩には4本の槍が突き刺さったままだった。

「大丈夫っ!?」……………って、そんなわけないですよね……………」

倒れているオレを左右から挟むように座り込み、オレのことを心配しつつ蓮太を見る2人。

「あれが……………竹——いや、蓮太なのか?」

赤黒く暴走した蓮太に戸惑ってるみたいだ。

「あれって……………あたしのせいでああなっちゃったんだよね……………」

切なそうな表情でじつとアイツを見つめる妹。そうか……………おそらく……………能力を手に抑えたな。

《ネクタル》は簡単に言えば暴走させる薬だが……………詳細は少し違う。契約者とアイティファクト間でのリンクの波長を狂わせる薬だ。

そして合わなくなったお互いの波長は、次第にその揺れ幅を増幅させ、結果能力が暴走する。つまり……………逆にその波長に慣れてしまえばそのままの強さで自在にコントロール出来るようになる。

それは簡単に出ることじゃないが……………これが蓮太の《奇跡》。とんでもない

力だ……………

「新海……天……………だったよな？ お前……………その能力……………」

「ゴーストさん達がワープしちゃったあとにね、お兄ちゃんが本当に来てくれて、みんなあたしのこと思い出してくれたの。流石のあたしでもわかるよ、みんな思い出してくれたのって……………先輩のおかげなんだよね」

「……………ああ」

「それで、あの時……………先輩苦しそうな顔してたから、力にならなきゃって強く思ったら……………目覚めたっぽい。あたしの存在ち感か操作」

「ゴーストさんも……………ごめんなさい。本当に助けてくれてありがとうございます。だから、ここはあたしにどーんと任せて下さい！」

……………ゴイツ、こんなに頼もしいやつだったっけ……………？

「もちろん天だけに無茶はさせない。俺も参戦して天を死ぬ気で守る。それに……………俺たちの仲間は駆けつけてくれるから、間に合いさえすればなんとかなる……………いや、何とかするさ」

「なか……………ま？！」

「ああ、新海俺チームの切り札が来てくれる」

……………よかった。アイツにこんな仲間たちがいて。

ているが……そんなの長くは持たない。必ずボロが出て負けてしまう。

「嫌だっ！ 逃げないっ！」

「なんでそこまでして——」

「全部あたしが悪いのに、あたしが勝手なことをしたからこんなことになっちゃったのに、先輩は最後まで見捨てないでくれた！ ずっと……ずっとあたしを探してくれた！」

「みんなの記憶から消えちゃった時も、あたし自身が消えかけてる時も、先輩は命を懸けて助けてくれた！ 諦めなかった！ だからあたしも諦めない！ もうすぐあの人が来てくれるから……せめてその瞬間まで!!!」

そしてその妹の決意に応えるように輝きを放ち出す小さな背中。

服越しからでも十分に伝わるその輝きの強さに目を疑った。色こそ蒼色ではあるが、紋章が侵食していない。

つまり、アーティファクトの支配に飲まれていない。

けどこんなに力を解放させちまったら、コイツの精神が持たないはずじゃ——

「あたしが………守るんだあああつつ!!!」

右腕を前に差し出し、銃を作るように親指を立て、人差し指を蓮太に向ける。するとその銃口にあたる人差し指の先端から、蒼い光が波紋のように広がっていく。

そこに密集する背中から放たれる光たち。

しかし段々とその指や腕が痙攣を始める。圧倒的すぎるアーティファクトの力に身体が耐えられていないんだ。

徐々にその痙攣が激しくなっていくが……その手を支えるのはお兄ちゃん。

「ソフィが前に言ってたみたいステゲマに紋章が広がってない……ならお前を信じるぞ！ 天ツ
！」

「……！ うんっ！ 先輩の力の暴走そのものを消す！ みゃーこ先輩が来ても………無事なように！」

指先の波紋は更に大きく広がっていき、最後の力を振り絞るように視界が焼かれるような青白い閃光を放って――

「先輩を……いじめるなああああ
!!!!!!」

白黒の二つ目の力

破裂するような勢いの閃光、それが輝きを弱めた頃には蓮太の赤黒い紋章もその強さが抑えられていた。

弱くはなっている。なっているが……やはり強がついていてもこれが限界だったんだろう。完全に消しきれていない。

「ぐっ………ぐぐぐ………!!」

「ダメか……?!? 天………ッ!!」

しかし暴走が抑えられている証拠に、蓮太を取り囲んでいた風と鏡も荒れ狂う動きを止め、時間でも停止したようにその場に漂っている。

きつと消滅の力とぶつかり合っているんだ。それほどまでに見えない力で新海 天は戦っている。

歯を食いしばって、決してその力を緩めずに。

オレも何かしなくちゃ………!

少しでもアイツの隙を作れるように能力を使おうとするが………ダメだ。何も出

来ない。

そうだ、オレには契約者が居ないんだ。だから何も力は宿されていない。

……………クソっ！ クソっ！ せめて……………身体が動けば……………！

と、その時、オレの近くにある階段へ続く扉が勢いよく開かれる。

その視線の先にいたのは、羽のようなヘアピンを髪に留め、白い制服に淡い桃色のニットパーカーを身にまとった女。……………九條 都。

「本当に……………ここにいた……………!!」

一瞬オレと目が合い、途中までオレの様子を見るために駆け寄ってきていたが……………それを止める。

「待てっ！ オレよりも先にアイツらを！」

「でっ、でも……………！」

「新海兄妹が蓮太を抑えてる！ あれだけ弱った力ならアンタの能力で奪い取れるはずだ！」

心ではまだ迷っている様子だったが、必死になって戦っている2人を見て、覚悟を決めたようだった。

「わ、わかりました……………！ じゃあ竹内くんのアーティファクトを——」

「じゃなくていい！」

「えっ?」

「蓮太の心臓にある紅藤色の液体を取り出せ! それさえ無くなればリンクは正常に戻るはずだ!」

暴走したままのアーティファクトなんかを奪つちまったらお互いにどうなるかわかったもんじゃねえ! 既にあの暴走は《異常》なんだ、全員が無事で済むとしたら……………それしかねえ!

「は……………はいっ!」

若干後ろ髪を引かれながら、あの兄妹よりも少し前に出て、片腕を差し出すように前方へ出す九條 都。そしてその能力を解放し……………

「どれ……………? 竹内くんを狂気に走らせたのは……………!」

手の甲から放出された光が導かれるように蓮太の心臓へと向かう。

「これは違う……………これも……………これでもない……………液体、液体……………!」
「……………ッ! あつた!」

閉じていた瞼をカッと見開き、開いていた手のひらを引き寄せるようにして閉じる。

その腕は自身の胸の辺りにまで引つ込めていた。

「みゃ……………みゃーこ先輩……………も、もう……………!」

「お願い……………成功して……………ッ!! ………………えいっ!」

九條 都が力強く何かをギュツと握りしめると、突如として蓮太の身体から薄くなっていた紋章が完全に消える。

辺りに漂っていた鏡の欠片もひとつ残らず消滅し、風も吹きやんだ。

そしてその途端にへたりと尻もちを着く新海 天。

「どうですか……？ みゃーこ先輩」

はあはあと息を切らしながら、新海 天は九條 都に問いかける。

そして………

「これ……だよな？」

九條 都はその小さな手を開くと、手のひらで作った皿に例の色の液体が収まっていた。

ぼたぼたと床に落ちていつているが、どうせ捨てるものなんだ、それはどうでもいい。とにかく……薬は取り出せた。作戦は成功したんだ。

「じゃあ……竹内くんは!？」

《視点切り替え》

「うっ……………うう……………！」

なんだろう？ 軋むように身体が痛い。頭もクラクラする。

謎の痛みを我慢しながら俺は顔を上げる。何がなにやら全く分からないからだ。そもそもとして何かが起こっていることすら分からない。

そして辺りを見渡そうとしたその瞬間——誰かから抱きつかれる。

「うぐっ——!?!」

視界に映ったのは翔と九條さん。そしてその奥にいる《白》ゴースト。

そして力いっぱい俺を抱きしめているのは……………

「天……………ちゃん？ どうしたんだ？」

「ぶえつぶおうおえ……………あうえうばえうおうえ!!!」

「ごめん全然わかんねえ……………」

俺の肩に顔を擦り付けながらぐりぐりと顔を押し付ける天ちゃん。……………これさ、泣いてるんだろうけど、多分俺の服に涙とか拭いつけてるよな。

「蓮太、さつきまでのこと覚えてるか？」

「いや……まったく」

翔から優しく質問されるが……ぶっちゃけ何も覚えちゃいない。俺は確か………
天ちゃんをどうにかして助けて………ん？ 助けたのか？

なんて考え事をしてしていると、とっさに九條さんが両手を後ろに回して、何かを隠すようにした。

「……？」

そんな事を不思議に思っていると、雑に開けられた扉から香坂さんと希亜が大慌てでこちらに走ってくる。

「竹内さんはっ!？」

「どうにかなったようね」

未だに焦り続けている香坂さんに比べ、俺を一目見ると顔色を変えて妙に落ち着く希亜。軽く深呼吸をしたあと彼女は倒れているゴーストに肩を貸し、俺のどこまで歩いてくる。

なんで……ゴーストはこんなに疲弊してるんだ？

「無事かよ、アンタ」

「あ、ああ。なんとか」

やれやれと言った感じで、ゴーストは俺を見下ろしてくる。その目には輝きはなかつ

た。

「なあ、なんでお前……そんなに怪我してるんだ？ 腕とか腹とか………」

「かすり傷だ、気にすんな」

いや、そんなわけない。吸い込まれそうな程に黒く残った傷跡には何かに貫かれたような痕跡がある。

「かすり傷だったって………」

「だからなんもなかった」

「んなわけあるかよ！ と、とにかく早く治してもらえ！ 言いたくなきやそれでいいから、まずは一旦主人の元へと帰れ！」

コイツも誰かの幻体なんだ、きつと俺と同じやり方で傷を癒すことができるはず！

「……そうだな、オレは還るよ」

ゆっくりとゴーストは目を閉じていく。まるで今すぐにここで寝てしまうように全身の力を抜いていく途中で、希亜が声をかけ止めた。

「待ちなさい」

「……あ？」

そうしてゴースト似て渡すのは何かの《容器》。あれ……どっかで見たことあるな。たしか……《黒》を取り込んだ時に飲んだやつだ。

じゃあ……アーティファクト？

「お前……これ……なんで？」

「私たちが遅れた理由、それはある人物を追っていたから。そしてなんとかその人物にたどり着いたあと、私とその人物とほんの少しだけ会話をしたの」

「その時に言っていた。「使い物にならないから要らない」って。その時に捨てていった物を拾っておいいた」

……？ どういう事だ？ つまりはこのゴーストの契約者と対面したってことか？

「希亜、なんでそんなことを……？」

「この廃ビルを嬉しそうに見ていた怪しい人物。問ただせば得るものがあると踏んで九條さんにこの場を任せた。香坂さんと2人だったけど、相手の《槍》の能力で少しの間分担されたの」

「そしてその中でさつき言った流れでこれを手にした。そしたらその人物はそれがアーティファクトと言ったから、前に蓮太の言っていた情報と照らし合わせて、貴女の物という可能性が高かったから渡したのだけれど……違う？」

「いや……オレのだ」

「その人物って？」

「名前は分からない。ただ覚えているのは、青色の頭髮に紅い瞳、そして少し小柄な男性だったわね。ハッキリと姿が見えたのは分担されてからだから……私しか目撃していないのが残念だけど、正直この街じゃあそんな人はかなりいるわ。あまり当てには出来ないかもしれない」

まあたしかに……髪色を変えている人や瞳の色が赤い人なんて結構いる。未だに泣きついている天ちゃんみたいに銀髪の子だつていくらでもいるし……まあでも貴重な情報つてことには変わらない。

つてそれよりも……

「それじゃあお前……契約者がいないのか？」

「……………」

少しずつ瞳に色もどりつつあるゴーストの返事を待つっていると、感情をなんとか落ち着かせた天ちゃんが、見上げるように俺に顔を向ける。

「あ、あのね……ゴーストさんが一番頑張ってたんだよ？ あんな大怪我までしちゃつても、ずっとずっと……先輩を守って頑張ってたの、あの……だから……………」

……誰かと戦っていたりしたのか？

俺の気絶している間、ずっと守ってくれた？ 《白》が？

あの《白》が？

「契約してあげてください……！」

「えっ……？」

意外な言葉だった。軽くとはいえ、俺とこの《白》ゴーストとの関係は一応みんなに伝えてある。殺しあっているような仲だということも、助けたい相手だということも。

「先輩の幻体も元々一つだったんでしょ？ だったら一緒にいた方がいいと思うの……！」

え、あ、いや……そりやそうだが……

なんなんだ？ この異様な懇願というかなんというか……なんでこんなに必死なんだ？

「それは俺が決めることじゃなくてだな……！」

「……ん」

本人に聞いてみないと、つと言いかけた時に《白》ゴーストから例のアーティファクトを手渡される。

「……まあいいか、どうせ俺も味方にスカウトしようと思ってたしさ」

言葉数自体は疲労のせいなのか少ないが、あの会話の流れでこれを手渡したってことはそういうことだろう。

「じゃあ……ウチに来るか？」

ポンつと蓋を投げるように外して、その中身を飲む直前で再確認する。

「ああ」

初めて見る《白》の少し大人びた静かな笑みを見て、その覚悟を受け入れる。そして液状になったアーティファクトを飲むように体内に入れ込み……身体に能力が馴染み始めると、俺に吸い込まれるように《白》は消えていく。

「これからよろしくな、蓮太」

「これからよろしくな、ゴースト」

2人の名前

ズキン――

胸の奥、心臓ではない見えない何かが痛む。実質3つ目のアーティファクトをとりこんだ瞬間だ。

「あ、あの、だ、だい……じょうぶ……でしょうか……？」

「――ッ、ああ、大丈夫」

香坂さんの声でふと我に戻る。そしてとりあえず俺たちが繋がったのかを確認するために……

「おう」

「ん」

《白》と《黒》を両方呼んでみた。

外見はそのままに、《白》の方だけ傷が癒えているように隠す。

「……何度見ても慣れないわね。複数の聖遺物と契約を交わすなんて」

「まあそう言うなよ希亜」

ちよんちよんとあぐらをかいて座る俺の足に手招きするように《白》を呼び、座らせようとす。《白》はその後の俺の考えを読み取ったのか特に抵抗せずに身体を寄せてきた。

「んでぞ《黒》、あの方法以外でどうにかして回復してやれる方法ってないの？」

もちろんあの行為をしてみれば一気に回復に向かうんだろうが……如何せんこの人数に囲まれてするような事じゃない。

しかも原理が分からない上、俺もアホみたいに疲れるからな……やるならベッドの上がいいだろう。

「首筋に手を当ててやりやあいい。回復速度は比にならねえくらいおせえけど、何もしねえよりはマシだろ」

「へへへへ」

フードの隙間からゆっくり手を入れて、髪をかき分け首筋に触れる。すると確かにそこから何か吸収されているような、何かを失う感覚が。

昔見たラーメン忍者の漫画で医療忍者はこんな感じで治療してたな。

「何してんだ？」

そんな翔の疑問。いや俺が何されているのかを知りたいんだけどさ。

「知らね。俺が協力すれば傷が治っていくんだとさ」

「アーティファクトは魂の契約だ、欠けて傷ついた魂を癒す方法は自然回復か繋がり
の強い魂から欠けた部分を補ってもらうこと」

淡々とした《黒》の説明が始まる。

「つまりは大将の魂に宿っている治癒能力を分けてもらってることだ。だから分け
与える側のアンタも傷つくし、分け与えられる側は傷がみるみる癒えていく」

ふーん……それで一番効率のいいやり方がキスなわけね。

まあみんな疲れてる様子だし、休憩がてらもう少しここでこうしていようか。

「ま、もうちょい待ってくれよ。ある程度これが済んだら帰ろう」
「だな」

各々が適当な場所に座って、ひたすらにゴーストの回復を待つ。そしてそんな待ち時
間の何気ない会話の中、九條さんがある質問をした。

「そういえば……2人のことはなんて呼べばいいのかな？」

「え？」

「だってほら、竹内くんは2人に《ゴースト》って呼んでいるでしょ？ お名前が同じだったら混乱しちゃうわいかなって」

「あく確かにそうですね、先輩はその……魂？ で繋がってるから分かるかもだけど、あたし達は全然わかんないし」

「そうだな、俺と天が2人とも《新海》って呼ばれる様なもんだろ？」

確かに紛らわしいな。同じ呼び名で呼んでいると周りが混乱しそうだし……特にこの事情、アーティファクト関連を知らない人に説明する機会があった場合、ゴーストですって言うのはちよつと痛いよな。

「らしいよ？ どうする？ 2人とも」

「オレは別に今の名に未練はねえし、変えるなら勝手に変えてくれ」

「オレもだな、呼びやすいようにすればいいんじゃないやねえの？」

……うん。早急に決めるか。いざそう考えてみるとマジでどっちが何を言ってるかわかんねえ。

にしても名前………か………せつかく一生に一度の特別なものなんだから、真剣に決めないとな………

「ちなみにさ、みんなならどんな名前がいいと思う？ この2人を見て」

姿形は簡単に変えられるけど、彼女たちのイメージがもうこの姿に当てはまっちゃまってるから今更姿は変えたくねえし、この見た目のイメージに合う名前を考えてみよう。

そしてしばらくこの場にいる全員が名前を考え始める。そして一番最初に意見を言ったのは翔だった。

「《レナ》ってのはどうだ？」

《レナ》？ え？ これが……………世界!？」

「レナ……………レナ……………?」

まあ漢字変換してもおかしな名前にはならないっほいし、本人たちがそれでいいのなら別にいいけど……………なんでレナ？

なんて疑問に思っていると、天ちゃんが横からボソツと質問をした。

「月^{ルナ}じゃなくて?」

「あつ! ……こいつ……………! 気づきやがった……………!」

「兄妹らしいやり取りね、わかるように話して欲しい」

あ、ナイスツツコミですよ希亜さん。俺もついていけない感じだったし。

「ああ……………だから……………天が産まれた時、ウチのおかんが悩んでたんだよ。天って書いて《ソラ》にするか、月って書いて《ルナ》にするかで」

「いやね、天つて書いて《ソラ》にするのもどうかと思いますけどね、月と書いて《ルナ》になんてされていたらもうそれは裁判ですよ、産まれて直ぐに改名の裁判かけてますよ？ あたしやあ」

そうか？ 言うほどルナって名前悪いかなあ？ 俺は普通に可愛いと思うんだけど……俺だつて月と書いて《ライト》って呼んで欲しいし。そしたら新世界の神目指すわ。

「で、でも！ 可愛いと思いますよー」

「そうっすかねえ《ルナ》って名前にするなら、にいいには《トリガー》ってすべきでしょ
それどこの探偵？

なんて考えてしまうような会話をする香坂さんと月ちや——天ちゃん。

……………ん？

「ちよつと待つて、妹に付けられるはずだった名前をつけようとするなんて……翔、お前まさか2人のゴーストを妹のように思ってるってことじゃあ……………？」

「違えよアホかよ」

と、……で希亜の更なる追撃。

「シスコン？」

「違う！ 断じて違うッ!!」

必死になつてゐる所が怪しさを増させますよ？ 兄貴。

あー、ほら見て、このゴーストの冷ややかな目を。もうほんつと冷たい目をしてる。心の底から気持ち悪いと思つてゐる目だこれ。

そつかあ……翔がシスコンかあ……うん、まあ……うん。

「ほらっ！ とつと、とにかく他の案は!? なんかないの!？」

「なんだよ〜！ 妹のこと大好きかよ〜！」

「違えよ！ バカ！」

「素直になれよ〜！」

「死んでしまえ」

「ひどいっ!？」

………飯にもさつき消えかけてた相手にそれ言つちやいますかね。

まあ……本人たちは冗談のつもりだろうし、周りもそれをわかつて笑つてゐるっぽいし、あんまり深くは気にしない方がいいのかな。

天ちゃんも嬉しそうだし。DMなのかな？

なんて考えていると、香坂さんが恥ずかしそうにもう一つの案を出した。

「じ、じゃあ『すーこ』ちゃんは——」

「却下」

「はうつく……………」

即答っ!? それ酷くね!? あ、いや、すーこもだいぶ酷いけどさ!? お前ら2人結構キツイのな!?

「俺は可愛いと思うよ!? すーこって名前も! な!？」

そう言つて九條さんに助けを求めるが……………」

「え!? あ……………あ……………う、うん! か、可愛いと……………思いますよ!」

お前らただけ嘘下手くそなんだよ! 前に成瀬センセが言つてたことが何となくわかつたわ!

「じゃあ希亜は——」

「二つの共有体……………《白》はタナトス。《黒》はヒュプノス。あえてそれぞれを連想させるイメージを入れ替えることで、お互いに必要不可欠な存在だと——」

「はーいもういいです」

「う……………、そ、そんな言い方っ」

このタイミングでそっちのスイッチが入るのはマズイ。下手したらマジですごい名前をつけられそうだ。

「じゃあ逆に蓮太はどうなの? 貴方ならどんな名を名付けるの」

「えっ? 俺? ええーっと……………」

名前……名前………

「星の白金と世界？」

「ふざけんなっ!!」

ゴーストたちから怒りの2連撃を食らう。《白》からは後頭部でヘッドバット、《黒》からは普通にゲンコツ。

この子たち契約相手に容赦ねえ……

「じゃあセックス・ピスト——」

「セツ………！ セック………!!!」

「セック○☆×%!?!」

俺がそれを言いかけたその時に素早い反応速度で九條さんと香坂さんが呟いた。
てか香坂さんに至ってはほぼ叫んだ。

「……………」

なに？ この明らかな過剰反応。別にそういう意味じゃないよ？ 俺の知ってる漫画のキャラクターの名前がそうなだけで、別に変な意味じゃないんだよ？

「とっ、とととととととととにかく！ 《レナ》ちゃんでもいいの？ エロパイ！」

「俺に聞くなよ、つかエロパイ言うなよそう捉えたのアイツらだろ」

はあ……と軽くため息を吐いたあと、改めて2人のゴーストに聞いてみる。

「どうなの？　なんかみんなこんな感じだから、希望があるならそれにする」

ラインナップが微妙だからな、俺は別に《レナ》と《ルナ》でいいと思うけど……………

2人は顔を見合わせて、なにか意思疎通をしたように頷き、ある言葉を口にした。

「大将の文字をくれよ」

「……………は？」

ここのいろ。

「お前ら……俺の文字ってどういうこと？」

「だから、大将の名前から一文字欲しいってんだ」

……なんで？ それは余計に混乱する事にならない？ わざわざ似せた名前をつけるなんて……………

まあ本人たちがそれがいいなら別にいちいち反対はしないけどさ。

だとしたら……竹は無いな。内もダメだ。太なんてもつてのほかだ。じゃあ……蓮だよな。

レナ……………れな……………れんな……………蓮雫……………

「蓮雫」

うん。めつちやめつちや恥ずかしい。自分の名前を使うなんてこんなに恥ずいのか。

「わあ、すつごく可愛いお名前！」

ボソツと呟いた名前に凄く気に入った様子の九條さん。

……なんで君なの？

「……そうかなあ」

個人的には恥ずいと思うけど……よく父親と息子で同じ漢字を使う名前の人っているよな。

そう考えれば別におかしなことでは無いのか。

「それでそれで？ もう一つのお名前は？」

「ええ………」

女の子っぽい名前……み……よ……こ……か……！

「蓮華」

「おおー！」

「翔チームうるさい」

九條さんと天ちゃんがキヤーキヤー騒ぐように楽しんでいる。いや……これは悶えてんのか？

「なんだかんだ言いつつノリノリじゃないっすかー！」

「あー！ あー！ 五月蠅い五月蠅い!! もういい！ 《黒》がレナで《白》がルナだ！

はい！ 決定！」

となんだかんだで小っ恥ずかしくなり、無理やり話を終わらせる。

なんで俺の名前の文字なんだよ、全然いい名前つけられねえよ、つか別にレナとルナで

いいだろ、マナカナみたいで。

……………古いか。

「《黒》、お前どつちがいい？」

「オレは……………蓮雫だな」

「オレはその逆の方がよかつたから丁度いい、決まりだな」

ニヒルな笑みを浮かべながら意気投合する2人、え？ なに？ 絶対その名では呼びませんよ？

「うっせうっせ！ とにかくルナはさつきよりはマシになったろ？ 後は家に戻ってか

ら治すから一旦おめえはけえれ！」

「おーい大将、オレたちの名前を間違えてるぜ？」

「お前もだレナ！」

「なーにを照れてんだか」

なんか最後に言つてた気がするけどそんなこと気にしない。だって煽ってきたのはアイツらからだから。

「素敵な、な、名前だと……………思いますよ《蓮雫》ちゃんと……………《蓮華》ちゃん」

「止めてくれ香坂さん。自分で言つといて思つたけどあれは無い、素直にレナとルナで呼ぶことにする」

「彼女たちがそれで反応するとは思えないのだけれど？　呼び慣れていた方がいいんじゃない？　蓮呼びに」

「だーかーらーやめろつつつてんだろ！　希亜！」

《視点切り替え》

「ただいま、お父さん、お母さん」

「おかえりなさい、都」

「あぁ都、おかえり」

玄関を1度通つて挨拶を済ませ、数ある家訓を守つて今日も私の部屋へ向かう。

着替えを済ませ、明日の準備も整えた後に、竹内くんから任された《アンブロシア》の霊薬を手にとってみる。

「これが……………霊薬」

あの後、私も理解出来ていなかった事の事態を全て聞いて、みんなが別れる直前に新海くんが拾い上げた琥珀色の液体の入った試験管の容器。竹内くんは1度見たことがあるらしくて、それがソフィさんの言っていた《アンブロシア》ということが判明した。そして何度も新海くんがソフィさんと呼んでいたけれど……………あの場には現れなかった。それにあの時だけじゃなくて、どうやらここ最近は全然姿を見せないみたい。

竹内くんが何か聞きたそうにしていたけれど……………何となく聞かない方が良かった。

それで、異世界からしか入手する手段がないからって理由で希少価値が高いと判断した結城さんと竹内くんが、これを管理するのに最も適任な人に預かってもらうって事で、私が指名された。

理由は竹内くんは「九條さんがもしもの時があった時に俺と連絡しやすいから、それに最悪奪い返せるしな」って言ってたけど……………私がこんな大役を任せられちゃっているのかな。

最近少し考えちゃうことがある。

私は1番の足でまといじゃないか？ っ……………

簡単に天ちゃんのことを忘れてしまっていたし、私をもっと自分の能力について理解

出来ていれば、竹内くんがあんな無茶をする必要はなかった。

だって暴走を可能にする霊薬《ネクター》を天ちゃんも注入されたってことは、あの時に竹内くんに来たことは天ちゃんにもできていたかもしれない……

私がつとしっかりしていれば……

「でも……私は新海くんみたいに勇氣は無い。天ちゃんみたいに能力を完全にコントロールも出来ない」

自分のベッドの上でうずくまってしまふ。

「香坂先輩みたいに絶大な効果をもった能力でも無いし……結城さんみたいに的確な判断能力も無い……」

今日も偶然が重なって成功しただけ……私がつと上手く立ち回ればあんな事には……

「竹内くんみたいに……アーティファクトを扱う才能も無い……」

……

……

……

あれからずっと悩んでしまってる。人よりも劣っている私は何が出来るのか。

ご飯を食べる時も、お風呂呂に入った時も、ずっとずっと考えてた。

今や切り札は手元にある。私の《盗人》の能力を使わなくても《魔眼》のユーザーからはアーティファクトを奪うことが出来る。

なら……私は何をしたら……？

自分でも分かっているくらいに今日のことや響いている。大切な友人を忘れてしまっていたことも、私が理解した時には既に遅すぎたことも。

こんな時、竹内くんなら何を思うだろう。

つて……なんで私こんな事を……

いや、わかっている。それはきつと……彼は挑み続けているから。

最初は彼のことを知らなすぎて、勝手な解釈で理解していたつもりだった。でも、あの日に彼と関わってから、全てがひっくり返っちゃっている。

石像を初めて見た時、軽率に疑っちゃったけど……本当はとっても優しい人だつ

た。

竹内くんが行動する時、それは必ず『誰かの為』だって決まってる。

だから諦めない。絶対に諦めない。

「……………ちよつとだけお電話掛けてみても……………いいかな」

スマホをカバンから取り出して、スイスイと画面をスワイプ。そしてRINGのアプリを開いて電話を繋げる寸前まで画面を動かす……………けど……………

「や、やっぱりこんな遅い時間に掛けちゃうなんて悪いよね……………」

と自分に言い聞かせて画面を閉じようと親指を動かすけれど……………

「じ……………事前にメッセージを送ったら大丈夫……………かな……………」

いや、でも……………明日も学校があるから、早く寝ちやつてたりしたら……………?」

「……………やっぱり止めておいた方が……………」

「で、でも……………」

と頭を抱えて四苦八苦しっていると、突然手にしていたスマホが音を奏でて振動を始める。

「え……………? 電話?」

こんな時間に誰が? と疑問に思ったけれど、その答えはすぐに判明した。

もちろん私は拒否なんてせずに、スマホを耳に当てる。

「もしもし……？　九條です」

そしてその電話の先から聞こえてきた声の主は………

『あ、もしもし？　ごめんな九條さん、こんな遅い時間にいきなり電話しちやつてさ。今……大丈夫か？』

「う、うん！　私は全然大丈夫だよ、竹内くん！」

仲間

「それで……どうしたの？」

竹内くんがいきなり電話をかけてくるなんて珍しい……ううん、1度もなかった。今まではメッセージのやり取りばかりだったからかもしれないけれど、何か急ぎの用事なのかな？

『あ、いや……すっげえしようもない事なだけでさ、明日実力テストあるじゃん？ 朝の間だけでいいからチラッとノート貸してほしいなあ……』

え？ ノートを見せる？ それは構わないけど……

『ああ！ もちろん夜の間にできる限りの勉強はするけどさ、結局今日はほら、予定が狂ったし……一応今日のまとめた内容が合ってるかどうかとかの確認したいなあ……ダメかな？』

「ううん、全然大丈夫だよ？ でも……それじゃあ朝に待ち合わせしましょうか」

『……ん？ 朝に？』

「うん。明日は1時間早く学校に向かうこと」

『うへえ………………。でもまあ頭下げてる立場だからな…………わかった、いつもより早めに学園に行つとく』

「はい、約束ね」

……………

……………

……………

『そんで……………どした？』

「え？」

明日の約束をしてから、ほんの少しだけ雑談をした。内容は特に意味のあるものなんかじゃなかったけど……………今はこの電話を切りたくなかった。

そんな時、彼は突然そう聞いてくる。

『いや……何となく、本当に何となくなんだが、若干九條さんが暗いというか……元気がないっつーか、そんな感じがする』

「……、気のせいじゃないかな？ 私はいつも通りとつても——」

『そんなのいいから、なんかあったか？』

「……………」

本当はそんなつもりはなかった。ただ、あの不安を忘れられるくらいに楽しいことの上書き出来ればそれでよかったはず。

でも、その言葉には優しさがあって、気持ちを吐露したくなる。

「私が出来ることって何なのかな」

『……………アーティファクト集めの件か？』

「うん。危険な思想の人達からアーティファクトを回収する。今はこの目標の為に頑張ってるけど……………今日、私は何も出来なかった」

『……………』

「お友達のことでも簡単に忘れちゃって、最後の最後でギリギリ踏みとどまれただけ。でもそれは竹内くんが傷ついてくれたから」

想いを吐き出す。

無力な自分を責めて欲しくて。役に立てない私を叱ってもらう事で自分の立場を理

解したかった。

それらは全て事実だから、訳の分からないままにあの場所へRINGで指示されて、その場に向かった流れで能力を使用した。

自分で1度も選択することなく、流されるままに。

「私かもっと早く気がついていたら……私かもっと上手く能力を扱えていたら……！」

「私が——」

『別になんもしなくてもいいんじゃない？』

「……え？」

『言い方を変えようか、結局九條さんは何の為に頑張ってるんだ？』

「それは……！」

頭の中でグルグルと巡る言葉を考える。

何の為、もちろんアーティファクトを集めるのはこの街での犯罪を止めるため。

でも、考えているのはそれだけじゃない。今回みたいな不測の事態に陥った時に、みんなが傷つかなくていいようになって欲しい。

だからこそ、自分の劣等感を感じていて、力になれていないと思った。

『ほらな、1つに絞れないだろ？』

「……………うん」

『九條さんは優しいからな、きつと頭の中で俺たち全員のことを考えてると思う。そんな今日の出来事を思い返して自分を責めてるんだろ』

「だって……私は——」

『九條さんのおかげで、俺は助かった』

『あんな事になってしまったのは誰のせいでもない。あえて言ってしまうと全員のせいだ。あの雷男も含めて、全員の。俺だって忘れてしまったんだから』

『だからそこから学んで、次に生かさなきゃいけない。何をどうしたらもつと上手くできたのか。自分に何が足りなかったのか。その気持ちを持ったまま前に進まなきゃ行けない』

『けどそれは1人じゃなくていいんだ。少しでも重荷に感じたのなら誰かに分けてもらえばいい。そのための仲間だ』

『全部が全部自分のせいだって責めなくてもいいよ、九條さんの背中はそのなりに大きなものを周りの人たちの分まで背負えるほどデカくないんだから。だからまあ………助けてもらった恩返しとでも思ってもらってもいいから、その重石を俺たちに分けさせてくれてもいいじゃん』

……

やっぱりこの人は凄い。どんなに心が迷走してしまっても、堂々と光が指す方へと導いてくれる。

確かにそうなのかも、私……信用はしてたけど、信頼を出来ていなかった。きつと……そうなんだと思う。だからこそ『私が』なんて考えになっちゃってたんだ。

酷い。

アーティファクトを手にしてから、どんどん私の醜いところが顕になる。真面目に生きてきたつもりだったのに……本当はこんなに……

「うん……」

『でも「出来ること」かあ……そうだな……。あ、明日のテスト、確か昼で終わるだろう？ その時にちよつと色々試してみるか？』

「え？ た、試すって……？」

『前にも言ったろ？ アーティファクトは心によつていくらでも変化を遂げる。強い意志は既に持った。弱い所は仲間が補ってくれる。じゃあ必要なのはもつと自分の力を上手く扱えるようになること、その為にはもつと知らないことを知って柔軟性を高めたらいんじゃないかな？』

「柔軟性……なるほど……」

『俺だつてまだまだだからさ、色々楽しみながら知つてこーぜ』

電話を切ったあと、私はまたあの霊薬を手取る。

……うん。私は一人じゃない。仲間がいる。だからこそ辛い時には相談ができる。

今の私にはまだそれが限界だけど……もっと力になれるように頑張れる理由がある。

「明日……頑張ろうっ」

そう決意を固めた時、お父さんからの呼び出しがあった。

それに応えて、リビングに向かうと……テーブルの上に何かの袋が置かれており、お父さんは嬉しそうな顔をして私にこう言った。

「都、さつきウチの会社と仲良くしてもらっている方がわざわざ家にいらしてな、その時にプリンを頂いたんだ、みんなで食べよう」

コロナグループとの友好関係が続いている会社……私が知っているだけでも沢山あ

りすぎて分からないけど……きつととっても大切なチーム。後で詳しくお話を聞いて機会があった時にしっかりとお礼を言っておかないと。

「そうなんだ？ 次にお会いした時にお礼を言っておかないといけないね」

袋の中身を確認すると、私の家族の人数分のとっても綺麗なプリンが入っている。

その中身に入っている紙を取り出して見てみると………：「どうやら『穂織』という名の町で作られた特別なものみたい。

お店の名前は……『田心屋』聞かない名前だけど、素敵な店名だしとってもいい匂いで本当に美味しそう。

いただきます。と手を合わせて早速そのプリンを頂こうとした時に、お父さんがいきなりビックリすることを言い始めた。

「なあ都、一緒に食事会に出席してみる気はないか？」

「食事会……？」

4月29日

直前のお勉強会

《視点切り替え》

体が重い。あの時よりも異常を感じる辛さだ。

結局、ルナの傷をあの方法で治療をしたあと、何もしないのはまずいと判断して教科書の内容くらいはまとめるレベルの復習をした。

ここ最近はずっと普通の授業の内容は全然聞いてなかったから理解するのも割と一苦労だ。

でも……九條さんがノート見せてくれるって言うてたし、それと照らし合わせて何とか最後の仕上げをすれば中の上くらいはいけるだろ。

にしても幻体のアーティファクトを手に入れてから身体の……いや、心の違和感が拭えない。通常とは違う特殊なアーティファクトを手に行っているからか、それとも単純に多くの能力を所持しすぎているのか、たまたま暴発してしまいそうになる。

レナとルナを出している時の方が気楽なくらいだ。今までは出してたら俺が疲れて

きてたんだけど、留めておいた方がキツイ。

まあ……ちよつと疲労が抜け切つてないだけだろう。ここ数日は目まぐるしい程に忙しかったから。

天ちゃんの問題も何とかなつたし、ルナも味方に引き入れた。《魔眼》の正体は掴めなかつたけど……あれから石化の被害は出ていない。この期間中に絶対探さなきゃいけないんだが……アイツらがいる。

天ちゃんをあんな目に合わせた張本人たちのグループが。調べてみたいけど……もう誰かに頼んで捜査するのは勘弁だ。また《ネクタル》を打ち込まれでもしたら次はどうなるか……

それを防ぐためには非アーティファクトユーザーが必要……だけどそれじゃあアイツらには対抗出来ない。俺たちのメンバーで一番バランスが良さそうなのは……
「やっぱ俺かなあ……」

少なからず味方が3人という状況を作れる上に、能力は反射。次点で可能性があるのは香坂さんだが……あの人はきつとトラウマを押し付けられてる。《想像の具現化》なんて超強力な能力を持ち合わせているが、この能力には弱点がある。

それは自身に強い意志がないと逆効果だということ。マイナス方向へと考えてしまう、能力によってそれが現実になってしまう。

なかなか癖が強いモン持つてんな。

つかあの《雷》が強すぎるんだわ。攻撃速度も激速、威力は調整可能、高電離気体を発生できるつてことは電子の操作も可能、それで範囲は絶大。

こんなもんにどうやって勝つてんだよ……つたく。

しかも辛いのは《幻影系》つてこと。つまりレナとルナに対しては大きなダメージ限になつてしまうし、魂の核が傷ついてしまうから迂闊に手を出せない。

そろそろ戦闘面での作戦を考えとかないと……かな。

と、考え事をしながらコンビニで朝食とパックの飲み物を買ひ、いつもよりもかなり早い時間に学園へ向かう。

「……………寝みい」

……………

……………

……

そして学園にたどり着くと、丁度門を抜ける所で自転車に乗った九條さんが颯爽と俺の隣にやってきた。

「おはよう、竹内くん」

「……ん？ あ、おはよーさん」

もちろんこんな時間に来てくる生徒なんで、部活動での朝練組の人達しかいなく、帰宅部の奴らは俺たちだけだ。だから人が少なくてお互いにすぐに合流できた。

「悪いな、こんな時間に登校させてさ」

「ううん！ 全然大丈夫だよ、早起きしてお爺様に褒められちゃったし」

「三文の徳って言うしな」

それから九條さんの自転車を置きに行つて、一番乗りだったから教室の鍵を受け取り、各々の机にカバンを置いてノートを取り出す。

それを九條さんから受け取り、互いのノートを見比べておかしな点はないか、範囲は

ズレていないかの確認。ついでに朝に買った飲み物を一口。

うん……大体の教科は問題なさそうだ。

そしてひたすらに今日のテスト範囲の内容を頭に叩き込んでいると……

「私も数学は不安だから……やっちゃお」

と近くの机を俺の机に合わせて繋げ、九條さんは筆記用具たちと自分の飲み物であるうパツクのジュースを用意していた。

「数学は………漸化式だっけ？」

「うん、そうだよ。1年生の頃にも授業の進みが早くてフライングしちゃったでしょ？ だからちよつとズレちやってるんだよね」

「ああ………なんかそんなことあったな。しかも中間と期末には範囲外だから入れないって言ってたな」

「なのに今回は入ってるんだって、笑っちゃうね」

「大体今の俺たちにさせる内容じゃねえんだよなあ……」

そんな雑談をしている間もお互いに手は止めない。

そしてしばらく時間が経過したあと——

よし……やっぱ昨日やってたところで問題無さそうだな。これならなんとか100位程度には潜り込めそう……

「あの……竹内くん、この問題の解き方わかるかな……？」

「ん？」

そう言つて九條さんが見せてきたのは、市販で売っている問題集の応用編と書かれた問題だった。

漸化式を使わなきゃいけないところで……ああ、そういや数学つて最後の方は絶対に解かせる気ないだろつて感じに応用問題叩き込むよな。俺はそこ捨ててるから気にもしなかつたけど……

……うん。この程度ならなんとか……？

「んー……ちよつと持つてて」

サツサツサツと方程式を当てはめて、考えうる方法をとりあえず試してみる。

違つたりしたら別パターンを組み込んで……

「わつ……凄いい、あつという間に解いちやった……」

「合ってるかどうかは自信ないけどな」

「すごいよ！ ちゃんと大正解だよ！ 答えと全く同じだもん！」

そうか……合つてたならよかつた。

「この解き方はまず——」

と、とりあえず自分がわかるレベルの説明をして、お互いに復習するように伝える。そしてキリがいいところで手を止めると……もうかなりの時間が経過していた。

普段なら絶対に生徒たちが半数以上集まっている時間だ。

「ああ~~~~~………ツ!! つゝかゝれゝたゝ!!」

ぐーつと背伸びをするように体を伸ばし、両腕を空高くにあげる。

「ふふつ、そうだね。でもおかげで今日のテストは乗り越えられそうかな?」

「まあな、助かったよ………本当にサンキュ、九條さん」

なんて流れの中、何気なくパツクの飲み物に手を伸ばしてそれを啜える。

「いえいえ、私もお勉強できたしとつても——ツ!」

そういえば九條さんもこういう飲み物を買ってくるって珍しいな。いつつも水筒を持ってきているイメージなんだけど……まあそんな時くらいあるだろ。

別にこれ自販機だろうがコンビニだろうがあんまり値段変わらないで100円くらいだし。

………?

チラッと時計を見て時間を確認したあと、改めて九條さんの方に視線を向けると、彼女は沸騰でもしたのかのように顔を赤く染めていた。

……ん？

「どした？　なんか顔赤いけど………熱でもあるか？」

「いつ！　いえっ!?　そ、そそそんなことありましょんけど……!」

……言えてないけど。

何をそんなに動揺してんだ？　この人。

「……?　あ、無くなった。九條さんもそれ飲みきったんならついでに捨ててこようか？」

自分が口になっている空の飲み物をクシャツと潰して、そう聞いてみる。

「えっ!?　あつ、ま！　まだ入ってると思うから大丈夫です………」

多分……!」

なんか引つかかる言い方だけど……まあいいか。

そして自分の席を立ち上がってゴミを捨て終わり、元いた場所に戻ってくると………九條さんは自分の飲み物を手にしながらプルプルと震えていた。

しかもその飲み物のストローを凝視している。

え？　何？　この飲み物の美味さに感動したの？　その辺にいくらでも売ってるものですけど？

つてか……俺と同じもの買ってたんだな。それ美味いんだよ、うんうん。

とりあえず席に座って道具たちを片付けていると………とうとう九條さんは意を決したようにそのストローを口に咥えた。

しかしその瞬間に耳まで真っ赤に染まっっていく。

「……………あのさ、本当に大丈夫か？ 目に見えるほど顔が赤いし……………もしかして熱でもあるんじゃない——」

「ん——ん——ん——ん——ん——」

ブルブルと首を横に振り、意見を否定する素振りを見せる九條さん。

うん……………？ そのストローから口を離せばいいじゃん……

「やっぱり変だつて、ちよつと失礼……………」

明らかな挙動不審な動きに心配になり、九條さんの額に手を軽く当ててみる。

「くくくツツ!!」

「ん……………別にそこまで高くはないよな。熱があるわけじゃ無さそうだ」

でもここまで顔が赤いのは変だし、一応保健室に連れてった方がいいかも？

なんて考えていると、廊下の方から馬鹿みたいに大きな声で叫ぶあの声が聞こえてきた。

「またあの2人がイチャイチャしてるくくツツ?!?!」

「ぶふっ!!」

「おわっ!? 大丈夫か!? 九條さん!!」

その唐突な声にビックリしたのか、口に含んでいた飲み物をちよつと戻してしまったようだ。

とりあえず物をどかして、ティッシュで零したところを吹いて……………

なんてことをしていると、次々に声が聞こえてくる。

「馬鹿っ! 叫ぶなってバレるだろ!?!」

「だつてさ! 翔! あの2人関節キスした後、額に手を当てたりしてたよっ!?!? なん
でっ!?!?」

「俺が知るかよ! つか声でけえよ!」

深沢と翔……………アイツら面白がつてたな……………?

いぎ、ラウンドツーへッ！

キンコンと鳴り響く、録音された鐘の音が学園中に駆け回る。

それは今日行われている最後のテストを終了するという合図だった。一気に切れた緊張の糸を気にせずに、テスト用紙を教卓へ集めてHRを聞き流す。

「ぼへえく……………」

もうくつたくだ……

勉強もそうだが、やっぱり一番堪えるのはルナの治療をした事。あれがかなりズルズルと引きずっている。

まあ……明日から土曜日だし1日くらいゆっくり休んでもいいか。でも髪も切りに行かなきゃいけねえし……………

「竹内くん」

そんな時だった。九條さんが俺の席までわざわざ来てカバンを持って呼んできたのは。

「んにゅ?」

「ボーツとしてたでしよ、もうHR終わったよ?」

「……………ほんとだ」

周りを確認してみると、確かにもうクラスの半数は下校しており、ワイワイガヤガヤと賑わう中で俺だけが未だにダラダラとしてした。

「やっぱり、お勉強で疲れちゃった?」

「そりや疲れもするよ、慣れないことをいきなりするもんじゃねえな」

俺も自分のカバンを持つて立ち上がり、九條さんと2人で教室を後にして歩く。

「もう今日は中止にした方がいいんじゃないかな? テスト中も竹内くん、なんだかうとうとしていたし……………」

「そりやいつもの事だから大丈夫。だから気にしなくていいさ」

そうして校門を通り過ぎ、目的もなく歩くのも疲れるだけだから、とりあえず昨日言っていたことを九條さんに聞いてみる。

「それで……………どうする? どっか行ってみたい場所とかある?」

話していく中で決まったこと。それは今まであんまり行つたことのないところで遊んでみようということになった。適当に映画を見てもいいし、ブラブラ歩くだけでもまあ……………いいし、少し離れた場所には美術館や動物園、ブラネタリウムにイモンモールもある。

バイクを使えば海沿いの港町や隣町にも行けるし……正直選択肢はたくさんある。

「行ったことのない場所……行ったことのない場所……」

「……あつ！ ラウンドツアーに行ってみよう」

……これまた意外なところが出てきたな。

まああそこなら時間も潰せるし、楽しめるものは結構多いし、行くのはいいか。俺も頻繁に行ってるわけじゃないし。

「ラウンドツアーならこのまま歩いて行くか、お金は持つてる？」

「そこは抜きありません！ お昼ご飯代とは別に500円も準備しました！」

「ウツソだろお前……」

セレブらしからぬ発言と行動に驚きながらも、自分の小銭入れを確認する。

入っているのは……6千円くらいか、……まあいいか。

「とりあえず行ってみようぜ、中に入って回るだけでも全然違うだろ」

「ふんふんふーん♪」

……偉い上機嫌だな。

「わっ……すっごい沢山のクレイニングゲームがある……!」

とりあえずラウンドツーにたどり着いた俺たちは、特に目的の場所がないため中に入ってすぐにあるクレイニングゲームコーナーへと立ち寄った。

専用コーナーだけあって、その数は尋常ではなく、このゲームだけで100台はあるんじゃないか? と疑わざるを得ない広さと数だった。

そしてそれを一つ一つ眺めて、目をキラキラと輝かせるお嬢様。

………結構ガチで来たかったんだなあ。

「すごい……! お菓子まで景品になってる……!」

まるで子供のようににはしゃぐ彼女を見て、やつぱりここに来てよかったと思う反面、きつと知らないことが沢山あるんだろうな、とも思った。

「奥に行きやあまだ色んな種類のタイプがありそうだ。行ってみる?」

「うんっ! 行きたいっ」

「ははっ、それじゃあとりあえずゆっくり回ろうか」

それから俺たちはウインドウショッピングのようにコーナー内をウロウロと歩き回る。最初に九條さんが食いついた菓子が景品のものや、人形が景品になっているもの、くじ引きシステムのものや、フィギュアなど、様々なものを見て回る。

そしてある一つのを発見すると、九條さんは歩む足を止めた。

「これ……可愛い……」

「おろ？」

静かに見つめる九條さんの視線の先には、少し小さめのとあるキャラクターがモチーフになっている箱があった。

「……なんだこれ」

「ルームランプだって、ほらっこんな感じの」

そうやって九條さんが指差す先には、商品紹介の張り紙が貼られていた。

「ふーん……『暖色系の優しい光が、あなたの睡眠をより快適に』……ああくなるほど、ベッドの横に置いたりしたらいいのか」

「それにデザインが可愛いよね、キャラクターも可愛いし……一回だけやってみようかな……？」

あれは確か……ドラファンのイモテンダーだっけか？ まあ作品を代表するモンズ

ターだし、確かにこんなグッズにするにはちよーどいいのかも？」

「そんな簡単にとれねえって、クレイニングゲームなんてハマったら目も当てられないぞ？」
「やつぱりそうなのかな？ ううう……でも欲しい……」

……いや待て、今俺たちがこんな所にやって来ているとは、自分の知らない世界を知るためだ。それが結果アーティファクト関連での成長に繋がるのなら……

「でも、もしかしたら意外とすんなり取れるかも？ 動画とかじゃあ1発取りなんかも結構上がってるし……お試し感覚ならいいんじゃない？」

そもそもとして九條さんはバカバカとお金をつぎ込むタイプでは無いだろうし、そんなに大した大打撃にはならないだろ。

これもいい機会だ。

「そ、それじゃあ……やってみます……」

キリッとした表情で、クレイニングゲームの前にスタンバイする九條さん。緊張でもしているのか、指先をふるふると震わせながら財布から100円を取り出した。……つか喜怒哀楽が結構激しいっすね。それも楽しんでくれてる証拠なのかな。

そんな彼女を横で眺める。

九條さんって何事にも一生懸命だよ……勉強も仕事もアーティファクトの件も、この遊びも。

やっぱりこの人には学ぶものが多い。

「あ、あのっ！ これって……どうしたら動くの!？」

「ボタンが2種類あるだろ？ それを順番に押したらアームが動くんだ、んで位置調整をした後にボタンを離せば、あとは勝手に掴んでくれる」

「ボタン……ボタン………えいつ」

俺の説明をウキウキな表情で聞いた九條さんがボタンを押した瞬間、アームがピクンと動く。

そう、ウイ——ンとスライドしていくように動かなきゃいけないのに、ピクンと動いた。

それはつまり………

「九條さん………ボタンは長押しです……」

「………あつ」

節制家なお嬢さま

ここはラウンドツーから少し離れた場所にある飲食店、チヨイフル。

その中のテーブル席に俺と九條さんは対面するように座って頼んだ料理を食べていた。

「まあそんな時もあるって、あんまり気にすんなよ」

結局あのワンゲームでやめてしまったが、アームの開きや、引っかかりを意識したりして商品ゲットをめざしてチャレンジしていた。……取れなかったけど。

「意外と難しいんだね……でも楽しかった！ ありがとう竹内くん、一緒に来てくれて」「これくらいなら別にいいさ、つか今日誘ったのは俺の方からだし」

そんなに長い時間いた訳じゃないけど……楽しんでくれたんならそれでいいか。あそこにはもつと色々楽しめるものがあるんだが……如何せん遊びに使う予定のお金が残り400円だからな。どうしようもねえ。

「それで……どうする？ 他にもどこか行きたいところってあるか？ ないならないで別にいいんだけど」

せつかくこうして2人で行動してるんだ、なんだかこれで解散つてのはちよつと申し訳ない。

「行きたいところ……、私は竹内くんの行きたいところがいいな」

「んな事言われてもなあ……うーん……」

スツスツスツとスマホをいじってGPS機能を使って近くのお店を探してみる。

「飲食店は却下……ゲームセンター系ももういい……映画を見るにはいいのがない。

「なんがいいかな……おっ。」

「猫カフェ行ってみる？」

「え？ 猫カフェ？」

「そ、猫カフェ。ちよつと調べて見てたらなんか近くにある猫カフェが何かの記念らしくて割引してたから、休憩にもなるし……行ったことある？」

「普段の値段の半分くらいの金額で中に入れるし、何より俺は行ったことがない。別に動物が好きなわけじゃないけど……まあ可愛いとは思うしな。」

「ううん……行ったことは無いんだけど、お金……足りるかな……？」

「気にしなくてもいいって、頭おかしいくらいに激安になってるし、大した金額じゃないし」

「そつ、そんな、ダメだよ！ そんな簡単に大金を使っちゃったりしたら……」

「……………でも10分たったの2000円だし……………このドリンクバーでプラス3000円だろ？ んでエサ代でもう5000円……………1時間大体2000円くらいか、別にこのくらいなら——」

「2000円っ?!?!」

「う、うん……………」

九條さん……………目を丸くして驚いてるけど貴女がそんなに気にするほどの金額ですかね……………？ アレっすか？ イヤミっすか？

つかこれはあくまで普段の値段設定であつて、今はまだ安くなってるんですけど？

「に、ににに、2000円なんて……………そんな大金使っちゃダメだよっ!!」

え……………？ 2000円なんて簡単に使うだろ……………今の時代。

「あのさ、映画館とか行ったことは？」

「映画……………？ 無いよ……………？」

ま、まあ……………ゲーセンに行ったことないくらいだからな。

「そっかそっか……………そりゃ2000円を大金なんて言うくらいだから……………」

その辺は人の価値観の違いなのかな？ 流石に1万とかいったら高いとは思うけど

……………

「ま、とにかく行ってみようぜ？ 店の中には入らないにしても散歩がてらさ」

うーんと少し悩んだあと、ちよつとニヤけたり少し残念そうにしながら九條さんは答えを出した。

「でも……うんつ、猫ちゃんがどんな感じで過ごしているのかちよつと気になるし、行つてみよつか」

……

……

……

「ええーつと……この辺だと思っただけだな」

スマホでマップを確認しながら、九條さんと2人で街中を歩く。普段はいかない道ということもあつて全然土地勘が分からない。

「猫ちゃん……やっぱいいっぱいいるのかなあ〜」

中には入る気は無いのに表情はホンワカとしている九條さん。……これあれだな？
金額が金額だから我慢してるけど実は結構入りたい感じだな？

ちよつとアホみたいな顔してるし、心做しかきれいな花とキラキラした光が見える気がする。

そんなことを思いながらテクテクと道を歩いて、ナビゲート通りのルートを辿ると
……………

だんだんと店の看板が見えてきた。

「うん……間違いない、あの店だ」

「すごい……大きくてオシャレなところだね」

うん。確かにそこは驚くところだった。予想よりも全然店はでかくて、文字通りの看板猫が店の存在感を露わにするように大きく飾られている。

でも……………それよりも気になるのが……………

見覚えのある制服の女の子と九條さんと同じ制服の女の子がずーっと店の前でウロウロウロウロと歩いている。

店の前に立ったかと思えば、2秒くらいですぐにその場を離れたり、帰るのかな？
なんて思えばまた店の前に行ったり……

明らかな不審者だ。

「ね、ねえ……竹内くん……あの人たちってもしかして……」

黒髪の子とちよつと蒼つぽい髪の子。俺は見覚えがある。多分……九條さんも同じ意見だろう。

「……………希亜と香坂さんだな」

何やってんだあの2人……………

九條 都の抱えているモノ

「ついに……………この日が来ましたね」

「ええ……………来た。いえ……………きてしまった」

テクテクと店の方へと歩いていくと、香坂さんと希亜が店の真正面の道の真ん中で靡く風に負けないようにと堂々と立ち尽くしている。

「覚悟は出来ていますか……………？ 希亜ちゃん……………！」

「当然、貴女は？」

「出来ています……………！」

というか後ろから近づいてきている俺たちに気がついていないようだ。

それに……………なんだ？ このゲームのラスボスと戦う直前みたいな雰囲気……………つかないでこんなにも格好よく向かい風が吹いてるんだ？

「では……………行きましようか…………………………猫力——」

「なーにやってんだ？ こんな所で」

「ふえええええつつつ?!?!?!」

「うおっ!? びつくりしたあ……」

無駄に格好つけている希亜に声をかけると、彼女はビクツ! と身体を縦に伸ばして驚き飛んだ。

もちろんそんな反応されたから俺も同じくらいびつくりした。

そして続けて声をかける暇もないくらいの速度でクルつと少し涙目になった希亜が振り向く。

「……………ツ!」

「あ、あの……いきなり声をかけたのは悪かったよ……まさかそんなに驚かれるなんて……………」

「……………今回は背後を簡単に取られた私にも非があるから許す。けれど……………2度目はない」

「それお前のさじ加減じゃねえかよ……」

なんて会話をしている間に、九條さんと香坂さんは割と楽しそうに会話を弾ませていた。

……………つかいつの間にか香坂さんが意外と普通に喋ってる。

「九條さんも猫ちゃんが好きだったんですね! わ、私もとっても大好きで、今日こそはこのカフェに入ろうって思って来たんですが……どうしても勇気がなくて……」

「ふふ、確かに初めて入るお店にはちよつと緊張しますよね」

「んで、希亜も猫が好きだから意気投合してここにやってきたと。でもコイツもコイツで全然度胸がないから中々店に入れない……と」

「……。喧嘩……売ってる？」

「いや事実だろ？ さつきからずつとウロウロしてんじやん」

「そつ、それつ……は……！」

明らかに怪しかったぞ？ あの動き。何度も何度も扉の前を行ったり来たりして、中をチラチラと覗き見てみたり、それが終わると仁王立ちしてるし。

「何をそんなにガチガチになってるんだ？ 入りたきや入ればいいじやん」

「ま、待つて下さい！ まだまだ猫様の下僕として未熟すぎる私が何の覚悟も無しに入店するなんて……オエツ……！」

ん？ なんていま嘔吐いた？

「いや……下僕なんか知らないけど、とりあえず落ち着いて……」

プルプルと身体を震わせる香坂さんをなだめながら、改めて店の中を覗き見てみる。すると中には割と可愛らしいたくさんの種類の猫たちが既に入店している客たちと楽しそうにじやれあつており、猫好きならば憧れを抱くのも無理ないと思う。

けど入つてもいないのに既にここまでやられてたら……入店したら死ぬのでは？

「やっぱり……私たちにはあまりにも難易度が高すぎます……MR500ぐらいのクエ
ストです……」

「すげえな古龍よりも強いのか……猫って」

しかもよりにもよって《M》の方かよ。

「まあとりあえずさ、それならあそこに行けばいいじゃん、あの………ほら人懐っこい
猫がいっぱいいる公園」

さっきも九條さんはなんだか猫が好きみたいだったし………みんなで行けば楽しめる
んじゃない？

「あの噂の？」

「学園でチラツと聞いたんだよ、なんか地域猫が多い………みたいなの？　ここからなら遠
くないし………そっちに行ったら？」

「ね………さま………」

………

……

……

市内で最近噂になっている猫が沢山多い公園。噂通りにそこかしらに大きい猫やら小さい猫やらがにやーにやーと沢山いる。

石像を見つけた公園よりも倍くらい広さがあり、真ん中に噴水が設置されている。軽いデートスポットにでも割と良さそうだ。俺が誰かと付き合うなんて想像も出来ないけど。

とまあそんな雰囲気が良い公園を歩く4つの影。

「あのさ……なんで俺まで?」

「蓮太が薦めたのでしよう、この公園なら……と」

「まあ金かからないからいいけど」

とりあえず近くのベンチに座りたくてテクテクと歩いてその場に座る。そしてみんながいる方にチラッと視線を向けると、早速香坂さんがたくさんの子猫たちに囲まれて捕まっていた。

「の、のののの！ 希亜ちゃんっ！ ね、ねね、猫ちゃんがこんなに……っ!!」

「なっ!!? は、春風！ そのままよ！ そのまま——」

元氣いいなあ……っって好きな動物が目の前にあんなに沢山いたらテンションも上がるか。

ま、楽しいなら何よりだ。希亜が近づいた瞬間にみんな逃げてったけど。

………明らかに落ち込んでる。ははっ。

「楽しいの？ 竹内くん」

あの2人をボケーンツと眺めていると、いつの間にか隣に座っていた九條さんが1匹の猫を可愛がりながらそう声をかけてきた。

「ん？ なんで？」

「ちよつとだけ笑ってたから」

おっと………表情に出てたのか、気をつけとかないと……

「まあ……うん。楽しい」

「ふふっ」

九條さんは軽くそう笑うと、ずっと撫でていた猫を自由に逃がして、どこか思い耽るように空を見ていた。

「やっぱり、今日みたいな何も無い日が私は好き」

「何も無い？ テストがあつたじゃんか」

「そうじゃなくて、なんて言うんだろう？ 当たり前のように学校へ行つて、お勉強をして、バイトをしたり、友達同士と一緒に遊んだり、そんな《普通》の日常がなんだか久しぶりに感じて」

「あー……まあ、ココ最近結構切羽詰まつてたからな。……いや、今もまだ何も解決してないんだけどさ」

軽く目標が出来ているくらいで根本的な解決なんてまだ何も出来ていない。あのアーティファクト所持者の集団の中に《魔眼》のユーザーがいる可能性が高いだけだ。確証もないし対処のしようも……今はたった一つの《アンブロシア》か九條さんの能力しかない。

「でも、たった1日だけどこの1日を護ることが出来た。それは竹内くんのおかげ」
「……？」

「なんで？ って顔してるね」

「俺は別に大したことしてないからね、どつちかって言うのと周りの足を引っ張つてばか

りだ」

「そんな事ないよ、気がついていないだけで竹内くんはたくさんの人を救ってる。天ちゃんの件もゴース……レナさんとルナさんの件も、結城さんの事も香坂先輩の事も。そして……………私も」

「わかんねえな、それらは全部成り行きの偶然だし、希亜と香坂さんに関してはマジで俺は何もしてねえ……っつーかあの2人には何かあったの？」

九條さんはともかく、天ちゃんとレナルナに関してはまあ……思い当たるところはある。けど後者の2人に関しては何か問題があったことすら知らないし。

「結城さんはね、名前を知ったのは最近だけどずっとお店に来てくれている常連さんだったの」

……へえ、希亜が。まああの店は学生ならほとんどの人がお気に入りだろうし別に何かしな話ではないよな。

「あの頃は全然笑ったりもしてなくて、ちよつと冷たい人だなんて思っちゃってたんだけど……竹内くんと話す時は楽しそうに笑うの」

「そうか？ あんまり変わんねえだろ」

「ううん、全然変わってるよ？」

「へえ……」

……アイツ笑ってるか？ 大体怒らせてばっかりだからそんなイメージ全然ないんだけど。

いつも謝ってる俺しか思い出せねえ。さっきも謝ったし。

「香坂先輩もね、最初に声をかけた時は男の人が怖かったみたいで、その影響か私と天ちゃんにもちよつとぎこちなかったりしたんだけど……新海さんと竹内くん相手にはあんまり緊張しないみたい」

「まだ若干ぎこちなさは目立つけどな」

「ふふつ、でもすつごく変わったよ2人とも。そのキツカケには全部竹内くんが絡んでる」

「気のせい気のせい」

軽く足を組んで、両手で頭を抑えるように腕を回し、俺も顔を上にあげる。

今日は本当に天気がいい。雲ひとつない晴天だ。

風が心地いい。

「でも、そんな《日常》をこれからも味わう為にも、やっぱり探さないといけないよな。あのユーザーたちを」

「……そうだね。今の私たちに出来ることはまだ少ないけど……時間の猶予も無限にある訳じゃない。次の犠牲者が出てくる前になんとかしてアーティファクトを回収しな

いと」

力をつけてから挑みたいけど……力を付け終わってから搜索を始めるもの違う。やっぱり同時進行していかなきやいけないよな。

「明日は時間ある？　いったん都合が合う時にこれからの方針を改めて話し合つときた
いんだけど」

「あつ……明日は……ごめんなさい。とつても大切な用事があるの」
「そつか、ならまた別に日に変えるか」

みんながみんな毎日が暇なわけが無い。そういう時間すらも限られているんだ。無意味に集まるだけじゃなく、ある程度考えをまとめて話し合つた方がいいな。

「んー……じゃあ一応集まれる人間だけでこれから相談する予定だけど、RINGで結果を伝えとくよ、夜なら大丈夫？」

「あー、うーん……どちらかと言えば夜が一番忙しい……かな？」

「つか何があるんだ？　明後日まで続くことなら、もう明後日の月曜に学園で伝える
けど」

「え？　あつ……どう言つたらいいのかな？　お父さんのお仕事関係のお得意様とのお
食事会……？」

「いやなんで俺に聞くんだよ……」

つか会社が関わるような親睦会的な催しにも参加してるのかよ。やっぱ企業がデカいとそういうこともあるんだな。

社長令嬢も大変そうだな。

「昔からお互いに協力し合って街を発展させていった仲らしくてね、小さい頃からたまにこういうことがあったの。私が参加するのは初めてだけど……」

「ふーん……でもお父さんの為にも会社の為にも変な失敗は出来ないわけだ」

「そう、だね……」

緊張するだろうな……相手への粗相が許されない世界なんてまだ俺たち学生には早すぎる気はするんだが……彼女はそうも言ってられないのか。

「でも、話がちよつとおかしくなつて……お父さんが電話をしている所を偶然聞いちゃった事があつてね、その時に『都はまだ誰とも付き合つてない』って言つてたのを聞いてから変な事を考えちゃつて……」

「冗談の一種なんじゃないの？ それだけ仲がいい人同士ならそんな会話をあるんじゃない？」

「でも、お父さん『相手の息子さんはとってもいい子だ』って言つて、『都もそろそろ彼氏でも作つたら？』って言つて……なんだかいつの間にかお食事会の目的も本当にそういう方向の……お見合い？ みたいになつちやつてて」

多分彼女はあまり乗り気じゃないだろう。さつきからちよつとだけ表情が暗いし、声のトーンも落ちてる気がする。

きつと自分の立場や、父親同士の仕事の事、そして会社のこれからを考えた時に、明日のたつた一度の食事をミスすればどれだけの影響が出るか《わからない》から辛いんだ。

オマケに相手と仲がいい関係を保つには、恋愛話になつている今のこの状態を前向きに捉えるか、上手く掻い潜つて話題を逸らすかの2択に絞られる。

しかも相手はそんな親睦があるほどの大切な企業。

……………この歳でこれかあ。

「九條さんは彼氏が欲しいなんて思わないの?」

「え? わ、私は……………! ……………この人がいいなつて人なら……………」

……………!

へえ、知らなかった。九條さんつて誰かに恋してたんだ。でも多分その言い方はお得意さんの息子ではなさそうだな。

つかそりやあそうか。もしそうならこの事で悩んだりはしないだろう。別の男が好きだからどうしたらいいかわからないんだ。

「ふーん…………。じゃあ上手く掻い潜るしかないな。大丈夫大丈夫、自分の意思をちゃん

と伝えればみんな分かってくれるって」

「う、うん……………」

そういう問題じゃないことくらいは分かっているけど、こうとしか俺は言えない。九條さんが誰を好きになっているとはいえ、その人と結ばれる未来に辿り着くためには絶対この件は上手くやり過ぎさなきやいけない。

そんな大きな問題に俺なんか下手な事言えない。

でも、やっぱり友達としては、相手は知らないけどちやんと好きな人と結ばれて欲しいし、幸せになって欲しい。

会社や大人の都合で振り回される彼女は見たくはない。

「はい、これ」

俺はスッと自分の掛けていた黒い伊達メガネを取って、隣に座る彼女に手渡す。

「……………？ 眼鏡……………？」

「いま俺に渡せるものがこれしかないから。それ貸してやる、俺の一番大事なヤツ」

「竹内くんの一番大切な……………」

「ま、御守り代わり。一人じゃプレッシャーに押しつぶされるかな？ って思っただけ、それがありや俺たちの事思い出せるだろ」

「……………うんっ！」

俺に出来ることなんてたかが知れている。これに大した意味が無いことも承知の上だ。

でも、ほんの少しだけでも彼女の背負っているものが軽くなつたのならそれでいいと思つた。

一般庶民の俺から手渡せる最大限の心の気持ち。どんな大きな悩みや壁があつてもそれに立ち向かっているのは一人じゃないという証。

言うならば心の逃げ道。そんなものしか俺は用意してやれない。

でも………それでも彼女の心の霧がたった少しでも晴れたのなら………それだけでも意味はある。

4月30日 都[√]

2人の始まり

「おい、大将」

んん………九條さんの好きな人……か。ちよつと気になるような気にならないよ
うな……

「おーい、聞こえてんだろ？」

俺には関係ない事だとは理解してるけど、やっぱりあんな愚痴をポロリと聞いてしまつたらどうしても気になるよなあ。

もちろん両親に強制されている訳じゃないだろうし、あくまで九條さん本人が恋愛に興味を持てば……くらいにしか思っていないと思う。

「ダメだなこりや、何も話を聞いてちやいねえ」

でもやっぱ相手が悪いよなあ、娘の立場になれば全てがやりにくくなるのは簡単にわかるだろうに。将来のためにわざとそういう状況を作つたりとかしてるのか？

だとしても余計なお世話だよな。

……それに本人から相談されたとはいえ助けを求められた訳では無い。やつぱり考
えるだけ無駄か、なんとか自力でどうしかす——

「ふー……」

「はあんっ……………」

突如として両耳から襲ってくる温風。そのむず痒さに身悶えし、変な声が出てしま
う。

「……………いやオレもノリノリでやつといて言いにくいんだけど……本当に気持ち悪い
な……………」

「じゃあやんなよルナツ！」

「お前がオレたちの話を全然聞かねえのが悪いんだろうが！ 厄介事は全部オレたちに
任せやがって……………」

「あ……まあその件に関しては悪いとは思ってるよ、だからちゃんとしてくれたら何で
も言う事1個聞いてやるって約束だったろ？」

4人で公園の中で時間を潰していた日から1日経過した。今は次の日の夕方。あの
時は集まれる人たちを集めて何か作戦でも考えようとしてただけど、レナ&ルナが今
のお前は集中力に欠けてるから無駄。と真っ向から言われて結局集まらないことにし
た。

確かに彼女たちの言っていたことは正しかったのかも知れない。

「やっぱオレたちが合ってたな、大将、昨日からずっと九條のことを考えてる。オレたちにはバレバレだぜ？」

「レナはいい子だなあ……頭撫でてやろうか？」

「あんまり調子乗ってたらぶっ飛ばす」

「そんなにいい子じゃなかった」

やれやれ……意外と人の面倒を見るって大変だよな。コイツらはその気になれば飯とか風呂とかも絶対要らないんだけど……せつかく一緒に住んでる（というか俺そのもの）のに何もしてやらないってのも人として……なあ？

かと言っていきなり2人分も生活費が増えると流石の俺も直ぐに死ぬので、父親に電話を掛けて仕送りの金額アップを頼んでみると……

連れ込んでいる女の子が2人とも可愛いからと言ってアホみたいに金額がアップした。ぶつちやけ良くて3倍くらいになるかと思ってたらず7倍くらいになった。

逆に申し訳なくなってくる。それでも俺に送っている金は「その程度」らしい。まあ……バイトもしてねえし完全に甘えきってるからあえてもう何も言わないけど。

「とにかく聞けよ、一応オレたちで軽くは探してみたけど……まあそんな簡単には見つからねえのもちろん、大した問題も出てない。つまりは何も進展がなかった、以上」

と雑な説明で終わらせるルナだったが……きつとそれが事実なんだろう。たつた一日で何かが変わるなんて思ってもいないし、なんならこれだけじゃあこれから先も何も変わらない可能性もある。

でも何もしないよりはマシだろ。

「そつか悪い。ありがとな、こんな無謀な事させてさ」

「いいさ、人使いが荒い扱いには何故か慣れてる」

……コイツらは前契約者に関しての記憶は持ち合わせていない。理由は不明だが……そもそもとして1つのアーティファクトが分裂するなんて事態そのものが特殊というか異常。そのせいでどんな不都合がでてきても正確に理由を明らかにすることができない。

でも俺と契約する前の《感覚》は覚えているようで、ルナは前の契約者からはいい扱いをされてはいなかったようだ。

まあ……俺と契約したあの日、俺だけが分かった事実だが、《雷》のダメージが全く癒えていなかった。つまりはあんなレベルの怪我を負っていたにも関わらず放置されていたんだ。

拳句の果てには捨てられている。こんな話があるか……

「だからそう嫌味を言うなよ……ちゃんと納得のいく報酬も与えるつもりだって」

「そりやもちろん貰うぜ？ な？ 蓮雫」

「ああ、当たり前だ蓮華」

「あの……マジで恥ずかしいからその呼び方止めてくれない？ レナとルナでいいじゃん」

あれからというもの、こいつら2人はよほど気に入ったのか、単純に俺に対する嫌がらせか知らないが、お互いのことを《蓮》の付く名で呼び合うようになった。

わざとらしくハッキリと。だからこそ俺は意地でもその名では呼ばない。

「で、まあその辺の話はどうでもいいとしてさ、なーにをそんなに考えてるんだ？ 大将」

「考えてるつつーか……なんだろう？」

「安心しろよ、お前みたいに変態野郎にや、あのお嬢さまは釣り合わねえから」

「あのなルナ、キミはその変態野郎と共存してるんだけど？」

「でもお前オレには全然手を出さねえじゃん？ 蓮雫には耳かきして貰ったり、マ〇〇に顔突っ込んだりしてセクハラしたりしてたんだろう？」

「あの……下ネタ普通に言うのやめてくれない？ この作品あくまでR15だから……」

普通にハッキリ言いましたよ？ この子。これ大丈夫？ ピー音入ってる？ ちゃ

んと伏字になつてる？

「……思い出しただけでイライラしてきた」

「だからごめんって！ 別に意図してやった訳じゃないって何度も言ってるじゃんか！」

「偶然ならなんでも許されると思つてんのか！」

「んな事言つたらレナだつて俺の貴重なファーストキス奪つただろうが！ こつちだつて文句言つたらア！」

「奪つたつてなんだよ！ どつちかと言えば大将が奪つてきたんだらうが！」

「しろつて言つたのお前だろっ!？」

「まーた始まつたよコイツら………」

《視点切り替え》

持ち物良し……。服装も……。うん。バツチリ。

上手くやり過ぎさないと……。もしも恋愛に関するお話になっちゃった時は誰も傷つけないように、自分の意思を伝える。

私にとつては難しいことだけど……。だからこそ乗り越えなきゃ。

す、す……。好きになった人と一緒にいられるように……！

「……………ッ！／＼／＼」

な、なななつ、何を考えちゃってるんだろう……。私……！

鏡に写っている耳まで真っ赤になっている自分を見つめながら、私は最後に貸してもらった黒い伊達眼鏡を耳に掛ける。

……。本当に一緒にいてくれるみたい。なんだか勇気が湧いてくる。

「ふふっ……………」

思わず顔がにやけてしまう。

でもこんなことじゃいけない。これからはもつと気を引き締めないと……！

「……………♪」

彼の物を貸してもらえてるだけで、こんなにも嬉しくなるなんて思わなかった。

今の私なら、何とか出来るかもしれない。

「頑張ろうっ」

この時はそう思ってた。

また昨日みたいな日々に戻れると………

3人の信頼

《視点切り替え》

「くどくど！ くどくど！ なのだわなのだわ！ なのだわ——つ!!」

「悪い大将……くどくどなのだわ言われても全然わかんねえ……」

そこは伝われよ。漫画とかでよくある感じだろ。

「物分りが悪い女だな」

「なのだわ語で無茶苦茶言われて言葉の本質なんて理解出来るわけねえだろ常識的に考えてそこまで察せる奴なんていねえっーのどんだけ自分勝手なんだよそんなんだから彼女の一人もできねえんだろ大将」クッ筆貞（超早口）

「止めて！ 理不尽に怒ったのは謝るからそんなこと言わないで！ ごめんなさいッ！」

……あれ？ なんで俺の方が立場が弱くなってるんだ……？ つか口悪っ!?

「おーい蓮太あ、冷蔵庫ん中なーんも入ってねえぞー」

ルナは俺たちのことなんてガン無視で冷蔵庫漁ってるし。これは……あれかな？
もう俺って威厳なんて何も無い感じかな？

「もうお前すつかり慣れてきてるなあ……」

つつても……そうか、そう言えば最近買い物に行つてなかつたな。そろそろ買い直さなきやいけねえかな……

「んー……、じゃとりあえず俺は外で食うけど、お前らどうする？ 今日なんか食うか？」

「オレは食う」

パタンつとルナは冷蔵庫の扉を閉めて、おそらく中に入っていたのだろう小さいサイズのラムネ缶を飲んでる。

前からちよいちよい思つてたんだけどコイツらの中に入つていった食料たちはどうやって消えてるんだろ？ 消化もしないし便意も無いし、システムがわかんねえ。

まあアーティファクトなんて非科学的な物にロジックを求めるのもおかしい話だろうけどさ。

「じゃレナも来るか？」

「ん」

2人とも来るなら……最初から能力使つてた方がいいよな。非常時以外で外で無闇

矢鱈に消したりする訳にはいかねえし。

んー……それならバイクは使えないな。3人乗りなんて出来たとしても色々とめんどくせえことになる。だとすると歩きになるが………しゃあねえ、適当に近場の店で済ませるか。

「じゃ行こうぜ、なんだか腹減ってきた」

「そりや大将が無駄な体力使ってるからだろ」

使わせたのは誰だよ。

………俺か。

………

………

………

ブラブラと3人で街中を歩きながら、何を食おうか悩みながら店を探す。

別に気分的には何でもいいんだが……やっぱりこの2人にはせっかくものを食べる
ことができるようになったんだ。(理由は謎だけど)色々と食わせてやりたいってのが
本音。

チラチラとさつきから目に入るのは………牛丼屋。いやあ……これは別に後でも
いいだろ。ラーメン屋。まあ……ラーメンかあ……

定食屋。うーん………種類があるから無難つちや無難だが……

「んで、お前らは何食いたい………つてなんでそんなに楽しそうなんだ？」

いつの間にか先導してしまっていたことに気がついてくるりと身体をレナとルナの
方へ振り返らせると、普段よりも若干浅くフードを被った2人はどこかむず痒そうに、
でも嬉しそうに少しだけ表情を緩ませていた。

「別に、何でもねえよ」

「……？」

よく分からない2人を一旦放置して、スマホを開いて近くの店を探してみる。

んー………

「な？ 大将と契約して良かっただろ？」

「なんつーか……慣れねえ」

「大将はオレたちの事を絶対雑に扱わねえ。完全に無駄だつてのにメシもフロも気を使う。リンクが不安定だからこつちの思考は向こうには読まれねえのが幸いな、全部バレちまうところだ」

「蓮雫も普通に喧嘩とかしてるもんな」

「それだけ、大将がオレたちを《人》として見てくれてる証拠さ」

「やつぱダメだ、俺じゃ全然決まらねえよ。なんにする？」

「……コイツら人が一生懸命店探してやつてるつてのに何をコソコソ喋ってるんだ……？」

「別に、オレたちやお前の食いたいモンで構わ——」

と、話している途中でさつきまで表情を緩ませていたルナの顔が引き締まる。

まるで危機がすぐそこに迫っているかのよう。

「……………おい大将。後ろ」

続けてレナもそう言った。

威嚇するような目つきで俺の背後を睨み続ける2人と同じように、またもくるとその場を振り返ると……………

「……………ッ」

商店街を歩く人々の奥に、不自然に俺たちに視線を向けている人影が。

そしてソイツが近くにある、建物の上にある大きな電子看板に向かって腕を上げると……………そこから鳥のような形の影が、残像残すスピードで猛突進する。

するともちろんその看板はバチバチと漏電した電気を弾きながら、大きな破壊音とともに地面に激突するように落下した。

「おい……………アレ」

「わかってる！ 行くぞッ！」

「はあ……………つたく」

アレは明らかに《アーティファクト能力》だ。紋章こそ目には見えなかったが、わざと俺たちに見せつけるように仕向けたのはそういうことだろう。

つまりはこれをすれば俺がキレル事も知ってたはずだ。わざとなんだ。

強く地面を蹴り続け、次々に人混みを躲してあの人影の方へ走り続ける。レナルナはそんな人を避ける仕草が面倒なようで、看板やゴミやなにかの箱等、そこら辺にある物を踏み台にして左右の壁沿いに密着するように入っていた。

「レナッ！ ルナッ！ 先に追いかける！ 俺はあの現場に怪我人がいないかを確認してから向かう！」

「了解ッ」

俺に返事をする、今まで気にしていたことを振り払うように更にその移動速度を上げて、タタタンツと随分と慣れたような動きで障害物を越えていく。

普段はああだけどいざと言う時はちゃんと指示通りに動いてくれる。最低限の信頼はあるようでよかった。

「少しの間……頼むぞ、2人とも……！」

思わぬ救世主……………？

ザワザワと人集りが出来ている中を掻き分けるように突き進む。あちらこちらにスマホを片手に撮影や録画をしている奴らばかりで鬱陶しい。

ピコピコパシヤパシヤ音をする中を突き抜けると、例の落下した電子看板の場所までたどり着いた。みんながみんなその地点に向かつてスマホを向けていたから、何かとんでもないことが起きているのかとヒシヒシと感じていたが……あの反応とは裏腹に特に誰かが怪我を負ったりはしていない様子だった。

「なんだ……こいつらが無駄に騒いでいるだけか」

安心感からかそんな言葉が漏れる。でも本当に人が巻き込まれていなくてよかった。

いや……巻き込まれてはいるか。誰も怪我をしていなくてよかった。

目立つ位置でそんなことを思っていると、不意に背後から腕を引つ張られ、再び人混みの中にその身体を隠してしまう。

「なっ……………」

半場無理やり場所を移動させられ、なすがままに引つ張られ続けていると、目立たな

いような位置にある裏路地へと続く細い道で、ようやく俺を引つ張っていた人物を確認できた。

「なにやってんのさ、あんな所で……………」

「お前……………深沢？」

暗い月明かりに照らされた光沢のある青髪に、妙な力がある紅い瞳。そして普段翔をよく見かけているからか、少し幼くも見える小柄な女のような男。

……………あれ？ 青髪に……………紅い瞳……………？

「あんなに前に出てたら晒し者もいいところだよ？ 最近の若いのはすぐSNSに画像やら動画やら投稿するんだからさ」

「あ、ああ……………そうだな……………でもいきなり大きな音がして驚いてさ、怪我人とかいたら大変じゃないか」

「確かにあの音には僕もビックリしたね。いきなりあのでつかい看板が壊れたかと思ったら変なのが飛び出したくんだもん」

こいつも近くにいたのか。本当に怪我なんてしなくてよかったな。

……………つてこんなことしてる場合じゃなかった！ レナとルナにユーザーを任せたまんまだ！

「とりあえず深沢も今日は早く帰れよ！ じゃあ——」

「ちよちよちよっ!? どこ行くのさ竹内っ!」

無理やり会話を中断させて一目散にアイツらの所へ駆け出そうとすると、再び深沢に腕を掴まれて止められる。

こいつ……………意外と力強いな。

「用事があるんだ! 人を待たせてる!」

「……………? 何か急ぎの様子だけど……………商店街を抜けた先に行きたいんなら今の大通りを通るよりもこつちの方が近いよ?」

そう言つて深沢が指さす方向は裏路地の中にある細い分かれ道。しかし方向的には確かに……………合つてそうだ。

「そ、そうか……………、わかつた!」

なんで深沢が裏道を知っているのかはまあ置いておくとして、とりあえずこの道が使えるんならありがたく使わせてもらおう。

そうして大慌てでその先の道へ駆け出していき、曲がり角を曲がる直前に礼を言おうと背後へ振り向くと……………

さつきまでいた所に深沢は姿を消したようにいなくなっていた。

「あれ……………? アイツどこ行つたんだ……………? って……………今はそれよりも!」

色々引つかかるところがあつたけど、まずは目先に問題を解決しなければいけな

い。そう判断した俺は深沢から教えてもらった道を突き進んだ。
そして走り出したその瞬間に……………

「危なかったとはいえ無事に生きてたね。それじゃあ手伝ってあげる」

背中になにか違和感を感じて素早く背後を振り返る。

「……………？ 今……………何が聞こえたような……………」

しかし軽く見渡してもどこにも誰もいない。気のせいか？

「……………先を急ごう」

……………

…

…

教えてもらった道を走り抜ける。そして何となくの方向に向かって走り続けていると……………街灯も無いようなボロボロの道の先から花火でも上がっているかのような爆発音が響いてきた。

俺がいるところからはそこそこ音が小さいから……………まだ距離はありそうだが、こんな寂れた道なら人気も無いだろう……………ナイス誘導だ、アイツら。

そして俺は爆発音が響く方向へと全速力で走る。

ひたすらに怪しいと感じた方向へ移動していると……………ボコボコと丸い焦げ跡が残った場所にたどり着いた。

地面や人の住んでいないであろうあばら家やその周りを囲うように佇むブロック塀、至る所に少し凹んだ真つ黒い影が残っている。

「なんだこれ……」

その跡を調べてみようとする……耳を塞ぎたくなるような爆発音と同時に、大きな何かが目の前のブロック塀を突き破ってきた。

「ぐはっ……!!」

「……ッ!？」

勢いよく飛ばされるように俺にぶつかった何かは、苦しそうに息を荒らげながらビクビクと震えている。

「痛て………つて……ルナッ!？」

あの一瞬じゃ判断なんて出来なかったが、しつかりと姿を確認できる今ならわかる。白いパーカーを身に纏い、短いスカートのようなモノを履いているロングの女の子……

「おいっ！ ルナッ！ ルナッ!!」

「うっ………せえ………な………ッ！ 聞こえ………てる………つつーの………」

辛うじて吐いた無愛想な返事を聞いて、状況を聞き出そうとしたその時、ルナが飛び出してきた先から更に激しい爆発音が響き、奥でまだ戦いが繰り広げられているのが理

解出来た。

ルナを面倒見てやりたいが……………今はそれどころじゃ無さそうだ。

「蓮……………蓮^{アイツ}が引き付けてる内に……………逃げろ……………っ！」

「はっ!? 何言ってるんだ! 家族を置いて逃げるわけねえだろッ!」

「いいから逃げろ……………ッ! アイツは強すぎる……………!! 殺されるぞ……………ッ!」

今にも死にそうな表情をしているルナを能力を解除して休ませる。

普段あれだけ強気なコイツがここまで言うって事はあの音はハツタリでもなんでもないってことだ。地形に影響を与えて且つ幻体にもダメージを与えられる。

いや……………ルナに傷は残っていなかった。つまりは《幻影系》じゃない。その攻撃には俺は特に気を付けなきゃいけないってことだ。

でもいくら傷つかないとはいえ痛みはあるし、疲労も溜まる。レナ1人を残せて行けるもんか。

待ってろ! 直ぐに助けに——

そう強く決心したその瞬間に、再び爆発音が鳴り響き、俺とすれ違うように黒い人影が前方から倒れた。

「……………え？」

思わず気の抜けた声が出る。それほどまでにあっさりと彼女は俺の横を倒れた。

今のは間違いない……………

イカン……………！俺がすっかりしないでする……………！これ以上コイツらを傷つかせてたまるか……………！

「ごめん、ゆっくり休んでろ。レナ」

もう1つの能力も解除する。ゆっくり休んでもらう為に。もう無茶させない為に。

そしてレナとルナが飛んできた方向を睨んでいると……………奥から人が現れた。

「こんばんは、貴方が《反射》の能力者で……………いいわよね？」

その姿は至って普通の女。どこか見なれた制服に身を包み、長い髪を後ろに束ねながら冷たい目で俺を見る。

「……………ッ！」

コイツがああ俺よりも強いレナとルナを倒したのか……………！しかも……………汚れ！
つ着いてもいない姿で。

「竹内蓮太。名前は合ってる？一応人違いだと後処理が面倒だから聞かせてもらわ
わ」

名前も知られてる……………

「ああ」

「じゃあこつちも自己紹介、とある事情で貴方を殺すことになった《I O 5》です。突然で悪いけれど……………大人しく死んでくれる？」

目の前の女は自分の指先に優しく息を吹きかけると、その先から淡い光が誘われるように俺の元へと移動してくる。

……………ツ！

「リフレクシヨ反射鏡ツ!!」

咄嗟に能力を発動させて鏡の壁を作るが……………《反射》は出来ずに壁の奥で地形を壊さんとするような凄まじい爆発が響き、その爆風に耐えられず身体をのけぞらせてしまった。

「くっ……………!」

なんつー威力だ……………! 手始めの挨拶でこのレベルかよ……………

「あら……………貴方、その子の味方をするの?」

……………?

「君たちがしつこいからでしょ、厄介事に巻き込まれるのは僕は嫌いな」

誰に話しかけているのかと思えば……………この声……………!

「逃げるのも面倒になってきたしね。いくら追跡を攪乱させたとしても何故か君たちは

ずーっと追っかけてくるし、それなら………。」

「やることやるしかないでしょ」

敵であり味方、味方であり敵

「……………っ」

思わず息を吞んでしまふ。それほどまでに俺の知っている深沢とは同じだったから。明るく、裏表のないような元気いっばいの声。それは変わらない。変わらないのにひたすらに謎の圧がある。

いつものように笑い、砕けたような体制である謎の女と会話しているその姿にも違和感を感じた。

「あらそう、2人ともお友達だったのね」

「は……………っ？」

どの流れから俺たちが友達だと判断できるようになったのかは知らないが、とりあえず深沢にも攻撃するつもりのようなようだ。

「戦場で生き残るには圧倒的な力を持つか、呆れるほどに臆病になるかの2択よ。1人勇敢な者……勇者は死ぬと相場は決まってるわ」

カツカツとヒールの音を鳴らしながら、ゆっくりと俺たちの方へと向かってくる女。

「お、おい！ 深沢は逃げるッ！ アイツはとにかく危険で——」

「あー、そういうのいいから。まずはあの《IO5》の女の人止めなきやいけないでしょ」
「止めれるものなら……是非お願い」

その瞬間に目の前に流れるように迫ってきていた小さな光。まるで一粒の火花が散るように飛んできていた。

それは電気でも発しているかのようにバチバチと熱を弾いており、そのまま……
俺の《遠く》で轟音と共に爆発した。

「……っ!?!」

「もー、何ボーツとしてんのさ。死んでも知らないよ?」

軽口を叩く深沢と俺は、あのボロボロのあばら家の屋根の上にいるの間にか移動していた。先程まで俺たちがいたところは黒い墨を塗りつぶしているように真っ黒に焦げており、それを見かけた時に背筋が凍った。

何が怖いって、全く反応できなかった事。間違いなく俺一人なら今の爆発で死んでいった。

「な、なんで……俺……!?!」

「詳しく話す気は無いよ。アーティファクトについてのことならお互いに知ってるでしょ」

「…………… お前まさかッ！」

なんて会話をする時間も与えて貰えずに、10メートルはあっただろう距離をあの女はものともせず詰めてくる。地面なんて続いていなくて、こっちは屋根の上にいるつてのに、空を飛ぶように真下から舞い上がってきた。

「仲良くお話をなんてしている暇はあるかしら？」

そして言葉に続くように巻き起こる小規模の爆発。それはあの女の足元付近から発生しており、その爆風によって加速されたただの蹴りは俺の頭を潰そうとするように襲いかかる。

「あつぷ——ッ！」

ギリギリのところでのその蹴りを躲すと、仰け反る時に暴れた俺の前髪の一部が蹴りに当たっていたらしく、パラパラと数本離れていった。

「惜しい……………もう少し踏み込んでいけば頭ごと真つ二つだったのにね」

なんなんだよなんなんだよ……………！ 強いなんてレベルじゃないだろ……………！

なんて心の中で焦っていると、左頬がズキズキと痛み出してくる。そこに触れると真つ赤な血が流れており、気がつけばその箇所は縦に真つ直ぐ大きな切り傷のようなのが出てきた。

焼かれたわけでもない、ちぎれたわけでもない……………これっでもしかして……………

「かまいたち……………マジかよ……………」

つつーことはあの蹴りは速度も相まって真空状態を作り出すほどの威力つてこと。あんなのまともに当たつたら……………考えただけでも恐ろしい。

「うわ……………今のよく反応できたね、竹内つて意外と反射神経高いんだね」

どこまでもお気楽なコイツもアーティファクトについて知っていた。しかも実物を手にして見かけてからならまだしも、相手の不思議な能力を見てから慣れているかのように立ち振舞っている。

おそらく現れた時の発言も自分が持っているからこそその言葉だろう。

しかも戦い慣れていそうだ。

「鎌風だ」

「ん……………？ なに？」

「あの女がやったことはただの蹴りなんだ。それを能力の爆発を応用して脚を振る瞬間だけ速度を爆発的に上昇させている。つまりは反動エネルギーを利用して異常な速度の体術を使ってるんだ」

「たった一回でそこまで冷静に分析するなんて、予想以上……………かな？」

今の深沢を見ていると何故か焦りの気持ちは無くなってくる。余裕がある訳じゃないがあの異常なまでのお気楽さは何かヤバい予感を感じさせるからだ。

「この高度まであの女が直ぐに迫ってきたのもツ！」

聞こえてきた爆発音に合わせて、まだ姿の見えない敵に向かって勢いをつけた後ろ回し蹴りに対応……………したつもりが、上手いこと連続で能力を使われて起動を横にずらされた。

「小さな爆発で自分自身の身体を飛ばしてきたんだ」

爆竹のような音を何度も何度も奏でるように空を舞い、俺たちと同じ屋根の上に着地する女。

「ご名答。やっぱり簡単には殺させてくれないわね？」

「つたりめえだ……………！ 誰の差し金かは知らねえけど、こちとら何度も命を狙われてるんだっつーの」

にしてもただでさえボロボロの建物の上、しかもよりにもよって瓦屋根の上だ。足場が悪すぎる……………

どうするべきか……………

「誰の差し金って……………貴方のお友達から聞いていないの？」

「は？」

なんだ？ 俺の知り合いにこの戦闘の意味を知る人がいるってのか？

「あら、一応忠告だけはしておいてねって伝えておいたのだけれど……………間に合わな

かったのねあの娘」

……!? 娘!?

その言葉に反応し、意味を問いたただそうとした俺の真後ろから、真つ赤な槍が女を貫こうとビュンビュンと飛びかかる。

「全く……あの黒眼鏡のお嬢——」

女は何かを語りかけていた途中で、その槍をいなすように身体を捻らせ、次々と襲いかかっている赤い槍を避け続ける。

「ありや? 油断した隙にやれると思ったのにダメだったか」

「人の話は最後までちゃんと聞かなきゃダメよ?」

「生憎そんな余裕は僕たちには無いの」

タンッと屋根を蹴って自分の身体を浮かび上がらせると、あちこちにその姿を瞬時に移動させ、ありとあらゆる所から赤い槍を射出する深沢。

これって………《白》ゴーストの時の……!

間違いない。あの槍も、今アイツが使っている瞬間移動も、全くアイツと同じだ……!

じゃあ深沢がルナの心を傷つけた張本人……?

俺はその場に立ち尽くすしかできなかつた。俺が今まで探していた超危険人物はこ

んなにも身近にいた恐怖とその事実にも、どうすることも出来なかった。心から湧いてくるのは怒り。

今は共闘関係になってしまっているが、どれだけルナが傷つこうと放置し、愛情を注がなかった男が目の前に。

そんな憤怒の気持ちに心を支配されていると、今までよりも一際大きな爆発音が鳴り響く。

視界を覆う煙の中から力なく地面に落下していったのは制服がボロボロになった深沢だった。

「じゃあまず……邪魔者からね」

「……………ッー」

追い討ちのトドメを刺そうと倒れた深沢に襲いかかる女を見て、自然と身体が動いた。

確かに憎い。

俺にとって大事な家族を酷い目に遭わせた奴だと思つとぶん殴りたくなる。けれど……………それを見捨てる理由になんかできない！

素早くその場をダッシュして駆け下り、女の準備が整うまでになんとか深沢の側まで駆けつけた俺は能力を使う体制を整える。

「ふふっ……、じゃあね？ さようなら」

どうするどうする!? 俺の反射の力はさつき無効にされたばかりだ。深沢にダメージを与えたレベルの威力で来られたら、空中よりも熱や風の逃げ場の無いこの場所じゃあ下手したらマジで死んじまう！

どうする……！ どうしたらいい……っ!?

爆発を利用して高速で迫ってくる女を睨みながら対処の方法を考える。

その時に脳裏に過つたのは初めてこの能力を使った日のこと。試行錯誤しながら能力を試していたあの光景。

そうだ……あの時、鏡の形を変えられていたッ！

成功しろよ……ッ！

フル・リフレクシヨン
「全方位反射鏡ッ!!」

反撃の狼煙

《視点切り替え》

「それが君の言う交換条件かい？」

白巳津川の街中にあるとある高層マンション。

私でもこういった大切なお付き合いじゃないと滅多に來ないレストラン。慣れない所に慣れない理由で來ているのに……………

「……………はい」

今は屋外の素敵な夜景が見渡せる特別席で、とある男性と2人きりで話をしている。

なんで……………こんなことになつたんだろう……………

なんで……………

「君が理解のある女性でよかつた。でも安心して？ 君が裏切らない限りボクも君を裏切らない。本当は殺害の依頼をしているんだけど……………間に合えば取り消そう」

「そ、そんな……………！ 誰か一人でも手を出したのなら、私はその条件は呑めません！」

「わかつてるよ、今すぐにでも連絡しよう。ええ……………と」

目の前の男性は左耳に付けている不思議な機械をトントンと慣れた手つきでタツプするように操り、誰かとの通話を始める。

「ああ……ボクだ。プランDに移行してくれ、都は交換条件と言う形でコチラの意見を汲んでくれた。内容も想定どりのものだ」

「但し釘だけ刺しておくこと、まあ君たちの戦闘力なら問題は無いだろうが……必要であればアレだけしておいて」

この男性、『近衛 悠』さん。コロナグループを今まで支えてくれた大切な協力会社の御曹司。

私は今日から……この方の《彼女》になる。結婚を前提としたお付き合いを1から始めることになる。

目的は分からない。何故こんな事をするのかも分からないけど……この人にとってはきつと必要な事なんだ。だからこそ私は利用されている。

今までに何度か顔を合わせたことはあるけれど……こんな人だとは思わなかった。悔しくて悔しくて……泣きたい気持ちを我慢してぎゅつと拳を握りしめる。

突如として彼が言い出した言葉は今でも忘れない。この場所に呼び出され、彼が発言した一言目は「自分はアーティファクトユーザー」だということ。

この方と目が合っただけで身体が痺れたように動かなくなった。その瞳付近には

ステイグマ
紋章が浮かんでおり、何かの能力を使用しているのは明らかだった。

そしてその力を身をもって体験させられた後、彼は次々に言葉を発して言った。

企業同士の立場を忘れて、純粹に私と交際関係になること。

もちろん彼には申し訳ないけれど、お断りさせてもらうつもりだった。だったのだけれど………次に彼が言ったのは、今この瞬間に竹内くんが襲われているということ。最初はそれが嘘の証言だと信じていたけれど、耳に取り付けている機械で音を繋げていたようで、女の人と竹内くんの会話と激しい爆発するような音が聞こえてきた。

それを疑うことも考えなければ………本当だったのなら実質竹内くんの命は私が握っていることになる。なぜなら、返答次第ではこのままこの戦闘を放置して、友達の無様な姿を晒すと言われたから。

その意味は………

「よかった、間に合ったみたいだよ？ 竹内くんと深沢くん、ちゃんとまだ生きてるって」

………深沢くんも？

「それじゃあおさらいは………大丈夫かな？ たった今からボクと都は特別になる。君が

……いや、都が裏切らない限りはボクは誰も殺さない。お友達も、ご家族も、もちろん……都自身も」

「都の能力だつてちゃんと調べているよ。校内火事の件でかなり洗い出せたからね。だから不用意にボクに逆らわない方がいい。ボクも都も、大切な人たちも幸せになる為に……ね？」

「……」

私が裏切らなければ、竹内くんを初めとしたみんなは無事に生きていける。

私が他言しなければ、お父さんもお母さんも、お爺様たちも生きていける。

私がこの人と淑やかに過ごしていけば……みんな無事になる。

その代わりに私が提示した条件がそれ。大切な人たち全員に決して酷いことをしないこと。一切の関わりを持たないこと。

「……………はい。これから……………よろしくお願いします。悠くん……」

「うん。愛してるよ都」

そつと腕を回され、優しくも力強く彼に抱きしめられる。そしてそんな私たちを遠くから微笑ましそうに見ているお父さんたち。

これが最後にするから……1度だけいいよね？

1度だけ……………

「泣かないで、都。彼らを忘れてさえくれるならボクは君を必ず幸せにできるよ」

「うっ………！ うう…………！！」

「よしよし…………」

もう私は……戻れない。

《視点切り替え》

「ゴホツゴホツ………！！」

咄嗟に繰り出した鏡の能力、一方向だけではなく全面に出現させた力で何とかあの爆発を凌ぐことが出来た。

割とギリギリだったかな。

「いてて………流石の無敵の防御でもキツくなってきたかな？」

軽く頭を抑えながら、深沢は上半身を起こして敵を見る。

「俺の能力の事も知ってそうだな……」

「有名だからね、アイツらの中では」

舞い上がった土煙が徐々に晴れていき、ようやく周囲を見渡せるようになって、あの女はあばら家の屋根の上で片耳を抑え、誰かと会話をしているようだった。

「お前、あの女の事を何か知ってるのか？」

「まあね、少しだけ話したことがあるってくらいだよ」

「じゃあとりあえず後で全部聞かせてもらおうか」

「うわあ……めんどくっさ……。でもまあ、そうだね。アレをどうにかするのは結構面倒だと思うよ？」

痛みが走る身体を無理やり動かし、俺たち2人はその場を立ち上がる。

確かにアイツは強い。能力である爆発も俺が反射出来ないし、《幻影系》でもないから普通に傷つく。でもまあ……。やるしかないだろ。

こっちは《反射》と一応《幻体》。それで《瞬間移動》に《槍操作》、そして……

《麻痺》があるか。あの、目を合わせると身体が動けなくなるやつ。

「あ、1つ言っとくけど《眼》は使わないからね。色々と面倒だから」

「は？ 眼ってなんだよ」

「ほら、もう気がついてるんでしょ？ 目線を合わせたらってやつ」

「ああ……………面倒って何が？」

この状況で使う能力を選ぶなんて選択があるのか？ 下手したら即死の状況なんだから？

って……………言っても俺もレナとルナには頼る気はないんだけど。

「契約者じゃないと分からない悩みってものもあるのさ」

……………冷静に考えると希亜のような条件付きの力って可能性があるのか。だって仕方ない。

「とりあえずは協力してくれ、まずはアイツをどうにかしないと話にならねえ」

「もちろんそのつもりではあるよ、僕もそろそろ我慢の限界だからね」

あの女はやたらと長い会話の途中だ、今攻めれば可能性はある。

トンつと深沢は俺の肩に手を置いて、戦闘態勢を整え始めた。

おそらく瞬間移動を使って一気に接近するつもりなのだろう。俺も何があってもいのように《鏡》の能力を準備して……………と。

「反撃開始だ……………！」

「反撃開始だねっ！」

俺たちは同時に地面を強く蹴って、空中に身を投げた。

笑いあつてさよなら

俺は今、あばら家の屋根の上に倒れている。

俺だけじゃない。深沢も同じようにその場で眠ったように倒れていた。理由は明白、俺たちは負けた。

たった1人の女のユーザーに2人がかりで負けた。

「ちくしょう………！」
弱い。

俺は弱すぎる。たった一つの能力相手にここまで完膚なきまでにやられてしまった。しかも生かされている。

あの女が誰かと通話するように連絡を取り終えた後、最初からいつでもこう出来たと
言わんばかりに一瞬で手を出されて終わった。

そして倒れている俺たちに言ったあの言葉、どういうつもりなのだろう。

「よかったわね君、お友達に感謝しなさい。殺害命令を受けていたけれど予定が変わったわ」

「なん…………だと……………?」

「今ここで楽にしてあげられていたのに、それが出来なくなつたの。でもまあ……………力の差は歴然、全てを無駄にしても死にたかつたらまたお相手してあげる」

あの言葉の意味はなんだつたのか。俺は誰に助けられたのか。全く分からない。ただ一つ理解出来たのは、アイオーファイブ I O 5 という謎組織グループがあるということ。

そしてそれは何らかの理由で俺を狙っているということ。

「おい……………深沢……………聞こえるか?」

「……………」

返事はない。小さな呼吸音が聞こえてくるから死んでしまったわけではないだろうが……………動くのはキツイのかもな。

俺も激しく体を動かしたからか全身が筋肉痛のように痛い。まるで全ての筋肉を引つ張られているような感覚だ。

だからこそ俺は R I N G のグループチャットに位置情報を載せた。俺のスマホがど

ここにあるかを追尾して知らせる機能だ。本来は子供が迷子にならないようにとか、迷子になってしまったとしても親が分かるように等の目的に作られたものだろうが………救援要請を出している。

警察や救急はアーティファクトの存在を知らない以上はこの場に呼ぶのは面倒だ。だから理解のある誰かが来て欲しかった。

そしてその救援に応えてくれた人をひたすらに待っている状況、そんな時に俺と同じようにダメージを受けているであろう深沢がぎこちない動きでその場から立ち上がる。

「くっそ……まさかここまで差があつたとはね」

「お前……動けるのかよ」

「竹内が結構防御してくれてたからね、君よりはだいぶんマシだよ」

「大した奴だよ、全く……」

深沢も不自然なほど能力の扱いに長けていた。しかも複数の能力を所持していることから、何らかの方法で人のアーティファクトを奪ったことになる。

もちろん俺のような成り行きで受け継いでいったことも考えられはするが……その真相は直接聞いてみなくちゃ分からない。

「じゃあね、竹内。とりあえず僕は帰るよ」

「………また後で連絡する。いつになるかはわからないけどさ」

「先に言っておくけど、僕は君たちとは協力する気は無いからね。あくまで僕が興味を持つているのは翔と君だけだから」

「ああ……わかつてる」

「そ、じゃね」

そう言い残してアイツは消えた。

まだまだ沢山の謎だらけのアイツだけ………少なくとも今は敵対の意志を持たなくていいようだ。目的は同じなのなら今は少しでも戦力が欲しい。

俺は弱すぎるから。

下唇を噛み締め、そんな自分を悔やみ続ける。

そんな時だった、ひよっこりと誰かが頭を覗かせたのは。

そして俺を見つけるや否や駆け寄ってきたその人物は腰を下ろし、膝に頭を乗せてくれる。

「酷い傷………」

……え？ この声って………

「もう少し待っててね、すぐにお父さんとお母さんが迎えに来てくれるから」

小さな身長に反比例するように大きく膨らんだ胸部、そして海のような深い蒼色の髪飾り。そして見慣れた黒い眼鏡を付けている。

服装こそ見たことの無くて驚くぐらいに大人びた物を着用しているが、優しい声と小さな手がある人物へと結びつけた。

「九條……………さん……………？」

なんで彼女がここに？ 今は大事な食事会の途中なんじゃ……………？

と疑問に思っていると、彼女が身につけている物で不自然さを感じさせるアクセサリーがあることに気がついた。

彼女の左手の薬指に、銀色に輝く小さな宝石が嵌められた指輪が通されている。

「うん？」

「なんでここに……………？」

どこか瞳に生気がない彼女は、震える身体を無理やり抑えて静かに俺の質問に答えた。

「竹内くんが教えてくれたんでしよう？ ここにいるって、だから……………抜け出してきちゃった」

「バカ……………大切な食事会だったんだろ？ なんでそんなことを……………」

「もういいの。全部……………済んだから」

なんで……………そんなに元気が無いんだ？

「上手くいったのか？」

「…………うん」

なんで……そんなに悲しそうなんだ？

「ねえ……」

「ん？ どした？」

「今だけ、蓮太くんって呼んでいいかな？」

「…………急に？」

イマイチ噛み合わない会話を繰り返す中、彼女は切なそうな声でそう呟く。

どうしたんだ？ 本当に。

「ダメ……かな？ 私のこと也都って呼んでいいから」

よく分からないけど、彼女はどこか辛そうだし……それが少しでも心の支えになるのなら……まあ……いいか？ 希亜のことも名前で呼んでるし。

「……………それで、どうしたんだ？ 都」

名前と呼ばれるなんて、今までの九條さんなら耳まで顔を真っ赤にして恥ずかしがりそうだったのに……今はこの時間を惜しむように笑っている。

「あのね、蓮太くん。私……この街から出ることになっちゃった」

「……………はっ」

何を……言ってるんだ？

「私のお付き合ひさせて頂いてゐる彼がね、海外に別荘を建ててゐるみたいで……これからは私と彼はそこで暮らすことになつたの」

「ちよつ……ちよつと待てよ、いきなり何言つてんだ!? どうしたんだよ!」

その突然すぎる告白に何故か俺は焦りを覚え、痛む身体を無理して起き上がらせる。

「だからこれからはきつと会うことがなくなつちやうから、お別れを言いに来たんだ」

「話を聞けつて! 何が何だかわかんねえよ! つてか付き合つてゐる彼? 好きな人がいたんじゃねえのかよ!」

「うん。いたよ好きだつた人」

「じゃあなんで……」

やっぱり大人としての生き方とかを説かれて敷かれたレールの上を歩かされていたりするののか?

為す術なく断る暇も与えられずにあの相手と付き合う形になつたのか?

「あ、アーティファクト集めはどうするんだよ! 都がいなきや俺たち何もできやしねえよ!」

それが精一杯の反論だつた。突如として語られる九條さんのセリフ一つ一つが俺の心に強く突き刺さる。

「ごめんなさい。途中で離脱するような形になつちやつて」

「……！ ふぎけんな！ 納得いかねえぞ！ 俺たちはまだ何も目的は達成出来ちやいないじゃないか！ まだ俺はハンバーグだつて食べさせてもら——」

「んっ——」

その時に九條さんは迫ってきた。

口論にもなろうかと動く俺の口を、彼女は自分の口で塞いできたのだ。

あの時とは違う、妙に塩っぱくて驚くくらいに柔らかな感触。甘酸っぱい香りなんてものはそこにはなく、ただただ最後の一口を求めめるかのような強引な接吻。

心臓が跳ね上がる。

何故こんな事を彼女はしたのか？ 何故こんなにも彼女の目元には濡れた跡があるのか。

その全てが分からない。

ただ俺は直感で感じた。このキスは軽はずみの行為などではないことを。

だから俺からも同じように返す。意味もない、理由もない、愛の無い口づけを。

それがゆつくりと離されていった時、彼女はこう言葉を紡ぐ。

「いきなりでごめんなさい。驚いたでしょ？」

「ああ………かなり」

「そう言つてるけど……ちゃんと返してくれた」

正直頭は混乱している。元々冷静な思考などとてもじゃないが出来る状態ではなかつたということもあつて、余計に落ち着かない。

「私の初めてのキス……受け取つてくれてありがとう。蓮太くんも………初めて？」

「ふふつ、じゃあ初めて同士だね」

なんだ……この苦しきは

なんだ……この痛みは

九條さんが笑えば笑うほど、心が苦しくなってくる。九條さんが無理をすればするほど……心が痛くなる。

張り裂けそうだ。

「……この初めてだけは貴方とがよかったの。私の大好きだった貴方が」

「………！ それって——」

俺のことだったのか。と気がついた時はもう遅かつた。それを聞き出そうとした時には、彼女は左腕を俺の方へと突き出しており、その手の甲には紋章が現れる。

……能力を使う気だ。

「最後に素敵な思い出をありがとう。私、これからも頑張るからね。だから貴方も……どうか素敵な人と出会って幸せになつて下さい」

「みや——」

「だつたなんて言つちやつたけど、やつぱり大好きです。そして……さよなら」

その拳がギョツと握られた瞬間、俺は強く引つ張られた糸が切れるように意識を失い、グルグルと捻り回る視界の中で倒れてしまった。

戦いの始まり

「……………」

「ここは……俺の家？」

気がつく俺は自分の部屋のベッドの上で横になっていた。

……気がつくとき？ 俺はさっきまで何をしていたんだっけ……？

「目が覚めたかよ、大将」

カチカチと時計の針だけが聞こえる部屋の中で、レナ1人がしつぽりとテーブルの前に座っていた。

「レナ……？ 俺は一体……………」

「まあとりあえずはゆっくり休んでろよ。落ち着いてから少しずつ思い出せばいい。……………茶でいいか？」

スつとその場を立ち上がり、キッチンの方へと歩きながら俺を気にかけてくれるレナ。

……なんだかんだで優しいよなコイツ。

「ああ、ありがとう」

カチャカチャと音を鳴らしながら、適当なコップに飲み物を淹れてくれるレナを見ながら改めて今日という一日を思い返す。

確か………そうだ、レナとルナと俺の3人で晩飯を食いに行つてたらあの女を見つけて、戦つて………負けた。

深沢が協力してくれたけど、それでも2人じゃ勝てなかつたんだ。

「はいよ」

「ん……」

せつかく用意してくれたんだけど、気分的には全然まつたりする余裕はない。

「そーいやルナは？」

「さあな、多分寝てる」

「そつか」

今の時刻は………23時過ぎ………か、だいぶん寝てたんだな。

………?

そう言えば誰がここまで俺を運んでくれたんだ？ レナか？

「また何も覚えてないんだな、………まあ今回はしょうがないけど」

「………? なんの事だ？」

「都の事だよ」

「みや……………」

あれ？ コイツらつて九條さんの事を都って呼んでたっけ？ 九條って呼んでたよ
うな……………」

「都がどうかしたのか？」

「大将……………アンタの脳は覚えてなくても、その身体が、その魂が覚えてるみたいだな」
……………なんで俺は都と口にしたんだ？ 今までは苗字で呼んでいたのに。

「教えてやるよ。アンタが都に奪われた記憶の欠片を」

レナ説明中……………」

「本当かよ……………それ」

「オレが嘘をつく理由がどこにあるんだよ」

不可解な点やまだまだ理解し難い部分もあるが、とにかく分かったのは俺があの子か
ら生かされた理由は、きっと九條さんが助けてくれたって事。

あの時の殺害依頼の件を話している時に、「黒眼鏡の……」と発言していた。あれは多分俺が渡したものでないだろうか？

九條さん本人は絶対にそんなことをしないだろうが、彼女の周囲にいる誰かがそんな企みを練っていたとして、彼女はそれを止めてくれたのなら……一応辻褄が合う。

そして最初は断るつもりだったのに、あんな悲しい笑顔でそれを受け入れたってことは……………

いや、憶測だけならなんとでもなる。こうなりや直接本人に聞いてみるしかない。そう思つてスマホに手を伸ばし、RINGで連絡を取ろうとすると……

「……………都がいない」

友達リストからもグループからも、九條さんのアカウントが綺麗さっぱり消えていた。

そこには元々誰かがいたかのように、枠だけが余っている。

「どうやら本格的にもうオレたちとは関わる気は無いらしいな。どうする？ 大将。これじゃあ会話も出来ないぜ？」

俺は九條さんの電話番号を知らない。RINGを絶たれた今、ここにいて彼女と連絡をする手段はもう持ち合わせていない。

俺が寝ている内にグループの方で高峰を除くメンバーが九條さんが居ないことにつ

いて色々騒いでいる所を見ると……他のみんなも俺と同じ状況なのだろう。

『みんな見てくれ。都が急に俺たちとの繋がりを絶つたのは事情があるんだ。その内容までは俺もあまり理解出来ていないし、本人はそれを隠そうとしている。詳しいことはレナから伝えさせるから、みんなはとりあえず待つてくれ。俺が何とかしてみる』

RINGのグループチャットにそう眩き、俺はレナにスマホを手渡す。

「おい大将……アンタマジかよ」

「連絡する手段がもうないんだ。だつたらこうするしかねえだろ」

きつと俺の考えを読んだんだろう。若干呆れるような態度でレナは頭を抑える。

「もし本気なら……それをすれば大将は立派な犯罪者だな。自分の立場を犠牲にしてでも……するののか？」

「ああ……」

いくら嫌われてもいい。いくら俺が辛いことになってもいい。でも、やつぱり九條さんが何かを隠しているのなら、俺たちの為の《何か》を守っているのなら、俺は足枷になんかなりたくない。

「だから、みんなのことを頼む。事情を説明して俺とはもう関わらせないようにしてくれ」

「それでアイツらが納得するとは思わねえけどな、オレは。特に………希亜」

「アイツはルールを守らない奴らが嫌いだからな。敵視されることになっても仕方ないか」

だが……それでもいい。

九條さんが全てを心の底から望んでそうしたのなら……俺はもう何も言わない。けれど我慢をしているのなら……俺は……

俺は……

「じゃあレナ、あとは頼んだ。俺は都の家に行つてアイツが嘘をついたら……」

もちろん第一にそうするつもりは無い。本当に最悪のケースになった場合……

「誘拐してくる」

???

裏の顔、心の真実

お気に入りのバイクを乗りこなし、夜も更けて人と車通りが少なくなった道路を可能な限りのスピードで飛ばしていく。

なんで……九條さんは俺から記憶を抜いたんだろう。

九條さんの家へと向かう途中でそんなことを考えていた。

自分のことを忘れて欲しいという理由ならもつと別の記憶を抜いておくべきだ。そうしなかったことはその抜かれた記憶の中になにか重要なことがあるってこと。

レナから教えて貰ったことじゃあ、九條さんが海外へと行ってしまいう事を聞いた俺はあまりに突然すぎる言葉に動揺し、彼女にひたすら責めるような勢いでそれを止めていたらしい。

そこから先のことを軽くはぐらかされたが……2人で会話している途中で九條さんに意識と一部の記憶を抜かれて気絶したんだと。

そしてその出来事の前後に起こった問題を考えると……やつぱり納得いかない。全部本人から直接聞くまで絶対諦めねえ。

「もうすぐ……全て理解^{わか}る……!!」

そんな俺の高ぶる気持ちをバイクに伝染させるようにアクセルを回し、更に速度を加速させると、タイミングを狙ったかのように俺に行き先を狂わせ、邪魔をするように次々に《雷》が降り注ぐ。

「ッ!？」

四方八方で疎らに降り注ぐ落雷は、無差別に暴れており、最後には道路を封鎖するよ
うに前方に一際大きな雷が大きく轟く。

そしてそこに現れたのは、いつぞやの半裸の雷男^{あづま}の雷だった。

「イヤアツハ——ッ!!!」

無数の雷を自在に操り、リズムを奏でるかのように激しく轟く轟音。

これは簡単にはこの道を通らせてはくれなさそうだ。

「くっそ………もう目と鼻の先だつてのに」

急ブレーキを使ってバイクを止めて、威嚇をするようにエンジンを空ぶかしさせる。

「悠の予言通りだな、本当に一人でやってきたか……ヤーハッハッハッ!!!」

「悪いな、お前にはあ恨みこそあるが今はそれどころじゃないんだ。そこを通してもら
うぞ」

「なんだ？ 自分の女を盗られて焦っているのか？」

……コイツ、事情を知ってやがる。それじゃあ今回もコイツらがグルなのか。

「馬鹿言つてんじゃねえよ、お前らが奪つたのは都の《自由》だろッ」

そう言い放つと、今度は雷あづまの隣で時が飛ばされたように見かけたことのある男がワープしてきた。

「その代わりにボンボンとして生きていけるんだ、金のねえ奴と結婚するよりはマシな
んじゃねえの？ 兄ちゃん」

「お前は……あの時の……！」

あの電気男を追い詰めた時に助太刀してきたあの男だ。

「なんだ、貴様も来たのか替てっ」

「権力もある、金もある、そして力もある。未来も安定の人生勝ち組男だ、あんなに可愛
がって貰つて下手なことするよりや幸せなんじゃねえの？」

「……………」

その言葉はおかしくないか？ そのセリフが出てくるのは異常じゃないか？

まだ一日目なんだぞ……？

「テメエら……都に何した……」

「オイオイ……そんなに怒んなよ、俺あただ親切に止めてやってるだけだつつの。あの
女の事は諦めときなつてな」

「ふざけんじゃねえぞ！ 散々人を振り回しといて何言つてやがんだっ！ 誰が諦めるもんかよ……………俺は必ず都を連れて帰るツ!!」

急に手を出しといてそのくせ身を引けだあ？ 自分勝手が過ぎるだろうがよ……………!

チマチマチマチマちよつかい出してきやがって、まともに喧嘩の仕方も知らねえガキ共が……………

「ヤハハ……………! 良い眼だ、今にも人を殺さんとする覇気がある」

「……………止めとけ雷、今一あつま体一サシで殺り合えば、多分負けるぞ」

おそらくほんの1秒程だろうか、替てつと呼ばれる男と本気で睨み合ったのは。

その一瞬の一睨みで、お互いに圧を賭けた流れの殺し合いになる。

「どの道俺たちが今拳を交えたとしても、結果は変わらないさ。あの女はもう悠の物だし、I O 5アイオーファイブの連中もいる。この兄ちゃんに勝ち目はないさ」

「その通りツ!!」

俺たち3人以外は誰もいないはずの道路の奥から、一際大きな声と共に様々な人影がこちらに歩いてくる。

全員で6人程だろうか？ ツカツカと歩いてくるメンバーの殆どは誰も知らない奴

らだった。

「竹内君、君が一人でどれだけ無駄なことを企もうと騒ぎを起こしても、僕の都は決して渡さない！ 彼女は僕が守りきってみせる！」

追加で歩いてきた団体様の先頭を歩く、髪濡れたいけ好かない男は、いちいち癩に障るような言い方で堂々と喧嘩を売ってきた。

「……………お前が黒幕か、都を何処にやった」

「彼女なら……」

俺の威嚇に狼狽えることなく、その男は右腕を高く上げるとその影から九條さんがひよっこりと姿を現した。

あの男と同様に、彼女の髪もしたしたに濡れている。

……………風呂上がりのように。

「都……………」

「何故、ここまで来たの」

そして、彼女の瞳は深い海のように光が籠っていない。どこか諦めているような悲しい瞳だ。

「そんなこと決まってる！ なんの説明も無しにいきなり姿を消したりなんかしたらみんな心配するさー！」

「そう」

驚く程に冷たい声に流され、俺の言葉は風に靡かれて消え去った。
何かがおかしい。

「そう」じゃなくて、聞かせてくれ！ 都は海外に行っちゃもうって嘘だろ!! 恋人ができたとか、アーティファクト集めを止めるなんてさ、冗談なんだろ!!」

「……………おめでたい人、どこまでも私を信じてるって顔してる」

「……………何言ってるんだよ」

「貴方みたいな落ちこぼれは、私たちみたいな選ばれた人間に簡単に利用されるって言ったの」

……………!?

なんだよ……………それ。

どうしたんだよ……………いつもの優しい九條さんはどこいったんだよ。

「……………え？」

「……………貴方たちのような庶民の方と真剣にお付き合いするわけじゃないでしょう？ 学校でもバイトでも、毎日毎日大変そうに過ごしているのを見て……………楽しませてもらいました。やっぱり底辺を見るって素晴らしかったよ」

いつものどんな事にも一生懸命で、毎日頑張って生きてる九條さんはどこいったんだよ。

「でも、もう飽きちゃった。私は悠くと一緒に楽をして幸せに過ごしていくから、竹内くんもしつかりとお勉強してこの街の歯車になつてね」

……………本当にわかりやすい。

「嘘つけッ!! 都…………お前何かが弱みを握られてるんだろ! それでそんなことを言うしか手段がなくて、わざとに俺たちを引き離そうとしてるんだ!」

「…………お馬鹿さんには難しいお話だったかな?」

「大体言葉選びが嘘くせえんだよ! 心配すんな! 今すぐ俺がこんなヤツらぶつ飛ばしてお前を助けて——」

「いい加減にして!」

俺の言葉を遮ると同時に、辺りが静まり返る程の大きな声を九條さんは荒らげる。

「疎ましいの、そう言つていつもいつも上の立場からものを言つて…………偉そうにしないで」

「都…………」

棘のように痛々しい言葉を俺に刺しながら、九條さんは怒りを露わにするように思い足取りで俺に迫ってくる。

「だから俺はお前を助けよう——」

「私と悠くんの幸せの邪魔をしないでッ!!」

その瞬間に、バチンと響く音。

ヒリヒリと痛む左頬から、俺が何をされたのかを確認できる。

驚きのあまりに目を点にしながら驚いていると、彼女を見て右側に大きく伸びた右腕が、俺の視界に入ってきていた。

「ハハハハッ！ 流石だよ都！ 流石にここまでしつこいと確かにストレスが溜まっちゃうよね！ 僕もスツキリとしたよ！」

「もう二度と……私たちの目の前に現れないで」

そう捨て台詞を吐いて、彼女はくるりと振り返り引き連れてきた4人の人たをポディガードのように扱い、自分の家の方角へと歩みを進める。

そしてそれを笑い続ける先頭だった男。おそらく……悠。

先にいた雷あつまと替てつも爆笑していたり、言わんこつちやないと呆れていたりにいる。

「待てえええつつつ!!! 都おおおつ!!!」

それでも俺は声を出して彼女を止めようとする。

「お前嘘つくなよッ!! 何か隠してんの……バレバレだぞッ!!!」

諦めずに、彼女に向かって叫び続ける。

それと同時に駆け出して足を踏み出したその刹那に、突然物が入れ替わったようにポーンと太い針のような物が現れ、俺の両足を貫く。

バランスを崩した俺の身体はそのまま地面に強く打ち付け、1歩も歩けなくなつた。
「そうやって全部隠し通す気かよ！ お前の事だ！ なんもかんも1人で背負い込んで犠牲になろうとしてんだろ!!」

返事は……………返つて来ない。

「まだ間に合う！ 戻つて来い！ 戻つてきて……………また俺にハンバーグを食べさせてくれよツ!! 俺だけじゃない！ 翔も！ 天ちゃんも！ 香坂さんも！ 希亜も！ みんな都を待つてる！ みんな都を信じて待つててくれるツ!!」

「頼むよツ!! 俺は都がいなきや……………何も出来ないツ!!」

「戻つて来い！ 戻つて来いツツ!! 絶対に戻つて来いツツツ!!」

「都おおおつつつつ!!」

冷たい風が吹く。

静まり返った街中の道路で、俺はまた何も出来ずに倒れていた。

今この場にいるのは……九條さんの彼氏と思わしき金持ちそうな男と俺だけ。

残りのメンバーは動けなくなった俺の心を更に折るためか、両腕には雷で出来た能力の槍を貫いて、這いずることも出来なくなっていた。

「悲しいねえ、竹内君。最後の最後まで都は裏切ったままだったね」

「……………」

「あれ黙りかい？ あらら……せつかく色々教えてあげようかと思っただのに」

「……………ぶっ殺してやる……。都の人生をめちやくちやにしやがって

……………！」

「何を言ってるんだい？ こうなることは10年以上前から決まっていたんだよ？」

コンコンと動けない俺の頭を何度も軽く蹴りながら、優越感に浸るようにその男は語り続ける。

「僕の父親は《コロナグループ》に因縁をつけていた。事情は詳しくは知らないけど、昔から僕達《近衛家》と《九條家》はとても歪な関係だった。表面上は仲良く、僕たち一族は強く恨んでいるっていうまあよくある話だよ」

「だけど僕たち近衛家が社会的地位と力を手にして来た時、向こうの方から誘いが来たんだ。九條家の皆様は僕たちをとつても信頼していたみたいだね、共にコロナグループを大きくしていかないか？　つて素敵な提案さ」

「その時点で会社の乗っ取りは計画されていた。父親は運悪く道半ばで死んじやったけれど……その心は僕がしっかりと受け継いだ。そしてせっかくなら……あの素敵なお嬢さん、都も僕の物にしようと思っただよ」

「星の数ほど女を抱いてきたけど……都はとびきり美しいね。あれだけ大きなおっぱいと。ふるんぷるんの尻、成長していくにつれ早く汚したいと何度願ったことか……」

……肩が。

「まあ僕的には？　もう今更会社や九條家をぐつちやぐちやにした所でどうでもいいんだけど……あの身体だけは使ってみたいんだよねえ……」

結局お前らのワガママで全部狂ったんだ……！

「いやあ〜……………興奮したなあ……………」

殺す……………！ コイツだけは絶対殺す……………！！

死んでも殺す……………！！ 殺しても殺す……………！！

絶対殺す、殺してやる、今すぐ殺してやる……………！！

指を全部ちぎって殺す、歯を全部ぶち折って殺す、関節全部逆折って殺す、目玉を両方潰してくり抜いて殺す、鼻も耳も削ぎ落として殺す、臓器を全部取り出して殺す。

ありとあらゆる痛みを与えて殺してやる……………！！！！

「うっわあ……………そんなに怒らないでよ、大丈夫！ まだ都は処女だから、それは暫くは奪わないから安心して？ 焦らして焦らして都の心を完全に折るトドメの為に残しとくからっ！！」

腹が立つ……………！！

やっぱり都は無理してるんだ……………！！ 隠してたんだ……………！！

俺を盾にすることは弱すぎる俺を守る為に1人で人生全部捨ててまで助けてくれるんだ……………！！

偉そうに意気込んでおいて、格好つけて助けるなんて言っておいて、俺は何も出来ない……………！！

俺が弱いから……………！！ こんな奴に都が酷い目に遭わされてるんだ……………！！

そして最後に………バチンと耳を塞ぎたくなる爆音が一瞬間こえてきたあと、何も考えられなくなつた俺は力なくその場で意識を失つた。

7人の戦士たち

《視点切り替え》

真冬の空のように冷たく凍えた風が吹く中、私たち《ヴァルハラ・ソサイエティ》は1つの豪邸に向かって歩く途中で、ある人物の姿を発見した。

四肢を無造作に固定されたような痕の先に、その四点と口からドクドクと出血している箇所を放置して、無理やり這いずるように赤黒い液体が道路にこびりついている。

とは言っても這いずったと言えるほど進むことは出来ていない。けれどその姿が力の限り振り絞った結果なのだろうと容易に想像することができた。

そんな彼を私を知る限りの知識で応急処置を施す。

「ねえ……竹内先輩、大丈夫ですか……？」

途中で蓮雫が急に顔色を変えて、近くにコンビニで簡易の医療道具を買ってくれとせがんだ理由が、今になって理解出来た。

来る途中である程度の出来事は彼女から直接聞いていたけれど……このまでとはね。

「専門の知識を持ち合わせていないからハッキリとは言えないけれど、少なくとも死んではいけないわ」

心の底から心配しているであろう天が、横で不器用なりに手伝ってくれる。

「蓮太……完全に気を失ってるよな。それくらい酷くやられたって事かよ……！！」
「ええ、意識は飛んでるわね。これだけ身体を動かしても眉一つ動かさないとところを見ると、そのダメージは壮絶でしょうね」

彼は気を失っている今でも、力強く唇をかみ締め、涙と跡を残している。

「あの子が私わたくしを呼んだ理由は……これですわね。どちらの私わたくしもこういつた争い事は嫌いです……今回ばかりは、そうも言っていられませんか」

「そうね、もう引き返せない。彼らは最早放置はもちろん、救出する対象でもない。私たちの仲間を傷つけた《罪》は………重い」

ある程度の応急処置をきっちり済ませ、最後にそつと指先で涙の跡を拭き取ると、私はゆっくりとその場を立ち上がり、彼の怪我をしている部分を目視確認して、くるりと振り返る。

「大将の事は蓮華が内側から面倒見てくれる。大将自身の治癒力を促進させながら周囲を警戒してくれてる」

「貴女は残らなくてもいいの？」

「オレはいい。確かにオレも与えられた分を返したらもつと大将は楽になるだろうけど……蓮華に任せられたからな」

ギユツと深くパーカーのフードを被り、その赤い瞳でこれからの目的地である家を睥む彼女。

この場にいる皆が抱いている感情は……重なってるみたいね。

「そこで休んでいなさい、蓮太。後のことは私たちに任せて」

不自然な程に人通りが無い道路を封鎖するように、横一列になって私たちは歩みを進める。

春風と天、蓮雫と新海くん、そして私の5人。

各々が様々な感情を胸に抱いて、あるひとつの目的のために同じ方向へと先を急ぐ。

「あの大罪人を捕らえて………相応の罰を与えるわ」

私と同じように………貴方を愛した彼女を助ける為に。

《視点切り替え》

「………来たな彼らが。どうする？ 与一」

「わざわざ僕らが出しゃばるとこじゃないでしょ、でもまあ………やられっぱなしっ

てのは癪だし、しつかりと借りた分は返すけどね。」

流石にあの状況で乱入しても、負けるのは目に見えてたからね。僕はもう《眼》を使わなきゃまずいし……出来るなら1体1の状況を作りたいところ。

でもあの獲物は取られちゃったから……

「僕らは九條さん一行を追いかけようか。どの道彼女達があの場に残ってる1人を倒しても、もう九條さん達は行ってしまったからどうしようもないだろうし」

「珍しいな、君が彼らの協力をするなんて」

「悔しいけど僕と蓮夜だけじゃあ返り討ちにあいそうだからね、なかよしこよしなんて面倒で大っ嫌いだけど……お返しのためならなんだってするさ。次はもう手を抜かない」

「殺す気で行くから」

「君が決めたことなのなら、私はそれに従うまでさ。それならひとまずは潜入の件も小休止だな、最優先で九條氏を追いかけようか」

「蓮夜も手を抜かないで全力でいくんだよ？ その隠してるアーティファクト能力を洗らないで……少しは役に立ってよね」

「善処しよう」

5月1日 都[√]

九條 都 奪還作戦、始動

《視点切り替え》

カツカツと足音を響かせながら、誰一人声を発することなく静かに怒りを押し殺している。

いえ……静かではなかったわね。

「ふん——！！ ふん——！！」

天だけが鼻息を荒くしてドシドシと力強く歩いている。

「天、腹立つ気持ちは俺も一緒だけど……ちよつとは落ち着けて」

「何言ってるのいにいに！ こんな……ちつとも落ち着けるわけないでしょ！」

「そうですわね、わたくし私も……柄にもなく少々熱くなりすぎていますわ」

「……………フン」

相変わらずまとまりの無いチームね。仲間たちを先導するリーダーとして、私が誰よりも冷静にならないと……また失う事になる。

まあ、かと言って私もどこまで堪えきれるかとは分からないのだけれど。

「早速お出迎えのようね」

完全に眠りきった闇夜の街の中、その中心に堂々と待ち伏せをするように佇んでいる女性が、妖艶な色気を醸し出しながらこちらを品定めするように見ていた。

「ええ、かなり待ったわ。せつかくあの子が倒れているのに中々貴女たちが駆けつけてくれないんだもの」

「……そうね、すぐにはバックアップしてあげられなかった。だからこそ彼は一人で挑んで……無様に敗北を喫した」

「随分と冷たいのね、貴女は竹内君のお仲間じゃなくって？」

「仲間よ」

左の瞳に熱い力を纏わせ、目の前を立ふさがる女性を《罪人》と見なし、能力の準備を始める。

それに続くように春風と天がやや大きくなった紋章ステイグマを輝かせ、戦闘準備に入る。

「肝心な時に私たちを頼ってくれない愚者の……大切な仲間」

「お前が……先輩たちをいじめたのかっ！」

「貴女が強いのは承知しています。ですので初めから全力で……！」

春風は左手を胸に構え、一瞬のチャンスを逃がすまいと最大限の警戒をして威嚇して

いる。

天はまるで銃を構えるかのように指先を突き出し、その先端に青い光を凝縮させる。

「素敵な友情ね、九條 都を取り、あの子に選ばれなかった落ちこぼれ同士で手を組むなんて……最高に可愛い」

そう言つて、敵である女性は指先からキラキラと小さく輝く粒のような光を放出させ、ふわふわと彷徨うようにゆつくりとその光を飛ばしてくる。

そしてそれが近くに飛んできた瞬間に、思わず怯んでしまうほどの閃光を放ち……

激しく衝撃を周囲に放つ。まるでそれは爆弾のようで、私たちが立つ場に、凄まじい

熱気が漂い始めた。

「……………リフレクション反射鏡」

「蓮雫……………」

「こう言うと、大将が力を貸してくれてるみたいで調子よくなるんだ」

パーカーのポケットに手を入れたまま、強く足踏みをするように彼女は蓮太の能力を使っていた。

どうやら熱を感じる程度で済んだ理由は、反射の能力を駆使して守ってくれたからみたい。

「……完全に俺空気だよな、ここにいてもただみんなの足を引つ張るだけな気もするけど……」

「……一瞬の隙を作る程度なら俺でも……」

「……敢えてこの場では野暮な事は言わないでおきましょう。力を合わせたいと願う彼の気持ちは分かるから。」

《不明な能力》の覚醒に……期待するわ。

「我ら《ヴァルハラ・ソサイエティ》一同、自由を奪われた友の為……今この時を以てここに宣戦布告するッ！」

「あら……私たちI O 5に彼らこの世界のユーザーたち、力の差は歴然よ？ 貴女たちに勝機はない。一つ可能性があるとすれば……3人の《オーバー》が無事覚醒するかだけれど、それまで生きていられるかしら？」

「……この世界？ 《オーバー》？ ……いえ、今はそんなこと気にしている暇はないわね。」

「私たちは奪うために、救うためにやってきた。戦いの覚悟は出来ている。」

「……望むところよ」

《視点切り替え》

「ん……………」

ヒリヒリと感じる痛みに刺激され、無理矢理起こされるように意識を取り戻す。すると俺は建物の陰に寄り添うように寝かされていた。

「……………あれ？ 手当されてる……………」

倒れた記憶のある場所から少し移動しており、きつちりと丁寧に施された応急処置。効果は流石に期待できないが……………何故か異常な速度で身体の傷が癒えている。

その理由……………心当たりは一つある。だからこそ俺は咄嗟に能力を使用して彼女を出現させた。

「よう……………目が覚めたかよ」

現れた彼女は力なく俺の目の前に座り込んでおり、素で表したその身体には四肢に穴が空くような傷が残っており、俺との類似点を感じさせた。

「ルナ……………お前……………」

「アンタに魂の傷を治して貰えるんだ、だったらその逆もできて当然だろ？」

「そうじゃねえよ！ 何やってんだお前……………」

「お互いに細胞を活性化させる力があるのなら、オレの方からアンタに渡せばいい。少なくともアンタが前提で必要になるオレよりも、《奇跡》を持つアンタなら、この喧嘩……………勝機はある」

……勝機か。

敵は能力不明の人物多数、《雷》使いに、《爆発》使い、下手をすれば《石化》もいる。能力だけでも手に負えないのに兵力差もある。

こんな状況で……

「諦めなくなる気持ちは……オレにも分かるよ。実際オレもあの時諦めてたからな。だけれど、勝負つてのは最後まで何が起こるのかわかんねえんだ。だからこそオレは今アンの幻体としていられてる」

「アイツにとつて、アイツらにとつてアンは希望なんだ。だからこれが最後でもいい、足掻いてみようぜ？ 最後まで惨めに、無様に、泥まみれになって……都を助けようぜ？ アンは都が好きなんだろ？」

……好き？

好きなんて考えたこと無かった。誰かと付き合いたいだなんて思ってもなかった。

でも、彼女は最初から特別だったし、俺に持っていない物を持つてたから、その心に惹かれていったんだと思った。

友達……仲間……友情……確かにどれも合つててどれも違う。

なんでどうしても取り戻したいのか。

なんでこんなにも必死になっているのか。

なんであの彼氏のセリフにあそこまでイラついたのか。

……………そんなこと決まってるんだろ。考えなかったんじゃない。考えないようにしていたんだ。

俺は……………都を——

「ああ……………好きだ」

愛してる。

「フツ、だったら立てよ、それで全部終わったらオレを治してくれよな」

「……………そうだな。無事に都を奪い返して、アイツをぶっ飛ばしたらすぐに治すよ」

今なら魂が感じてる。本当に微力でちゃんと扱えるかは自信が無いけれど……………でもそこに確かに感じる。

俺の4つ目の力……………、きつとこれが奇跡、《オーバーフロー》。

バイクは……………アレか。

「じゃあな、ルナ。助けてくれてありがとう、後はゆっくり休んでてくれ」

そう言っただけで能力を解除していると……………そのギリギリで軽く背中を押されて最初の一步を踏み出さされた。

「信じてるぜ、オレの………た、た……、大将……」

「恥ずかしいなこの呼び方……！」

「………ああ、任せろ」

1人の犠牲か5人の犠牲か……

今のままじゃダメだ。

無鉄砲に挑むだけじゃ全く歯が立たない。気合いや根性だけじゃ結果は何も変わらない。
ない。

なら俺に必要なのはなんだ？ 今すぐに強くなることなんて出来ない。どんな劇薬を使ってもドーピングなんてものも出来ない。新たな力を宿すことだつてできない。

今俺ができることで精一杯を捻り出すんだ。

力一杯に戦う方法を……

《オーバーフロー》……奇跡と呼ばれる理由は、ついさつき理解出来た。確かに奇跡だ。もし俺が完璧に使いこなせればまさに文字通りの最強と呼べるだろう。

……あれなら、いけるか？

「技名を考えないとな……ギア……いやダメだ。火事場の……これもダメだな。うーん……」

いや……待てよ？ 多分この能力は俺自身にだけ乗せることが出来るエンハンス、要

は範囲が異常に狭いバフみたいなものだ。もし成功したのなら……レナやルナにも同じことができるんじゃない？

つつてもまずはやってみないとわかんねえよな。

なんて考えていたその時、ピコンとRINGに1件の通知が届いてきた。その内容は高峰からの位置情報の知らせ、どうやら西の方にある海沿いの港町の外れにいた。よかった。

何故いきなりこんなものを送ってきたのかを疑問に思っていると、ポンポンと続けて文章が送られる。

『訳あって今は秘密裏に君の友人を追っている。私の位置は把握出来たか？ その辺に一隻の豪華客船が停泊している、九條氏はその船に乗り込み、海域を渡り私たちの知らない未知の大地へ向かうそうだ』

……え？　なんでアイツはそんなことしてるんだ？　なんでアイツはそんな所にいるんだ？

『先回りには成功したが、彼女が船に乗り込むのは時間の問題だろう。これが彼女を救出できる最後の手段だと思え。私たちが可能な限りの足止めをする、早急に追いかける』

『以上』

おいおい……なんなんだよ次から次へと……!

だったら都ん家に行つたところで何も意味ねえじゃねえかよ、しかも足止めするつてどこでするんだよ、あの情報付近でつてことか?

だつたらすぐにでも切りかえしてつて……あれは?

ぶつ飛ばしていたバイクを無理やり止め、すぐさま現場に駆けつける。

「おい……どうなつたんだよこれ……!?!」

そこにいたのは《爆発》能力を扱う異常な強さを持つた不思議な組織名を名乗るあの女。

そして苦い顔をして地面に片膝をつき、または這いつくばり、それでも諦めずにあの女を倒そうと戦う5人の仲間たち。

状況の悲惨さは火を見るより明らかだった。

「あら……随分と遅かつたわね。もう彼女たち死にかけてるわよ?」

余裕綽々といった感じであちらこちらに埃が舞い上がる戦場で、自販機で買えるようなペットボトルのお茶を飲む女。

「誰が死にかけてるつて!」

その言葉に反発するように翔が乱暴にその辺にあつた鋭利なシャッターの切れ端を投げつけるが……あの女は能力を使うことなく、素手でそれを掴んで投げ捨てる。

「ろくに私に対抗できない落ちこぼれ君よ」

チラホラとみんなを確認すると、レナ以外のメンバーは必ずどこかを怪我して流血しており、もう打つ手が無いように思えた。

特にそれを感じたのは、香坂さんが紋章を浮かばせていないこと。つまりは能力を発動するとまずい結果に傾いてしまう事を意識しているんだろう。

つまりは5人の内実質能力者は3人、しかも攻撃性能があるのは希亜だけだ。他2人は《反射》と《消滅》、しかし反射は敵の攻撃に依存されるし、消滅は敵とはいえ人間に使うわけにはいかない。

しかし希亜もバランスが取れない力だ、一瞬の隙を突くような繊細な攻撃は不可能だし、溜め動作も必要、しかも本人は無防備になる。

そして爆発は反射不可能な攻撃だった。仮に消滅させても相手の爆発する攻撃の玉は1発だけじゃない。身体能力でも歴然の差がある。むしろよくこの被害で抑えたと褒めるべきだろう。

……正直この5人じゃあの女に勝てる可能性は………無いとは言わない、けれど例えようがないほどに低い、低すぎる………！

けれどチンたらしてたら都が俺たちの手の届かない所へ行ってしまう、そうなったらもう俺たちじゃ止められない！

もちろん俺がこの場に残ってみんなと戦ったところで勝てる可能性はほんの少し上がる程度だ、ほぼほぼ負けてしまうだろう。

でも……俺がこの場を見捨てて都を追っかけていたら、この5人を見殺しにするようなものだ、都が仮に助かつてもそれじゃダメなんだ！

「グダグダ迷つてんじやねえよ大将ツ!!」

「レナ……でもお前……ツ！」

「どの道誰かが先に行かなきゃ都は止まらねえ！ この中の誰が傷ついても、誰が死んでも、振り返らずに真っ直ぐ進み切るやつが居なきゃ都は助けられねえ！」

「相手が強いのはみんなが知ってる！ 死と隣り合わせのこの戦いは、全員が覚悟して挑んできたんだ！ そりや最高の結果を求めてはいるが……もう甘えたこと言つてられる場合じゃねえだろ！」

「オレたちを捨ててでも都を連れ戻せよツ!! 大将ツ!!」

なに……言つてんだよお前……!!

俺にお前らを捨てろつて言うのかよ……!!

「蓮太……先へ行きなさい」

「希亜……」

「少なくとも私たちが信じていると言いきれるのなら、この場にいる全員を置いて先へ

急ぐべき。負けるつもりも、死ぬつもりもないけれど……今貴方が止まれば全てが間に合わなくなる。蓮雫の言葉から察するに九條さんはここにはいないのでしょうか？」

「で………できるかよ！ お前らを見捨てるなんて……！」

「この世の理は等価交換。何かを得るためには何かを犠牲にしなくちゃいけない。だから行つて。九條さんを救えるのは貴方だけ」

なんでそんなこと言うんだよ………！

なんでもう生きること諦めてるんだよ………！ 本気でそうするつもりなのかよっ

!!!

「私も貴方が好きだから、私は貴方の幸せを守りたい。だから行きなさい。全てを踏み台にして、全てを乗り越えて、私たちの……彼女の……貴方自身の未来を掴む為に」

………！

なんで………なんで………！

俺はどうしたらいい………?! 高峰がアイツらを止めてくれるつてのにも限界はある、過信しすぎると本当に手遅れになっちゃう！

だからつて先を急いだら………大切な仲間がほぼ確実にいなくなってしまう………！

どうしたらいい！ どうしたらいい!!

俺は………！ 俺は………！

5月1日 都BAD√

必ずまた全員で

……踏みこじるな。彼女たちの覚悟を、想いを、決意を。

疑うな……仲間を、友を。

信じろ、みんなを。

きつと追いついてくれる。ここで別れてもきつとまた会える。またみんなが集まる
ことが出来る。

必ず負けると決まったわけじゃない。歯車がガツチリ合えばまだ結果は分からない
はず。

それに、まだまだやり残したことは沢山あるんだ、大人数でやってみたいことなんて
腐るほどある。このメンバーだからやりたいことだって山ほどある。

だからこそ、都を欠かす訳には行かない。

「……………行ってくる」

それが俺の出した答えだった。俺の決断だった。

「おう、さっさと行って都を連れ戻してこいよ」

「ああ……！」

急いでバイクの置いていた方へとダッシュで駆け寄り、大きく股がってエンジンを吹かす。

そして出発する準備が整った時に、ふと俺の方へとヘアピンが一つだけ飛んできた。すかさずそれを掴み取る、この黒いヘアピンは………希亜が私服姿の時に付けてるやつ……？

「希亜……これ……」

「あげた訳じゃないから、私たちが駆けつけるまでの間だけ持つていて欲しいだけ」

それは彼女なりの覚悟、必ず生きてまた会おうと言葉のない約束。

決して振り返ることなくただ敵を見つめるその後ろ姿は、これから俺のすべきことを教えるように小さいながらも頼れるモノだった。

《心配するな》と語りかけているようにも感じる。

「必ず取りに來いよ！ちゃんと無事に全部終わらせて……追いついてこいッ！」

俺のその叫びに近い約束を受け入れてくれた希亜は、後ろ姿のままに一度だけ手を振って返してくれた。

それから香坂さんたちの方へを顔を向けると、きつとエデンモードに切り替わって

るのだろう香坂さんが、さっきまでの辛そうな顔とは打って変わって、余裕を感じさせるオーラではちくりとウインクしてくれる。

その横では新海兄妹がそれぞれ片手を突き出して親指を立て、ナイスガйнаポーズで笑ってくれる。

そんな仲間たちの姿を見て、邪魔だった前髪を借りているヘアピンで固め、指揮を高めるための決意を叫んだ。

「また後で会うぞッ！ 《ヴァルハラ・ソサイエティ》全員でッ！」

「「おうっ！」「」

「ええっ！」

「はいっ！」

心に襲いかかる不安の闇を振り払うように声を出し、俺はみんなを信じてバイクを走らせる。

「絶対……負けるもんか………ッ！」

絶対……絶対………！

《視点切り替え》

「それで……俺たちはいつ《ヴァルハラ・ソサイエティ》に入ったんだ？」

蓮太の姿が見えなくなった頃、そう言つて新海くんが歯を食いしばりながらも立ち上がる。

「何言つてんのにいやん、そんなのあの時に決まつてんじゃん」

それによくように天も軽口を叩きながら震える足を無理やり抑えて起き上がる。

「あら？ アレは《リグ・ヴェーダ》と《ヴァルハラ・ソサイエティ》そして《ニューナインズブルー・シブリングス》の同盟ではなくて？」

そしてその言葉に被さるように会話を転がし、春風もゆっくりと立ち上がった。

「なんスカそれ……俺たちのチーム名だけ雑すぎじゃないですかね……」

「なんでもいいじゃんそんなこと、要はみんな一緒つてことでしょ！」

私も負けないようにしなきゃ。

「そうね、サブリーダーにああ言われてはリーダーたる者が応えない訳にはいかないわ」

さつきまでは自分勝手に行動するちつとも仲間頼らない蓮太にムカついていたけれど、今信用してくれたから……………許す。

「大将つてサブリーダーだったんだな」

「私の右腕……………と言うべきね。まあ……………もうすぐそうとは呼べなくなるでしょうけれど」

「そうだな、大将は都を選んだ。いや……………こんな言い方はずるいな。大将は都を好きになった。それが嘘や冗談じゃないつてのはオレが痛いほどわかる」

「……………偶然ね。私も痛感しているわ」

まさかここまでだとは思っていなかった。彼が九條さんを追いかけて行った時、それを願っていたはずなのに……………ほんの少しだけ……………

「最後のお別れは済んだかしら？」

「お別れ？ そんなつもりは毛頭ないわ。最後の言葉なら今から言うのよ」

「それは……………どんな？」

左腕を高く上げ、体を少し捻らせるのと同時に目元まで振り下ろし、黒い服を激しく動かしてポーズをとる。

人差し指と中指の間から敵を覗き見るようにして、ジ・オーダーの力を解放する。

「罪人である貴女に問う、さあ……………貴女の罪を数えなさい」

「どこまでも本気なのかぶさげているのか分からない子……いいわ、そろそろ遊んでる時間は無いし、本当に終わらせてあげる」

そうして敵である彼女は、人差し指を私たちに向けて、リズムを刻みながら順番に指差していく。

「だ・れ・に・し・よ・う・か・な」

そうして最後に指を差されたとある人物に怪しい笑みを浮かべると、爆発のエネルギーを利用して、その人物へと急接近し始めた。

——ツ!

「危ないッ! 春風ッ!」

爆風に紛れて、春風の正面までほんの2秒ほどの速度でその敵が移動すると、更に小さな爆発を巧みに扱い、遠心力を加えた大振りの蹴りを当てる体制へと変化する。

ダメ……!! 春風じゃ躲せない……ツ!

間に合つて……!! ジ・オーダー!

「——ツ!?!」

「まずは1人目ね、さよなら」

魂の叫び

風を切り、暴走に近い形でどんどんバイクを走らせていく。正直こんなに速度を出したのは初めてだ。

最低限のルールくらいは守っちゃいるが……今はそれどころじゃない。そんなものを守ってチンたらしていたら全てがパーだ。

そしてしばらくの間真っ直ぐに目的の場所へと向かっていると、その道中で複数人の人影が暴れているのが見えてくる。

「……………高峰と深沢っ」

それによく見ると様々な異能力の跡や音が確認できる。水のようなものが巻き散らかされていたり、当然雷も、それに不思議な形をしたポンプのようなダムもあった。

それは正面からはポツコリと凹んでいるだけだが、角度を変えて反対側を見ると、1面が無くなってしているほどの大穴が空いており、まるで衝撃を貫通させたような跡まであった。

「どれだけ激しい戦いしたらここまでの被害が出るんだろう。」

コイツらにも協力してやりたいが……それをしてしまえばさっきの俺の決断は……！

と勢いを殺さずにその乱闘の中を突き抜けようと加速していった時、その道を開けるように高峰が素早い体術で戦っている相手を蹴散らして、戦場に隙間ができる。

あまりの速さに会話をすることは出来なかったが、「行け」と言わんばかりに高峰は親指をクイツと奥へと向けて、ニヒルな笑みを浮かべている。

………ありがとう。

そうして俺は再び仲間を置き去りにして都が連れ去られている客船、フェリーまで突っ切って行った。

そしてとうとうたどり着く、幾多の仲間を信じて、数々の心を踏み台にして……やつとたどり着いた。

しかし岸からは中途半端に船が離れており、タラップを使つたとしてもとてもじゃないが歩いて乗り込めるような距離じゃない。

いや……勢いをつけて俺の能力を使つて飛台を作れば……つて待てよ？ これつてあの能力を使ういい機会じゃないか？

でもまずは……やっぱ伝えないとな。

「ス……」

幸いここには民家はない、どれだけ大きな声で叫ぼうと誰にも迷惑はかからないだろう。

だからこそ……！

「みーやーこ————ツツツ!!! 助けに来たぞオオ————ツツツ!!!」

あの場で乱闘に参戦していたのはアイツら含めて8人程度だったはず、だったらあの時のメンバーを逆算して……残るは都と名前は……悠……！

来たことを知らせる為に全力の大声で叫ぶと、微量に揺れる船のデッキから2人の人影が姿を現した。

その2人はもちろん——

「凄いなね君のお友達は、こんな所まで追いかけてくるなんて……凄まじい執念だよ」
「……………ええ」

都と悠。

一方的に都に腕を回して、高みの見物でもするかのようには俺を見下ろしている。
相変わらずムカつく野郎だ。

「いい加減に諦めたまえッ！　　都はもう君の顔なんか見たくもないんだ！　だからわざわざ白巳津川から離れる為にこの船を用意したんだぞ！　何時まで僕の彼女を苦しませるつもりなんだッ!!」

「その苦しみから救う為にやってきたんだよッ!!」

あの男の腹の中は十分すぎるほど理解出来た。どれほど腐っているかも、どれほど狂っているかも。

だからこそ俺はあんなやつからは助けたいと思った。これから先の未来、都がどんな人を好きになっても構わない。俺は都が誰が好きかを知らないけれど、以前言っていた好きな人と無事に結ばれて本当の幸せを味わって欲しいから……助けたい。

絶対に、今お前の隣にいるソイツとだけは幸せになれないから。

「もうやめてっ!!」

都の少しガラガラになった叫び声が響いてくる。

何度、そうやって叫んだんだ？ 何を何度も叫んだんだ？ あの時の俺に向かつて放った言葉や、今の言葉だけじゃそこまで喉を痛め付けることは無かったはずだ。

……やっぱり、辛いんだろ？

「どうして……そこまでしつこく追ってくるのツ!? 私はもう貴方の事なんか忘れたいのにッ！ 二度と現れないでと伝えたでしょうッ!?」

「なんで……何度も何度も私の前に現れるの………!!」

強く唇をかみ締めて、祈るような目つきで俺を見る都。

本当に、何かを我慢しているのは丸わかりだった。

そんなの決まってるんだろ………!! そんな男と一緒にいてもお前は幸せにはなれないからだ！

一生そうやって自分の心を殺して生きていくつもりのお前をここで見放したら、お前はこの先ずっと泣き続ける！

そんなの………そんなの………!!

「好きな人には笑ってほしいじゃねえかつ!!」

「——ッ」

その言葉を彼女が聞いた時、より強く唇をかみ締め、拳をキュツと握り、強ばった顔で真つ直ぐに俺を見つめてきた。

「この先お前が何度俺から逃げようとも、何度俺を拒絶しようとも、何度でも何度でもお前を奪いに行くッ！」

「何年かかろうが何十年かかろうが、ジジイになっても歩けなくなっても、死ぬまでお前を追いかけ続けてやるッ！」

「お前が心の底から笑顔になれるその日まで、俺は絶対にお前に見捨てないぞッ!! わかったか馬鹿野郎ッ!!」

だから言ってくれ。

都の本心を。

都の想いを。

もう我慢するな、お前が何を背負っているかは分からないけれど、願ってもいいだろう？

俺達も無事で、背負っているものも無事で、自分の幸せも感じられる……そんな明る

い未来も。

ごく普通の誰もが夢見る幸せを。

「後は……お前次第だ、都ッ!! 俺はまだお前の本心を聞いてねえッ!!」

顔を俯かせ、プルプルと震える体を両手で支えて必死に堪える都。今はきつと戦ってるんだ。自分自身の心と、背負った《何か》と戦う心を。

そんな都からはぼろぼろと涙がこぼれ落ちているのが見える。

後……………もう一押し……………ッ!

「都ッ!!」

すぐにでも駆け出してやる。お前がそれを望んでくれたのなら、俺は、俺は……………

!

だから聞かせてくれ、都!

俺は聞き逃さなかった。ひたすらに彼女を信じて、追いかけてやるとそれが聞けたんだ。聞き逃すはずがない。

大丈夫だ、安心しろ。どんな結果になっても、どんな事が敵になっても絶対に見捨てないから。絶対に守り通すから。

絶対に……救ってやるから。

「助けて………!! 蓮太くん………ッ!」

……。

「やっど………言ってくれたな」

簡単にかき消されそうなほどに、か細い声だったけど……ちやんと俺の耳には届いたぞ。

「待ってろ、すぐに行く!!」

蓮太VS悠

「ふんっ!!」

バイクを岸に放置し、足場のない空中に身を投げるように勢いよく飛び出す。もちろんこのままだと海の中へとフルダイブしてしまい、救出どころの話ではなくなるだろう。

だが、俺は足場を作れる。能力を発動して鏡の足場を作り、それを蹴ってはまた1枚、蹴ってはまた1枚と無理やり海の上を渡っていき、都たちと同じデッキへと足をつけた。

「ふう……………たどり着けた」

《オーバーフロー》を使わずにここまでれたのはでかかったな。空中という身動きのしづらい場所で悠が攻撃してこなかったってことは、遠距離攻撃の類は持ち合わせていないだろう。

少し助かった。

「や、やめろ! 僕の都に何をすするつもりだ!」

「そのくせえ演技はやめろよ。クソ野郎」

コンコンと靴擦れを直しながら、戦うべき敵を睨みつける。

「……………」

「それにさつき言っただろ、何するもクソもあるか、俺は都の《自由》を奪い返しに来た」
俺が知ってる中で、この男の能力は2つ。片方は知らないけど、もう片方は読心能力

……

さて…………どう攻めるか。

「クツクツクツ…………はははっ……………」

まずはどうやってぶん殴ってやろうかを考えていると、あの男は何かには耐えきれなくなつたように急に笑い出す。

「まるで姫を助ける勇者様、主人公だねえ…………竹内くん…………」

「あ？ 勇者？」

「その勇敢な心もどこまで抱くことが出来るかな？」

そして不意にあの男は俺を見ると、その瞳の周辺に青く光る紋章が浮かび上がる。

ツ!? これって敵だったあの時にルナが使ってた能力じゃあ……………!?

そう気がついた時にはもう遅く、俺の身体はたちまち痺れたように動かなくなり、自由を失った。

「これ……………は……………ッ!!」

「ん〜? あれえ? 中々能力が進行しないな……………」

だが、その攻略法は心得ている。

本当に良かったよ……………あの時に一方的な殺し合いを強制されてさ!

「リフレクシヨン
反射鏡ッ!」

弱点は視線、鏡の能力を使えば視界を遮ると同時に相手は自分自身を見ることになる!

「……………チツ。やっぱり簡単には殺せないか……………反射も厄介だけど何故お前には進行が遅いんだ……………?」

「馬鹿みたいに能力を使えよ、全部跳ね返してやるから」

進行? なんの事だ? もしかして、あの能力って動けなくなるだけじゃ終わらないのか?

「まあいいや、とにかく邪魔だよ都。退け」

そう言つて男は都の胸に手のひらを当てると、なにかの能力を発動したようでほんの少しだけ手のひらが光ったように見える。

そしてその光が収まるや否や、デツキの奥にある鉄製の壁に向かって都は急速に飛んでいき、ビタンッと張り付くようにぶつかってしまった。

「うつ……………」

ガンッ！ と激しい音が響き渡る。彼女は必死に壁から身体を離そうと力を入れているが…………ゆつくりと壁から少し手が離れたかと思えば、また勢いよく壁に張り付く。

「てめえ……………」

きつと磁力を操る能力なんだろう。それは簡単に察することが出来たんだが…………雑に扱う都への対応にどンドン怒りが増していく。

「そう言えばさつき言ってたよね？ ええーつと…………なんだっけ？ 「ぶっ殺す」だっけ？」

…………まだ使うつもりは無かったけど我慢ならねえ。一瞬、一瞬だけアレを使ってやる…………ツ！

「殺す殺すって大声で言うもんじゃないよ、弱く醜い奴ほどそうやって馬鹿騒ぎするもんさ。」

「身体強化……………」
フィジカルブースト

四つ目の能力を解放し、脳の無意識のリミッターを無理やり解除する。するとその途端に激しい頭痛と耳鳴りが俺を襲い、一瞬意識がぐらつくが……………力の限りに足場を蹴り、今までに感じたことの無い速度で敵の男に飛びかかった。

「第一、ろくな力も持っていない男が僕を…………ぶへっ?!?!」

「ぶつつつつつとベッツ!!!」

明らかに物理法則を無視した現象を巻き起こし、力の限りに男の顔をぶん殴る。

40%の力でぶん殴った拳はピキピキと悲鳴の音を上げて、それでもその衝撃を逃がすまいと男の顔を突き抜けるように殴り飛ばした。

殴り飛ばされた男はそこら中にあるテーブルや椅子等の物を巻き込みながらも激しく転がり進んでいき、やがて大きな箱が山積みになってある場所へ勢いよく衝突する。

そんなアイツを確認してその場に着地を済ませると、その瞬間に脳が焼けるように熱を帯び、アイツを殴った左拳が真っ赤に茹でられたタコのように充血し腫れていた。

「うあつ……………ぐぐつ……………!!」

ジンジンするなんてレベルじゃない……………! 何だこの痛み……………! や、やべえ

……………! ボウリングの玉を手の上に落としてみたみてえにほぼ感覚がねえ!

骨でも折れたか……………!?

「はあ……………! はあ……………! 《オーバーフロー》……………欠片ほどの力でこれかよ……………!」

コイツの奇跡の力つてのは、要するに《限界の枷を壊す力》。今のは俺の人体の出すことの出来るありとあらゆる力を無理やり解放させた結果、ああなったんだ。

人体が出せる力の限界はせいぜい2〜30%程度と言われている。最も高い力を故意に得られたのは約30%だ。俺の能力はその限界の上限を壊して更なる《進化》を強

制させる力。

まさに文字通りの《オーバーフロー》。ただその限界を超えた力に身体は対応出来ないようで、トレーニングをして少しずつ慣らした訳でもない俺の骨や筋肉は、その急激な一瞬の成長に耐えられなかったようだ。

「……そう簡単に扱うもんじゃねえな」

肉体の強制進化なんてやっぱり思いついても実践しなけりや良かった。もうこの戦いで左腕は使えなさそうだ。

それでも、この一撃であの男を倒せたら万々歳なんだが……………

なんて考えていると、アイツが飛んで行った方向から物がガラガラと動いて落ちる音が聞こえてくる。

やっぱそう上手くはいかないよなあ……

ミシミシと痛む腕を抑えながらその場を立ち上がり、改めて戦闘態勢を整える。

「痛いなあ……もう……ちよつと油断したらこれだよ」

「あれだけの力でぶん殴ってよくそんなにケロッとしてられるな……」

こっちはもう《オーバーフロー》は使いたくないつてのによ。

「簡単な話だよ、殴られた瞬間に身体をひねって衝撃を逃がしたんだ。ダメージは最小限に抑えてある」

こいつも喧嘩慣れしてそうだな、咄嗟にそんな行動が出来るなんてよほど殴られ慣れていないとできない芸当だぞ。

「そして君にはもう僕を殺すチャンスはやってこない」

「吠えてろ……ッ！」

余裕をぶっこいている男に向かって走り出し、すぐさま離れていた距離を詰める。

おそらく磁気能力で拘束されている都を本当は助けてやりたいが……そんなことをしていたらコイツがどんな事をするか分かったもんじやない。

だからまずやるべき事はこの男をぶっ倒す！

そして十分に近づいてから、ジャンプして右脚で相手の顔を蹴ろうとする。その瞬間

「右脚の蹴り」

「——ッ!？」

船から落ちるように蹴り飛ばしてやろうと足を振るうと同時に、いや蹴る直前にまるでそこに攻撃が来ることが分かっていたかのように躲される。

「ふむ………左足のソバットから右腕のストレート」

だったら最大の弱点となる攻撃を躲した瞬間に左脚の蹴りで怯ませたあとに右腕でぶん殴ってやる！

つて……………え？

続けて俺が繰り出した攻撃もスカスカと空振りが続き、相手に一切のダメージを与えられない。

それどころかなんで……!?

「なんで俺の攻撃が当たらないんだ？　と言いたいのか？」

なんで俺の攻撃が当たらないんだ？

——ツ!?

「ふふっ！　はははっ!!　そもそもだよ？　あんなに強力な能力を持っているゴミたちをどうやってコマにしたのかなんて考えたりしなかつた？」

「《電気》に《互換》に《爆破》に《水》あと……《衝撃》もいたかな？　これだけの力がありながらも何故みんな僕に逆らわないのか……それは金と更なる力だよ」

「対等な立場を演出するために金を使う。そしていくら強力な攻撃があっても僕には届かないという現実！　わかりやすいように説明しようか？　君の攻撃は僕にはもう二度と当たらないよ」

……悔しいが反論できない。事実として初撃以降は全ての攻撃を綺麗に避けられている。

しかも俺が攻撃すると判断したのと同時に読まれている。

クツソ……まるで《覇気》だな。あーあ、俺も体がゴムならなあ……ニツカニカに笑ってぶん殴ってやるのに。

つって、ないものねだりしてもしょうがない。だったら仕方ねえ……《オーバーフロー》を使ってまた初撃の時みたい……

「《オーバーフロー》？　それが最初のやつかい？」

また俺の頭の中を……

……ん？

…………！　そっか！

え？　待てよ……！？　それじゃあコレって………どうやって勝てばいいんだ！？

“わからない”

「はあ……はあ………ッ！」

「随分辛そうだね、竹内くん。大丈夫かい？」

そう言つて敵であるこの男は疲労のあまりに片膝を着いてしまつてゐる俺に向かつて手を差し伸べる。

「ふざけん……ッ！」

明らかなその挑発を振り払うようにすかさず拳を振り上げる。が……

「はい残念♪ 当たらないよ〜」

と遊ばれるようにいなされ、俺の攻撃が透かされるのと同時にゴコゴコと殴り蹴られる。

もう何度こうして一方的にやられただろう。何度俺は負け続けるのだろう。

コイツには俺の心理を読まれている以上は行動の全てに対応されて、完璧な防御で弄ばれ続ける。

「散々格好つけてこれかい？ 俺が奪うだの、守るだの、救うだの………そう言うことは

ちゃんと力を持つてから言わなきゃ」

俺がこんなに疲弊してしまっている理由は分かりきっている。明らかに能力の使いすぎなんだ。

爆破能力者の女との戦いを皮切りに連戦に次ぐ連戦。途中で休憩はあつたにしろとうに俺の限界は超えていた。

レナやルナをほぼ常時出現させていて、身体も心もボロボロにされて、やっと手にしたチャンスなのに……………

俺はまた掴めない。

目の前で誰よりも大切な人が助けを求めてくれたのに、どんな物よりもかけがえのない人が涙を流していたのに、力が足りない……………!

こうして倒れている間にもレナがどんどん能力を使って……………?

あ、あれ……………?

レナの気配が……………消えてる……………?

いや……………消えていると勘違いしてしまうほどに弱まっているんだ。そりやそうか、主である俺がこうなんだから……………

「反論する力も残ってないのか、やれやれ……………本当に無駄な時間を過ごした」

「ぐふっ!」

動けない俺に追い打ちをかけるように顔面にしこたま蹴りを入れる悠。それは1度のみならず、に転がる俺に追いつくともう一度、そしてまた追いかけてもう一度とサッカーボールのように何度も何度も蹴りつける。

「もう能力も使う気すら起きないよ」

「かはっ……ッ！」

何度も。

「力も価値も地位もない庶民が手を出していい山じゃないんだ」

「ぐっほっ……!!」

何度も。

「弱い奴は何も変えられない」

「ぐっふっ……!!」

何度も。

「君は誰一人救えない」

「ぐっ……!!」

最後にとびきり大きく振りかぶった脚で強く蹴り飛ばされ、船のデッキのギリギリまで身体が移動してしまう。

あとほんの少しでもズラされれば海へ落ちてしまうほどに。

そしてそんな俺にトドメを刺そうとテクテク歩いてくる男の頭上を、何かの人影が飛んでくる。

それは《爆音》と共にだった。

「マスター、プランD及び緊急処置である反逆者一同の処理、A地区内は終了致しました」

慣れた動きで能力を操り、あの男の隣に立つ人は……………あの女。

「うん、ご苦労さま！ 何か収穫でもあったかい？」

「はい、彼女が所有していた能力である新たな《アーティファクト》を糧とすることが……………は？」

「へえ？ どんなの？ ちよつと使つて見てよ」

「そうですね……………では、都様に」

待て…………、お前はレナたちと戦つてたんじやないのかよ……………！ なんで今この場にいるんだ……………!?!

そ、そんな……………！ だつて……………！

動揺する俺の心とは無関係に、あの爆破女は背中・に・紋章を・浮かばせ、都に向かつて能力を発動させる。すると壁に張り付くように身体を固定されていた都は、力を失つたように簡単にその壁から離れることに成功した。

「へえ……………僕の能力が消滅した。付与した《磁気》が完全に消えてる」

「どうやら指定したモノ、及びその周辺の任意の存在を操る能力ですね」

おい……………！ それって……………！！

「天……………ちゃん……………」

間違いない、それは天ちゃんが宿していたアーティファクト能力だ。指定したモノの《存在感》を操作する力。

「あら？ 貴方……………まだ生きてたの？」

カツカツとヒールの音を鳴らして俺に迫り来る女。軽く血がこびりついているその姿に嫌な予想を連想させられながら……………それが間違いであることを確認するために質問する。

「お、おま……………え……………！ 天ちゃんに何した……………！！」

「天……………天……………、ああ！ この能力の元所持者のあの子ね。その質問に答える必要はあるかしら？ 私がこの能力の現契約者という事実が全てを物語っていると思うのだけれど？」

……………ツ！！！！

そ、そんな……………！ じゃあ……………あの2人は……………！

「……………香坂さんはどうした……………！ レナはどうした……………ツ!?」

「香坂…………？」

「残りの2人はどうしたって聞いてんだッ!!!」

不思議そうな顔をする女に、力の限りに怒鳴りつける。

もう……………何が何だか分からなくなってきた。

「可哀想…………心配してあげているのは3人だけなのね。なるほど……………結構便利ね、

この能力」

「いいから答えろッ!!!」

「だから、答えなくても私がこの場にいる時点でわかるでしょう?」

……………そんな、そんな……………!!

まさかみんな……………もう……………!

「それと私からも一つだけ質問……………貴方の前髪に付けているその髪留め、一体誰の

かしら?」

……………

考えるよりも先に、俺は血だらけの震える腕を額に持っていき、言われた箇所にある
いつの間にか付けていたヘアピンを手に取る。

いざそれを手に取って疑問に思った。そもそもそれをつけていたこと自体俺が知ら
なかったのと。

「なんだ……これ……」
質問の答えが分からなかったことに。

失ったものは

いくら考えてもわからない。手にしたヘアピンに関する疑問が一切わからない。

なぜ俺がこんなものを持っているのか。そもそも俺は何に対して疑問を抱いているのか。

でも俺の身体はそれを離そうとはしない。別に俺のものでもないしこのヘアピンがどうなるうが知ったこつちやないんだが……………何故か離れたがらない。

「……………」

つて何を考えてるんだこんな時に……………今にも殺される寸前だつてのに物思いに耽っている場合じゃないだろ……………！

今重要なのは香坂さんと天ちゃんとなレナの安否とどうやって都を助けるかだ。

悔しいけど……………こいつらを倒す力は今の俺には無い。まずはみんな助けて生き延びるのが重要なんだ。

「ねえいい加減どいてよケール。その男には僕がとどめを刺すから」

「はこ」

指示通り、人形のように命令に従うあの女は最後に俺に不敵な笑みを浮かべると何も言わずにすんなりと道を開ける。

そしてコツコツとゆっくり歩いてくるあの男。

ソイツは乱暴に俺の髪を鷲掴みにし、自分の目線と同じ高さまで持ち上げると、冷めた目つきで俺を見下してくる。

「ねえどんな気持ち？ 守りたいものを何一つ守れないで完膚なきまでにズタボロにされた気分って」

もうこいつは能力すらも使っていない。

「まだ……俺は負けてねえ……」

「……………あ？」

「まだ諦めねえ……！ 都を助けて……みんなも助けて……《当たり前前の日常》を取り戻してみせる……！」

そんな俺の言葉にとうとうコイツは怒りの限界を迎えたようだった。

「だから言ってるでしょ、君じゃ何も変えれない。そういう理想ばかり追いかけて続けるバカはその辺の子供と何も変わらない」

「自分の非力さを理解しないままにあれがいいこれがいいと夢を見続ける。なれもしない目標を口にして僕ら大人から笑われるんだ」

「ムカつくんだよ、君みたいな《資格》のない平凡な庶民を見ているとね。自分の立場も理解していないゴミが猿のように騒いでいるのを肌で感じると……………」

片手で俺の髪を掴んだまま、この男はもう片方の腕を構えて、親指を立てる。

「こうしてひねり潰したくなる……………」

そしてその親指を俺の左眼に深く挿し込んだ。

「ぐああっ!!!」

一切の躊躇いなく押しつぶされたその左眼は、瞬く間にどンドン頭の奥へと押し込まれていき、噴水のように赤い飛沫が飛び散ってしまった。

頭を感じる圧倒的異物が混入した感覚。それは痛みを超えて気持ち悪かった。

そのままグリグリと眼球をほじくるように掻き回され、ゆっくりとその指が離されると……………糸を引くようにやけに粘っつい赤い液体が引っ張られていく。

「目を潰すってこんな感覚なんだ……………貴重な体験をしたなあ」

「はあ……………!? はあ……………!! かっ……………」

呼吸がさらに激しく乱れる。気持ち悪かった左目にはジンジンとした痛みがジワジワ遅延されたように沸き上がり、やがて灼熱のように高熱を宿し出す。

そして男は雑に掴んでいた俺の髪を離し、次は何をしようかと頭を抱えて悩んでいた。

……逃げる？　今は助かることが優先？

さつきこそそう思ったけれど……逆じゃないか？

完全に油断しきっている今だからこそ、俺は人を殺さなきゃいけないんじゃないか？

きつとコイツはじわじわと俺を嬲り殺すつもりだろう。だからこそわざわざ一思いに殺さずに片目を潰したんだ。

だったら……殺すなら今じゃないか？

どうやって殺す？　どうしたら人は死ぬ？

などと考えている間に、また雑に俺は持ち上げられる。

「そうだな……鞆丸って何円で売れたっけ……う？」

今は俺の事なんか眼中に無さそうだ。きつともうやり返す気力もないと判断したんだらう。

だったら……やっぱり今しか……

と心に決めたその瞬間、グラツと身体中の力が外に逃げてしまい、この男に倒れかかりそうになった。

正直、この一瞬はマジで気を失ってた。1秒にも満たない僅かな瞬間だけ、本当に気絶してしまったんだ。

溜め込んだダムが崩壊したように大量の赤色が辺りに飛び散っていく。その間に思ったことは人間の体ってこんなにも血が入ってたんだ。と不謹慎ながらに感じていた。

その悲鳴はどこか心地いい。

けれど俺は取り返しをつかないことをしてしまった。

これで俺は………殺人者だ。

倒れそうな身体を気合いで踏みとどまり、今までとは打って変わって泣き喚くあの男を背に、ゆつくりと都に向かって歩いていく。

その顔は………完全に怯えきっていた。

………そりゃそうだ。あんな光景を目の当たりにして彼女がまともな精神でいられるはずがない。

そんな彼女にやつと手が届くと思った所で、フラフラの足取りだった俺は力なく都に向かって倒れてしまう。

そんな血まみれの俺を、都はガクガクと震えながらもしつかりと受け止めてくれた。

身体は電気でも流れているのかを疑うレベルで高速痙攣し、恐怖を抑えきれないのか都の歯がガチガチと大きな音を立ててぶつかっている。

ごめん、こんな怖い思いをさせて。

そして敵のいなくなった船の上で、改めて確認する。

身体はボロボロ、レナもルナも重症、天ちゃんと香坂さんの生死……おそらく不明。

左眼は潰れ、人を殺しかけたけれど……とにかく何とか守りきった。

色んな犠牲の上で……最愛の人を守り通した。

後は……3人の安否の確認だ。

レナ、天ちゃん、香坂さん……もうちよつと待っていてくれ。今すぐに……都と向かうから。



半分

静かに揺れる船の中から数々の医療グッズを持ち運び、ひとまず俺の左眼の止血だけを済ませて、都と2人で海の上を歩く。

鏡の能力をフルに使い、なんとか足場を作りながらも岸へとたどり着いた。

そこからはひとまずバイクを放置してノソノソといて行く。

なぜゆつくりなのかと言うと、俺が都に肩を貸してもらいながらじやないと歩けないからだ。能力を使えば無理やり身体を動かして進めそうだが……それもいつまで続かわからない。

「はあ………！ はあ………！」

ダメだ……頭がふらついてくる。心做しか視界もぼやけてきていて数メートル先に何かあるのかも認識できない。

「大丈夫だよ、蓮太くん……。急いで救急病院に連れていくからね……！」

「それ………よりも………！ みんなを………！」

「うん。みんなも連れていくから………！ 絶対に私が助けるから！」

ズルズルと足を引きずる俺を都は肩に背負いながら、歯を食いしばって歩く。慣れてなさげに不器用ながらどうしたら俺が少しでも楽になるかを試行錯誤しながら移動しているようだ。

最短ルートでコンテナの隙間を掻い潜り、廃材置き場を通り過ぎたところで魂の芯から湧き上がる力を体感し始めた。

あまりに突然の事で最初は理解に困ったが、それが過去に1度経験したことのあるモノだとすぐに気が付き、原因と効果が判明した。

歩きながら一瞬ぐらつく身体を気合いで踏ん張り、自力で立て直す。

「だっ、ダメだよ蓮太くん！ そんな無茶なことしちゃったら……」

「いや、大丈夫。多分見てられなかったんだろう、ほんの少しずつだけど自分で歩けるぐらいには何とか回復した」

「……………えっ？」

余計なことしやがって……ソレをしたらお前が傷つくんだぞ、馬鹿野郎が。

きつとあの戦いの時には既に始めてたんだろう、これだけの時間差で効果が出てきたってことは……よっぽど俺が傷ついていたのか。

だつたら……お前は今かなり傷ついてんじやねえのか？ ルナ。

「……………落ち着いたら全部話すよ、とにかくみんなの所へと急ごう。……………都是大丈夫？」

中途半端に傷や疲労が治っていくが……一度完全に損傷したこの左眼だけはどうにもならなかったか。

よかった、ルナの左眼が傷つかなくて。

「全然大丈夫っ」

「よし、行こう」

やっと、たどり着いた。

あれからどれほどの時間が経過したのかわからないが、少し回復した足すらもちぎれてしまいうんじやないかと感じていた頃、1度訪れた事のあるあの戦場に足を踏み入れた。

所々に激しい交戦の跡が残っており、街中だというのにまだ誰にも見つかっていない事に疑問を抱きながらも、更に奥へと歩みを進める。

「酷い……………」

そんな都の聲が風が風に流されるように聞こえてくる。

確かに無惨と言わざるを得ない。道路や一部の建物は破損……いや崩壊と言ってしまった方が正しいだろうか。とにかく戦車でも引つ張つてこないと出来ないような《破裂跡》だ。

本当に、何故誰も気づかないんだろう。

2人でそんな戦場跡を進んでいると、段々と大きな瓦礫が積み重なっている山が目に入ってくる。

数段重なったその瓦礫からは、誰かの足が2本並んで飛び出していた。

「——っ」

思わず息を呑んでしまう。

重なるように瓦礫が山積みになってることは、戦闘の現場にいた人間の可能性が

高い。だとしたらその正体は2択に絞られてしまう。

それでもと恐怖を振り払うように真っ直ぐにその場へと向かい、ようやくそれがよく確認できる所へと到着すると……………

「……………」

無言のままに都は立ち尽くしてしまった。

石にでもされてしまったかのように目を泳がせながらもその足をマジマジと傍観している。

いや、そうすることしか出来ないんだ。

ピクリとも動かない両足。紅色に近い色の青い紐で結ばれた靴を履いているその足を、ゆっくりと持つて引つ張ってみる。

何故上の瓦礫をどかさなかったのかと言うと、重なり方の運が良かったのか大きな隙間ができているように重なっており、その下敷きになっている人を実際に挟んでいなかったからだ。

流石に奥までは見えないがこれなら引きずるだけで助けられそうだったから。

「ふっ……………」

軽く足を掴むだけで身体が悲鳴をあげているが……………俺の事なんかどうでもいい。ま
ずはこの人を助けなければ……………ば……………!!

「ひっ……………」

その足を引つ張るのと同時に都の小さな悲鳴が聞こえてきた。

それもそうだ。俺だって声が出そうになった。

まるでホラー映画にでも紛れてしまったかのようなショックすぎる光景に怯んでしまふ。

理由は一つ。

俺の引つ張った足の先が続いているのは腹の辺りまでであり、そこから先は完全にちぎれてしまっていた。

中から見たことのない様々な臓物が飛び出すように転がっている。

そしてそこでもようやく気がつく生臭い血の匂い。

これだけでもトラウマに残るようなショックになるのだが……俺たちにとってはそれよりも更に心に深い傷になる事実が判明した。

空色と桃色のスカートに、靴と同じ色の上着が破れて腰巻のようになってしまっているが……それがしつかりと身につけていたものだとして理解することができた。

なぜなら、似たような衣服を身につけている姿を見たことがあるからだ。

そう、俺が選択をしたあの瞬間に親指を立てていたあの子。

あの子が身につけていた衣服と被るんだ。

同じような靴を履き、同じようなスカートで、やたらとお腹を出したファッションの似たような色の上着を着ていた……………あの子に。

嘘だ……

嘘だと言ってくれ……

「天ちゃん……………」

No. 2

俺のせいだ。

あの時に俺がみんなを見捨ててしまったからこんな結果になった。

こんな結果にしてしまった。

「……………うぐっ！……………ひぐっ……………」

ぼたぼたと涙が落ちる。この血生臭い遺体からくる吐き気よりも、この身体に刻み込まれた痛みよりも、大切な仲間を失ってしまった悲しみが大きすぎる。

大切な人たちを失う辛さは死ぬほど味わったはずだ。死ぬほど経験したはずだ。

でも……胸がえぐられるように痛い。

そうだ、この痛みが嫌で嫌で……………俺は一人になったんだ。

昔から大切なものを何一つ守れない俺だからこそ、孤独を選んだんだ。

やっぱり間違ってた。誰かと一緒になんか辛くなるだけだ。一緒にいるのが嬉しいからこそ、楽しいからこそ、失った時の刺激は一層激しくなる。

もう何も失いたくない。

そう思った時だった。俺の隣にいた都がおもむろに尻もちをつき、明らかに脅えていた。

「そ、そ……………んな……………」

彼女が見ている視線の先を覗いてみると……………香坂さんが立っていた。

月明かりに強く照らされて堂々と仁王立ちをするその姿は、どこかおかしい。

いや、おかしい所なんて一目瞭然だった。

首がありえない方向へと曲がっているのだ。

ほぼ真反対を向くように顎を上へと差し出し、無理やり引つ張られた首からは白く細かい骨の欠片が飛び出している。

そしてその身体は突如としてとぼとぼと俺たちに向かって歩き出したのだ。

「あ……………あ……………」

ゾンビのように両腕を伸ばし、おぼつかない足取りで歩き出すその身体。それに驚き怯えていると、俺のすぐ側に倒れていた天ちゃんの足も自立して起き上がり、俺に蹴りかかる。

「……………くっ！」

考えるよりも咄嗟にそれを避け、都を巻き込んでその2人から遠ざかると、さつきまでは香坂さんの影に隠れていて見えなかった場所に記憶にないシルエツトが立っていた。

何が起こったのか頭の整理が追いつかない所で、精神的に限界が来てしまったのか、都は抱えられている俺の胸に胃に詰めていたであろう物たちを盛大にぶちまけた。

「おうえつ……………!!」

ゴホゴホと咳き込みながらも嘔吐をってしまった都の背中を擦りながら、状況を整理を試みる。

「無理はしなくていいからな、少しでも楽になるんなら我慢なんてしない方がいい」

トントンと優しく頭を撫でてやっていると、続くようにもう一度その口から嘔吐物を吐き出してしまふ。

都は必死に口に手を当てて我慢しようとしているが、無情にも勢いを止められずにびちゃびちゃとツンと鼻に来る香りの物が撒き散らかされる。

「よしよし……………大丈夫、大丈夫」

無理もない。俺だつて都がいなきや同じようになっていたと思う。

明らかに異形となつてしまった仲間たちの姿。初めて見るであろう生の臍物。友達の死。

そんなものが連続して続いてしまったら……心は折れる。

実際俺だってさっきまで折れていた。けれど都の姿を見た時にギリギリのところまで持ち直したんだ。

今、都にとつての心の支えは俺しかない。この現実から救ってやれるのは俺だけだ。その俺が折れてしまったら、彼女も終わってしまう。

それだけはダメだ。

心を殺してでも彼女を守り通さなきゃいけない。

1度自分の命よりも大切な人を失った俺だからこそ、きつと使命感が生まれたんだろ
う。

今の1番大切な人を失いたくない……と。

もちろんこんなのは一瞬の強がりだと思う。でも強がりでもなんでも今は折れちゃ
いけない。

どれだけきつなくても、心が裂けそうなほど苦しくても、自分を殺したくなるほど辛く
ても、俺は全部乗り越えなくちゃいけない。

じゃないと……全部が無駄になる。

彼女らは決して無駄死になんかしていない。彼女らがいたから、こうして俺たちがこ
の場にいられる。

だからこそ今怯むな……！ 乗り越えろ……！！

今ここで俺と都が死ぬ事が彼女らを《無駄死に》にさせてしまう事なんだ……！！

「くっ……！！」

ゆつくりとこちらに向かつて歩いてくるかつての仲間たちを想いながら、奥にいるシルエットの人物を睨みつける。

黒い影に隠れたままに、紋章を浮かばせているヤツを。

普通は遺体が動くなんてことはありえない。まず間違ひなくアイツが動かしているんだらう。

俺の大切な仲間を……！！

今すぐにでも駆け寄って能力を止めさせたいところだが……都がまだ辛そうだ。あの2人からも十分に距離が離れているから、ギリギリまで粘って彼女を休ませてあげて、そこで動き出そう。

「ごめ……！！ ごめんなさい……！！ ごめんなさい……！！ ごめんなさい……！！」

服が破れそうな程に俺の袖を握りしめ、ガクガクと震える都。

多分かつての友達を直視できないのだから。必死に現実を見ないようにするためか、俺に顔を埋めるようにして離れなかった。

もうこれは、彼女にとって最大のトラウマになってしまっただろうな。

そんな都を少しでも心を落ち着かせようと、できるだけ優しく頭を撫で続けていると、ずつと突つ立っていた影の人物がこちらにできてくと歩いてきた。

「蓮太……随分とボロボロだな」

「……………」

明らかな低い声、これは男だろう。その人物は仮面をつけていて素顔を隠してはいるが、隠しきれない声で性別は判断できた。

それに……俺の名前を知っている。

「どうも、アイオーファイブ I O 5 メンバーの N o . 2、タナトスと申します。……………こんな感じではないか？」

「……………都は渡さねえぞ」

トロトロと亀のように歩いてくる2人とは違って、素早い歩きで俺たちに近寄ってくるタナトスと名乗る人物。

俺はこの声……………どこかで……………

「俺はその嬢ちゃんには興味無いんだけど……………千紗……………じゃねえや、ケールがどうしても拉致ってこいって言うからさ、返してもらいに来た」

……………なんか小声で言ってた瞬間があつたけど、聞こえなかつたな。

とにかくこいつの目的は都だつてことが判明した。だったら守らなきゃいけない。

「ふざけんなよ……」

もう絶対に離さない。俺の射程圏内に入り込んだ瞬間に、コイツの喉の中で《鏡》を出して首を切り落としてやる……！

「ふざけんなはこつちのセリフだつーの。ほんつとにそういう所は変わってないな」
ギンつと強く瞳を光らせると、仮面の男はクイツと指を動かす。すると俺の腕は力も入れていないのに自分の首を掴み、締め上げ始めた。

「かっ……?!?!」

メキメキと俺の指を食い込ませていく力を止めるため、咄嗟に俺と仮面の男の間に《鏡》を召喚し、能力の解除を試みるが……

「があっ……!!」

俺の喉を締め付ける力は弱まらない。

しまった……!! 油断しすぎた……!!

苦しい。

呼吸ができない。

何も……

考えられ……………な……………い……………

《視点切り替え》

「……………気絶したか」

蓮太の気絶を確認すると、俺は任務遂行の為に隣のお嬢ちゃんも黙らせる。

随分と酷い臭いがするが……………そう言えばさつき吐いてたな。

クリーニング出さなきゃなあ……………この服。

「よっこいしょつ……………」

米俵を持つように肩にお嬢ちゃんを抱えあげ、用意しておいた車に向かって移動する。

「本当はお前は殺せつて言われたんだけど……………まあ俺とお前の仲だ、見逃してやるよ。あ、嬢ちゃんに関しては心配すんなよ？ 殺すつもりは無いらしい」

片手でタバコに火をつけて、1吸いでそのほとんどもを灰に変える。

そして思いつきり息を吐いてその吸殻を蓮太に向かって投げ捨てた。

「ま、その代わりに死んだ方がマシだと思わされると思うけどな。悠は性欲のバケモンだ、何されるかわかったもんじゃねえぜ」

それに今頃は専属の医者に手術してもらってる頃だろうし、あの程度の怪我なら4時間あれば一命は取り留めるだろ。

そうなりや……………地獄の始まりだな。

「ま、そーゆーことで……………じゃあな」

気を失った蓮太を放置しながら、改めて車へと歩いていく。

あ……………腹減ったな、ケールに飯作ってもらおうかなあ……………でもアイツ料理下手

なんだよなあ………

5月8日 都BAD√

※ 最後の言葉

あれから、どれくらいの間が経つたのだろう。

窓から差し込んでくる陽の光をじつと浴びながらそんなことを思う。

この一週間は特に忙しかった。天ちゃんと香坂さんのお葬式に参加して手を合わせに行ったり、自分の怪我を治すために病院へ通ったり。

そして少しでも時間があれば――

「ただいま、安静にしていたかよ」

「ああ、約束は守らねえとお前らがうるせえからな」

ドサツと色々物が入っている袋を机に置いて、レナがこちらへ近づいてくる。

「無理矢理にでもじつとさせてねえと大将は簡単に死にそうだからな、アンタに死なれちや困るんだ」

そう言つてスルスルと俺の頭に巻き付けてある包帯を解いていき、医師から説明された処置の仕方に習つて対処したあと、今度は眼帯を付けさせてもらう。

「にしてもアンタもすげえ頑固だよな、入院しろって何度も言ってるのに」

「馬鹿かよ、都を探さなきゃいけないんだ、入院なんてしてられるか」

「だからオレたちに任せとけつつつってんだよ」

そう、少しでも時間があれば俺が動ける時間に限り近辺で都の居場所を探索している。

ルナがこの場にいないのは、今日の遠方当番に任命されているからだ。

この2人には本当は完全に回復しきるまで安静にして欲しいんだが、本人たちの強い意志で搜索の協力を懇願され、俺と3人で聞き込みや調査をしている。

幻体だからか、俺よりも若干の回復スピードが早いようで、万全とは言えないが日常生活に支障がない程にはすっかり戻っていた。

それでも……………なかなか見つからない。

「少しでも早く見つけてやらないと……………」

「気持ちとは分かるがな大将、仮に都が見つかって今度は正真正銘アンター人なんだ。アイツらと戦うつもりなら、少しでも本調子になってないと今度こそ殺されるぞ」

「……………」

あれから俺は学園にはもう登校していない。

初日のみ律儀に行つて、都が来ているかの確認を一応したが……………予想通りに都は

いなかった。

そして深沢も高峰もその姿を現していない。彼らが生きているのか、死んでしまっているのか、それすらも分からない。

「そう……………だな」

「わかつたんならちやんとメシを食え、もう何日一日一食を貫くんだよ」

そして袋からレナが取り出したのはコンビニのおにぎり2つと適当な飲み物だった。他にもなにか入ってはいるが……………別に気にならない。

「ごめん、いらない」

「ま、だろうと思っただけだよ」

そう言いながら袋から何かがもう一つ取り出される。

「つかその一食もオレが無理やり食わせてるんだけどな」

レナが持っているのは先端がチューブになっている栄養補給ゼリー、キャップを外して無気力な俺の口に突っ込み、ゆっくりとそれを押し潰して流し込む。

そんなことまでされたら、飲み込んでしまった方が早い。

「つたく……………」

確かに俺が動けなきや意味が無い。そんなことは頭じや理解はしているつもりなんだが……………

如何せん都を探すこと以外に何もしたくない。

「しつかりしろよ、蓮華にも説教喰らっただろ？ 死にそうなくらい辛い気持ちは十分にオレにも伝わってる。だから痛いほどわかるけどよ……………」

「アンタがしゃんとしてねえと助けられるものも助けられなくなる。だから……………」
そこで飲んでいたゼリーが底を尽き、ゆつくりと口から離される。

特に力を入れていないからか、口元からはボタボタとゼリーが零れ落ちる。

「もう……………見てらんねえよ……………」

「……………悪い」

指を動かして、クイツと口元を拭い、自力で口の中のものを飲み込んでしまう。

今にも泣き出してしまいそうなほどに歯を食いしばるレナ。コイツら2人は本当に個性が分かれている。

どっちかというところいう場合にルナはこの表情をせずに、怒りの感情のままに俺を怒るだろう。

そういう点では元々の『ゴースト』に近いのはアイツだ。

レナは暗い感情がメインの人格な気がする。

まあ……………今はいいか。

とその時、玄関の方から何かが落ちるようにゴトつと音が鳴る。きつと郵便入れに何かが入ってきたのだろう。

「……オレが取つてくるから、大将は待つてな」

テクテクと歩いてレナが届いたものを取り出し、不思議そうな顔でその中身を開けてみると……

「んだこれ、………DVD? CD?」

出てきたのは表面が真っ白の、何も情報がないただのディスクだった。透明のケースに入っており、それ以外の特徴が特に見当たらない物。

つまりはわざわざ誰かが焼いたんだろう。

「とりあえず使ってみるか……ちよつとパソコン借りるぜ大将」

無駄になれた動きでパソコンを起動させ、届いたばかりの謎ディスクを取り込む。

すると画面は当たり前だが読み込みのモードに切り替わり、ゲージがMAXに到達すると表示されたのは、1つのフォルダに入った動画だった。

そしてフォルダ内には『たのしいみやこ』とタイトルが付けられている。

その文字を見た瞬間に、俺は身体を前のめりに動かしてその動画をダブルクリックして再生した。

「大将………これ………」

「ああ……もしかしたら都に関しての情報何か掴めるか………も
……………」

今考えると、これは十分に怪しい代物だった。

それでも俺がこれを疑わなかったのは、藁にもすがる思いで都を探し求めていたから
だろうか？

だが、その行為はすぐに後悔へと変わってしまう。

10分近くある動画フォルダを開くと、まず最初に映ったのは真つ暗闇だった。

何も見えない暗闇の中で、グチュグチュと水のような液体が掻き乱されるような音だ
けが続いている。

いや……………

よく聞いてみると、荒い吐息のような音も……………？

声押し殺すような……いや、まるでなにかに抑え込まれているような……声？

そしてしばらくそれを聞き流していると、少しずつ画面に光が差し込んできて、その
映像が流れ始めた。

「——ッ」

「ウソだろ……………」

息を呑む俺。

怒りと驚きの入り交じった言葉をこぼすレナ。
最初はそんな反応しか出来なかつた。

そして徐々にその映像が、俺の脳へと刻み込まれ、俺自身が理解を示してくる。

眼は虚ろになり。

衣服を剥がされ。

身体中に白と透明が入混ざった液体がこびりついているその姿。

その手には男ならではのモノが両手に握られており。

口にも同じものを詰め込まれている。

涙を流しきってしまったのか、その顔からは感情を感じることが出来ず。

ただひたすらと数人の男によって体を揺らされる都。

床に散りばめられた様々な色の萎んだ風船がその行為の長さを訴えていた。

そして使い切ってしまったのか、何も入っていない一際大きな箱が隅の方へ捨てられている。

彼女は……一言も喋らなかった。

何も感じていない人形のように男たちを受け入れ、懸命に奉仕するその姿は……………

ラスト1分。

突如として暗転したかと思えば、いきなりまだ眼が生きている都だけがそこに映った。

しかしその顔は画面の奥に怯えており、脅される形でこのビデオを録画されている事が容易に理解出来る。

そして聞こえてくる加工された声。

『では、それが最後の竹内蓮太くんへの言葉となります。最後に都ちゃんのお気持ちを
お伝え下さい』

よく見ると都は腕や体を縄で縛られており、明らかな監禁状態であることが判明し

た。

「……………」

『これが最後です。確実に最愛の竹内蓮太くんへ届けますので、安心して最後の言葉を残して下さい』

隠しきれない恐怖を無理やり押し殺し、涙目でレンズを見つめる都は意を決したように叫ぶ。

『蓮太くん！ わた———』

そこで無理やりビデオは切られ、動画は終わってしまった。

D ???

都BAD√

フタリ

EN

「うあああああああああああああああああああああ
!!!!!!!」

何度も何度も机やパソコンを投げ捨て、棚や壁を壊す。

ベッドもグチャグチャになりクロスは破れ、窓ガラスは粉碎。

いくら殴っても、いくら蹴っても、いくら壊しても心は落ち着かなかつた。

「おいっ！ 止めろ大将ッ!!」

無造作に暴れ回る俺を止めようとレナが押さえつけようとするが、もう身体が止まらない。
ない。

理性なんてものはとっくに壊れていた。

部屋にあるものは全てボロボロ、まるで俺の心情を表しているかのように崩壊したその空間は、留まることを知らずにどんどん壊れていく。

「この……いい加減に………！ しゃがれっ!!」

そしてそんな俺にレナは荒っぽい蹴りをぶち込み、俺は勢いよく壁に飛ばされて体を

打ち付ける。

「あぐつ……!?」

それからレナは俺の胸ぐらを掴んで、震える拳を我慢しながら俺に叫んだ。

「今暴れても何も変わりやしねえだろうがっ!! 苦しい気持ちは吐くほどわかる! 辛い気持ちはクソほどわかる! お前の中に溢れてくるその《殺意》が痛いほどオレに流れてくるからなッ!」

「アンタが都を心の底から好きだった事もわかる! だからこそお前が立ち上がれよ! 一生の傷を背負っちゃったけど、都はまだ《生きている》! 死んじまった天や香坂が守り通したアンタが《生きている》!」

「希亜も翔もアンタがこんな形で終わることを望んじやいないはずだ! テメエは誰なのかすらも覚えてねえだろうがなッ!!」

「こんだけの人間を犠牲にしてきたんだ! 意地でも助けろッ! 死んでも助けろッ! お前はみんなの意志を背負ってるんだ! 一人一人の魂の意志を受け継いできてるんだッ!!」

最後に怒りに任せた乱暴な態度で壁に向かって頭をぶつけられたあと、途端に落ち着きを取り戻していく。

誰一人守れなかった事実が、重く俺にのしかかってきていて………何故俺だけが生

きているんだと死にたくなる。

いや……違う……！

違うのはわかってるんだ……！ でも………！！

「じゃあ……！ 俺はどうしたらいいんだよツ!! もうどこを探したって……都は………！！」

「いる」

「……………」

「初めて石像を見つけたあの公園だ。蓮華がたった今見つけたらしい」

なんで……

なんで……？ それじゃあこのビデオはなんなんだ？

さつきまで俺が見ていた地獄のような映像は一体………

「さつきの動画、日付が5日だった。つまりは3日前って事だ。今あの公園にいることも可能性としては十分に有り得る」

「でも……蓮華は大将は連れてこない方がいいかもって言ってた。もしかしたらひどい目にあわされている可能性もあるが………行くだろ？」

「行く………！ 絶対に行く………！」

がむしやらに走ること約10分。ビキビキと痛覚が悲鳴をあげているが、そんなものを気にせず目的地である公園に向かってただただ走る。

「痛っ……っ！」

身体を激しく動かすと、潰れた左眼が膨張するように痛む。血流が早くなって一度に送られる血の量が増えたからだろうか？

これ以上血を早く流していると本当に破裂してしまいそうだ。

いや、そんなものはどうでもいい。

今は本当に都がそこにいるのかどうかを確認できたら……………！

そしてとうとうたどり着いた公園。日曜日の昼時ということもあってか、幼い子供から高齢者の人、赤ん坊を連れてくる母親たち、移動販売をしているクレール屋のおっちゃんなど、なかなか色んな人が集まっていた。

彼らは至って普通に日々を過ごしており、特に不思議な違和感を感じない。ある一点を除いて。

俺はそれに気がつくと自分の身体なんて顧みずに、公園の真ん中に堂々と立っている大きな時計台に向かって駆け寄った。

至って変哲のない時計台だが、おかしいのはそれじゃない。

俺は急いでその時計台に縄で括られている裸の都を救出した。

刃物がない代わりに自分の歯を使って噛みちぎり、体の所々が青く腫れている都を両手で受け止める。

彼女はずっと目を閉じたままだ。

呼吸は……………している。心臓も動いている。よかった……………ちゃんと生きてる……………！

体は本当にボロボロになってしまっているが、幸いと言うべきか切り傷などは見当たらない。強く殴られたような痕は幾つも残っているが、なんとか生きてくれている。

「都……！！」

イカのような臭いや、雑俳ゴミ……下水のような酷い臭いを漂わせている。きつと……この一週間はまともな生活を送れていなかったんだらう……！きつとゴミクズのように……ただの雌として道具のように使われていたのだらう……！！

それがどれだけ辛かったことか……死にたかっただらうか……！！

「ごめん……ごめん……！ 本当に……もう二度と離さないから……！！ 絶対……」

そんな彼女をギュツと抱きしめる。

眠ったようにじつと目を閉じ続けている大好きな彼女を。

そんな時だった、俺の真後ろに誰かがやってきたのは。

「久しぶりね、竹内くん。私の事覚えてる？」

背後から聞こえてきたその声の主は、顔を見なくても一瞬で理解出来た。

あの爆発女だ。

「絶対……！！ 絶対離さない！ もうあんな目には絶対遭わせない！！」

振り返らずに、ただひたすら都を守るために体全体を使って抱きしめる。それくらい抵抗しか出来なかった。

「いいわ、もうあの人はその子には興味無いようだし。また別の女の子を探して遊ぶって言ってたわ」

「ならもういいだろ……！ 二度と俺たちの前に現れないでくれ!!」

そんな気まぐれで都をこんな無惨な目に遭わせたのかと思うと本当に腹が立つが………そんなことよりも早く去って欲しかった。

もう俺たちに興味が無いのなら消えて欲しかった。

「ええ、もう貴方たちの前に立ちはだかることはないわ。だから最後の報告に来たの」

「世間では《九條 都》はもう死んだことになっているわ。不慮の事故という名目でね。そしてその子の父親と一気に距離を縮められたあの人は、無事にコロナグループに自在に操れる手駒を置くことに成功。度重なる失敗や情報の漏洩が原因で、天下を握っていた大手グループも今や倒産寸前、ほぼ壊滅状態と言っているわ」

「二週間でこんなにも大きく事を動かすなんて予想はしていなかったけれど……まあさしたる問題ではないわ。これで白井津川を初めとした様々な機関や会社が大きく崩壊を開始した。そして近衛グループがそれらの問題を無事に解決、まさに《英雄》となつたのよ、あの御曹司様は」

「だから貴方がどれだけ暴れても、簡単に消すことが出来るこの事実を、忘れないでね」
.....

「地位も金力も力も、もう全てあの人は手にしている。今回ばかりは敵が悪かったわ、運が悪かったと諦めるしかないのだけれど.....これからは静かに頑張つて」

もう.....どうでもいい。

アイツがどれだけ偉かろうが、どれだけ凄かろうが興味がなかった。

もう俺たちとは関わらない。この事実だけが本当に本当に.....嬉しかったんだ。

「それからその子.....都ちゃんは今もう目が覚めることはないわ。ちゃんと生きてはいるけれど.....黙らせるのにちよつと乱暴なことしちゃつてね、気がつけば壊れちゃつた」

.....

「外傷性脳損傷.....と言つた方がいいのかしら？ 要するに《植物状態》つてことよ。腕だけは一流のプロが判断したのだから間違いないわ。私自身もその子が目を開けるところをもう2日程見ていないし。だから性処理の道具としてでも使つてあげなさい、もう随分と仕込まれているみたいだし」

「まあ、どちらにしてももう私には関係の無い事だけれどね、長々とごめんなさい。それじゃあさようなら。《存在感》の能力は解除しておくわ、その子のあられも無い姿.....周

りの方々にも見てもらいなさい」

最後に耳元で「元気でね」と囁かれ、コツコツとヒールが鳴り響く音を聞き流しながら、着ていた上着を都に被せて、じっと見つめる。

「都……都………」

軽く体を揺すつては見るが、彼女はなんの反応も示さない。

「お腹……減つてないか？　まずは風呂に入るか？」

彼女はなんの反応も示さない。

「色々あつたけど……今日からは一緒に暮らそうか。もう……帰る場所はないだろうか」

彼女はなんの反応も示さない。

「都はベッドを使いなよ。いつか俺は布団を買ってくるからさ、それまでは……一緒に寝ようか」

彼女はなんの反応も示さない。

「これから色んな困難が待ち受けてると思うけど……もう心配ないから……ずっと俺がそばにいるから」

彼女はなんの反応も示さない。

みんなからもう姿が見えるようになった都を抱えて、自分の家へと歩いていく。
いつか返事が来るかもと願いながら………何度も何度も声をかけて。

「大好きだよ、都」

彼女はなんの反応も示さない。

「事実上死んでしまったと言うのは、レンタに世界を繋ぐ扉をズラされたからよ」

「あの時のこと覚えているかしら？ ソラを助けるために自分自身に取り込んだ霊薬《ネクタル》あの時から歯車は狂ってしまった」

「《ネクタル》は故意に力の枷を崩壊させ契約者の力量を無視して溢れさせる力。本来あの世界の人間が使用すると肉体が耐えきれずに死んでしまう可能性もある激薬なのよ」
「その薬に平然と耐えられた事そのものが驚きだけれど……それよりもあの時に暴走したもうひとつの能力、《オーバーフロー》の方が問題ね」

「あの枝を観測し終えたのなら……効力はわかつているわよね？ ありとあらゆる限界の上限を壊し、進化させる力」

「それによって《魔鏡》のアーティファクトが暴走し、世界の扉の軸をずらしてしまった」
「《魔鏡》のアーティファクトの力は、本来《反射》するための力ではないの。それはあくまで付属でついてくるオマケ、要は副産物の賜物」

「《魔鏡》のアーティファクトの本来の力は……全ての世界を繋ぎ、行き来する力」
「貴方たちの世界では鏡はあの世とこの世を繋ぐ扉として使われているのでしょうか？ それと似たようなものよ」

「セフィロトの魔力記録帳を漁って確認してみた時にそれが判明したわ。だからこそ《魔鏡》の力は世界をも崩壊させる力を持ってしまっている」

「幸いと言うべきか、あの子は常識離れた精神力で持ち直して、世界の崩壊までは防げなければ……あの枝の先では結果がもう見えているわね」

「急いで打開策を練っておかないと、本当に全てが手遅れになる」

「あの子の《オーバーオール》が目覚めて、《オーバーロード》を手にしてしまった時、それが世界の終わりを告げる合図になるわ」

「いい？ 《オーバーロード》と《オーバーフロー》、そして《オーバーオール》の持ち主3人だけは警戒しておきなさい」

「世界でたった3つだけの、王たる素質を持ったアーティファクト。最も神に近いとされる最凶最悪のアーティファクト」

「それら全てが解放されてしまった」

「けれど《オーバーロード》に関しては安心ね、少なくともアナたちナインズが預かってくれていることに、まあ……感謝しているわ」

「カケルとレンタに繋がっていられるアナたちだからこそ、あの世界に干渉できる。もう始まってしまった崩壊はまだまだ序曲に過ぎない」

「そうね、色々と話し込んでしまったけれど……アナたちはまず《オーバーオール》の所持者を探して頂戴。私の心当たりがある人物を伝えてあげてもいいのだけれど………アナたちの思考の邪魔はしたくないわ、だから確信のない発言は控えるよう

にする」

「アナタたちが《オーバーオール》の所持者を見つけれられた時にすぐに対処ができるように、私は私で準備をしておくわ」

「いい？ 《オーバーロード》でレンタを操りながら、《オーバーオール》の所有者を見つけるの」

「なぜレンタの方ではなく《オーバーオール》を警戒するのかと言うと………全ての元凶が《オーバーオール》だからよ」

「……もうここまで力の影響が出てしまっているのね」

「とにかく、私が言ったことを忘れないでね」

「それじゃあまた会いましょう」

「まだ希望は残っているわ」

「壊れてしまったこの世界を救ってッ！」

5月1日 都[√]

もう二度と

「この世の理は等価交換。何かを得るためには何かを犠牲にしなくちゃいけない。だから行つて。九條さんを救えるのは貴方だけ」

……………!?

あれ……………? なんだ? この感覚……………痛っ!

小さな電流が流れてきたように頭痛が一瞬生じ、グラツと意識が軽く揺らぐ。

「私も貴方が好きだから、私は貴方の幸せを守りたい。だから行きなさい。全てを踏み台にして、全てを乗り越えて、私たちの……………彼女の……………貴方自身の未来を掴む為に」

……………

「……………蓮太、覚悟を決めたのなら返事を」

「断るッ!!」

あの痛みを通して、何かが俺をつき動かした。

理由も根拠もないただの直感だが、何故か俺はこの場を見捨ててはいけないと強く

思ったんだ。

「もう俺は誰も見捨てない。何も乗り越えない。対面する全てを背負ってみんなと共にこれからの道を進む！」

「何を言っているの!?! 貴方が九條さんを止めないと、彼女は私たちの手の届かない場所へ行ってしまうのよ!」

「確かに時間はない、俺だつて今すぐにも駆け出して助けてあげたいさ。でも……………俺は誰も犠牲にするつもりは無い。みんなで無事にまた集まって……………笑つて、日常に戻るんだ」

すつかりと変わってしまった、仲間たちとの日常に。

「目付きが変わった……………なるほどね、それは手強いわ」

パンツパンツと数回の爆発を利用して空を飛び、加速をつけた得意の体術で真っ先に俺を狙う爆発女。

そして予想通りにその攻撃方法は《蹴り》だ。

「激流を制するは静水……………だったか?」

1度深く息を吐き、心を出来るだけ落ち着かせたあと、あの女の蹴りに抗わずにその流れに沿って攻撃をスルリと避ける。

壮大に空振りをした蹴りは、触れてもいない地面に大きな斬撃でも当てたように大地

を割きその蹴りの威力の高さを知らしめる。

大地を割くと言っても細い一本の線が残る程度ではあるが……触れてもいない箇所を傷つけられる時点で十分異常だな。

「みんなはできるだけスタミナを温存させてくれ。これから先の作戦で全く戦闘が起らないという可能性もない。むしろ戦うことを前提に動いた方がよさそうだ」

「で、でも！　今みんなで頑張らなきゃ先輩がやられちゃったら——」

「うん。だからこの場においてくれ、あくまでこの戦いを俺とレナに任せて欲しいんだ。試したい技もあるしさ」

もし俺が上手くあの力を扱いきれたのなら、この勝負一瞬でケリが着く。

「天ちゃん翔を守りつつ適材適所で危ない攻撃がきたらそれを消してくれ。自分たちの身を第一に考えてな」

「香坂さんは希亜と行動を共にしつつ能力を発動して考えられる最善を具現化しててくれ。可能な限り叶えられそうな願いは……俺とレナを除くメンバーが怪我をしなかつたり、都奪還を間に合つたりとか」

「希亜は一応能力の準備を、防御にも攻撃にも支援にも最善の策を選べるように一番きついかもされないが気を張っててくれ」

身につけている上着を脱ぎ捨て、こちらに近寄ってきたレナと共に少し距離をとった

爆発女の前に2人で立ちほだかる。

俺の考えていることがレナに筒抜けなのなら……ある程度のことは息を合わせられるだろう。

「でも……お前ら2人だけなんて……」

「大丈夫、翔。どの道アイツをこれくらいで倒せないと……俺は守りたい人達全員を守れない。でも、最悪の時はぜひ助けてくれよ！ だからそばにいて欲しい」

翔は若干困惑顔で、頭をポリポリと搔いていたが……渋々と言った感じでそれを了承し、俺と軽く拳を合わせて天ちゃんや香坂さんを連れて俺たちから距離をとった。

「蓮太……私……」

「希亜、俺を信じてくれ」

約1秒ほど、お互いの目を見つめ合い、視線を通して心の会話を始まる。

そう思っているのは俺だけかもしれないが、意志を伝えるには視線から……と信じている。

「……はあ」

呆れたようにため息を吐くと、希亜は自分の前髪に付けているヘアピンを一つだけ外して、俺の前髪に留めた。

「え……いや……その……」

「それだけ髪が長ければ邪魔になるでしょう。後で返してくれればそれでいい」
そう言つてあの女を警戒しつつ、希亜もみんなの元へと近づいて行つた。

「……………ありがとう」

くるつと体を回してレナと共に戦闘態勢に入る。

「貴方の洞察力、そして即座に考えた動きに対応出来る運動能力、そして実際にそれを叶えるだけの力。ごめんなさい私、貴方を過小評価していたみたい」

「ずっとそのままクソ評価のままでもいいぜ、油断してくれるのならありがたい話だ」

「いいえ、お友達を見捨てなかつたその瞬間から、貴方の色が変わつた。どしたの？ 何か辛いことでも思い出した？」

「いや……………辛いことを思い出にしないためにこの場に残つた」

さつき言つたことは全部本心だ。特に1番危機感を抱いたのは、俺だけが都に追いついたとしても、立ちはだかる敵たちに1人で勝てるかどうかという点。

考えたくはないが……………事実として勝つことが前提でないと、少なくとも都は救えない。
い。

だったら……………これからの俺は邪魔をする敵みんなを倒して行かなきゃいけない。

どんなに強い敵だろうと。

どんなに厄介な敵でも。

「俺はこれから先の戦いで二度と負けることは許されない。これ以上大切な仲間や、大好きな人を守るために……………俺は勝ち続けなきゃいけない」

「そうね、君にとつての最善を手にするには……………私たち全員に勝たなければその未来はない。でもどうするの？ そのちっぽけな力で」

「……………お前らにどうやったら勝てるかを考えた」

意識を深く集中させ、まだ慣れてもないあの能力を解放する。

全身の筋肉を解し、脳に掛けられた制限の扉を無理やり押し広げる。

すると驚く程に感じる世界が広がり、身体の熱がより強く、より熱く感じた。

「人間はな、自分の身体を守る防衛本能として、30%の力しか出せないように枷をつけてるんだ」

激しく鳴り続ける耳鳴りを我慢して、更に強く、更に深く能力を発動する。

「俺のこの力は、そんな限界の枷を壊して《進化》させる力」

多分……………この能力の使い方と一番相性がいい奴は……………レナとルナだろうけどな。

身体の発汗が止まらない、ボタボタと大量の汗が上がりすぎた体温を冷まそうと留まることが知らずに放出している。

「なんなの……………その尋常ではない汗の量は……………！ 身体の中で一体何が……………!？」

「これ……………1度言ってみたかったんだよ。」

あのセリフを……！

「お前はもう、俺についてこれねえぞ」

「うーわ言いやがったよ大将……」

「セーフティフィジカルブースト第1段階身体強化……オーバードライブ火事場の馬鹿力」

変わる運命

「……激しい発汗、何かの能力だとしても身体に負担がかかるだけじゃなくて？」

「それと引き換えに手に入れた力だ」

今の出力は……大体40%くらいか。後はこの力を揺らがないように意識を常に集中させて……

「大将、わかっていると思うが言わせてもらおうぞ。それ以上の力をもう出すなよ。40%でさえコントロールがズレて一点に力が集中しちまったら骨が折れる」

「ああ。そこは理解してる」

「それと……出来れば一撃で終わらせろ。その力はあまりにもリスクが大きすぎる」

「……任せろ」

右腕を脇あたりの高さまで上げて、身体を少しヒネリパンチの体制を整える。激しい発汗に身体中の水分を奪われながらも、この力は一切弱めたりしない。

「私をたった一撃で倒す宣言をするなんて……それほどまでにその技に自信があるの

ね」

「んなもんねえよ。扱い方だつて、さっきの直感が教えてくれたんだ」

「でも、近づかなきゃ攻撃できないわよ？　こんな風に遠距離から攻撃されちゃつたら

……………どうするの？」

そして女がやつてきたのはあの爆発する光を放つ技だつた。

それを確認すると、レナが俺の前に立ちはだかりその光を避けると同時に何かを切り離すように腕を振るい、光を消した。

「なっ！」

「テメエのその厄介な爆発を見てよ、気づいたことがあるんだ。テメエは移動の時や蹴りを繰り出す時は、勢いを加速させるために爆発をよく使つて戦つてるけど、その爆発そのものをあまり攻撃に多用しない」

パンパンと服を叩き、埃を落とすような動作をして語り続けるレナ。

「なんでそんなクソ強い技を何度も使わないか考えてた。んで思つたんだよ。お前、オレたちが会話している時に能力発動の為の力を溜めてるだろ」

「…………へえ？」

「殺し合いの中で作戦会議や討論をわざわざ待つ理由はねえ。でもお前はそのチャンスが巡つてくると決してそれを邪魔したりしない。普通に考えておかしいだろ」

……

……………

え？ マジで？

そんな理由があつて爆発技を多用しなかったのか？ え？ てか言われてみれば……………直接爆発で俺たちを攻撃してきたのつて……………数えられるほどしかない。

……………うん。その推理通りだと一応辻褄が合う。

「もし溜めた分だけしか能力が使えないのなら……………規模が小さくて済むブースト用に使うのが効率はいいよなあ」

「あら、貴女……………意外と勘がいいのね」

「そりやそうさ。なんたつてオレは大将の幻体だからな」

まああの本人は全くそんなことに気がついていなかったんですけどね。

「とにかく、あの爆発に制限があることはわかった。それで仮に爆発攻撃をされても……………お前なら対処できるつて考えでおk？」

「その辺は任せな、爆発する前に導火線代わりになつている細い光を断ち切れれば簡単に不発爆弾に変えられる。その役目はオレがしてやるよ」

「それならしようがないわね。能力での攻撃を攻略されたのなら……………風ごと空間も裂く私の最大の技で一瞬で終わらせてあげる。貴方たちも早期決着を望んでいるので

しよう?」

「望むところだ……!」

力いっぱい脇を締め、爆発的な速度で迫ってくるであろうあの女を全神経を注いで集中する。

今の俺なら……きつとあのレベルでもなんとか……!

「……………ふっ!」

深く深呼吸をした爆発女は、一瞬残像が見えたような速度で真っ直ぐに俺に迫ってくる。

それは読めていた。爆発の反動を使う移動をする以上は直線でしか移動できないからだ。

よく見ろ。

目を離すな。

僅かな相手の動きでさらに一步先を読め!

もう拳を繰り出すと相手を顔を殴れるような距離になった瞬間、違和感を覚えた。

周りの音が一切聞こえず、認識できる色が消え、白と黒のモノクロの世界へ入ったかのような感覚。

けれど相手の動きは鮮明に理解出来ており、その動きはかなりスローモーションに見えた。

まるで時間の流れがゆっくりになったかのような感覚の中、いや、だからこそだろう。敵の足元に小さく煌めく1つの爆発の合図が確認できる。

バカ正直に速度で勝負しにこない。

「なんちゃって♪」

そして予想通りに足元の光は相手の身体を浮かせるように爆発し、一瞬視界が閉ざされる。

しかし、見えないはずなのに敵の位置は鮮明に理解していた。

「後ろだ大将ッ！」

まだ……！　まだ耐えろ！

「さよなら」

ギリギリまで相手の蹴りを引き付けて、もう当たると判断したその刹那――

「今だッ!」

皮膚にギリギリ当たるレベルで紙一重にこの蹴りを躲し、振り向く反動を付けて加速させた拳を相手の顔面にぶち当てる。

「――ッ!?!」

しかし殴り抜くことはせずに、拳を当てたその瞬間に全力で五指を弾くように一斉に広げる。

すると大きな火薬銃を撃った時のようにパァンッ! と大きな破裂音を放ち、その衝撃に耐えるために俺は咄嗟に身体を後方へと逃がした。

「キヤアッ!?!?!」

最後にか弱い女の子の叫びのような声を上げて、爆発を扱うあの女は勢いに流されて激しく吹き飛んでいく。その姿を遠巻きで見ながら、俺も比例するように離れていく。

そしてお互いに地面に身体を打ち付けて、激しい痛みを我慢しながら何とかその場を

立ち上がる。するとレナがしてやったりといった表情で、悪役のような笑みを浮かべながら歩いてきた。

「はあ……………！ はあ……………！」

「つたく、無茶しすぎだぜ大将。相手が女だからって加減すんなよな」

「うっせ……………俺だって色々と思うところがあるんだよ」

ジンジンと痛む右拳を抑えながら、徐々に身体強化に使っていた能力を解除する。

ゆっくりと心を落ち着かせながらあの爆発女に向かつて歩いていくと……………彼女
は起き上がることなく完全に気を失っており、静かに眠っていた。

「特にアンタにや恨みはねえが、俺たちの目的を邪魔するなら払い除ける。だがまあ……………なんだ、敵としてじゃなくて……………男として謝つとく。悪かったな」

彼女を抱えあげて、近くの岩場に背中を寄りかからせ、投げ捨てた上着を上から羽織らせる。

「行くぞ、レナ」

「アンタただけ女に甘えんだよ……………こりや都は苦勞しそうだな」

「そうだ都だ。とにかく急いで向かわないと本当に間に合わなく——

「待ちなさい……………」

気絶したと思い込んでいた爆発女を後にしてその場を一刻も早く去ろうとしていた

ら、弱々しい声で声をかけられ止められた。

「なぜ……私を殺さないの……」

「……………俺がお前を殺す理由がない」

「私は君を殺そうとしたのよ？ それにお友達にも手をかけようとした。1歩道を間違えれば誰かが殺されていたかもしれないのに……」

「そうだな、お前がやろうとした事は正直俺も癪に障るよ。実際に目の前で誰かを殺されなんかしたら、間違いなく躊躇うことなく俺はお前を殺していたと思う」

「じゃあなぜ……………」

「うつせえな……………俺はもう人は殺さねえ。ただそれだけだ」

決して振り向くことをせずに、最後の会話を終えて俺は仲間たちの元へと進む。

「……………よかったのかよ大将。せめて動けねえようにでもしとけば安心なんじゃねえの？」

「俺はそんなSMプレイには興味無いんだ。俺が縛られる側なら喜んで受けるがな」

「気持ち悪っ」

「おい」

そこからみんなと無事に合流して、とにかく走って追いかけてようやく決めた時に、またあの爆発女が声をかけてくる。

「あなたはっ!!」

「んだよアイツしつけえな……やっぱ黙らせとくか? 大将」

「やめとけ」

ポンつとレナの頭に手を乗せて、ダメだと躡けるようにくしゃくしゃつと髪を乱す。するとレナは嫌そうに頭を振り、軽く髪型を整えた後にフードを被り直した。

「あなたは……近衛 悠を倒しに行くの?」

「……………勘違いすんな、俺は戦いに行くんじゃない。大切な人を取り戻しに行くだけだ」

「……………もし、近衛 悠との会話でチャンスがあれば、千愛せらという子が幸せかどうかだけ……………聞いて欲しい……………」

なんだ? この変わり様は……………さつきまでのオーラとは全く別人のように態度が変わったが……………

「オイオイオイオイ……………テメエ頭沸いてんのか? 散々オレたちを殺す気で襲っておいて負けたら頼みを聞いてくださいだあ? 随分と調子がいいこと言い出すじゃねえか

ああ? コラ」

「わかっている……！　今ここで私があなた達にどんな罰を与えられても構わない、だから……どうかこれだけ……！！　お願いします……！！」

「……罰を受けるのは当然の責務。貴女はそれ相応の罪を犯した。それに敵である貴女の願いを聞く理由もない。私たちを騙すのならもう少しマシな嘘を吐く事ね」

「おい希亜……」

「油断を誘い込んで不意打ちを狙うのは戦場では最も基本、それが原因でかつての人々が繰り返してきた戦争では何人もの命が奪われた。敵に同情をしていたら蓮太が殺されるわよ」

「希亜の言う通りだぜ大将、あんなやつ頼みなんていちいち聞く理由もねえ。さっさと都を助けに行くぞ」

俺たちよりも先陣を切るように先頭に立つレナは、心から興味なさげな態度であの女から背を向ける。

「心を鬼にしなさい。貴方には何よりも救わなければいけない人が待っているのだから」

それに続くように希亜も歩く。

「先輩……あの人のこと気になるのはわかるけど……あたしは流石に……今回ばかりは結城先輩たちの意見に賛成する……かな」

天ちゃんも若干後ろめたそうに、2人に続いて先を行く。

「蓮様、私も蓮様のお気持ちは重々承知できておりますが、今は先を急ぐべきかとの変わり様……私が申すのも些かおかしな話ではありますが、第1は疑うべきだと思いますわ。たつた数分でのあの豹変具合は……」

エデン香坂さんも、意見をはつきりと俺に言った後にみんなに続くように歩き出していった。

「蓮太、ここはお前に任せる。俺的には話を聞くぐらいはいいんじゃないか？　とも思っではいるんだが……全てが終わってからでもいいだろう。俺は九條の救出を最優先に考えるよ」

そう言っ走り出す翔を筆頭に、みんなが俺を待ちながらもゆつくりと歩いていく。確かに信用……というか、疑う気持ちは分からなくもない。あの戦闘は完全に失敗してたら俺たちは殺されていただろうし、間違ひなく敵だ。

でも……あの顔を見てみると、敵の姿が嘘なんじゃないかとも思ってしまう。

……話を聞くぐらいはいいか。

「いいからお前はそこで寝てろ、もし次に会うことがあれば……答えを教えてやるよ」

そう俺は言い残して、先を急ぐみんなの元へと走り出した。

背後からは「ありがとう」と聞こえた気がする。

そしてみんなに合流してからの第一声は……………

「呆れるほどの愚者ね貴方は。いつかその優しさが自分にとって悪い結果を作ったとしても…………知らないわよ」

「そんな時は…………またそんな時考えようぜ。もし本当に何か理由があつてあんなことを頼んできたんなら、その方が可哀想だ」

「本当…………貴方は優しすぎる。まあ…………それが良い所でもあるのだけれど」

なんて希亜の言葉だった。

魂の叫び 真

そしてとうとうたどり着く。強敵だった敵を乗り越え、誰一人欠けることなく全員でやっと到着した。

道中で見かけることがなかった高峰が気になるが……位置情報は発信し続けている。きつと隠れたりしながら上手く足止めをしてきているのだろう。

そういう意味でも、早くこの問題を解決してやらなきゃいけない。

しかし岸からは中途半端に船が離れており、タラップなんかがまともに使えないような距離じゃない。

俺の能力を使ってそれを踏み台にすれば辿り着けそうだが………それだと全員いけないな。

「あれが……みゃーこ先輩が乗ってる船………でつか」

「個人が所有していると考えると相当な大きさだよな、あれ」

そんな気の抜けた新海兄妹の会話が聞こえる。

「それにしても………ここから確認できる場所には、九條さんは見当たりませんわね」

「そうね、あの中を探すとすると………こちらに不利が働きそうね」
でも、そんな会話すらも安心出来るモノだった。

誰一人、近衛 悠という人物に対して臆していない。下手をすれば命に関わる戦いが起こるかもしれないというのに、誰一人助けることを諦めていない。

肝っ玉の座った奴らだ。

「当たり前だ大将。覚悟なんてモンは最初っからできてる。今更みんなを疑うんじゃねえよ」

「………そうだな」

レナは何を今更と言わんばかりに俺の肩を叩き、フードを外して俺の隣に立つ。

その横には翔と天ちゃん。俺の反対側には希亜と香坂さんがそれぞれ横並びに立って、ひたすらに船を眺めている。

そんじゃまあ……呼ぶか。

すう……つと大きく息を吸い込んで、俺は叫ぶ。迎えに来たぞと伝えるために。帰ろうと伝えるために。助けると伝えるために。

「みーやーこ—— ツツツ!!! 助けに来たぞオオ—— ツツツ!!!」

風に乗る、空を駆け巡るが如く響き渡る叫び。

それから2人が姿を現すのはさして時間はかからなかった。

俺たちの見つめる先のデッキに並ぶ2人の人影。その人物は予想通りの悠という名の御曹司様と、都だった。

ゆらゆらと揺れる船の上から俺たちを見下ろしている。

「凄いね君のお友達は、こんな所まで追いかけてくるなんて凄まじい執念だよ」

「……………ええ」

都の肩に腕を回して、必要以上に密着しているその態度は……見ていただけで腹が立つ。

「だけど、俺はまだ答えを聞いていない。俺たちはもちろん都を助けに来たつもりだが……………」

「いい加減に諦めたまえッ！ 都はもう君の顔なんか見たくもないんだ！ だからわざわざ白巳津川から離れる為にこの船を用意したんだぞ！ 何時まで僕の彼女を苦しませるつもりなんだッ!!」

「その苦しみから救う為にやってきたんだよッ!!」

あの男の腹の中は十分すぎるほど理解出来た。どれほど腐っているかも、どれほど狂っているかも。

だからこそ俺はあんなやつからは助けたいと思った。これから先の未来、都がどんな人を好きになっても構わない。俺は都が誰に惚れているか知らないけれど、以前言っ

いた好きな人と無事に結ばれて本当の幸せを味わって欲しいから……助けたい。
絶対に、今お前の隣にいるソイツとだけは幸せになれないから。

「もうやめてっ!!」

都の少しガラガラになった叫び声が響いてくる。

何度、そうやって叫んだんだ？ 何を何度も叫んだんだ？ あの時の俺に向かって放った言葉や、今の言葉だけじゃそこまで喉を痛め付けることは無かったはずだ。

……やっぱり、辛いんだろ？

「どうして……そこまでしつこく追ってくるのツ!? 私はもう貴方たちの事なんか忘れないのにツ! 二度と現れないでと伝えたでしょうツ!」

「なんで……何度も何度も私の前に現れるの………!!」

強く唇をかみ締めて、祈るような目つきで俺を見る都。

本当に、何かを我慢しているのは丸わかりだった。

そんなの決まってるんだろ………!! そんな男と一緒にいてもお前は幸せにはなれないからだ!

一生そうやって自分の心を殺して生きていくつもりのお前をここで見放したら、お前はこの先ずっと泣き続ける!

そんなの………そんなの………!!

「好きな人には笑ってほしいじゃねえかつ!!!」

「——ッ」

その言葉を彼女が聞いた時、より強く唇をかみ締め、拳をキュツと握り、強ばった顔で真っ直ぐに俺を見つめてきた。

「この先お前が何度俺から逃げようとも、何度俺を拒絶しようとも、何度でも何度でもお前を奪いに行くッ！」

「何年かかろうが何十年かかろうが、ジジイになっても歩けなくなっても、死ぬまでお前を追いかけ続けてやるッ！」

「お前が心の底から笑顔になれるその日まで、俺は絶対にお前に見捨てないぞッ!! わかったか馬鹿野郎ッ!!」

だから言ってくれ。

「つたく……俺じゃなくて俺たちだろ大将^{バカ}」

都の本心を。

都の想いを。

もう我慢するな、お前が何を背負っているかは分からないけれど、願ってもいいだろう？

俺達も無事で、背負っているものも無事で、自分の幸せも感じられる……そんな明るい未来も。

ごく普通の誰もが夢見る幸せを。

「後は……お前次第だ、都ッ!! 俺はまだお前の本心を聞いてねえッ!!」

顔を俯かせ、プルプルと震える体を両手で支えて必死に堪える都。今はきつと戦っているんだ。自分自身の心と、背負った《何か》と戦う心を。

そんな都からはぼろぼろと涙がこぼれ落ちているのが見える。

後……もう一押し……ッ!

「九條……!」

「九條さん……!」

「……」

「都」

「みゃーこ先輩……!」

「都ッ!!」

！
すぐにも駆け出してやる。お前がそれを望んでくれたのなら、俺は、俺は……………

だから聞かせてくれ、都！

俺は聞き逃さなかった。ひたすらに彼女を信じて、追いかけて続けたやつとそれが聞けたんだ。聞き逃すはずがない。

大丈夫だ、安心しろ。どんな結果になっても、どんな事が敵になっても絶対に見捨てないから。絶対に守り通すから。

絶対に……………救ってやるから。

「助けて……………！ みんな……………ッ！」

……………。

「やつと……………言ってくれたな」

簡単にかき消されそうなほどに、か細い声だったけど……………ちゃんと俺たちの耳には届いたぞ。

「これで目的はハッキリとしたな、大将」

「九條さんの心の声、私にもわたくししつかりと聞こえました」

「やっぱりそれが本心なんだな、九條」

「よーし、絶対あたしが助けるからね！ みゃーこ先輩！」

「始めましようか、私たちの仲間を取り戻す為の戦いを」

もう既に御曹司様は紋章を片目の辺りに浮かべて、戦闘態勢を整えている。こりや戦闘は避けられそうにないな。

「ああ……そうだな」

俺も、いや……俺たちも各々の能力を解放し、その身体に紋章を浮かばせる。

背中や胸、片目や片手にそれぞれの力を。

「待ってろよ都、すぐに行く!!」

天月蓮の戦い

「さて、問題は………どうやってあそこまで向かうかだよな」

不意にそんな翔の疑問が飛び交う。

「だな、オレは一旦消えりやいいとして………大将は能力使って足場を作れば簡単に迎えるが」

「全員がああ船に乗り込むとなると難しいわね」

と、その時、俺たちの背後から何者かがやってくるような足音が聞こえてきた。

「おいおい………ケールの奴がやられたって聞いたから来て見りやお前………こんな人数いたのかよ」

声の方向へ振り向くと、仮面をつけて顔を隠した男が気だるそうにして俺たちを見ている。

「え？　誰………あの人」

「存じ上げませんが、恐らくはあの方々との面識がある仲間と考えてもよさそうですね」

「……そうね。もし推察が正しければ実力もかなり高いと見ていいわ」

俺たちが倒した敵つてのはさっきの女だけだ。だとするとコイツもI O 5とかいう組織のメンバーだろう。

能力不明で実力も未知数。厄介だな。

「そんじゃま、二手に別れますか。大將は都んどこ行かせるとして……誰が残る?」

「私がこの人の相手をするわ。蓮太が先へ進む以上は私が残らなければ勝機は薄いでしょうし」

「では私も、任せて下さい、退路は確保しておきますので」

「だったら俺も残る。女の子だけに任せる訳には行かないしな」

そう言つて香坂さんと希亜と翔の3人が船に背を向け、仮面の男と対峙するように並ぶ。

「……え!? それじゃああたしは!?」

「天はオレたちと船に乗り込む係だな、頼りにしてるぜ?」

「え!?! ちょ!?! あたし空飛べないんですけど!?! 存在感よく薄くなるだけなんですけど!?!」

「ゴタゴタ言うな! ほら、行くぞ」

あたふたとテンパる天ちゃんをレナは軽々と抱えあげる。それから俺の能力を使つ

なんて訳の分からない会話をしながら、随分と派手にあの2人は船へと乗り込むことに成功した。

……あの、一応真剣にやって貰えますかね………一応俺にとつては結構真面目な状況なんだけど……

「何故天が関わると全てが騒がしくなるの……」

「俺に聞くなよ……俺だってリアクションに困ってんだから……」

「あらあら、緊張しているよりは随分と安心できますわ」

「いやほんつとすみません、ウチの妹が……」

……いや、一応こっちのレナも悪いっちゃ悪いなコレ。

「まあいいや、とにかく俺も行ってくる。死ぬなよお前ら」

「私たちの心配よりも、九條さんの心配をしてあげなさい」

「……ああー！」

レナと天ちゃんに続くように、俺も足場を作って船へと乗り込んでいく。

あの場を任せるのも個人的には納得がいかないが……これはしょうがない。最悪レナをあつちに向かわせたりも出来るし……一応いつでもカバーできるように注意はしておこう。

びよんびよんとレナの真似をするように俺も軽く鏡を足蹴にしていき、2人とは遅れ

て船に乗り込む。

「よつと……………」

「随分と賑やかな登場だね、竹内くん」

「その方が都が笑ってくれるかと思つてな」

「彼女が笑う時は、君がいなくなつたその瞬間さ」

ポンつと男は都に軽く触れると、なにかの能力を扱つたのか、都の身体は吸い付くように鉄製の壁へ引つ張られ、ピタリと固定されたかのように張り付く。

若干痛がる仕草を見せながらも、都は壁から離れようと身体を動かすが……力を抜いた瞬間に再びピタンと張り付いてしまつていた。

「今は邪魔だよ、都」

「つくづくクソだな…………お前」

あの能力はだいたい予想はつくけれど……………ダメだ。まともに考えるな、平常心が崩れる。

「いい顔してるよ竹内くん。まあそんなに意気込んでも君じゃ勝てないけどね」

「勝てるさ」

少し離れた場所にいたレナと天ちゃんが、言葉を返しながら俺の方へと歩いてくる。

「大将一人じゃねえからな。オレと天がいる」

「危うくその《オレ》だけになるところだったけどね」

「レナ……白ちゃん……」

「白ちゃんってなんだ!? あたしやあパンツか!? パンツの色が白だから白ちゃんなのか!? おうおうおう表出る! ぶん殴ってやるう!」

やっべ、口が滑った。

……ダメだ、なんでかわかんねえけど天ちゃんが近くにいたらどうもイマイチ気持ち
が切り替わらない……

「大将……しつかりしろよ、こんな時にまで変態を出すな」

「変態じゃねえよ! ちよつとMなだけだ!」

「変態じゃねえかよ」

いや確かに今のは俺が悪いけれども! もつとこう……注意の仕方があるだろ!

「あははっ! 君たち本当に面白いね」

パンパンと手を叩きながら完全に油断している男。うん……なんかチャンスっぽい。

「とにかく、俺が先陣切るからレナと天ちゃんんでバックアップお願い!」

特に作戦なんてものはないが、とにかく今なら不意の一撃を与えられると思い、最低
限の言葉だけ伝えて前へ出る。

そこから1度だけフェイントを混ぜて、俺は力を込めた右拳を相手の顔へと繰り出し

た。

……が。

まるで予めそうすることを知っていたかのように、御曹司サマは俺の拳を片腕で掴んで止めた。

「見えてるよ、竹内くん」

攻略法

「くっ！」

「左足の蹴り」

「ふっ！」

「右腕のフェイントからの左足の回し蹴り」

「くっそ……………」

「両手を地について……………」

「喰らえっ！」

「両足での蹴り上げ」

隙を与えぬ連続攻撃で数打ちや当たる戦法で挑んでいるが……何故か俺の攻撃はこの男には当たらない。まるで俺が次に何をするかわかっているかのように最適な防御法でそれぞれの蹴りを受けられていく。

「当たれ……………ッ!!」

空振った最後の蹴り上げの流れに身を任せて、両腕のバネを使った反動で身体を相手

の方へと浮かして、両足のハサミで交差させるように蹴り挟む。

……つもりだったが、それすらも事前に読まれていとも容易く避けられ、逆に俺が腹部に強力な蹴りを入れられた。

「ぐふッ!？」

「君は僕を嫌うだろう。近づきたくないほどに……」

思わず怯んでしまったその瞬間に、俺に優しく手のひらを当てると、相手は肩に紋章を浮かばせて、何かの能力を使用する。

「反発^{リペリオン}」

その言葉が聞こえた瞬間、俺の身体は自分の意思とは裏腹にこの男の反方向へと飛ばされた。

バイクに乗っている時に似ている感覚を感じる最中、その勢いは留まることを知らずにどんどんと加速していく。

「……んだっ!? これ……ッ!？」

そしてそのままレナ達の背後に山積みになっていた沢山の荷物に激しく叩きつけられるようにぶつかった。

「大将ッ!」

「先輩ツ!？」

ガラガラと物が崩れる音の中に、あの2人が心配そうに叫ぶ声が混ざって聞こえてくる。

「問題ねえ……………生きてるよ……………」

あークツソ……………背中痛てえ……………

派手に叩きつけてくれやがってあの野郎……………

「厄介だな、お前の操るその《磁力》」

「じ、磁力……………!? え!? どうゆうこと!? なんで先輩が押してたのに飛ばされたの!？」

「押してなんかねえよ、大将の攻撃は全て読まれた。それに都や大将が飛ばされたのは反発と引き合いだ」

やっぱ強い。

そりやそうか、あんだけの実力の爆発女を従わせるだけのモノがないと上に立つ者として道理が合わない。

やっぱ俺は《オーバーフロー》を色々使ってみるしかないかね。

「反発……………」

「都と大将は磁力をその身体に纏わせられた、きつと条件はあの手のひらに触れること。」

だから都は引き合うように鉄製の壁に吸われて、大将はアイツから引き離されたんだ」
「もちろん逆もできるけどね、こういう風に………」

御曹司サマは俺に向かって片腕を向けると、再び紋章を浮かばせて能力を使用する。そして俺の身体はその腕に吸い付くように身体を宙へ浮かして再び飛んでいく。

「この勢いは殺すにはもったいない」

グツと腕を構えて、明らかに俺を殴ろうとする体制を摂る悠。

不味い……このまま殴られなんかしたら勢いがある分ダメージが跳ね上がる……！

「天！ 都の元へ行つて纏われてる磁力を消してこい！」

「えっ!? えっ!? そんな事急に言われてもどうしたら……！」

「いいからっ！」

仕方ねえ！ こうなったら鏡の能力を使って殴られる瞬間に壁を作るしか……！

「へえ……? そんな使い方もあるんだね、竹内くん」

「腕をぶった切つてやるッ!!」

目を見開いて、その瞬間を見極めるために意識を集中させていると、隣からレナが物凄い速度であの男に向かって殴りかかっているのがちらつと見えた。

「それを……止めろッ！」

レナは能力を止めさせようと素早く右足を繰り出してあいつを蹴ろうとするが……
「君が来ることも見えていた。竹内くんが気がついていたらね」

そしてその男がレナの顔を見た瞬間、一瞬何かがおかしいのか疑問を抱えたような表情を見せた。

「……………らあっ!!」

そしてその流れのままにレナは蹴りを繰り出して、またこの男は避けるのかと思つたが……………蹴りが当たるギリギリのところまで腕を盾にして何とか受け止めていたのだ。

「随分と重いな……………この蹴りは……………」

「想いが詰まつてるからよ……………」

引き付けられる磁力から解放された俺は、そのチャンスが無駄にしないようにすかさず攻撃を開始する。

わざとに反応されにくいように床に這い蹲るように姿勢を落として、不意になるように一撃を決める。

「うぐっ!」

……………当たった!

「まだまだあ!」

「オラオラッ!」

そこから先は俺とレナでの連続攻撃、何度も何度も殴りや蹴りを繰り返して、ちよこちよことお互いの場所を入れ替え、極力攪乱させるようにとにかく激しく移動する。

狙いを一点に絞られないようにお互いにフェイントを挟みながら、何度も何度も攻め続けた。

命中率は圧倒的にレナの方が高い理由は……やっぱりそういうことだろう。

あいつの心理を読む能力。確かに強力だ、俺が次に何をどうするのかなんて全て読まれている。だから今まで避けられていたんだろう。

けれどコイツはレナの思考を読めないんだ。理由は分からない。幻体だからといってもレナにはレナの意思がある、だから読まれてもおかしくは無いが……

俺の攻撃だけはほぼ完璧に防がれてしまっている事から考えて、レナに心理を読む能力を使っても、俺の考えを読んではまっているんじゃないだろうか？

「ふんっ!!」

「邪魔だッ!!」

そんなことを考えながらも、力の限り思いっきり殴ろうと拳を振るうと、今度は磁気の使用されて、俺の身体は強く都たちがいる壁の方向へと吹き飛んでいく。

「えええええっ?!?!」

先輩がなんかすげえ勢いで飛んできてるっ?!?!」

「グッッ!!」

ボコッと軽く壁が凹む程度には激しく身体をぶつけて、そのままズルズルと引きずられるように背中では壁に引っ付いたまま重力に従って落ちていく。

「えっ!? えっ!? すごい音したけど大丈夫っ!」

「れ、蓮太……くん……!」

「だいぶ痛てえけど……まあ大丈夫……、それにわかった。アイツを倒す方法」

今の衝撃だ。俺が激しく叩きつけられた時、明らかに磁力が弱まった。

つまりは自己滅磁を起こしてることだ。要はアイツに触れられた俺と都は磁石のような物、ということは人間基準のキュリー温度に達すれば磁気は消滅できる。

幸いレナがアイツにとつての「天敵」であるから、1対1でもいい勝負に持つていているが……、それにしても悠はシンプルに強い。能力抜きにしても俺よりも遥かに戦闘慣れしているような動きだし………意外と一発一発が堪える。

「た、倒す方法って……?」

「考えがある」

目を瞑って《オーバーフロー》を自身の肉体に使い、あの時のように強制的に火事場の馬鹿力を引き上げて自分の運動能力を向上させる。

そうするとまた同じように段々と身体中の体温が上昇していき、ぼたぼたと汗が流れ始める。

「またその能力……!? 先輩! それってどういう……」

「《オーバーフロー》……つつても分かりにくい。要は力の限界の100%を壊してそれ以上に引き上げる力。それを俺自身に使ってる。だから身体中の細胞を無理やり超活性化させて激しく働かせてるから長時間運動した直後みたいに身体が熱くなってるんだ」

「うわ……凄い湯気……先輩今何度くらいまで……」

「さあ……? 38度以上はあると思う」

だからこそこういう使い方をしたら頭はガンガンするし身体はだるくなるけどな。

一瞬でもだいたいぶキツかったんだ、これは切り札として使いたかったけど……状況が変わった。

切り札はレナだ。

「ごめん都、汗臭いかもしれないけど……少しの間だけ我慢してくれ」

そう言つて、壁から離れることに成功した俺は、一応軽く汗を拭いた後に未だ張り付いたままの都に向かつて優しく抱きしめた。

「え……? あつ、れつ、蓮太くんっ!」

「え? なんか急に目の前でイチャコラされたあたしはどうしたら……?」

「一応あの2人の戦いを監視してて、そんな時間に時間はかからないと思うから」

一応都に負担がかからないようにゆっくりと壁から引き離しながら身体の熱を移していき、ゆっくりと磁気から解放していく。

「で、先輩たちは一体何を？」

「キュリー温度って言ってな、磁石には熱に耐えられる限界温度があるんだ。それは相手によって限界の高さが変わるんだけど……人間俺たちならそんなに高い温度は必要なさそうなんだ」

「あつ……身体が……」

なんて説明をしている間に、簡単に都の体から磁気を取り除くことに成功した。

よし、これで逆転できる。

「あの、あ、ありがとう……」

「まだ礼を言うのは早いぜ？ こっからはアイツを止める。どの道アーティファクトを回収しとかねえといけねえしな」

都の能力で奪うにしても相手にあかも暴れられちゃ危険だ。どの道一度動きを止めるしかなさそうだし……

「じゃあ急いでレナちゃんの加勢にいかなきゃ！」

「待て、策もなしに突っ込んだら今の二の舞になる。作戦があるから……俺の説明した通りに2人とも動いてくれ」

「その作戦って？」

「まずは……………俺を消してくれ天ちゃん」

怒りの鉄拳

「せ、成功するかな……？ あたし上手く自分の能力使えるかわかんないんだけど……」
「私も、そんな使い方は試したことも無くて……」

一通りの作戦を伝え終わったあと、オーバーフローの出力を抑えつつ、2人の準備を待っていた。

「確かに出来るかどうかわかんないところはあるけど、まずはやってみようぜ。この作戦も気づかれたら最後だ。だから慎重に頼む」

「でも、この作戦もあの人に簡単にバレちゃうんじゃないの？」

「まあ……読まれたらバレるな」

……やっぱ相手の心理を読む力って反則だろ。思惑が筒抜けだなんてどうしようもない。

バレないように上手く立ち回るしかない……か。

「……………大将ッ!!」

唐突に聞こえてきたレナの呼び声に思わず反応すると、悠は俺たちに向かって両腕を

突き出すように構えて肩から凄まじい光を放って何かの準備をしている。

そしてその両腕の間にはバチバチと翠色に弾ける磁力の塊が唸っていた。

あれはまさか――

エレキキャノン
「電磁砲」

それを認識した瞬間、1度レナを魂の中に引込めて、すぐさま俺のすぐ隣に出現させる。

「波ッ!」

その理由はもちろん、後ろの2人を守るため。

フル・リフレクション
「全反射鏡オーバーフローッ!!!」

俺たちを狙って真っ直ぐに飛んできた電気と磁力が大量に圧縮された砲撃を、レナと2人で壁を作りその能力を更に強化する。

二重で作った鏡の壁に、オーバーフローで更に強度や範囲を広げてより強くより大きくして守るが……………

反射した攻撃諸共あまりにも破壊力があるその波動に打ち消され、どんどん鏡にヒビが入っていく。

「もう……………! 持たねえ……………!」

「大将、チャンスは今しかねえと思わねえか?」

「チャンスって……お前何を……」

「耐えるのは無理だが逸らすことは出来る。だったらさっきの作戦に変更を加えてオレを混ぜるんだよ」

「んな事言っただって……!」

と油断してしまったその時、鏡の割れる音がした。

《視点切り替え》

「はあ……はあ……！」

僕の最高最大の秘策。その辺の大きめの瓦礫を弾してレールガンの原理を利用した攻撃、その名も電磁砲。^{エレキキャノン}

アイツらが何か妙なことを企んでいることは気がついていた。なぜなら僕と戦っていたあのフードの女、あの子に能力を使うと竹内^あくん^{バカ}の思考が読めたからだ。

だから固まっていたことを利用してあの場で確実に殺すためにこの技を使った。

生身の人間がこの技に耐えられるはずがない。都ちゃんでもうちよつと遊んであげたかったけど、今僕はあるのフードの女の子の方が凄くそそる。

恐らく助けるために駆けつけたんだらうけどあの距離じゃ間に合わないだらうし……絶望しているところを追い詰めて発散しよう。

「僕の……勝ちだ……！」

かなり強気な子だったからな、心をズタボロに折った時の反応が楽しみだ。

フードの子が絶望顔で涙を流しながら僕に懸命に奉仕をするその姿を想像したら

……

「ひひっ……！ うひひひっ！ ひひひひひひっ！！！！」

ダメだダメだ……勃起してきた……!!

もう都ちやんなんてどうでもいいや、早くあの子で遊びたい!

高揚する気持ちを何とか抑えつつ、爆煙が広がる場所へ向かおうとすると……船が大きく揺れ始めた。

「……しまった、この船の耐久性の事を考えてなかった」

あれだけの高威力なビームを派手に当てちゃったんだ、もう壊れてしまっても仕方がない。

まあ別にまたいつか買えばいいし。そんな事よりもあの子はどこかな♪

「……悠ッ!!」

遠くから聞こえてくる船の内部からの爆発音に混ざり、目の前の黒煙から竹内蓮太が勢いよく飛び出してくる。

「……!!」

彼は小賢しい動きで翻弄しつつ僕に向かって何度か殴り掛かり攻撃を当てようとするが………さっきの変な壁の力で力を使い果たしたのか、能力を使うまでもなく見切るレベルの遅さだ。

「どうしたの? 随分と力がないじゃないか。それじゃあ僕に勝てないよ?」

僕の方もさっきの技でかなり消耗してしまったけれど……この程度ならまだ僕の方

が上だ。

「ふぎけんなよ……！ テメエなんかオレがぶつ倒してやんよ!!」

それから何度かの攻防を繰り返し、お互いに腕や拳を抑えて動けなくなる。

「お友達が死んで怒る気持ちはわかるけど……気がそぞろのままじゃあ勝機はないね」

「……………誰が死んでるって？」

……？

今コイツ……口を開けていないのに喋った？

そして唐突に、僕の目の前にいる竹内蓮太はニヤリと口角を上げ、口を開く。

「今だぜ？ 大将」

そして目の前の竹内蓮太の背後から、もう一人の竹内蓮太が飛び越えるようにいきなり現れた。

「解除ツ!!」

すつかり晴れて視界が良くなった奥側の方から、銀髪の女の子が手を銃を構えるようにして、能力を使っている。

「しまつ——」

気がついた時にはもう遅かった。僕が煙の中から出てきた最初に戦っていた竹内蓮太は、モザイクがかかったかのように白いモヤの中で徐々に見た目が切り替わり……あ

のフードの女の子に姿を変えた。

いや、戻ったと言うべきだろう。

そして動けない僕の背後に回った竹内蓮太は、ブチブチと音の鳴る力の込めた右腕を、振り向きざまに全身全霊の一撃として僕の顔に叩きつけた。

「く……………たばれッッッ!!!!」

その拳が当たった瞬間、バキバキボキボキと骨が碎ける音が脳内に再生され、強く顔にめり込んだ拳に抗うことが出来ずに、元々煙が上がっていた方向へと吹き飛ばされた。

「おはっ?!?!」

視界がぐらつく。

痛みが全身に駆け回る。

歯が何本か抜けてしまつて口から血が止まらない。

顎が碎けた。

鼻が曲がった。

耳鳴りが酷くて何も聞こえない。

嫌だ……死にたくない。

死にたくない。

嫌だ。

嫌だ嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

ドサツと激しい音をたてながら転がり込んだ僕は、ある何かにぶつかってその勢いを止められた。

そしてぼんやりと見える視界に見えたのは、僕を見下ろす都ちゃんの姿だった。

「おねがひ……………！ みやほしちゃん……………!!!」

「たひゆけて……………!!!」

脱出

《視点切り替え》

「……………ッ!!!」

アイツを殴り飛ばしたあと、ミシミシと軋む腕を我慢してみんなに気づかれないように隠す。

「無茶するからだ大将。オーバーフローを80%も使いやがって……………しかも感情がブレてて殴った瞬間は140%くらいにまで引き上がったぞ」

「……………くっ!」

「明らかに骨を折ってるな。つたく……………やれやれだぜ」

全とお見通しの呆れたような様子を見せるレナと2人で吹き飛ばされた悠の場所まで歩く、するとコイツは思いのほかポロポロになっており、涙を流しながら都に助けを求めていた。

「おえがい……………! みやほしちゃん……………! はすけて……………!!」

「コイツ……………この期に及んで都に助けを求めたあ、ほんつとに頭にくるぜ……………」

「おえがい……………！ おえがいひます……………!!」

一瞬都と視線が合う。

「俺は許したくねえ。コイツが都にしてきたことは許されることじゃねえし、許す気もねえ。けれどそれは俺が決めることでもねえ。だから都に任せる」

そうして俺は無様にぶつ倒れている悠の顎を抱えて、砕けて外れていた骨をガコンつと音を立てて治す。

その間にも俺たちが乗っている船は小規模の爆発を繰り返しながら激しく揺れ動いていた。

「ね……………ねえ！ 早くしないとこの船もたないんじゃ……………!?!」

「レナ、天ちゃん連れてみんなの元へと向かってくれ。場合によっちゃあ加勢の必要もある」

「……………ああ」

ヒョイツと天ちゃんを持ち上げて、レナは特に俺たちを気にすることなく姿を消した。

「おねつ……………お願いします……………！ 助けてください……………！ まだ死にたくない……………！」

「……………それを決めるのは俺じゃねえよ」

「都ちゃん……………！ 本当にごめんなさい……………！ もう何もしないから……………！」

いつまでも口を閉じ続ける都に、悠はひたすらに懇願する。謝罪を重ね、涙を流し、いつまでもいつまでも助けを乞っていた。

そんな都の重い口が少しずつ開いていく。

「……………立てますか？ ……ここは危ないですから、ひとまずは船から離れましょう」

「……………やれやれ」

ま、なんだかこんな事になるような気はしてたけどさ。俺が知らない部分でも都は色んな嫌なこととされてきただろうに……

でも、確かに見殺しにするのとは訳が違う。許せないからって殺すのもおかしいって判断したのなら……………それに従うさ。

「一旦避難したら……………キツチリ説明と謝罪をしてもらうぞ。警察にも突き出す。それ相応の覚悟をしとけ」

問題は証拠があまりないってことだが……………まあ最悪都たちから身を引くことをさせたらいいか。……………いやダメか？

なんて考えながら、無事な方の左腕をさし伸ばして悠の身体を起き上がらせる。随分と派手に顔面を怪我しているが、動くこと自体は問題なさそうだ。

「ああ……………ありがとう……………」

そして都を連れて岸に向かって歩き出そうとすると――

「……………つてんなわけねえだろツ!!」

完全に油断しきつて背後を見せた瞬間に後頭部と強く殴られ、その衝撃が脳内に強く響いた。溜まっていた疲労もあり、俺にとつて十分すぎるダメージになったそれは瞬間に俺の身体を怯ませて、思わず前のめりになる。

「…………ツ!?!」

そしてそのまま悠は俺をデッキの床に叩きつけ、身動きが出来ないように跨り、さすが両腕で俺の首を強く締めた。

「一般庶民が調子に乗りやがって！ 僕を誰だと思っているツ!!」

「かっ……………!!」

「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる!!!」

どんどんと俺の首にくい込んでくる指。

呼吸のできない苦しみ。

それに俺の右腕を踏むように跨られているせいで、砕けた骨が更に傷を負い、その刺激が半端ない。

「お前如きに……………何故僕が負けなくちゃいけないんだ！ 僕はエリート……………！ 何をしても許されるんだ!! だから死ねッ！ 死ねッ！ 死ね!!!」

「……………ツ！……………ツ！」

何とかしてコイツをどかさうとできる限りで暴れて抵抗をするが………：………：体制が悪く、冷静ではいられない状況もあつてまともな返しができない。だからこそ俺はなすがままにするしかなかった。

「止めて！ 悠くん!! その手を離してッ!!」

都が大慌てで駆け寄つてきて、無理矢理にでも俺の首を掴んでいる手を離そうと奮闘するが………

「うるさいッ！ 退け！ ゴミ女がッ！」

片手を首から離して、悠は都に向かつて拳を振るう。

「うっ………！」

こいつ………：本当にどうかしてる！ 別に女の子だからってポリシーは持つちやいないがそれでも悪意のない人にここまで遠慮なく殴り払うことが出来んのかよ………！

「都に何してんだアッ!!」

隙ができた悠に対して左腕で何とか打撃を与え、よろけたその身体に複数回の追い討ちをかけて馬乗りになつていたコイツを突き飛ばす。

「ゴホッゴホッ………：………：だ………：大丈夫か?! 都！」

「私は大丈夫………、少し当たっただけだから、それよりも蓮太くんは………！」

「都のおかげで助かったよ、ありがとう」

だらんと力なく垂れ下がる右腕を尻目に、残った左腕で都を抱き寄せ、悠がいる方向へと視線を向けた。

やばい……

何がやばいって、俺は今《オーバーフロー》を自分自身に使って突き飛ばしたつもりだったんだが、とうとうスタミナが尽きたのか能力が全く発動しなかった。

考えて見りやそうだ。レナヤルナをほとんど1日出現させておいて、爆発女との連戦、それからこれだ。明らかに今までにないほどの無理な能力の使用頻度だ。

このまままた勝負に持ち込まれたらまずい……！

「蓮太くん……もしかしてその腕……！」

「問題ない問題ない、ちよつと力抜いてるだけ」

どうするどうする!? どうしたらいい!?

「もう諦める!! お前らも気絶させて売り飛ばしてやるからよ……! あの死んだ女の妹のように!!」

と、打つ手がなくありとあらゆる作戦を試行錯誤して考えていた時、連続して小さな爆発のような音が鳴り響き、俺たちの前にあの場に置いてきたはずの爆発女が舞い降りるように着地した。

「随分とボロボロね、竹内くん」

「お前……………爆発女……………」

長い髪を払うように片手で靡かせて、俺の上着を羽織ったまま俺に背中を見せていた。

「爆発女……………そんな呼ばれ方だったのね。私の名前は千紗。覚えておいて」

「千……………紗……………ッ!？」

「これは偶然か……………？」

「なんでお前はあの人と同じ名前なんだ……………!？」

「おいケール！ 戻ってきたのならソイツらを殺せ！ さつさとしろっ！」

「もう貴方に従う理由はないわ。妹がもうこの世にはいないのならば……………ね」

……………その一瞬で理解出来た。コイツの立場と関係性が。お互いに信頼関係なんてあった訳じゃない。きつと人質に近い形で利用され続けていたんだ。

コイツも……………被害者だったのか。

「それはそうと2人とも、この船長くは持たないわよ？ さつさと逃げた方がいいと思うのだけれど」

「逃げるつつつたつてお前……………！」

「安心しなさい。既に先の手は打ってある。近衛グループが秘密裏にしてきたことは全

て露見させた。証拠も十分すぎるほどに揃えてある。今、この場で起きている戦いも、彼女が経験した傷も、全て事実としてもうばらまいている」

「この事件で残りが必要なものは当人の証言だけ。ま、そうでなくても近衛 悠が今までやってきた事を考えると……あの人は生き残っても、もうまともな人生は送れないでしょうけど」

「なんで……そんな事をしてくれたんだ？」

理由があつたとはいえ俺とお前は敵対関係だった。直接戦いを経た事で多少なりとも恨みや憎しみがあつてもよかつたはずだ。

もちろんその関係性が望ましい訳じゃないが………

「……さあね」

「あんた……！　もしかして千紗姉——」

ドカンツ!!

俺の言葉を遮るように、すっかりボロボロになってしまった船が一際大きな爆発を上げる。

今にも壊れて沈んでしまいそうだ。

「早く行きなさい。あの子は私が責任もって面倒見るわ」

「……………！ 後で話があるから、今日の夜20時にニンボールへ来い！ 絶対だぞ！」

「……………行けたらね」

そんな最後の言葉を聞いて、都の手を掴んで船の外へ出るために2人で走る。

「蓮太くん！ これでいいの!?!」

「わかんねえよ……………！ 俺だつて急なことで何がなんだか……………!!」

死んだはずの千紗姉が生きてるかもしれないなんて……………思ってもみなかった。

自然と涙が溢れそうになる。

「でも、託された。俺はお前を死んでも守るッ！」

左手で都を抱きかかえて、手すりを足蹴に海に向かって飛び逃げる。このままだと海に落っこちちまうが……………

「レナッ！」

「おうよっ！」

スタミナの消費が微量で済むレナを空中で出現させて、レナの足に乗るように体制を整える。

「後のことは知らねえぞ……………！ オレももうそろそろ限界だッ！」

「最後まで悪い！ 終わったら存分に休んでくれ」

「ほらよっ!!」

明らかに岸へと足りていないこの距離を、レナの強化された蹴りに乗って弾丸のように飛ばしてもらおう。

この勢いなら何とかたどり着けそうだ。

そうしてレナを魂の中に戻すと、背後の船から今までで一番激しく大きい爆発が起き、その爆風によって更に加速した俺は都を包むように抱きしめて、ゴロゴロと岸の地面を転がっていく。

「おっ！ ぐっ！ おおっ……!」

何度か勢いよく地面にぶつかってバウンドする体を全て俺が受け、ひたすらに都を守る。

その代わりにすっげえ痛い。

「はぐっ!?!」

最後に壁に背中を激突させて勢いが死ぬと、すぐさま都が無事かどうかを確認した。

「だ……大丈夫……? みや……! さん……!」

「痛た……何とか……大丈夫です」

腰を抑えてその場を立ち上がる都の状態を軽く確認して、俺たちはさつきまで立っていた船の方に視線を向けると……

激しく燃え上がりながらどんどんと海の底へと沈んでいった。

重なつた心

激しく燃え上がりながら、海の藻屑へと沈みゆく船を眺めて無事を祈る。

聞きたいことは山ほどあるあの女の人と、償うべき罪を持ったあの男の無事を。

「……………」

完全に沈みきってしまうまで、もしかしたらの可能性を信じてずっと待つてはいたが……………あの男も女の人も現れることはなかった。

なんとも言えない気持ち心が心の中を駆け巡る。

「きつと……………大丈夫だよ。色んなことがあつたけれど……………また、会える」

まるで俺の心情を察しているかのようなことを言ってくれる都にビックリとしながら、横にあつた俺と比べたら小さな手を優しく握る。

「ああ……………そう信じてるよ」

都はそんな情けない俺の手を力強くも優しく握り返してくれた。

「終わったんだよな……………アイツのことは全部」

「……………助かったかな。ちゃんと生きていてくれる……………かな」

「さあ。わからないけど……………最後に言ってくれてたみたいにな、何らかの手を打って都を解放してくれたらいいし、なんにせよそれを確認してから……………だよな」

秘密裏に行っていた。なんて言っていたから、近衛 悠は普段から犯罪に手を染めて複数の罪を犯していたのだろう。

あの発言からも、あの女の人の妹も売ったかのような反応だった。それら全てが露見したということは、オーナーであるアイツ自身はもちろん、会社も生きては行けないだろう。

となると自然と権力や地位は無くなっていき、警戒心を強めたコロナグループも距離を取ってくれると思う。

これで……………よかったんだ。

「……………っ」

すっかりと炎の明かりが消えて、薄らと暗くなる闇に包まれたその時、いきなり都が俺に顔を押し付けて抱きついてきた。

「……………っ！」

「どうしたんだよ、都。急にそんなことされたら照れる」

「……………！ 怖かった……………！ あの人とずっと一緒に暮らしていく未来を想像する度に怖くて怖くて逃げ出したかった……………！」

そんな冗談も通じないほどに、都は心の底を見せてくれている。

「でも、会社や家族みんなを潰すって脅されて……！ 蓮太くんもみんなも殺しちゃうって言われて……！ 逃げ出せなかった……！」

そんな都の頭を優しく撫でる。

「大好きな人にあんなに酷い言葉を言っちゃた事が……とつても辛かった……！」

自由に動く左手で、何度も何度も優しく撫でる。

「ごめんなさい……！……！ ごめんなさい……！……！」

彼女が流すその涙で、どれほどに大きなモノを背負っていたのかが感じる事が出来る。自分の行動一つで周りの人たちが絶対的な力の前に為す術なく無くなってしまうプレッシャーなんて……どれほどに辛いだろう。

どれだけ逃げ出したかっただろう。

どれだけ悩んでいただろう。

考えても考えつかない目に見えない恐怖は、彼女をここまで弱くしてしまったのだ。「都が謝ることなんてないよ。何も悪いことはしてないんだから」

ほんほんと頭を撫で終わると、半歩離れて彼女の目を見て気持ちを伝える。

「むしろ……今までよく頑張った。よく耐え抜いた。俺たちのために何もかも背負い込んで、全部引き受けてくれて……だからおあいこ、引き分けてことで」

「……………うつ……………うつ……………うつ……………」

「それにしても、都を守れてよかった。満身創痍だけど……………今俺の目の前に『自由』を手にした好きな人がいる。それだけで嬉しいんだ」

ある意味ではこれで良かったのかもしれない。

この事件をきっかけに、俺は彼女のことを好きだと理解することが出来たから。

「でも……………さ、都が助かる未来を掴む。これだけで俺は嬉しかったはずなのに……………今はちよつと違うんだ」

「建前を言えば、これから先どんな悪い人が都を狙うか分からない。アイツもまたなにかしてくるかもしれない。だからこそ……………なんて言ってみたりする」

「けど本音は……………その……………、やっぱり……………俺は都のことが好きだから……………さ。ずっと隣に立っていたい。今みたいに……………これからも」

そして本当に俺の事を好きと言ってくれたのなら、人生で最悪だった一日を、最高の一日に変えてあげたい。

「だから……………」

俺は止まれなかった。

全ての枷が外れた瞬間にこんなことを言うのはお門違いだとも思ったりしたが……………様々な想いが溢れてきて、気がつけばひたすらに言葉を紡いでいた。

涙でぐしゃぐしゃになっている都に向かって片膝をつき、姿勢を低くして見上げるように心を伝える。

「九條 都さん。貴女の事が大好きです。どうか俺と付き合ってください」

俺が話す言葉を途中で薄ら薄らと感づいていたのか、再びうるうる瞳を濡らしていた彼女は、真剣に俺の言葉を聞いてくれていた。

「これからどんな困難があっても、どんな大きな壁があっても、貴女を守り乗り越えてみせます。だから……俺の隣にいて下さい。俺の……彼女になって下さい」

本気の眼差しで都の瞳を見つめる。

今こんなことを言うのは……ちよつとアレだけどこの気持ちだけは、心だけは伝えたかった。

守りたいだとか、救いたいだとか、色々なことを盾に叫んできたけど、やっぱり意地でも助けたかった最大の理由はこれなんだ。

好きだから、大好きだから辛い目にあつて欲しくなかつたし、笑っていて欲しかった。でも……その相手は俺じゃないと嫌だったんだ。

俺と一緒に笑ってくれる都が……

「わっ……！ わたっ……しっ……も……！」

そんな時、都の口が開く。

耳まで赤色に染めながらも一生懸命に涙を我慢し、何かを紡ごうとするその姿は……可愛かった。

「本当は……！ 貴方の事が好きでした……！ 何をしてても一番に考えちゃって、思いつくのは貴方のことで……気がつけば毎日貴方のことを考えてました……」

恥ずかしがりながらも、彼女は気持ちを吐露してくれる。

「誰にも負けないくらいに大好きです。だから……その……！ お、おおお、お付き合……！ して下さい……ッ！」

ギョツと目を瞑って絞るように繰り返したその声は、頭の中がパンクしかけているんだなあと感じ取ることが出来る言葉だった。

俺が告白したのに、まさかの告白し返されたから。

そんな面白い返しにもしつかりと我慢して、今度は愛のある口付けをする。

ゆっくりとお互いの唇を近づけていき……

遂に2つの影は重なり合った。

2つの柔らかいモノが深く重なり、顔をかたむけて合わせ続ける。

緊張のせいで2人とも唇が震え、心音はどんとどんと高ぶっていく。そしてゆっくりと合わせた唇を離すと……1周回っておかしくなったのか、妙に落ち着きのある表情で、お互いに顔を見合せた。

俺と彼女の2度目のキス。

俺たちはお互いに心の底を知ったのだ。きつとこの繋がりには、俺たちを強く強く引き付け合うだろう。

そんなことが起きようとも、どれだけ離れようとも。

重なったこの想いは、二度と壊れることはない。

だからこそ、俺たちは心だけじゃなく、言葉も重なった。

「これから、よろしくお願いします」

「ずっと……大好きです」

事件の後

都と結ばれたあの瞬間から、それなりに時間が経過した。

無事に何とかあの仮面の男をとの戦いから生き残ったみんなとも合流を果たし、ことの事情を全て伝えた後にひとまず解散をする形となった。

けれど、結果的に協力してくれていた高峰は最後の最後まで姿を見せず、連絡の一つも返してくれなかった。どれだけRINGでメッセージを送っても、既読が表示されるだけで何も帰ってこない。

流石に画面を開いたままというのは考えづらいことから、一応生きてはいるんだと思う。

最後に確認できていた位置情報を頼りに探しては見たが、戦闘跡が残っているだけで誰もその場にはいなかった。

こうなったのなら仕方ない。これだけ探しても見つからなかったんだから……明日明後日学園に確認しに行くしかできることが無さそうだ。

そう判断して、次に俺が行ったことは都を家に送り届ける事。するとあの人が言って

いたとおりに多大な問題が多発したのか、深夜だと言うのに九條家の人たちは慌ただしく働いており、様々な対処などをしていった。

その内容まではわからなかったけど、ただ一つ理解出来たのは、都の両親もお祖父さんも仕事絡みの問題に対応しながらひたすらに心配していたのは娘である都自身のことだった。

彼女の無事を確認できると、涙ながらに彼女を抱きしめて、「よかった」と何度も何度も言葉をこぼしていた。

どうやら近衛 悠の行ってきた問題は本当に露見していたらしく、彼の自宅や関係者たちは、現在非常に厳しく捜査させられているとのこと。都の事も捜索依頼を頼み、警察たちが目を光らせて探している最中なのだという。

そして会話の流れで俺たちの知っている全てを説明し、ついでに都が付き合っていることをうっかり喋ってしまった。

今のこの流れからそれがバレたらまた新たな問題が出てくるんじゃないかとヒヤヒヤしていたが……俺のボロボロになっている右腕を見て、迷惑をかけた謝罪と、お礼を言われ、「娘を頼む」と彼女の父親からお願ひされた。

あんなことがあって、娘は誰にも渡さないと心に決めていてもおかしくないと思う状況で、俺を認めてくれたのはこの人の器の大ききさなのか、それとも都への信頼なのか。

この時は知る由もなかったが、後で都にその理由を聞いてみると、どうやら家庭でちよこちよこと俺の事を会話の中で伝えていたらしい。

明言はしていなかったが、実際にナインボールで見かけた事や、都自身の初恋の相手ということもあつて気持ちを優先してくれたのではないか？ との事だった。

そしてそれから俺の右腕の治療、都のお父さんが手配してくれた医師の急患としてまさかの往診してもらおうという贅沢を初めて経験した。

ものの数分で駆けつけてくれた医師は、テキパキと俺の腕を様々な方法で診ると外部の怪我の度合いにしては骨は意外と軽傷だということが判明した。

医師曰く、こんなバランスのとれていない骨折を見たのは初めてとの事。そんな結果になつた一番の理由は……おそらくルナだろう。

口や態度は悪いが、あいつはそういう事をしてしまうやつだ。

そんなこんなで入院を勧められたが、単純に療養生活が苦手だった為、やんわりと断り続けていると毎日の検診を条件に自宅では暮らしても良いと判断してもらつた。

他にも色々理由があつたが……とにかくこれで外へ出られる。約束は守れそうだ。

そしたら片腕とはいえ利き腕が不自由なら日常生活も大変だろうと言うことで、まさかまさかの都が俺の面倒を見るということを理由に怪我をしている間だけではあるが、俺の家で寝泊まりすることになつた。

これには……流石にド肝を抜かれた。仮にもあんなクズ男に翻弄されて娘が絶体絶命のピンチに陥っていたというのにこんなことを許していいのか？　なんて思ったが……最大限の信頼の証として受け取った方が良さそうだ。

期間限定の同棲生活、いつまで続くかはわからないが……せめて彼女が心に負った深い傷を少しでも忘れられるようにしなきゃ……と、強く思う。

それは友達として、人として、男として……彼氏として。泣かせる時は嬉し泣きだけにしようとして心に誓った。

「鍵は……持つてる？」

「ああ……このカードをかざせば……」

絶妙に扱いにくい左手を使って玄関の鍵を開け、俺たちは部屋へと入る。

「お邪魔します……」

割と大きな荷物を運んできた都を先に入れ、とりあえずリビングへと移動し、俺たちはちよこんと床に座った。

彼女がこの部屋の中にいることに違和感を感じながらも、頭の中では本当に色んなことが駆け巡る。

あの人たちの安否や仲間たちのこと、これからのコロナグループの未来やレナとルナの状態、都の心情や俺の右腕、腹も減ったし風呂も入っていない。

それよりも大きく感じたのは――

「ふあああ……………」

絶大な眠気だった。

普段からは考えられないほどに身体を動かしたし、頭おかしいほどに能力を多用した。

その反動もあつてか何も考えたくないレベルに眠たい。

「……………ふふ。大きな欠伸だね」

「悪い……………ちよつと気を抜きすぎてたかも」

時刻も深夜三時を過ぎている。明日学園に行かなきゃいけないことを考えても……六時……いや、六時半には起きておきたい。……………逆算したら二時間半しか寝れねえ

……

「ううん。そんな事ないよ、確かにたくさん考えちゃうこともあるけど………今は大丈夫じゃないかな？ 休んでも」

トコトコと俺の隣まで歩いてきて、横並びになるように都は近くに座ると身を任せるようにして寄り添ってくる。

「それに、今日一日は本当に頑張ってくれたから、休んで欲しいな。本当に、本当にたくさん頑張ってくれたから……」

「……頑張った甲斐はあったよ、都と一緒になれたから」

こんな時に、いやこんな時だからか、まるで今この瞬間だけは色んなことを忘れるように甘えてくる都。

……考えても見ればそうかな。ずっと押し殺してきた気持ちをやっと隠さなくてよくなったんだから、満足するまで受けていよう。

彼女の素直な気持ちを。

「でも、流石にこのままはずいよな。付けてもらったギブスはしようがないとして………オーバーフローを使ったせいで汗の匂いが凄い……着替える前に軽く流すか」

異常なほど汗が出たからな。滝かと勘違いするほどだった。

洗うのは朝でもいいとしても……さすがにこの状態で寝たくはない。

「都も流す？ シャワー使うなら先に入っていよう。その間に布団の準備しておくか

ら」

「え……？ いや、でも……」

「大丈夫大丈夫、別に変な事しないから。あつそれとも……後に入られる方が気になる？ それならパパつと済ませて直ぐに変わるけど」

世の中には色んな人がいるからな、誰かが使ったあとは嫌って人もいれば、自分が使った物を使われるのが嫌って人もいるだろうし、都がどつちか分からない以上は聞くしかない。

「そ、そういう事じゃなくて……！ その右腕の怪我が……」

「ああこれ？ いいよいいよそこまで気にしなくても、料理とか手伝ってくれるだけで大助かりだから気にしないでくれ、布団くらいなら片手でも十分に——」

「で、でも！ 片手だと……上手く洗えない………と思うの」

「………ん？ 洗う？」

手洗いうがいの事？

確かにさつき片手じゃ上手く洗えなくて結構時間がかかったけど………なんで今それなんだ？

「そ、そう……、それに、私は蓮太くんのサポート係だから………！」

あ、いや、うん。色々と助けてあげてとご両親に言われてここに来てるから………まあ、

うん。

「……………？ うん」

「へ、変な意味じゃないよ！ ただ単純に心配だから……………あの……………その……………」

なんか急にモジモジし始めましたけど……………え？ どしたの？

「……………どうした？ なんか居心地悪そうな感じが……………」

「も、もう！ と、とととにかく先に入って！ お布団の準備は私がしておくから！」

「え？ あつ、はつ、はいっ！」

もどかしい何かを振り払うように、若干何故か照れながらも優しく都は俺を脱衣所まで連れていく。

な、何が起こったんだ？ なんか都……………情緒不安定じゃない？ もっと優しくすべき……………か？

やっぱ辛いことがありすぎて精神がちよつとブレたとか……………俺の知らない精神病みたいなものがあるって彼女を取り乱しているのだろうか？

いや、でも無理している様子も特になかったし……………なあ……………

一応手早くシヤワーを済ませて、彼女を確認してみよう。そんでもっともつと彼女に気を使つてリラックスしてもらつて心を休ませてあげよう。

それくらいしか俺はできない。

そう言えば都、布団を準備するって言ってたけどどこに直してるのかなんて知らないよな？ それに服とかの着替えを入れている大きめのカバンを開けてたし、まずは持ってきたものを整理でもするつもりなのだろうか？

だとすれば、本当に汗を流すだけで済ませたら俺の方が早く事を終えられるかも？

なんて考えながら風呂場に入って不器用な左手でシャワーでお湯を被っていると

………

脱衣所の扉が開いた音がした。

どんどん深まる2人

軽めにシャワーで汗を流すつもりが、なんやかんやあつて結局普通に身体を洗い、風呂を済ませてしまった。

んや、別にそれはそれでいいんだが………やつちやいけないことしちゃった気がする。

ちなみに都はもう一度身体を洗い直す事が必要になったため、俺だけ先に上がることになった。

………流れであんなことになったとはいえこのタイミングはまずかつたのでは？
向こうから誘ってきたとはいえ俺たちはまだ一日目だぞ……!?

「………これから先、大丈夫だろうか……」

どんな理由があろうと欲に勝てなかつた俺の責任。そもそもとしていくら愛し合っているとはいえ彼女にとっては異性と風呂に入ることそのものがトラウマになってしまっているかもしれないのに、何故俺は止めなかつたんだ……!

彼女が入ってきてから気がついたとはいえ、交代するなりなんなりして傷の記憶を呼

び覺まさないようにするべきだっただろ……！」

あの時、都は苦い記憶を、幸せな思い出に変えたいって言っていたけれど、そのセリフが出ることはやっぱり無理しているって証拠じゃないか。

多分、本心で嬉しいとか幸せと思ってくれているのだと思う、けれど裏を返せばそう思わないとかなり苦しい状況にいるってことだろ？ そりゃあそうでなくても幸せってのは追い求めるのが普通ではあるが……

都の場合は状況が状況だ。少し急ぎすぎている気もする。

でもこれはあくまで俺の価値観の話で、都本人はそうは思っていない可能性も……

「……………交際関係になるって、こんなに大変なのか……!?!」

大切だ、特別だ。心の底からそう思ってしまったているからこそ、誰よりも何よりも彼女を優先してしまう。それはそれでまずいのでは？ でも全く気にするなってわけでもない。

賢者モードに突入してしまっているからか様々な思考が脳裏をよぎる。

「い、いや……………冷静になれ、まだ手でしてもらっただけだ。そういう行為をした訳じゃない。本番はこれから先、もつと仲良くなつて彼女の傷が癒えてからだ。うん。心に誓おう」

もう二度と誘惑には負けない。もし次に彼女がそういう素振りを見せてきた時は、も

うしようがない。その時は全てを話そう。お互いに意見を交わして2人で結果をだすのが大事なんだ。

ただもう一度だけ、試練を与えてください。この誘惑に1度でも勝てなければ、俺はダメなままだ。

……つーかあんなタイミングで反応すんなよ、バカ息子……！

ネットによく男の頭と下半身は別の生き物だと例える人を見かけるが、大当たりだ。ほんの少しだけでも意識してしまうと、誰よりも張り切ってバカになる。

「あ……もう、考えるな考えるな！ さっさと寝る準備をして早く休めるようにしてあげよう」

疲れているのはお互い様なんだ。まあ……今は都の方が疲れてるかもしれないけど、とにかく早く眠りたいはずだ。そうと決まれば……

重たい体を何とか動かし、テーブルを寄せて床に布団を敷き、アラームをセットしていつでも寝られる準備を整える。

そしてちようどその頃に、寝る準備を済ませて髪を乾かし終わったのであろう都が寝巻き姿でリビングへと入ってきた。

緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな緊張するな
!!!!

普通に話しかけるよ？ 俺！

そう！ 何も無かった！ 俺たちは風呂場で何もしなかった！！

「み、みゃこはベッドで寝て下さいね」

早速囁んだあああああつっつっつ！！！！

普通を意識しすぎてテンパったああああ！！！！

しかも何故か敬語になっちまった！ なんで!? 普通に「ベッドで寝ろよ？」つて言うだけじゃんか！ 童貞丸出しかッ！！

「ふっ、うん。ありがとう。でも……床じゃあ身体が痛くならない？ ベッドは蓮太くんのものだし、あれだったら——」

「ごめんなさい勘弁して下さい。これ以上は本当に変な気起こしてしまいそうなので床で寝させて下さい！ むしろもうこの部屋好きに使って下さい！」

はい、負けました。

所詮男はケダモノなのだ。

「あ、ああ……その……気にしないでいいよ……？ 私がしてあげたくて、その……しちやつただけ……だから」

「はううっ……！」

その優しさが心に染みる……！ もう……この子はほんと……！

キウンときた胸を落ち着かせるために1度深く深呼吸をし、どんと高鳴る心臓を少しづつ静めていく。

「なんかもう……ありがとうございます……何から何まで……」

ダメだこりや、もう俺は一生この人に勝てる気がしない。俺の心は弱すぎる。

こんなことをしている場合じゃないのに……さつきと寝なきや。

「とにかく……さ、もうすぐ朝になるし、少しでも長く休むためにもう寝よう?」

「それ……なんだけど……ほんの少しだけでいいから、隣に……いてもいい……かな?」

「……………うえ!?!」

寝るのに隣って……そういうことですよね!?! こんな初心な私に添い寝しろと!?!

え!?! なに!?! この子実は俺の事興奮させて殺そうとしてる!?!

とか何とか最初は思ったけれど、よく良く考えれば彼女は単に甘えたいだけなのかもしれない。

数日間とはいえ、誰にも頼らずに1人で戦ってきたんだ。相当なプレッシャーやストレスを感じながら一切の気を許さずにと。だからこそ父親や母親ではない、俺という特別な関係性の存在が出来たことで、その相手にしか出来ない癒しを求めているのではないか?

ましてやその人はあの時から。都が食事会をした日。もしかするともつと前かもしれない。

それだけの期間に想い続けた人と晴れて交際関係になれたんだ。色んな視点から考えても、寄り添うことが彼女にとつての最大限の癒しなのかも。

「まあ……うん、わかった。それじゃあ戸締りの確認と電気を消してくるから、都は先に寝てて。直ぐに戻るから」

「う……うん」

それから部屋を出て、玄関の鍵を確認し、廊下の電気を消す。そうしてリビングに戻り部屋の電気を暗い暖色の常夜灯に切り替え、都が先に入っているベッドに遅れて入り込んだ。

「……入るよ」

「は……」

ウチの電気は2種類の常夜灯機能があり、俺が普段使っているモードは数秒が経過すると直ぐに明かりが消えて暗闇になるといふもので、その機能が俺がベッドに入り込んだタイミングで作動し、一気に部屋が暗くなる。

けれどこれだけの近さの距離だ、少しづつ目が慣れてくると、ぼんやりと都の顔も見えるようになる。

風呂を済ませたばかりだからか、それとも緊張のあまりか、掛け布団を被せたばかりだというのに、もうかなり暑い。

それに、何度も匂って慣れたはずの香りがほんのりと鼻を掠めて余計に緊張を生む。

「右腕は大丈夫？ 寝にくかったり、痛かったりしない？」

「いや、今のところは大丈夫。どの道横になってないと寝にくいし気にしなくてもいいよ」

その代わりに貴女の美しすぎる顔が超近距離にあつてバチクソ緊張しますけどね！

「無理はしないでね？」

「うん。いざって時は都に頼る」

「任せてね」

そんな会話を最後に、お互いに黙りあつてしまつてカチカチと時計の針が進む音だけが部屋に響く。

なにか話すべきか、それとも素直に寝るべきか、そんなことを考えるがこんな形で異性と並んで添い寝なんてした経験もないので緊張と興奮が何よりも勝り、何をすべきか全く判断できない。

きつと俺の顔は明かりがいたら赤く染まっていることだろう。

なんてわたわたと頭の中で考えていたら、都が身体を少し近づけてきた。

「本当にありがとう。蓮太くん。私を助けてくれて」

狂った歯車

「本当にありがとう、蓮太くん。私を助けてくれて」

暗がりの部屋の中、お互いの顔がまだ確認できないような状況で、ほぼ完全に密着状態となった俺たちは互いの温もりを求めるように横になっていた。

「助けれ……たのかな、そこはちよつと自信が無いんだけど……都が笑ってくれるのならそういうことでいいや」

「助けてくれたよ。こうして近くにいるだけでとつても安心するし、傍で貴方を感じていると、やっぱりこの人が好きなんだなって何度も思っちゃうから」

「そんな場所へ導いてくれたのは貴方が諦めなかったから。だからありがとう。追いかけてくれて」

「都は今この瞬間の幸せを噛み締めるかのように、眠ることを渋ってさらに深く密着する。」

「みんなのおかげさ。俺たちの中で誰かが欠けてたらこの結果にはならなかった。俺一人だけだったら都を助けられなかったかもしれない」

「うん。みんなにも改めてお礼を言うつもりだよ。でも……貴方ならもし、たった一人でも私を助けてくれた。そんな気がするの」

「なんで?」

「私にとつてのヒーローだから……かな?」

ふふつと笑う都の声を聞きながら、ふと考えてしまう。

ヒーロー。

ヒーロー……か。

「俺はそんな大層な人じゃないさ。ただ我武者羅に暴れていただけ、本物のヒーローには遠く及ばない」

「それでも、私は貴方を本物のヒーローだと思ってる。格好よかったよ」

「情けないところをついさつき見られたばかりだけだな」

「あつ、あれは……! 情けなくないよ! むしろ想像以上に逞しすぎて私が戸惑っちゃった」

……確かに何これ!? 的な表情してましたもんね、つーかよく握れたよ……意外とチャレンジャーなんだよな都って。

「とにかく、俺はそんな凄い人じゃない。だから本物のヒーローになれるように……これから頑張るから、ずっとそばにいて欲しい」

今度はもう失わないように、頑張るから。
もう……二度と。

「どうして、そんなに震えているの？」

「ちよつとね、嫌なこと思い出してさ」

「……よい……しよ」

俺にとつてのトラウマが記憶として再び蘇ってくる。そんな悪夢と戦っていると都合は俺の心を落ち着かせるかのように少しだけ身体を上方へとずらして、優しく両腕で包み込んでくれた。

「大丈夫だよ、私はもう二度と離れないから。誓います、ずっと貴方の隣にいます」

ゆっくりと頭を撫でられながら、理由を聞かずに受け止めてくれている。それがどれだけ有難いことか、これがどれだけ救われることか。

これ以上嫌なことを思い出させないようにとそうしてくれているのだろうが、その相手がいるってどれだけ幸せなんだろう。

押し殺してきた感情がみるみるうちに溢れてくる。

「涼ニイ………」

「よしよし………」

守れなかった、救えなかった生涯でもっとも大切だった人。俺の目標であり、乗り越

えるべき壁であり、憧れだった人。

その人のことを思い出していたら、段々とこの優しさに寄り添いたくなつて俺は弱さを見せてしまった。

「前……兄貴のことについて軽く話したことがあつたよな」

「……………うん」

「兄貴、涼太つて名前なんだけどさ。俺にとつて大切な人だつたんだ」

それから、詰まりが無くなつた川のように次々と感情と記憶を都に吐露する。昔は友達がいなかつたこと。学校での教員たちや生徒からのイジメで立場がなかつたこと。その中でも3人のかけがえのない人達がいたこと。それらを全て失つたこと。

全部話した。

「だから、失う事が怖かつた。今も怖いんだ、都がああ時に二度と会えないつてわかつた時このトラウマを思い出してきた。またあんな後悔をするんじゃないか、またこんなにも死にたくなるんじゃないか。そんなことばかり……………」

「大丈夫、大丈夫」

「……………！」

「これから先、どんな事があつても私は離れません。だから2人で歩こう？ 辛いことも嬉しいこともみんな2人で……………ね？」

「ああ……！！」

《視点切り替え》

あれからしばらく経って、彼の身体の震えが止まった頃、涙で顔を濡らしたまま蓮太くんは眠っていた。

きつと真正面から過去の記憶に立ち向かって、ほんの少し気持ちが楽になって気が抜けたのかな？

『石炎症』

蓮太くんは数年前に一部地域で急速に広まった感染症の一種と言っていたけれど、ここ数年で感染症による大きな事件は起きていない。私が知らないだけだとしても、蓮太くんはテレビでも頻繁にみかけるほどに報道されていたって言うていたから、名前くらいは聞いたことがあってもおかしくは無いのに……

それと蓮太くんが通っていた幽凜中学校。話を聞いている時は白巳津川市から近くにあるところだと思ってたけれど、こつちの名前も私は聞いたことがない。

「スマホスマホ………」

不意にその事が気になって、インターネットを使ってそのワードを調べてみる。

もちろん彼を疑ったりなんてしていかないし、心の底から信じている。けれど聞いたこととの無い学校や身に覚えのない病名がどうしても気になって調べてみた。

……………信じているからこそ、この結果が信じられなかった。

「学校も……病気も………無い」

気持ちのいい目覚め。からの……………?

ピリリリリリ——

耳鳴りにも似た高音が、深い眠りに誘われていた俺の意識をグラグラと揺らす。ウトウトとした意識の中、ぼんやりとした視界のせいではなかなか見えないスマホに手を伸ばし適当に何度か画面をタップする。

「うーん……………もう朝か……………」

やっと部屋の中が見渡せるほどに視界が安定すると、強く日差しがカーテンを貫いて差し込んでいる。

もう夏が近そうだよなあ……………なんて思いながら隣にいる都を確認する。

「すう……………すう……………」

彼女も疲労が溜まりきっていたのか、あの激しく響いたアラームでも一向に起きる気配がない。

……………やっべえな、寝顔めちゃんこ可愛いじゃん。え？ 何？ 世の中にこんな可

愛い女の子が身近にいたの!? やばくね?

「か……………かわゆい……………」

無防備に寝てしまっている彼女の頬を軽く突つつく。するとフニフニと柔らかいマシユマロのように凹む度に、「むう……………」と呟く彼女がもう……………

「かかつ……………かわかか……………! かわゆい……………」

うっそだろ俺、こんな高嶺の花的な存在の人を彼女にしたのかよ……………やבקね? なんか色んな意味でプレツシャヤーがドツシリとのしかかるんですけどツツ!?

こ、これ大丈夫なのか!? 都と付き合っているなんて事実をみんなに周知されたら帰り道とか後ろから刺されるのでは!?

それに俺自身、自分に魅力があるなんてとてもじゃないけど思えない。これだけの美少女の隣に立つ男としては力不足では?

うーむ……………こりや身だしなみとかの見た目には今まで以上に気を使わないといけない。まずは髪を切つてサツパリするところから……………いや、右腕を治すところからだな。

「すう……………すう……………にやむにやむ……………」

そんな時に聞こえてくる都の寝言。

「はうあつ!?!」

尊すぎる……………！ 何だこの生き物可愛すぎだろ?!?!?

ダメダメだ！ これ以上都を見つめていたら可愛さで頭がおかしくなる！（手遅れ）ひとまずアラームが鳴ったつてことは今は大体6時過ぎつてとこだろ？ とりあえず軽く弁当を作つて……………と。

自分の中に眠る今までに無かつた新たな感情を隠すようにキッチンへと向かい、利き手じゃないから意外と扱いにくい左手で料理の準備を整えていく。

「あ……………やつべ、米炊いてねえ。まあいいかレトルトのやつで」

非常時のために買い置きしておいた（レナとルナ用）白米のパックを2つ取り出し、電子レンジの中にほおつて加熱する。そしてその合間に今できる最低限のチンケなオカズたちを準備。

本当はしっかりとした弁当を作つてやりたいが……………如何せんあの出来事からまだ全然時間が経過していなくて、身体もだるい。初日だから豪勢にいきたかつたが……………庶民のお弁当で我慢してくれ、都。

「卵とウインナーと……………ほうれん草をめんつゆとバターで炒めるか。後は……………」

メニューを適当に考えながらどんなものが入つていたかの確認のため、冷蔵庫を開いて見てみると……………

「豚のこま切れ肉……………か。使えそうだな」

揚げ物を作るような時間はないから………ん？ いや、レンチンが終わりやあパン粉につけて擬似トンカツができるのか。だったらその準備をつと………

カチャカチャトントンと音を奏でて、いつも以上に手間取るお弁当作りが始める。

右手が使えないって本当に不便だ。普段はひよいひよいつと当たり前のように使っているが、それがたつた一つ制限されるだけで生活のリズムは一気に崩れる。

夕方には通院もしなくちゃいけないし、夜には約束もある。

「……………弁当箱なくね？」

その準備をしている途中で気がついた。俺のこの家の中には都用の弁当箱が存在しないのだ。当たり前っちゃ当たり前だが、そんなものを夜のあの方に持ち込むような余裕もあるはずがなく、ほとんどの都の私物はまだ自宅に置いてある。

………そういうえば二段になつてる大きめの弁当箱があつたな。もうこれでいいか、2人分入ればなんでも。

なんて適当な考えで空き箱に次々に俺たち二人分の昼飯をちよちよいと詰めている時、リビングの方で誰かが動いている気配がする。

どうやら都の目が覚めたようだ。

「そうだな、もうすぐ終わるし起きるにしてはちょうどいい頃合いかな」

ふんふんと鼻歌交じりに盛り付けをしていたのだが……………その直後に都の声が珍

しく大きく響き渡る。

「あぁっ?!?!」

何事かと思つて急いでドアを開けると、未だ寝巻き姿のままの少しボサボサ髪のが、プルプルと震える手で自分のスマホを開いて座っていた。

「ん? どうしたんだ? 都」

「れ、れれ……………! 蓮太くん……………!」

やたら大袈裟に焦っているもんだから、なにか大切な事を忘れていたのかと思つていと……………都は手にしているスマホの画面を俺に見せつけるように差し出す。

それを目撃した瞬間に、彼女が驚き焦っている理由が判明した。

現在時刻は朝の10時48分。

「……………あ」

幸せ？を取り戻した『日常』

「もうそんなに急ぐことなくいいか？　いくら焦っても遅刻なんだしさ」

「だめだよ、少しでも早く学校へ行つて謝らないと」

「現時刻は11時を過ぎてしまっている。そんな時間だから当たり前なんだが制服を着ている生徒は俺と都以外は全くいない。

完璧に遅刻です、はい。

にしても驚いたな……10分置きに鳴り続けるアラームが死ぬほど連続していたなんて。俺が目覚めた時のアラームはあれが最初ではなかったらしい。

「病院には放課後に行くんだよね？」

「うん、そのつもり。それからニンボールで待つてようかな？　なんて思つてたけど店的には迷惑かな。つてそういうえば都は今日バイト？」

「そうだよ。だから一緒に病院には行けないけれど、またすぐに会えるから……ね」

「ふふっ……ああ、ついでに寢床も同じだしな」

なんて会話を2人で行なながら登校する。おそらく走ったりしない理由は俺のこの右

腕だろう。別に俺を置いて走っていつでも気にはしないけど……少しでも一緒にいた
気持ちちは……………な?

でもせっつかくい雰囲気なのに手を繋げないのが本当に痛い! ギブスで右腕を固
めてるから鞆を左手で持たなきゃいけない都合上必然的に両手が塞がるのがもう……
!

それに都の自転車は彼女の自宅にある。つまりは2人で並んで歩いているというこ
と。カゴに入れさせてもらったりもできないし……はあ……

「……………お、生徒指導のハg……………先生がいない」

「あ、本当だね。どうしたのかな?」

白泉の校門にたどり着くと、いつもなら遅刻した生徒を取り締まるために突っ立つて
いるハゲ頭が何故か今日に限っていなかった。

もしかしてどこかのクラスの授業を担当しているタイミングなのだろうか? いや、
それならそれで代わりの教師がいるはずだから……

「運良くトイレ中だったりしたのかもな。とりあえず成瀬センセのところ行かなきゃいけ
ないだろ?」

「うん、でも今は3限目よね? 確か今日の3限目って成瀬先生の授業だったような?」

「じゃあそんまんま教室にいくか」

なんて授業中の静まり返った学園内を都と2人で歩いて進む。休憩時間とは雰囲気
がガラリと変わってるよなホント。

どんな言い訳を使おうか？ 寝坊ってのは絶対怒られるから……

なんて考えていると、教室にたどり着くや否や都は申し訳なさそうにゆつくりと扉を
開けてその身体を縮こませるように中へ入っていく。

「おいおい……言い訳する気無しですか」

この辺が俺と全然違うとこだよな。俺一人ならどうせ遅刻するからって多分ゲーセ
ンとか行ってるだろうし。

「すみません……遅刻しちゃいました……」

しゃあない、相方がこうしてしまったのなら俺も合わせてしまおうしかないだろう。

若干ため息を吐きながらも俺も続いて教室内に入る。

「ちわーす、今日も元気です」

と出席代わりの挨拶を適当に済ませて自分の席へ向かおうとすると、当たり前だか成
瀬センセに止められる。

ついでに都にも。

「は〜いストップストップ〜。あのさ、一応聞いておくけど遅刻の理由は？」

「んえ？ あ〜つと………足腰が悪そうなお婆さんをおぶって家まで送り届けながら

迷子の子供を交番まで連れていく途中で倒れている妊婦を助けてたら遅くなりました」
「…………え、ええっ!? そ、そんなことしてたっけ…………!?」

おい、ここでその反応されたら全部嘘だってバレちゃうじゃんか! いや騙し通せるとも思つてはないけれど!

「へえ〜それは感心感心。それじゃあ同じことをもう一度言つてみて」

「ええーつと…………足腰が悪そうな妊婦さんを交番まで送つて倒れている子供をお婆さんが助けてあげたら遅くなりました」

「は〜い嘘だね〜」

ゴンツと教科書の後ろの硬いところで頭を叩かれ、罰を受ける。

「ごめんなさい…………寝坊です…………」

「九條さんは正直に謝ったから許す」

「ごめんなさい。遅刻しました。俺も謝ったから許——」

「さないよ〜。君火事の日も遅刻してたでしょ。誤魔化すの大変だったんだからもう」

ひどい。なぜ俺と都でここまでの差が出るのか。

「正直その腕の怪我が気になるところではあるんだけど…………九條さんのお父さんが書類提出してくれてたし、そっちを見ることにしようかな。……………なんで竹内君の怪我を九條さんの親御さんが知ってるんだろ」

「はは……」

アフターケアバツチリかよ。こちとら娘さんとイチャコラして遅刻かましてますけど。愛想笑いしか出来ねえわ。

「それじゃあとにかく各々自分の席に着いてね、遅刻カップルさん」

「はいはい、了解で………は？」

「——ッ!？」

唐突すぎるその発言に、思わず耳を疑った。な、なんで俺たちの関係が一瞬でバレたんだ!?

「な、なんで!？」

隣の都も顔を真っ赤に染めて俯いてしまっている。

「あー! やっぱりそうなんだ! 2人で並んで門を歩いてたから気になってたんだよねえ〜!」

「あ、アンタ窓から見てたのかよッ!？」

「それに2人とも同じシャンプーの香りがするし? とうとう九條さんに手を出したか〜こりゃ刺されるぞ〜」

「同じって………あっ!」

「みんな〜! やっぱりこの2人付き合ってるってよく! けしからんっすな〜!」

「ちよ……!!? やめろよ! 茶化すな!」

いつまでも幼稚なイタズラを仕掛ける成瀬センセを止めていると、後ろの生徒たちの『キヤーっ!!』という黄色い声が響き渡る。

「九條さんやっぱりそうだったんだー!」

「おめでとー!」

「どこまで!?! どこまでいったの!?!」

などという女子たちの声。

「ふざけんなボケー!」

「俺たちの夢を返せー!」

「せ、拙者の希望が……!!」

「某……最大の不覚……ッ!」

という男子たちの声。

「いや待て!?! 男子民度おまえら低すぎだろッ!?! っつーか気持ち悪い奴いたぞッ!?!」

その瞬間にワー! ワー! と教室内が一気にうるさくなる。その中にはひよっこりと翔と深沢も混じっていた。

「どうせ風呂場でエッチなことしたんだろー! はい、復唱!」(深沢)

「どうせふるばでえっちなことしたんだろー。はいふくしよー」(翔)

「やる気ないなあせつかく友達を茶化す面白い機会なのに」

「いや俺は茶化すつもりは別にないって」

「ちよつと待て！　なんでお前からまで裏切つてんだよ!!　お前らは1番の味方じゃないとダメだろ！」

「僕たちだつて嫉妬しちやうよ！　あんなタイミングで告白からのキスだなんて……

ああ〜！　羨ましい！　九條さんのパンツの色つて何色だったんだろう……!!」

「んなもん想像するな——!!!」

お前はいつでも深沢節が炸裂するな本当に……！

………あれ？　なんでお前——

「竹内ー！　テメエ九條様と一緒に風呂に入ったのか！　ああ!!」

様?!　なんか崇拜してる人までいるんだだけ?!　なにになになに?!　怖い怖い怖い!!

「どうせ無理やりエロいことさせたんだろ！」

「させてねえよ！　どつちかっていやあ都の方から——」

「んだとコラアアアアツ!!!」

「逆ギレツ?!」

ちよつ！　待つ！　ほんとに殺される！　あれ!?　俺つてこの人数を敵に回すの!?

「にしても竹内が九條さんとねえ……残念、取られちゃったねー翔」

「取られるも何も俺は大切なやつはいるから……」

「え? 何それ、初耳なんだけど!? 恋人出来てたの!」

「恋人……? なのか……?」

「ちよつ……! 頼むから2人で雑談なんてしないで助けてくれ! つーかお前らアレだな!?! この事お前らがバラしたな!?!」

「すまん蓮太。俺が与一を止められなくて……」

「そんなことはどうでもいいよ! え!?! 何!?! 翔の恋人つて誰さ!?!」

とそんなこんなでいつの間にかクラス中に俺たちの事がバラされており、みなを説得するのにかかるの時間を要した。

ちなみに噂は学園内全域にわたっており、最早悪い意味で俺は有名人となつてしまつたようだった。

それに一部の生徒達によると、他校の友人にもこのことを伝えたらしく、元々この市内で知らない人はいないレベルの有名人である『九條 都の彼氏』と言う名で俺の事は

瞬く間に広がっていったそうなの。
めでたしめでたし………

「いやめでたくねえよ!!」

都√

『ふたり』

END

「はあああああ……………」

授業も終わり待ちに待った昼休憩の時間。のんびりと都と2人で雑談なんてしながら弁当でも食べてゆつくり過ごそうと思っていたのに……

「た、大変だった……………ね。あはは……………」

「つぎけんなよマジでもう……………」

俺たちは（俺だけ）クラスの男子から追っかけられていた。

「で、でも、どうして蓮太くんを追いかけてるのかな？」

「お前それマジで言ってるのかよ……………まあ別にいいけどさ」

アイツら叫びながら目を血眼にして追いかけてたもんな。「九條様を守れー！」つてよ。ふぎけんな、むしろ俺がお前から守るわ。

「さすがのアイツらも屋上までは追っかけてこないな、仮に来たとしてもこの場所にいたらバレないだろ」

そう言っってなんとか守り抜いてきた弁当を床に置く。するりと風呂敷を解いて中身

を確認するが……うん。問題なさそうだ。

それにしても流石の俺もこんな所には初めて来た。なんだっけ？　こういうところの名前、塔屋……だっけ？　あの入口の上の所。

「あつ、お弁当……ごめんね？　私が用意しようと思つてただけど、寝ちゃつてて……」

「ん？　いいっていいって。俺も作るの大好きだし、前は都がハンバーグを作つてくれたからな。今回は俺が………つて言つても時間がなかつたから過度な期待はしないで欲しいです……次回はこちらと作るから！」

カパツと蓋を開け、皿替わりにその蓋を都に渡して二段になっている弁当箱を分解する。

パツクの米を使つているとはいえ、これは花見とか用の本来おかず達をぶち込むためのだけの箱だ。つまりは米を敷きつめる部分が無いため、灼熱のように熱かつた米を握つて塩むすびを作つた。

ぶつちやけ右手が使えない以上、敷く方が楽なんだけど……渋々百均で買つておいた手軽におにぎりが作れる道具を使わせてもらった。

ちなみにそのせいも、ピクニックの弁当みたいな感じになっている。

「わっ………！　凄い！　とっても美味しそう！」

「米はパツクだし、おかずも有り合わせだけだな。初めてだからもつと豪華にしたかったんだけど……妥協してくれ」

ははつと軽く笑って誤魔化しながら、水筒に用意してきたお茶を注ぎ都に渡す。

「妥協だなんてそんな……！ 本心に嬉しい、ありがとう！」

「そっか、まあとりあえず食べようぜ。走り回って腹減ったよ……ったく」

使い捨てのお手ふきで手を拭き、都と2人で両手を合わせて（俺は片手）……………

「いただきますつと」

「いただきます」

とりあえずは塩むすびの海苔がついている部分をもつて、予め割っておいた割り箸を使って簡易版トンカツを一口。

……………うん。即興で思いついた割には近い味がでてる。歯ごたえも弁当にしては上々だろう。

「あつ、タコさんウインナーだ♪」

何かと機嫌が良さそうな都は、さつきからいつも以上に嬉しそうな表情を浮かべてパクパクと弁当を食べてくれる。

「うんっ！ 美味しいよ！」

「そりゃ良かった、まだ俺の腕も捨てたもんじゃないな」

ぶっちゃけ俺なんかの料理よりもあん時の都お手製ハンバーグの方が何億倍も美味かったけどね。比にならないくらい。

「これすごい……！　ほうれん草がバターと絡んで……でも濃厚すぎない。どうやって作ったんだろ？　私じゃこんなに美味しくは作れないよ」

「んな事ないって、ほら麺つゆあるじゃん？　あれって卵焼き以外も色々な代用品として使えるんだ。調味料が足りない時や手早く済ませたい時はめっちゃ頼りになる」

「へえ……！　凄い……！」

「うどんや鍋、煮物に焼き物、本当になんでも使えるからな。便利が良すぎて結構使っちゃうんだよ」

張り切って自分で夕飯を作る時とかは当たり前かのように使ってるしな。最近はお食が多かったけど。

「美味しい〜♪」

まあでも気に入ってくれたのなら良かった。やっぱり彼女に変なもの食べさせたくないし、俺がこうして手作り料理を振る舞うのも初めてだから不安なところもあったけど……

「〜〜♪」

すっげえ美味そうに食ってる都を見る限りじゃあ心配無さそうだ。

「……………！ 都、ちよつと止まつて」

「うん？」

ある事に気がついた俺は、都に声をかけてそつと左手を都の口元に伸ばす。そして一粒だけ可愛くくつついていた米粒を取つて、ぱくりと自分の口の中に入れる。

「米がついてた」

ニコツと笑つて返すと、途端に恥ずかしくなつたのか、都の顔がみるみるうちに真っ赤に染つていく。

「あ……ああ……！ ありがとうごじやいましゆ……………！」

「噛んでる噛んでる」

はははつと笑いながら2人だけの時間を過ごしていく。本物の恋人同士の甘い香りが漂うような雰囲気の中、やつと手にした幸せを噛み締めて。

お互いに傷を残してしまつたけれど、辛い時には隣に大好きな人がいる。嬉しい時にも隣に大好きな人がいる。

こんな当たり前の幸せを、これからも続けていく。

どんな困難だろうと、どんな災難だろうと、乗り越えてみせる。嬉しいことも悲しいことも俺たちは2人で分かち合う。
これからも……ずっと。

ずっと——

都 After

もう一つの恋心

あれから数時間、俺は都のお父さん経由で知り合うことの出来た医者に右腕を診てもらった後、家に戻って荷物を置くと公園をブラブラと歩いていた。

現時刻は約18時半程度、約束の20時にはまだ早い。

結局、深沢に聞き出したかったアーティファクトの事は聞き出せなかった。2人きりかアーティファクトのことを知っているメンバーだけになった時に聞き出そうかと思っていたのだが、意外とアイツは友達が多いようで常に誰かと話しており、そんな機会が巡ってこなかったのだ。

でもまあ……時間はまだまだある。これからいくらでもそんな機会は出てくるだろう。

となると次に気になるのが高峰だ。アイツ……今日は学園へ登校していなかった。怪我をしていて動けないのだろうか？ それとも……………

なんてあの時は考えていたが、なにやら深沢は昔からの高峰の友人らしく、今朝、駅

前のパン屋で顔を見たとの事。学園に来ていないだけでちゃんと生きているようであった。

「よ、よ……」

公園のベンチに座り、これからの動きや生活を考える。

都の会社の問題は俺の管轄外だ、その辺はどうする気も権利もない。彼女はこれからも俺が守っていくとして……次の問題がイーリス。

結局アイツは俺に差し金に向けては来たが……いつの間にかのタイミングで急に攻め入ることをバツタリと止めた。アイツはソフィと同じ異世界人らしいから、ソフィと急に連絡が出来なくなった翔の事も含めて何か別の問題が発生してそうだ。

今はソフィが連絡を行えない事と同期していて、イーリスも何も出来ていないと考えるしかないだろう。

次にアーティファクト集めの件。都が所持しているアンブロシアはたった一つであり、それはハイリスクを背負うという禁忌、言わば最終手段。それを使わないという線を考えて、やはり《奪う》能力を使わざるを得ないだろう。

それには都の多大な労働を強いることになるが………しようがない。それしか手段がないのだからゆつくりと少しずつ回収して回ろう。

そして絶対に外せないのが、天ちゃんを襲ったあの――

「こんな所で一人考え事なんて、貴方はよっぽど手を余しているのね」

ちよこんと隣に座ってくる女の人。ウチとは違う制服に身を包み、他人とは思えない接し方で声をかけてきたのは……………

「ん？ おお、偶然だな希亜」

「三度目よ、声をかけたのは」

「あ……………すまん、ちよつと考え事してた」

……………二回も声をかけられて全く気が付かないなんてやばいな、俺。

「いいわ、別に大した用事はないから」

「そうかい」

今日は珍しくこの公園に人がいない。普段なら移動販売のおっちゃんや子供たちが遊んでいたりするのだが……………まあそんな日もあるだろう。

だからこそ、俺たちはこの公園で2人きりになっている。

「……………ん」

いきなり希亜が差し出してきたのは少し温くなった缶コーヒー。近くの自販機で100円で売っているやつ。

「……………？ どうしたんだ？ これ」

「コンビニでキャンペーンをやっていて当たったの。私は要らないから貴方にあげる」

だから温かったのか。なるほど……

「そういうことなら貰おうかな、ありがと」

その割には手荷物が無いけど、何か食べ歩きでもしたのか？　って、別に人のことを注意できるほど俺も行儀は良くないが。

ま、いちいち嘘を言う必要は無いし、カバンも持ってないから家にでも帰ってきたんだろ。

「んっ……………んっ……………意外と美味しいな」

「九條さんは？　せっかく交際を始めたのにいきなり放置しているの？」

「んなわけねえだろ、都合今日はバイトだ。今日は休んどけって言っても全然聞かねえんだよ。みんなに迷惑がかかるからってさ」

「それでここにいとと言う訳ね」

「そーゆーこと。一応夜にあの爆発女との約束があるからナインボールには行くから、そんな時に気になってみようとは思ってるけどさ」

「……………そうね、そうしてあげなさい」

なんか……………希亜テンション低いよな。元気がない訳じゃなさそうだけど……………って。理由は分かりきっている。

俺は……………希亜から告白をされていた様なもんだ。

気まずさを出さないようにはしているが……何も思っていないわけじゃない。

俺……希亜に好きって言われたんだよな。

なんて声をかければいいのかわからない。どんなフォローが必要なのかも、何をすべきかなのかも。

普段通り、いつも通りに接することしかできない。

そんな時だった。アレを思い出したのは。

「希亜」

「何？」

スッとポケットから黒色のヘアピンを取り出し、希亜の手のひらに乗せるように渡す。

「これ、預かってたやつ。返すよ」

「……そう言えば貸していたわね」

「これのおかげで勇気が湧いてきた。だから助かったよ、ありがとう」

「貴方の力になれたのなら……それでいい」

相も変わらず希亜の態度は変わらない。どこか距離を置くような……なにか一枚の壁を挟むようなそんな距離感。

誰よりも仲が良かったのに、誰よりも遠く感じる。

「貴方……これから時間はある？　ほんの少しでいいのだけれど」

「え？　ああ……まあ」

「なら行きましょう」

「え……!?　あつ……おいつー！」

強引に会話を進ませ、俺を導くように希亜はベンチから腰を上げてスタスタと歩いていく。

返事を待たず、振り向かず。

ひたすらに歩いて行った。

「おい………！ 希亜！」

行こうと言っておきながら全く俺を待たない希亜に不思議に思いながらも俺は彼女が進む道の後ろをついていく。

そうして辿り着いた場所は、過去に二度俺が訪れたことのある建物。廃ビルだった。

「……は………」

希亜はまだ歩みを止めずにただただ無言でその建物の中へと入っていく。

そして階段を上り、辿り着いたのは屋上。

ここも今となつたら懐かしい。暴走した俺をみんなが止めてくれた場所だ。

その屋上の歩けるギリギリの場所まで歩くと、彼女はずっと黙つたまま足場のない先を見る。

俺も隣に追いついてその視線の先を見てみると………

いくつもそびえ立つマンションや家。そして数え切れないほどに様々な場所を通る車。高速道路や大きな駅。

賑やかな街を優しく照らす夕日。

「……………綺麗だ」

「ここつてこんなにも景色が良かったのか。風も心地よく通っており、この建物自体が高い場所に建てられているせいか、この白巳津川の街を隈無く見渡すことが出来る。

本当に……………美しい景色だ。

「あの時から気に入っているの。私と貴方が初めて出会ったあの日から」

「初めてあった日つてお前……………」

あの時、希亜は学校に行つてた訳じゃなかったのか？ この屋上にきて、上から俺とレナのことを見てたり……………とか？

「あの日から、怖いことがあつた時や心に喝を入れる時はここに来ていた。この場所へ来るとあの日を思い出して勇気が湧いてきたから」

「希亜……………」

「貴方にとつては辛いことがあつた場所だったかもしれないけれど、私にとつては一番嬉しいことがあつた場所。もちろん暴走の件じゃないわ」

「……………ああ」

それは、今分かった。

さつきからずっと気になっていたことがあつたし、その謎も解けたから。

希亜が言わんとしようとしている気持ち。そしてこの違和感。多分……全部繋がっているんだと思う。

気づいたよ。希亜が俺の事を「蓮太」って呼ばないこと。

「辛くなんか無い。よりみんなと仲良くなれた思い出の場所だ」

俺は……どうしたらいいんだろう。なんて返せばいいのだろう。

もしも、彼女の心の声を聞いてしまった時は。

「私にとつても思い出の場所。初めての……思い出……」

クルツと希亜は俺の方へと身体の向きを変えて、真っ直ぐに俺に瞳を見つめて、悲しいような嬉しいような、苦しいような、切ないような。

優しい顔をしてほんの少しだけ笑顔になった。

「初恋の……思い出の場所」

この世界は、君を「 」した物語だったー。

「初……………恋……………?」

希亜に好意を寄せられていること自体は知っていた。昨日の夜から今日の朝にかけてのあの戦いでその気持ちを伝えられたから。

でも……………この場所が思い出つて……………

「気づかなかつたでしょう? あの時、あの瞬間から私は貴方を意識していた」

「……………はあっ!?!」

「ふふんっ」

え、いや、ふふんっじゃなくて! 何それ!?! なんてそんなに自慢げなんだ!?!

「んな事言つたつてお前、あの時に初めて出会つたんだぞ!?! 相手の魅力つつーか好意を持つ様などころなんて……………」

「最初は貴方が守つてくれた。まだ彼女が敵であつた頃、不意打ちを仕掛けてきた際に私の肩を寄せて抱きしめるようにそつと」

……………そんな事あつたような、無かつたような……………あの時は色々と俺もおかしかつた時

だったし、必死だったからな……正直あんまり覚えていない。

「それからは今度は私が助けるように共闘、守り守られ横に並んで、背中を預けて。……名前を呼んで」

「でも、あの時は同士だったからって希亜が言ってたんじゃないか！」

「それは……そうだったけど、咄嗟に思いついた言い訳。本当は命を懸けて戦う貴方を
見て怯えていた」

怯えるって……見てたのか？　もしかして怪しんでたまたまあの場にあのタイミン
グでやってきたんじゃないかと、ずっと着いてきてたつてことか!？」

「聖遺物の異能力を使った戦い。命を懸けた殺し合い。怖かった、逃げ出したかった。
けれど貴方はどんな悪にも絶望にも屈さず、正義の眼を宿した強い心で戦っていた。そ
んな姿に好意を抱いたの」

「貴方の初めて放った技、リフレクション反射鏡……格好よかったわ」

ニコツと今までに見た事のない可愛さのある笑顔で笑う希亜。そんな姿を見たのは
本当に初めてだった。

希亜はいつも何かを隠していて、仮面や鎧に身を包んでいるかのように自分という存
在を露わにしない。だからこそ、彼女の本当の笑顔は知らなかった。

「それでも貴方は恋は愚か、私のことを友人とすら思っていなかったでしょう？」

「あつ……………それっは……………」

「それ、すつごく傷ついたから」

「……………悪い」

「もう変わってくれたから気にしなくていい、過去を知ってしまった以上は貴方の気持ちにはわからなくもないから」

自分でも思うほどに、あの頃の俺は本当に酷かったからな。知らない間に色んな人もつと傷つけてしまっていたかもしれない。

だからこそ、やつぱりそんな俺にも優しく接してくれたみんなが大切だと思える。嫌な思いをしてしまった分、これからは良い思いをして欲しいけれど……

この答えは難しい。

「でも許してはいないわ」

「……………え、たった今気にしなくていいって」

「気にしなくてはいいいけれど、許してはない」

「……………どうやったら許してくれます?」

「そうね……………」

若干意地悪な顔してるんですけど……………これでももしかしてたかられます? ナインボールのパフェ100個とか言い出したりしないよね? 猫カフェ100回分奢ると

か、無理難題言い出したりしないっすよね？

なんて考えていると、更に悪いことを思いついたのか今度は可愛くない明らかかな意地悪顔でニヤツと笑うと、怪しい雰囲気を漂わせたまま希亜は口を開いた。

「天や春風、新海くんの事は好き？」

「え？ あ、ああ……そりゃ好きだけど」

3人とも大切な仲間だし。

「レナやルナたちのことは？」

「いや……好きだけど？」

コイツらも家族同然だし。

……待てよ？ おい。お前の次のセリフが何となく分かったぞ。

「私と九條さんのことは？」

「お前ずっつる!!」

絶対そんな感じのこと言うと思った！ この流れで私は？ 的な流れに持っていく
気配がバリバリしたもん！

「……答えられないんだ？」

「え？ 何？ 本気で嫌がらせしてんの？」

「他意はない。私はただ、みんなと同じように私と九條さんのことが好きかどうかを聞

いているだけ」

「黙秘権を使わせてもらいます」

「なるほど……私と九條さんのことは嫌い……と」

「おい待てこらっ！　なんで今都のことを強調したんだ!?　別に俺は何も答えてないだろ!!」

「答えられないんでしょ？　私と九條さんのことが好きかどうかを」

「だーかーら！　都を強調すんなっつーの！　嫌いなんかじゃない！　俺はみんなのことを嫌っちゃいない！」

ずつと希亜はいたずらっつ子のような笑みを浮かべて、本当に今まで一度も見せたことの無い仮面の裏を見せてくれている。

これが本心かどうかなんてのはわからないけれど。

「信じられない。みんなのことは好きだと答えたのに私と九條さんには言ってくれない以上はその言葉は嘘ね」

「なんでだよ!?　嫌いじゃないって言ったじゃん!」

「……分かったわ、九條さんのことは好きなのね」

「ぐむ……………!」

なんで今はを強調したんだよ……!　別にそんな意味で言ったわけじゃなくて……

!

「な……仲間として！ 仲間として好きだっ！」

「九條さんのことが？ 酷い、貴方彼女で遊んでいるのね」

「違う違う違う違う!! お前の事だよ！ 希亜のことが仲間として好きだ！ L I K E

だ！ L I K E！」

「それじゃあ九條さんのことは？ L o v e の好き？」

「そうそう、そっちはL o v e の——」

「私の事は？」

「好き………お前せっこッ!？」

と、そんな子供みたいなやり取りをしばらく続けることとなる。

特に理由も意味もないじゃれあいのような会話を続けながら、ふと思っていた。

もし俺が希亜の気持ちに気がついていたらのなら、今とはまた違った未来があったんじゃないか？ なんてことを。

一種のパラレルワールド。そんなもの信じちやいないが、ソフィの発言やあの時の推測でその可能性は感じていた。

今とは違う、もう一つの未来。それはどんな世界なんだろう。俺は笑っていられているだろうか？ 都は無事なんだろうか？

希亜は俺の隣にいてくれるのだろうか？

考えていても仕方が無いこととはいえ、本当に存在するのであれば心から願う。

その世界では、君が心から笑顔でいてくれるように。

天翔る2人との秘密

現時刻は20時13分。

俺はニンボールにて、ひたすらに待ち合わせの約束をしていたアイツを待っていた。
た。

ただひたすらに。ずっと。

ずっと……

「お待たせ。蓮太くん」

「……、もう終わったのか？」

「うん。お爺様がもうお客さんは少なくなる時間だから今日は上がっていいって」

「そっか。夜は？」

「今から食べるの。蓮太くんもそうでしょ？」

「ああ……まあな」

気持ちが悪く落ち着かない。アレつきり姿を見せないあの女の人に来てくれないことが
どうしても頭から離れなくて……

都もそんな俺の心情を察してくれているのだろう。できるだけ暗くならないように、笑顔を絶やさずに声をかけ続けてくれていた。

……男の俺がこんなよなよしてたらダメだよな。

「どうせだから一緒に食べようか。都はここで食べるのか？」

「うん。お爺様に蓮太君の注文も聞いてきなさいって」

「あつ……そうなのか、それじゃあええつと……」

と、俺と都以外にお客のいない店内で、気を紛らわすかのようにメニューとにらめっこをしていると……ガランと店の扉が開く音がする。

心の奥底では期待していたこともあり、過剰すぎる反応でその音の先を見ると……

「だーかーらー！ ナインボールのナポリタンすつごく美味しいんだってば!!」

「わーかったから騒ぐな！ 店の迷惑になるだろ！」

大きな声でいつも以上にベタバタとじゃれ合う兄妹が入ってきた。

「新海くんに天ちゃん。いらっしやいませ」

「あえ？ みゃーこ先輩とエロパイじゃないっすか！ 早速おふたりでデートっすか

!？」

「うん、あの……エロパイはやめて？ 百歩譲って言うのは許すけど、マジでここではや

めて？ 俺たち破局しかねないんだけど？」

夜の時間帯に、人の少ない喫茶店で、人一倍大きな声で、彼女の叔父様に聞こえるその言葉は俺のこれからを壊しかねないんです。天ちゃん。怖い。

「バカっ……………」

そこですかさずお兄ちゃんの注意が入る。

「まあ…………もうしようがないけどさ、翔達も飯食いに来たんだろ？ どうせなら一緒に食べようぜ」

「え？ でも先輩達デートなんじゃないんです？」

「デートというか…………その……………蓮太くんが待つてくれたの」

「ひゅー！ にいやんと違ってイケメンっ！」

「天、店の中で大声出すのはやめなさい」

「あ、はい」

なんて流れて結局、突如乱入してきた2人の兄妹と共に晩飯を済ませる事となる。あの事は…………極力今だけでも忘れるように気持ちを切り替えよう。

「まさかのナポリタン被り」

「仕方ないだろ！ お前が勝手に店員さん呼ぶから！」

「お前みやーこ先輩たちを見習え！ 方やハンバーグに方や唐揚げだぞ!? おかずを同じものにしないようにするというテクニクを使ってるでしょーが！」

「別にナポリタン被つてもいいだろ……」

「良くねえよ！ いいか？ みやーこ先輩たちはな？」「蓮太くんの唐揚げ……食べてみたいな」「わかったよ都、ハンバーグと交換な」「うん！ いいよ！ はい、あくん」「あくん」つてのをするつもりなんだよ！ あ！ れ！ が！ 恋人のテンプレでしょーが！」

なんて一人二役で俺と都を演じながら、天ちゃんはお兄ちゃんにツッコミまくる。

……意外とモノマネが上手いな。

「それに比べてにいやんとあたしはさあ！」「にいに！ あたしのナポリタンとにいのナポリタン交換しよ！」「いいけど自分の食べば？」「うっす」つてなるだろうが!!」「別にわざわざ食べ物交換しなくてもいいだろ！ 飯ぐらいゆつくり食わせてくれよ……つつたく」

「よくないのー！ あたしもにいとイチャイチャしたい——!!」

……大変そうだな、翔。こんなにテンションが高いと合わせるのもキツイだろうに。でも……さ。教室内で言つてた事や現状を確認するに、多分だけどこイツら付き合っ

てるよな？ 付き合ってるって言うのかはわかんないけど、そういう事だよな？

「あ、あの……天ちゃん？ 私たちは別にそんなつもりで……」

「つかさ、翔」

「ん？ どうした？」

「お前天ちゃんと付き合ってるだろ」

「——ツ!?」(翔)

「——っ!?」(天)

「……?」(都)

その瞬間に戦慄走る。広い荒野を駆ける隼の様なイメージで翔と天ちゃんがビクッ！と反応を見せた。

ちなみに都はなんのことも分かつちやいないようだ。

「ナチュラルにイチャついてるけどお前ら付き合ってるだろ」

「二度も言うなー！ 別に付き合ってるとかじゃないもん！ その……ちよつと仲がいいだけでもん！」

「そ、そうだぞ！ 別に俺たちはそんな……!」

「別に隠さなくてもいいって、バカにするつもりもないし」

動揺を見せる2人とは打って変わって、冷静さを極めてる俺は水をチビチビと飲みな

がらここの真相を知るために質問を繰り返す。

「付き合ってたんだろ」

「蓮太くん？ 新海くんと天ちゃんは兄妹なんだよ……？ いくら仲が良いとはいえそ

れは——」

「まあ……うん。その……付き合ってるかどうかは微妙だけど……蓮太が九條に抱いてる気持ちと同じだと……思う」

「え？ それって……ええっ!？」

「な？ 付き合ってただろ？」

「ど！ どうして分かったんですか……？」

「いやわかるだろ。前から仲良いな〜つつーか、天ちゃんは翔の事好きなんだろうなあとは思ってたけど、一線を越えてるつつーか、距離感が変わったつつーか」

なんで気がついたんだろ？ 教室のあの翔のセリフもそうだけど、なんか天ちゃんの絡みが積極的になってたんだよな。

「あ、あの……その……」

途端に様々な気持ち湧き上がってきたのか、しょんぼりとする天ちゃん。まあ、この2人の関係を深く考えれば考えるほど、その重要性というか、問題は結びついてくるだろう。

「……別にいいんじゃないね？」

「蓮太……」

「兄妹だろうが親戚だろうが、他人だろうが親だろうが、その人が好きっていう気持ちがある本物なんならアリじゃないかねえの？」

「先輩……」

「そら世間的には認められない一線かもしれないけど、翔はそれでも人生の相方に天ちゃんを選んだんだろ？　どんなことがあっても守り抜く気持ちがあるんなら、別にいいんじゃないね？　俺はそう思うけどね」

ガリガリとコップの氷を噛み砕きながら、そんなことを思う。

「うーん……。きつと大変なことがいっぱいあると思うけど……2人が決めたことなら私も応援するよ」

都ならそう言ってくれると思っただぜ。

「つーこつたあ、だから別に俺たちの前じゃ隠さなくてもいいぞ？　誰にも言いふらす気もないしき。な？　都」

「うん！　私も秘密にするよ！」

「……お前ら……！」

「先輩達……！」

この辺はやっぱり兄妹なんだなあ……って思う。発している言葉は違えど表情やその言葉の意味は全く同じだ。

そして翔と天ちゃんはお互いの顔を見合わせると、翔は俺の手を、天ちゃんは都の手を握り、決死の思いでとあることをお願いしてきた。

「頼むっ！ デートの作法を教えてください……！ 蓮太！」

「お願いします！ あたしにデートを教えてください！ みゃーこ先輩！」

「……は？」

「……え？」

参考書？2人にとつては参考書！

「いや……デートって言ったつてよ……」

なんでいきなりそんな話になったのが全然わからないが、2人の兄妹は藁にもすが
る様な思いで俺たちに頼み込んでくる。

「カップルとしての経験値の差で俺たちは完全に負けた……！ 実はいかかしくか
か………で2人の時の距離感というか、そういう時にどうしたらいいか……」

……かかしくかかかって何？ 全然わかんないんだけど。なんで漫画みたいにこ
れで理解できると思ってるの？

「んな事言われても……そもそも俺たちだって付き合い初めてまだ一日目だ。経験値の
差も何も……」

「でもみゃーこ先輩は初々しい感じじゃないですか！ なんていうの？ 大人
の雰囲気？ なんかもう色々経験してるような感じ！」

「経験って……!!」

「え？ なんでみゃーこ先輩の顔が赤くなるの？ え!? もしかして……もうセツ――」

「とめつちやくちや危ないセリフを言いかけたその時に、俺たちが頼んだ料理が運ばれてくる。それが幸いブレーキとなって、超危険な言葉は偶然口から出ることなくことを終えた。」

(ここで Innocence! が流れる予定)

「お前のツレ危なすぎだろ……公共の場で何を言おうとしてたんだよ……」

「いやもう……本当にごめん。頭の悪さは折り紙付きなんだ」

「お前も大変だなあ、お兄ちゃん」

いただきますと手を合わせて(俺は片手)みんなはそれぞれ料理を食べる。

「うんまつ! にいやん! ナポリタンめっちゃ美味い なほひはんめつひやふはい!」

「こら、口の中の物を飲み込んでから話しなさい」

……俺もナポリタンにすれば良かったかな。え? 何故かって? そりやあもちろ

んとっても美味しそうなのと……

「……………箸がムズい」

普段使わない左手での食事がものすごく大変だったから。ナポリタンだったらフォークだし、クルクルするだけだからまだマシだったと思う。

さつきから皿の上に何度も何度も野菜や唐揚げを落とし、食べるのが全然進まない。

「……………。はい、蓮太くん。お口を開けて」

新海兄妹が合流した事で俺と隣同士で座っていた都は、わざわざ自分が食べる作業を中止してまで俺に介護してくれる。

「え…………。あ、いや…………。いいよ別に、レナにでも——」

いや…………。既にもう唐揚げを箸で掴んで持ち上げてくれてるんだから、ここで断る方が悪い…………。よな。

でも…………。あの兄妹馬鹿みたいにガン見してくるんですけど!? 本当にこんなことになるだなんてなんにも思ってたつつか、考えても無かったつつか!

チラツと都の顔を覗き見てみると、彼女は彼女で顔を赤くしており、俺が差し出した唐揚げを食べるのを一生懸命に待っていた。

ここで逃げるわけには…………!

「……………。あむ」

「いや——! たまらねっすわあ——!! 初々しい先輩2人のイチヤイチャシーン! 見てるこつちがキュンキュンするー!!」

「うっせうっせ! こうなりや意地でも左手で食ってやる!!」

「あつ、それ私のお箸……………」

ガツガツガツガツ……………ムシヤムシヤムシヤムシヤ……………

別に箸だからって持たなくてもいいもんね! こうして少しギブスを緩めて指だけでも使えるようになれば……………皿は持てるし!

「ほら食った!」

「食べたのはすごいけど…………みゃーこ先輩から箸ぶんどったせいで先輩食べられてないよっ。」

(under the moon) (曲名) 流れたらいいなあ。

「いやー食った食った」

「品の欠片もないな」

「翔のせいだよ、教えはどうなってんだ教えは！」

「ふふっ、でも幸せそうな顔してるよ」

とまあ、なんだかんだありつつも結局みんなで晩飯を済ませ、途中までの帰路が同じということもあって4人ですっかり暗くなっている外を歩いて帰っていた。

とは言っても大都市であることには変わりないため、比較的夜とは言えども明るい道だ。

「……………」

結局、あの人は来てくれなかった。時刻はもう21時を過ぎている。これだけ待つても来てくれなかった。この事実が胸をじわじわと締め付ける。

あの2人はどうなったんだろう。船の爆発に巻き込まれて死んでしまったりしていないだろうか。

法に裁かれずに死んで逃げるだなんて……許したくない。何よりも、死んだ方がいい

人間なんて1人も居ない。罪を償い、心を入れ替えれば誰だつて……………

「蓮太、ちよつとコンビニ行こうぜ」

「え?」

「いいから」

「あ、おい…………! そんな引つ張んなつて…………!」

《視点切り替え》

「行つちやつた…………」

一瞬だけ暗い表情をした蓮太くんを励ます前に、新海くんが近くのコンビニへと連れて行つてしまった。ほんの少し強引だったけど、きつと助けてくれたんだと思う。

彼は優しいから。

「結局、一度も来なかつたねあの人」

「うん…………」

「でも…………見て、みゃーこ先輩。このニュース近衛グループについて記述してる」

天ちゃんが持っているスマホに映し出されているネットニュース記事を見ると、確かにあの人の会社についての事が色々と書かれていた。

「そんでここに……ほら、Yさんが責任者として……みたいなこと書いてあるから、あの人はきつと生きてると思うよ」

「あの人が生きてるのなら……きつと待ち合わせする予定だった人も生きてるんじゃないかな。あんなことがあったし……合わせる顔が無いだけで、きつと生きてる」

「本当だ……知らなかった……」

「これを伝えにあたしとにはナインボールに来たんだよ？ きつと伝えないと、意地になってずっと待ち続けるんじゃないか？ って心配して」

「……かも……ね。ありがとう天ちゃん。教えてくれて」

確かに、それはあったのかも。絶対に来てくれるって信じて、私たちなら待ち続けていたかも……しれない。

「ううん、お礼なら結城先輩に言つてよ。いち早くこの情報をあたしに教えてくれたのは結城先輩だったんだよ？ だからきつと……ずっと色々と調べてくれるんじゃないかな。あの人」

「結城さん……が？ どうして？」

「どうしてつて……ああそっか、あの時みゃーこ先輩いなかったのか」

「……？」

「なんにもないです！ あたしと結城先輩のみつと！」

「えっ!? そんな……ずるいよ天ちゃん」

「ずるくないですー! というわけでーこのニュースも消してつと……」

気になる何かをひた隠しにする天ちゃんは、伝えることを伝え終わったから不要になった検索ウインドウを消していると……

「——つ!?!」

「はうっ?!」

突如として画面からでてきたものすごく……物凄い（意味深）な何かの漫画。

「こ、これって……」

大人の女性と男性が裸の状態で色々と激しいことをしている漫画だった。つまり

……それは……

「ちや! ちやいますちやいます! 本当……これっ、これは参考書! 人生の参考書

のつもりで買っただけで別に他意はないんです!!」

「参考書……」

「ほんとですつてば! 本当に変な意味は無くて……!」

「わっわたつ……しも……一緒にお勉強してもいい……かな? その……アダルト本で

さんこうしょで

⋮
!

女の子同士の秘密

《視点切り替え》

「……………んなもんかな」

強引に翔に近くのコンビニへと連れて行かれて、あのニュースの記事のことを知る。俺が気にかけていることを察していたようで、落ち込むことは無いと励ましてくれた。

それで、翔とアーティファクトの事や、これからすべきことなどを他人には分からないうように会話をして話を進ませ、ひとまずは《魔眼》問わずにアーティファクトの散りばめられている状況を整理しつつ、お互いに守るべき彼女を大切にしようという結論になった。

そして一応俺たちの話では次の日曜にダブルデート……のような、4人でどこかに遊びに行くという計画を立て、それぞれの思い出を作りつつ、お互いに距離を縮めようとする事になった。

理由は都にしづらい相談を天ちゃんに、天ちゃんにしづらい相談を都に。そして彼氏としてのあり方の勉強などが目的。あと単純に楽しむこと。

まあそれも都と天ちゃんが了承してくれればの話ではあるが……その辺はおいおいということ、適当に4人分の飲み物を買って、コンビニを出す。そして2人が待つているであろう場所へ向かうと……

「……………」

「んん……………」

都と天ちゃんが2人して道の邪魔にならないような端で座り込み、何かを覗くように顔を近づけていた。

「おーい、何してんだ?」

近づきながらも声をかけるが、よつぽどそれに集中しているのか俺の声に全く反応しない。

仕方なくもつと近づいてもう一度声をかける。

「おーいって、何してんだよ」

2人の上からクイツと視線の先を除きこもうと顔を覗かせると、その瞬間に閃光のよきな反応速度で、天ちゃんが自分のスマホをひた隠す。

「せせせせせせ先輩っ!?! いつからそこにつ!?!」

「え? いや、たった今だけだ」

「そ、そうなんだ? 新海くんと蓮太くんは用事は終わった?」

「あ……うん」

都も天ちゃんもどちらも明らかに何かを俺たちに隠すようにしているのが……なんか気になる。別に秘密がダメなんて言うつもりは毛頭無いが、やっぱり好きな人が何か隠し事をしてたらちよつとは気になるよね。

「じー……………」

漏れてる漏れてる、声が漏れてるよ都。

彼女は何故か俺のズボンを品定めでもするかのようにじつと見ており、その場を微動だにしない。

比較的暗いところにいるので、気の所為かもしれないが妙に顔が赤い気もする。よく見えないけど。

「どうした？ 俺のズボンに何かついてる？」

「ううん、そんなことないよ」

パタパタと両手を軽く振ってジェスチャー付きで断る都。……………まあいいか。

「啜える……」

「え？ なに？」

「なんでもない、なんでもないです！」

……？ なんか戻ってきてからの都おかしくない？ 何故かひたすらにズボン？

を見てくるし、やっぱり少し顔も赤いし。もしかして熱でも……？

でも天ちゃんも似たような感じなんだよな。全く同じような反応を見せてるけれど……2人とも辛そうな表情なんかはしていない。むしろ色々と考え込んでいるよう……な？

「とりあえず歩こうぜ、いつまでもここに居るわけにはいかないしさ」

「そ、そうね」

……

……

……

てくてくと歩く帰り道、途中まで道のりが同じ俺たちと新海兄妹は、4人で色んなことをだべりながら歩いていった。

そしてそんな中に、会話の流れでさっき予定していた計画の話になる。

「つつーわけでき、今度の日曜日にもこの4人でどっかに遊びに行こうと思ってるんだけど……2人はどう？」

「おぉー！ あたしはいいですよ♪ みゃーこ先輩と一緒にいるのは楽しいし！」

あ、そこは翔じゃないんだ。

「ふふ、そうね。私も賛成だよ。みんなと一緒にいるのは嬉しいし、楽しいから」

「にしてもいやんがこんな企画を立てるだなんて……やるじゃん！ ちよつと見直したよー！」

「……非常に申し上げにくいんですが、人数の指定をしたのは隣にいる蓮太君なんですよねえ」

「エロパイさすがつすね！ ウチの兄貴と違って頼りになるっ!!」

「一瞬で手のひら返したな」

「だってあれでしょ？ この4人って言うのは、とどのつまりダブルデートと言うやつだよな？」

さすが天ちゃんだ。その辺の察しの良さは鋭いことこの上ない。この話を聞いて

番ルンルン気分にもなってるし、こういうのはもしかしたら好きなのかもな。

「あ、それでこの4人なんだね。香坂さんと結城さんはなんで誘わないんだろうって思ってたんだけど……謎が解けちゃった」

「翔がいきなりデートは怖いんだってさー」

「なっ！ 誰も怖いとは言っていないだろ!？」

「はいはい。わかったわかった」

なんてキリがよく話の区切りがついた時、ふとさっきの女の子2人が覗き見ていたシーンを思い出す。

「そういえばさ、さっき俺と翔がコンビニから戻ってきた時、2人は何見てたんだ？」

「びっ——」

「ひうつ……!？」

いきなりの質問に戸惑いがあったのか、よく分からない声を2人とも出して、歩みを進めるその足をピタリと止めた。

「あああ……あれは……そのあの……!？」

パタパタと慌てふためく都をカバーするかのようになり、天ちゃんが得意の大きな声で乱入してくる。

「まだダメー！ 2人にはまだ秘密です！ ひ！ み！ つ！」

「まだ？ まだってことはいつか教えてくれるのか？」

「来るべき時になったらわかるって！ ね？ みゃーこ先輩！」

無茶ぶりにも近い雑なフォロワーだが、結局有耶無耶に誤魔化されて返答が返ってこないままに、都のセリフでこの話題は幕を閉じた。

「いつか……ね？ 教えます……」

二輪の花

あれから数日経過し……現在は5月4日。世間はすっかりゴールデンウィークという名の連休で賑わっており、様々な人が街中に行く。

そんな中で、俺と都は2人で俺の家でまったりと時間を過ごしていた。

「……………」

右腕につけていたギブスを外し、グッパツと何度か手を動かしたり、腕を軽く回してみたりして怪我の具合を確認してみる。

「どう？ 痛くない？」

私服姿の都是一応医療グッズを準備して俺の横で一緒に腕を診てくれている。

「うん、割と普通に動く。こりや普通じやありえないよな」

「そうね、先生に診て貰った時は1ヶ月は絶対に必要だと言っていたし……」

「ルナの奴だろうな……感覚的にそんな気がする」

「アーティファクトの気配が？」

「まあそんなとこだな。魂を通してルナの傷があまり回復してないのが分かるから……」

きつと俺の怪我の分も取り入れてるんだろうよ……あのバカ」

人の心配するよりも自分の心配しやがれっつーの。

「バカなんて言っちゃダメ。蓮太くんのことを思っただけで治してくれてるんでしょ？」

「そりやそうだが……そのせいでアイツ自身が傷ついたらしようがないだろ……」

「レナちゃんは？」

「ん？ レナは——」

ルナの方はまだ安静にしていた方がいいだろうが、レナの方なら……もう大丈夫だろう。

そう思っただけで能力を使ってレナを出現させる。

「おう、どした？」

「ご覧の通りに無事だ」

「んな事でいちいちオレを出すなよ……めんどくせえ……」

はあ……つとため息を吐きながら、レナはちよこんと俺の隣に座る。……あぐらで。

「久しぶり、レナちゃん」

「ん」

「こら、ちゃんと挨拶しなさい」

「つせえな……。久しぶり、都」

「ふふ、うん。久しぶり」

ポリポリと頭を掻きながら反抗期の娘のような態度を見せるレナ。

「つーかオレは別に毎日都のことは見てるし、そもそもとして久しぶりじゃねえんだよな」

「え？ そうなの？」

「なんだ？ 大将は都に何も伝えてないのか？ 大将が感じている景色や感情は全部オレと共有している。だから大将が都を見ている時はオレも同じ様な感覚があるんだ。ま、オレが大将の魂に戻ってる時だけけどね」

「感覚が共有……凄いな、幻体って」

「だろ？ だからこの間アンタらが風呂場でシテた時も——」

「ちよーちよーちよー！ 待て待て!! いきなり何言つてんだよお前!!」

なんかこの子いきなり爆弾発言かましかけたんですけど!! とんでもないことをしでかす直前だったんじゃない!?

「お、おとおお風呂……っ!?!」

「? なにテンパってんだよ……都から大将を誘ったんだろ? なんで一発で止めたのか気になって——むぐっ!?!」

まづいまづいまづいまづい! こいつは俺の心を読むから、あの時の俺の感情を言

いかねない！　それで、これ以上変なことを言い出さないようにするために大慌てで口を塞がないと……！

「むぐむぐむぐむぐ——っ!!」

「うるさいうるさい！　もうこれ以上変なこと——」

「やめろ大将ツ!!　ったく……!」

レナは口を抑える腕を振り払い、俺から離れて今度は都の隣に移動する。

「アンタが都を見る度にチラチラ胸ばっか見てることもオレは知ってたからな!!」

「はあっ!?　何言ってるんだよお前!!　俺は別にそんなこと——」

「ほんとだからな?　都!　大将の奴、都を見る度にこの胸をチラチラと見てるから気

をつけろよ!」

「ひゃあっ!」

悪い雰囲気追い打ちをかけるかのようにレナは都の胸をいきなり揉み始め、見せつけるかのように楽しんでいる。

しかも最初はイタズラに近い感じで始めたのだろうが、それに気に入ったのか揉み揉みとずっと触り始める。

「胸って……ここまで大きいとすっげえ柔らかいんだな……へえ…………オレはここまでないからな……」

「レナ……ちゃん……！ ダメだよ……そんなに触っちゃ………んんっ！」

止めなきや……止めなきや……頭ではそう思っているのだが、自分の最高に可愛い彼女と、超絶に可愛いレナが頬を赤くしながら（都だけ）少し淫らなことをしているの間近で見てみると……

「レナ、や……やめ……やめなき………！」

「……ん？ ……はくん？ なるほどなあ〜」

チラッと俺の顔を見ると、レナはイタズラな笑みを浮かべて都の右耳をぱくりと啜えながら、ひたすらに胸を揉みしだく。

「耳っ！ みみい………！！ ダメ……だめえ………！」

「れろれろ………ああむ………」

可愛い女の子同士の性的なじやれ合い。そんなもの見せられたら………止めようにも止められないんですけど………!?

「や……止めな………」

それでも何とかレナの変態的な動きを止めようと、お叱りを与えようとするが………

「あむあむ………ばあつ、え？ なに？ 止めて欲しいのか？ 大将」

「蓮太くん………」

レナは口から都の耳にかけて糸を引くように唾液を伸ばして、相変わらずこの状況を楽しんでる様な笑みを浮かべて、俺の返答を待っている。

都は瞳に涙を浮かべてひくひくと身体を震わせながら俺を見ているが……………どうも嫌がるような素振りは一切感じない。

「いで……………」

「あん？　なんだよ大将、はつきり言えよはつきり」

「やめ……………ないでください……………」

「そう来ると思ったぜ」

ニヤツと笑うと、レナは再び都の耳を甘噛みする。そしてまたビグツと都は身体を震わせると、消えていまそうな声でこう言った。

「蓮太くんも……………一緒に……………」

再会する異世界人

「……………」

すやすやと俺のベッドで横になり、眠っている都。彼女の寝顔をこうしてみるのは何度見ても慣れない。

「すう……………すう……………」

「疲れてるんだろうな、まだ夜にもなっていないのにこんなにくつすりと眠るなんて」
そりやそうか、遂に俺たちは一線を越えたんだ。

「……………この先、何が起きても守り続ける。どんな壁があろうと、どんな困難があろうと」
つぶやくようにそう囁き、彼女の頭を優しく撫でる。

そんな時だった。玄関の方から「気配」を感じたのは。

「……………」

正直初めての感覚。今まで背後をつけられていた時などは何となくだが人の気配を感じていることはあった。だが、今は違う。

明確に感じる「気配」、俺はそつと都のそばを離れると、扉を一枚挟んだ先にある玄

関へと歩みを進める。

そして……………

「……………やっぱりか」

空間を裂くように現れる闇のような亀裂。その先からでてきたのは……

「ソフィ」

「あら、久しぶりの再開なのに随分と軽いのね、アナタ」

ぴよこぴよこと小さな腕を振って、相変わらず人形の様な姿で宙を浮かんでいる。見た目だけじゃあどつちかはわかんないが……………何故か俺はその姿を見る前から理解出来た。

コイツがソフィーティアであると。

「肝心な時に全然頼れねえんだもんよ、そりゃこんな態度にもなるさ」

「でも、ミヤコを救い出せたじゃない」

「やっぱり知ってたのか」

「そりゃあねえ。私は《世界の眼》を使ってアナタ達の動きを見ていたのだから」

煽るように青や緑、赤色と人形の姿を変えて、気楽な態度で俺に接するソフィ。

「この世界は……………なんて言い出さないよな」

「……………」

「やっぱりな……そんなこったろうと思った」

俺の質問に対してのあの返答。間違いないだろう。これはもう《もしも》なんて話じゃない。存在するんだ。

パラレルワールド
平行世界は。

「……そう思ったのは何故？」

「最初に疑問に気がついたのはソフィが俺に声をかけてきた時、香坂さんと待ち合わせしていた時だ。まるで今から起こる出来事が二度目を示唆するような発言があったこと」

「そしてあの時にレナ……つまり、ゴーストが分離していることを既に知っていたこと。つまりはそういう未来が起こることを見ていないと発言できないはずなんだ」

他にもちよこちよここと不思議と思うことはあつたが……決め手になったのはこれだ。

「アナタ……案外侮れないわね」

「んな事はどうでもいい。別の平行世界が存在するってことは、俺は都を助けられなかった世界も存在するってことか？」

「それを聞いてどうするの？ 知ったところで何の得もないじゃない」

「知りたいんだ。これから都を守り続ける為にどうするべきなのか。何が足りないのか」

事実として守れなかった世界も存在してしまっているのなら、その失敗から俺は学んで、責任をもってこの世界の都を幸せにしなければいけない。

もしも……アイツの元へ行ってしまう未来があったとするならば……

「知らない方がいいわ。それがアナタの為でもあり、ミヤコの為にもなる」
「……………そうか」

知らない方がいい。それは今の俺たちにとっては、やつと手にした幸せを潰してしまいかもしれないほどの結果になってしまった可能性があるってこと。

……最悪の場合、死んでしまったりなんて。

「そろそろ本題へ入っていいかしら？」

「ああ」

「こちらとしても色々と聞きたいことがあるのだけれど……そうね、まず、何故私がここに来ることがわかったの？」

「“気配”を感じた。なんつーか……あ、ソフィが来るんだなって感じの」

「そう、じゃあもう一つ。《オーバーフロー》の方は？」

「そつちも知ってたのか……順調だよ、ある程度はコントロールできてる」

そう言えばこの力も存在に気がついていた時は色々と思議が多くてコイツに聞き出そうとしてたりしたな。もういいけど。

「コントロールなんでまだまだだよ。アナタのせいではぼ全てのアーティファクトが狂っているのだから」

「? どういう事だ?」

「魔鏡の力と進化の力。共鳴した二つはこの世界だけでなく、その全ての歯車を崩し始めた。現にアナタ、私に気がついたでしょう?」

「……?」

「まあ今はいいわ。とにかく、進化の力である《オーバーフロー》はありとあらゆる可能性を秘めたアーティファクト。希望と言っても差し支えないわ」

さつきからコイツが何を言っているのがさつきぱり分からない。仮に文字通りの言葉を受け取ったとしても、崩壊した原因が俺なら希望なんて言えないんじゃないやあ?

「いい? レンタ。その《オーバーフロー》の力はこれ以上使うことを止めなさい。この世界は比較的安心できる世界だから。ここでアーティファクトを集めるべきよ」

「ん? それってどういう——」

「いつもこの世界が、既にカケルとレンタの崩壊を招いている。アナタ達二人は最後の希望。《オーバーオール》を止めなければアナタ達に勝ち目は無いわ」

「だからさつきから言ってる意味が——!!」

と叫ぶように声を出した時、ソフィの身体が途切れた電波の様に雑に消えかけている

のが見えた。

「時間が無いの。だからせめてこれだけは伝えさせて！」

「《オーバーオール》を持っているヨイチには気をつけなさい……!!」

裏

《視点切り替え》

「お疲れさん」

俺の理不尽な暴力によってボロボロになっているこの男の首を掴んで持ち上げる。俺と出会った時は既に身体中を怪我していたこともあつて連れ出すことも、お礼をする事も簡単だった。

「はっ………！ はあ………！ はあ………!!」

「呼吸をするのも苦しそうだな。まあしょうがないか、随分と派手に蓮太に殴られてたもんな、お前」

パクパクと口を何度も開かせながら、陸に上がった魚のように瀕死のこの男の首をさらに締める。

「おかげで《オーバーフロー》は目覚めた。もうお前には用はないよ」

「あぐっ………!!」

「って……あれか、能力を解除しておかないと次のやつに使えないのか。ええつと……」

ようともその行為を止めなかった。

「何言つてんだ、九條 都を傷つけたのはお前自身だろう？ 俺が謝る理由はない」

「お前が……！！！！ 僕の身体を……！！！！」

その男は遂に涙を流す。ヒビすらも入らない鏡を引きずるように血を残し、土下座でもするかのよう縮こまっていた。

「都ちゃん……！！ 都ちゃん……！！！！」

「能力をかけやすかったから助かったよ、人間の心つてのは随分と脆いからな。特に恋心。あれはいい、最も強い感情だから簡単に俺の能力で操る事が出来る」

「お前の過去を見てきたが……随分と昔から好きだったんだな、あの女の事を。接触する機会はかなり少なかったことが原因かは知らないが……相手は全くお前の気持ちに欠片も気がついていなかったが」

「でも良かったじゃないか、お前の大好きな女は、今心の底から幸せになっただけで？ お前が悪役になってくれたおかげでさ」

「ううっ……！！」

もう何も抵抗をする気も起きないのだろう。不可抗力とはいえ自分が行ってしまった出来事と、もう望みの見えない未来を考えた時に、絶望しか待っていないことに。

九條 都は竹内 蓮太とくっ付いた。この事実だけでもコイツの心には相当なダ

メージだろうに……これだから面白い。イーリスのやつてる事の楽しさがわかる。

「相当嫌われてるだろうな、お前。直接手を出したりもしたし、薬物に武器の密輸、人身売買、人間奴隷化と散々遊んだからな……元に戻っても生き地獄しか待つてないだろうよ」

「なんで……なんで僕が……！ 僕が何をしたつて言うんだ……！！」

「別に？ 何もしてない。ただ単純に《オーバーフロー》の覚醒に丁度よさそうなのが前だったつてだけ」

「……………！！」

「でもまあ良かったじゃん。大好きな女の身体を少しの間だけとはいえ楽しんだんだろ？ 別世界じゃあ散々ボロボロにしてるし……むしろ俺に感謝すべきなんじゃねえの？」

「ちがう……！ 違う！ 僕は都ちゃんを襲いたかった訳じゃない！！！！ ただ一緒に……笑つてたかっただけなんだ……！！」

「ま、俺が全部無駄にしたんだけどね」

人間を主役にした人形劇、コイツは本当に傑作だ。アイツがわざわざ物語を作つてまで《魔眼》を回収しようとする気持ちは俺にもよくわかる。

こうやつて最後にネタばらしをするのも最高だが……何よりも面白いのは、何も知ら

ないクセに幸せを感じているあのバカ二人だ。

罪の無い人間を自分勝手に裁いて優越感に浸るあのバカ共が……ははっ……！ 考えただけでも高ぶってくる。

「じゃあ何？ 今度はお前の意思で竹内 蓮太を殺しに行くか？」

「そんなことはしない……！ 都ちゃんが本当に心の底からその人を愛しているのなら……僕は背中を押すんだ……！」

「あの男に全てを奪われてるんだぞ？ 今頃は二人で盛んになってるんじゃないか？ もしかしたらお前とだったかもしれないのに」

わざとに精神を追い詰めるように差し向けてみる。

「だとしても……！ 僕は都ちゃんが幸せならそれがいいんだ……！ 僕とじゃなくても、本当に笑っているのなら、僕は——」

「つまらん」

しょうもない返答を聞いたあと、時間を無駄にしたと思いつつも能力を使う。

手のひらから映し出される紋章スニイグマを確認すると、即座に目の前の男の首の中から《鏡》を出現させて、その胴体と頭を完全に分断させた。

「そもそもとして生かすつもりもないがな」

ゴソツと意味もなく取れた頭を蹴り飛ばし、背後に置いてある椅子に座る。

「さて……次の世界ではどうなるかな。つと……もう限界か、そろそろ戻るか」
「おい」

パンツと手を叩き、近くにいるであろう人物を呼び出す。

「なーに？　つてうわ！　もう殺しちゃったの!？」

「俺はもう戻る。そのゴミを始末しておけよ」

青い髪をクルクルと回すように触るこの人物に適当に令を出すと、俺は元々の世界に戻った。

《視点切り替え》

「やれやれ……なんであんなに偉そうなのかな」

そもそもとして僕はアイツの命令を聞く理由はないんだけど。

「ま、いつか。アンブロシアとか借りれてるし」

コンコンと歩く度に靴の響く音が聞こえてくる。そして僕の目の前に倒れているあの男の死体。

僕は汚いものを触るかのように手を伸ばしてズルズルと引きずっていく。

ついでに頭も持って。
「残念だったね、まっ次はいい事あるよ、悠くん」

4人でダブルデート 前編

都との思い出から更に時間が経過し、今日は5月の5日。ほんの少し慣れてしまった彼女との睡眠から目を覚まし、手早く朝食の準備をする。

手短にばばっと簡単な料理を済ませつつ、自分も身支度を始める。フライパンで軽くハムと目玉焼きを2人分作り、昨日の夕飯に用意していた味噌汁を温め直し、一瞬の空いた時間でむにやむにやと眠っている都を起こす。

「都、都、そろそろ準備しないと間に合わないぞ」

今日も休日ではあるが、まるで学園にでも行く日の様に出かける準備をする。その理由は……以前から予定していた新海兄妹とのダブルデートの為だ。

「むにゆ……………」

「いや、「むにゆ」じゃなくて……朝は翔の家に行かなきゃいけないだろ？ ほら、顔洗って着替えて、セツトを整える時間があるだろ。起きなさい」

「うーん……………。おはおう……………えん太くん……………」

「はい、おはよう。目が覚めきったら顔を洗いにいけよ」

ココ最近の同棲生活で分かったことは、意外と都は朝に弱い事だった。と言つても基本的に俺が早起きな為、そう感じることもあるだけかもしれないが……だいたい朝は俺の方が早く起きる。

でも、都は何もしない訳ではなく、どうしても俺よりも先に朝に目覚めることが出来ないため、彼女との約束として夕飯は都に作つて貰っている。他にも掃除や洗濯も交互に交代制で済ませ、家事は2人でと決めた。

俺は別に全部俺に押し付けてくれても構わないんだが……まあそんなことを都が認めるはずもなく……と言つた感じで、俺たちの間でルールが決まった。

と言つても真面目に守っている訳では無いが……あくまで目安だ。その時その時の気分ですべて2人協力してしまつたりと結局グダグダにはなっている。

「よし……とりあえずはこれでいっか」

カンカンつとりズム良く無駄にフライパンを叩き、手軽な料理たちを皿に乗せてテーブルに配る。

ご飯や味噌汁も2人分配っていると、顔を洗つてすつかりといつも通りに目覚めた都が着替えを済ませて戻ってきた。

………髪はまだだけど。

「今日もありがとう。私の分まで」

「都の分も用意するのは当たり前だっつーの。んでどうする？ 先に食べるか？ 出来たてすぎて熱いかもしれないけど」

「うーん……せっかく準備してくれたし……」

「……いや、やっぱり先にセットした方がいいか。手伝うからさっさと終わらせよう」
少しボサボサの髪になってしまっている都を洗面台の前まで連れていき、軽く濡らし、くしでとく。

「サツサつスー……と髪が痛まないように丁寧且つ素早く驚くぐらいに長い髪を整えていると、ニコニコとはにかむ都が鏡越しに見えた。

「ん？ どうしたんだ？ 何かいい事があつた？」

「ううん。ただ一度、こうして恋人に髪をセットしてもらうのって憧れだったから、っ
い」

「別に言ってくれたら毎日手伝うのに……この長さだったら手入れも大変だろ」

ある程度真っ直ぐに整え終わると、ドライヤーを取り出して髪をかき分けて温風を優しく当てる。それからヘアアイロンを使ってクルクルと髪にクセをつけて……

「たまにしてもらうのがいいんですっ」

「そういうもんか？」

「そういうもんです♪」

やたらと上機嫌な都と会話しているうちに、10分ほどで手早く済ませた俺は都と一緒にリビングへと移動して朝食を摂る。

あの思い出から色んな意味での一線を越えた俺たちは、急速に距離が縮まったような気がする。

お互いに心も身体も許し合うことでやはりどこか遠慮していた壁が少し薄くなったのだろうか？

もちろん全く相手のことを考えずに遠慮していない訳では無いが、お互いに他人という感覚が薄れていったのだろう。気分はほぼ恋人以上夫婦未満といった感じだ。

だから、都が髪の毛のセットを頼ってくれたことも嬉しい。俺が特別と思ってくれているからこそ、この油断だろう。

美味しい美味しいと言ってくれた都を見ながらそんなことを思っていた。

それからは早々に2人で家を出て、待ち合わせでもあるあの場所へと向かう。手土産でも必要かと思いましたが……まあ予定では直ぐに出ると思うし必要ないだろう。

そんなこんなでたどり着いた場所は……翔の家。インターホンを鳴らしてドアが開くのを待っていると……すっかりと準備が整っている翔が迎えてくれた。

「おはよう、2人とも。入ってくれよ」

「おっす。邪魔しまーすつと」

「おはよう、新海くん」

手に持った袋が傷つかないように部屋の奥へと進んでいき、リビングに繋がる扉を開けると……………

「ちっ……………くそ……………失敗した」

ピコピコとボタンを押して凄まじいコンボを決めている天ちゃんがゲームをして遊んでいた。

「朝からゲームかよ……………すげえな」

「ん？ あつ！ エロパイとみゃーこ先輩！ おぎーす！」

「ふふつ、おはよう、天ちゃん」

俺たちへの挨拶を終えると、ポーズを閉じてひたすらにCPUの敵に向かって攻撃を当てる天ちゃん。

『パワーウェイツ!!』

『パワーウェイツ!!』

『Are you ok?』

敵の間を突いて派手な攻撃を当てて、天ちゃんは敵を場外へと吹っ飛ばして、戦いに勝利、イケメンな男キャラクターの決めポーズが映し出される。

「よーし、ウォーミングアップはこの程度かなー？」

「このゲームは何なの？ 天ちゃん」

都是天ちゃんの斜め後ろに座り込んで、ゲームのパッケージを見ながら質問する。

「これはアレっすよ、《大乱戦》っすよ。スマッシュ……なんちゃらっすよ」

「これなら俺も持つてるぞ？ ってそーいや都とは一緒にゲームとかしたことないな」

「面白そう……あつ、このキャラクター知ってるよ！ 食べると魔法を使えるんだよね！」

「魔法……っていうか食べた敵の能力を使える奴だな。俺も銀河に願うやつをひたすら

やってたなあ……懐かし」

と、ゲームのキャラについてみんなで話していると、天ちゃんはおもむろにコントローラーを繋げ始めて、俺にポイツと投げするように差し出した。

「みゃーこ先輩には悪いんですけど……あたしは今日、エロパイを倒さなきゃいけないので先に戦わせてください！」

「いや……8人まで同時に戦えるんだから一緒にやればいいんじゃないか？」

「おお？ なんだ？ 逃げる気か？ あれだけあたしをバカにしないと戦わずして逃げるのかあ!？」

なぜこんなにも天ちゃんがこうも俺に対して好戦的なのかと言うと……昨日の晩に、このゲームをやっていることをRINGを通して知り、天ちゃんなんて楽勝と豪語したら、彼女のプライドに触れてしまったらしく、逆上してしまったからだ。

「戦わずして逃げるなんて、所詮エロパイってことかあ〜」

「おっしやぶつ飛ばしてやる！ 早くやるぞ！」

「蓮太……天と同じレベルなのかよ……」

接続されたコントローラーを握りしめ、俺も参戦。そして俺が使うキャラは……
「天ちゃん如き俺の元ソルジャーにかかれば瞬殺よ瞬殺」

「ふっふっふ……まずはあたしが本気を出すべき相手かを見定めるとしますかね。あた

しが使うのは……同じ名前のこのキャラ！」

「うーわ、そんな強キャラ使うのか」

「エロパイだつてそんな変わんねえじゃねーか！ てかなんならモナド使いとちよつと迷つてたでしょ!？」

「はあ？ 別にハイラル勇者でもいいですけど？ なんならガチヒーローでザ○キ運

ゲーでもしてやろうか？」

「うーわ、この人武器持ちしか使う気ないー！ そんなんで挑発してたのー？」

「天ちゃんも武器持ちだろうが！」

なんてゲームでどちらが強いか論争をしている間にも、俺たちの後ろで呆れながらも微笑ましく見守る2人は飲み物を飲みながら俺たちの対戦を楽しむように見ている。

「俺は天が勝つに一票、九條は？」

「じゃあ私は蓮太くん。頑張つてねっ」

無邪気な彼女の声援を糧に、やる気もMAXになる。

「任せろ！ 天ちゃんをさっさと倒して早くラウンドツーに——」

「隙ありっ!!」

「ちよ!!? おまつ……ズルツ!!」

4人でダブルデート 中編

「あーもう悔しい〜!!!」

ダンツダンツと強く足踏みをするようにドシドシ歩く天ちゃんを先頭に、俺と都と翔はその背後を追うように歩く。

「所詮一夜漬けのレベルだったな、天ちゃんにはこのステージは早すぎるよ」

ふんふんと鼻歌でも歌ってしまいそうな程に機嫌がいい俺は、約束として奢ってもらった飲み物を飲みながら煽る。

「エロパイのくせに〜!!」

結局ゲームでの戦闘結果は5勝0敗、実力に圧倒的な差は無かったのだが、肝心なところで天ちゃんの操作ミスがあつたり、単純に勝つたりと一本も譲ることなく圧勝したのだ。

「天の奴、昨日もずっと蓮太を倒すって言って練習してたけど……すげえよな、こいつも決して弱いわけじゃないぞ?」

「単純さ、天ちゃんが俺より弱かっただけ〜」

「むつきー!! もう知らないかんね! 学校であることないこと言つてエロパイの評判下げまくつてやる!」

「そんな陰湿な仕返しやめて?」

この子つて俺たちの中でもムードメーカーな所があるから、1年を中心に変な噂でも流されたりしたら本当に悪いことになりそうで怖い。

「知つてます? みゃーこ先輩。エロパイつて実は結城先輩や春風先輩とも裏で付き合つて——」

「ねえよばーか」

「ばかつて言うな! ばーか!」

「ばかつて言つた方がばかなんですー」

「じゃあエロパイじゃねえか!」

そんな低レベルな言い合い。ここまで無邪気に騒いでいるのも随分と久しぶりな気もする。

何も考えずに、ただふざけて遊ぶだなんて。

「……あのうるさい奴の相手を出来るだなんて、大人なのか子供なのかわつかんねえな」
「でも、楽しそう。ちよつと嫉妬しちゃうかも」

「嫉妬?」

「蓮太くん、私にはばかって言ったりしないもん」

「あー……、そりやあ……ねえ？」

なんて翔と都の会話なんてお構い無しで、ひたすらに天ちゃんとの会話のドツチボール。

「次は……あそこ何があつたかな」

「アミューズメントのところにホッケーみたいなのがゲーム機あつたよな？ あれでチーム戦でもするか」

「おっ!? いいのか？ あたし達兄妹を舐めてると痛い目見るぞ〜?」

「おードンと来いや、お前から白翔コンビなんて俺と都の前じゃあ話にもならんよ」

「だからあたしやあパンツかつつの！ てかあたし今日は白じゃないし！今日は水色………って何言わすの!? やっぱコイツエロだ！ このエロ魔神!!」

「知るかよ!? おめえが勝手に言い出しだんだろ!？」
と、都とお揃いの天ちゃんなのであつた。

そんなこんなでラウンドツーに到着。それから本当に色々な所へ行つて遊びまわった。

着く前に言っていた通りにホッケーの様な機械でチーム戦、結果新海チーム勝利。俺たちの敗因は慣れない手つきで都が頑張っている時に揺れる胸をガン見してたからだ。

……………つらみ。

それから銃でゾンビを倒すゲームだったり、バスケットのシュートを打つやつだったり、レースゲームだったり4人で充実した時間を過ごす。

そして軽く昼食を済ませて、女の子組は言葉を濁してどこかへ去っていったので、俺と翔だけとなり2人を待つ。

きつとトイレだろう。

「たまにやあこんなのもいいな」

「確かに、頻繁に出来ることじゃないけど……やっぱりこういうのって楽しいもんな」

「考えなきやいけないことはまだあるけど……まあ、息抜きも必要だろ。っと……」

「そーいや一応伝えとくか」

「ん？」

せつかく翔と2人きりになれたんだ。不安にさせたくない2人も今はいないことだ

し……丁度いいかも。

「ソフィに会った」

「……なんで俺の所には来ないんだ？ アイツ」

「さあな、ただ言えることは……俺たちの知らない所で何か起きてるってことだけだ」

平行世界の事は……別に言わなくてもいいだろう。

「何かってなんだよ」

「ソフィは何らかの危険な状況に身を置かれている可能性が高いかも？ って話。それ

と……《オーバーオール》の件」

「待てよ……危険な状況って？」

「わからん。適当に言ってみただけ。急に姿を消したからなにか理由があるのかも？

って思った程度だ」

その割には態度は普通だったけど……なにか伝えようとはしていたからな。

「そうか……それで《オーバーオール》って？」

「知らん」

「さつきから何も分かってないぞ……」

「俺も対して翔と同じで何も分かってねえってことなんだよ。とにかく俺たちの目的であるアーティファクトの収集。それを達成するためには《オーバーオール》って名前のアーティファクトの回収が不可欠らしい」

「うーん……不可欠って言われてもノーヒントだしなあ……」

「詳しいことはまた後で話すよ、ここで深く話すようなことじゃあないからさ」

そう言っつてポンつと翔の肩を軽く叩くと、その瞬間に急な頭痛に襲われる。

「——ツ!？」

小さな耳鳴りのようなものも脳内に響き、手すりを掴んで頭を抑えていると、翔の方も同じような反応を見せていた。

「痛っ……!？」

そして頭に直接流れてくるかのように浮かび上がる言葉。

「《オーバーロード》……?？」

俺と翔は2人して同じ言葉を発していたのだ。これは……正直偶然なんかじゃない

だろう。この言葉が何を意味しているかは知らないが、何か忘れちゃいけない大切なことな様な気がする。

「……………」

頭痛が収まった俺と翔は2人して目を合わせていた後、不意に視線を横に向けると、俺たちから少し離れた先に、女の子が2人、誰かに声をかけられている姿が見えた。

いかにも陽の気質があふれ出る男が2人で声をかけている。

「……………翔」

「うん？」

一応の非常事態。翔の名を呼び親指をクイツとあの男どもに向けると、翔は目の色を変えて俺に向かって頷いた。

「行こう、蓮太」

「はいよ」

とりあえず考えるのは後だ。今はいち早く助けてあげべきだろう。

2人でテクテクと歩みを進めて女の子2人に男2人が馴れ馴れしく話しかけている所へたどり着くと……………

「いいじゃん！俺たちと少し遊んでよ！」

「い、いえ……………あの……………」

俺は都の肩を寄せ、翔は天ちゃんの前に立ち、男達から彼女を守る様にして乱入した。

「俺の彼女に何か用か？」

「……妹に何か？」

4人でダブルデート 後編

「にしても、エロパイって意外と子供っぽいというか……なんて言うんだろ、負けず嫌い？ なんすね」

「なんで？」

現時刻は夕方。一日中遊びまくった俺たちは、割とヘトヘトの状態で帰宅している途中だった。そんな時に天ちゃんから変な事を言われる。

「あたしと勝負する時とか、もちろんみゃーこ先輩とかにいの時もだけど、いっぱいはしゃぐし元気なんだなーって」

「んだよその語彙力の無さは……まあでも、そうかな？ 俺にやあわかんねえや」

「何なんだろ……あたし、初めて竹内先輩って人を知れた気がする」

「ふーん」

思い返してみれば、確かに少しはつちやけ過ぎた所はあるかも。ココ最近の数年間は、ずつと一人だったし、遊ぶ相手もいなかったし。

こうして誰かと一緒に休みの一日を過ごすって事そのものが随分と久しぶりだから

……その反動なのかも。

「つてそういや悪かったな、翔。アイツら追っ払うのほぼ任せちゃってさ」

「うん？ ああいいよ別に、むしろあのまま蓮太に任せてたら喧嘩になりそうだったし」
「そりやム力つくだろ……いきなり都に腕回したりし始めたら、ぶっ飛ばしてやろうかと思っただわ」

あの時のナンパ2人組、片方の男は割と普通っぽかったが、必要に絡んできた男の方はまるつきり下心丸出しで都と天ちゃんに迫ってきていた為、その手が触れる前に足で弾き飛ばしてやった。

「エロパイ強かったよね、こう……足をあの人の顔面ギリギリにビタツ！ つて止めてさー！ にいやんとは違うわー」

「うっせ」

「何よりみやーこ先輩がエロパイの後ろでギュツと腕を掴んでたのがもう……たまりませんでした」

「だつて……怖くて……天ちゃんは怖くなかったの？」

「ぶっちゃけエロパイが頼りになりすぎて虫けらでしたね」

「おい」

「だつてーにいやん言葉で厄介払いしただけじゃん！ ね？ エロパイー！」

「ん？ 悪い聞いてなかった」

「聞けよ」

《視点切り替え》

「ふう……」

突如行方不明となった近衛 悠、私一人がいくら探したところで限界はしれている。ここまで手を尽くしてダメなのなら……個人の力ではどうしようも無いという事ね。

あの時に戦うことになった爆発能力を持つ聖遺物の所持者もあれつきり姿を見せない。生きてはいると思うのだけれど。

あの2人も気になるところだけれど、もっと気になるのは……

「春風……」

春風がいないこと。彼との決別の日から、1度たりとも春風を見かけていない。白泉学園にも連休前に何度か顔を出したけれど、どうやらタイミング悪く休んでいたようだった。

私は春風の家を知らない。だからこそ彼女が居そうなところを探して回っているけれど……………

何が悪い胸騒ぎがする。とつても嫌な……苦しい気持ち。

「……………」

スマホを取り出してもう何件目か分からないRINGでのメッセージを送る。そう、何度も送っているにも関わらず一向に返事が来ない。

既読のマークすら……………

まるで私の周りからみんなが離れていくみたい。春風も……………彼も。

そんな時だった。道で立ちつくしている私に声をかけてくれた人が現れたのは。

「ん……………？ 希亜じゃないか、こんな所で何やってんだ？」

「……………少し……………ね」

姿を見なくてもわかる。この妙に落ち着く声、この世界で唯一、私のことを「希亜」と呼ぶ人物。

竹内 蓮太。

「貴方こそどうしたの？ 彼女に愛想を尽かされたのかしら」

「ははっ、いつからそんな嫌味を言うようになったんだよ」

……………？

「まあせっかく会ったんだし、ちよつと歩こうぜ。今日はずつと一人で暇だったんだ」

「嘘ね、九條さんと同棲中でしょうに」

「そういう意味じゃねえっつーの。アイツがバイトの日は必然的に俺は一人になるだろ」

……………何か違和感が……………あるよう……………な？

「まあいいわ。それじゃあ少し歩きましょうか」

「はいよ」

それからは特に中身の無い会話を転がしていく。2人きりになるのは久しぶりとか、猫様のこととか。

けれど何か妙、気の所為なのかもしれないけれどほんの少しの不思議な違和感をずつと感じている。

それが何なのかはわからない。

そして気がつければ人通りの少ない道に2人きりで歩いている。まるで誰からもみられないこの場所に誘導でもされているかのように。

……………やっぱり、何かが変。

「この辺でいいか」

夕暮れに照らされ、心地の良い風が透き通る道。街からも駅からも少し離れたこの場所、彼はその歩みを止めた。

「わざわざこんな所へ連れ出してなんの用なの」

「怒んなよ……………いい景色準備してやれなかったのは謝るからさ。これでも結構探したんだぜ?」

「怒ってはいない。これから貴方が何をやるかで怒ることになるかもしれないけれど」

「別に何もしねえよ……………つて……………希望、ちよつとじつとして、肩に埃が着いてる」
案外普通通りに近い反応で彼は私に近づいてきて、本当に私の肩辺りに手を差し伸べる。そしてすっかりその言葉を信じてしまっていた私は、次の瞬間に頭の中が真っ白になった。

「希望……………」

「え……………」

さし伸ばされたその腕は私の肩に触れること無く、そつと優しく背後に回されていき

ゆっくりと彼に抱きしめられる。

意味が分からなかった。けれど考えることも出来なかった。それほどまでにその行為は衝撃的で、押し殺していた心が揺れ動ごく。

「ほんの少しだけ……少しだけでいいからこうさせてくれ………」

甘く囁く彼の声。ダメなのに、こんなことは絶対にしてはならない事なのに、脳が蕩けるように考えることを放棄し始める。

「貴方……な、なに……を……」

「お願いだから、希亜を抱きしめさせてくれ」

「え……？ え………？？」

「希亜……」

わからない。何も、わからない。

ただ。

その声を。

聞いただけで。

私は。

「これで、
2人目」

心の闇

《視点切り替え》

「ここはどこ？」

「おかえり、希亜」

「私は何を？」

「ええ」

意識がハッキリと戻った時には、私は知らない場所を歩いていた。

「あら、戻られていましたの？ 希亜さん」

「今は《そっち》なのね、春風」

春風!?! 今までどこにいたの!?!

「こちらの方が今は楽なんです。それに、もうすぐ準備も終わりますし……ね」

「そう」

何が何だか……わからない。自分の体は言うことを聞かず、行動も会話さえも私自身の心を無視し続ける。

私は一体……？

「2人とも揃ったみたいだね。よかったよかった」

パンパンと手を叩きながら唐突に現れたのは、全体がシルエットで包まれた謎の人物だった。

強く光る何かのマークのようなものが逆光となり、一番重要な姿が確認できない。けれど、その人物はその声で簡単に想像ができた。

「俺はそう頻繁に世界間を移動できないからね、《魔鏡》の力を使って君たち2人には先に飛んで貰うよ」

「今更何を」

「そうですね。それに貴方様の出番はない可能性もあります。わたくし 私たちに追いついた時には既に彼は支配下に……なんて都合が良すぎるでしょうか？」

「春風の能力が完全に有効ならば……難しいことは無いでしょうね」

私は一体何を話しているの？ 私たちは今から何をされるの？

「うん……一応念の為に確認しておこうか。君たち2人に最優先で行ってもらうことは何？」

「もちろん《霊薬》による契約の強制解除ですわね。《魔鏡》や《奇跡》の力はともかく、何よりも警戒すべきは《幻体》。あの力さえ引き離すことが出来れば勝利はこちらのもの

のですから」

「そうね、1人ならともかく、2体の幻体による《奇跡》と《魔鏡》の同時対面は絶対に避けるべき問題。どちらか片方でも取り除くことが出来たのなら即刻砕き割るべきね」

……!? なん………! で………ツ?!

口が勝手に………!?

「そう、それが分かっているのなら問題ないね、それじゃあ……俺の能力で君たちのその《悪意》だけを転送させる。心の奥底に潜む闇の部分肥大化させてね」

私たちの……悪意? 心の奥底に潜む闇……? 何を言っているのかがわからない。相手の心理に関する能力だなんて……聞いた事もない。

「……希亜はまだ若干の意識だけがあるようだね。不思議そうな気配だ、今この状況に理解出来ない、あるいは整理が追いついていないって言った感じかな」

「じゃあ説明くらいはしてあげるよ。まずは自己紹介から、俺は『紅葉』そっちからは好きなように呼んでよ。こっちからも好きなように呼ぶから」

紅葉……この人の声……間違いはない。蓮太だ。

「俺の目的は竹内 蓮太の『消滅』だ。彼がこの世界に来てしまったことでこの世界の歯車は狂い始めている。もちろん彼だけの問題ではないが……トリガーとなったのは間違いはない。だって、本来は存在しない人物だからね」

……!? 消滅……つて……! それに本来は存在しない? この人は一体何を言いたい!?

「存在しないって言うのはそのままの意味だよ。俺を含めて、彼は君たちの物語には関わることの無い、存在しないモノなんだ。だけど突如として現れた《魔鏡》そして《オーバーフロー》によって君たちの運命を変えるべくやってきた。神の使者とでも言おうか」

「だが結果どうだ? 俺は彼が関わることのなかった世界を知っている。知っているからこそこの世界を壊さなきゃいけないと思った。それが何よりも君たちの為だと思っているから、あの男を消すべきだと考えた」

そんなこと……させるわけが無い! 彼がこの世界に存在しない人? その根拠は? 証拠も無いその言葉は信用するに値しない。

それに仮に蓮太が世界の外の人間。異世界人だったとしても彼には彼の人生がある。この世界で、この街で幸せに生きる彼の運命が。

「では聞くが……その結果、君は幸せとやらになれたのか?」

……!?

「心の底から笑顔でいられるという結果にたどり着けたのか?」

……

「違うだろう？ 俺の能力……《魔鏡》とは別の俺だけの力、その詳細は他人の悪意を増幅させる力。この力が扱えるってことは、希垂自身の心の奥底にはほんの欠片だけだとしても、悪の心があつたんだ」

「〴〵彼〴〵を取られた事で発生した心の闇が」

……そんなこと……ない！ 私は本当にあの2人の幸せを祝つて——

「強がらなくていい。君の心の闇は既に知っている。人間つてのは見返りがなければ人とは繋がれないからな」

……何が言いたいの。

「友達になるのは自分を肯定してくれるから、孤独という痛みを忘れさせてくれるから。その見返りを求めて繋がつた人が今や自分から大切な人を奪い去ってしまった。その結果心に抱えるべき想いは……」

「〴〵どうして私じゃないの？ 〴〵だ」

——ッ!?

「〴〵私だつて愛していたのに」

いや……！

「〴〵私だつて振り向いて欲しかったのに」

やめて……ッ！

「“私だつて隣を歩いていたかつたのに”」

来るなッ！ 来るな来るな……！！ 来るな………ッ！！

「“また大切な人を失つた”」

ひっ……………！！

「そんな心の闇は強大な力を宿し、人を消すにはもつてこいなんだ。儂い恋心、それは裏を返せば自分を苦しめる茨だ。想えば想うほど苦くなり、痛くなる。胸に秘めれば秘めるほどもう1人の自分に殺されそうになる」

「さあ、お話はここまで。後は君たち2人の働きに期待しているよ、希亜、春風」

「その“想い”を胸に……次の世界へ行つてらっしゃい」

ニセモノ?ホンモノ?

「ねえ、蓮太くん」

あのダブルデートの日から大体1週間ほど経過した5月の15日。何故か右腕の怪我がほぼ治っているにも関わらずに未だに同棲生活を続ける俺と都は、昼食に都が作ってくれたハンバーグを食べながら休日を過ごしていた。

「ん? どうした?」

「最近ね、おかしな噂を聞くの。蓮太くんを街でよく見かけるって噂なんだけど……」

「ん? 別に都と大体一緒にいるし、2人で街に出かけることは珍しくもなんともないだろ?」

「そうなんだけど……みんなからお話を聞いたらおかしな点が沢山あるの」

「おかしな点って?」

「今日も柔らかくて美味しいハンバーグだ。……もぐもぐ。」

「この間の水曜日、私たちでショッピングモールにお買い物に行ったでしょ? でも、同じ日に公園で蓮太くんのことを見かけたって言ってた人がいてね」

「あの日は……別に公園なんて寄らなかつたよな?」

「うん。偶然蓮太くんに似てる人がいて、人違いなのかな? なんて思ったりもしてたんだけど……他にも私と蓮太くんが一緒にいる日に、別の場所で蓮太くんを見たつて子が沢山いて……もしかしたら、アーティファクトの能力じゃないかって思つて」

「アーティファクトねえ……」

仮に能力を使つて俺の同じ見た目になつたとして、何か得があるのか? それに特に悪さをしている訳じゃなくてその姿で過ごしてつてただけだよな。

なにかそれつて意味あるのか?

「それに気になるのが……最近香坂先輩と結城さんを見かけなくない?」

「確か……に」

そう言えば希亜と最後に話したのは5月の1日の夕方か。あれ以来は見かけてもいないし電話もRINGでのやり取りもしていない。香坂さんに至つてはその前の戦闘終了直後だ。学園でも見てないな。

「あれからみんなが集まることなんてあまりなかつたからな。そろそろまたみんなが集まりたいよなあ〜」

「怪我也あつてなかなか時間が作れなかつたものね」

「だな、とりあえずグループにメッセージだけでも………つて」

昼食をパクパクと食べていると、俺のスマホがバイブレーションをしながら今日を鳴らす。一度手を止めてその電話に出て耳を当てると……………一際大きな声が大音量で響いてきた。

『エロパイっ最低ッ!!!』

「うるっせ……………」

思わずそんな声が漏れてしまうほどに大きな声で叫ぶ天ちゃんからの電話だった。なんでこんなに怒ってるんだ?

「なにになに……………どうしたんだよいきなり……………」

『あたし見ましたよ! エロパイがたった今街の外れのラブホテルに入っていくところを!! しかもっ!! 知らない女の人とっ!!』

「はあ?」

あまりにも素っ頓狂でアホみたいなことを言い出す天ちゃんはマジのリアクションでブチギレている。

『とぼけるなー! みゃーこ先輩というものがありませんから……………! 本当に軽蔑した! もう全部みゃーこ先輩に言いつけてやるッ!!』

「あのなあ……俺は今都と一緒に飯食ってんだぞ？　なんで知らない人とそんな所に行かなきゃならんのだ」

『うーわ！　しらばつくれるんだ！　いいもんね！　あたし写真撮ってるから証拠はあるんだぞ!!』

「だから、俺は……」

この瞬間にピンと来た。さつきまでの都との会話のこと。俺の偽物がある可能性。見間違いではなく、なりすましがいるかもしれない危険性。

「……………天ちゃん。今すぐそこから離れろツ!!」

『やだよー！　浮気なんてあたしは絶対……………あつちよつとにいやん……………』

『もしもし!?　蓮太か!?　お前今どこにいるんだ!?』

「その声翔か、俺は今、都と俺の家に——」

『だろうな、お前が九條を裏切るなんて思わなかった。だったら厄介なことになってるぞー!』

「厄介って……………まさかお前まで俺を見つけたなんて言わないよな」

『……………お前を見たんだッ!』

……………どうやら翔も俺が誰かと一緒にいる所を目撃したらしい。こりゃあ本格的にどうにかしなきゃいけないみたいだな。

『とにかく俺はもう1人のあいつを止めて——』

「待て、翔。とりあえず今はそいつは放置でいい。とにかく直ぐに俺の家に来てくれるか?」

『なんで!? アイツを止めないとお前の知らないところで変な悪さをされるぞ!? 人も殺してみろ! お前は濡れ衣着せられたりなんか——』

「今そいつを抑えてどうするつもりだよ。相手が複数のアーティファクトを所有していたら? 攻撃的な力を持つていたら? 天ちゃんも2人なら尚更だ。こつちとしてもまだ伝えておきたいことがある。とにかく都と俺は動かないで待つてるからすぐに来てくれ!」

『……わかった。待つてろよ』

ブツンと電話を終了し、あらかたの会話を聞いていた都が心から不安そうな表情で俺を見る。

「やっぱり……蓮太くんの偽物が……?」

「みたいだ。アーティファクトなのかどうかは知らないが、俺の知らないところで色んな女の子を誑かしてるらしい」

「そんな……でもそれじゃあどうしたら……?」

「翔と天ちゃんがここにやって来てるから、まずはそこから話し合おう。それと……偽物じゃないって証拠も必要だ。今もこれからも」

そうして俺は黒いペンと怪我していた時に使っていた包帯の余りを取り出して、懐かしいあの漫画の方法を真似ることにした。

「都、腕を出してくれ。これから本物の俺たちを見極めるための保険を作る」

「腕……?」

仲間の印（笑）

「これをこうしてこうやって……」

「ね、ねえ……これ大丈夫なの？ 色々と危ないんじゃない？」

「何言ってるんだ都。これだけ分かりやすくしとけばみんな誤認しないだろう？」

「うーん……なんだか怒られそうな気が……」

「これで……よし」

何かを心配する都の左腕にクルクルと包帯を巻いて痛くならない程度に締め付ける。

「せめて〇とかにした方がいいんじゃない？ 流石にあのマークのままだと、心配だな

……」

「いいんだよ、つーか俺はそれがいいの。かつこいいから」

なんて会話をしている時に、ピンポンとインターホンの鳴る音がする。

「あ、私出てくるね」

トコトコと都は小動物のように可愛らしく歩いて行くと、すぐに翔と天ちゃんが血相を変えて部屋に入り込んできた。

「蓮太ッ！」

「エロパイッ！」

「来たか」

それからは天ちゃんの猛烈な謝罪が始まる。ひたすらにごめんなさいごめんなさいごめんなさいと本気なのかふざけてるのか微妙に分からない謝罪だったが……まあ気にしない。

罪悪感からか、わーわーと泣いていたがポテチを渡したら簡単に笑顔になった。

……なんで俺が損してるんだ？

「それで、蓮太の偽物がいるのが確定したわけだけど……どうするんだ？ アイツを止めないとどうしようもなくなるか？」

「止めるには止めるけどまずはしとかなきゃいけないことがあるだろ？」

「しとかなきゃいけないことって？ (バリポリ)」

「俺たちが仲間である印を残すんだ。俺たちだけのパスワードを俺たちだけで共有する」

そうやって都の左腕を見せつける。

「待ってエロパイ、なんかあたし言いたいことわかった気がするんだけど……」

「お、察しいいな。わかったんならほら、左腕カモン」

そうして差し出された天ちゃんの左腕に黒ペンでマークをつけて包帯で隠すように巻く。

「……ええこれ、大丈夫なの？ あたしたち海賊になる気は無いんだけど……」

「よし、それで翔の方にも………つと」

マークをつけてクルクルと包帯を巻く。これで4人分の準備は整った。

「いいか？ 俺には偽物が居ることはわかってるが、それが化けたものなのか、変えたものなのかはわからない。つまりは俺以外のお前たちの誰かも偽物がいるかもしれないと思え」

「うわつ、唐突に真面目な話になった」

「これから俺たちはバラけて行動することもあると思う、そうなりやもう俺たちは味方をも疑わなきゃいけない関係になるんだ」

「そ、そうだね。私も蓮太くんを疑いたくはないよ」

「そりやもちろん仲間を疑いたくはない。だからこそほんの少しでも怪しいと感じたのなら、この包帯を取って印を見せ合う、これが出来なきゃソイツは偽物だ」

「なるほど……二段構えの作戦か、流石だな」

「うん待って？ この流れ何か既視感があるよ？ あたし覚えてるよ？」

すつかりとポテチを食べることをやめた天ちゃんは、何故か微妙そうな顔をして話を

聞いていた。

「しようがねえだろ、だって区別がつかないほどに似てるんだろ？」

「似てるなんてものじゃないよ！ 同じだよ同じ！」

「天の気持ちも分からなくは無いが、真面目な話あんな奴が存在する以上、迂闊な行動は取れない」

「そうね、だから……こういうものも必要なのは理解出来たつもり」

「よしっそれじゃあお前ら、腕を出せ」

それから俺たち4人はそれぞれの左腕を差し出して、輪を作る。

「ここに香坂さんと希亜、高峰がいないけど……アイツらには本物だと確定した瞬間に同じようにしてもらおう、だからまずは俺たちだけだけ……」

「これから何が起こつても、左腕のこれが——」

「仲間の印だっ！」

「あのー……エロパイ、やっぱりこれアウトな気がするんだけど……」

「え？　なんで？　これ俺のオリジナルだよ？」

「それ一番ダメなセリフ！　それだけは絶対言っちゃダメ！！　あたし知らないよ!?
後悔することになっても！」

わちやわちやと焦る天ちやんとは裏腹に、都はどこか嬉しそうな表情をして包帯が巻かれて
いる腕をキュツと握る。

「みゃーこ先輩もいいから！　そんなシーンまで再現しないでいいから！」

「それじゃあ行こうか、天………：飯屋へっ!!」

「いやんもふざけんよ!? そんな所まで誰も覚えてないっつーの!」

「最後にはさ! 天ちゃんの去り際に俺たちみんなで背中を向けて腕を掲げようぜ!」

「なんで!? なんであたしがお姫様役なの!? 可愛いから!? だったら許す!」

「それだったら都の方が適正だなあ」

「はあゝ!? 今何か言いましたゝ?!?!」

4月28日

不運な朝?

「こんにちは。どうやら枝の観測は終えているようだね」

「九條都との枝。どうだった？ 違った味のある雰囲気味わえたんじゃないかな？」

「そしてこれから君たちが選ぶ未来は……なるほど」

「それじゃあ俺も、一足先にそこへ向かって待つてるよ」

「え？ 俺が誰かって？ ……竹内 蓮太だよ。今はね」

そして次の日の朝。

妙な感覚を覚えながらもベッドから立ち上がる。痛みのような……疲労のような……よくわからないモノだ。

もしかしたら今までの疲れがまだしぶとく残っているのかもしれない。そこそこマシにはなったとはいえ流石にこれ以上はサボれないだろう。

「……………なんだろう」

言葉にし難い感覚。なんとも言えないが……………今この状況を整理するよりも先に、学園へと向かう準備を整えて、俺は家を出た。

適当にフラフラと街中を歩き、学園なんて面倒くせえと感じながらも長すぎると思うほどに邪魔になってきた髪をクルクルといじくりながら進む。

「髪……………切らねえと邪魔だな」

「うん？ エロパイ？ どしたの」

「天ちゃん」

「……………」

登校ルートで偶然鉢合わせた天ちゃんだが、呼ばれて普通に返事したただけなのに天ちゃんは軽く驚くように目を見開いた。

「先輩、あたしの名前……………」

「?」 天ちゃん。新海天

いきなり何言つてんだこの子?

「名前がどうかした? もしかしてあだ名をつけて欲しい的な?」

「あだ名でもいいっすけどね〜! でもせつかくだからそのままでもいいや」

「はいはい。それじゃあさっさと学園へ行こうぜ、めんどくせえけど」

「あつ、その前にコンビニ行きませんか? コンビニ」

「りょーかい」

〜コンビニにて〜

「痛ったーい……………もう……………」

「まさか扉に攻撃されるとはな……………! かつかつか!」

「笑い事じゃないの! なんなんだよう! もう……………!」

一緒に登校することになり、昼飯であるパンやおにぎりを買おうと途中でコンビニに寄ったのだが……機械の調子が悪かったのか、天ちゃんに自動扉が反応することがなく、堂々と歩いていたら天ちゃんの歩みを無理やり衝突するように止められたのだ。

おでこを片手で抑えながらプンスカと怒っている姿は可愛らしくも思える。

「まあいいや、どうしよかな……おにぎり……うーん」

「つーか、なに？　いつつも昼飯買っていつてんの？」

「ちやいますよ、お母さんが今日寝坊してたみたいでリビングにいなかったんすよ。だからいつもは先輩と違ってお弁当っす」

「へえ〜まあお母さんも疲れてるんだろ。たまには休ませたれよ」

「別に怒ってなんかは無いけど、寝坊しちゃうくらいに疲れてるなら言ってくればいいのに」

「手伝うの？」

「代行を頼む」

「おい」

なんてペつちやくちや話しながら、セルフレジの所にカゴごと持っていく、ピツピツと軽快にレジ打ちをしていく。

自分の昼飯も飲み物も、何故か途中で入れられた天ちゃんのコーラも。

まあ悪いことが連続して起こった時なんかは早くそれを忘れることが第1だ。こんなものをひとつ奢って気が紛れるのならそれもアリ……か。

「ん？ ん〜……？」

なんて考えながら会計も済ませてコンビニを出ようとする、未だに天ちゃんがタッチパネルをタップしている姿が目に入った。

「あれ？ あれ？」

「どうしたんだ？ 機械が変？」

「バーコードは読み取ったんだけど……会計ボタンが押せない」

「ん？」

荷物を置いて天ちゃんの隣へ移動し、実際に何度も何度も連打しているその場面を真横で見ているが……確かに機械は何も反応を示さない。

「故障か？」

それが気になって無意識に俺が会計ボタンをタップしてみると……

ピッ。

『お金を入れてください』

と録音していたかのような音声の流れ始めて、普通に機械が動いた。

「なんだ、出来たじゃん」

「ええー？ あんなにあたしタツプしたのに？」

「まあたまたま調子が悪かっただけだろ。さっさと会計済ませて出ようぜ」

「むうー。納得いかない。あー！ もう！ にいやんのバカヤ——痛っ!？」

なんて苛立ちを発散させるかのようにお兄ちゃんが悪口を言おうとした天ちゃんだったが、まるで止めろと言わんばかりに再び自動ドアに頭をぶるけるのだった。

「朝から元気がいいな……」

日常が始まる日……………

「……………おっ？」

なんちゃかんちゃあつたコンビニを出ていくと、不自然に俺を待ち構えるようにとある人物が出入口の横に立っていた。

「……………よう、大将」

「……………」

似たような姿の2人の内1人はなんとも無愛想にガムを風船のように膨らませながら、俺に目を合わせようとしない。

「あれ……………？ ゴーストさん……………？」

「もう見つけたのか？ 偉い早かったな」

「見つけるのはわけねえよ。んな事よりも気にする事があんだろ」

「ああ、《白》のゴーストも——」

「じゃねえよ馬鹿」

ベチンつと片手で作ったキツネを弾かれ、モ口にデコピンを食らう俺。

「て……」

「天だよ、天」

「……ん？ 天ちゃんがどうしたんだよ」

「テメエなーに連れ出してんだよ、あれか？ とうとう変態が止まらなくなって人の妹属性にやられたのか？」

「なんでだよ！ 偶然一緒になったから一緒に登校してただけだつーの！」

確かに俺と天ちゃん2人だけつてのはかなり珍しい組み合わせではあるけれどもさ！? いきなりそれは酷いんじゃないの!?

つかそもそもお前分かっててここで待ってただろ。

「ゴーストさんも……」

「まあでも良かったじゃねえか、コイツも変大将に用事があるみたいだつたぜ？」

「ちよつと待て、変大将つてなんだ。バカにしてんのか!？」

「ああ馬鹿にしてるよ。ま、詳しくは後で話すからさつさとガツコーへ行つてこいよ、変態将」

「ちよつと待つて、それはもう変態が主になってるよね？ もはやそこまでいくとわざとだよね？」

「わーったからさつさと行けつての、セクハラ変態将」

「……………もしかして俺の事嫌いなのか？」

《視点切りかえ》

「行かせてよかったのかよ。アイツ、なんか変だぜ？」

蓮太と天の背中を見送っている時、隣にいるもう一人のオレである《白》がそう問い質す。

「でも大将は影響が無いみてえだ。他の奴らみたいに完全に忘れることも、ド忘れすること何も無かった」

気になるのはその1点。色々と不確定要素が多すぎるからあんまりハッキリとした

ことは言えねえけど……もしかしたら大将は………

「それで？ わざわざオレを連れ出して何をするのかと思えば、お守りでもしろってか？」

「だからさつき話し合った通りだ。白^{テメエ}の持つてる霊薬が必要になればソイツを寄越せさせてだけだ」

《アンブロシア》と組み合わせで作ることの出来るもうひとつの霊薬、《ネクタル》。リスクは高いがもしも止めることが出来なけりや使うしかねえ。

「だったら物だけ持ってけよ、オレが怪我してんの知ってんだろ」

「そんだけ動けりや十分だ。つーかそもそも白^{テメエ}が大将と話がしたいって言い出して始まったことだろ。あの馬鹿のどこを気に入ってんのかは知らねえけどよ」

《白》の立場は十分に理解しているつもりだ。敵でありながら今の自分の居場所に納得していない事実も、道具として扱われ続けているのも。

オレだからこそ身に染みるほど感じ取れる。

でも、そのオレから感じるこの出来る満足感や安心感も、きつとコイツには伝わっているだろう。

蓮太の幻体として過ごしていく中で、アイツは「一度たりともオレを『便利な道具』としては見なかった。むしろ無駄に飯や風呂まで用意してくる。呆れるほど馬鹿なんだ

よ。

本当に、呆れるほど。

コイツなら……きつと捨てないだろうなって思えるから。

それにそもそもとして《白》が持っているアンブロシアは最悪の場合自分に使う用だった。幻体なのにも関わらずコイツは主人の元を離れたいと願っているんだ。

オレにだって、コイツにだって意思はある。生きてもいいし、人でもないけれど……物でもないから。

「そーいやあよ、その霊薬ってどこで手に入れたんだ？ 確かあの人形とは連絡が取れないはずだったよな？」

「ココ最近オレの創造主に喧嘩売ってくる輩がいるんだ、厄介な能力者ばかりだがどうやら仲間を探してるらしくてな、まあそれはいいとしてソイツらが持ってたやつをかつぱらってきた」

「……ああ？ 霊薬はあの人形が生きてる世界の物だろ？ なんでそいつらが持つてんだ？」

「さあな、知らねえ。アイツらも異世界人だったりしてな」

「……………」

だとしてもありえないだろ。それならあの肉体はオレたちと同じ幻体を使ってい

るって事になる。

蓮太が雷野郎と戦闘になった時、そんな感覚は無かった記憶があるんだが……

「今考えてもしようがねえか。とにかくガツコーへ行くぞ。天を一応見ておかねえと」

「はあ……へいへい」

違和感と直感

「それで、にいやんのファイナルビルダーズのデータ消してやったんすよ！」

「容赦ねえな……」

いつもと変わらない日常。いつもの変わらない光景。現段階でアーティファクトによる事件が起きているだなんて、自身が経験していない限りは信じもしなかっただろう。

まあ、この日常もアーティファクト事件のおかげで手に入れられたと言っても過言では無いのだが。

ただ、気になることが出来た。

「それとね——」

「危ねえツ!？」

俺と天ちゃんが並んで歩いているところで、遠慮なく天ちゃんにぶつかると通りすぎていく自転車。これでもう3回目だ。

「大丈夫か？」

大慌てで腕を引き、天ちゃんを抱くようにして身を寄せる。もうこれが数回起きてい
るからか、天ちゃんはどこか怯えるように過ぎ去った自転車を見つめていた。

「うん……………ありがとうございます……………」

「最近は変な輩が多いんだな。人が歩いているのに速度も落とさねえで通過するなん
て」

でも不思議なのはどうも悪意があつてああいうことをした訳じゃなさそうな所なん
だよな。なんつーんだろ……………それが当たり前前つて言うか、普通つて言うか。

「……………」

天ちゃんは無言のまま、俺の服の袖をキュツと強く握る。

そして小刻みに震えているかのようにも見える彼女は、じーっと塰かない場所を見
つめていた。

いや……………決してそこを見ている訳では無いのだろう。何かを真剣に考えているよう
だった。

《記憶をインストールする》

「うっ……………っ!!」

その瞬間にズキンと脳が膨張するかのような痛みが頭に走る。思わず目を瞑り片手を抑えてしまうほどの激痛だ。

しかしそれは一瞬で止まり、何事も無かったかのようにすんなりと痛みは引いていった。

「先輩……………」

そして第一に思ったことは……………

「天ちゃん、今日は俺と一緒に学園サボろうぜ」

「……………え？」

「なんか面倒になってきてさ、どうだ？ ゲーセンでも行くか？」

俺が感じたことが本当なのか嘘なのか、夢なのか現実なのかわからないが、強く心の底から思ったことがある。

このまま天ちゃんを学園に連れて行っちゃダメだ。

きつと……彼女は深く傷つく結果になると思う。モヤモヤと頭の中に渦巻く直感がその答えを出したんだ。

「で、でも……学校行かなきゃ……」

「1日くらいいいって、黒ゴースト^レ達も呼ぶか」

半場強引な形ではあるが、嫌なことが続いているこの子を楽しませる為に、手軽に遊べるような場所を探すように手を引つ張つて歩く。

その先はもちろん学園とは反対方向へと向かうどこかだ。

「ま………まあエロパイがモック奢ってくれるなら行つてあげようかなあ〜」

最初こそは疑問を感じ戸惑っていた天ちゃんだったが、気持ちを切り替えるかのよういつものような元気な声を出して歩く。

「天ちゃん何でもかんでも人に奢らせすぎじゃね？」

「いい女は財布を持ち歩かない」

「じゃあなんで天ちゃん財布を持たないの？」

「ひどい」

それからは会話を途切れさせることなく、ひたすらに話題をコロコロと変えつつも言葉のキャッチボールを続けた。

全然関係の無い事や、勉強やバイト。わりかし大事なことも。ひたすらに話し続けた。

……

……

……

「いらつしやいませー」

手にしているカバンを邪魔だとも思いつながら、割とモツクの話しかしない天ちゃんと一緒に店に入る。無愛想な店員の挨拶を聞き流し、メニューを確認するが……

「そっか、今の時間帯は朝モツクか……」

俺朝モツクって何があるのか知らないんだよな、そもそもモツクにあまり来ないから

……何にしようかな。

「あたし……マフィンがいいかな」

「ん……じゃ俺もそれでいいや。そういやアイツらって何食うんだろ」

「アイツらって、ゴーストさん達のこと？」

「そ、前に一度テリヤキとシエイクを口にしてたけど、今の時間帯は無いからな。まあ来てから頼めばいいか」

アイツらだつて好みぐらいあるだろ。好きなの食わせりゃいいや。

「すんません、このタマゴの……エッグ？ のやつをセット2つ分お願いします。サイドは——」

なんて言葉じゃ分かりづらいだろうから、頼みたいものを指で差して店員に伝え会計を進める。

「天ちゃんも座つていいよ、後で俺が持つてくから。つーか席確保しといて」
「ういっす」

てくてくと歩いていく天ちゃんを横目に会計を済ませ、注文した物が出来上がるのを待つていたら、店内が静かだからかレジの奥側の会話が聞こえてくる。

「凄いね、あのお客さん。朝からあんなに食べるなんて」

……？

「でも後で連れの人に来るらしいですよ？　なんか「あいっら」って言ってたんで、その人たち用じゃないですか？」

「まあどちらにせよお金を頂いている以上はしつかりとしなきゃね」

「はい」

朝だとはいえそんなに珍しいだろうか？　人によつては全然頼む量だとは思うんだが……にしても、何だか違和感を感じる。

盗み聞きをしていた訳じゃないが、聞こえてきた会話に引つかかるんだ……

「お待ちせしました」

「ごーも」

「ドリンクの方は直ぐにお客様の席にお持ち致しますので、少々お待ち下さい」

「あい」

そして、マジで人が少ない店の中を歩いて周り、天ちゃんが座っている席を見つけるとその場所へと俺も向かう。

「ほい、これが天ちゃん分」

俺が来るまでスマホとにらめっこしていた天ちゃんは慌ててスマホをカバンの中に戻すと、いつもの無邪気な笑顔で食べ物を受け取った。

「モックモック」

「おかげで早速千円も使っちゃったよ」

お釣りが返ってきたとはいえこれと同じくらいの値段でニンボールのハンバーグ食えるぞ。あーあ、なんかもったいね。

「あれ？ コーラは？」

「後で店員が持つてくるってさ、まっ、そんな時間はかからないでしょ」

「ふーん。エロパイは何頼んだの？」

「ん？ いや、同じやつ頼んでんじゃん」

「ちーがーう！ 飲み物！」

「ミルク」

「ミルク……？」

若干微妙そうな顔をする天ちゃんを見ると、ツカツカと店員がこちらに歩いてきて、両手に手にしているミルクとコーラを2つとも俺の前に置いた。

「お待たせしました」

そうしてテンプレのような言葉を並べてそそくさと戻っていく。

……？

「ほい、天ちゃんのコーラ」

そう言つて手渡したコーラを受け取った天ちゃんは、またもやほんの少し曇った表情

をしていた。

神出鬼没なお人形

2人でモックに行つてからしばらく経過した夕方。俺と天ちゃんは本当に一日中暇を潰すかのように遊んでいた。

ウインドウショッピングをしたり、ゲーセンで遊んだり、適当にふらつくように移動しながら自由気ままに歩き回る。

何度か俺のスマホが着信をキャッチして震えていたが……その全てに出なかつた。その全てが成瀬センセからの電話だからだ。担任であるあの人には申し訳ないとは思うが、天ちゃんの方には1件も連絡が来ていない状況から、その全てに出る訳にはいかなかつた。

そして帰宅中の人達が多くで歩く時間帯の公園で、俺たちはとある人物と出会つていったんだ。

何だか不穏な空気すらも感じるほどに妙な気配をかもちだす人物に。

「ダメだよー竹内、学校サボつてデートなんてしちゃつたらしく」

「……………ああ」

人通りの多い公園で、偶然居合わせたその人物はあまりにも自然に輪の中に加わる。

「先生めつちや怒ってたよ〜こりや明日は大変だね」

「それで、どうしたんだ？ 探してこいでも頼まれたか？」

「んなわけないでしょ。知り合いと会うから近道しただけさ。そしたら竹内が女の子と遊んでるんだもん！ もう待ち合わせとかどうでもいいよ！」

「モテる男は辛いぜ」

「エロ魔人がなあに言ってるんだか……」

そんなボソツと入る天ちゃんのツツコミをサラリと受け流し、深沢との会話を続ける。

「しかもその子翔の妹さんでしょ!? 竹内だけ紹介してもらったの!? ずるい！」

「……っ！」

「紹介してもらったっつーか偶然知り合うきっかけがあったというか……まあ変わるねえか」

不意に何やらスマホを取り出して驚いている天ちゃんを横目に、とりあえず深沢の相手を……が……

何やら天ちゃんは高速で指を動かしてスマホをタップやフリックしているとところから察するに、物凄い数の連絡がきていたのだろう。もしかすると……あれかな？ マ

ナーモードになつてたりしたのかな？

変な予想もしてたけど……外れたみたいでよかった。深沢も普通に天ちゃんに気がついているし。

「ところでさ、さつきからずつと気になってたんだけど、竹内の背中に引っ付いてる人形って何なの？」

「……は？」

予想にもしていなかった深沢の質問に素っ頓狂な声を出して返事をしてしまいつつも、腕を後ろに回して確認する。すると確かに言われた通りに俺の背中に人形が引っ付いていた。

うさぎのような、カーバンクルのようなよく分からないセンスのない人形。これは……間違いない。

「おいおい……」

ソフィだ。青と白がメインの口の大きな人形が俺の背中を飛ぶようにしてくつついていた。

「さてはラウンドツーに行ってきたでしょ？ デートにゲーセンかあ、楽しそうだね」

「そう……だな。本当に楽しそうだ」

「……」

コイツ何黙って付いてきてんだよ。いつから側にいたんだ？　つか近づいてきてるんなら一声くらいかけろよ。

なんて思っていると……………

「何？　その不満そうな顔、アナタの顔のドアップはキツイのだけれど勘弁してもらえない？」

と、この青い人形さんは普通に喋り始めたのである。

「…………えっ!?　今、人形が動かなかった!?　喋らなかった!?」

「喋ってない喋ってない!!　喋るわけがないだろ!?　トイ・スローリーの見すぎだつて！」

馬鹿かお前は!?　なんで普通に声出しちゃってんの!?　状況考えろよ!?

「で、でも腕がびよこびよこしてるけど!？」

「あああああれだ！　俺が片腕ぶち込んで動かしてるんだよ！　ほらっ！」

そう言つて大慌てで人形の口の中に手を突っ込んで何も無いよアピールをしようとするのだが……………その腕の先で何か柔らかいものに当たる。

まるでマシユマロの様なぶにぶにとした何か。触ったことのあるような無いようなよく分からないものに触れていることすらも放置して、ただひたすらにソフィのことがバレないように演技を貫き通す。

「ちよっ……!! アナタ何触ってるのよッ!!」

その瞬間に腕先から伝わる痛み。

「痛ってっ?!?!?」

そしてその痛みから抜け出さたくて人形から思い切り手を引き抜こうとするが……口の奥側から何かが引っかかっかけていてなかなか腕が抜けない。よく分からないが布のようなものに引っかかっかけてしまっているようだ。

「え? また喋——」

「腹話術だ腹話術! どうだ!! 俺上手いだろ!!」

「今度は何を引っ張ってるのよ!? やめっ……やめなさい!!」

それでも声を出し続けるソフィを何とか誤魔化しながら腕を引き抜こうと力を込めるが……マジで全然取れない。

「ちよっ!! 破れるからやめ……なさいっ!!」

バチンと紙束を丸めたかのような物でぶっ叩かれる感覚が人形を通して俺の腕に伝わってくる。その衝撃で強く引っ張っていた腕は見事にすり抜けて、何とか引き抜くことが出来た。

「痛てて……」

ジーツと俺を見つめてくる天ちゃんからの凍てつく眼光で心に傷を負いながらも、ヒ

リヒリと痛む腕を抑えて俺は俺で人形を睨んでいた。

ふっざけんなよコイツ……！ つーかまずこんな目立つような場所で姿を現すなよ

……！

「あーあ、飛んじやったよ？ 変なお人形………はいつ」

強く引き抜いた拍子に飛んで行ったソフイ人形を深沢は拾い上げ、俺に手渡してくれ
る。

「わ、悪いな」

「思いつきの人形なんでしょ、大事にしなきゃダメだよ？」

いつものように変に愛嬌のある笑顔を俺たちに（主に天ちゃんに）見せると、軽く手
を振りながら深沢は去っていく。

「じゃねー。ちゃんと秘密にしておくからサボりも程々にねー！」

「あいよ……」

無駄に疲れてしまった俺は、気力を振り絞るかのように立ち上がり、人形を冷めた目
で見つめながら首元から飛び出そうな文句を押し殺す。

「なんか……あれだね。ここにきて怒涛の展開だったね」

「そう思うのならコイツを預かってくれ。もうなんか疲れた……」

「いいけど……とりあえずエロパイん家行きます？ ここじや詳しく話せないし」

「そうだな、まずは場所移動だ……」

「——忘れられないこと、忘れてはいけないこと。」

「それで？ いきなり顔を出してきてどうしたんだよ」

天ちゃんとうで俺の家へと移動し、突如として現れたソフィにそう質問する

。ソフィはソフィでさっきのことに怒っていたようではあったが……まあ別に気にはしない。

「どうしたもこうしたもないのよ、アナタのせいでもどれだけ苦労したことか」

「苦労ってなんだよ」

「まずは謝罪をして欲しいところではあるのだけれど、まあいいわ」

毎度の如くふてぶてしい態度で俺たちの前を飛ぶ人形は、コロコロと様々な色に姿を変えながら会話を続ける。

「本当に厄介なことになっているわよ、アナタのその能力」

「いきなり何の話だよ……」

「……？」

「奇跡の力を制御できていない。暴走では無いけれど………そうね、例えるのなら小

さな穴か空いている風船に空気を入れ続けている状態。とでも言えばいいかしら」

ぴよこぴよこと無駄に可愛らしく小さな手を振りながら、ソフィは説明を続ける。

「単刀直入に聞くけど、ソラ、アナタ《ネクタル》を打ち込まれて能力が暴走していたでしょう?」

「……は!?!」

「なあに? 何も気がついていなかったの? ソラが拘束されてアナタ達が助けに行つたあの日、ソラは間違いなく《ネクタル》を打ち込まれていたわ」

「そうなのか!?! 天ちゃん!」

ギクリとほんの少しだけ身体を震わせて微妙に反応を見せる天ちゃんは、細々とした声で教えてくれる。

「実は……背中の紋章がステイグマずっと消えてなくて……お母さんにもお兄ちゃんにも無視されて……それで……」

「——ッ!?!」

それで今日1日おかしかつたのか……! 思い返せば全てが天ちゃんのことを無視しているかのような1日だった。機械からも反応されず、店員からも相手にされず。

結局俺が想定していたよりも事は深刻だったってことかよ……!?!

「で……でも、先輩は何故か覚えててくれて、それで……」

……確かにそうだ。俺は別にただの1度も天ちゃんの事を忘れてたりなんかしていない。天ちゃんの能力が存在感操作なのなら、その力の先……ソフィは暴走って言ったな。もしそれが起こったとするのなら、存在感は………消滅してしまうことだと思う。

忘れるを通り越して、消滅。

それは人々の記憶から、数々の人の中から、世界から。

「でも、俺は一瞬も忘れたりなんかしてないぞ!? ずっと覚えてたし、何も起きなかった」

「それが問題なのよ。カケルとの強いキズナがあつてもかき消されてしまう程に強い力をもアナタは越えてきた。そして、もうソラの記憶は皆に戻ってきているわ」

「戻る? 思い出してるってことか?」

「そうよ。きつと長期に渡ってレンタと接触していたことで、奇跡の力がほんの少しだけソラを救ったのね」

……そういえばさつき天ちゃんはスマホを使って連絡をとっていた。コンビニのセルフレジをタップすることは出来なくて、自動ドアにも認識されていなかったのにスマホに反応されるのはおかしい。

「なんでなんだ……? そのさつきからソフィの言ってる奇跡の力ってなんなんだよ。」

アーティファクトの暴走すらも止めることの出来る力って」

「……ま、いいでしょ。オーバーオールを探すためだものね。最低限教えてあげる。アナタ……レンタに宿されている奇跡の力、名前は《オーバーフロー》。使用した対象の進化を可能にする力」

《オーバーフロー》……進化。

それもアーティファクト……なのかな？

「アナタが選ばれたのは《魔鏡》だけではなく《オーバーフロー》にも反応されたのよ。世界をも壊しかねない補助の力にね」

「……………」《オーバーオール》がどうの言ってたな」

言い方は違うにしろ、とりあえず俺は2つのアーティファクトに選ばれたってこと。まあ選ばれたって点で言えばゴーストナもそうなんだろうが……

「そう、全てのアーティファクトの頂点に立つ3つの力。王の素質を持った力の中で最も有害な力。《オーバーオール》。それを見つけて欲しいの」

「見つけろつつたてなあ……」

いきなり出てきたかと思えば特定のアーティファクトを優先して見つけろだなんて……無理言うなよ。

「今すぐになんて思っただけはないわよ。現在の問題を解決しつつ並行作業でお願い」

……ま、コイツにしては珍しく下手に出てるからいつか。

「それで？ そのアーティファクトの特徴は？」

「知らないわ」

「は？」

「見たこともないのに知ってるわけないでしょ」

「は?？」

何言ってるのコイツ。どゆこと？ 本人でさえも知らないものを取ってこいと？

アホなの？

「でも能力は知ってる。《オーバーオール》の能力は“吸収”よ。能力の吸収。だから怪しい人がいたのなら、その人物を教えなさい調べてあげるから」

「調べてあげるつったってお前……………まあいいや。それっぽい人がいたら伝える」

「ええ、よろしく。あと、一応伝えておくのだけれど、ソラ」

「え？ あ、はい」

「アナタの能力の暴走はまだ収まってはいないわ、レンタの力で辛うじて進行が遅れているだけ。そのまま放っているとアーティファクトに精神がやられてしまうわ」

声のトーンは相変わらず変わらないままで、ソフィは淡々と説明を続ける。その言葉を聞きながらも内心感じていたのは、もしあの時に俺が天ちゃんと学園に行つて離れて

しまったら……一体どうなっていたのだろうということだった。

「これからはできるだけレンタの近くにいること。そして進行が遅れているうちに心を強くして何とか力を抑えなさい。私もできるだけ急ぎで《霊薬》を作ってあげるから」
ただでさえあんな状況になっていたんだ。もしも俺すらも天ちゃんのことを忘れてしまっていたのなら………

想像しただけでもゾツとする。

「つか何？ 霊薬を作るって？」

「現在現物として残っている《霊薬》アンブロシアは本来アナ達の身体には合わないものなのよ。だからこの世界の人間に適応できるレベルの霊薬の開発を急がせてる。それを打ち込めば比較的安全にアーティファクトとの契約を解除できるわ」

……なるほど。

「暴走した能力を抑えることの出来ない力……って事なのか」

「そうね。例えばアナタの奇跡でも完全に消すことは出来ない。0に等しい1を残すことは出来るけれど……それだと時間が経てばもう一度暴走するでしょうね。それこそ何度も何度も能力を使用すると……」

そう答えるソフィの声は、ほんの少しだけ感慨深そうだった。まるで経験談を語っているのかのように酷く悲しい声は、その重さを感じさせる。

「……わかった。とにかく俺は天ちゃんと一緒に入ればいいんだな？」

「そう、小一時間程度なら離れてもいいでしょうけれど、油断しない事ね。半月もあれば完成すると思うからそれまでは何とかしなさい」

「了解……」

「じゃね」

最後にびよびよこと片手を動かして、軽いノリで空間を拗らせて出現させた狭間に吸い込まれて、その姿を消すソフィ。

ソイツを見届けた後、俺は天ちゃんと改めて話すことにした。

これからについて。

暴力を封印していた理由

ソフィが言っていた0に等しい1。これの意味は十分に理解出来た。俺の持つ力によつて無意識に抑えられた天ちゃん的能力の暴走は今や鎮静化を始めている。

しかしそれは決して0じゃない。つまりは天ちゃんは今も無意識に微力ながらに能力を使つてしまつていているということだ。その対象はわからない。その辺の物かもしれないし、俺かもしれない。

……天ちゃん自身かもしれない。

「どうしたの？ エロパイ、顔が怖いよ？」

その言葉にハツと我に返され、普段通りを装つている天ちゃんの顔を見る。

彼女は事の重大さを理解していないわけじゃない。むしろ本人が一番恐怖を感じているだろう。それでも弱さを決して見せないのは……

「……そう……だな」

俺じゃあアイツの代わりになれるかどうかなんてわからない。アイツはアイツだし、俺は俺。でもきつと……天ちゃんを救うことができるならば、それは俺の仕事

だ。

もう誰も……誰一人として……！

「天ちゃん」

「……ん？」

明らかな虚勢。消滅の危機に苛まれていた状況と自分一人が消えてしまうかもしれない……いや、消えてしまいかけていた恐怖は俺なんかの想像を絶するほどの苦痛だろう。

だからこそ、手に取るようにわかるその偽りの笑顔が重く感じた。

「笑ってくれるのは有難い。俺も天ちゃんには笑顔が一番似合ってると思うから。でも……我慢はしなくてもいい」

天ちゃんが翔の事が大好きなのは知っている。その好意が世間には決して認められることじゃないことさえも。

だが、彼女を支えているのは間違いない翔だ。俺がどこまで寄り添えるかはわからないが……

「泣きたい時や辛い時は、堪えることなんてしなくていいんだぞ」

ポンッと彼女の頭を撫でるように手を置き、精一杯の気持ちを伝える。

「もう俺の目の前で……誰も死なせないから」

そうだ。もう二度と……誰も失わせない。誰も無くさない。

涼ニイも。

千紗姉も。

九條さんも………希亜も………

「——ツ!!」

その瞬間に思わず身体を震わせる。それほどまでに俺自身が信じられなかったからだ。

なんで俺は今、九條さんと希亜の死を連想したんだ……!? 雷野郎との戦いのせいかな?

いや違う………! 確かに一瞬過ぎたこの感情は………

「竹内先輩はさ………なんでそんなに誰かの為に動けるの?」

「……………え?」

「本当にどうしようもない時。あたし達がピンチな目に遭った時。先輩は自分の事を顧みずに駆けつけてくれる。あたしが捕まった時も………さつきも………」

誰かの為………か。元々はそんなガラじゃなかったんだけどな。いや、今まで偽っていたのが正しいのか。押さえ込んでいた蓋を暖かくて小さな手が開けてくれたんだ。

……俺が心を開いていないのに、天ちゃんに安心してもらおうだなんて………おこがま

しいよな。

「昔な、兄貴がいたんだ。俺は元々狭いボロアパートの中で兄貴と2人で生活してた」

「え……？ 2人……？」

「つつてもあまり覚えてないんだけどな。とにかく記憶にあるのは、毎日罵倒を浴びせ合いながら喧嘩してる両親と、そんな奴らから必死に守ってくれる兄貴の姿だ」

そうして俺は、思い出すかのように言葉を紡ぐ。

「当時の父親はどこからが持つてきた金を使つて毎日毎日女の人を呼んで遊ぶ日々。暇があればギャンブル。金が尽きれば兄貴に暴力。母親は……どこに行つたのか知らなかった。でも金だけは何故か持つていて、最低限の飯は用意してくれていた」

今思えば、女の人が短時間に大金を稼ぐ方法なんて……思い当たる節は1つしかないけどな。

「そして分かり合えない両親は日に日にそのストレスを俺たちに向け始めて、いつの間にか俺たちはアイツらのサンドバッグになっていた。金を稼ぐ宛や、親族なんかもいなかった俺たちは目の前の大人2人に頼るしかなく、身を粉にして働くことで生きていくんだ」

「逃げたくても逃げられない。鳥籠の中に閉じ込められたような日々を過ごしていた時、突如として両親は動かなくなつた」

……いきなりこんな話をして大丈夫か？　と思つて話の途中で天ちゃんの顔をチラツと見てみたが……天ちゃんも思ひのほか真剣に俺の話聞いてくれていて、離れていた距離もいつの間にかかなり近くなつていた。

……続けよう。俺の憧れた……兄貴の話を。

「当然の事ながら父親は職に着いていない。つまりは借金で金を蓄えていたんだが、とうとう引くに引けない状況になつたようだった。しかしそんな両親でもしつかりと愛し合つてはいたようで、2人で生きていくためにはどうするべきか悩んでいて、その答えはすぐに出てきたようだった」

「……え？　2人でつて……」

「臓器売買」

「——ツ!？」

「どこからかツテがあつたみたいでさ。俺たちはこれでもかつて程に殺されかけた。その時だったんだ」

これは遠い昔の記憶。

俺が涼ニイを失う前の、幼少期の記憶。

淡い物だが、あの瞬間は今でもはつきりと覚えてる。

「生まれて初めて、殺人の現場を見たのは」

「そ、それって……………」

「身も心も限界まで追い込まれ、自分が殺されそうになった時。兄貴は母親を殺していた。腕を折られてもなお立ち向かうその姿は……………何も変わってなかったんだ」

「手を汚してしまった事も、自分の人生を潰してまで助けてくれたのも……………全部未来の為だった。笑って過ごせる為の……………兄貴の願いだった」

「だから……………俺も初めて暴力を奮った」

せめて涼ニイだけじゃなく、2人でいるために。俺はあの時に初めて暴力を奮ったんだ。

自分自身を守るため。

未来を……………変える為。

「俺たちは初めて……………人を殺してしまった」

記憶とキオク、巻き起こる波乱

………

俺は……何を言っているんだ？ 俺は何を思い出しているんだ？

確かにあるあの鮮明な記憶。思い出したのは心の奥にあるトラウマだった。だが……違う。そんな記憶はないんだ。

いや……でも……これは……確かに俺の記憶……確かに経験している……

「……パイ」

違う……俺はこんな事……知らない……！ こんなの俺じゃ——

「先輩っ！」

「……っ！」

天ちゃんの震えた声。その声に意識を呼び戻されると気がついた。尋常ではない程の手汗に過呼吸気味の身体。その事実が俺を錯乱させていたのだと認識させる。

「そんなに辛いことなら、無理して言わなくてもいいんだよ……？」

違う。

違うんだよ。恐怖したのはそこじゃないんだ。

「あ、ああ……」

俺が本当に恐怖したのは……一体誰の……

「ごめん天ちゃん。ちよつと顔を洗いに行ってくるよ」

そんな思いから逃げるように、俺は洗面所に向かって歩いていった。

「……………」

バシャバシャと勢いよく流れ出している冷水を両手に溜めて顔にぶつけるように当てる。それでも1度感じたあの疑問はすんなりとは消えてくれなかった。

「……………」

あの記憶は何だったのだろう。頭の中には確かに残っているのに、そんな経験をした覚えがない。そうだろう？ そもそも俺の親は海外に旅行をしにいつているはずなんだ。

だから殺しただなんてそんな……

「……………手、震えてらあ」

本当に訳が分からない。こんなにも混乱するだなんて……疲れてるのかな。そんな言葉で片付けていいものかとも思うが……きつと俺は考えたくないだろう。気づきたくないのだろう。

顔と手を拭き終え、自分のスマホを取り出して電話帳を開いてみる。そこにあるのは確かに父親と母親の電話番号だ。

覚えてる。過去にこの番号は何度も打った。

だが……

なんて考えていると、唐突に画面が暗くなり、陽気な曲と同時にバイブレーションを始めた。

『神様からの 導く言葉♪』

その相手は……

「はい、もしもし」

『ザー……ザー……』

「……!?!」

圧倒的違和感。余程のことがない限り聞かないであろう砂嵐の様な音に困惑しつつ、異常事態だと言うことを認識する。

「もしもし!?! おいつ!?! どうした!?! 聞こえているのか!?! 希亜っ!」

『もし……し……し……蓮……!?!』

辛うじて希亜が何かを発しているのは分かるが、電波が悪いのか雑音だらけで上手く聞き取れない。そしてそれが何か嫌な予感を思わせる。

「おい!?! おいつ!! なにかあったのか!?! 希亜!」

そして段々と雑音が引いてきて、何とか声が聞けるようになってくると……

『やら………れた………強すぎ………る………!?!』

「やられた!?! どういう事だ!?! お前は今どこにいるんだ!?!」

電話越しの声が響いている。そして電波がとてつもなく悪い状況。そして希亜の言葉。それら全てがドシドシとのしかかるように圧へと変わっていく。

『わた………せもの………貴方………も………気をつけ………!?!』

「なんだ!? 何を言ってるんだ?!?」

わたせもの? 一体何を伝えたかったんだ!? そんな事を考えている暇もなく、希亜の声が直ぐに聞こえなくなり、ガサガサと砂嵐とは違う大きな雑音をたてながら、鉄か何かに激しく当たったかのような音を響かせて、液体が暴れるような音、そして笛の様な音を最後に何も聞こえなくなった。

「……………くそっ!!」

何が起こったのかわからない。どこにいるのかもわからない。ただ一つ確かなことは希亜がピンチだってことだけだ!

勢いよく洗面所を駆け出し、リビングに置いてあるPCを立ち上げて周辺の地図を開きカタカタと文字を打ち付けてとある場所を探す。その途中で微妙な顔を続ける天ちゃんも俺に声をかけてきた。

「どしたのエロパイ。急にPCなんか点けて……」

「緊急事態だ! 希亜が危険な目にあってるかもしれない!」

「……………え!!? 結城先輩が? どうして?」

「俺にもわかんねえ! ただ、すつげえ嫌な予感がすることは確かだ! 今場所を割り出してるから……………天ちゃん! 今の時間は!」

「ええ……………! あ、えと……………! 21時過ぎ!」

「21時過ぎな……!」

思い出せ……! あの話から最大限の情報を引き出すんだ! まず希亜の声が響いていた。このことから狭い部屋とか、とにかく壁に近くて障害物がない場所にいる可能性が高い。

そして最初に聞こえてきた衝突音。あれは間違いなく鉄だ。となると簡単に想像できるのは鉄製の壁や窓、最悪檻の中にいる可能性がある。希亜のセリフから考えるに誰かと交戦した後だろう。となると拉致られた、もしくはその場に捨てられた可能性がある。

その次は……液体のような音! 衝突音の後だからスマホを投げられた後、水がある場所にスマホが落ちた可能性がある。……となると近くに池やダム、もしくは海があってもおかしくない。

最後に聞こえてきたのは笛の様な音。水辺の近くであのタイプの笛が鳴るのは……
「あった……午後21時7分発、なんかの出荷用の船………つて二箇所あるのか……!
!」

「エロパイすっげ………つてどうするの!?! あたしも大体状況が理解出来てきたけど……この二つとも遠いよ!?!」

どうする………どうする………! ソフィの忠告を守る為に天ちゃんからは離れる訳に

はいかない！ となると誰かの手を……いや、他のみんなは移動手段がない……！
確認できるそれらしき場所は西の港か東の港だ。

どうする……!?

未知の部屋からの脱出劇

「……………」

意識がぼんやりと戻っていく。この時は本当に何も考えることが出来ていなかった。状況を理解するどころか脳が目覚めていなくて何も感じていない感覚だ。

「……………は——痛ッ！」

そして直後に後頭部からじわじわと広がるように痛む感覚。ゆっくりとプレス機で頭を押しつぶされるように奇妙な感覚だけが残っている。

その痛みから少しでも逃れようと頭を動かして唸っていると……不意に背後から声が聞こえてきた。

「目が……覚めた？」

「その声………希亜か？」

その声で我に返り、俺の今までを思い出す。電撃のように脳内に流れ込む映像たちが徐々に蘇ってきた。

そう……確か俺は唐突にきた希亜からの電話をとって……異常事態を予感して天

ちやんと2人で救出に……

それで……なんでこんなことに？

「よかつた、何とか意識はあるみたいね」

今、俺と希亜は背中合わせになるように座っており、お互いに両手を背中に回され、四本の腕を完璧に分厚いロープで拘束されている。

周りを見ても冷たく、光も照らされていない牢屋のような場所。いや……これは倉庫などで使われる特大サイズのコンテナか。

つまり俺達はなにかヘマをして捕まえられたって事……いや、そうだ。希亜を助けに来たはいいものの、誰かに襲われて負けたんだ……！ 誰かは分からないが……その時に天ちゃんを連れていかれて……！！

「天ちゃんを助けないとー！」

なんで俺は忘れていたんだ！ この場所に向かって来ている時に起こった出来事を……！！ 急いでここから脱出を……！！

「わかつてるから落ち着きなさい。まずはこの両手のロープをどうにかすることからでしよ」

「あ、ああ……」

焦る気持ちを何とか押し殺しつつ、周囲を何度も視覚で確認する。しかし暗くて光も

ないせいで何がなにやらわからない。

「ちなみに、蓮太がなにか小型の携帯できる刃物を持っていることを期待しているのだから」

「……いや、無いな。強いて言うならバイクの鍵くらいだ」

「そう」

やけにあつさりと話を切りあげる希亜。

「……なんでこんなに冷静なんだ？　なんでそんなに落ち着いていられるんだ……？」

「希亜、なんでお前はそんなに冷静なんだよ……こんな状況下で焦らないなんて……」

「私は意識が戻ってからはもう4時間ほど経ってるから」

「4時間……」

「蓮太のスマホが教えてくれてるの。偶然私と同じゲームをしていたから」

なるほど。ゲームアプリのお知らせ通知から時間を推測したのか。毎日一定の時間で通知が来ているのなら……ある程度の計算はできる。

4時間……4時間ねえ……

「というこゝとは現状で脱出の目処は無いってことかよ」

「ええ」

ここまで冷静なやつが真後ろにいたらパニックになっていた心も妙に落ち着いてくる。しかし、天ちやんの場合は俺から離れすぎると能力の暴走が始まっちゃう。一刻も早くここを出て救い出したいのは事実。

「……とりあえず立ち上がって動いてみるか？ お互いに支え合えば立つて動くぐらいはできるだろ」

「私と蓮太じゃ身長差がある。互いの両手が繋がって拘束されているから厳しいでしょうね」

「そりやまいったな」

つい、だらんと両足を伸ばしてしまう。八方塞がりの状況で何も策が思いつかずにヤケになってしまっていたからだ。

しかし……

ドンツ……

パリインツ！

と何かを蹴り飛ばしていたようで、更に高いところからガラスが割れたかのような音が聞こえてきた。

ということはここは倉庫？　こんな電気も点いていない殺風景の部屋の中にそんなものがあるってことは物置か何かか？　なんて思っていると……

「二つ質問のだけれど、蓮太の能力ちからを使ってこのロープを切る事はできない？」

「……え？」

考えてみればそうだ。俺の能力は鏡を出現させる能力。しかも一枚分の範囲なら形も変幻自在だ。

俺達の両手も能力範囲内。なんでこいつの存在を忘れていたんだろう。

「……さっさとやるか」

そんな自分に呆れるように、鏡の力を使ってみる。角を鋭利にして両腕のロープに向かって突き刺すと……………

パラパラとロープは力なく切れ落ち、両腕の拘束が開放された。

「さっ……」

希亜と俺は互いに立ち上がり、両手を握りしめたり広げたりとしながら互いに近寄

る。すぐさまスマホを取り出してライトを点け、辺りを見回してみると……

「……！ 蓮太、あそこにスイッチが」

「点けてみるか」

特に話し合った訳でもないのに、お互いが密着して離れないのはこの暗闇の中で離れてしまうことがどれだけ危険かを本能で理解しているのだろう。

……腕がちよつと震えているのは、やつぱり希亜も女の子だ。心の底では恐怖しているに決まってる。ここは男として俺が何とかしないと。

なんて思いながらも壁に設置されているスイッチに手を伸ばすが……いくらカチカチとスイッチを押してもその場所は照らされない。

「電気とは関係ないか……単純に壊れてるか、何かしらの問題が起きてるのかもな」

「そ、そう……ね」

「……ん？」

気になっていたスイッチも無駄だと悟り、とりあえずこの空間をもう少し調べようとしていると……少し高いところに人が通れそうな小窓があることに気がついた。

隣も暗くて何も見えなさそうだが……もしかしたら脱出の糸口が見つかるかもしれない。

「隣に行けそうだな……」

「……………え？」

一応先に俺が向かった方がいいだろう。本当は希亜を肩車でもしてよじ登らせた方が早そうではあるが……隣の部屋に落ちる時に怪我をするかもだし、まず隣が安全だという保証もない。

「……………さつき何かを蹴ったよな。あれを探してみるか」

それからスマホのライトを頼りに部屋中にあるテーブルや本などを上に重ねて、何とか小窓まで登る。

一通り適当なライトで照らしてみるが……怪しそうなものはない。それに……

「希亜、隣の部屋はドアが開けられるぞ。こっちから脱出しよう」

さりげなく小窓に登る為に色んなものを集めている時、元々俺たちがいた部屋の扉は鍵がかかかっていて開けられなかったのだが……隣の部屋は扉が歪に歪んではいるものの、そのおかげで完全に扉が閉まることはなく、ほんの少しだけ隙間が開いていた。

「で、でも！ 私は届かな——」

ガチャガチャ——

「ッ!？」

少し不安そうに希亜が喋っていると、元々居た部屋。つまり希亜だけが取り残されている部屋の扉のドアノブあたりが音を立てて揺れ始めた。

「希亜ッ！ 早く来い！」

「でも……！」

「跳んで俺の手を掴め！ 早く！」

「——ッ！」

ほんの少し躊躇した希亜だったが、心の中で決意を固めると、積み上げた物をタンタンっ！ ととび上り、差し伸ばしていた俺の手目掛けてジャンプする。

そして希亜の手を掴むとそのまま力任せに引き上げて抱きしめ、逃げるように隣の部屋へ飛び降りた。

4月29日 天[√]

悪夢の始まり

「ぐっ——」

「あう——」

何とか希亜を抱くようにして隣の部屋に移動した俺達は、急いで体制を立て直して近くにあったロッカーの中に身を潜める。

理由は明白だ。元々俺達の居た部屋を開けるような音が聞こえてきたから、2人が逃げているのはバレてしまってるはず。だとするとこの部屋を確認する可能性は極めて高い。

だから一通りの安全が確保できるまで息を殺して身を潜める。

「……………」

「うう……………」

今のところ追っ手は来ていないが…………しばらくは様子見だな。

「大丈夫か？ 希亜。咄嗟に飛び降りちまったけど…………怪我とかはしてないか？」

微妙な隙間から外を眺め、警戒を解くことなく希亜に小声で声をかけて彼女の状態も確認する。

「怪我はしてない……でも……」

「(でも?)」

「(服が少し破れた……お気に入りだったのに……)」

やけにテンションが低いと思つたらそういう事か。あのゴスロリチックな黒服が破れちやつて萎えてた………?

「戻つたら直してやるよ。だから今は気にするなつて)」

「(蓮太……裁縫得意なの?)」

「(これでも小学生の頃は家庭科実習の成績は5だったんだぜ? なんなら好きなコスプレ服でも作つてやるよ)」

「(期待してる)」

なんて会話をしているその時、バタバタとした大量の足音が聞こえてくる。決して一人や二人じゃない……少なくとも十人はいるだろう。

しかしその足音達はこの部屋に入ってくる気配は感じられず、そのまま雪崩が起きたかのようにどこかへ去つてしまう。

「……………」

しばらく耳を澄ませて注意深く外の音を聞いていたが……うん。今は音はしない。隙間から見える光景も安全そうだ。

そうして狭苦しかったロッカーの中から俺たち二人は出るようになったが……何かおかしかった。普通俺たちを探しているとしたらまずこの部屋を確認しないか？ 小窓は開きっぱなしだし、積み上げられた物たちも放置している。

まあ……今深く考えても仕方は無い……か。

「とりあえずは脱出ね。この場所の把握をしつつ天の救出をしなければいけないわ」
「あんまりちんたらしてられないしな」

あれから4時間。つまり目的の建物に辿り着く直前にやられてしまつてから4時間も経過している。そろそろ天ちゃんの状態に異常がきてもおかしくない頃だ。

下手をすると………

「急ごう」

早く助け出してやらないと、天ちゃんが消えちまうかもしれない。それだけは絶対に避けねば……！

「そうね」

チラツと希亜は俺の顔を確認するように見て、一瞬何かを言う素振りを見せたが……特に何も言わずに廊下の確認をし始めた。

続くように俺も確認し、安全だと判断をするとゆっくりと扉を開いた。

「とりあえずどこを目的地とするかだな。見たところかなり大きな施設みたいだけど……」

本当にこの建物は広そうだ。外観は知らないが、この部屋からでただけでも左右の道はどちらも奥へ進んでおりその途中で何度も分岐している。

「これは……?」

どちらの道へ向かうかを悩んでいると、廊下に落ちていた小型の機械を希亜が拾い上げる。そして何度か適当に操作をしていると、その機械から雑音混じりの音が聞こえてきた。

『な——何なんだコ——ツ！ まるでゾン——！——おい！——2階の——』

そこでその音は消えてしまう。

「これは無線機だったのか……というよりも何だ？ 何が起こってるんだ？」

「わからない。でも、とても良くないことが起きているのは確かね」

ゾン……か。俺の想像しているやつなら、本当に不味いのだが……普通ならそんなことはありえないと突っぱねることだろう。でもAFというものがある以上、どんなものが出てきてもおかしくは無い。

ラクーンみたいにならなきゃいいけどな。

「とりあえずは2階だな。何かがあることは確かだ」

「蓮太ッ!」

改めて目的地を決めて、部屋から出て左側を向いていたから、とりあえずそつちに向かおうとしていたのだが、その逆側を確認していた希亜が焦りの色を混ぜた声で俺を止める。

その先に視線を向けると……………

「うあ、……………」

頭部を斜めに傾け、片足を引きずりながらフラフラと近づいてくる人影が現れていた。

「おいおい……………」

奇妙な声を口から出しながら、その人影はゆっくりとこちらに接近してくる。

正直怖い。意味がわからないくらいに恐怖心に負けそうになっているが……………何故か俺はその姿を見たことがある気がした。

何故だろう……………わからないけれど、既視感を感じる……………

「タナトス……………」

それが無意識に出た言葉だった。理由は何もわかりやしないが、ただただ無意識にその名前が出た。

「……………蓮太…あの身体の様……………」

そんな時、いつの間にか俺の背後に回っていた希亜がゾンビのように迫ってくるアイツに向かって指を指す。そして改めて確認してみると、のそのそと迫ってくる人の身体に、青白く光る紋章のようなものが見えていた。

「紋章ステイグマが出現してること、A F能力」

「自分からああなるとは考えにくいから……………操られている説が濃厚だな」

こうなりややることは一つ。直感でコイツは危険だと感じているからな。

俺と希亜はお互いに顔を見合せて……………

「逃げるぞっ」

「逃げましょう」

謎の人物を背に向けて走り逃げた。

迫り来る恐怖

《視点切りかえ》

「くっ……い！」

まただ……また一段とこの頭痛が激しくなった……い！

もう何度目か分からない程に高頻度で起こる痛み。慣れてくる頃にはさらに強くなつてぶり返してくる。

「何やってんだよ……アイツ……」

こうなる原因なんてもんは一つしか考えられない。オレの創造主である蓮太バカの身に何かあつたつてことだ。

その証拠に……

「探知が出来ねえ……」

いつもは感覚で蓮太の居場所が何となくわかるんだが、今に限っては大まかな方向しか分からない。つまりは何かしらの作用によつてオレと蓮太の魂の繋がりを妨害している奴がいるつてことだ。しかもそんなことはA F能力者でもない不可能だろう。

つまり……

「死ぬんじゃねえぞ……蓮太……」

いち早く駆けつけてやるためにも、オレはひたすら魂の繋がる方向へと走り出す。
闇に眠る街の中を。

「間違いない……ここだな」

目的の場所を見つけるのに時間はかからなかった。その理由は簡単だ。距離が縮ま

れば縮まるほど、繋がりが強くなればなるほど、蓮太の魂を感じる事ができるようになってきたからだ。

そして途中で無造作に倒れていた蓮太のバイク。これが落ちてたことで確信することも出来た。

このバカデカイ建物の中に蓮太がいるんだって。

「じゃ、行くか」

心を引き締めるように覚悟を決めると、オレはその建物の周辺を探りつつ侵入口を探索する。

少なくとも相手はA F能力を扱うやつがいることは事実だ。幻体の身体とはいえ最大限の注意をしていかないといけないと何が起こるかわからない。

“雷”のユーザーの件もあるしな。

「……ここからなら入れそうだな」

そうして見つけたのは小窓。

一人人がギリギリ通れそうな程に小さい小窓だ。蓮太に比べりゃオレは小柄だからそれなりにすんなりと侵入できる。ここからなら悟られることも無く忍び込めるだろう。

そうしてひよいひよいつと身体を捻り、無駄な音を立てることなく床に足をつける。

侵入した階層は2階。ここから無造作にアイツを探すことになる訳だが……

「つて、考えても埒が明かねえよな」

考えるよりもまずは動く。オレにはそれが似合ってる。

そう思いきると、とにかく目に入る扉を開いて次々に場所を探索していく、その途中だった。オレが見つけたのは大量の紙束が山のように積まれた不思議な部屋。

いくつものモニターが設置されており、その画面からはよく分からない映像がひとつも被ることなく映し出されている。

いや……認識できないものなんてない。よく画面を見ると改めて理解出来た。

「……コイツら、何だ？」

とぼとぼとおぼつかない足取りでこの建物の中であるだろう場所を歩く人間。オレは実際に目にしたことは無いが……それらはまるで映画の中に出てくるゾンビのようなものだった。

まあ、でもそんなもんはどうでもいい。問題は蓮太が無事かどうか、どこにいるかだ。

「細けえコトは嫌いなんだけどな」

致し方ないと踏ん切りをつけると、オレは目の前にある機械に手を伸ばして適当に打ち込んでみる。

キーボードがカタカタと音を鳴らし、蓮太の知識や経験を活かしてそれっぽい事を繰

り返していくが……案の定どうにもならない。

無理なのはわかってたが……マグレすらも起きなかった。

「あーもうっ！ めんどくせえな！」

溜まったストレスをぶつけるように機械に蹴りを入れ、その場を去ろうとする。けれどとある映像が目映った瞬間、オレの足はピタリと止まった。

砂嵐のように雑音を奏でながら1つのモニターに映ったその映像は………

「天……」

あまりにも弱々しい光が当たる部屋の中、力尽きるように倒れているアイツの姿だった。

「何やってんだよアイツ……！」

荒い映像からでも伝わってくる。

苦しように体を曲げ、両手両足を縛られた格好の天は………

「くっ……！」

考えることなんて後回しだった。とにかく身体が動いたんだ。こんなチンケな正義感なんて元々持ち合わせちゃいないつもりだったんだがな。

「ルート……ルート……！ どの部屋だよ！ ったく！」

慣れない手つきでもう一度機械を弄る。大まかな操作は出来なくとも、もしかすると

部屋の特定期程度なら何とかなるかもって思ったからだ。

そして……

「あつた……！ 四階のオフィスルーム……！」

ここからだと言ったと階段を使えばかなり近い！ 急いで行きやあものの十分程度でたどり着くだろう。

そうと決まりやあ早速だ！

「くうっ！」

気合を入れるようにして、不気味な部屋から飛び出すように出ると、その瞬間に違和感を覚えた。

まるでこの瞬間を捉えたかのように。

まるでオレが飛び出すのを待ち構えていたかのように。

あまりにも良すぎるタイミングで左側から何かの衝撃が走り、オレの身体を右方向へと吹き飛ばす。

「ぐあっ……！」

壁に激しくぶつかる身体。

あまりにもこの“痛み”のせいで思考が一瞬止まってしまふ。

「痛っ……！」

……痛い？ オレが痛い？

その事に一瞬疑問を抱いたが、すぐさまオレの脳がそんなことを考えている暇がないと教えるように刺激する。

衝撃が走ってきた方向に顔を向けると……………

「なんだよ……………お前……………」

顔の無い大男が拳を握っていた。

探索する二人

《視点切りかえ》

「はあ………！ はあ………！」

薄暗い場所。蛍光灯の光がやけに弱々しく照らしている部屋の中で、走り続けてすっかりバテてしまっている希亜を横目に、外の様子を伺っていた。

物音ひとつしやしないが、こういう時こそ油断は禁物。いつ何が起ころのかかわからないから。

「逃げきれた………みたいだ」

何度もチラチラと外の様子を伺っているが、ひとまずは安心できるだろう。

「すう………はあ………！」

徐々に荒らげていた呼吸を整え始めた希亜は、ある程度の落ち着きを取り戻すと額から滴り落ちる汗をハンカチで拭いながら言葉をつ紡いだ。

「それにしても、あの能力は一体何だったの？」

あの能力。もちろん俺たちが出くわしたあの不自然に歩く人の事だろう。

「知らねえよ。むしろ俺が聞きたいくらいだ」

もちろん希亜も理解はできているのだろうが……きつと納得ができていないのだろう。そりゃあそうだ。見たことも聞いたこともない能力だったし、もしも仮定通りの人を探る能力だとしたら迂闊に手を出すことすらもできない。

「とりあえずは俺たちの居場所だ。ここがどこなのかすらも分からねえよ……」

がむしやらに走ってきたせいなのもあって、ここがどこの部屋なのかも分からない。ただ、小窓から外を見る限りだとそれなりの高さだ。3……いや、4階のフロアにいるのかも。

「それなんだけど……これ」

「……ん？」

そんな時に希亜が差し出してきたのはやけにボロボロになっている紙きれだった。

「これ……この建物の詳細図？」

「逃げている途中で咄嗟に拾ってきた。もしかしたら役に立つかもって判断してね」
「やるじゃん」

そうしてその紙切れを受け取り、広げてみる。

「俺達がいるのは……4階資料室か」

やけに複雑に書いてあるマップを何とか解読し、現在地を絞る。

「4階、外へ脱出するには難しすぎるわね」

「雨戸いの配管を伝って降りれそうちゃ降りれそうだがな。まあでも出来ることならそんな無茶はしたくは無いし……それに天ちゃんの事もある。あまり悠長な事は出来ない」

改めてこの建物を見てみると、かなり異質な構造をしている。

建物そのものが西側と東側に別れるように2棟建てられており、北側と南側に1本ずつやたらと長い廊下がある作りだ。

そして俺たちがいる東棟には資料室や備品保管庫等の部屋こそあるが、めぼしいのはその程度で部屋らしい部屋の殆どは西側の建物内に設置されている。

それに……

「その建物はB棟なのか」

紙をよく見てみると、その建物全体がBという文字で括られている。つまりは離れた場所にもうひとつの建物があり、そこがAという区分になっていることが予想できる。

「ただだけ広くてデカいんだよ……」

「……………」

「とにかくここを出て、階段で下に降りましょう。少し時間が経ってしまったけれど、上がつてきた方向とは逆に……つまり西側の建物へと移動してから1階を目指すのはど

う？」

「1枚の紙を見ているせいでやたらと近くにいる希亜。元々の彼女のいい香りや汗の匂いなどが混ざりあつて、俺の……………」

「聞いているの？」

「……………き、聞いている聞いている！ とにかく隣の棟へと移るってことだろ？ そうと決まればさっさと行こうぜ」

「一瞬何かと危ない思考が過ぎってしまったが、それを忘れるように振り払い、2人で扉を開けて資料室を出る。」

「一応警戒しつつ慎重に行動しているが……………特に何も起きない。いや、何も無いなら何も無い方がいいんだが。」

「と、その途中で廊下に落ちていたある物が気になり、俺はそれを拾い上げる。」

「……………ナイフ？」

「手に取ったのは刃の部分が20cm程ある刃物だった。キッチンナイフ……………とでも言うべきだろうか？ 何故こんなものがここに落ちているのかは分からないが、何も無いよりはと思ひ、それを構えてみる。」

「ふん……………つと構えてみたけど、よく考えたら俺は要らねえよな。切れ味は悪いけど疑似刃物は能力で作れるわけだし」

「そんなもの持ってたってしょうがないでしょう」

「……でも俺の能力がなかったら俺たち今頃縛られたまんまだぞ？」

「……………まあ、そうね」

どこがぎこちなさそうにそう答える希亜の手に、刃先を自分の方へと向けて直接小型のナイフを手渡す。

「俺が持つてるよりも希亜が持つてる方がいい。もしかしたら護身用の脅しの道具にも出来るかもだし」

「脅しって……一体誰を脅すつもりなの」

「そんなの決まってるんだろ。ほら、行くぞ」

そんな軽口を言いながらも、俺たちは東棟の建物を出て、風が吹く中の渡り廊下の上を歩いて行つた。

しかしそこで異常事態が。

「ふん……………」

渡り廊下を渡つた後の扉。つまり西側の棟に入るための扉のドアノブに手をかざして捻つてみるが……ガチャガチャと重い音が響くだけでうんともすんとも言わない。

「クソッ」

八つ当たりをするように右足で扉を強めに蹴つてみるが……まあそんなものでは扉

は開いたりはない。

「鍵がかかっているとはね」

「おいおい……ここまでできて引き返すのかよ」

「じゃあ鍵は持っているの？」

「バイクの鍵なら」

「……隣に小窓があるわね。割ることが出来たら中に入れなにかしら？」

「……はいよ」

少しでも重苦しい空気を紛らわすように軽い雰囲気では話を流していると、何やら背後から違和感を感じる。

一瞬その違和感を感じ取ることに遅れを取り、ほんの少し気を抜いていた時にその場を振り返ると……何かから激しく首を掴まれた。

「……っ!？」

その何かは片手とは思えないほどに馬鹿げた力をしており、ミシミシと骨でも折るんじゃないかと疑うレベルの怪力で俺を襲う。

「蓮太ツ!？」

それをよく見ると、さつき希亜と2人で逃げたはずのあの化け物のようなAF能力者……いや、AF被害者の姿であり、目にわかるレベルで不自然な蒼白い光を見に纏って

いた。

「クソ……はな………れろっ！」

何とかそいつの腹辺りを右足で蹴飛ばすと、襲われてバランスの崩れていた俺とその人影は勢い余って渡り廊下からはみ出し、落下してしまふ。

「ううううわあああ………!!!」

そして次の瞬間、ガシャン！ と体を強く何かに打ち付けて勢いが止まった俺は、状況を理解する。

落ちた先は木材で作られた足場の上。少しオシャレに作られた花などが飾られてあるベランダのような場所だった。

「……… はあ………助かった………」

不幸中の幸いで命拾いした俺を覗き込むように、希亜は真上から俺の事を見下ろして必死に声をかけてくれる。

「蓮太！ 蓮太!? 大丈夫なの!？」

「ああ………！ 何とか生きてるよ」

そう言つて重い体を無理やり起こし、改めて辺りを見渡してみる。するとそこは建物の構造そのものは変わらない景色が広がっており、似たような扉が近くに見える。

どうやら俺は3階に落ちてしまったようだ。

チラツと襲ってきた人影に視線を向けると、まるで魂が浄化していくかのように淡い光に身を包み、解けるように消えていった。

……あれは人じゃなくてAF能力で作られたものだったのか。

「希亜ッ！ とりあえず西棟の4階オフィスルームで落ち合おう！ さつき言ってたみたいに窓がち割って入ってくれ」

「わかったわ、気をつけて」

「そっちこそ」

そう言っつて希亜と分担され別れると、俺は近くにあった扉を開けて西棟の中へと入り込んでいくのだった。

その時。

ドオンッ!!

「……………ん?」

元々俺たちがいた東棟の方から、何か重たいものでも叩きつけられるかのような轟音が一瞬響く。

「……いや、今は希亜と合流するのが先だ」

胸の中に妙な違和感が走ったが、目先の目的のためにそんな気持ちを押し殺して俺は中を進んで行った。

命からがらの抵抗

「にしても……………見れば見るほど不気味なトコだな」

扉を開けて建物の中に入り、当たりを探索しつつも4階へと繋がる階段を探して歩き回る。

真夜中に1人という状況が恐怖心を揺すっているのだろうか？ 自分の足音以外何も聞こえないせいだろうか？

そんなことを考えれば考えるほど少しづつ前へ歩む事を辞めたくなくなってしまった。

「そんなことも言ってられないか……………って……………ん？」

そんな時だった。階段に向かって歩いてみると、不自然に床に落ちている手帳のようなものを見つけたのだ。

不思議に思った俺は、その手帳を拾い上げて適当なページをめくってみる。

『消失のアーティファクトを見つけた』

……………なんだこれ。消失のアーティファクト？

『契約者の名前は“新海 天”、ある程度の能力適性はあるようだがまだ自在に扱えて

いない』

『先の成長を考慮すると、現段階での奪還を優先すべきだろう』

雑に殴り書きをされてある手帳のページをパラパラと捲り、視線を動かしてみる。その結果理解出来たのは、この手帳の持ち主は天ちゃんを狙っている事だった。

それだけじゃない、あくまで欲しがっているのは天ちゃん的能力。消失のアーティファクトとやらだ。だとすると、この持ち主はアンブロシアの所持者？

……………っ！

「急がなきゃ不味そうだ……………」

一刻も早く希亜と合流する為に俺は走る。

もしかしたら……………既に天ちゃんはアーティファクトを奪われているかもしれない。何故俺はアンブロシアを所有している前提で考えていたんだ。

そんなことするよりも手っ取り早く手に入れられる手段があるじゃないか。

殺せば手に入るんだから。

「クソっ……っ！」

勢いよくその場を駆け出し、頭の中に残っている間取り図を思い出しながら走り抜ける。

ひたすら。

全力で。

「希亜ーッ！」

そうしてたどり着いた4階のオフィスルーム。綺麗に並べられた机たちとは裏腹に乱雑に散らばった書類たち。

踊るように無造作に暴れたのであろう事が想像出来る散らかりっぷりだ。

しかしその中にへたり込むように座る人影が2つ。

「おい、希亜……いるなら返事を……」

元々違和感があった。希亜は決して仲間を無視するような冷徹なやつなんかじゃない。だからこそ、俺の声が届かない時は彼女にとつて混乱してしまう自体が起きていた時なんだ。

簡単に予想出来た。けど………

簡単に予測できなかった。

「天ちゃん!？」

声を荒らげて駆け寄る俺。壁に寄り添うようにして座り込んでいる天ちゃんの気を確かめるために何度も声をかける。

「大丈夫か!？ 大丈夫だったか!？」

そんな簡素な言葉しか出てこない。きつとそれほどまでに俺も動揺してたんだろう。

「天ちゃん! 天ちゃんっ!」

その原因は……

「返事してくれよ! 天ちゃん……!」

守るべき人の瞳から光が消えていたからだ。

その身体をよく見ると、何か縄のようなもので縛られていたかのような跡まである。

「私が見つけた時には、既にもう……」

鉛のように思い声で、希亜はそう語る。その右手にはさつき拾った小さなナイフが握られていた。

「ま……まさか………しん——」

「では無いわ」

「……—」

「脈は動いてる。僅かだけど呼吸もちゃんとしている。息はある」

希亜からのその言葉を聞いて、真つ先に天ちゃんの手首を掴み、そのまま同時に呼吸の確認をする。

うん……動いてる。動いてる……！

「よかった……」

いや、現状を見れば良いことは無いだろう。明らかな精神的なものが異常をきたしているのは明らか。明らかなのだが……

生きている。

その事実が俺に安堵の息を吐かせたんだ。

「とにかく……やるべきことは決まった」

まだ全てが解決したわけじゃない。状況の整理すらままならない現状なんだ。守るべき人も見つけた。救うべき人も救った。

「そうね。もうこんな場所には用はないわ」

まだぐったりと力なくもたれかかっている天ちゃんをおんぶの形で背負い、立ち上がる。

「^後さつさとここから脱出だ^ね」

「もうそろそろ出口が見えるか？」

「まだよ！　この階段を降りて裏口から出るから！」

西側4階オフィスルームから走ること10分弱、俺たち2人はできるだけゾンビのよ
うな気味の悪いアレに出会わないように気が付きにくい裏から出るために走っていた。

東側の建物に移り、そのまま中を大きく迂回して3階……2階へ。

そして1階にたどり着いたのだが……階段から出るための扉に南京錠がかけられて
ある。

「ダメ………！　鍵が………！」

「どけー！」

ガチャガチャとドアノブを回していた希亜に一声かけると、勢いをつけてその扉を蹴
りつける。

激しい音こそするが、そんな簡単には開いてくれない。

しかしもう一度。焦りを思いつきりぶつけるように再度力を込めて扉を蹴る。

今度は先程よりも一際大きな音がして、金物が擦れるような音までも聞こえてきた。
よく見るとドアノブあたりの据え付けが悪くなっていたのか、ボルトが外れかけてい
る。

「さっさと……………開けッ！」

なかなか開かないドアにイラつきをぶつけるように、体重を乗せて前蹴り。すると流石に頑固だった扉も、引っかかっていたものが壊れたせいで勢いよくその道を作った。

「無茶するわね」

「真似すんなよ」

「出来ないわよ」

そんな軽口を叩きながら、少し遠くに見える非常口に向かって走り出した……………その時。

「くはっ……………!!」

ほぼ一本道の廊下の横壁から、まるで大砲の弾でもぶつけられたかのように何かの勢いよく入ってきた。

そしてそれは苦しそうな声を出している。

「……………ッ」

まともに状況が理解出来ない中、無意識にその足を止めると……壊れて山積みになった瓦礫の中から見覚えのあるシルエットが素早く何かに蹴りつける。

よく見るとその先には2mはゆうに超えているであろう大男が……

その大男は蹴りを回避することも無く無抵抗なまま受けると、何事も無かったかのように飛びかかった人影の足を掴んで乱雑に投げ捨てた。

もう、その人影の正体はわかってる。

「レナ!!!」

俺たちの方に投げられたレナは、ダメージを負いながらも華麗に受身を取り、体勢を持ち直した。

「よう……無事だったみたいだな、大将」

「お前……なんでここに——」

「話は後だ」

パンパンとスカートの埃を払うと、レナはあの大男に向かって威圧するように視線を飛ばす。

よく見るとその顔には目や口などのパーツがない。のっぺらぼうのように真っ白だ。

「逃げるぞ大将！ コイツ……まともじゃねえ！」

「逃げるったって……！」

そんな俺の言葉を聞かずに、レナは顔のない大男に向かって走り出し、攻撃するような素振りを見せる。

そして大男がレナに向かって丸く握った拳を振り被ろうとした瞬間。

「反射鏡！^{リフレクション}」

レナが能力を使つて鏡を出した。

「行け！ 大将！」

その声俺の体を突き動かす。パツと横を見るとあまりにも恐怖ゆえか、足がすくんでしまっていた希亜の腕を引っ張り、非常口の方へと走っていく。

そしてすぐさま振り返ると……

「ぐっ……！」

パリンという高音と共に、身体を殴られたレナが俺たちの方へと再び飛ばされた。

そして今度は攻撃された怯みからか、受身を取ることができずに床にゴロゴロと叩きつけられる。

レナはムクリと立ち上がるが……

「レナ、天ちゃんを頼む」

「あ？」

ある程度の距離が離れている今のうちに、背負っていた天ちゃんをレナに預ける。

「あつ……おい！ 大将！ どういうつもりだよ！」

「どうもこうもあるかよ。そもそもとしてお前はスタミナが無敵だろ？ MAXスピードを維持できるのならレナが天ちゃんを守った方が安全性が高いと思っただけだ」

「だからってテメ——」

「いいから走れ!!」

何故だろうか。

一緒に逃げるべきだとも思っていた。わざわざこうして残ることもないと思っていた。

「だから大将も——」

「すぐに行く!!!」

……。腹が立ったんだ。

「……クソ！ 後でぶん殴ってやるからな……!」

そういうレナの声が少しずつ遠ざかっている。

そうかい。殴ってくれるのか。

「来い！ 希亜！」

「ちよ……ちよつと！」

それじゃあ気持ちよく殴ってもらうためにも絶対ミスは許されないよな。

「よくも俺の家族に手を出してくれたな……クソ！」

たった一撃だけでいい。

ほんの数秒でも足止めになる攻撃でいい。

だから、全力の一撃を……!!

この時の俺は、暴力に対しての抵抗が少なからず無かったんだ。

それは大事な家族を傷つけた怒り。大切な友を危機においやった怒り。続く理不尽への怒り。

少しづつ薄れつつあったあの記憶を……乗り越えた瞬間だった。

「《オーバーフロー》で……一撃を！」

そうして、俺は無言で近づいてくる大男の頭を、全力で蹴りつけた。

定められた運命

「ちくしょう……！　んだよアイツ……！」

正直一か八かの賭けだった。出来るかどうか分からない部の悪すぎる賭け。でも何とかそれには勝った。オーバーフローによる身体の強化はできたんだ。

「とにかく今は逃げるしかねえ……！」

できる限りの全てを注いだ渾身の蹴り。正直あれを普通の人間に当てれば首がへし折れていただろうとは思うくらいの威力だった。だけどアイツは耐えた。

耐えてその場に膝を着いただけだった。

本能が訴える。この戦いは勝ち目がないと。

もうすっかりとあの3人の姿は見えなくなっていたが、きつと大丈夫だと思つて非常口の扉を開ける。そして身を投げ出すように建物から脱出をすると、その瞬間に目が眩むほどの眩い閃光が俺の瞳を焼き尽くした。

「……………ッ！」

徐々に落ち着く視界が捉えたものは……………幾つものスポットライトに当てられた

俺とレナ、天ちゃんと希亜の姿。

そして……夥しい数の蒼白い光に包まれた人影たち。

「希亜！ コレって……！」

「え、ええ……あの能力者……いえ……能力で作られたモノ……」

見渡す限りに広がるゾンビのような奴ら。ざっと見積もっても100は居そうだ。

そんなもん……まともに戦えるはずも無い。

「コイツら……うぜえな。どうするよ大将」

「どうするもこうするもお前……」

モタモタしてたらあの大男が建物から迫ってくる。あれに追いつかれたら正直終わりだ。あんな化け物に相手をされちゃ何も出来ない。

かと言って策もなしに行動できない。あの時、俺が希亜と引き離された時……アレの力は異常だった。あんなのを希亜が振り払えるわけが無い。

全員助かる道は……！！

そんな時だった。夥しい数の奴らが道を開けるようにとある一箇所のみ消えていったのは。

そしてそこには青い光を放つ人物がゆっくりとこちらに近づいてきている。

「流石です、ミスター竹内……」

その人物は両手をパンパンと盛大に叩き、まるで讃えるかのように笑顔を浮かべてその姿を現す。

「お前は誰だよ」

「こいつも俺の名前を知ってるのか……」

「これはこれは申し遅れました。私はI O 5を束ねる王……『ディオス』と申します」
ディオーフアイフ

ゆっくり且つ、舐めるかのようなねつとりとした言葉遣いで自己紹介をするソイツは、堂々と自身の名を言葉にした。

「ディオス……一体何の用だ」

「まあまずは落ち着きなさい。侵入者よ。私はとある提案をしに來ただけなのですよ」

「提案……?」

ディオスと名乗る男は、こちらの飛ばす敵意もものともせず、余裕の表情で語りかける。

「そうです。提案。これはアナタ方にも都合の良い提案。そして我々にとつても最高の結果となるものなのですよ」

「まずはアナタのお仲間である妹さん……その方の『契約』は頂きました」

……契約?」

……………!?

「既に『消失』は私のモノ……………しかし……………これだけではまだ足りることの無いのです……………」

「ちよつと待て!! お前……………まさか天ちゃんのAFを……………!!」

「ふむ……………理解に苦しむお方だ……………彼女はまだ生きている、何か不服でも?」

「大アリだ! お前……………天ちゃんに何をした!?!」

「……………ですから先程説明させていただいた通りですよ。ミスター竹内……………契約を回収しました。ただ……………それだけです」

「ディオスはゆつくりとこちらに向かって歩み始め、まるで攻撃されることを警戒していないかのように語り続ける。」

「もつとも……………力の実験台にさせてもらいましたがね」

「ツ!!」

その言葉を聞いた瞬間。俺は意識するよりも先にディオスに向かって攻撃をしていった。

左足を軸にした上段蹴り。しかしそれは相手にクリーンヒットすることなく……………ゾンビのような奴が一体、身を犠牲にするように盾となっていた。

そんな状況の中でも、ディオスを言葉を続ける。

「あまりにも抵抗するのでちよつとした罰をと思ひましてね……彼女の能力は消失。存在感や存在そのものを消すことの出来る力です」

そんな事を口にしてしている間にも次々に攻撃していくが……何度も何度も別のゾンビのような奴らが体を盾にして防いでくる。

「しかしそれだけではない。彼女に關することだけでは無く、彼女のことを消すことも出来るのです。例えば……」

「『彼女のの中にある記憶』さえも」

その言葉を発した瞬間、ゾンビのような奴が爆発するかのように散り始め、勢いに負けた俺の体は希亜たちの元へと飛ばされていく。

「彼女に關する記憶ではなく、彼女の記憶を消させていただきました……これが、彼女の記憶ですよ」

そうしてディオスが手に出したのは宝石の欠片のようなモノ。薄水色に輝くソレはふわふわと手のひらに浮かび、弱々しく光を放っていた。

「さて、提案というのはまさにコレです。彼女の記憶の欠片と……アナタ方の契約をトレードするというのはどうでしょう？」

そんなもの……考えるまでもない。

「断るっ」

そう言うて俺はディオスの顔に向かって回し蹴りを放つ、そのタイミングに合わせたのであろうレナが、鏡の能力を使った感覚がした。

そしてそれは希亜の盾になるかのように立ちはだかつており……その奥の瞳には紋章ステイグマが現れている。

「そうですか………残念です」

俺たちの攻撃がディオスにヒットしそうになったその瞬間、奴の両腕から淡く光る触手のようなモノが一瞬現れ、瞬く間に俺と希亜を弾く。

そのせいで蹴りは外れてしまい、希亜も能力の発動を中断させられた。

そしてもう一度ディオスの方を見ると、先程まで確かにあった触手は最初からなかったかのように消えていた。

……何の能力なんだ。一体………!

そう考えたその時。

少し離れた場所から強い光を放出しつつ、物凄い勢いでこちらに向かってくる何かが見えた。

そしてそれはガスを爆発させているかのような爆音を放ちつつ、俺たちを囲っていた無数のゾンビのような奴らを吹き飛ばしていく。

よく見ると2台の車だ。それも………

「グラディエーター……?」

背後に荷台があるタイプの車だ。それは乱雑に、激しく取り巻きたちを引き離し、更には俺たちのすぐ目の前にいたディオスとの間に割り込むように突っ込んでくる。

流石にそれからはディオスを距離を取り、驚きの表情でその車を見ていた。

もちろん俺達もそうなのだが……次に聞こえてきた声は、俺たちのよく知る優しい声だった。

「竹内くん！ 結城さん！ それにゴーストさんも、早く乗ってー！」

「く……九條さん?!」

突如として現れた車の荷台には、それぞれに新海と九條さんが乗り込んでいる。

こ、こんなファンキーな人だったっけ……?」

「今は説明している時間はないの！ 早く！」

俺たちは顔を見合せてそれぞれ頷くと、慌てて駆け込むようにそれぞれの車の荷台に乗り込んだ。天ちゃんを背負ったレナと近くにいた希亜は新海が乗っていた車の荷台に、俺は声をかけてくれた九條さんが乗っていた車の荷台に。

そして再び俺たちを乗せた車が、勢いよく走り出す。

もう一度奴らを追い払うように威嚇しながら。

「このまま逃げよう！」

「えっ……あ、いや待ってくれ！」

「え？」

激しく揺れる車の上で、何とか九條さんに状況を伝える。天ちゃんにとっての必要なものが敵の手に渡ってしまっていることを、必要最低限で。

「つまり天ちゃんの能力が奪われてるんだ！ だからあれを取り返さないと！」

「で、でも！ 今この状況じゃとてもじゃないけど………」

「だからこのままでいい！ 九條さん覚えてるか!? あの時の……校内火事事件の出来事！」

俺も思いついたのは咄嗟だった。

あの日、俺と九條さんがイレギュラーを起こしたあの時の出来事を思い出したのは。

九條さんもその記憶に届いたのだろう。ハツとした表情で自分の腕を軽く握っていた。

そして九條さんは素早く前方へ差し出すように左腕を伸ばし、広がる髪を靡かせながら力を解放した。

「私の能力……射程距離は10m……こんな距離じゃ届かない……」

そう……この力の発動可能範囲は九條さんを中心とした半径10m。既に遠近法で手のひらくらいのサイズにまでなるほどに離れてしまっているこの距離じゃあどうし

ようも無い。

だが……この車が入ったきた場所へ向かうには……つまりこの場所から脱出するための出口に向かう直線上にアイツはいる！

「一か八か！ チャンスは一度！ 力を貸してくれ……九條さん！」

激しく動き回る荷台の上で俺たちふたりは立ち上がり、狙いを定める。

もちろん彼女が怪我をしないように、守るために俺が支えとなりながら。

お互いがお互いに縋るように、身体を支え合いながら辛うじてバランスを保っている状態だ。そして俺は左手を適当な掴みやすいところに掴ませ、紋章が現れる右手を九條さんの左手に重ねた。

「……!? 範囲が……広がってる……? これなら……」

そして淡く光を放つ九條さんの左甲。それと同時に俺の手のひらに浮かんでいた紋章もその姿を消し、左右対称の形となって右甲に現れる。

それを掴んだのは同時だった。ゴツゴツとした石のような感覚のものをふたつの手が驚掴みにする。

『どうやら何か足掻いているようですね。侵入者の皆さん』

その時に聞こえてきた声。それはスピーカーを経由して、超大音量で発しているものだった。

ディオスの声だ。

『その足掻きも無駄だとは思いますが……まあそれも自由です。何が起きたとしても、
“運命”は変えられませんからね』

そして俺たちに向かって語りかけているディオスの真横を2台の車がすれ違う。

そのままアイツは俺たちに攻撃することも無く、余裕綽々の笑みを浮かべて俺たちを眺めていた。

『アナタ達がそうすることも “運命” 。私達が計画を実現させることも “運命” 。全ての運命は決まっているんですよ。竹内 蓮太』

最後の。

最後まで。

『運命は変えられない。変えることはできない。アナタ達が背くことさえも定められた運命。生きることも……死ぬことも』

そんな言葉を聞きながらも、俺は披露した九條さんの身体を支えつつその場に座らせ

て休ませていた。

その間も、九條さんの左手には奪い取った欠片が強く握られている。

消えたモノ

九條さんの手に握られている欠片。それが天ちゃんの所持していたAFでないことは明らかだった。

「ちよつと借りるね」

「うん」

それを手に取るとなおのこと理解る。勿論最初から理解っていたことではあるんだが……

薄水色に輝く欠片。なんて美しいんだろう。澄んだ海のように、晴天の青空のように、純粋な少女の心のように……それは淡く輝いていた。

これが、天ちゃんの記憶。俺たちはコレを優先したんだ。

これから先にどれだけの被害が起こるかわかりやしない。そんな未来の危険な可能性なんかよりも身近な人の大切なモノを選んだ。

戻し方は……わからない。

「あの人たちの目的は何だったんだろう……」

九條さんがボソリと呟く。

「何のために結城さんを……竹内くんを……天ちゃんを捕まえたんだろう……」

「さあ……分からないことだらけだけど、一つだけ確信を得たことは言える」

「確信？」

「うん」

キーはあの拾った手帳。あの中に書かれてたこととアイツそのものの言動。それら
が一致するものは一つ。

「アイツが欲しがっていたのは天ちゃんの『アーティファクト』ってことだ」

「天ちゃんの……」

「あの建物に置かれていた手帳にそんなことが書いてあった。それにアイツの取引、向
こうが差し出してきたのはこの記憶の欠片。当然だよな、本命は大事に取っておくは
ず」

つまり、アイツにとってこの欠片は本当の意味でどうでもいい物、ただこちらを揺す
るための道具だったに過ぎないってことだ。

「で、でも！アーティファクトは戻って来るんじゃないの!? 離れた場所に移動し
ちゃっても、ふと気がついた時に——」

「例外がある」

そこも悩むべきポイントだ。人との契約を破棄させるためには、本来であれば死ぬ以外に方法がない。

アンブロシアだってそうだ。魂を仮死状態にさせてAFを騙すための薬。つまりAFに死亡を誤認させなきゃいけないはず。

でもそこにだつて穴はあつた。

「例外つて?」

「九條さん自身が証明してるじゃないか。その力は例外の中にある」

「あつ……」

そう、九條さんの能力。所有権を自身に移行させる力。そんなケースだつてある。

なんて話している時、九條さんのスマホがブルブルと音を立てて振動し始める。きつと電話でも着信したのだろう。

そして予想通りの動きをして、九條さんがその着信に答えると、おもむろにスピーカー音声に変えて、俺のそばに近寄つてきた。

『もしもし? 聞こえるか? 九條、竹内』

その声の主は新海。移動音の雑音が混じつてはいるが誰が喋っているかくらいは理解することが出来る。

「ああ」

「うん、聞こえるよ」

『とりあえず先に聞いておくけど、怪我とかしてないよな?』

「大きいものは別について感じだな。俺よりもそちの3人はどうなんだよ」

『コツチも特に問題はねえぞ大将。つっても天はまだ眠ってるけどな』

いきなり新海から声が変わる。それを察するに向こうも俺たちと同じような感じで

通話しているようだ。

「そう……か」

『結城から話を聞いたよ。天に何があったか。いや……あの建物内で何が起こっていたか』

「流石だ」

『奴らの目的はわからないけど……あの行動から考えて今回の件の狙いは……』

「間違いなく天ちゃんのアーティファクトの奪取だろうな」

俺や希亜の能力だって奪おうと思えば何時でも奪えたはずだ。いくらでもそのチャンスがあつたにも関わらずにそれをしなかつたことは考えられるのは少なくとも。

「俺と希亜の力を奪わなかつた点から、アイツはきつと人の力を奪う方法を持つてること。そしてそれは連続して使えない」

『それから、あの男が欲しがっていた能力は天の能力。どれを優先的に手に入れるかを

考えた結果、天が持っていた聖遺物が選ばれた』

「だとしたら不明な点も出てくる。つっても不明な点だらけではあるんだが……」

『まあ……そうね』

「何故、最初に希亜が狙われたか……だ。天ちゃんの力が欲しいのなら最初から天ちゃんを狙えばいい。けれどそれをしなかったのは何故か」

「可能性を考えると……あの時の出来事が脳裏をよぎる。しなかった」つてのは言葉の綾だ。

『いや……違う。天は一度襲われてる』

妙に落ち着きのある新海の声。それだけで察することの出来る。

コイツ、相当キレてるな……つて。

「そう。しなかったんじゃなくて、やりきることが出来なかったんだ」

「……あっ」

そこで九條さんも身に覚えがあることに気がついたようだ。

『なるほどね』

電話の奥から希亜の声も聞こえてくる。

「天ちゃんはその日、雷の男に狙われていた。そして後からソフィに聞かされたんだが、あの時に特別な霊薬をその身体に摂取してしまったらしい。それから能力が制御出来

ずに困惑していた」

『え……!? なんだよそれ……!』

「知らなくて当然だよ。天ちゃんの能力は存在感の操作。言い換えればそれは消失。みんなの記憶から消えてしまってるんだから」

その言葉を発した瞬間、凍りつくように皆が口を閉じる。

けれどこれは、言わなければならない。

「でも俺は踏みとどまれた。理由は後で説明するけど、その時点できつと奴の術中にハマってたんだろう」

「そして直接狙うと俺たち全員と対峙しなければならぬ。じゃあ何をしたら手薄になるの？」

「それはおびき寄せること。仮に俺が天ちゃんの能力を支えることができるのを知っていたら？ 天ちゃんのそばにずっといることを知っていたら？ 俺をおびき寄せれば自ずと天ちゃんも連れてこられる」

『だから………私を……』

「そしてもう一つ、アイツは人の能力を奪うことの出来る力を持つてることだ。そして本命の力。ゾンビや化け物を生み出し、あまつさえ人の記憶を欠片として保存出来る力。これは俺の予想なんだが………架空の物体化じゃないだろうか」

『架空……?』

「物体として存在しないものの実体化……って言った方がいいかな。あの場所にいた能力に関わるものは全て認識することすら出来ないものばかりだ。もしも姿を与える能力だとするならば……この欠片も納得がいく」

「香坂先輩とはちよつと違うのかな」

まあ似てるつちや似てる力だ。あつちは想像の具現化ではあるが……可能な限りの物に限定される。

「だな」

そうこうしている内に、辺りは見慣れた場所を走っていた。

この辺りは……俺ん家の近くか。進行ルートのにもきつとそこへ向かっているんだろ。

「とにかく、アイツの最終的な目的はわかんないけど、ロクでもないことを企んでるのは事実、ひとまずは天ちゃんの状態を確認してからにしよう」

『………わかった』

そこで話を終わらせて通話を終了すると、九條さんはスマホをしまう。

「それで……竹内くん」

「………? 何?」

若干言いにくそうに俺の顔を見る九條さんは、戸惑いながらも俺に声をかけた。

「私、その……まだみんなに何が起こっちゃったのかが分かってなくて……」

「……あ、そうか」

その言葉を聞いて九條さんが戸惑っていた理由がわかった。そういえばまだ九條さんに事の次第を何も伝えちゃいない。

「ご、ごめん……伝えてなかったね」

「教えてくれると……助かるな」

「そうだな。まず——」

そうして俺の家に着くまでの間、あの建物で起きていた出来事をできるだけ詳しく九條さんに伝えることにした。

「う……………」

あれから少し時間が経過し今は俺の家の中。微妙に魘されている天ちゃんをベッドに寝かせて、各々が好きなように座りこむ。

しばらくの間は無言が続いたが、その間にも俺は奪った記憶の欠片を使ってどうにか天ちゃんに戻せないかを試す。

「……………だめだ」

試すと言っても彼女に触らせたり、握らせたり、胸に置いてみたり、頭に置いてみたり。思いつく限りの手段を試して見たが……………どれも上手くいかなかった。

「中々……………上手くいかないわね」

疲労から若干力の抜けている希亜がそんな俺たちの様子を見て言う。

「でも、必ず何か方法があるはず。もしかしたら天ちゃんの意識が戻ってからだったり

したら成功するかも」

「そうだね。まずは天ちゃんが無事に目を覚ますのを待った方が良いかも」

九條さんや希亜は天ちゃんを気にしながらも色々と話したりしたが……新海はその口を開くことはなかった。

勿論大切な妹だ。心から心配しているだろうが……それと同じくらいアイツに怒りを覚えているのかもしれない。

その点は……同じだ。

込み上げてくる怒りを無理やり押し殺しながら、俺は天ちゃんの右手を握る。

「絶対助けるから」

そして数時間が経過した。暗い世界が太陽の光で照らされ始める頃、彼女は動いた。ゆっくりと瞼を上げ、困惑のような表情を浮かべたあと、自分の力で身体を起こし再び辺りを見渡し始める。

このタイミングで起きているのは俺と新海の2人だけ。女の子2人は眠ってしまった。おれレナも休ませるために能力を解除した。

だから2人だけ。

「あれ……？」

彼女は普通に目覚めた。何事も無かったかのように、普段通りの日常を送っているかのように。

ゆっくりと。

自然に。

「天ちゃん……！　目が覚めたか……良かった」

「天！　良かった……大丈夫か？　痛いとかことかないか？」

俺と新海がそばまで駆け寄り、彼女に声をかける。何か違和感がないか、中身に異常をきたしていないか。

思えば当たり前だった。

あの欠片を奪われていたんだから。そしてそれを戻せていないのだから。

当然の反応だった。

「あの……誰……ですか？」

そらいろ そらうた そらのおと

だよな。そう……だよな。

当然だ。この結果は見えていた。

「わかんない……よな」

天ちゃんの全ては、その欠片の中に眠ってしまっているんだから。

受け入れてしまうのは容易かった。前を向くのも、先を考えるのも。

でも……この心にあるものはなんだ？ 心の奥の奥、体の……魂の芯から湧き上がる

この気持ちはなんだ？

「これを」

そう言つて、天ちゃんが身体を起こした時に落ちてしまった記憶の欠片を天ちゃんに手渡す。

優しく、包み込むように。

天ちゃんは表情を曇らせながらも素直にその欠片を受け取ってくれた。

「あの……これは何ですか？」

受け取った本人はまだ変わらないみたいだ。

「それは、思い出。君が今まで培ってきた人生の思い出。生きるという意思。それは君の……君だけのモノだ。だから持つていて欲しい」

「思い出……？」

「ああ」

そして最後に優しく笑って返すと、俺は立ち上がる。

「天ちゃん。君は俺に勇気を与えてくれた。君との思い出は数える程しかないけれど……君を思い出させるものは数え切れないほどある。特別なんだ」

「その勇気を君に返す」

そう言つてその場を去ろうとした時、新海が俺の前に立ちはだかるように邪魔をした。

「何をするつもりだよ。竹内」

「決まつてる」

「お前……！ さつきまで——」

「わかつてる!!!」

新海が言わんとしていること。それくらい自分でも理解しているさ。でもだからこそ俺が動かなきゃならない。俺じゃダメだから、俺じゃ思い出させてあげられないか

ら。

「すぐになんて言わない。でもいてもたつてもいられない。情報を集めてくる。絶対に許さないんだ」

我ながらの語彙力のなさに呆れを感じながらも、それほどまでにこの心が揺らいでいるんだと感じる。

どこまでも無邪気で、どこまでも無垢で。どこまでも謙虚でどこまでも素直。そして……どこまでも勇敢だった。

白い髪と言えばこの子だ。元気な女の子と言えばこの子だ。誰よりも優しい人と言えばこの子だ。あの笑顔は皆を笑顔にさせる世界一のモノだ。

今はその笑顔すら見られない。

彼女を救えるのはきつと……………

「天ちゃんを救えるのはお前だけだ。新海。彼女の思い出に強く干渉しているお前なら、きつと思いついてくれる」

だから……

「天ちゃんのそばに居てやってくれ、新海」

俺じゃ……護れなかった。身体も、心も、力も、全て。

「護ってやってくれ」

最後にそう言った。新海とのすれ違い様に肩と肩がぶつかって若干よろめいてしま
う。

そんな自分さえも許せなかった。

<視点切りかえ>

目が覚めた時、アタシは知らない場所にいた。知らない部屋、知らない背景、知らな
い状況。

そして知らない人達。

初めに声をかけてくれたのは前髪の長い人だった。片目が隠れるほどに長い人はい

の一番に心配してくれた。この人の目を見ると、なんでか心がぼかぼかした。

次に話しかけてくれた人は身長の高い人だった。顔の整ったその人はどこか怒っているようにも見えた。そしてこの人を見ると、なんでか心が落ち着いた。

知らない2人。でもどこか懐かしい気もする2人。一目見てわかった。きっとこの人たちは悪い人なんかじゃないんだって。きっとこの人たちはアタシを守ってくれたんだって。

でも、何故か悲しそうな顔をした。特に悲しそうな顔をしていたのは「竹内」と呼ばれていた人。笑っていたのに……本当は泣いていた。

胸が苦しくなる。

なんで？ アタシはなんでこの人を見ると苦しいの？

なんで悔しいの？

力になりたい。

でもこの人は、その心を何も言わずにアタシの手のひらに綺麗な欠片を置いた。暖かかった。

きつとこれはすごく大事なモノなんだって……そう感じた時、この人は言った。

これは「思い出」だって。

アタシとの思い出は数える程しかないけど、アタシを思い出させるものは数え切れない。

いほどあるって。

アタシは……それを知りたい。

そう思った時、欠片はゆっくりとアタシの胸に近づいてきた。

「ツ!?! 天!?! どうした!?!」

「わ、わからないですっ」

空色のように美しく輝いたその欠片は、アタシと一体化でもするように胸の中に沈んでいく。音もなく、ただ静かに。

そして完全にその欠片が飲み込まれたあと……大量のノイズが頭の中を駆け巡った。

「——ツ!——」

一瞬の頭痛のあと、その痛みが引くと同時に次々と虫食いになった記憶が覚めていく。

穴あきになった一枚絵のように、未完成のままのパズルのように、答えの出ないルービックキューブのように。

「天!?! 天!——」

そして必死な声掛けをしてきているこの人の声で、我に返る。

そうして確信した。

「新海さん! 教えて下さい! アタシの思い出を……! 天の記憶を!」

<視点切りかえ>

俺はどこに行こうとしているのだろう。頭ではそんなことを考えていた。

胸の内は色んな感情でいっぱいだ、天ちゃんを助けたい、天ちゃんをあんな目に遭わせた奴に復讐したい、自分すらも。

けれど勝てない。きつと勝てない。俺一人だと……だからこそ仲間と共に立ち向かわなくてはいいけない。でも、天ちゃんを守るために新海には残って欲しい。九條さんや希亜や香坂さんには傷ついて欲しくない。

俺は誰も護れないから。希亜も救えない。天ちゃんも救えない。みんなを巻き込ん

でばかりだった。

悔しい。次第に歯ぎしりが強くなっていく。握り拳の中で爪が肉を貫いていく。

そして……足元がふらついてくる。意識も朦朧としてくる。腹が鳴る。

倒れている暇なんてないのに。寝ている暇なんてないのに。飯を食っている場合では無いのに。本能がそうやって訴えかけてくる。

もう……限界だ。

そう感じた時、世界は回るように揺らめいて地面が俺を襲いかかった。このまま衝突してしまうと目を閉じた時……俺はなにかに支えられる。

細いつつかえ棒にもたれ掛かるように体が止まった。その違和感に目を開くと白い袖に通った腕が俺の胸を受け止めていた。

「んなとこで何やってんだよ」

「……………なる……………な？」

「誰だよソレ、ゴーストだゴースト。オレが誰かもわかんねえか？」

間違いない。レナの色を白くしたように瓜二つのその人はゴーストだ。

「また酷くやられてんなあオイ。その調子じゃあオレが殺す前に死んじまいそうだな」

「……………」

「……………つたく」

ゴーストは呆れたような顔をしたあと、俺を近くにあったベンチに無造作に座らせる。そしてポケットの中から1つのパンと小さな水が入ったペットボトルを俺に投げた。

「食え」

「いらねえ」

「いいから食えって！ うぜえなホント」

こんなもの食べる気にもならない。考えることが山積みでそんなことしてる場合じゃないんだ。

わかつてくれ。

アイオーファイブ
「I O 5に会ったな」

「………」

ゴーストは確かに口にした。俺たちが敵対しているその組織の名前を。

「お前……知ってるのか!？」

「司令官が言ってたろ、未知の組織から攻撃を受けているって」

確か……天ちゃん誘拐された日の後。確かに言っていた。それってアイツらのことだったのか……

「こっちはこっちの事情があるんだ。オレ達もアイツらと馴れ合う気もねえ。それはテ

「メエらもだろ？」

「ああ……天ちゃんをあんな目に遭わせた奴らだ……！　許さねえ」

「……………そんなに大切なのか？　その、天つて奴は」

「大切だ」

勿論だ。そんなの悩む必要も無い。

「なに……好きなの」

「……………」

好き……？　俺が？　天ちゃんのことを？

わかんない。そんなこと考えたこともなかった。天ちゃんは元気いっぱい明るくて素直な子。

いつだってムードメーカーで俺たちチームの笑顔は彼女を中心に回っているって思っていた。

そんな笑顔を護りたい。護りたかった。

……………だけなのだろうか。

……………！

そうか。護らなければと思っていたはずなのに、今じゃ護りたい……か。
「好き……なんだと思う」

彼女の笑顔をずっと見ていたい。それが俺の行動の始まりだった。

「ふーん。ま、興味ねえけど」

ゴーストは素っ気ない返事を返すと、おもむろに話を進めた。

「どつちにしろ、オレ達はオレ達で調べてやってんだ感謝しろよな」

「調べてる……?」

「ああ、エデン……じゃねえ方かアレは。エンプレスさんがわざわざ御足労してきたんだよ」

エンプレス……香坂さんが!?

「なっ……! なんて香坂さんがこの事を——」

「なんでも何も、テメエが本人に電話を繋げてたんじゃねえか」

「は……?」

「いきなり着信が来たから出てみたら、返事はくれないし襲われてるっぽいのであわわわしてたぜ? その様子だと本当に偶然なんだな」

そう言われて慌ててスマホを取りだしてみる。すると確かに触つてもいないのにロックは解除されたままであり、履歴を確認すると香坂さんに連絡していた。

チャンスだ。

天ちゃんのAFを取り返す？ それもそうだ。

俺たちがやられた分をやり返す？ それもある。

けど一番は……

天ちゃんの分の恨みを返せる。

「ついて行く」

「へっ、そんなに目の色を変えるなよ。何も今から殺りに行こうって訳じゃねえんだ」

嬉しそうにニヤツと怪しい笑みを浮かべると更にゴーストは顔を近づけてこう言っ
た。

「お前のその『眼』嫌いじゃないぜ」

そして頬に軽く触れる唇。1秒にも満たない短い誓いだったが、それに反応する間も

なく彼女は距離を離す。

「じゃあ今日の夜、例の神社に來い。そこで俺たちと落ち合おうぜ。やるからにはキツチリとしとかねえとな……それまではグースカ寝てな」

そしてくるりと後ろに振り返ると、ゴーストは片手を雑に振ってクールに去っていく。

「じゃーな」

そんな彼女の後ろ姿を見ながら、俺は雑に投げられていたパンを口に啜える。

その時も頭に思い浮かんでいたのは、復讐という2文字だった。

はすいろの恋、そらいろの恋、ゆきいろの恋

「運命……ねえ」

俺はあれから、約束の場所である神社の方へと来ていた。そしてあの時に言われた言葉が不意にぼつりと思ひ浮かぶ。

わかんなかった。こうなることは決まっていたのだろうか。最初から定められたモノだったのだろうか。

救うことの出来ない結末？ 抗うことの出来ない未来？

今すらも決まっていたのか？

なんてことを何度も考えた。考えても考えても答えの出てこない迷路、だけれどその答えを知りたくて彷徨い続ける。

その結果……溢れ出る気持ちは「申し訳なき」だった。胸の内にはいつもごめんなさいがある。

不甲斐ない。

本殿入口横にある長椅子に座りながら、後悔の繰り返し。

何度も。

何度も。

そしてしばらくしたある時、俺は糸が切れたかのように気を失ってしまう。

その刹那……こちらに誰かが歩いてきている気がした。

《視点切りかえ》

やっと見つけた。

あたしがそう思った時、先輩はダラりと身体の力を抜くように倒れかかった。走つてもとても間に合いそうにない距離だったけど、運良く先輩は壁に寄りかかるようにして止まった。

そして……あたしは先輩に駆け寄る。疲れ切っている先輩の隣に腰を下ろして、ゆっくりと先輩の身体を倒して。

その頭があたしの膝に座るとそこで初めて安らかな寝息が聞こえてきた。

身体が緊急で休ませるほどの疲労。とてもじゃないけれど想像もできない。

「休んで下さい……先輩」

先輩が出てったあと、お兄ちゃんからあたしのアルバムを見せてもらった。何冊かあったその思い出は、どれもめいっばい笑ってて、どこまでも楽しそうで素敵なものだった。

思えば予兆はあの時からあったのかもしれない。あのアルバムを見ていると、ぐにやぐにやとした感情が胸の内でも渦巻いていた。

そして最後のアルバム。

お兄ちゃんへの想いが詰まった心の本。

アレを見た時……耳鳴りが始まった。それは次第に強くなって……頭痛に変わる。脳が爆発しそうな程に暴れると穴抜けだらけになっていたパズルのピースが徐々に合わさっていった。

まだ完璧じゃない。まだ完全じゃないけれど……少なくとも大切なことは思い出させた。

あたしは幸せだったこと。

暖かい家族がいて、沢山の友達がいて、毎日が楽しくて。そして……大好きなお兄ちゃんがいる。

気が遠くなるほど昔から心惹かれた好きな人。

それを思い出させてくれた大切な人。
今はどっちも思う。

あの建物にいた時、夢か現実かは分からないことがあった。大きな背中で一生涯懸命に
あたしを助けてくれたあの英雄がいたのかどうか。

でも今ならわかる。

きつと先輩だったんだ。きつと先輩が命を懸けて助けてくれたんだ。

だから、ありがとうございます。

「……………」

思えば似ていない様で似ている二人。

ぶつきらぼうで不器用で、がむしやらかな人。でも……優しくて頼りになる。

「あたし……先輩の事、好きみたいです」

聞こえない言の葉を語りかけながら、先輩の頭を撫でるように手をかざす。ほんの少
し先輩は項垂れていたけど……すぐにまたすやすやと眠った。

「だから、本当はどこにも行つて欲しくない。もう二度とあの場所には戻つて欲しくな
い。でも……きつと先輩は止めても行つちやうんでしょ」

実は、ここに来る前にゴーストさんと会った。だからこそここにいて事を知れた
んだけど……

その時に聞いたの。何か隠してたようにも見えたけど……先輩が何を考えてるかも聞いちやった。

復讐なんて別にいい。戦わなくてもいい。そう思ってたけど、あたしのA.Fはとつても危険なんですよ？ 消失をさせる力……悪用なんてされちやったら世界が混乱しちゃう。

だから戦う。

あたしのせいでごめんなさい。力になれなくてごめんなさい。

「だから止めない。その代わりに、全てが終わったら今度はちゃんと起きてる時に言わせてね」

「大好きって」

せめて、せめて今くらいは……そばに居るから。

《視点切りかえ》

本殿の隅、ちょうど物陰に隠れるような場所。

彼女たちからは見えない陰で私は聞いてしまっていた。

あの時、私と九條さんが目を覚ますとその時には既にある程度記憶が戻っていた天がいた。新海君が頑張ったおかげなのか、順調に事は進んでいたようだった。

そして天が蓮太を探し始めた。心配なのは私たちも同じ、だから各々が探した。そして偶然見かけたゴーストと天。二人が会話をしているところ。彼女の言葉を聞いた天は大慌てで走り出した。

それがこの場所。

「……………」

心配だったから追いかけてしまったけれど、声をかけるタイミングを失ってこんな所で隠れている。

そして。

「……………」

彼女の気持ちを知ってしまった。

彼女も蓮太の事が好きなのだ知ってしまった。多分きつと蓮太も……………

様々な感情が膨れ上がってくる。これまでやこれからの事、今この瞬間の事。あの子の気持ち、あの人の気持ち。そして自分の気持ち。

あの場所、あの時から始まった……………この気持ち。

「……………祝福するわ」

なんとか自分の中にある一部の心を押し殺し、誰にも聞こえないように一言だけ声を絞り出した。

この時の言葉は……誰よりも自分自身を傷つけていたのを覚えてる。

私は自分の心に嘘をついて、“あの場所”へと向かった。

枝

不思議な感覚だった。いくつもの鏡がそこら中に浮かんでおり、俺は無重力空間に身を委ねるようにして浮かんでいる。そんな感覚。

目に見える鏡は形や大きさやその全てが違う。そして何よりも気になったのは……
「……………希亜？」

幸せそうに新海と二人で手を繋いでいる希亜。その二人の背中からは不安なんて微塵も感じられない……そんな圧倒的な心を感じた。

「……………香坂さん」

次に目にしたのは、ベンチで新海と二人で寄り添い合う二人の姿だった。まるでこれから何が起きても二人なら乗り越えられる。そんな決意すらも感じられる心だった。

「天ちゃん」

その次に目にしたのは満面の笑みを浮かべて制服姿に身を包んだ新海兄妹だった。二人はお互いを強く結ぶ絆のように深く手を繋ぎ、明るい太陽の下へと足並みを揃えて向かっている。その背中には愛や友情なんてものでは到達できそうにもない特別な想

いを感じた。

「九條さん……」

四つめに目にしたのは新海の部屋のベランダで静かに笑い合う新海と九條さんだった。九條さんの澄んでいる瞳はこの街を優しく眺めながらもなにかに挑もうとする強い瞳だった。

「……………」

かつて俺が予測した平行世界の存在。そんなものが頭によぎる。自然と俺は納得していたのだ。何かが違えば……もしくは何かが狂わなければ、各々がそれぞれの幸せを掴んでいた世界があつたのかもしれない……と。

そしてどこを見渡しても存在しない奴がいる。

数々の鏡を見つめても、どんなに探しても……アイツだけがどこにもいない。

美味しそうにモックのバーガーを食べる九條さん。

ダルそうにPCで何かのアニメを見ている天ちゃん。

足湯を二人で満喫している香坂さん。

公園で猫と戯れている希亜。

慣れた手つきで三つのハンバーグを作っている九條さん。

紋章の浮かんだ背中を笑顔で見せつけている天ちゃん。

カチコチになりながらも楽しそうにプリクラを撮っている香坂さん。見慣れない黒いコスプレ服を着て大はしやぎしている希亜。

いない。

どこの鏡を見ても、俺だけがない。

それぞれが数ある人生を歩んでいる中で、仮にそれが平行世界だったとして。どこの世界を探しても俺がない。

別世界だと俺はみんなと仲良くなれなかったのだろうか？

もしくは……………

そう感じた時だった。ふわふわと浮かんでいる俺の目の前に一つの大きな鏡が現れた。そしてそれは次第に中身を映し出し……徐々に色が染っていく。

そこに映ったのは俺自身だった。

俺が、天ちゃんに庇われているモノ。何かからの攻撃を俺の代わりに捨て身で護る天ちゃんの姿。

そして俺がそれを認識すると、タイミングを意図したかのように別の映像へと切り替わる。

『最後……だから……』

聞こえてくるのは俺の声。しかし古いブラウン管テレビのように酷く光が荒れており、肝心の映像は見えない。

『先輩……！ 先輩……！』

天ちゃんの声だ。しかし映像と同じように酷いノイズが邪魔をして一気に聞き取りにくくなる。

そして……

『大好き……だよ』

その言葉が聞こえてきた時、俺は——

「——ッ！」

意識が覚醒する。まるで自分の身体がなにかに叩かれたように動いた俺はキョロキョロを辺りを確認した。

ここは白陀九十九神社だ。

確か俺は……ここで夜を待っていて……………

そして気がついた。

「あらあら、お目覚めですか？」

辺りはもう既に夜中。暗闇が世界を包む中で青白く光る月だけがその姿を照らしている。

香坂さんと、高嶺と、ゴーストを。

「先輩……大丈夫？」

そして……隣に座っていた天ちゃんも。

「……………」

そうか、アレからもうかなりの時間が経っていたのか……だとしたら……

「なんで天ちゃんがここにいるんだ？」

オレはアレからこの件は誰にも話していない。だから知っているはずがないんだここに来たのは単なる偶然か？ いや、そんなわけない。

「オレが言ったんだよ」

名乗りを上げたのはゴースト。彼女はモックの飲み物を口にしながら淡々と言葉を続けた。

「天《ソイツ》がお前にとっての核なんだろう？」

核、つまりは俺にとって……今最大限の行動力の源。

天ちゃんの為に。

「馬鹿か！ わざわざ不安を煽るようなことして何になるんだよ！ なんで天ちゃんに

感情的になってしまった俺は、その声を激しく怒鳴らせる。

だってそうだろう？ 天ちゃんは傷ついてる。優しいから……きつと彼女は自分を責める。そう思ったから……

「……………あ？」

その時、ゴーストの細い目が威嚇するかのように俺を睨んだ。そして彼女その腕は俺

の方へと真つ直ぐ伸びてきて……胸ぐらを掴んで一気に彼女の方へと押し寄せられる。「んな事どうでもいいんだよ」

「……ッ」

「いつまでもフラツフラツフラツフラしやがって、いい加減うぜえよテメエ」

彼女は更に強く俺の胸元を握ると、今度はつるし上げるようにその拳を上へと上げた。

「『護りたい』『助けたい』『救いたい』、結構な事だ。テメエにそんな正義感があつたことには驚いてるし感心するよ、だがな、それは本来使うべき言葉じゃねえんだ」

「だって、テメエにやあそんな力はねえからな。勇猛果敢に敵陣に突っ込んで行ってボロクソに負けて、その責任を他人に擦り付けてる。全部テメエが起こした身勝手な行動でこんなことになってんのにそれから逃げようとする」

「今まで何度同じ事をした？ 何度周りに迷惑をかけた？ オレが知ってるだけでも幾つか思いつくぞぞ？」

「……そりやそうかもしれない。けど、だったらどうしたらいいんだよ。」

「あの時のあの眼、アレは本物だったはずだ。だからオレはお前を誘った」

「なのにお前は今、自分を見失ってる」

……

原因はわかってる。あの夢だ。あの夢が寮にリアルで……現実味があつて……怖いんだ。

本当に平行世界なんてものがあつたとして、それが本物だつたとして、そこに俺は必要なかった……

俺が居ない方が……なんて思つたりもする。

それに、コイツの言つてることは正しい。俺のせいだ。俺が軽率に天ちゃんを連れてあの場所に行ったから。俺がみんなに相談しなかつたから。

俺がみんなを信じなかつたから。

「わかつてる……んな事わかつてんだよ」

「でも……身体が動くんだ……考えるよりも先に……」

だって誰も傷ついて欲しくないから。

友人なんて作る気はなかつた。大切な人なんて必要なかつた。

それは辛い思い出があるから。忘れられない傷が俺の心にずっと残つてるから。でも突然現れた。

そして引き合うように結ばれた。

安心出来る居場所ができたんだ。

俺はそれを護りたかつた。

「もう誰も、失いたくないから……!」

ゴーストの腕が少しずつ下がる。込められていた力は徐々に抜けていき、やがては俺の身体が彼女の腕から離れていく。

その時だった。

「それは、私達も同じだよ」

優しい声が聞こえてくる。そして高嶺と香坂さんの背後から3つの影が近づいてきた。

「誰も失いたくない。傷ついて欲しくない。だから護りたい……私達もそうなんだよ」

それは俺にとっては特別な声。

俺が心から信じた友の声。

「仲間だからな、みんな大切なんだ」

アイツらだ……

「目を離すと一人で考え込む、貴方の悪い癖ね」

そしてその姿が見える。その相手とは新海と九條さんと希亜だ。

「うっ……!」

その瞬間、脳内にあの景色が再び蘇る。

新海を中心に繰り広げられる幾つもの鏡の記憶。

これは、何となく。本当に直感でしかないのだが……その全てを壊してはいけな
思った。

「……？ 蓮太……？」

「何でもない。悪かったよ」

心配してくれていた希亜にそう返すと、俺は天ちゃんの方へと視線を向けた。

守りたい人。救いたい人。笑って欲しい人。

そして、好きな人。

でも、それは俺の一方的な片想い。みんなと話している時に時折見せる天ちゃんから
は……ほんのりと感じるものがあつた。

この子はきつと……

「……！ クソー！」

その時、ゴーストが何かを察知でもしたかのように空を見上げる。

続くように俺もその総額に視線を向けると……アイツがいた。

月明かりに照らされながらゆっくりと俺たちを眺める忌々しいアイツが。

何故空にいるのか？ 何故この場にいるのか？ 何故俺たちを狙うのか？ そんな

疑問は最初には浮かんでこなかった。

「ほう……彼の者が例の黒幕か」

「です……!」

香坂さんと高峰の声が聞こえてくる。あの二人は既に覚悟は決まっている様だ。

「先手を打たれたな」

そしてゴースト。彼女は未だにポケットの中に手を入れたままその赤い瞳をギラつかせている。

「……………!」

言葉を発さずに敵意をむき出しにする新海達。

九條さんも希亜すらも真つ直ぐに視線を奴にぶつけていた。

「先輩……」

そして俺の袖をギュツと握る天ちゃん。

「大丈夫……護りきるよ。今度は一人じゃない」

もちろん準備なんて出来ちゃいない。これは想定外の出来事なんだ、けど……不思議と焦りなんてあまり感じなかった。

むしろ、混乱していた俺の感情は徐々に落ち着きを取り戻していく。

平行世界がなんだ。それぞれの夢がなんだ。俺は今を生きている、だったらここにいらみんなを守護りたい……!

「レナ」

「おう」

「天を頼む」

「……あいよ」

一度だけ、この戦いの間だけ……負けられないこの瞬間だけ……！

本当の俺に……！

「おやおや？ 随分と仲がよろしい様で……何よりです」

アイツは言う。

「あなた方の異能、頂きに参りましたよ」

そしてゆっくりと地に足をつけると、アイツはその身体に紋章を浮かばせて笑う。

「全ては運命の想いのままに」

「ディオス……！」

ピキリと身体の音が鳴った気がする。気になりこそしないが、俺は1歩ずつアイツに向かつて歩みを進める。

今の発言から理解った事は幾つかある。まず、あの時に言っていた計画とやらはAFを集める必要がある……かAFを集めることそのものかもしれない。つまりは俺たちの力を欲している。

そして待たなかったこと。この居場所を突き止めたんだ、俺たちが何をするつもりな

のか知っていてもおかしくは無いのに、わざわざ自分から出向いてきた。惜しみなく能力を使って。

つまりはアイツも全力。

負けは許されない。

「力み過ぎ」

その時に希亜から脇腹をつつかれる。

「希亜……」

「感情が溢れそうなのは私にもわかる。だからこそ勝負を急がないこと」

いつ間にかチームの先頭に出てきていた俺の隣で佇む希亜は、左目に紋章を浮かばせながらも妙に落ち着きのある声で俺を宥めた。

「では、そろそろよろしいですかね」

パンつとディオスが両手を合わせ叩くように音を鳴らすと、その姿が蜃気楼に紛れたかのようにゆらゆらと揺らめいていき……その姿は2つに増えた。

「此方としても時間が惜しいのです。では、始めましょうか……」

二人に増えたディオスはそれぞれ形の違う紋章を浮かび上がらせて不敵な笑みを浮かべて攻撃態勢を整えている。

そして、一瞬にしてその姿を消した。

「消え……………」

「罨り殺しの宴を……………」

声……………!? 真後ろ!!

咄嗟にその場で背後に感じた殺気に向かって蹴りを繰り出すと、横から突如として襲ってきた突風に怯まされ、数メートル飛んでしまう。

「だ……………大丈夫ですか!?!」

駆け寄ってくれた香坂がさし伸ばしてくれた手に捕まって立ち上がる。そしてアイツの方を見ると……………

視覚で確認できるほどの雷で作られた大きな壁を背に俺たちの方を見ていた。

その奥には俺たちと同じ様な状況にあっている希亜達が見える。

「ありがとう」

分断されたか……………こっち側にいるのは……………俺と香坂とゴーストだ。一応俺たち側のエリアにレナと天がいるが……………戦力としては数えたくない。

高峰があっち側に行ってくれたことが幸運だな、単純な身体能力なら高峰がトップ、能力さえ対処出来れば勝率は高い。

「つーかよ、あの力……………あの時の男のやつじゃねえか?」

「……………言われて見りやそうだな」

そう、俺たちを分断した雷の力。アレはイカれた厨二病野郎の力だったはずだ。ということはつまり……

「他にも様々な能力が隠されていてもおおかしくはありませんね」

「香坂……エデンの方が」

「あの子の囁かな願いです」

いつの間にかエデンの方へと切り替わっていた彼女は大人びた笑みを俺に向けて一瞬浮かべると、衣服の着こなしが窮屈だと言わんばかりにはだけさせていく。

「それと……蓮様。わたくし私の事は『春風』と読んでくださいまし？」

「あ、ああ……わかったよ」

彼女にぎこちなく返事を返した後、改めて敵を睨む。

雷の力……人から奪った能力もあるとしたら予想外の攻撃が来るかもしれない。少なくとも今までに確認した力を持つてる可能性も考えていた方が良さそうだ。

「架空の実体化」「消失」「雷」「A Fの奪取」少なくともこれは持つてるはず。となると今まで出会ってきた能力は……「傷の共有」「影踏み」「瞬間移動」……ダメだ！ キリがない！

とにかく様子を見ないことには何も始まらない。

「とりあえず俺が最初に仕掛ける！ バックアップは春風とゴーストに任せよう！」

「ええ」

「おう」

見てるだけじゃいつまで経っても終わらない。だからこそ俺から攻撃を仕掛けた。

「喰らえ！」

脱落者

何度も攻撃を仕掛けた。息が切れても走り、幾度の傷を受けても体にムチを打って動かした。

けれど……

「うぐっ！」

敵は……ディオスは空想から武器を作り上げて予測もできないタイミングでカウンターを仕掛けてくる。

早くそれを喰らい続ける俺がまだ動けるのは春風のおかげだろうか？ この戦闘が始まって数十分、1度も休むことなく能力を使い続けている。

それは彼女の光る胸元を見れば一目瞭然だった。

けれど状況は劣勢、なんなら徐々に不利になっていつている。その理由は一つ。力の差がありすぎるんだ。

ただでさえ強力な雷の力。それだけでなく空想上の武器を生成して攻撃してくる。そして何より……

「リフレクション反射鏡！」

「中々しぶといですね」

右側から攻めてきた雷を能力で弾き飛ばし、何とか春風の体を守護る。その代わりに左側から飛んできた鋭利な武器が……

「つらあー！」

俺に当たると覚悟していたら、飛び込むように割り込んできたゴーストが飛んできた武器の軌道を逸らすようにはじき飛ばした。

「ぼさつとしてんなー！」

「悪い……！」

上手く身体を俺の隣に寄せたゴーストは、チラツとレナ達の方を見た後に舌打ちをする。

「アイツらは使えねえ……クソツ」

「このままじゃジリ貧だ……！」

「んこたあわかつてるよ！」

「お二人共！ 上です！」

ゴーストとの会話に意識を持っていかれた少しの隙を突かれ、俺たちの頭上に大きな塊が落ちてくる。

それは俺たちの体なんていとも容易く潰してしまうような……そんな物。
こんなの避けられない。

「反射……ッ！」

咄嗟に抵抗するように能力を使おうとした時、ゴーストは俺の襟を掴んで強く引つ張った。

そして次の瞬間、まるで時間でも止めたかど勘違いするほどに早い速度で俺とゴーストは攻撃を回避できる場所へと移動していた。

これは……

「瞬間移動……！」

そう、これはあの時に希亜と友に戦った相手が所有していた力。

「なんでお前が——」

「今それを聞いてる場合かよ！」

「……」

そうだ。理由は分からなくていい。コイツが幻体である以上はその契約者が何かしらの方法を使って瞬間移動を自分のモノとしたんだ。

そしてゴーストは俺を助けてくれた。

今考えることじゃない。

「わかった」

「でもどうする？　このままじゃ拉致あかないぞ」

正直向こう側のみんなの心配をしている余裕すらない。早々にこちらで決着をつけて応援に行きたいのだが……

「オレの力を使えば不意を突くことは出来る、一度だけだけどな」

「一度……」

やや歯ざしり気味にそう言うゴースト。そりやそうだ、状況だけを見れば最悪に近いんだ。でも元々コイツらは奇襲を仕掛けるつもりでいたはず、という事は何かしらの対抗手段が用意されているのかもしれない。

「それを使おう！」

それが何かは知らないけれど、攻める手立てが作れるのなら、チャンスを生み出せるのなら全て使う！

そう思つて俺はディオスの元に向かつて走り出す。

「あつ！　クソ……馬鹿が……！　もういい！　そのまま走り続けるー！」

そうしてヤケクソにも感じ取れるゴーストの指示を聞き、走る。するとディオスは能力を使用し、何も無い無の空間からかつて見た顔のない大男を召喚した。

「どけっ……！」

そして俺は前方へとジャンプする。右拳を強く握り締め、大きく振りかぶりあの薄っぺらい顔を撃つ為に。

その時、俺の肩に誰かの手がトンと置かれた。

それを認識した瞬間、俺が見ていた景色は一瞬にて大きく変わる。

目の前にいた大男はいつの間にかディオスの姿へと変わっており、見事相手の虚をつくことができた。

ディオスは慌てて体を動かして構えを取ろうとするが……そこで不自然に雷の壁から光の枝がディオスの体に流れてきた。

本当に幸運だ。

「今ですッ」

そして聞こえてくる春風の声。

「行け……!」

俺を後押しするように背中を叩くゴースト。

「喰らえッ!」

狙うは隙だらけになっている顔面、この一撃で流れを変える!

そうして真っ直ぐに伸びた俺の拳は………

「残念です」

奴の頭にはクリーンヒットはしなかった。拳がぶつかるその瞬間に僅かに体をずらされ、相手の肩へと直撃したのだ。

「ぐっ……！」

しかし確実に殴った。すかさず連撃をしようとする攻撃を続けようとすると、空いたデイトスの右手が俺の視界を覆い隠す様に伸び、顔を鷲掴みにされた。

そして……………

「強奪」
デロボ

突如として輝き出す奴の右手。目が焼き潰れる程に眩しい閃光を放たれた俺は全身に襲いかかる激しい痛みと共に何かを吸い取られるような感覚に苛まれた。

「うがああああ!!!」

そしてそれが終わると、俺は雑に投げ捨てられる。

「オイ！ 蓮……………！」

「貴方は消えてもらいますよ」

生きることを考えて

「……………ぎげんなあ!!」

動いたのは身体だった。体感にして一瞬、ほんの数秒間の出来事……………けれどそれは脳が理解しようとしなない。

なによりも俺の心が受け入れようとしなかった。

「ふふ……………」

全てを振り払うかのように力の限りに拳を握る。怒りの感情に身を任せ、考えることなんか放棄しての突進。

デイオスは俺を見続け、不敵な笑みを浮かべている。

その顔すら気に入らなかつた。今の気持ちは「ただ殴りたい」これ一つ。

「……………せ」

理由は簡単だ。

俺は先程からずっと力を使っている。家族を呼び出し、力を借りたくて……………能力を使っている。

にも関わらず……ゴースト達はその姿を現さない。

「返せッ！」

それはつまり……俺の力は奪われてしまったということ。今の俺は何も出来ない無力な人間。

「良いですよ、返して、あげます」

そしてアイツの顔面を目掛けて全力で拳を突き出すその瞬間、ほんの少しだけ違和感を感じた。

俺の力は奪われてしまった事実。目の前でゴーストが消されてしまったんだ。これらを結び合わせられるのか？ という疑問。

そう、あくまでゴーストは消滅した。力を奪われたのであればあの瞬間にゴーストは召喚できていないのではないか？ そんな考え。

しかしそれはあくまで希望。脳内が勝手に作った都合の良い妄想に過ぎない。それを言うなら最初から変だったのだから。

何故幻体のAFを受け取った時に彼女が存在してしまっていたのか？ そもそも分裂したキツカケは？ 彼女そのものが特異的な存在である以上は似たようなケースが起きたとしてもそれらに理由付けはできないだろう。

だとしたならば、消滅ではなく強奪、つまりは力が使えない理由は俺の能力は奪われ

た事に繋がる。

もちろんそれは幻体だけじゃない。

つまり……

「反射鏡」
レフレクション

突如として現れる俺にとっては見慣れたモノ。それは俺の行く道を遮るように目の前に出現し、力の限り振りかざした右拳を受け止める。

いや……正確には受け止められなかった。

まるで反発し合う磁石のように「それ」は強力な衝撃を放つ。俺の拳が触れた刹那、全く同じ力が鏡合わせになるように激突する。

それは正しく……俺の能力のモノ……

「ぐわっ!？」

力強く激突しあった拳は小型の爆弾でも爆発したかのように放射型にその衝撃を拡散させ、俺の体を弾き飛ばす。

地面に体を強く打ち付け、何度か転がされた俺は睨みつけるようにディオスを見上げる。

「クソ……!？」

そんな俺を見たアイツは、俺たちを遮断していた雷の壁に手をかざす。するとその壁

は瞬く間に消滅し、2人に別れていたディオスの体は融合でもするかのように元のひとつの身体に戻る。

改めて見えた壁の向こう側は苦そうな表情を浮かべている仲間たちが立っていた。

その中でも特に新海は、俺の姿を見るや否や悔しそうに歯を食いしばる様子を見せる。

「蓮太っ！」

そしてすぐさまこちらに駆けつけてくるみんな。

「……………」

いの一番に希亜が俺の名を呼び、上半身を抱えあげるようにしてその場にしゃがみこむ。

「立てるっ？」

「……………」

「ゴーストは？ あの子はどうしたの!？」

「盗られた……………」

そして遅れて到着した九條さん達が俺の言葉に妙に納得したかのようにディオスの方を警戒した。

「やっぱり…………奪われちゃったんだね」

「さっき、結城の能力が跳ね返されたんだ。だからもしやと思ってはいたんだけど……当たって欲しくなかったよ」

「私の技もな」

終わった。もうどうしようも無い。

元々の攻撃力は相手の方が遥かに上だった。にも関わらず最強の防御ともいえる反射の力を手にされてしまった。

先頭の要である2人のゴーストも消えてしまった。いや……むしろ相手に使われる可能性もある。

オマケに俺と天ちゃん、そして新海は戦える状態じゃない。

前線に立てるユーザーは女の子3人。

いくら素の戦闘力が高いとはいえ、高峰じゃあアイツには勝てないだろう。

もう……終わった。

「逃げましょう」

沈黙を破ったのは希亜だった。

「この場は不利すぎる。一旦各自で逃げ延びてからもう一度集合しましょう」

「結城さん!?! 逃げるって——」

九條さんがそう言いかけた時、青白い閃光が空を駆けて襲ってくる。

「きゃっ!?!」

咄嗟の反応でみんなが運良くその攻撃を躲すことができたが、その一撃で終わらず次々に稲光が広範囲に襲いかかる。

圧倒的な力の差、自分の未熟さ、弱さ。その全てがズシズシと重い岩のように背中のしかかるようだ。

その拍子に希亜の腕から離れた俺は、力なく地面に再び体を打ち付けられる。

そしてその時に何かがコツンと俺の手に当たった。

「……………!」

「全員逃げなさい! 戦うことではなく生きることだけを考えてッ!」

希亜の叫ぶ声。なかなか聞くことの無い彼女の叫び声はしかと皆の耳に届いたように、それぞれが決意を固めるように散り散りとなった。

九條さんは高峰と、新海は春風と、そして希亜は天ちゃんと共に必死に敵の雷から身を守るように隠れている。

みんなが動けないのはアイツの攻撃が止まらないから。

だつたら……

だつたら……………!

折れかけていた心を引き締め、偶然落ちてあつた物を強く握りしめる。

そうだ。

この場所はゴーストが消されてしまった場所だ。だからこれは彼女が持っていたもののなのだろう。

この紫色の液体は何かわからないが、こっちの琥珀色の液体は分かる。

これは……アンブロシアの霊薬だ。

コイツを刺すことが出来れば、コイツをぶち込むことが出来れば……!!

運命が変わるかもしれない。

オーバー

問題は……どうやってこの霊薬をアイツにぶち込むかだ。

俺はもう能力を奪われてしまって幻体の力も鏡の力も無い。

そんな俺が幾つもの力を持ち、絶対的な強さを持つディオスに勝てるのか？ 戦う権利すらないのでは無いのか？ 繰り返されるはそんな疑問。

無鉄砲に挑んでも結果は見える。

「先輩！」

聞こえてきたのは天ちゃんの声。不安と焦りと恐怖の混じった音だった。しかしそれは不思議に感じるほど力強く、徐々に大きくなっていく。

敵の姿なんて見ずに……ただ真つ直ぐに彼女が走ってくる。

「馬鹿……！ 早く逃げろよ!!」

「逃げない！」

そしてディオスの奴は俺たちを……いや、天ちゃんを遊ぶかのようにまるで当たりそうもない雷の圧を放つ。

ギリギリで当たらないところを狙う電撃、わぎとだ。

わぎと当てないで恐怖心を煽っていんるだ。

「逃げる時はみんな一緒がいい……！」

結局たどり着いてしまった。天ちゃんも横になっている俺を起こすように手を差し出し、肩に預けるように持ち上げる。

「無茶だ……置いてけ」

「嫌だッ！」

顔を見ずとも分かる、彼女はきつと泣いている。

その声色で、その行動で、その心で伝わってきた。

「負ける訳にはいかないんだよ……逃げるわけにはいかないんだよ」

あの時誓ったはずだ。必ず守り抜くって心に決めたはずだ。

「今逃げたとしても、奴は必ずまた襲ってくる。それこそ最も油断をしている時を付け狙ってくる」

俺は右手に握りしめたアンブロシアの針を出す。

「ここでケリをつけなきゃいけないんだよ……！」

「先輩……それって……」

「アンブロシア。俺たちの運命を変える希望……正真正銘最後の切り札」

「どれだけ効くかは分からない。全てが強制解除されるのかもわからない。ただ、ソフィは言っていた……これは俺たちの世界の間人間にならリスクもあるって」

「きつと苦しいはずだ。動けないはずなんだ」

仮に効果そのものが遅れてやってきたとしても、一瞬でもいい……怯んでくれさえすればみんなは助かる……！

そして遅れてやってくる！　アーティファクトの強制解除の効果が！

「だから……霊薬をアイツに——」

「させると思っていますか？」

そうして現れる顔のない大男。デイオスが作り出した朧な存在。

ソイツが天ちゃんに手を振りかざそうとする。

「天ちゃんッ！」

急いで俺を支えてくれていた彼女を突き放して距離を置く……天ちゃんは雑に飛ばされたせいで地面にころげてしまったが、振りかざされた手は彼女に当たることなく素通り、そのまま俺の体を鷲掴みにして持ち上げた。

「かはっ……!?!」

メキメキと軋む体。その痛みにも耐えながらもしつかりとあの霊薬だけは守り通していた。

そして俺は投げ飛ばされる。いとも容易く、ボールでも投げられるかのように。

しかし俺その体はなにかに打ち付けられるような強い衝撃には襲われず、代わりにディオスの背後から現れた触手によって拘束された。

もちろんこの触手のタネもわかっている。

存在しない物体を作り出す能力だ。

「対抗する手段があることを知っていて、みすみす逃しませんよ」

そう呟くと、ディオスは再び俺の顔面を抑えるかのように、自身の手のひらを当てる。

「貴方以外はどうとでもなりますからね。さあ……何を消しましょうか？ 記憶？ 存

在？ それとも……繋がり？」

「契約だ……！」

僅かにあった触手拘束の隙間から腕を出し、霊葉の針を奴に向ける。

そしてそのまま奴に刺そうと振りかざすが……

「させるわけないでしょう」

難なくその腕を止められる。

「まあいいでしょう。とりあえず消しておきましょうかね、存在を………ん？」

最後の攻撃を止められ、ディオスが手のひらを輝かせたその瞬間、何故か奴の動きがピタリと止まる。

「まだ……異能の力を隠していたのですね。貴方」

力？ 隠す？

いや、俺は確かに奪われたはずだ。幻体も鏡も……確かに奪われたはず……

いや……！ そうか……！ もしかしたらアレのことか……！！

「その力も頂きますよ、ミスター竹内………！！？」

不敵に笑うディオス。しかしその表情は一気に崩れることとなる。その理由は俺が力を使ったからだ。

「ぐあっ……！！？」

俺にだけ残された唯一の力。

奇跡とも言われた力。

「限界なんだよ、お前……数多のアーティファクトの力を奪い続けてきたお前は今まで感じたことがなかったんだろう。その意味を」

「俺たち人間がアーティファクトの力を手にすること……そのリスク……お前は持つべき者だったのかもしれない。多分……俺も。でも普通じゃないんだよソレ」

「俺の経験がそう言ってる。アーティファクトの複数所持は体への大きな負担となるって……」

「奪えるもんなら奪ってみろよ……俺の奇跡オーバーフローの力を！」

心。

「ぐうわっ!!」

奪い取る能力を俺に使ったディオスは苦しそうな声を上げて叫ぶ。

「くっ……………」

何故気が付かなかったのだろう。アーティファクトを使用した時の反動は決して弱くは無い。個人差があるとはいえその疲労はとてつもないものだ。

動けなくなる時もあったし、長距離マラソンを終えた直後のように息が上がる時すらもある。

それほどまでに強力な力、本来は1つ所有するだけでも大変なんだ。それを俺は……いや、俺たちは当然のように複数の力をその身に宿した。それゆえの勘違いだったんだ。

とつくに体は限界に近づいていたはず。だったら……この力でアーティファクトの力を増大させてやればいい。

俺の核に触れているディオスになら、それが出来るはずだ。

「はあっ!!」

そして力を振り絞り、後先を考えずに能力を発動する。

すると徐々にディオスの体からは淡く光る試験管のような容器が次々に溢れ出てきた。

やった。増大させた力に耐えきれなくなったアイツの能力が奪った力を持て余したんだ。

アクセサリーの形になっていない。つまりアレらの能力は誰とも契約していないことになる。

けれどそれは俺の能力も完全に離れてしまったことになっていて……………

いや、アイツを弱体化することが出来たんだ。逆に言えば今は戦闘力に差は無い。

「くはっ!」

ディオスは咄嗟に俺の体を投げ飛ばし、俺は地面を転がるように節々を叩きつけられる。

「竹内……竹内……………!! 竹内いつ!!!」

そして怒りを顕にしたディオスは限界まで目を見開いて俺を殴る。

「ぐふっ……………!」

「ぐほっ……………!」

何度も。

「がはっ……!!」

何度も。

「ごはっ……!!」

「死ねっ!!!」

と喉を強く締め付けられたその時、天ちゃんがあいつに向かって全力で体当たりをした。

「えいっ!!!」

完全な不意打ちをキメられて体制を崩したディオス、その隙を逃さずに天ちゃんは俺の肩を担いでその場から逃げ去ろうとする。

どこまでも、仲間思いな子だ。

その去り際に背後を確認すると、ソフィが俺たちとの戦いに巻き込まれないところで大量のアーティファクトを回収していた。

そして………あからさまにディオスに気が付かれるように挑発をしていた。

……

……

……

決戦の場から少し離れた道。暗くなっている世界を街灯が照らす道を俺たちはゆっくりと歩いていった。

と言ってももう俺は……

「クソっ！」

ぺちつと新海の拳がブロックで作られた壁に強く当たる。

またしても終わらせることの出来なかったこの結末に納得出来ていないのだろう。

新海だけじゃない、各々が悔しそうに俯き、抑えるようにしている。

でも、大丈夫。次こそは終わらせられる。

俺はそう信じてる。

「……!? 先輩!？」

倒れた俺の体を天ちゃんが支えてくれる。

そして皆も驚くようにして集まってくれた。

「ごめんな……終わらせられなくて」

「何言ってるの!?! これからでしょ!?!」

泣き崩れそうな感情を殺す天ちゃん。よく見ると天ちゃんだけじゃない。心配する

ような顔、驚く顔、覚悟をする顔、色んな顔が見えた。

けれど誰もその口を開かない。

それは覚悟からなのか、それとも……………

「俺の……………ぶんまで……………」

「やめて! そんな言い方しないでよ!!」

ぼろぼろと涙を流す天ちゃん。

「天が……………生きる……………」

「あたしだけじゃない！ みんな揃って生きるの！！ 竹……………蓮太先輩も！！」
わかってる。

きつと天ちゃんもわかってる。散々傷つけられて限界を迎えた身体。そしてオーバーフローによってそれを破壊した結果……………

もう。

……………！

そんな時、俺のポケットに何かが入っているのに気がついた。

無くなりそうな意識でそれを触ってみると、試験管のように長い筒状の何か。

これは……………

ソフィの奴か……………ちょうど良かった。

俺はそれを取り出して、震える手で天ちゃんに渡す。

「……………やる」

「え……………これって……………」

「天ちゃん……………最後……………だから……………」

「先輩……………！先輩……………！」

「好き……………だよ」

《視点切りかえ》

「先輩……！　先輩………」

先輩のまだ温かさのある体を支えて何度も呼びかける。好きと言ってくれた喜びよりも、この声に答えてくれない事が悲しいから。

聞こえていないだけ。

疲れてしまっているだけ。

寝ているだけ。

考えうるありとあらゆる言い訳を頭の中で巡らせて、それが虚にならないようにと願
い……語る。

「せん………ばい………」

やがてその体が重くなってきた時、逃げていた事実があたしの心を覆うように取り囲む。

………重い。

「戦いはまだ終わっていない」

聞こえてきたのは結城先輩の声だった。

少し震えた……何かに怯えているような声で、結城先輩は言葉を紡ぐ。

「生き長らえた私たちは、想いを繋がなくちやいけない」

「そんなのもう全部無いよッ!!」

咄嗟に言葉が出てきてしまった。

「なんで……なんで………」

「なんでこんなことになっちゃったの……!」

ああ……何も見えない……

「なんでこんな目に先輩が遭わなきゃいけないの……!」

潰されちやう……

「なんで先輩が………」

もう……こんな世界なんてどうでも………」

「泣くな」

重なつたように聞こえた声。

振り返ると底にはお兄ちゃんがいた。

「絶望するな」

この口から聞こえてくる聞こえないはずの声。

「そんなのは今することじゃない」

「お兄ちゃん……」

「きつとこう言うと思つてさ」

そうしてお兄ちゃんはあたしの両手を合わせるように優しく包む。

「天、この手に握つてる物は……アイツの想い」

「想い……」

「そう、想いであつて、願ひであつて、心。俺はそう思つてる。お前は心を託されたんだ。

最後の最後までお前を信じて、初めて託した」

「その気持ちが変わらないお前じゃないはずだ」

「結城の言っていた通り、まだ戦いは終わつちやいない。逃げたい気持ちも……わからなく無い。でも俺は、もう一度行こうと思う。蓮太アイツが死に物狂いで生み出したこのチャンスお前を、俺たちに……天に託した心を無下にしない為に」

お兄ちゃんお前は立ち上がった。

覚悟の決めた目で来た道を振り返り、ゆつくりとその足を進めていく。

一步、二歩と……

蓮太先輩が最後……に与えてくれた好機。

この手の中にある託された心。

先輩はどうして欲しかったのだろう。

先輩はどうしてこれをあたしに託してくれたのだろう。

その答えは……

きつと……

そうしてあたしは、
託された心を飲んだ。